

AC Zokuzoku gunsho ruiju
145
G857
v.9

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

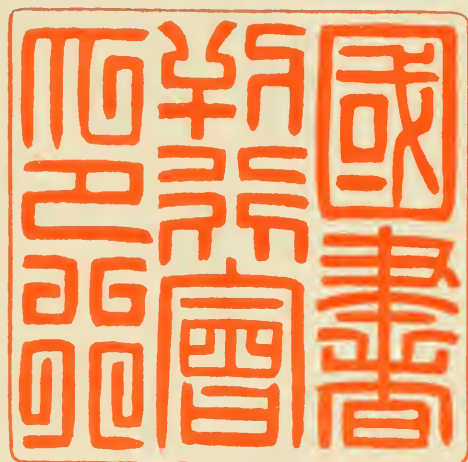


Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

續六群書類從

第九

AC
145
G857
v. 9



續々群書類從第九

例言

一本卷收むる所の寛文印知集、琉球國郷帳は黒川氏所藏本により、藝備國郡志、隱州視聽合紀、東奥白河往昔記、蝦夷記、蝦夷島記、吉野記、于役日録は内閣所藏本により、懷橘談は内閣本及び黒川本により、辰巳無人島訴狀并口土留書は大學史料編纂掛所藏本により、貞徳他行道之覺は檜垣貞吉氏所藏本により、澤庵和尚鎌倉記は内閣本及び岩崎文庫本により、其他は悉く帝國圖書館本によりて校訂せり。

一于役日録は林衡の句點を施せるを其儘に存せり。

例

言

續々群書類從第九地理部

目錄

寛文印知集

卷第一

越後中將 松平越後守 會津中將 保科肥後守 加賀中將 松平加賀守
越前少將 松平越前守 備前少將 松平新太郎

松平中務大輔
松平兵部大輔

卷第二

薩摩少將 松平大隅守 因幡少將 松平相模守 高松少將 松平讃岐守
出雲少將 松平出羽守 前橋少將 酒井雅樂頭 安藝侍 松平安藝守
秋田侍 從 佐竹修理大夫

卷第三

伊賀侍 從 藤堂大學頭 筑前侍 從 松平右衛門佐 長門侍 從 松平大膳大夫
美作侍 從 森內記 肥後侍 從 細川越中守 肥前侍 從 松平丹後守
阿波侍 從 松平阿波守

卷第四 四一

土佐侍 從松平對馬守 丹後侍 從京極丹後守 松平龜千代 松平陸奥守
山内修理大夫 京極伊勢守 伊達兵部大輔 田村右京亮

富山侍 從松平淡路守 大野侍 從松平但馬守 柳川侍 從立花飛驒守

卷第五 四九

二本松侍 從丹羽左京大夫 對馬侍 從宗對馬守 宇陀侍 從織田山城守
彦根侍 從井伊玄蕃頭 姫路侍 從松平式部大輔

卷第六 五七

小倉侍 從小笠原右近將監 郡山侍 從木多内記 山形侍 從松平下總守
忍侍 從阿部豐後守 小田原侍 從稻葉美濃守 牧野侍 從牧野佐渡守

卷第七 七〇

有馬松千代 松平大和守

卷第八 七九

奥平美作守 松平隱岐守 酒井左衛門尉

卷第九 八七

酒井修理大夫
眞田右衛門

南部山城守
松平越中守

水野民部

卷第十

本多下野守

戶田采女正

土井大炊頭

阿部伊豫守

松平飛驒守

織田内記

久世大和守

卷第十一

大久保加賀守

小笠原信濃守

松平甲斐守

牧野飛驒守

永井右近大夫

中川山城守

卷第十二

内藤帶刀

松平丹波守

水野出羽守

本田下總守

戶澤能登守

松平日向守

松浦肥前守

京極百助
京極頼母

仙石越前守

卷第十三

松平和泉守

相馬長門守

加藤出羽守

安藤對馬守

加藤織部正

一四三

一二九

一一六

一〇一

卷第十四

一五一

淺野内匠頭
伊東出雲守

岡部内膳正
松平周防守

脇坂中務少輔
内藤豊前守

卷第十五

一五九

稻葉能登守
淺野因幡守
石川主殿頭
黑田甲斐守

本多越前守
松平若狹守
小出大和守
青山因幡守

有馬左衛門佐
秋田安房守
溝口出雲守

卷第十六

一七九

水野監物
青山大膳亮

井上河内守
津輕越中守
津輕一左學

水谷左京亮
松平主殿頭

板倉隱岐守
黑田宮内

本多飛驒守
松平遠江守

龜井能登守
小笠原山城守

卷第十七

一九八

金森立軒

松平伊賀守

高力左近大夫

九鬼長門守
太田備中守
鳥居兵部少輔

永井日向守
井伊兵部少輔

內藤飛驒守
松平市正

卷第十八

二一〇

嶋津又四郎
諏訪因幡守
堀丹波守

松平備後守
松平美作守
眞田伊賀守

秋月佐渡守
本多中務大輔
酒井日向守

卷第十九

二二〇

小出伊勢守
朽木伊豫守
木下右衛門大夫

大村因幡守
木下淡路守
一柳監物

新庄隱岐守
土岐山城守
西尾右京
西尾主水

卷第二十

二三〇

遠藤備前守
戸川土佐守
植村右衛門佐
六鄉伊賀守
酒井大學頭

土井兵庫頭
松平左近將監
土屋民部少輔
分部若狹守
岩城伊豫守

小笠原土佐守
相良遠江守
戸田伊賀守
稻垣信濃守
堀美作守

毛利伊勢守

土方河內守

內藤右近大夫

松平備前守

三浦志摩守

増山兵部

水野備後守

卷第二十一

二五二

板倉内膳正

永井伊賀守

石川若狹守

土井能登守

九鬼式部少輔

丹羽式部少輔

大關主馬

秋元但馬守

守陪丹波守

市橋下總守

細川豐前守

保科越前守

松平出雲守

内田出羽守

土屋但馬守

渡邊丹後守

片桐石見守

京極主膳正

桑山修理亮

堀田備中守

五嶋淡路守

久留嶋信濃守

土方備中守

三宅能登守

堀市正

卷第二十二

二七七

井上筑後守

小堀備中守

太田原山城守

遠山信濃守

松平傳次郎

伊東信濃守

堀肥前守

山口但馬守

前田右近大夫

北條久太郎

谷出羽守

青木甲斐守

小出大隅守

卷第二十二

二八九

織田信濃守

加藤內藏助

一柳對馬守

松平能登守

酒井備中守

一柳山城守

溝口土佐守

佐久間備中守

松平佐渡守

西鄉若狹守

建部丹波守

立花和泉守

池田又八郎

本多肥前守

牧野新三郎

卷第二十四

二九九

本多山城守

土井信濃守

森川出羽守

屋代越中守

本多吉左衛門

織田豐前守

土井周防守

堀式部少輔

加々爪甲斐守

松前志摩守

阿部播磨守

板倉伊豫守

伊丹大隅守

高木主水正

琉球國郷帳

三一一

松前島郷帳

三二三

藝備國郡志

三二七

序

三二七

凡例

三二七

所援用本朝書目錄

三二八

所援用中華書目錄

三二八

上

三二九

安藝州建置沿革

三二九

郡名門

三二九

形勝門

三三〇

風俗門

三三〇

城池門

三三〇

苑囿門

三三一

山川門

三三三

土產門

三三六

寺觀門

三四五

祠廟門

三四九

古蹟門

三五五

陵墓門

三五八

人品門

三五八

拾史門.....三六八

下.....三七〇

備後州建置沿革.....三七〇

郡名門.....三七〇

形勝門.....三七〇

風俗門.....三七〇

土地門.....三七〇

土產門.....三七一

寺觀門.....三七三

祠廟門.....三七四

陵墓門.....三七四

古蹟門.....三七五

人品門.....三七五

拾史門.....三七九

懷橘談.....三八一

序.....三八一

上.....三八二

海陸眺望.....三八二

出雲大概.....三八七

意宇郡附能儀郡.....三九二

安來 母理 富田 岡莊 宍道 佐々布

忌部 熊野 玉作山 布自奈 賀茂 乃木

拜志 大草 野代 來待附菅原山代附伊井諸宮

大庭 佐久佐 手間 出雲里 錦浦 袖師浦

燒島 國分寺 平濱 白潟 松井

島根郡.....四二二

府城 黑田 匏池 荒隈 白髮城 朝酌

枕木 東照權現宮 市成 方結 法吉 生馬

山口 野波 加賀 千酌 雲津 美保

下.....四二一

秋鹿郡.....四二一

佐太 手結浦 伊の浦 大野

楯縫郡.....四二三

佐香 一畑寺 玖潭 沼田 平田附生浦 十六島

出雲郡.....四二四

美談 宇賀 鰐淵山

神門郡.....四二七

朝山.....鹽冶.....今市.....八野.....高岸.....古志

多伎.....神門湖.....菌松山.....赤塚.....菱根池.....杵築

日御崎.....鷺宮.....三瓶山

飯石郡.....四四二

熊谷.....三屋.....多禰.....須佐.....宮内.....入間

波多.....來島.....赤穴.....託和

仁多郡.....四四三

三處.....布勢.....日田.....横田.....阿伊.....三澤

大原郡.....四四四

神原.....屋代.....佐世.....阿用.....海潮.....來次

斐伊

隱州視聽合紀.....四四九

序.....四四九

卷一.....四五〇

國代記.....四五〇

卷二.....四五四

周吉郡.....四五四

卷三.....四六七

隱地郡附人數.....四六七

卷四.....四七四

知夫郡.....四七四

海部郡附人數.....四七七

延喜式國中神社.....四八一

國中佛寺.....四八二

名所和歌.....四八三

知夫郡燒火由緣起.....四八四

文覺論.....四八六

仙道會津元和八年老人覺書.....四八九

東奧白河往昔之記.....五〇一

辰巳無人島訴狀并口上留書.....五〇九

蝦夷記.....五一九

蝦夷島記.....五二三

吉野記	五二九
和紀記行	五三三
貞德他行道之覺	五三七
宋雅道すがら之記	五四一
元和七年東海紀行	五四七
澤庵和尚鎌倉記	五五七
上	五五七
下	五六四
立圃東の記行	五七三
宗因東の記行	五七七
中山日錄	五八三
癸卯干役日錄	五九五
江海風帆草	六四一

白水郎子記行……………七〇七

卷の一……………七〇八

卷の二……………七二七

卷の三……………七四六

續々群書類從第九地理部目錄終

續々群書類從第九

地理部 二

寛文印知集

卷第一

越後國頸城郡六百八拾三箇村拾三万九千七拾壹石七
斗餘沼垂郡刈羽領百四拾箇村四万三千七百四拾八石
貳斗餘三嶋郡之內五拾四箇村壹万五千五百三拾石九
斗餘魚沼郡之內貳百三拾三箇村五万九千七百六拾九
石四斗餘信濃國更級郡河中嶋領之內拾三箇村五千百
九拾參石餘都合貳拾六万石餘
目錄在別紙 事如三前々一全可
レ被レ領知之狀如レ件

寛文四年四月五日御字御判 筆者久保吉右衛門

越後三位中將殿

目錄

越後國

頸城郡一圓 六百八拾三箇村

高拾三万九千七拾壹石七斗九升貳合

沼垂郡刈羽領 百拾四箇村

高四万三千七百四拾八石貳斗壹合

三嶋郡之內 五十四箇村

朝日村 來迎寺村

山谷村 新田高ニ入ル 片貝村

新屋敷村 飯塚村 新田高ニ入ル

不動澤村 五段田村

大日村 三嶋谷村

千本平村 大積村 新田高ニ入ル

三町田村 東方村

牛頸村 白鳥村

雲出村 鳥越村

吉崎村 脇野町村

中永村 塚山村

常樂寺村 相田村 新田高ニ入ル

植澤村 別谷村 新田高ニ入ル

松本村 大釜谷村

浦高梨村 新田高ニ入ル

岩田村

下代村

田代村

善間村

宮本村 新田高ニ入ル

堀内村

上岩井村

上條村

豐嶋村 新田高ニ入ル

吉水村

山谷村

小釜澤村

瀧谷村

新田高ニ入

吉川村

新田高ニ入

神條村

新田高ニ入

藤巻村

新田高ニ入

柿木村

新田高ニ入

高畑村

新田高ニ入

日野浦村

新田高ニ入

中村

新田高ニ入

圓藏寺村

新田高ニ入

曲田村

新田高ニ入

若野浦村

新田高ニ入

小島谷村

新田高ニ入

高壹万五千五百拾叁石九斗六升

魚沼郡之内 貳百叁拾三箇村

小千谷村

中村

十日町村

原村

山本村

川治村

上新井村

稻葉村

山野田村

北鎧坂村

南鎧坂村

中手村

高嶋村

貝野村

外丸村

寺石村

緒東村

千谷川村

千谷村

小栗田村

坪野村

山谷村

市宮村

土川村

藪川村

時水村

四子村

谷内村

山本村

池原村

片貝村

川井村

岩澤村

原村

日影村

穉生村

三佛生村

中條村

下條村

野口村

仁田村

祖師村

高山村

川地山入村

黒澤村

伊達村

羽根川村

細尾村

倉俣村

川北村

大井平村

今在家村

水口澤村

坪山村

鶴吉村

上野村

伊勢平氏村

木落村

眞人村

三領村

黒嶋村

梶川清水村

小泉村

山谷村

東善寺村

中屋敷村

宗正村

高原田村

仙田村

霜條村

沖立村

吉谷村

徳田新田村

和長嶋村

堀内村

四日町村

米澤村

七日市村

小出嶋村

吉田村

裴和嶋村

芋川村

折立村

宇津野村

大湯村

佐梨村

青嶋村

虫野村

下十日市村

五箇村

浦佐村

一村尾村

芹田村

五日町村

水尾村

大崎村

牛ヶ嶋村

中嶋村

池平村

山田村	寺尾村	田中村	鹽谷村	川口村	一日市村	龍光村	下嶋村	和南津村	雷土村	赤羽村	山崎村	桐澤村	黒土村	中家村	板木村	新保村	川窪村	八幡村	三郎九村
市江村	野田村	相川村	田麥山村	下新田村	今泉村	根小屋村	廣瀬谷村	九日町村	湯屋村	大桑原村	茗荷澤村	荒山村	穴地村	吉水村	干溝村	大澤村	志戸加村	六日町村	早川村
名木澤村	養生嶋村	荒屋村	武道窪村	田川村	葎澤村	大石村	江口村	大浦村	芋川村	門前村	荒金村	大倉村	柳新田村	眞板嶋村	田戸村	美佐嶋村	新道嶋村	西泉田村	雲洞村

枝吉村	中野村	鹽澤村	關山村	君澤村	糍澤村	吉里村	余川村	下原村	野際清水村	下出浦村	妙音寺村	田崎村	宮中村	野川村	小川村	長松村	山谷村	二日市村	大月村
長崎村	上十日町村	目來田村	上野村	大窪村	天澤村	片田村	麓村	泉村	藥師堂村	山口村	藤原村	新堀村	畔地村	清水瀨村	原村	京岡村	岩崎村	坂戸村	五郎九村
瀧谷村	竹俣村	新田高ニ入 下一日市村	宮下村	大澤村	泉城寺村	小栗山村	長森村	上原村	上出浦村	岡村	法音寺村	深澤村	舞臺村	土澤村	蛭窪村	中川村	津久野村	東泉村	湯澤村

信濃國

更級郡之内 拾三箇村

神立村 土樽村 大里村
大木六村 仙石村 舞子村
關村 田中村 思川村
小木六村 上一日市村 中村
君加入村 欠上村 村
高五万九千七百六拾九石四斗貳升三合
但此四郡之内三千石者依爲三分限帳之過籠
高也

逆木村 中條村 横尾村
金井村 福井村 上戸倉村
寂寔村 鑄師屋村 打澤村
新田高ニ入
小嶋村 櫻道村 杭瀬下村
杭瀬下新田村 新田高ニ入

高五千百九拾三石四斗貳升
都合貳拾六万石餘

右今度被ニ差上郡村之帳面相改及ニ上聞一所被ニ成
下御判也此儀兩人奉行依被ニ仰付執達如件

寛文四年四月五日

松平越後守殿

永井伊賀守尙庸
小笠原山城守長頼

陸奥國耶麻郡百七拾七箇村八万四千四百八拾三石餘河
沼郡五拾八箇村貳万百拾石餘大沼郡之内百六拾三箇
村五万七千五百拾六石餘安積郡之内五箇村六千貳百
四拾六石餘稻河領百貳拾七箇村三万四千六百五拾石
餘猪苗代領五拾貳箇村貳万千拾九石餘越後國蒲原郡
之内七拾壹箇村八千九百七拾三石餘郡合貳拾三万石
目錄在ニ事如前々宛ニ行之訖全可致領知之狀如
別紙ニ件

寛文四年四月五日御判

筆者建部傳右衛門

會津中將殿

目錄

陸奥國

耶麻郡 百七拾七箇村

高八万四千四百八拾三石貳升七勺

河沼郡 五拾八箇村

高貳万百拾石六斗四升九合

大沼郡之内 百六拾三箇村

高田村	屋敷村	竹原村	大嶋村	北後庵村	安田村
下荒井村	入田澤村	新屋敷村	柏原村	下米塚村	下中川村
眞綿村	法用寺村	小見村	寺崎村	橋詰村	後庵村
泉村	十二箇所村	惡津村	新在家村	西麻生村	富岡村
根岸中田村	立行寺村	蕎目村	大八郷村	新寺村	本郷村
築田村	澤田村	二日町村	日玉村	相川村	上荒井村
泉新田村	館村	沖中田村	八重松村	螺良岡村	藤田村
中里村	礪宮村	荒田村	宮内村	福光寺村	上米塚村
檜野目村	高瀬村	本田村	大巢子村	南原村	大石村
宮下村	宮袋村	田村山村	大豆田村	二平次村	石佛村
米澤村	小澤村	鷺林村	加鹽村	下天屋村	川谷村
出志利村	中荒井村	出戸田澤村	面川澤村	上天屋村	馬越村
石原村	臺村	西原村	保屋澤村	小屋村	黒森村
大石目村	今泉村	領家村	花坂村	面川村	倉川村
小松村	二堂村	金屋村	芳月村	小山村	一關村
東麻生村	下野村	境野村	東黒川村	德久村	堤澤村
西後庵村	寺堀村	佐布川村	瀧澤村	中野村	中嶋村
			赤井村	金堀村	青木村
				牛墓村	中田村
					原村

西田面村 東田面村 天寧寺村 中地村 三代村 赤津村

上馬渡村 寶積寺村 湯本村 濱坪村 福良村

下馬渡村 邊澤村 藤原村 高六千貳百四拾六石六斗壹升四合

稻河領 百貳拾七箇村

江原村 西馬渡村 佐知川村 坂下村 杉村 蛭川村

高久村 木流村 下荒久田村 小坂下村 金上村 村田村

上荒久田村 松窪村 中前田村 中野目村 京出村 細工名村

神指村 梶屋敷村 中地村 下海津村 中海津村 上海津村

上吉田村 幕内村 境澤村 海老澤村 上中政所村 泉河原村

下吉田村 沼木村 中森代村 東青津村 下政所村 西青津村

平澤村 西柳原村 横沼村 曲沼村 青木村 東河原村

天滿村 下柳原村 上居合村 立川村 砂越村 谷地村

深川村 東森代村 下高野村 福原村 關澤村 十日町村

下小屋村 下居合村 上小屋村 羽林村 關澤村 鹽坪村

達摩村 石堂村 赤岡村 加賀田村 新館村 蛙田村

小貝宮村 八角村 小黒川村 永井村 池原村 大原村

木戸村 上河原村 藤室村 田中村 東羽賀村 上金澤村

中名村 北柳原村 逆瀬川村 下金澤村 漆窪村 河原田村

輕澤村 高五万七千五百拾六石九斗

安積郡之内 五箇村

北宇内村 西羽賀村 舟越村 大口村 見明村 南宇内村

野澤南町	森野村	小嶋村	須走村	方門村	矢野目村	臺村	勝方村	矢坂野村	牛澤村	窪倉村	大澤村	麻生村	大野村	猪鼻村	江戸村	塔寺村	川井村	小池村	猿屋敷村
中野村	野澤本町	松尾村	本名村	杉山村	樋渡村	窪村	出倉村	小牧村	中原村	平井村	小杉山村	藤村	黒瀧村	長倉村	泉村	見留村	沓形村	上宇内村	
牧	野澤北町	萱本村	舟渡村	天屋村	舟窪村	沖大江村	水嶋村	椿立村	朝立村	細越村	小野川村	所澤村	小柳津村	鹽野村	惡津村	夏井村	宮月村	津尻村	

東眞行村	蜂屋敷村	松橋村	北高野村	澁谷村	白木城村	下館村	白津村	東館村	都澤村	坪下村	猪苗代領 五拾貳箇村	高三万四千六百五拾石三斗貳合三勺	柳津村	尾登村	泥布山村 イ沼	網澤村	山口村	下野尻村	安座村
新在家村	烏帽子小屋村	小平瀉村	西館村	北窪村	小田村	萩窪村	惡戸村	曲淵村	觀音寺村	山瀉村			堀越村	長櫻村	青坂村	牛尾村	德澤村	芹沼村	
三城瀉村	釜井村	廻谷地村	東谷地村	今泉村	須川野村	堀切村	内野村	金曲村	新屋敷村	關脇村			二栗村	黒澤村	程窪村	出原村	芝草村	上野尻村	

峯村 町分 下道官村

谷地村 百目貫村 堤崎村

嶋田村 大在家村 名目津村

櫻川村 普藤村 西窪村

蟹澤村 戸野口村 一澤村

源橋村 大寺村 南真行村

西真行村

高貳万千拾九石壹斗貳升六合

越後國

蒲原郡之内 七拾壹箇村

津川村 白坂村 寶川村

八田村 福取村 燒山村

藏平村 花立村 野村

天滿村 平堀村 田澤村

小出村 東山村 上井柴倉村

大尾村 押手村 安用村

黒谷村 相高嶋村 明谷澤入村

栗瀬村 小手茂村 漆澤入村

八田蟹村 廣瀬村 枋堀村

室谷村 高出村 小杉村

太田村 野中村 高清水村

九嶋村 角嶋村 京瀬村

小花地村 谷澤村 白崎村

岡澤村 岩谷村 五十嶋村

熊渡村 長谷村 五十嶋村

小松村 佐取村 石間村

吉津村 川口村 石戸村

取上村 細越村 五十澤村

新谷村 綱木村 古俣村

瀧谷村 行地村 赤谷村

日出谷村 菱瀉村 鹿瀬村

舟渡村 馬取村 麥生野村

新渡村 西山拂川村 入實川村

石畑村 小山村 芹田村

高八千九百七拾三石三斗八升八合

都合貳拾三万石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

保科肥後守殿

加賀能登越中三箇國百貳拾万貳千七百六拾石內加州
江沼郡能美郡之內七萬石越州婦負郡新川郡內拾万石
能州四郡之內壹万石以上拾八万石餘之殘百貳万貳千
七百六拾石并近江國高島郡之內兩村貳千貳百六拾石
餘都合百貳万五千石餘目錄在別紙事如前々宛行之訖
全可致領知之狀如件

寛文四年四月五日御判

筆者久保吉右衛門

加賀中將殿

目錄

加賀國四郡

加賀郡 百七拾三箇村

高七万五千七拾石貳斗

石川郡 貳百貳拾九箇村

高拾六万六千九百四拾五石九斗八升

能美郡之內 貳百三箇村

高拾壹万九百八石六斗九升

合三拾四万六千六百貳拾貳石三斗八升七合

但三郡之內六千三百貳石四斗八升餘依三分限

帳之外籠高也

江沼郡百三拾箇村美能郡之內六箇村高合七萬石除之

越中國四郡

射水郡 貳百拾八箇村

高拾三万貳百五拾六石四斗四升

礪波郡 四百八拾四箇村

高貳拾万貳千百拾壹石八斗四升

新川郡之內 四百拾八箇村

高拾四萬七千五百拾壹石四斗壹升

合四拾六萬九千七百五拾四石七斗七升三合

但三郡之內壹万百貳拾四石九斗餘依爲三分限

帳之外籠高也

婦負郡百八拾箇村并新川郡之內七拾六箇村高合拾

万石除之

能登國四郡

羽咋郡之內 百七拾壹箇村

高七万四千六百三石五斗九升

能登郡之內 百參拾壹箇村

高六万貳千九百三拾五石貳斗五升

鳳至郡之內 貳百貳拾七箇村

高四万七千九百八拾壹石五斗六升

珠洲郡之内 七拾四箇村

高貳万五千九百拾貳石四斗四升

合貳拾万六千三百八拾貳石八斗四升

但四郡之内五千五拾石依爲三分限帳之外、籠

高也

羽咋郡之内拾七箇村能登郡之内貳拾箇村鳳至郡之

内貳拾壹箇村珠洲郡之内三箇村高合壹万石除之

三箇國高合百貳拾万貳千七百六拾石

内拾八万石除之

近江國高嶋郡之内 今津村 弘川村

高貳千貳百六拾石貳斗八升貳合

都合百貳万五千貳拾石貳斗八升貳合

奥書同前

寛文四年四月五日

松平加賀守殿

越前國足羽今立兩郡并吉田丹生南條坂井大野五郡之内都合五拾貳万五千貳百八拾石餘

日録在別紙

事内五万石

松平中務太輔貳萬五千石松平兵部太輔可進退之殘四拾五万貳百八拾石餘如前々宛行之訖全可領知之狀如件

寛文四年四月五日御判

筆者久保金右衛門

越前少將殿

目錄

越前國

足羽郡一國 百五拾貳箇村

高九万千貳百貳拾石五斗八升八合

今立郡一國 百五拾九箇村

高八万五千三百三拾壹石七斗

吉田郡之内 百拾四箇村

大和田村 高柳村 立脇村

高木村 下淨法寺村 新保村

藤嶋林村 開敷村 舟橋村

郡村 寺前村 舟橋新村

久末村 町屋村 大願寺村

灯明寺村 土橋村 上里村

福万村 祇王三郎丸村 重藤村

堀宮村	八塚村	海老助村	上伏村	三屋村	北今泉村	渡村	殿下村	曾万布村	野中小畑村	上村	轟村	谷口村	須海士村	上野村	中郷村	中嶋村	大野嶋村	石上村	栗住波村
經田村	上中村	地藏堂村	黒丸村	西堀村	東今泉村	了村	印田村	岡保村	下吉野村	嶋村	高橋村	花谷村	經谷村	印内村	北嶋村	市右衛門嶋村	飯嶋村	野中村	藤卷村
牧野嶋村	下中村	安竹村	別所村	桶田村	丸岡山村	原目村	北野村	印内猪谷村	吉野境村	古市村	山村	法寺岡村	市野村	北野村	牧村	清水村	淺見村	大月村	竹原村

市荒河村	望達村	兼定嶋村	末正村	山室村	二日市村	鷺塚村	定正村	中角村	下森田村	河合新保村	高七萬七千三百貳拾八石六斗五升六合
吉峯村	上淨法寺村	吉波村	上合月村	高屋村	天池村	網戸瀬村	下村	西森田村	石丸村	上野村	丹生郡之内 百九拾貳箇村
坂下村	舟橋渡村	栃原村	下合月村	六日市村	勝見村	古市村	八重巻村	寄安村	漆原村	上森田村	

乙坂村	天王村	坪谷村	御油村	上河去村	西大井村	下太田村
栃川村	在田村	眞栗村	清水山村	下河去村	上太田村	上野田村
田中村	額谷村	市村	氣比庄村	印内村	下大倉村	新保村

四杉村	青野村	菅村	安戸村	北野村	糠口村	朝日村	下氏家村	高森村	上大虫村	三俣村	和田村	武町掛村	余田村	寺村	寺村	熊田村	上野村	上石田村	下野田村
八田新保村	平樂村	土山村	上安戸村	勝蓮花村	佛谷村	菖蒲谷村	衣裝谷村	漆原村	下大虫村	牛房平村	久賀村	持明寺村	北山村	本保村	烏井村	宇治尾大谷村	當田村	下石田村	澤村
篠川村	八田村	舟場村	勾當原村	中山村	丸岡村	堀村	内郡村	上氏家村	四目村	横根村	丹生江村	寺村	片屋村	太井村	芝原村	下司村	圓滿村	平井村	小泉村

田尻村	清水尻村	下天下村	堀村	羽坂村	三本木村	本折村	白瀧村	小丹生浦村	謠谷村	風尾村	中野村	別畑村	眞木村	尼谷村	笹谷村	牛越村	嶋寺村	八俣村	血ヶ平村
杉谷村	片粕村	猿和田村	應神村	細坂村	更毛村	清水畑村	瀧波村	向山村	株崎村	武田村	別所村	二屋武田村	小倉村	小河村	上伊藤村	片山村	笈原村	名荷村	末村
小羽村	朝宮村	竹生村	上天下村	安田村	本堂村	水谷村	大森村	國山村	大味浦村	畠中村	大屋村	小倉大畑村	宿堂村	天谷村	下伊藤村	山内村	横山村	城有村	梨平村

嶋寺村	印内村	牛屋村	南營生浦	五太子村	蒲生浦	左右浦	上海浦	高佐浦	萩原村	古屋村	栗野村	千合谷村	風卷村	上山中村	山田村	櫻谷村	高七万八千六百拾六石貳斗八升壹合	南條郡之内 七拾七箇村	府中町地子
三留村	入村	糺村	鮎川浦	下一光村	玉河浦	居倉村	下海浦	玉余莫浦	牧村	増谷村	若須村	二階堂村	馬場村	下山中村	細野村	江波村	高七万八千六百拾六石貳斗八升壹合	七拾七箇村	下平吹村
杉本村	西番村	在定村	大丹生浦	上一光村	赤坂村	北山村	宿浦	小杉村	熊谷村	曾原村	安養寺村	黒川村	新保浦	赤井谷村	岩倉村	大王丸村	高七万八千六百拾六石貳斗八升壹合	七拾七箇村	北符村

中平吹村	府中町外	常久村	久喜村	八飯村	火打村	新堂村	湯尾村	脇本宿村	東大道村	印内村	瓜生野村	塚原村	上廣瀬村	蕪木浦	河内村	別所村	河野浦	高瀬村	千福村
上市村	大門河原	小倉谷村	行松村	廣野村	板取村	歸所村	別所村	清水村	今宿村	中村	四郎九村	奥野村	下廣瀬村	糠ヶ浦	奥谷村	平土浦	今泉村	池上村	三口村
牧村	馬上免村	末松村	宇津尾村	橋立村	二屋村	今庄村	鯖波村	西大道村	國兼村	溫谷村	岡本村	白崎村	下中津原村	赤萩村	湯谷村	大谷浦	平出村	妙法寺村	中津原村

蕪木八田村

春日野村

金粕村

東谷郷寺村

小物成高_{三八}上平吹村

鑄物師村

上野村

堂村宮谷村

安久和中小屋村

社村谷

八乙女村

荒井村

瀬戸村

温谷村

高三万五千七拾三石壹斗貳升七合

坂井郡之内 貳百六拾壹箇村

北菅生浦

長橋浦

糸崎浦

松陰浦

蓑住浦

和布浦

免鳥村

濱住村

大窪村

小橋屋村

川尻村

波寄村

菖蒲谷村

岸水村

四十谷村

田谷村

一往寺村

荒谷村

荒井村

中塚村

東部村

中針村

石塚村

中庄村

大針村

隨王寺村

鷺塚村

千步寺村

大蔵村

爲寄村

中山村

田頭村

領家村

嶋村

深坂村

石畠村

小幡村

布施田村

圓納村

高須村

小城村

淨土寺村

砂子田村

内山梨子村

野中村

池尻村

横越村

市瀬村

黒丸村

水切村

藤瀬村

串野村

砂子坂村

小野村

木下村

三宅村

阿彌陀佛村

雨菅生村

御所垣内村

江上村

嶋山梨村

馬場村

佐野村

上野村

下野村

中野村

檜原村

東平村

清水平村

河内村

柿谷村

木米村

中河内村

奥平村

八幡_{大谷共}村

足谷村

猫瀬村

中平村

正善村

姫玉村

濱長村

布施田新村

取次村

西方寺村

辻村

折戸村

定廣村

新保村

田畑村

上村

東太郎丸村

西太郎丸村

本堂村

松木村

高江村

針原村

石新保村

石橋村

別所村

大橋屋村	白方村	安澤村	上小森村	今市村	清間村	二郎九村	里竹田村	北兼村	乘兼村	田中々村	河間村	權世市野村	樟瀧村	清瀧村	河和田村	宮領村	御油田村	福庄村	二屋村
西畑村	米納津村	金剛寺村	池見村	嶋村	伏屋三本木赤坂	北疋田村	北野村	野知村	田中村	拾樂村	濱坂浦	川上村	權世村	飯谷村	長畠村	熊堂村	宇隨村	中村	
二屋村	黒目村	堀越村	四郎九村	磯部村	御簾尾村	南疋田村	菅野村	篠岡村	玉木村	宮前村	後山村	中川村	鎌谷村	玄女村	田嶋村	定宗村	羽崎村	樂間村	宮谷村
高塚村	山室村	青野木村	北横地村	新村	柿原村	山竹田村	砥嶋出作村	下關村	新用村	金津新町	北方浦	重吉村	下名村	加戸村	舟津村	横垣村	國景村	西布目村	奧布目村
橋屋村	中村	市野村	下安田村	兼定嶋出作村	西方寺村	今道村	長崎村	嶋田村	羽根馬場村	北金津町	吉崎浦	番田村	竹松村	西谷村	二面村	赤尾村	城村	東蓮花村	勝蓮花村
檜山村	宇根村	熊坂村	上安田村	十樂村	清王村	蓮浦村	舟寄村	南金津町	河原井手村	安嶋村	崎浦	布目村	覺善村	池上村	家吉村	牛山村	藏垣内村	福嶋中村其	中筋村

德分田村	大牧村	東長田村	板倉村	朝日村	後野村
中野村	轟村	三國浦	前坂村	大谷村	箱瀬村
三國宿浦	米脇浦	上新庄村	半原下村	市布村	下大納村
下新庄村	若宮村	下兵庫村	角野村	川合村	荒子村
井向村	嶋村	今市村	長野村	小物成高三八坂村	鷺村
蛸渡村	高間村	藤澤村	貝皿村	藏生村	橋爪村
玉江村	野中村	角屋村	蓑道村	御給村	稻口村
今井村	本堂村	公文村	鶴澤村	田野村	森目村
新井村	上番村	中番村	綠村	森政領家村	猪嶋村
下番村	谷畑村	東善寺村	下郷村	野中村	森政地頭村
山岸村	北澤村	泥原新保村	寶慶寺村	上野村	開發村
樂圓村	油屋村	下小森村	印內村	西山村	北御門村
大味村	勝蓮花村	豐原村	友兼村	東山村	今井村
四柳村之内	長崎高瀬村	西長田村	平澤地頭村	平澤領家村	木本地頭村
高拾四万百四拾四石八升七合			下唯野村	木本領家村	木落村
大野郡之内	六拾九箇村		土打村	八町村	落合村
七板村	西勝原村	東勝原村	伏石村	小黒見村	堂嶋村
下打波村	佛原村	上打波村	柿嶋村	御領村	巢原村
下山村	上伊勢村	野尻村	熊河村	溫見村	米俵村
木野村	下伊勢村	中伊勢村	高壹万七千七百六十七石六斗四升七合		

都合五拾貳万五千貳百八拾貳石

內 五万石

貳万五千石

松平中務大輔拜領之
松平兵部大輔拜領之

奧書右同

寛文四年四月五日

松平越前守殿

備前國貳拾八万貳百石備中國淺口窪屋下道郡宇賀夜
小田六郡之内三萬五千石都合三拾壹万五千貳百石
紙在別事如三前々宛三行之訖全可令領知之狀如件

寛文四年四月五日御判

筆者建部傳右衛門

備前少將殿

目錄

備前國一圓

御野郡之内 五拾箇村

高三万六千八百五拾八石貳斗六升

津高郡 九拾三箇村

高三万八千貳百七拾壹石壹斗

赤坂郡 九拾四箇村

高三万七千九百六拾四石四斗¹

磐梨郡 六拾四箇村

高貳万千貳百八拾八石七斗四升

和氣郡 八拾三箇村

高貳万九百七十八石六斗五升

邑久郡 六拾三箇村

高四万七千七百六十三石四斗四升

上道郡 九拾七箇村

高五万三千六百四十六石五斗貳升

兒島郡 七拾九箇村

高貳万九千四百二拾九石貳斗八升

備中國

淺口郡之内 拾六箇村

高壹万三千七百五拾三石四斗八升

窪屋郡之内 拾九箇村

高壹万五千八百五十五石壹斗八升

下道郡之内 四箇村

高貳千九拾九石九斗壹升

都宇郡之内 五箇村

高貳千七拾九石三斗八升

加夜郡之内 貳箇村

高六百貳拾壹石九斗四升

小田郡之内 尾坂村

高五百九拾石壹斗

都合參拾壹万五千貳百石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平新太郎殿

卷第二

薩摩大隅兩國并日向國諸縣郡之内都合六拾万五千石

餘此外琉球國拾貳万三千七百石

目錄在別紙

事任寛永十

一年八月四日先判之旨施行訖全可令領知之狀

如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者久保吉右衛門

薩摩少將殿

目錄

薩摩國一圓

伊作郡 五拾貳箇村

高三万八千四百壹石三斗六升貳合四勺七才

薩摩郡 三拾三箇村

高四万貳千七百拾九石壹斗三升四合七勺五才

鹿兒島郡 貳拾七箇村

高三万三百三拾九石六斗九升四合貳勺

日置郡 四拾八箇村

高五万六千六百四拾八石四斗三合九勺

阿多郡 貳拾箇村

高貳万三千五百七拾石四斗七升五勺

河邊郡 三拾五箇村

高三万五千四拾五石七斗壹升八合

甕島郡 貳箇村

高貳千七百九拾壹石三斗八升五合

頴娃郡 七箇村

高壹万五千九百三拾九石三斗八升四合七勺

揖宿郡 七箇村

高壹万六千八百五拾七石五升六合七勺

給黎郡 六箇村

高壹万四百六拾四石貳斗七合

谿山郡 六箇村

高壹万五千四拾七石八斗九升五合五勺

出水郡 七箇村

高貳万三千七百三拾五石貳斗五升六合

高城郡 八箇村

高八千四百四拾五石九斗九升壹合四勺

大隅國一圓

菱刈郡 拾三箇村

高九千九百八拾六石八斗五升六合

桑原郡 三拾貳箇村

高貳万千八百貳拾四石四升三合

始羅郡 三拾九箇村

高貳万六千六百四拾三石四斗六升貳合

贈嶽郡 六拾三箇村

高四万三千八百八拾四石四斗八升

肝屬郡 三拾八箇村

高四万貳千拾五石九斗八升八合

大隅郡 三拾貳箇村

高貳万百九拾貳石三斗壹升三合

熊毛郡 九箇村

高五千貳百五十七斗壹升九合

馭謨郡 四箇村

高千八拾石五斗九升

日向國

諸縣郡之內 百六拾四箇村

高拾貳万貳拾四石五斗八升

都合六拾万五千八百六拾三石六斗三升

外

琉球國諸島 拾五嶋

高拾貳万三千七百石

右今度被_二差上_一郡村之帳面相改及_二上聞_一如_二御先代之高_一所_レ被_二成下_一御判也此儀兩人奉行依被_二仰付_一執達如_レ件

寛文四年四月五日

松平大隅守殿

因幡國拾四万九千七百四拾石餘伯耆國拾七万貳百五拾石餘都合三拾貳万石

別紙_一目録在_二事如_二前々_一宛_二行之_一記

全可令領知之狀如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者大橋左兵衛

因幡少將殿

目錄

因幡國一圓

邑美郡 三拾壹箇村

高壹万三千九百八拾貳石九斗

石井郡 四拾五箇村

高壹万七千百拾石壹斗

高草郡 七拾四箇村

高三万九百六拾壹石三斗

氣多郡 八拾箇村

高貳万貳千貳拾三石五斗

八上郡 五拾五箇村

高壹万六千六百三拾石壹斗

法美郡 五拾五箇村

高壹万六千七百九拾六石五斗

八束郡 八拾貳箇村

高壹万九千七百拾貳石八斗

智頭郡 九拾三箇村

高壹万千五百貳拾五石三斗

伯耆國一圓

河村郡 百壹箇村

高貳万千四百四拾六石八斗

久米郡 百三拾箇村

高三万四千五百四拾四石八斗

八橋郡 百三箇村

高貳万六千三百三拾九石六斗

汗入郡 六拾九箇村

高貳万九百八拾六石四斗

會見郡 百四拾八箇村

高四万五千五百六石貳斗

日野郡 百七拾三箇村

高貳万千七百三拾三石七斗

都合三拾貳万石

右今度被差上郡村之帳面相改及上聞所被成
下御判也此儀兩人奉行依被仰付執達如件

寛文四年四月五日

松平相模守殿

讃岐國大内寒川三木山田香川阿野六郡九万五千五百五拾石餘鵜足那珂兩郡之内貳万八千石餘都合拾貳万石
目録在ニ別紙ニ事如三前々ニ宛ニ行之ニ訖全可令ニ領知ニ之狀如
件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

高松少將殿

目 録

讃岐國

大内郡 三拾四箇村

高壹万石

寒川郡 貳拾五箇村

高壹万三千六百石五升八合

三木郡 貳拾箇村

高壹万千六百拾九石四斗七升七合

山田郡 三拾箇村

高壹万八千百七拾八石貳斗五升

香川郡 四拾七箇村

高貳万五百五拾貳石壹斗貳升三合

阿野郡 三拾五箇村

高壹万七千六六三拾九石貳斗五升九合
鵜足郡之内 貳拾六箇村

東分村 定國村 西分村

宇足津村 河津村 東二村

西二村 眞時村 西坂本村

河原村 東坂本村 上村

下村 富熊村 栗熊村

小川村 長尾村 西村

上村 下村 東村

勝浦村 中通村 造田村

炭北西村 同東村

高壹万六千三拾九石七斗八升七合

那珂郡之内 拾七箇村

柞原村 三條村 木德村

金藏寺村 原田村 郡家村

垂水村 與北村 吉野村

東高篠村 西高篠村 岸上村

七ヶ村 鹽入村 眞野村

公文村 四條村

高壹万貳千三百七拾壹石四升六合

都合拾貳万石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平讃岐守殿

高貳万貳千百四拾貳石五斗四合

神門郡 八拾三箇村

高五万九千六百九拾八石三斗

飯石郡 六拾壹箇村

高三万三百三拾八石貳斗六升

仁多郡 七拾貳箇村

高貳万千三百三拾石五斗四升貳合

大原郡 五拾八箇村

高貳万五千八百七拾壹石四斗八升

熊義郡 七拾七箇村

高四万貳千五百九拾貳石三斗四升九合

意宇郡 三拾八箇村

高三万貳千八百三拾三石六斗五升三合

但此拾郡之内九万五千三百拾五石五斗依爲二分限帳之過一本高不載之

都合拾八万六千石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平出羽守殿

出雲國一圓

島根郡 五拾壹箇村

高貳万三千百貳拾石三升四合

秋鹿郡 貳拾箇村

高壹万四百拾六石貳斗六升七合

楯縫郡 貳拾壹箇村

高壹万三千百七拾貳石壹斗三升七合

出雲郡 拾九箇村

目録

出雲國一圓拾八万六千石
日録在ニ事如ニ前々ニ宛ニ行之ニ別紙一

寛文四年四月五日御判

筆者飯高七兵衛

出雲少將殿

上野國群馬郡勢多綠野碓氷豐岡領多胡六郡之内拾壹
 万八千八拾四石餘武藏國豐嶋榛澤兒玉三郡之内三千
 四百七拾七石餘相模國御浦郡之内三千四百三拾八石
 餘近江國野洲蒲生栗本三郡之内五千石都合拾三万
 目録在
 別紙一
 事宛三行之ニ訖全可レ令三領知ニ之狀如レ件

寛文四年四月五日御判 筆者久保吉右衛門

前橋少將殿

目録

上野國

群馬郡之内 五拾四箇村

德丸村	宮地村	阿内村
同所宿村	礪嶋村	佐鳥村
東善養寺村	西善養寺村	横手村
前代田村	紅雲村	宗浦村
市坪村	天川村	六供村
後閑村	新堀村	房丸村
力丸村	公田村	朝倉村
天川原村	山名村	中大類村
下大類村	上瀧村	下瀧村

八幡原村	中齊田村	福島村
南玉村	箱石村	下宮村
小泉村	沼上村	上新田村
下新田村	與六村	齊田村
板井村	瀧新田村	瀧村
八幡原村	川井村	嶋野村
上手村	角淵村	茂木村
公田村	箱田村	京田村
宇貫村	飯嶋村	岩鼻村

高波郡之内 武拾四箇村

長沼村	馬見塚村	大正寺村
蓮沼村	八斗嶋村	山王道村
宮子村	藤川村	戸屋塚村
富塚村	除村	堀口村
小泉村	丹良塚村	北今井柴村
上福嶋村	阿彌大寺村	樋越村
田中村	田中嶋村	下道寺村
飯嶋村	下福嶋村	今村

高壹万九百四拾三石八斗三升

勢多郡之内

百貳拾五箇村

瀧久保村	北代田村	石井村	引田村	青柳村	箱田村	沖田村	田口村	荒井村	大嶋村	鳥取村	上細井村	小暮村	龍藏寺村	野中村	田嶋村	三原田村	永井小川田村	上泉村
萩窪村	片貝村	漆窪村	横室村	原村	八崎村	上小出村	關根村	清王寺村	上野村	瑞氣村	五代村	嶺村	下細井村	石關村	下小出村	持柏木村	勝保澤村	樽村
小泉村	三俣村	幸塚村	才川村	米野村	日輪寺村	萩村	川端村	眞壁村	岩神村	小坂子村	小神明村	勝澤村	不動堂村	棚下村	荒牧村	南室村	溝呂木村	猫子村

宮田村	伊豫久村	淵名村	茂呂村	一日市村	深津村	磯村	野村	月田村	板橋村	大前田村	市關村	荒子村	川原濱村	泉澤村	宮關村	富田村	増田村	笥井村	長磯村
森下村	百々村	上植木村	根利村	女淵村	前皆戸村	小林村	山上村	奥澤村	苗ヶ嶋村	馬場村	柏倉村	飯土井村	下大屋村	上大屋村	茂木村	荒口村	今井村	女屋村	中龜村
糸井村	安堀村	波志得村	見立村	太田村	田面村	中井村	武井村	谷村	關村	室澤村	鼻毛石村	二宮村	大室村	樋越村	堀越村	江木村	堀下村	小屋原村	小嶋田村

枋窪村 下植木村 伊勢崎村

中嶋村 小柴村 境村

川端氣村 木嶋村

高五万九千六百八拾石六斗貳升

綠野郡之内 貳拾壹箇村

上戸塚村 下戸塚村 本立石村

岡村 中村 肥土村

下栗須村 小林村 森新田村

矢場村 牛田村 本動堂村

下動堂村 根岸村 川除村

東平井村 鮎川村 篠塚村

中栗須村 淨法寺村 藤岡村

高八千四百五十三石九斗

碓氷郡之内 豐岡領 八箇村

上里見村 中里見村 下里見村

上大嶋村 町屋村 板鼻村

八幡村 鼻高村

高三千五百八拾九石六斗九升貳合

多胡郡之内

吉井村

高百八拾五石五斗

武藏國

豐嶋郡之内 貳箇村

下小岩村 鹿骨村

高貳千百石六斗三升貳合

榛澤郡之内 壹箇村

榛澤村

高千石

兒玉郡之内 壹箇村

北堀村

高三百七拾七石九升七合

相模國

御浦郡之内 拾貳箇村

公江村 櫻山村 浦江村

堀内村 長栖村 沼間村

逸見村 木古庭村 田浦村

横須加村 長浦村 深田村

高三千四百三拾八石五斗貳升九合

近江國

野洲郡之内 貳箇村

杉江村 石田村

高千七百拾八石七斗壹升貳合

蒲生郡之内 壹箇村

深山口村

高三百三拾三石四斗五升

栗本郡之内 九箇村

伊勢落村 六地藏村 安養寺村

今里村 土村 小坂村

大橋村 下物村 伊勢村

高貳千九百四拾七石八斗三升八合

都合拾三万石

奥書右同

寛文四年四月五日

酒井雅樂頭殿

安藝國貳拾六万六千六百石餘備後國御調世羅三谿奴
可三上甲奴六郡之内拾万九千九百石都合三拾七万六
千五百石餘_{別紙}在_録事任寛永十一年八月四日先判之
旨宛_レ行之_レ訖全可_レ領_レ知之_レ狀如_レ件

寛文四年四月五日御判 筆者飯高七兵衛

安藝侍従とのへ

目録

安藝國

沼田郡一圓 三拾箇村

高壹万六千五百五石貳斗壹升四合

山縣郡一圓 六拾四箇村

高貳万八千五百拾八石六斗六升九合

高宮郡一圓 三拾貳箇村

高壹万六千九百九拾三石七斗九升六合

賀茂郡一圓 八拾八箇村

高四万九千貳百九拾八石八斗九升貳合

安藝郡一圓 貳拾九箇村

高貳万五千三百五拾六石六千八升五合

佐伯郡之内 六拾三箇村

高三万四千六百四拾五石四斗九升五合

豐田郡之内 五拾五箇村

高四万九千六百七拾四石九斗四升三合

高田郡之内 六拾四箇村

高四万六千四百六石三斗六合

備後國

御調郡之内 五拾七箇村

西野村	山中村	東野村
木原村	久山田村	不加村
中野村	本郷村	門田村
市原村	志路江村	栗原村
尾道村	同所浦村	鰯嶋村
院嶋村	向嶋西村	向嶋東村
猪子廻村	美奈利村	木梨村
梶山田村	小原村	大道村
浦邊村	羽方村	牛川村
國森村	加井加原村	市永村
大田村	加南村	德永村
綾目村	大原村	上野村
津加舟村	今田村	本庄村
美能婦村	宮内村	野串村
屋中村	福井村	加々利村
加井知村	堺原村	波貝良村
和佐宇村	和泉村	阿佐宇村

惠木村 下津村 吉田村

宇津登村 門田村 久文村

高貳万八千四百七拾貳石五斗貳升四合

世羅郡之内 四拾八箇村

高山村	東神崎村	西神崎村
三良丸村	青山村	田打村
重長村	中原村	灰原福田村
上戸藏村	下戸藏村	灰原本郷村
倉宗村	飯田村	吉原本郷村
吉原中村	市分村	上山村
敷名村	大田本郷村	井折村
寺町村	堀越村	京丸村
安田村	戸帳村	德市村
山中福田村	長田下村	津田下村
津田上村	黒川村	小國村
津口村	黒淵村	青津村
小世羅村	西上原村	東上原村
川尻村	伊保村	小谷村
松崎村	別作村	阿和知加村
鷯賀村	小童村	阿加屋村

高貳万八千貳百八拾三石九斗五升貳合

三谿郡之内 三拾八箇村

薄井村 丸田村 辻村

川内村 檜村 上田村

有原村 三若村 石原村

宇登村 糸井村 志加宇村

長田村 敷地村 屋井村

東村 清綱村 安田村

夏目原村 大谷村 灰塚村

二荷村 光清村 多里村

皆瀬村 和知村 川内村

高杉村 廻神村 大田郷村

小田郷村 幾野利村 岡田村

向江田村 見羅坂村 矢野地村

加板原村 三玉村

高壹万八千五百五拾六石貳斗五升五合

三上郡之内 拾七箇村

是松村 長末村 本村

上谷村 一木村 新庄村

宮内村 高村 板橋村

川手村 正原村 川西村

小用村 春田村 峯村

實富村 高角村

高壹万貳千七百八拾石五斗六升貳合

奴可郡之内 三拾八箇村

小奴可村 森村 上千鳥村

下千鳥村 賀谷村 服部村

打堀村 安田村 森脇村

福代村 出貝志村 川東村

平子村 栗田村 大佐村

中野村 由木村 神嶋原村

中廻村 大屋村 竹森村

清原村 入江村 田殿村

田黒村 見登村 志々宇村

鹽原村 久代村 戸宇村

宇山村 菅村 所尾村

山中村 川鳥村 高尾村

栗村 川西村

高壹万七千四百六拾八石壹升六合

甲奴郡之内 八箇村

稻草村 木屋村 千和村
梶田村 西野村 深江村
矢野村 本郷村

高四千五百拾三石四斗七升九合

外高貳百貳拾五石貳斗壹升貳合 鐵山役高ニ入

都合三拾七万六千五百石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平安藝守殿

出羽國秋田山本河邊嶺平鹿雄勝六郡貳拾万石下野國
河内郡賀兩郡之内五千八百石餘都合貳拾万五千八百
石餘^{目錄在紙}事如^ニ前々^一宛^ニ行之^ニ訖全可^ニ領知^ニ之狀如^レ件

寛文四年四月五日御判

筆者大橋左兵衛

秋田侍從とのへ

目錄

出羽國

秋田郡 貳百四拾五箇村

高四万九千七百石

山本郡 六拾四箇村

高壹万五千七拾石

河邊郡 四拾壹箇村

高壹万三千四拾石

山邊郡 百三拾六箇村

高五万九千四拾石

平鹿郡 七拾貳箇村

高三万四千四百四拾石

雄勝郡 七拾箇村

高三万三千三拾石

下野國

河内郡之内 八箇村

藥師寺村 仁良川村

田中村 東根村

磯部村 花田村

高五万三拾九石四斗

都賀郡之内 三箇村

萱橋村 山田村 飯田村

町田村 絹板村

高七百七拾八石六斗

都合貳拾万五千八百拾八石

奥書右同

寛文四年四月五日

佐竹修理大夫殿

卷第三

伊賀國拾万五百石伊勢國安濃一志奄藝鈴鹿河曲三重飯野多氣八郡之内拾七萬四百拾石餘山城國相樂郡之内九千九百石拾三石大和國上添山邊十市城上四郡之内四万八十七石下總國香取郡之内三千石都合三拾貳万三千九百五拾石餘_{目錄在別紙}事如_三前々_二宛_三行之_一訖全可_三領知_一之狀如_レ件

寛文四年四月五日御判

筆者杉浦半左衛門

伊賀侍従とのへ

目録

伊賀國一圓

阿拜郡 六拾九箇村

高三万九千四百拾三石八斗九升

山田郡 貳拾五箇村

高壹万六千四百九拾九石貳升

伊賀郡 五拾箇村

高貳万七千九百五拾三石壹斗八升

名張郡 三拾八箇村

高壹万六千六百七拾三石九斗壹升

伊勢國

安濃郡 八拾五箇村

高五万八千拾貳石四斗五升

一志郡之内 八拾五箇村

高四万八千五百四拾六石三斗壹升三合

奄藝郡之内 三拾五箇村

高壹万七千貳百三拾六石六斗六升七合

鈴鹿郡之内 拾箇村

高六千四百五拾三石三斗五升三合

阿曲郡之内 拾箇村

高壹万四石五斗四合

三重郡之内 貳拾三箇村

高壹万百三拾三石三斗貳升六合

飯野郡之内 貳拾九箇村

高壹万四千四百三石七斗八升

多氣郡之内 貳拾箇村

高五千六百拾九石六斗七合

山城國相樂郡之内 拾六箇村 入小物成高

高九千九百貳拾三石四斗八升五合

大和國

添上郡之内 貳拾九箇村

高九千四百七拾八石四斗五升貳合

山邊郡之内 四拾四箇村

高壹万七千貳百貳拾六石四斗八升九合

十市郡之内 貳拾六箇村

高壹万七百拾壹石九斗七合

城上郡之内 拾壹箇村 入小物成高

高五千百三拾七石三斗八升七合

下總國香取郡之内 拾四箇村

高三千八拾九石貳斗貳升八合

山城國相樂郡之内

大和國四郡之内

下總國香取郡之内

延高合貳千五百六拾七石四斗三升三合

爲御用地被召上替地以物成積被下付

而本高不載之

都合三拾貳万三千九百五拾石餘

奥書右同斷

寛文四年四月五日

藤堂大學頭殿

筑前國早良郡那珂志摩糟屋宗像席田御笠上座穗波九郡

並夜須嘉麻下座遠賀鞍手怡土六郡之内都合四拾三万

三千百石別紙在事任寛永十一年八月四日先判之旨

宛三行之訖全可領知之狀如件

寛文四年四月五日御判 筆者久保吉右衛門

筑前侍從とのへ

目錄

筑前國

早良郡 四拾七箇村

高三万八千六百七拾貳石五斗六升貳合

那珂郡 六拾三箇村

高三万四千五百拾八石貳斗三升

志摩郡 四拾四箇村

高三万三千六百四拾八石三斗五升六合

糟屋郡 六拾七箇村

高五万貳千貳百貳拾石七斗六升四合

宗像郡 五拾八箇村

高四万九千五百拾石壹斗九升壹合

席田郡 八箇村

高八千七百拾九石九斗壹升

御笠郡 五拾六箇村

高三万貳千五百貳拾五石貳斗壹合

上座郡 三拾壹箇村

高貳万千貳百五十七斗貳升四勺

穂浪郡 五拾八箇村

高三万貳千六百三拾五石九斗八升三合六勺^{1合}

夜須郡之内 拾四箇村

曾根田村 朝日村 吹田村

甘木村 東小田村 長者町村

松延村 砥上村 赤坂村

三牟田村 篠隈村 三並村

四三嶋村内 中牟田村内

高壹万千貳百六拾三石七斗八升八合八勺

嘉麻郡之内 三拾四箇村

宮吉村 上村 大隈村

中益村 下益村 貞月村

熊畑村 上山田村 下山田村

平村 筒野村 高倉村

入水村 山倉村 赤坂村

網分村 川嶋村 岩崎村

下臼井村内 佐與村 大門村

鯰田村 有安村 二保村

有井村 元吉村 多田村

山野村 漆生村 上三緒村

下三緒村 立岩村 鵜生村

高貳万千貳百八拾石九斗七升七合九勺

下座郡之内 貳拾六箇村

三奈木村 相窪村 荷原村

桑原村 田嶋村 小隈村

林田村 上畑村 鎌崎村

遠賀郡之内 六拾四箇村

金丸村 鵜木村
片延村 古江村
坂井村 長田村
倉蘭村 白鳥村
中村 矢野竹村
吉末村 中嶋田村
高壹万千百拾貳石三斗五升壹合

上々津役村 下上津役村
中底井野村 下底井野村
垣生村 畑村
廣渡村 高倉村
海老津村 糠塚村
吉田村 岩瀬村
鹽屋村 小敷村
島津村 猪熊村
蘆屋村 有毛村
大鳥居村 高須村
大藏村 前田村
原村 手野村
波津村
藤田村
海士住村
乙丸村
鬼津村
山鹿村
淺川村
黒山村
内浦村
中間村
藤木村
上底井野村

四郎丸村
城八重津村
城力村
德淵村

鞍手郡之内 三拾箇村

三吉村 吉木村 修多羅村
竹並村 小石村 小嶺村
頓田村 安屋村 戸畑村
杵末村 古賀村 二畑村
比末村 野間村 上畑村
山田村 戸切村 枝光村
尾藏村 中原村 小竹村
二島村 熊手村 鳴水村
虫生津村 別府村 楠橋村
若松村
高四万六百拾七石五斗五升四合六勺

脇田村 金生村 原田村
下大隈村 竹原村之内 下野村
小伏村 湯原村 乙野村
山口村 沼口村 平村
山野村 感田村 新延村
高野村 古門村 倉久村
木月村 長井鶴村 木屋瀬村
四郎丸村 小牧村 芹田村
植木村

稻光村 宮永村 黒丸村
下新入村 知古村 下有木村
高貳萬九千五百貳拾貳石八斗壹升三合八勺
怡土郡之内 貳拾三箇村

井原村 瑞梅寺村 西堂村
千里村 高祖村 三雲村
大門村 井田村 玉丸村
高來寺村 宇田川原村 三坂村
雷山村 多久村 飯場村
末永村 山北村 高上村
飯氏村 篠原村 周船寺村
上原村 徳永村

高壹萬六千五百五斗九升五合九勺
都合四拾三萬三千百石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平右衛門佐殿

周防國貳拾方貳千七百八拾七石餘長門國拾六萬六千

六百貳拾三石餘都合三拾六萬九千四百拾壹石
別錄在
事任三元和三年九月五日寛永十一年八月四日兩先判
之旨ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ之狀如レ件

寛文四年四月五日御判 筆者森 新兵衛

長門侍従とのへ

目録

周防國一圓

玖珂郡 三拾六箇村

高五萬三千五百三拾貳石七斗八升壹合

大島郡 貳拾七箇村

高壹萬三千百九拾五石六斗壹升五合

熊毛郡 貳拾六箇村

高三萬五千七百拾八石九斗三升壹合

都濃郡 貳拾五箇村

高三萬四千九百拾三石九斗八升三合

佐波郡 拾八箇村

高貳萬六千七百九拾壹石壹升四合

吉敷郡 貳拾箇村

高三萬八千六百三拾五石三斗四升六合

長門國一圓

阿武郡 貳拾貳箇村

高三万八千五百拾五石三升

大津郡 拾五箇村

高壹万八千貳百拾四石壹斗三升七合

美禰郡 拾五箇村

高三万九千貳拾壹石七斗四升五合

厚狹郡 三拾貳箇村

高三万貳千三百六石四斗六升三合

豐浦郡 六拾五箇村

高四万五千八拾貳石貳斗貳升九合

見島郡

高五百八拾四石四升壹合

都合三拾六萬九千四百拾壹石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平大膳大夫殿

美作國拾八万六千五百石餘
目録在別紙 事任三元和三年五月廿六日寛永十一年八月四日兩先判之旨宛三行之

訖全可領知之狀如件

寛文四年四月五日御判

美作侍從とのへ

筆者久保金右衛門

目録

美作國一圓

英田郡 六拾四箇村

高壹万三拾六石五斗

吉野郡 五拾八箇村

高壹万四千四百石壹斗

勝田郡 百貳拾壹箇村

高四万三千七百九拾六石七斗

苦東郡 拾四箇村

高七千貳百七拾七石八斗

苦北郡 三拾貳箇村

高九千七百四拾壹石四斗

苦南郡 貳拾三箇村

高七千六百九拾八石四斗

苦西郡 五拾壹箇村

高壹万八千貳百拾七石八斗

久米郡 八拾七箇村

高三万九千四百拾五石

大庭郡 四拾七箇村

高壹万四千四百九拾石六斗

真島郡 九拾五箇村

高貳万四千四百貳拾五石七斗

都合拾八萬六千五百石

右今度被_レ差上_二郡村之帳面相改及_二上聞_二所_レ被_レ成

下_二御判也此儀兩人奉行依_レ被_二仰付_二執達如_レ件

寛文四年四月五日

森内記殿

肥後國五拾壹万九千石餘豐後國直入大分海部三郡之

内貳万石餘都合五拾四万石

八月四日先判之旨_二宛_二行之_二訖全可_二領知_二之狀如_レ件

寛文四年四月五日御判

肥後侍従とのへ

筆者飯高七兵衛

肥後國

飽田郡 九拾四箇村

高五万三千拾三石四斗八升貳合

詫摩郡 貳拾九箇村

高壹万九千八拾八石貳斗三升六合

益城郡 貳百八拾六箇村

高拾貳万三千四百三拾三石三斗八升

宇土郡 四拾八箇村

高貳万五千七百九石五斗八升五合

八代郡 六拾箇村

高四万貳千八百七拾七石四斗六升

蘆北郡 三拾箇村

高壹万七千五百三拾四石五斗六升

山本郡 三拾三箇村

高壹万七千三百八拾七石壹斗

玉名郡 百拾箇村

高七万三千九百貳拾七石九斗貳合

山鹿郡 四拾四箇村

高三万三千百拾六石九斗六升八合

菊池郡 六拾七箇村

目録

高貳万六千四百六拾三石貳斗六升

合志郡 六拾箇村

高三万四千六百九拾壹石壹斗八升

阿蘇郡 八拾四箇村

高五万四千六百貳拾八石三斗貳合

豐後國

直入郡之内 貳箇村

久住村 白丹村

高貳千五百拾石六斗壹合

大分郡之内 三拾九箇村

野津原村 胡麻鶴村

吉熊村 辻原村

矢野原村 原村

筒口村 五ヶ瀬村

篠原村 谷村

鶴崎村 寺司村

堂園村 關門村

南村 鶴獵河瀬村

下德丸村 鶴村

志村 小中島村

入藏村

岡藏村

酒野村

大龍村

田野小野村

國宗村

常行村

上德丸村

追村

門前村

山領村 冬田村

岩上村 伊與床村

中野村 中無禮村

高壹万五拾六石五斗五升八合

海部郡之内 貳拾貳箇村

大西村 角子原村

横田村 政所村

竹下村 城原村

木田村 上野村

木佐上村 神崎村

大志生木村 小志生木村

關村 白木村

一尺屋村

高七千五百四拾壹石四斗貳升六合

都合五拾四万石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

細川越中守殿

竹中村

高城村

弓立村

北村

濱村

市村

細村

大平村

古宮村

田浦村

肥前國佐嘉神崎小城杵島藤津三根六郡并養父松浦高
來彼杵四郡之内都合三拾五万七千石餘別紙在事如
前々宛_ニ行之_ニ訖全可_ニ領知_ニ之狀如_レ件

寛文四年四月五日御判

筆者森 新兵衛

肥前侍從とのへ

目録

肥前國

佐嘉郡一圓 百七拾貳箇村

高拾貳万貳千七百七拾九石壹斗九升五合

神崎郡一圓 百九箇村

高四万九千三百三拾五石貳斗七升壹合

小城郡一圓 百四拾四箇村

高四万六千四百九石六斗八升八合

杵島郡一圓 百拾四箇村

高六万七千四百三拾六石三斗六升壹合

藤津郡一圓 七拾九箇村

高三万七百五拾石八升四合

三根郡一圓 四拾八箇村

高貳万四千三百三拾五石四升六合

養父郡之内 拾三箇村

江島村 不動島村 田出島村

下野村 轟木村 儀徳村

立石村 平田村 山浦村

大楠村 原古賀村 幸津村

村田村

高六千三百貳拾壹石九升貳合

松浦郡之内 三拾壹箇村

脇田村 岩立村 伊萬里村

六仙寺村 今嶽村 中野原村

平尾村 大河内村 山方村

岩屋河内村 外尾村 南河原村

曲河村 廣瀬村 山谷村

大木村 中里村 大里村

脇野村 武河内村 山寺村

大成木村 立岩村 浦崎村

久原村 楠久村 城村

河内野村 里村 大窪村

喜須村

高八千六百九拾石貳斗壹升六合

高來郡之内 七拾四箇村

遠武村	井崎村	田原村
小河原浦村	長里村	黒丹田村
宇良村	今崎村	湯江村
犬木村	大江村	藤田尾村
太田尾村	白濱村	東長田村
目代村	本明村	帶田村
湯尾村	破籠井村	久山村
津水村	戸石村	田結村
江浦村	八町分村	唐比村
森山村	杉谷村	井牟田村
小野村	宗方村	河内町村
長野村	船越村	諫早村
小鹿倉村	西長田村	古場山村
小園村	福田村	鷺崎村
早見村	有喜村	目乙木村
小河村	栗面村	平山村
貝津村	小舟越村	眞崎村
大渡野村	圓京村	榮田村
小豆崎村	布卷村	千々村

爲石村 脇御崎村 深海村
 中山村 土師尾村 筏村
 鬼木村 楠高村 東神代村
 井尻村 古賀村 西神代村
 伊古村 夏嶺村 古部村
 伏尾村 河床村
 高壹万八千八百六拾九石五斗六升四合
 彼杵郡之内 拾五箇村

矢上村 喜々津村 井樋尾村
 伊岐力村 大草村 深堀村
 小嘉倉村 戸町村 土井頸村
 竿浦村 平山村 蚊燒村
 大籠村 島村 三重村
 高貳千百九石六斗六升八合
 都合三拾五万七千三拾六石五斗九升九合

奥書右同

寛文四年四月五日

松平丹後守殿

阿波國拾八万石六千七百五拾石餘淡路國七万百八拾石餘都合貳拾五万七千石目錄在別紙事任元和三年九月五日寛永十一年八月四日兩先判之旨宛行_レ之訖全可_レ領知_レ之狀如_レ件

寛文四年四月五日御判

筆者久保五兵衛

阿波侍從とのへ

目録

阿波國一圖

板野郡 八拾箇村

高貳万九千五百七拾四石五升

名西郡 三拾九箇村

高壹万七千貳百拾壹石九斗貳升六合

麻植郡 三拾貳箇村

高壹万三千九百七拾七石壹斗壹升四合

阿波郡 貳拾九箇村

高七千七百五拾八石壹斗

美馬郡 貳拾箇村

高九千七百四石五斗貳升貳合

三好郡 貳拾八箇村

高壹万五千八百五石七斗壹升

名東郡 四拾八箇村

高貳万四千九百石九斗貳升貳合

勝浦郡 三拾貳箇村

高壹万四千百八拾八石六斗貳升壹合

那賀郡 八拾五箇村

高四万七千七百三拾貳石四斗貳升五合

海部郡 貳拾四箇村

高壹万千八百九拾四石壹斗九升三合

淡路國一圖

津名郡 百貳拾壹箇村

高三万七千貳百七石九斗

三原郡 百拾三箇村

高三万貳千九百七拾八石六斗

都合貳拾五万六千九百四拾石八升三合

右今度被_二差上_一郡村之帳面相改及_二上聞_一如_二御先代之高_一被_二成下_一御判也此儀兩人奉行依_レ被_二仰付_一執達如_レ件

寛文四年四月五日

松平阿波守殿

卷第四

土佐國貳拾万貳千六百石目録在別紙事同三万石山内脩理大夫可進退之其外不殘宛_レ行之_レ訖全可領_レ知之狀如_レ件

寛文四年四月五日御判

筆者神尾小左衛門

土佐侍從とのへ

目録

土佐國一圓

安藝郡 五拾三箇村

高壹万七千拾壹石六斗五升

香美郡 六拾六箇村

高貳万七千三百六拾八石六升

長岡郡 四拾八箇村

高貳万四千六百七拾四石七斗五升

土佐郡 三拾九箇村

高壹万八千六百九拾石六斗四升

吾川郡 四拾壹箇村

高壹万八千石四升

高岡郡 七拾五箇村

高四万五千八拾八石八斗四升

幡多郡 百四拾壹箇村

高五万七千七百九拾貳石五斗四升

都合貳拾万貳千六百石餘

此内三万石 山内修理大夫拜領也

奥書右同

寛文四年四月五日

松平對馬守殿

丹後國拾貳万三千貳百石目録在別紙事加佐郡之内三万五

千石京極伊勢守可進退之丹波郡之内峯山廻壹万石

除之殘七万八千貳百石如_レ前々宛_レ行之_レ訖全可領

知之狀如_レ件

寛文四年四月五日御判

筆者大橋長衛門

丹後侍從とのへ

目録

丹後國

與佐郡一圓 五拾貳箇村

高三万四千四百六拾貳石四斗五升

竹野郡一圓 三拾七箇村

高壹万九千五百六拾五石三斗六升

熊野郡一圓 四拾壹箇村

高壹万五千五百四拾六石三斗六升

加佐郡之内 拾四箇村

毛原村 内宮村 二俣村

河守村 蓼原村 公座村

日藤村 小原田村 橋谷村

天田内村 北原村 波美村

佛性寺村 夏間村内

高貳千三百八拾三石七升

丹波郡之内 拾四箇村

五十川村 延利村 明田村

森本村 下三重村 周枳村

三坂村 谷内村 恒谷村

奥大野村 二箇村 新治村

益富村 口大野村之内

同國

高九千貳百拾七石七斗七升

加佐郡之内 百貳拾四箇村

高三万五千石 京極伊勢守知行分也

丹波郡之内 峯山廻 拾五箇村

高壹万石除_{イ餘也}之

總高殘七万八千貳百石 但貳拾五石不足有之

奥書右門

寛文四年四月五日

京極丹後守殿

陸奥國桃生牡鹿登米磐井本吉氣仙膽澤賀美玉造栗原
志田遠田刈田柴田伊具亘理名取宮城黒川江刺貳拾郡
并宇多郡之内以上六拾万石常陸國信太筑波河内三郡
之内壹万石餘近江國蒲生野洲兩郡之内壹万石都合六
拾貳万石餘_{別目録在紙}事内三万石伊達兵部大輔三万石
田村右京亮可_レ進_ニ退之_ニ殘五拾六万石餘宛_ニ行之_ニ訖
全可_レ領知_ニ之狀如_レ件

寛文四年四月五日御判

筆者大橋長衛門

松平龜千代とのへ

目錄

陸奥國

桃生郡一圓 六拾五箇村

高壹万九千七百四拾八石四斗七升

牡鹿郡一圓 六拾箇村

高五千四百⁴貳拾石四斗六升

登米郡一圓 貳拾四箇村

高壹万八千貳百七拾壹石六升

磐井郡一圓 八拾六箇村

高五万九千三百拾七石壹升

本吉郡一圓 三拾三箇村

高壹万五千百七拾三石壹斗

氣仙郡一圓 貳拾四箇村

高壹万貳千九百石七斗

膽澤郡一圓 三拾七箇村

高四万七千五百八拾貳石四斗五升

賀美郡一圓 三拾八箇村

高貳万四千七百七拾九石六斗五升

玉造郡一圓 貳拾壹箇村

高壹万七千七百貳拾三石七升

栗原郡一圓 九拾貳箇村

高八万三千三百五拾四石八斗九升

志田郡一圓 六拾四箇村

高貳万九千貳百五拾六石六升

遠田郡一圓 五拾八箇村

高三万四千四拾石七斗七升

刈田郡一圓 三拾三箇村

高壹万九千九百九拾壹石五斗六升

柴田郡一圓 三拾五箇村

高壹万九千八百八拾五石六斗二升

伊具郡一圓 三拾六箇村

高貳万六千五百三拾四石八斗壹升

亘理郡一圓 貳拾六箇村

高壹万五千八百六拾七石七斗

名取郡一圓 六拾壹箇村

高四万四千五百拾四石九斗四升

宮城郡一圓 七拾八⁴箇村

高四万七千五百七拾八石六斗三升

黒川郡一圓 四拾九箇村

高三千三百十壹石四斗壹升

江刺郡一圓 四拾壹箇村

高貳万六千六百貳拾七石四斗

宇多郡之内 九箇村

埴木崎村 谷地小屋宿村 福田村

杉目村 眞弓村 小川村

大戸濱村 今泉村 駒ヶ嶺宿村

高五千百貳拾石貳斗四升

已上六拾万石 内三万石伊達兵部大輔拜領之
三万石田村右京亮拜領之

常陸國

信太郡之内 拾三箇村

飯倉村 若栗村 波佐間戸村

大最村 竹來村 大室村

賤馬村 追原村 若島村

清領村 上長村 實穀村

福田村

高五千三百四拾五石六升

筑波郡之内 四箇村

吉沼村 西高野村 大砂村

大蘭木村内

高三千八百貳石八升三合

内三百貳拾八石七斗五升八合

爲御用地被召上替地物成實與以被下故延也本高二
不載之

河内郡之内 龍崎村

高千貳百三拾八石貳斗四升九合

近江國

蒲生郡之内 拾八箇村

西古保志塚村 東古保志塚村 金屋村

蛇味噌村 友定村 内野村

中野村 小今在家村 今在家村

今堀村之内 上羽田村 西生來村之内

橋本村之内 石塔村 老蘇村

北脇村 林村 鷹飼村

高三千八百四拾貳石三升八合

野洲郡之内 貳箇村

小篠原村 市三宅村内

高千百五拾七石貳斗六合

惣高殘五拾六万五拾五石七斗九升八合

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平龜千代殿

越中國婦負郡百八拾箇村新川郡之内七拾三箇村都合
拾万石別紙目録在ニ事如ニ前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ之狀
如ノ件

寛文四年四月五日御判

筆者久保吉右衛門

富山侍從とのへ

目録

越中國

婦負郡一圓 百八拾箇村

高七万五千三拾六石九斗壹升

新川郡之内 七拾三箇村

根塚村 小泉村

高田村 磯邊村

中野村 太郎丸村

二口村 赤田村

布瀬村

羽根村

今泉村

下懸尾村

黒瀬村

小中村

經田村

秋ヶ島村

任海村

岩木村

轡田村

栗山村

陀羅尼寺村

天浦村

大泉村

南八川村

宮保村

杉瀬村

窪村

本郷下新村

花崎村

大町村

公文名村之内

太田本郷村之内

黒崎村

最勝寺村

萩原村

長老村

神通村

八木山村

友杉村

布市村

大溝呂木村

月岡村

下堀村

上熊村

辰尾村

奥田下新村

稻荷村

新保村

堀村

福澤村之内

廣田中島村之内

文珠寺村之内

安養寺村

荒屋村

塚原村

新保村

鹽村

西木江村

押上村

經力村

青柳村

小原屋村

上堀村

上野村

上熊野村

奥田村

清水村

田畠村

馬瀬口村

布目村之内

上赤江村之内

三室荒屋村之内

黒牧村之内

高三万七千四百九拾九石六升

但貳郡之内壹万貳千五百三拾五石九斗七升

依三分限帳之外一籠高也

都合拾万石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平淡路守殿

越前國大野郡之内百壹箇村四万四千三百石五斗餘丹
生郡之内拾貳箇村四千六百拾五石二斗餘吉田郡之内
兩村六百六拾石餘足羽郡大窪村四百拾石餘都合五万
石^{別紙}_{レ件} 事如^{日録}ニ前々一宛ニ行之^在一訖全可^レ領知^レ之狀如

寛文四年四月五日御判

筆者渡邊七郎兵衛

大野侍従とのへ

目録

越前國

大野郡之内 百壹箇村

大野町村	飯降村	深井村
上荒井村	上黒谷村	下黒谷村
河内村	神當部村	中野手村
野津股村	小當見村	市布村
西川原村	東河原村	折立村
横越村	上丁村	太田村
矢村	大矢戸村	小矢戸村
下荒井村	峙寄村	北山村
大袋村	比嶋村	敷坂村
妙全嶋村	庄林村	中津川村
新在家村	堂本村	发江村
中野保村	中狹村	菖蒲池村
西嶋村	井野口村	中條村
下据村	中据村	五條方村
佐開村	新庄村	阿難祖村
笹股村	中嶋村	黒谷戸村 ^{武箇所}
小澤村	下秋生村	上秋生村
箱ヶ瀬村	上大納村	若生子村
中野村	坂戸村	斗石村

河上村	大宮村	縫原村	野波村	二位村	宮地村	西股村	東股村	間戸村	繪堂村	四谷村	所谷村	中吉村	大谷村	籠谷村	木吉村	山中村	下丁村	足羽南郡之內	高六百六拾石七升	山王村	志比塚村	吉田郡之內	貳箇村	高四千六百拾五石貳斗三合	三崎村	大撞浦	小撞浦			
中丁村	歛掛村	右近村	中舌村	下舌村	犬山村	上荒井村	橫枕村	土布子村	新河原村	麻生島村	東大月村	西大月村	上大門村	下大門村	遲羽口村	本郷村	保田村	杉股村	高四万四千三百五斗八升貳合	丹生北郡之內	拾貳箇村	佐々生村	金谷村	頂谷村	株原村	堺野村	上戸村	蚊谷村	織田村	中村

筑後國山門郡五万七千三百七拾壹石五升三毛郡之內
 貳万七千五百拾八石五斗餘三瀨郡之內壹万四千五百
 三拾六石九斗餘上妻郡之內四千三百三石貳斗餘下妻
 郡之內五千九百拾六石九斗餘都合十万九千六百四拾
 七石餘別錄在紙事任寛永十一年八月四日先判之旨
 宛三行之訖全可領知之狀如件

寛文四年四月五日
 松平但馬守殿

奥書右同斷
 都合五万石
 高四百拾石四升壹合
 大窪村

寛文四年四月五日御判

筆者大橋左兵衛

柳川侍従とのへ

目録

筑後國

山門郡一圓

八拾六箇村 内六拾五箇村は入ニ新田高一

木本村

中矢加部村

吉開村

磯鳥村

新

瀬高下庄村

北小高柳村

南高柳村

津留村

關村

濱田村

堀切村

吉里村

長島村

下小川村

井手野上村

眞木村

有留村

金栗村

大竹村

上北川村

堀地園村

廣安村

大江村

宮園村

海津村

藤尾村

朝日村

川原内村

松延村

小廣田村

堤村

大塚村

草葉村

本吉村

大木村

在力村

中尾村

飯尾村

竹井村

飯江村

立山村

佐野村

中原村

三嶺村

小萩村

北關村

眞弓村

原町村

中山村

瀬高上庄村

五十町村

下棚町村

上棚町村

江崎村

貳町新開村

高尾村

鹽塚村

鹽塚下村

四拾丁村

野田村

樽見村

上久末村

下久末村

島堀切村

中島村

上百町村

正行村

蒲船津村

下百町村

高畠村

今古賀村

江曲村

筑籠村

宮永村

彌四村

吉富村

矢富村

藤吉村

波多地村

於牟登宇村

枝光村

正段島村

下矢加部村

柳河村

德益村

高五万七千三百七拾壹石五斗四升四合

三毛郡之内

四拾七箇村 内三拾箇村は入ニ新田高一

東野志村

西野志村

北新開村

南新開村

龜尻村

宮部村

久福木村

三池町村

小船津村

手鎌村	草木村	田崎村
田隈村	四箇村	上宇治村
坂井村	倉永村	甘木村
黒崎村	本村	尾尻村
豊永村	岡松村	賦部村
隈村	深倉村	深浦村
池田村	豐持村	下宇治村
怒繩田村	龜崎村	高泉村
大間村	横洲村	平野村
大牟田村之内	田尻村	原村
楠田村	江浦村	江浦町村
今福村	古賀村	岩津村
浦村	飯江村	
高貳万七千五百拾八石五斗四升		

三潞郡之内 拾貳箇村 内拾壹箇村は入ニ新田高一

濱武村	古賀村	田脇村
久々原村	間村	小保村
津村	一木村	納保志村
波多保村	蒲地村	金納村
高壹万四千五百三拾六石九斗貳升七合		

上妻郡之内 拾六箇村 内四箇村は入ニ新田高一

四條野村	白木村	本山村
北田村	土窪村	木屋村
大淵村	矢部村	山崎村
廉子生村	兼松村	谷川村
原嶋村	邊春村	田代村
田形村		
高四千三百三石二斗壹升六合		

下妻郡之内 八箇村 内四箇村は入ニ新田高一

禪院村	山中村	小田村
長田村之内	坂田村	本江村
芳司村	吉岡村	
高五千九百拾六石九斗七升		
都合拾万九千六百四拾七石		

奥書同斷

寛文四年四月五日

立花飛驒守殿

卷第五

陸奥國安達郡六拾九箇村安積郡四拾壹箇村都合拾万七白石餘目録在別紙事如三前々一宛三行之一訖全可三領知之狀如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久右衛門

二本松侍従とのへ

目録

陸奥國

安達郡一圓 六拾九箇村

高六万九千七百八拾壹石四斗三升九合

安積郡之内 四拾壹箇村

久保田村	笹河村	日出山村
小田原村	郡山村	横塚村
笹原村	福原村	日和田村
高倉村	早稻原村	富田村
八丁目村	梅澤村	片平村
安子嶋村	夏出村	上伊豆嶋村
下伊豆嶋村	河内村	堀内村
長橋村	前田澤村	八山田村
大槻村	下守屋村	大谷村

都合拾万七白石餘
過二籠高也
奥書右同斷

寛文四年四月五日

丹羽左京太夫殿

對馬一圓并肥前國基肆養父兩郡之内壹萬千八百三拾七石目録在別紙事任寛永十一年八月四日先判之旨一宛三行之一訖全可三領知之狀如レ件

寛文四年四月五日

對馬侍従とのへ

筆者小嶋久右衛門

目録

富岡村	多田野村	駒屋村
山口村	河田村	成田村
荒井村	鍋山村	安佐野村
館村	舟津村	濱路村
横澤村	八幡村	
高三万千百七拾貳石七斗貳升六合		
但貳郡之内貳百五拾四石餘依レ爲三分限帳之		

對馬國一圓

肥前國

基肆郡之内 貳拾壹箇村

宮浦村 城戸村 小倉村

野口村 長野村 奈良田村

永吉村 油比村 金丸村

曾根崎村 神邊村 萱方村

古賀村 河内村 田代村

幡崎村 姫方村 原村

飯田村 酒井村 水屋村

高七千五百五拾六石六斗貳升

養父郡之内 拾箇村

宿村 牛原村 養父村

藏上村 鳥栖村 藤木村

瓜生野村 今泉村 眞木村

高田村

高四千貳百八拾石三斗八升

都合壹万千八百三拾七石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

宗對馬守殿

大和國宇陀郡八拾八箇村都合貳万八千二百石
事宛三行之訖全可領知之狀如レ件
別紙

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

宇陀侍從とのへ

目録

大和國

宇陀郡之内 八拾八箇村

宮奥村 關戸村 大藏村

黒木村 拾村 中庄村

本郷村 迫間村 西山村

嬉河原村 芝生村 祭梯村

麻生田村 下竹村 岩室村

小附村 内原村 野寄村

今井村 平尾村 五津村

兩師村 篠野村 春日村

調子村 藤井村 塚脇村

神末村	葛村	小長尾村	山糟村	赤埴村	八瀧村	見田村	大澤村	下芳野村	松井村	佐倉村	稻戸村	上品村	守道村	山邊村之内	上檜牧村	足立村	高塚村	石田村	母里村
菅野村	伊賀見村	鹽井村	掛村	室生村	内牧村	平井村	別所村	入谷村	東郷村	宇賀子村	小和田村	下品村	山口村	岩清水村	下檜牧村	井足村	福西村	栗谷村	大貝村
土屋原村	太郎路村	今井村	長野村	田口村	諸木野村	澤村	三宮寺村	大神村	上芳野村	古市場村	駒歸村	和田村	白鳥居村	才辻村	荷坂村	萩原村之内	池上村	比布村	山路村

桃俣村

都合貳万八千貳百三拾五石八斗四升三合
奥書右同

寛文四年四月五日

織田山城守殿

近江國犬上愛智神崎蒲生坂田淺井伊香七郡之内貳拾
八万石下野國安蘇郡之内壹万七千六百九拾三石四斗
餘武藏國荏原多摩兩郡之内貳千三百六石五斗餘都合
三拾万石
別紙 目錄在
事如三前々宛三行之訖全可三領知之
狀如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小右衛門

彦根侍從とのへ

目錄

近江國

犬上郡一圓 百拾九箇村

高六万四百六拾四石五斗九升六合

愛智郡之内 百四箇村

高六万千貳拾貳石六斗四升

神崎郡之内 五拾五箇村

高三万五百六拾七石四斗九升貳合

蒲生郡之内 四拾箇村

高壹万七千貳百三拾五石八斗九升三合

坂田郡之内 百三拾四箇村

高六万七千貳拾八石三斗六升六合

淺井郡之内 四拾壹箇村

高貳万四千五百五拾五石貳斗壹合

伊香郡之内 三拾九箇村

高壹万九千百貳拾五石八斗壹升貳合

下野國

安蘇郡之内 拾五箇村

高壹万七千六百九拾三石四斗壹合

武藏國

荏原郡之内 拾壹箇村

高千四百五拾九石六斗五升八合

多磨郡之内 八箇村

高八百四拾六石九斗四升壹合

都合三拾万石

奥書同前

寛文四年四月五日

井伊玄蕃頭殿

播磨國飾磨郡之内百七箇村五万四千九百貳拾七石餘
神崎郡之内七拾八箇村貳万七千九百八石餘印南郡之
内七拾五箇村貳万九千六百六拾四石餘加古郡内七拾
箇村貳万九千八百三拾壹石餘加茂郡之内拾四箇村七
千三百三拾五石餘揖保郡内兩村三百三拾三石餘都合
拾五万石 目録在別紙 事如三前々宛三行之訖全可領知之
狀如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者大橋長左衛門

姫路侍從とのへ

目録

播磨國

飾磨郡之内 百七箇村

白國村

小原村

大野村

一本松原田村

加納原田村

山脇村

相坂之内出作	八德山	高橋村	長野村	馬田村	板坂村	山崎村	行重村	經屋村	東小畑村	淺野村	田中村	田尻村	八反田村	中野村	鍛冶屋村	岩屋村	金竹村	曾坂村	砥堀村	辻川村
	中野村	須賀院村	櫻口村	土師村	近平村	西治村	久畑村	西小畑村	下瀬賀村	牛尾村	大門村	西光寺村	宮脇村	余田村	牧野村	重國村	栗橋村	橋爪村	北野村	
	福田村	鹽田相坂村	奥部村	岩部村	溝口村	波多村	戸坂之内出作	同村入	甘地村	神谷村	上瀬賀村	西川邊村	井口村	吉田村	長目村	下垣内村	山田村	鍛冶内村	砂川村	東川邊村

神爪村	平井口村	平津村	神吉村	別所村	國包村	中村	西山村	生石村	投松村	新村	大釜村	東中村	東飯坂村	西村	宮前村	矢田部村
魚橋村	井口新村	高畑村	下富木村	小林村	北宿村	原村	小野村	岸村	橫大路村	畑村	原村	西中村	助永村	中西村	大國村	香爐村
芝村	嶋村	六本松村	志方村	牛谷村	志吹村	宿村	升田村	辻村	成井村	上富木村	藤池村	比室村	西牧村	西飯坂村	天下原村	廣瀨村

高貳万七千九百八石六斗九升四合
 印南郡之内 七拾五箇村

賀古郡之内 七拾箇村

高貳万九千六百六拾四石貳斗貳升三合

藥栗村	神木村	見土呂村	西阿彌陀村	北脇村	魚崎村	加古川村	鹽市村	木村	宗佐村	川原村	蛸之草中村	岡村	國安村	八反田村	新野邊村	石守村	一色村
山角村	里口村	井口村	庄屋村	米田村	福泊村	友澤村	佐土村	砂部村	中津村	養田村	二又村	六分一村	二屋村	口里村	上下草谷村	北野村	森安村
池尻村	都染村	中筋村	西濱村	米田新村	新池村	的形村	稻屋村	東阿彌陀村	中野村	手末村	長砂村	上田村	宮北村	今福村	坂井村	山上村	池田村

賀茂郡之内 拾四箇村

高貳万九千八百三拾壹石四升

福富村	野寺村	古向村	北山村	高砂村	下西條村	安田村	中西條村	北在家村	古宮村	溝口村	新在家村	粟津村	高畑村	野添村	中村	新部村	來住寺
野大路村	古大路村	大澤村	東中野村	篠原村	寺家町村	刀田山村	本庄村	別府村	備後村	下村	水足村	土山村	平野村		下曾我井村	長町村	上曾我井村
細田村	經田村	天王寺村	小松原村	長田村	上西條村	西脇村	大野村	宮西村	荒井村	坂元村	寺家村	大辻村	舟町村		西脇村	西脇村	栗生村

瀧野村 光明寺村 島村

阿方村 瀧野之内出作岸村

高七千三百三拾五石五斗九升

揖保郡之内 貳箇村

家嶋村 室津村

高三百三拾三石壹斗三升二合

都合拾五万石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平式部大輔殿

卷第六

豊前國企救郡貳万七千七百八拾三石四斗餘田川郡三万六千三拾三石壹斗京都郡貳万貳千貳百貳拾貳石七斗餘筑城郡壹万五千五百五拾六石七斗餘仲津郡貳万七千六百四拾貳石三斗餘上毛郡之内貳万七百六拾壹石六斗餘都合拾五万石
別紙在 目録在 事任 寛永十一年八月四日先判之旨 宛 三 行 之 訖 全 可 領 知 之 狀 如 件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保吉右衛門

小倉侍從とのへ

目録

豊前國

企救郡 九拾五箇村

高貳万七千七百八拾三石四斗壹升四合

田川郡 六拾三箇村

高三万六千三拾三石壹斗貳升九合

京都郡 六拾六箇村

高貳万貳千貳百貳拾貳石七斗三升七合

筑城郡 三拾九箇村

高壹万五千五百五拾六石七斗九合

仲津郡 七拾四箇村

高貳万七千六百四拾貳石三斗四升五合

上毛郡之内 五拾四箇村

東上村 東下村 小祝村

土佐井村 緒方村 西友枝村

成恒村 廣瀬村 堀立村

黑土村 小石原村 岸井村

市丸村 安雲村 志利高村

矢方村	梶屋村	赤熊村
今市村	荒堀村	四郎丸村
河内村	鳥越村	大西村
野田村	青畑村	大河内村
才尾村	山内村	篠瀬村
下河内村	岩屋村	川底村
鳥井畑村	八屋村	鬼木村
藥師寺村	河原田村	清水町村
塔田村	吉木村	久松村
恒留村	小犬丸村 ^{1宅}	三樂村
沓川村	三毛門村	皆毛村
森久村	六郎村	永・久村
高田村	插間村	
高貳万七百六拾壹石六斗六升六合		
都合拾五万石		
奥書右同斷		

寛文四年四月五日

小笠原右近將監殿

大和國添下郡之内三拾壹箇村貳万四千九百三拾壹石餘上郡之内三拾貳箇村壹万四千六百三拾五石餘城下郡之内三拾箇村貳万三千八百五拾八石餘葛下郡之内三拾五箇村貳万三千貳百七拾壹石餘十市郡之内貳拾貳箇村壹万三千百九拾九石餘廣瀬郡之内貳拾箇村壹万貳千七百九拾貳石餘吉野郡之内四拾三箇村壹万八百九拾壹石餘宇智郡之内貳拾壹箇村九千四百八拾三石餘山邊郡之内九箇村六千六百七拾六石餘高市郡之内九箇村四千貳百三拾貳石餘平群郡之内拾貳箇村三千八百拾貳石餘河内國讚良郡之内四箇村千貳百五拾石都合拾五万石^{別紙}目録在事如^三前々^二宛^一行之^二訖

寛文四年四月五日御朱印

筆者渡邊七郎兵衛

郡山侍從とのへ

目録

大和國

添下之郡内 三拾壹箇村

柳町村	新木村	天井村
九條村	七條村	九條西京村
五條村	興福院村	本庄村

高田村 野飼戸村 觀音寺村

齋音寺村 中山村 押熊村

平松村之内 西大寺村之内 寶來村之内

長正寺村 本郷村之内 小和田村

山田村 矢田村 三雄村

上村 二名村 東田原村

番條村 外川村 城村

高貳万四千九百三拾壹石三斗三升七合

添上郡之内 三拾貳箇村

白土村 一枝村 神殿村

北庄村 長井村 山田村

藏庄村 森本村 池田村

大慈仙村 誓多林村 丹生村

北野村 的野村 峯寺村

室津村 桐山村 松尾村

邑地村 北山村 興原村

月瀬村 長引村 尾山村

石井村 須川村 平清水村

南庄村 北川村 法用村

島川村 桃香野村

高壹万四千六百三拾五石壹斗八升五合

城下郡之内 三拾箇村

結崎村 藏堂村 伊與戸村

大安寺村 坂手村 黑田村

但馬村 下長村 吐田村

小柳村 屏風村 井上村

小坂村 遠田村 八尾村

檜垣村 爲川村 平田村

鎌倉村 今里村 伴堂村

唐院村 保田村 唐子村

西代村 海知村之内 法貴寺村

八田村之内 岩見村 富本村

高貳万三千八百五拾八石三斗五合

葛下郡之内 三拾五箇村

大屋村 長尾村 新在家村

笠方家村 今市村 大橋村

當麻村 八川村 正田村

染野村 中川村 加守村

磯壁村 池田村 平野村

大畠村 關屋村 磯野村

市場村 今在家村 畠田村

勝根村 良福寺村 中枝村

五位堂村 鎌田村 上枝村

穴倉村 野口村 狐井村

大西村 上里村 下牧村

王寺村 畑村

高貳万三千貳百七拾壹石八斗五升三合

十市郡之内 貳拾貳箇村

下八釣村 百市村 竹田村

新田村 松本村 八條村

新賀村 葛本村 常盤村

石原田村 高家村 木原村

膳夫村 大垣村 安部田村

吉備村 太田市村 飯高村

内膳村 上品寺村 多村

北矢木村

高壹万三千百九拾九石貳斗八升八合

廣瀬郡之内 貳拾箇村

佐味田村 山坊村 藥井村

城内村 大輪田村 穴闇村

長樂村 河合村 池邊村

赤部村 齋音寺村 笠村

南江村 古寺村 澤村之内

箸尾村 寺戸村 中村

大野村 大垣内村

高壹万貳千七百九拾貳石六斗五升八合

吉野郡之内 四拾三箇村

今木村 下淵村 鉾立村

檜垣本村 大岩村 矢走村

中増村 馬佐村 畑屋村

東千俣村 西千俣村 杉谷村

新野村 河原屋村 木津村

大熊村 津風呂村 佐々羅村

色生村 北六田村 大野村

牧村 奈良井村 宮瀧村

入野村 田原村 瀧村

栗野村 中黒村 平野村

木津川村 萩原村 伊豆尾村

片岡村 山口村 大豆生村

谷尻村 日浦村 平尾村

鷺家口村 三尾村 麥谷村
三津村

高壹万八百九拾壹石六斗三升八合

宇智郡之内 貳拾壹箇村

坂部郷 見山村 二見村

上野村 釜窪村 大島村

六倉村 中村 岡村

大澤村 須惠五條村 上村

原村 山田村 今井村

近内村 居傳村 小和村

西河田村 東河田村 佐久傳村

高九千四百八拾三石七斗壹升

山邊郡之内 九箇村

永原村 指柳村 小田中村

田井庄村 井戸堂村 九條村

富堂村 千歲村 上總村

高六千六百七拾六石五升貳合

高市郡之内 九箇村

吉井村 小槻村 曲河村

土橋村 飛驒村 佐田村

今井村 醍醐村 五條野村

高四千貳百三拾貳石九斗九升貳合

平群郡之内 拾貳箇村

小平尾村 小瀬村 壹部村

萩原村 有里村 藤尾村

大門村 小倉寺村 鬼取村

西畑村 澳原寺村 乙田村之内

高三千八百拾貳石貳斗七升七合

河内國

讚良郡之内 四箇村

中垣内村 寺川村 野崎村

龍門村

高千貳百五拾石

小物成九百八拾九石三斗四升貳合高に入

但所々にて貳拾四石六斗三升依爲三分限帳之

過二籠高也

都合拾五万石

奥書右同

寛文四年四月五日

本多内記殿

出羽國村山郡之内百五拾貳ヶ村都合拾五万石目録在ニ別紙

事如前々宛之行之訖全可領知之狀如件
寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

山形侍從とのへ

目錄

出羽國

村山郡之内 百五拾貳箇村

猪澤村	觀音寺村	矢野目村	老森村	道滿村	貫津村	荒谷村	東山村	十文字村	燒山村	妙見寺村	山家村	村山郡之内
河原	關山	澤渡	天童	亂川	山家	萩野	高野	風間	關根	釋迦堂	双月	百五拾貳箇村
原	沼澤	野川	北目	九本	山口	奈良澤	山寺	大森	行澤	室澤	小白川	
方村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	

青柳村	千手堂村	宮町村	今宿村	小立村	諏方村	三川尻村	青田村	下櫻田村	山田村	半江村	門傳村	狸森村	長谷堂村	松原村	南館村	築澤村	淨明寺村	村木澤村	東根村
落合村	門傳村	長山村	漆山村	岩波村	前田村	大塚村	本木村	中櫻田村	成澤村	上野村	黑澤村	小白府村	新田村	津金澤村	吉原村	北作村	深澤村	若木村	万膳寺村
濱田村	芳賀村	七浦村	神尾村	八森村	平清水村	六樵村	反田村	上櫻田村	飯田村	高湯村	金谷村	柏藏村	前明石村	谷柏村	片谷地村	大町村	畑谷村	古館村	土生田村

青野村	院役村	小關村	中野村	澁江村	陳場村	榎澤村	下條村	蠟燭村	三日町村	東河原村	五日町村	鐵炮村	火行川原村	銀子町村	弓町村	專稱寺村	芹口村	狸野村	都合拾五万石
植野村	高揃村	江俣村	舟町村	門傳村	鮭洗村	飯塚村	十日町村	桶町村	檜物村	旅籠村	八日町村	小荷駄村	羽木村	皆川村	藥師村	柳町村	瀧野平村	大石田村之内	
大野目村	高木村	内表村	成安村	今塚村	志戸田村	沼木村	横村	七日町村	二日町村	地藏村	上町村	北肴町村	塗町村	小橋村	胡姓村	新町村	灰塚村	土坂草谷倉共	

右今度被ニ差上ニ郡村之帳面都合の通高及ニ上聞ニ所
 被ニ成下ニ御判也此儀兩人奉行依レ被ニ仰付ニ執達如レ件
 寛文四年四月五日

松平下總守殿

武藏國埼玉大里秩父足立幡羅男衾六郡之内七万三千
 九拾四石餘相模國御浦郡之内三万百五石餘上野國新
 田郡之内三千八百石都合八万石別紙在ニ事宛ニ行之ニ訖
 全可ニ領知ニ者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者飯高七兵衛

忍侍從とのへ

目録

武藏國

埼玉郡之内 三拾五箇村

谷村	持田村	四尾村
佐間村	下忍村	堤根村
堤根新田村	樋上村	袋村之内
渡柳村之内	屈巢村	崎玉村

小針村 下須戸村

眞名板村之内

下新田村 下新田村

上新村

須賀村 下中條村

酒巻村

犬塚村之内 荒木村之内

齊條村之内

和田村 池上村

小敷田村

中里村 大井村

上中條村之内

上中條村之内 大塚村

下川上村

上池守村 中池守村

下池守村

高三万四千百拾三石九斗八升九合

大里郡之内 三拾壹箇村

下久下村 久下村

佐谷田村

熊谷村 石原村

肥塚村

小泉村 村岡村

手嶋村

万吉村 樋口村

上忍田村

和田村 中忍田村

下忍田村

中曾根村 玉作村

屈戸村

江川下久下村 成澤村之内

御正村之内

沼黒村 向谷村

桐上村

高本村 小八林村

箕輪村

冑山村 吉所敷村

津田村

津田新村

高壹万六千貳百七拾六石六斗七升九合

秩父郡之内 貳拾七箇村

風布村 金尾村

岩田村

井戸村 堀切村

下田野村

皆野村 黒谷村

大野原村

三澤村 榎谷村

定峯村

山田村 横瀬村

大宮村

下影森村 上影森村

浦山村

上田野村 日野村

白久村

久那村 別所村

寺尾村

田村郷 蒔田村

小柱村

高壹万六千六百八拾五石四斗五升五合

足立郡之内 拾三箇村

川西村 箕田村 糖田村

寺谷村 市繩村 梯木村

千疋村 別府村 四條村

南百村 見田方村 伊原村之内

麥塚村

高八千六百七拾貳石六斗八升九合

幡羅郡之内 貳箇村

中奈良村之内 下奈良村

高千貳百七拾壹石壹斗貳升七合

男衾郡之内 九箇村

露梨村 小園村

白岩村 關山村

立原村 木持村

高千七拾四石八斗五升五合

甘粕村 內宿村 保田原村

相模國

御浦郡之内 八箇村

太田和村 武村

津久井村 長澤村

大矢部村 絹笠村

高三千百五石四斗六合

須輕谷村 野比村

上野國

新田郡之内 七箇村

矢島村 花香塚村

下田中村 高尾村

世良田村

高三千八百石

上田中村之内 中江田村

都合八万石

右今度被ニ差上ニ郡村之帳面相改及ニ上聞ニ所被ニ成下ニ御判也此儀兩人奉行依レ被ニ仰付ニ執達如レ件

寛文四年四月五日

阿部豊後守殿

相模國足柄上足柄下餘綾大住御浦五郡之内四万九千

九百七拾石餘伊豆國賀茂郡之内三千百三拾五石餘駿

河國駿河郡之内壹万三千三百拾四石餘下野國芳賀郡

之内貳万五千五百三拾三石餘常陸國新治郡之内五千石

武藏國豐島新庄兩郡之内貳千四拾五石餘都合九万五

千石別紙ニ目録在事宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋長右衛門

小田原侍從とのへ

目錄

相模國

足柄郡之内 八拾貳箇村

沼田村 三竹山村 岩原村

塚原村	炭燒所村	中沼村
狩野本江村	飯澤村	猿山村
關本村	雨坪村	福泉村
弘西寺村	狩野岩村	狩野一色村
矢倉澤村	怒田村	内田村
平山村	谷箇村	和田河原村
竹松村	儘下村	千津島村
岡野村	班目村	北市村
吉田島村	牛島村	宮臺村
延澤村	圓通寺村	中根村
金井島村	宮城野村	仙石原村
柏山村	曾比村	鬼柳村
西大井村	下大井村	上大井村
金手村	松田惣領村	松田鹿子村
向原村	金子村	神山村
大澤村	上曾我村	高尾村
山田村	柳村	篠窪村
柄窪村	田中村	久所村
藤澤村	半分方村	比奈窪村
雜色村	松本村	岩倉村

境原村	境村	境別所村
遠藤村	北田村	井口村
菖蒲村	柳川村	三廻部村
八澤村	萱沼村	彌勒寺村
虫澤村	中山村	大寺村
土佐原村	宇津茂村	川村岸村
山北村		
高貳万三千三百六拾七石九升三合		
足柄下郡之内		
六拾六箇村		
小田原府内村	早川村	石橋村
米神村	根府川村	江浦村
岩村	眞鶴村	荒井村
土肥吉濱村	土肥門川村	土肥堀内村 ^{イ田}
土肥入谷村	板橋村	風祭村
入生田村	湯本村	後河原村
大平臺村	底倉村	萩窪村
久野村	多古村	井細田村
穴部村	府川村	北窪村
中島村	町田村	今井村
山王原村	網一色村	酒勾村

御浦郡之内 貳箇村

上宮田村 菊名村

高六百九拾七石六斗六升九合

伊豆國

賀茂郡之内 拾箇村

熱海村 上多賀村

下多賀和田村 初島村

宇佐美村 湯川村

鎌田村

高三千百三拾五石七斗五合

駿河國

駿河郡之内 七拾六箇村

竹下村 所領村

生土村 藤曲村

中島村 菅沼村

湯船村 上野村

大御神村 須走村

上小林村 下小林村

上古城村 一色村

棚頭村 下古城村

下多賀中村

綱代村

松原村

小山村

柳島村

吉久保村

中日向村

柴怒田村

古澤村

用澤村

大胡田村

鳴宮村 新屋村 中里村

下堀村 別堀村 高田村

矢作村 千代村 長塚村

東大友村 小八幡村 國府津村

田島村 曾我別所村 曾我原村

曾我谷津村 曾我岸村 前川村

羽尾村 中村原 上町村

小船村 小竹村 飯泉村

成田村 桑原村 西大友村

小臺村 蓮正寺村 飯田岡村

飯田新屋村 中曾根村 堀内村

高貳万千八百五十三石四斗四升貳合

餘綾郡之内 四箇村

川勾村 出繩村 寺坂村

中里村

高七百九拾四石貳斗三升六合

大住郡之内 六箇村

南金目村 公所村 廣川村

千須屋村 上吉澤村 下吉澤村

高三千貳百五拾七石八斗七合

清龍寺村	中丸村	大堰村
清後村	山尻村	塚原村
山尾田村	六日市場村	北久原村
仁杉村	茱萸澤村	萩原村
田中村	二枚橋村	新橋村
中畑村	永塚村	川島田村
杉名澤 ^{一名} 村	御殿場村	新芝村
桑木 ^{一名} 村	深澤村	沼田村
二子村	中山村	中清水村
萩蕪村	相坂村	陣場村
印野村	板妻村	須山村
下和田村	今里村	神山村
岩波村	深良村	久根村
公文名村	稻荷村	茶畑村
平松村	麥塚村	伊豆島田村
二屋新田村	水窪村	上土狩村
下土狩 ^{一名} 村	竹原村	佐野村
石脇 ^{一名} 村		

高壹万三千三百拾四石八斗壹升壹合

下野國

芳賀郡之内 貳拾壹箇村

眞岡村大町 同村^{田町} 西郷村

大田和村 飯貝^{田町}村 中江村

東郷村 沼和久村 横田村

物井村 桑野川村 高田村

大島村 小林村 高岡村

山本村 君島村 根本村

東田井村 塙村 中村

高貳万五千五百三拾三石三斗六升九合

常陸國

新治郡之内 七箇村

柿岡村 八重長堀^{一名}村 上倉村

小屋村 太田村 中戸村

大増村

高五千石

武藏國

豐島郡之内

土與田村

高六百貳拾三石八斗四升壹合

新庄郡之内 三箇村

小樽村 下保谷村 上保谷村

高千四百貳拾貳石貳升七合

都合九万五千石

奥書右同

寛文四年四月五日

稻葉美濃守殿

河内國石川郡之内貳拾三箇村壹万四千百七拾三石餘
高安郡之内拾三箇村四千七拾三石餘大縣郡之内拾壹
箇村三千六百貳拾八石餘古市郡之内兩村千九百四拾
九石餘高安郡之内三箇村千八百五拾壹石餘志紀郡田
井中村之内四百石餘讚良郡瀧間村之内四拾五石餘攝
津國島下郡之内七箇村四千五百拾貳石餘島上郡之内
六箇村千九百六十五石餘都合三万貳千六百石

目錄在別紙

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部傳右衛門

牧野侍從とのへ

目錄

河内國

石川郡之内 貳拾三箇村

新家村 喜志村

新堂村 富田林村

板持村 山中田村

南大友村 寛弘寺村之内

森屋村 川野邊村

南別井村 北別井村

大ヶ崎村 一須賀村

春日村 山田村

高壹万四千百七拾三石四斗九升三合

高安郡之内 拾三箇村

樂音寺村 大竹村之内

神立村 千塚村

山畑村 服部川村

黒谷村之内 教興寺村之内

恩知村

高四千七拾三石八斗五升貳合

大懸郡之内 拾壹箇村

法善寺村 神宮寺村

平野村

大縣村

大平寺村之内

安堂村

高井田村

青谷村

鷹多尾畑村之内

本堂村

峠村之内

高三千六百貳拾八石九斗八升

古市郡之内 貳箇村

譽田村

古市村

高千九百四拾九石壹斗九升四合

安宿郡之内 三箇村

國分村之内

片山村

圓明村

高千八百五拾壹石四斗貳升八合

志紀郡之内

田井中村之内

高四百石五斗貳升六合

讃良郡之内

瀧間村之内

高四拾五石貳斗壹升四合

攝津國

島下郡之内 七箇村

安威村之内

耳原村

福井村之内

郡山入小物成高村

宿久庄村之内

上中條村

入小物成高

茨木村

高四千五百拾貳石九升

島上郡之内 六箇村

原村

萩谷村

靈仙村之内

服部村

東大寺村之内

廣瀬村之内

高千九百六拾五石貳斗貳升三合

外に百七石五斗小物成高之引替地方にて被

下故延也本高に不載之

都合三万貳千六百石

奥書右同

寛文四年四月五日

牧野佐渡守殿

卷第七

筑後國御井御原生葉竹野山東五郡九万四千貳百九拾八石餘三潞上妻下妻三郡之内拾壹万五千六百九拾八石餘都合貳拾壹万石別紙目録在事如三前々宛ニ行之ニ訖全可ニ領知一者也仍如レ件

寛文四年四月五日御判

筆者久保五兵衛

目錄

筑後國

御井郡 七拾壹箇村

高三万六千六百六拾五石壹斗貳升

御原郡 三拾五箇村

高貳万五百八拾七石四斗三升

生葉郡 五拾四箇村

高壹万貳千六百七拾五石八斗三升七合

竹野郡 八拾九箇村

高壹万貳千三百九拾七石八斗壹升貳合

山本郡 三拾箇村

高壹万貳千四百七拾四石壹斗四升五合

三潞郡之内 百貳拾八箇村

京隈村 長門石村 大石村

庄島村 西久留米 津福村

大隈村 掛赤村 小島村

大島村 安武本村 安武古町

住吉村 中島村 荆津村

大善寺村 夜明村 藤吉村

黒田村 白郷村 上町村

下荒木村 上荒木村 黒土村

今村 早津崎村 高三潞村

小犬塚村 田川村 大犬塚村

生津村 岩古賀村 壹町原村

原田村 蘆塚村 下田村

濱村 内野村 草場村

北清松村 南清松村 福光村

大依村 六町原村 篠淵村

前牟田村 横溝村 上白垣村

中八院村 城島村 檜林村

江上古町 江上々村 江上本村

原中牟田村 高津村 江島村

瀉島村 青木島村 四郎九村

上青木村 下青木村 鐘江村

下林村 中古賀村 下白垣村

下八院村 諸富村 本木室村

北酒見村 南酒見村 上巻村

江原村 北古賀村 中牟田村

上商人村	下商人村	牟田口村
下木佐木村	鬼古賀村	兼木村
田口村	大坂井村	小坂井村
榎津	矢加部村	定覺村
立石村	井手村	中牟田村
吉祥村	本藺村	蒲生村
野口村	中野村	筏溝村
荒牟田村	小入村	中村
奥牟田村	大藪村	田中村
高橋村	侍島村	蛭池村
西古賀村	北牟田村	鷲寺村
寛元寺村	久保村	西牟田本村
西牟田町	江分田村	流村
大坪村	福間村	土甲呂村
土甲呂町	大角村	上八院村
八町牟田村	中木室村	繪下古賀村
上木佐木村	下古賀村	金納村
荻島村	大角町	

上妻郡之内 九拾三箇村
 高七万五千三百八拾九石三斗四升壹合

藤田村	一條村	知徳村
當條村	無禮村	大田村
吉里村	川瀬村	長徳村
古賀村	太原村	高間村
清樂村	長延村	久泉村
扇島村	増永村	六田村
吉常村	甘木村	内田村
長野村	北川内村	椿原村
釋形村	鹿子尾村	矢部村
大淵村	木屋村	今分村
豆生野村	中籠村	本分村
田本村	湯邊田村	田形村
柳島村	津江村	祈禱院村
忠見村	山内村	大籠村
井延村	黒土村	本籠村
平田村	納楚村	馬場村
豐福村	宅間田村	吉田村
岩崎村	川合村	平田村
國武村	稻富村	立野村
福島村	大島村	福島町

イ津

高塚村 宮野村 酒井田村

柳瀬村 矢原村 光賀村

緒玉村 新庄村 前古賀村

鵜池村 蒲原村 龜甲村

室岡村 野村 野町村

前津村 徳久村 秋松村

羽犬塚村 藤島村 和泉村

庄島村 若菜村 長崎村

淵上村 富久村 四ヶ所村

江口村 高江村 富重村

久富村 藏數村 坂東寺村

高貳万五千百六拾九石四斗五升貳合

下妻郡之内 貳拾五箇村

犬馬場村 溝口村 長田村

久惠村 新溝村 鶴田村

尾島村 志村 久郎原村

今寺村 下妻村 富安村

馬間田村 中牟田村 井上村

北牟田村 中島村 古島村

折地村 中折地村 水田村

常持村 北島村 野町村

下牟田村

高壹万五千百四拾石八斗六升三合

都合貳拾壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

有馬松千代殿

越後國石船郡三百四拾貳箇村五万三千百九拾五石餘

蒲原郡之内五百四箇村八万五千七百三拾五石餘三島

郡之内六拾貳箇村壹万千六拾八石餘都合拾五万石

別紙在ニ事如ニ前々一宛ニ行之ニ訖全可レ令ニ領知一者也仍

如レ件

寛文四年四月五日御判 筆者森 新兵衛

松平大和守とのへ

目録

越後國

石船郡一圓 三百四拾貳箇村

高五万三千百九拾五石九斗七升三合

蒲原郡之内 五百四箇村

飯角村	赤谷村	熱田坂村	黒股村	小長谷村	坪穴村	藏王村	黒川町	横道村	古館村	平木田村	大出村	宮瀬村	築地村	笹口濱村	乙村	地藏堂村	桃崎村
關澤村	羽黒村	坂井村	持倉村	鉄江村	須卷村	切田村	館村	江端村	高野村	伊徳寺村	菅田村	高畑村	高田村	中村	留岡村	小袋村	島桃崎村
小荒川村	半山村	鼓岡村	夏井村	大長谷村	荒澤村	榎谷村	鹽澤村	東牧寺村	土作村	十二天村	山屋村	地本村	赤川村	村松村	荒井濱村	新光寺村	相子村

三日市村	高關村	下羽津村	宮古木村	上板山村	上楠川村	藏光村	小出村	荒澤村	横山村	麓村	黒岩村	白中條村	今泉村	茗荷谷村	横岡村	北中山村	小國谷村	新館村	中條町
江口村	岡田村	西姫田村	大友村	下板山村	下楠川村	下三光村	下石川村	熊出村	中山村	瀧村	中妻村	小松村	川尻村	新保小路村	箱岩村	貝塚村	貝屋村	船戸村	柴橋村
上内竹村	早道場村	東姫田村	上羽津村	小戸村	田貝村	上三光村	上石川村	寺内村	溝足村	菅谷村	宮内村	新屋敷村	押廻村	館小路村	山田村	浦村	坂町村	長橋村	大塚村

下内竹村 折居村 下一分湯村 山倉村 飯塚村 須走り村 出湯村 小中山村 大室村 牧島村 中島村 小島村 安田村 高山村 六野瀬村 尾白村 赤海村 太田村 大谷村 切畑村

荒川村 女堂村 沖岡村 船居村 赤水村 今板村 宮下村 田中村 堀越村 糟島村 桑山村 新保村 草水村 猿和田村 川瀬村 淨瀬村 小栗山村 大須江村

中山村 上一分湯村 高關村 榎船戸村 天神堂村 加丁村 山寺村 七浦村 七石村 中野目村 六日野村 寺社村 一本杉村 窪堀村 笹堀村 留堀村 吉原村 馬下村 小山田村 田屋村

菅出村 不動堂村 川内谷村 見殿村 仙見谷村 木越村 三本木村 布目村 牧花村 水曾根村 大關村 土保村 石藏村 今泉村 乙田村 高畑村 菅田村 十二天村 横道村

大藏村 土淵村 横渡村 來光寺村 夏針村 寺澤村 羽江屋村 千唐仁村 新奥屋村 深川村 小口村 二柳村 町屋村 舟越村 飛岡村 赤川村 地本村 山屋村 古館村 江端村

柄澤村 松野村 暮坪村 杉川村 熊野澤村 五泉村 安養寺村 浦澤村 福岡村 金屋村 山崎村 下能代村 千原村 小升村 筑地村 宮瀬村 大出村 平木田村 高野村 東牧寺村

館村	須卷村	持倉村	鞆岡村	小荒川村	新館村	本郷新田村	福田新田村	館野越新田村	川内新田村	山王新田村	鷹巣新田村	山田村	新保小路村	今泉新田村	古川新田村	向中條村	宮内村	菅谷村	溝足村
藏王村	歙江村	夏井村	羽黒村	中條町	船戸村	江上新田村	草野新田村	野中新田村	近江新田村	八幡新田村	佐々木新田村	龍尾新田村	館野小路村	吉田新田村	草川新田村	小松新田村	麓村	横山村	荒澤村
坪穴村	大長谷村	酒井村	關澤村	柴橋村	長橋村	西條新田村	小丹戸新田村	並槻新田村	加賀新田村	小地屋新田村	栗島村	茗荷谷村	今泉村	川尻村	押廻村	中妻村	瀧松村	中山村	小出村

下石川村	中倉新田村	上楠川村	大友村	東姫田村	岡田村	下内竹村	中山村	上壹分潟村	熊堂新田村	中曾根新田村	榎舟戸村	天神堂村	赤水村	石塚村	小山田村	石倉村	山崎村	三條村	古新田村
上石川村	下三光村	上板山村	下羽津村	高關村	早道場村	江口村	折居村	下壹分潟村	瀧澤新田村	山倉村	飯塚村	須走村	蒔田村	八幡新田村	土源村	蒔田村	押切村	古新田村	田島村
藏光村	上三光村	下板山村	西姫田村	石喜新田村	上内竹村	荒川村	女堂村	村岡村	高關村	沖居村	船居村	横山新田村	福岡新田村	尾白村	二柳村	笹岡村	金屋村	三條出作村	古新田村

三條出作之内

田嶋之内

長右衛門村	西大崎村	古新田村	上野原新田村	西方村	谷内村	古新田村	古新田村	小牧村	古新田村	小吉村	古新田村	萱場村	古新田村	市右衛門新田村	柚木村	七郎右衛門新田村	關崎村
坂井村	古新田村	籠新田村	柳澤村	鶴田村	入藏村	新町村	佐渡村	古新田村	兒木村	長場新田村	月潟村	古新田村	船越村	小高村	古新田村	灰方村	古新田村
三竹原新田村	中新田村	東大崎村	三柳村	牛島村	四日町村	石上村	佐渡古新田村	中川村	古新田村	大別當村	月潟古新田村	加坪川村	久右衛門新田村	古新田村	太耶左衛門新田村	古新田村	二階堂村
古新田村	三郎左衛門新田村	三王淵新田村	古新田村	須比村	古新田村	古新田村	古新田村	新田村	木場村	古新田村	板井村	古新田村	打越村	木滑村	古新田村	古新田村	國見村
又左衛門新田村	九右衛門新田村	大船戸村	眞木村	古新田村	姥島新田村	新田村	長所村	釣寄村	古新田村	龜谷新田村	古新田村	古新田村	古新田村	古新田村	古新田村	今井村	古新田村
小中川村	長渡新田村	針曾根村	古新田村	栗林村	福島村	羽黒村	古新田村	古新田村	黒鳥村	小左衛門新田村	白根村	古新田村	古新田村	井隨村	古新田村	古新田村	鷺村

古新田村

源藏新田村

大曲村

黒坂村

古新田村

五分一村

古新田村

八王寺村

古新田村

古新田村

三瀬谷村

有信村

道金村

古新田村

柳山村

上桐村

古新田村

九右衛門新田村

古新田村

杉柳新田村

杉名村

碓田村

求草村

古新田村

小池村

古新田村

横田村

下桐村

古新田村

高内村

古新田村

熊森村

古新田村

古新田村

明谷村

古新田村

笈島村

古新田村

砂子塚村

田頭村

古新田村

夏戸村

古新田村

野中才村

地藏堂町

古新田村

木島村

木島新田村

古新田村

泉新田村

泉古新田村

木嶋古新田村

志戸橋村

古新田村

關中島村

國上村

古新田村

年友村

古新田村

吉村

大地村

古新田村

渡部村

古新田村

戸崎新田村

引岡村

古新田村

眞木山村

古新田村

古新田村

間瀬村

野積村

牧鼻村

溝村

溝古新田村

寺泊町

大和田村

江本村

喜右衛門新田村

佐善新田村

太右衛門新田村

山田村

古新田村

万善寺村

茨曾根村

東萱場村

次郎丸村

大川津村

古新田村

北曾根村

高八万五千七百三拾五石貳斗三升壹合

三島郡之内

六拾貳箇村

入輕井村

古新田村

矢田村

根小屋村

北野村

北野新田村

竹森村

鶴曾根村

町輕井村

古新田村

小中條村

小豆曾根村

五人新田村

庄右衛門新田村

長左衛門新田村

島崎村之内

古新田村之内

高壹万六拾八石七斗九升六合

都合拾五万石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平大和守殿

卷第八

下野國河内鹽屋芳賀都賀四郡之内都合拾壹萬石
別紙事如前々宛行之訖全可令領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者久保五兵衛

奥平美作守とのへ

目錄

下野國

河内郡之内 百四箇村

上小倉村	下小倉村	蘆沼村
下橋村	白澤村	岡本村
上岡本村	下岡本村	上平出村
下平出村	石井村	上桑島村
下桑島村	東形部村	西形部村
平塚村	東木代村	西木代村
西汗村	東汗村	上文梓村
西蓼沼村	東蓼沼村	宮山田村
冬室村	今里村	上田原村
中里村之内	下田原村	岩本村
立伏村	加用村	横山村
長岡村	上川俣村	下川俣村
岩曾村	山本村	大曾村
塙田村	竹林村	今泉村
峯村	平松村	宿江村
築瀬村	西原村	東川田村
下栗村	上横田村	屋板村
東横田村	東谷村	中島村
御田村	反町村	羽牛田村
長島村	茂原村	下横田村

石田村	神主村	飯山村
小池村	篠井村	大細村
徳次郎村	上横倉村	下横倉村
上金井村	下金井村	野澤村
戸祭村	古賀志村	新里村
飯田村	荒針村	駒生村
砥上村	鶴田村	欠下村
鷺谷村	西川田村	幕田村
針谷村	江曾島村	大横田村
猪倉村	喜和田島村	石那田村
田野村	福岡村	田下村
岩原村	高德村	金井村
下神主村	大山村	築村
多切村	成田村	木川田村之内
下文挿村	茂原村	

高六萬三千九百九拾三石貳斗四升五合

鹽屋郡之内 六拾五箇村

幸岡村	楚理町村	境林村
館野川村	高鹽村	玉田村
田所村	熊木村	倉欠村

片俣村	喜佐見村	鹽田村
長井村	立足村	山田村
土屋村	平野村	氏家村
馬場村	下鹽原村	中鹽村
上鹽原村	湯本鹽原村	藤原村
大原村	玉生村	東房村
道下村	原萩の目村	金枝村
泉村	飯岡村	佐貫村
上澤村	山田村	風見村
大宮村	上平村	大窪村
押上村	肘内村	櫻野村
松山村	挿間田村	氏家新田村
柿木津村	大谷村	關俣村
西高谷村	前高谷村	石末村
上阿久津村	中阿久津村	寶積寺村
寺渡戸村	太田村	平田村
土室村	柏崎村	桑窪村
栗嶋村	高根澤村	高德村
船生村	寺島村	

高貳萬三千三百五拾三石七斗三升三合

芳賀郡之内 三拾四箇村

板戸村 荻沼村 荻沼新村 竹下村

野高谷村 道場宿村 氷室村

鑑山村 籠谷村 東水沼村

西水沼村 長島村 與能村

西高橋村 下延生村 東高間木村

下高根澤村之内 龜山村 伊勢崎村

下高間木村 西高間木村 柳林村

大和田村 長田村 下大沼村

勝爪村 上大沼村 寺分村

加倉村 糟田村 砂原村之内

寺内村 若旅村

笹原田村

高壹万五千九拾四石四斗七升八合

都賀郡之内 貳拾箇村

上兒山村 下兒山村 安塚村

上田村 小林村 中泉村

池森村 上石川村 下石川村

茂呂村 千度村 白桑留村

枋窪村 深津村 上石橋村

下石橋村 前原村 上大領村

中大領村 下大領村

高七千五百五拾八石五斗四升四合

都合拾壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

奥平美作守殿

伊豫國温泉郡三拾五箇村貳万千八百拾五石餘風早郡
七拾八箇村壹万六千五百拾貳石餘久米郡三拾壹箇邑
壹万五千七百九拾石餘野間郡貳拾九箇村壹万四千九
百拾五石餘和氣郡貳拾箇村壹万四千貳拾五石餘浮穴
郡之内四拾三箇村貳万貳千五百貳拾石伊豫郡之内拾九
箇村壹万三千五百七拾壹石周敷郡之内貳拾四箇村壹
万貳千三拾石餘越知郡之内貳拾三箇村八千三百三拾貳
石餘都合拾五万石^{別紙}事如^{目録}前々宛^三行之^一訖全可^レ令^三領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印

松平隠岐守とのへ

目錄

伊豫國

溫泉郡一圓 三拾五箇村

高貳万千八百拾五石九斗五升四合

風早郡一圓 七拾八箇村

高壹万六千五百拾貳石五升六合

久米郡一圓 三拾壹箇村

高壹万五千七百九拾石貳斗五升七合

野間郡一圓 貳拾九箇村

高壹万四千九百拾五石八斗三升八合

和氣郡一圓 貳拾貳箇村

高壹万四千貳百四拾六石壹斗貳升六合

桑村郡一圓 貳拾六箇村

高壹万三千貳拾五石壹斗八升七合

浮穴郡之内 四拾三箇村

津吉村 淨瑠璃寺村 上野村

町村 西野村 東方村

小村 上村 下林村

上林村 井内村 吉久村

久谷村 窪野村 井門村

高井村 田窪村 森松村

土居村 野田村 牛淵村

中野村 見奈良原村 大川村

黒岩村 日浦村 柳井川村

西谷村 澤渡村 仕出下村

東川村 七鳥村 楠村

黒藤川村 町村 入野村

野尻村 東明神村 菅生村

畑川村 北番村 有枝村

西明神村

高貳万貳千貳拾石三斗四升壹合

内三拾壹石七升 高井河原 從二兩村一入作也
内七百六拾八石三斗四合 志津川

伊豫郡之内 拾九箇村

松前村 北江鎗村 南江鎗村

高柳村 庄内村 黒田村

黒田大溝村 北川原村 垣生村

余戸村 大間村 徳丸村

神崎出作村 大溝村 北神崎村

一坪村 保免村 中川原村

釣吉村之内

高壹万三千五百七拾壹石七斗七合

周敷郡之内 貳拾四箇村

長野村 志川村

高松村

明川山同谷村

池田村

湯屋口村

石經村

願連寺村

今井村

久妙寺村

三津屋村

關屋山村

鞍瀬山村

白坂山村

楠窪村

來見村

千原村

滑川村

河根村

田野村

赤尾村

安井村

吉田村之内

寺尾村

高壹万貳百三拾石九升八合

越智郡之内 貳拾三箇村

櫻井村

長澤村

旦村

登畠村

宮崎村

朝倉下村

朝倉上村之内

岩城村

生名村

井口村

盛村

甘崎村

瀬戸村

肥海村

宮浦村

野々江村

口宗村

明日村

大見村

浦戸村

宗方村

大下村 岡村

高八千百三拾貳石四斗三升六合

都合拾五万石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平隠岐守殿

出羽國田川郡之内貳百五拾七箇村八万九千五百八拾石九斗餘飽海郡之内百八拾八箇村五万四千四百八拾貳石六斗餘都合拾四万石餘
目錄在別紙事如前々宛行之訖
全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者建部傳右衛門

酒井左衛門尉とのへ

目錄

出羽國

田川郡之内 貳百五拾七箇村

矢馳村

山田村

境與野村

大淀川村

長沼村

諏橋村

白山林村	興屋村	藤澤村	加茂村	金澤村	油戸村
上清水村	下清水村	田川湯村	今泉村	高坂村	青龍寺村
田川村	山谷村	少連寺村	赤坂村	瀧澤村	山谷村
長瀧村	砂谷村	關根村	金谷村	中臼井村	谷定村
東目村	菅野代村	坂野下村	湯殿村	板井川村	大白井村
溫海川村	木野俣村	越澤村	西荒屋村	關口村	中村
關川村	小國村	大谷村	上山添村	鳥飼島村	川口村
廣濱村	水澤村	水澤京田村	高橋村	漆原村	上中島村
上京田村	大戸村	金山村	下中島村	折橋村	小眞木村
荒澤村	山口村	竹野浦村	下外内島村	民田村	藤原村
草井谷村	山良村	中澤村	大部京田村	信州村	上外内島村
片貝村	三瀬村	中山村	八日町村	海老島村	片貝村
蕨野村	堅苔澤村	戸澤村	柳田村	新町村	島村
實俣村	小菅野代村	濱五十川村	東荒屋村	興屋村	西岩本村
一霞村	小岩川村	溫海村	藤掛村	下山添村	上桂俣村
大岩川村	小波渡村	上小中村	下桂俣村	勝福寺村	川村
小鍋村	谷地楯村	下興野村	家老林村	伊勢横内村	八興屋村
辻興屋村	芝津村	鼠關村	苗津村	齋藤川原村	熊出村
馬町村	長崎村	黒森村	大針村	本江村	小綱木村
西沼村	茅原村	道地村	砂川村	大鳥村	川上村

行澤村	仙納村	荒澤村	少尺村	藤島村	落野目村
松澤村	上名川村	下名川村	小中島村	橫山村	須走村
大平村	倉澤村	大綱村	下七曲村	上七曲村	關根村
下田澤村	上田澤村	越中山村	四興野村	無音村	西荒屋村
田麥俣村	黑川村	東岩本村	越後京田村	松葉村	古郡村
松根村	寶谷村	馬渡村	野田目村	押口村	細屋村
櫛木代村	田代村	高寺村	平經田村	地安村	中野經田村
後田村	畫田村	中島村	丹波興野村	齋藤興野村	西京田村
西川原村	東川原村	松尾村	林崎村	阿部興野村	輪田村
赤川村	三間在家村	布目村	小經田村	荒井京田村	學岸寺村
小淀川村	寺田村	番田村	小京田村	下大寶寺村	茅原村
井岡村	山屋村	大半田村	文下山村	本江村	湯野澤村
助川村	砂塚村	提野村	青山村	中經田村	西興野村
橫內村	竹原田村	加藤村	猪子村	新瀉村	高田麥村
荒屋敷村	上藤島村	東渡前村	狩川村	南野村	境興野村
西渡前村	三橋村	狩矢野目村	添川村	川代村	眞木坂村
鎌田村	仙道村	西荒川村	野荒町村	外野村	國見村
東荒川村	野田村	富澤村	中里村	町屋村	今森目村
柳久瀬村	荒俣村	幕內村	川行村	谷地興野村	田屋村
平形村	橫川村	菱沼村	下中野目村	清川村	立谷澤村
			東興野村	大中島村	柏谷澤村

館廻南口村 同興野村 同町村
 榎木村 門田村 新堀村
 三澤村 添津村
 高八万九千五百八拾八石九斗五升^{イ合}
 飽海郡之内 百八拾八箇村

大服部村 鵜沼村 北福升村
 南福升村 大井村 小服部村
 岩川村 上長橋村 下長橋村
 上小松村 大桶村 水上村
 下小松村 升川村 北目村
 鷺町村 落伏村 丸子村
 南目村 下當村 山崎村
 鹿野澤村 大淵村 薇岡村
 平津村 杉澤村 薇岡上寺村
 五分市村 大宮田村 上楸嶋村
 下楸嶋村 上大内目村 三川村
 石辻村 向宮田村 下宮田村
 下江知村 上江知村 宮田村
 十日町村 吉出村 八日町村
 上野澤村 下野澤村 漆曾根村

京田村 岡田村 尻引村
 六日町村 外野村 興休村
 中嶋村 今泉村 吹浦村
 宮野内村 小湊村 鳥崎村
 瀧野浦村 女鹿村 北俣村
 升田村 中野俣村 田澤村
 三栖屋村 坂本村 山谷村
 檜橋村 山楯村 山楯興野村
 三野宮村 中野目村 郡山村
 堀野内村 泉興野村 櫻林村
 櫻林興野村 石橋村 本川村
 天神堂村 飛鳥村 砂越村
 小牧村 牧曾根村 中野曾根村
 上興屋村 上漆曾根村 町屋村
 下漆曾根村 新青渡村 布目村
 圓能寺村 古青渡村 曾根田村
 久保田村 關村 中興野村
 境興野村 北境村 寺内村
 大石村 金生澤村 南興野村
 横代村 手藏田村 熊野田村

萩嶋村	上小堤村	下小堤村
福嶋村	手藏田興野村	熊野田興野村
勝俣關村	土崎村	大町村
鵜渡川原	濱町	內町村
酒田町	米屋町	濱島
濱田	北仁田村	芹田村
橋本村	下福山村	常禪寺村
小泉村	觀音寺村	麓村
塚淵村	上星川村	中星川村
下星川村	三橋村	大窪村
荻屋村	楯內村	中川村
明成寺村	若王寺村	宮形村
大島田村	星川興野村	興屋島田村
古川村	政所村	上野曾根村
鶴田村	越橋村	北吉田村
中吉田村	勝龍寺村	門田村
南吉田村	地藏寺村	市坪村
上寺田村	上荒田目村	下荒田目村
南平澤村	北平澤村	門野町村
市條村	寶連寺村	荒田目村

木之內村	福升村	二柳村
本楯村	南青澤村	北青澤村
岡島田村	大藏村	下安田村
前川村	安田興野村	上安田村
新出村	下黒川村	上黒川村
赤剝村	泥澤村	草津村
下大内目村	升田村	上福山村
谷地田片町	橋本村	
高五万四百八拾貳石六斗九升九合		
都合拾四万七拾壹石六斗四合		

奥書同前

寛文四年四月五日

酒井左衛門尉殿

卷第九

若狹國一圓八万五千四百六拾石餘越前國敦賀郡貳万
 千九拾六石餘近江國高島郡之內七千壹石餘下野國安
 蘇郡之內五千四百八拾貳石餘安房國平群郡之內四千
 五百拾七石餘都合拾貳万三千五百五拾八石餘

別紙在二

事如三前々宛ニ行之訖全可令領知者也仍如件

寛文四年四月五日御判 筆者建部傳右衛門

酒井修理大夫とのへ

目録

若狹國一圓

大飯郡 七拾四箇村

高壹万九千八百七拾石六斗六升六合

遠敷郡 百拾壹箇村

高四万貳千四百六拾壹石四斗壹升貳合

三方郡 五拾六箇村

高貳万三千百貳拾八石壹升

越前國

敦賀郡 五拾九箇村

高貳万千百九拾六石八斗四升壹合

内百石諸鶴大夫拜三領之一

近江國

高島郡之内 拾五箇村

梅原村之内 三谷村

構平崎村 木津村之内 伊井村 米内村

下野國

安蘇郡之内 五箇村

上粕尾村 中粕尾村 下粕尾村

上永野村 下永野村

高五千四百八拾貳石四斗六升八合

安房國

平群郡之内 拾九箇村

勝山村 龍島村 佐久間下村

下佐久間村 檢儀谷原村 式部村

吉井村 米澤村 犬掛村

上瀧田村 宮谷村 合戸村

不入斗村 小浦村 竹内村

市部村 久枝村 岩井袋村

増間村之内

高七千三百貳石七斗貳升七合

内貳千七百八拾五石壹斗九升五合

爲ニ御用地ニ被レ召ニ上替地ニ以ニ物成積ニ被下
故延也本高に不レ載レ之

都合拾貳万三千五百五拾八石壹斗五升九合

與書同前

寛文四年四月五日

酒井修理大夫殿

陸奥國北郡三戸二戸九戸鹿角閑伊岩手志和稗貫郡和

賀所々都合拾万石^{別紙}目録在ニ事任ニ寛永十一年八月四日

先判之旨ニ宛ニ行之ニ訖全可レ令ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

南部山城守とのへ

目録

陸奥國

北郡 五拾箇村

百石村 高屋敷村 下田村

吉田村 鶴食村 犬落瀬村

大坂村 傳法寺村 米田村

三戸 六拾七箇村

高四千七百八拾四石壹斗四升七合

瀧澤村 大不動村 切田村

澤田村 奥瀬村 三本木村

洞内村 鳥屋部村 七戸村

新館村 大浦村 花松村

馬洗場村 板橋村 天魔館村

野邊地村 馬門村 横濱村

倉内村 平沼村 鷹架村

尾駸村 中澤村 奥内村

田名部村 田屋村 目名村

砂子俣村 蒲澤村 安渡村

城澤村 川内村 脇澤村

奥戸村 大間村 大畑村

河代村 志利屋村 志利勞村

猿森村 白糠村

關村 茂市村 石龜村

田子村 原村 斗内村

三戸村 目時村 大向村

相内村 虎渡村 劔吉村

名久井村

中野村

森越村

福田村

斗賀村

食米地村

杉澤村

法師岡村

嶋森村

田代村

晴山澤村

平内村

白金濱村

鳥屋部村

是川村

松館村

十日市村

角栖折村

妙佛村

新田村

濱通村

道佛村

中居林村

八戸村

石堂村

小中野村

類家村

櫛引村

八幡村

根城村

田面木村

賣市村

川原木村

長苗代村

志利内村

矢澤村

根市村

大佛村

花崎村

小泉村

豊間内村

七崎村

野澤村

淺水村

手倉橋村

西越村

貝森村

戸來村

又重村

中市村

石澤村

五戸村

菟内村

桐屋内村

市川村

高壹万六千四百三拾九石七斗五升四合

二戸

四拾八箇村

田山村

曲田村

荒屋村

岩屋村

五日市村

角崎村

駒嶺村

大森村

淨法寺村

吉田村

桂清水村

長渡路村

松岡村

杉澤村

黒川目村

川又村

澤口村

福田村

大築村

似鳥村

足澤村

本田村

斗米村

野々上村

釜澤村

金田市村

堀野村

前澤村

石切所村

鳥越村

福岡村

坂本村

檜山村

一戸村

高禪寺村

女鹿村

岩館村

根曾利村

冬部村

姉帶村

田野村

小鳥屋村

月館村

岩清水村

中里村

小繫村

平糠村

中山村

高六千貳百拾三石三斗九升八合

九戸 四拾壹箇村

江刈村

葛卷村

斗田村

新屋村	山根村	小倉村
伊保内村	長興寺村	江刺家村
山屋村	上館村	秋塚村
山内村	澤里村	圓子村
輕米村	晴山村	高家村
蛇口村	戸呂町村	帶嶋村
夏井村	閑井口村	鳥屋村
大野村	大崎村	門前村
小久慈村	南山形村	荷輕部村
河井村	繫村	深田村
長内村	野田村	長久寺村
侍濱村	有家村	中野村
種市村	大川目村	

鹿角

三拾三箇村

高六千貳百貳拾五石六斗三升三合

湯瀬村	小豆澤村	大里村
長嶺村	谷内村	夏井村
長牛村	川邊村	石邊屋村
三ヶ田村	松館村	尾佐和村
花輪村	高屋村	松山村

大掛村	柴内村	乳牛村
高市村	小枝柳村	小平村
新斗米村	寺坂村	草木村
大湯村	關上村	高清水村
古川村	毛馬内村	瀬田石村
大地村	荒川村	小坂村

高六千六百拾七石八斗八升五合

閑伊 九拾壹箇村

達曾部村	宮森村	鵜崎村
釜石村	綾織村	鱒澤村
奥友村	山屋村	平清水村
板澤村	來内村	平倉村
中澤村	青笹村	横田村
新里村	松崎村	土淵村
糠前村	細越村	佐比内村
山口村	柏崎村	駒木村
朽内村	付馬牛村	妙泉寺村
東福寺村	釜石村	箱崎村
鷯住居村	片岸村	橋野村
大鎚村	小鎚村	金澤村

吉里々村	飯岡村	津輕石村	豐間根村	花和村	長澤村	宮古村	老木村	引目村	川井村	箱石村	乙部村	中嶋村	厄額村	釜津田村	淺内村	穴澤村	尾千要村	安家村
舟越村	山田村	重茂村	八木澤村	小山田村	千徳村	山口村	小國村	腹帶村	門馬村	田代村	攝待村	中里村	岩泉村	和井内村	鼠入村	門村	沼袋村	
織笠村	大澤村	赤前村	近内村	松山村	磯鶏村	崎山村	田鍍村	茂市村	江繫村	多走村	小本村	貳双石村	大川村	刈屋村	母衣綿村	田野畑村	普代村	

向中野村	伊吉村	篠木村	雫石村	上野村	下田村	堀切村	寄木村	坊村	荒木田村	上關村	沼宮内村	芋田村	日戸村	二王村	山岸村	新城村	安庭村	
大田村	大釜村	大澤村	長山村	安庭村	川崎村	田頭村	平笠村	葉木田村	寺田村	一方井村	川口村	澁民村	鵠逸村	三割村	米内村	志家村	門村	
鹿妻村	栗屋川村	鶉飼村	西根村	繫内村	松内村	平館村	松尾村	野田村	帷子村	御堂村	卷堀村	玉山村	上田村	加賀野村	淺岸村	中野村	築川村	

岩手 高壹万九百四拾壹石四斗七升五合
五拾四箇村

志和 高壹万四百貳拾九石八斗七合
五拾壹箇村

犬淵村	片寄村	土館村
鱒澤村	松本村	平澤村
吉水村	稻藤村	宮手村
中嶋村	高水寺村	郡山村
櫻町村	日詰村	彦部村
大卷村	星山村	犬叫森村
草刈村	長岡村	江栖村
枋内村	乙部村	黒川村
手代森村	大萱生村	根田茂村
舟久保村	遠山村	北田村
赤澤村	佐比内村	十日市村
間野村	徳田村	小屋敷村
大田村	傳法寺村	岩清水村
煙山村	室岡村	白澤村
矢次村	矢羽場村	赤林村
廣宮澤村	飯岡村	永井村
津志田村	見前村	高田村

高壹万三千八百六拾八石五升九合

稗貫 五拾貳箇村

西十貳丁目村

川口村

花卷村

万丁目村	根子村	膝立村
西晴山村	大田村	湯口村
鉛村	圓満寺村	久野木目村
小瀬川村	狼澤村	鍋倉村
金谷村	臺村	大畑村
湯本村	北湯口村	糠塚村
松林寺村	大興寺村	瀬川村
今田澤村	寺林村	好地村
石鳥屋村	八幡村	小森林村
西中嶋村	黒沼村	葛村
田力村	柏葉村	宮野目村
飯豊村	似内村	東十二丁目村
高木村	高松村	矢澤村
關口村	八重幡村	五大堂村
東中嶋村	猪鼻村	戸塚村
新堀村	瀧田村	龜ヶ森村
大迫村		

高壹万貳千八百六拾七石七斗八升八合

和賀 四拾貳箇村

南鬼柳村

岩崎村

須々孫村

山口村	堅川目村	横川目村
笹間村	轟木村	飯豊村
藤根村	滑田村	長沼村
江釣子村	北鬼柳村	黒澤尻村
二子村	成田村	立花村
黒岩村	更木村	平澤村
石持村	宮田村	臥牛村
中内村	浮田村	毒澤村
田瀬村	倉澤村	鷹巢堂村
谷内村	砂子村	館迫村
町居村	奥友村	落合村
成嶋村	安俵村	十二箇村
晴山村	小山田村	澤内村
高壹万千六百拾貳石五升		
都合拾壹万石		

奥書同前

寛文四年四月五日

南部山城守殿

備後國沼隈郡壹万九千四百九拾石三斗餘葦田郡壹万四千三百八拾五石壹斗餘深津郡七千六百九拾四石四斗餘安那郡壹万七千五百五拾八石貳斗餘品治郡七千八百四拾九石餘神名郡壹万六千六百四拾九石餘甲奴郡内八千三百五拾八石九斗餘備中國小田郡之内七千四百五拾八石四斗餘後月郡之内九百九拾九石餘相模國愛甲郡原本村之内千石都合拾万千拾貳石六斗餘

紙事任寛永十一年八月四日先判之旨宛行之訖
全可令領知者也

寛文四年四月五日御朱印

筆者杉浦半右衛門

水野民部とのへ

目録

備後國

沼隈郡之内 三拾六箇村

山田村	赤坂村	山手村
江分村	地頭分村	西村
東村	本郷村	神村
高須村	山北村	荳村
早戸村	小原村	津江村

草深村 藁江村 草戶村
 鹿嶋村 水吞村 能登原村
 佐波村 山波村 今津村
 戸崎村 藤江村 常石村
 田尻村 後地村 百嶋村
 横嶋村 田嶋村 柳津村
 山南村 鞆町村 長和村
 高壹万九千四百九拾石三斗貳升五合

葦田郡之内 貳拾五箇村

町村 高木村 府中市村
 牟加波幾村 本山村 阿字村
 福田村 常村 有地村
 藤尾村 中須村 出口村
 廣谷村 荒谷村 土生村
 父石村 目崎村 田良間村
 供利迦羅村 府中村 草村
 河茂村 宇山村 木山村
 桑木村
 高壹万四千三百八拾五石壹斗壹升八合
 深津郡之内 貳拾箇村

本庄村 野上村 木庄村
 吉津村 奈良津村 深津村
 市村 能嶋村 引野村
 津下村 野々濱村 太門村
 坪生村 浦上村 宇山村
 千田村 八風呂村 坂田村
 中津原村 下岩成村
 高七千六百九拾三石五斗七合

安那郡之内 貳拾三箇村

道上村 下加茂村 北山村
 蘆原村 中條村 上加茂村
 中野村 栗根村 東法成寺村
 西法成寺村 麓村 湯野村
 曾根原村 箱田村 下御領村
 上御領村 下竹田村 平野村
 三谷村 矢川村 八尋村
 上竹田村 山野村
 高壹万七千五百五拾八石貳斗四升
 品治郡之内 拾九箇村
 宮内村 助元村 戸出村

近田村 防寺村 中嶋村 安田村 宇禰畠村 近田村

大橋村 本江村 永谷村 長野村

雨木村 万能倉村 向永谷村 高壹万六千六百四拾八石九斗壹升

上山守村 下山守村 今岡村 甲奴郡之内 拾九箇村

新山村 倉光村 江良村 太良村 上拔湯村 黒目村

安井村 有田村 二盛村 小塚村

高七千八百四十七石五斗貳升 志浪村 於加屋村 登満須村

神石郡之内 四拾箇村

豐松村 小畠村 酒屋村 矢多田村 小堀村 領家村

常光村 重藤村 折口村 安田村 福田村 上下村

古川村 井關村 胡桃村 國富村 高八千三百五拾八石九斗四升四合

大屋村 牧村 中平村 備中國 小田郡之内 貳拾箇村

時安村 末元村 上戸村 稻木村 大江村 有田村

油木村 龜石村 相戸村 坪生村 入田村 篠坂村

小野村 坂瀬川村 新免村 大田村 有田村

河下田村 光末村 李免村 大田村 押撫村 毛平村

草木村 篠尾村 三坂村 大田村 押撫村 毛平村

田頭村 光延村 吉和村 用江村 大田村 西濱村

有木村 阿下村 高蓋村 神嶋村 眞鍋村 笠岡村

福長村 父木野村 高光村 水目村 小平井村 繪師村

馬飼村 廣濱村

高七千四百五拾八石四斗貳升

後月郡之内

高屋村

高九百六拾九石六合

相模國

愛甲郡之内

厚木村

高千石

都合拾万千拾貳石六斗餘

奥書右同

寛文四年四月五日

水野民部殿

信濃國水内郡之内八拾七箇村三万九千八百六拾九石餘更科郡之内六拾七箇村三万五千百三拾八石餘高井郡之内拾七箇村壹万六拾壹石餘埴科郡之内拾四箇村壹万四千九百三拾石餘都合拾万石_{目録在別紙}事如_二前々_一宛_三行之_二訖_一全可_レ令_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛 眞田右衛門とのへ

目録

信濃國

水内郡之内 八拾七箇村

石綿村	北堀村	下稻積村
上稻積村	下徳間村	吉田村
布野村	里和田村	桐原村
上松村	下山田村	及一目村
榑田村	中越村	下平林村
千田村之内	中市村	中御所村之内
腰村	妻科村	下東條村
茂菅村	小市村	窪寺村
小柴見村	新安村	鎌屋村
櫻村	泉平村	上屋村
下曾山村	上曾山村	廣瀬村
入山村	小鍋村	栃原村
鬼無里村	日影村	椿嶺村
瀬戸川村	小根山村	竹生村

伊折村 地京原村 梅木村

念佛寺村 岩草村 橋詰村

五十平村 瀬脇村 大安寺村

笹平村 五十里村 中條村

青木村 奈良井村 永井村

越道村 和左尾村 上條村

山上條村 山穂苅村 新町村

風間村 南俣村 南高田村

北高田村 西尾張部村 南長池村

北長池村 北尾張部村 小嶋村

中俣村 村山村 南堀村

下越村 押鐘村 北江村

宇木村 三輪村 吉窪村

山中田中村 宮尾村 黒沼村

水内村 久木村 上野村

高三万九千八百六拾九石六斗六升
更級郡之内 六拾七箇村

五明村 上平村 新山村

山田村 同所新田村 若宮村

刀石村 網掛村 須坂村

羽尾村 本八幡村 向八幡村

桑原村 石河村 二柳村

五明村 高田村 御幣川村

合村 原村 小松原村

丹波嶋村 綱嶋村 青木嶋村

大豆嶋村 眞嶋村 小嶋田村

牧嶋村 西寺尾村 杵淵村

東福寺村 小森村 横田村

藤牧村 廣田村 上布施村

下水鉋村 牛嶋村 赤田村

田之口村 平林村 水熊村

高野村 竹房村 吉原村

須牧村 大原村 日名村

鹿谷村 大岡村 下市場村

牧田中村 牧嶋村 安庭村

吐頃村 和田村 四屋村

大塚村 河合村 川合新田村

山布施村 有旅村 灰原村

小田原村 中牧村 南牧村

三水村

高三万五千百三拾八石壹斗八升三合

高井郡之内 拾七箇村

小布施村之内

相嶋村之内

幸高村之内

大室村

川田村

小出村

保科村

福嶋村

八町村

仁禮村

宇原村

仙仁村

小河原村

大熊村之内

小沼村之内

佐野村

湯田中村

高壹万六拾壹石六斗八升

埴科郡之内 貳拾四箇村

金井村之内

鼠宿村

千本柳村

内川村

栗佐村

屋代村

雨之宮村

森村

倉科村

生萱村

出口村

清野村

岩野村

西條村

關屋村

平林村

桑根井村

牧内村

東條村

加賀井村

田中村

東寺尾村

柴村

紙屋町村

高壹万四千九百三拾石四斗七升七合

都合拾万石

奥書右同

寛文四年四月五日

眞田左衛門殿

伊勢國桑名郡之内五拾三箇村員辨郡之内六拾三箇村
朝明郡之内三拾四箇村三重郡之内拾七箇村都合拾壹
万石^{別紙}在^ニ事如^ニ前々^ニ宛^ニ行之^ニ訖全可^レ令^ニ領知^ニ者
也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者久保金左衛門

松平越中守とのへ

目録

伊勢國

桑名郡之内 五拾三箇村

福嶋村

東方村

北別所村

播磨村

東汰上村

西汰上村

下深谷部村

上深谷部村

下野代村

今嶋村

大鳥居村

南郷村

中須村

香取村

上郷村

江内村	金迫村	古敷村
東平賀村	西平賀村	福永村
柚井村	戸津村	多戸村
上肱江村	下肱江村	御衣野村
小山村	猪飼村	古野村
美鹿村	糖田村	蓮花寺村
西別所村	程田村	上野村
太夫村	西方村	桑名村
東野村	堀子村	本願寺村
江場村	矢田村	小貝須村
大福村	安永村	泉村
東金井村	西金井村	野田村
桑部村	能部村	
高貳万九千百拾五石四斗壹升八合		
員辨郡之内 六拾三箇村		

星川村	加例川村	森忠村
五反田村	穴太村	筑紫村
世古泉村	山田村	大社村
大木村	大泉村	楚原村
御蘭村	下笠田村	宇野村

上笠田村	麻生田村	其原村
市原村	中津原村	鼓村
東貝野村	西貝野村	河下喜村
下平村	向平村	畑毛村
鹽崎村	田邊村	二瀬村
河原村	清司原村	上相場村
上山田村	川合村	下相場村
日内村	長尾村	市場村
本郷村	山口村	篠立村
古田村	坂元村	大貝戸村
野尻村	石川村	東前寺村
丹生川村	石樽村	宇賀村
片樋村	高柳村	平塚村
大井田村	梅戸村	長深村
中上村	志知村	友村
坂井村	嶋田村	赤尾村
高四万千貳百拾六石五升三合		
朝明郡之内 三拾四箇村		
繩生村	小向村	柿村
松寺村	蒔田村	西富田村

茂福村 羽津村 豐田一色村

福崎村 高松村 豐田村

東富田村 下宮村 垂坂村

川北村 大矢知村 埋繩村

廣永村 山村 伊坂村

千代田村 荳生村 大鐘村

下野村 保々村 永井村

小嶋村 竹成村 中脇村

馬場村 杉谷村 田光村

田口村

高貳万七千七百七拾七石九斗九升九合

三重郡之内 拾七箇村

小倉村 北五味塚村 南五味塚村

南川村 本江村 北一色村

川尻村 大治田村 小古曾村

采女村 八王寺村 室山村

西日野村 東日野村 知積村

六名村 千草村

高壹万四千八百九拾石五斗三升三合

但四郡之内三千石依爲三分限帳之過一籠高也

都合拾壹万石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平越中守殿

卷第十

陸奥國白川郡之内三万七千四百貳拾九石餘石川郡之内壹万四千五百拾壹石餘盤瀨郡之内三万八百四拾石餘田村郡之内壹万七千貳百拾石餘都合拾万石

事如前々宛三行之訖訖全可令領知之狀如件
別紙在
寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋長左衛門

本多下野守とのへ

目錄

陸奥國

白川郡之内 六拾八箇村

白川村本町 白河村中町

白河村横田町 大村

大和田村 本沼村

白河村天神町

久田野村

双石村

船田村	借宿村	關和久村	松倉村	滑津村	大和久村	町屋村	大田川村	新小萱村	柏野村	眞舟村	小田倉村	旗宿村	番澤村	築森村	下羽原村	釜子村	形見村	堀内村	中寺村
板橋村	細倉村	北平山村	二子塚村	三城目村	踏瀬村	増見村	小田川村	根田村	羽太村	熊倉村	波籠村	中野村	仁井田村	高木村	河東田村	大竹村	千田村	關場村	郷渡村
田嶋村	深堀仁井田村	泉崎村	川原田村	須乘村	新城村	飯土用村	泉田村	長坂村	鶴生村	米村	白坂村	内松村	金山村	三森村	深渡戸村	栃本村	宮村	小松村	

高三万七千四百貳拾九石六斗三升五合

石川郡之内 三拾壹箇村

赤羽村	鷄子村	南須金村	吉村	川邊村	中村	成田村	堤村	松崎村	矢吹村	細谷村	高壹万四千五百拾壹石四斗四升九合	磐瀨郡之内 四拾六箇村	久來石村	鏡泥村	高久田村	須賀川村古町	須賀河村中町	須賀川村道場村	濱尾村	田中村
新屋敷村	九龍瀧村	山小屋村	眞垣村	萩生村	岩法寺村	神田村	中野目村	中畑村	行方野村							須賀川村北町	中宿村	和田村	狸森村	
駒形村	蓬田村	北須釜村	外眞木村	小高村	龍崎村	大畑村	明岡村	中畑新田村	森宿村								下宿村	前田川村	大栗村	

雨田村	日照田村	一關村
小作田村	下小山田村	上小山田村
小倉村	鹽田村	堤村
江持村	岩淵村	矢田野村
鉾槻村	上小中村	下小中村
保土原村	高林村	柿内村
小川村	飯土用村	白子村
上大里村	下大里村	下小屋村
上小屋村	下松本村	上松本村
牧内村	羽鳥村	田良尾村
湯本村		

高三万八百四拾四石三斗六升三合

田村領之内	貳拾六箇村
谷田川村	下道渡村
川曲村	山神村
糠塚村	田母神村
柳橋村	梶山
吉野邊村	飯豐村
小戸神村	波籠石村
赤沼村	谷津作村

上道渡村	上關村
枋本村	中津川村
浮金村	仁井村
小野山押村	鷹俣田村

小鹽村 菖蒲庭村 田原井村

和名田村 羽出庭村

高壹万七千貳百拾四石五斗五升三合

都合拾万石

奥書右同

寛文四年四月五日

本多下野守殿

美濃國石津多藝不破安八池田大野本巢七郡之内都合
拾万石^{目録在別紙}事如^紙前々宛^紙行之^紙訖全可^紙令^紙領知^紙
之狀如^紙件

寛文四年四月五日御判 筆者久保金左衛門

戸田采女正とのへ

目録

美濃國

石津郡之内 拾三箇村

大里村 安江村 下一色村

太田本新田村 中嶋村 松ヶ平村

馬澤村 羽根村 奧城村
庭田村 德田村 乙坂村

下境村

高三千三百九拾壹石五升九合

多藝郡之内 貳拾四箇村

志津村 柏尾村 清子村

鷺巢村 龍泉寺村 野口村

上笠村 高淵村 大塚村

安久村 高畑村 宇田村

吉田村 中村 橋爪村

石畑村 上方村 津屋村

船見村 若宮村 櫻井村

多藝嶋村 上屋村 大戸羽村

高壹万貳拾壹石壹斗貳升四合

不破郡之内 拾箇村

德光村 中曾根村 矢道村

荒尾村 晝飯村 赤坂村

長松村 若森村 青柳村

與市新田村 高七千貳百壹石五斗六升八合

安八郡之内 八拾八箇村

割田村 切石村 宮内村

牛屋村 寶村 南寺村

南輪村 禾森村 今福村

難波野村 牧新田村 深池村

古宮村 平村 直江村

西高橋村 東高橋村 長澤村

犬淵村 東前村 江渡村

今宿村 三塚村 津村

上開發村 大嶋村 加賀野村

貝曾根村 高屋村 藤江村

林本江村 林中村 林東村

樂田村 南方村 領家村

興福寺村 河間村 笠木村

笠縫村 中野村 一色村

木戸村 大額村 三本木村

切戸村 蓮村 佐渡村

小野村 下開發村 東結村

新屋敷村 下宮村 川西村

前田村 八條村 和泉村

中	北	末	安	瀨	草	橫	中	川	榮	淺
方	守	次	古	道	井	嶋	口	築	捨	草
村	村	村	村	村	村	村	村	力	村	中
青	南	一	丈	柳	池	友	米	淺	淺	
木	方	色	六	村	尻	江	野	草	草	
村	村	村	道	村	村	村	村	西	東	
市	更	田	曾	加	釜	外	內	淺	淺	
嶋	屋	根	根	納	笛	花	河	草	草	
村	敷	村	村	村	村	村	原	東	東	
村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	

高四万七千八百八拾壹石八斗三升七合

池田郡之内 五拾箇村

田	小	市	堀	田	上	三
畑	牛	場	中	中	野	倉
村	垣	村	村	村	村	村
小	段	瑞	和	萩	畑	外
寺	村	岩	田	原	尻	津
村	村	寺	村	村	村	汲
宮	舟	白	黑	本	廣	西
地	子	檜	土	鄉	尾	津
村	村	村	村	村	村	汲
村	村	村	村	村	村	村

日	西	北	寺	河	坂	惠	上	大	市
坂	村	村	本	合	本	渡	野	門	橋
村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
羽	親	池	中	上	種	八	新	青	藤
根	村	戶	山	流	本	幡	宮	柳	代
村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
川	杉	中	香	下	片	砂	溝	願	
上	原	江	六	流	山	畑	尻	成	
村	村	村	村	村	村	村	村	寺	
村	村	村	村	村	村	村	村	村	

高壹万千貳百八拾七石八斗九升

大野郡之内 四拾三箇村

寶	北	中	森	下	野	東	更
江	脇	野	村	礪	黑	黑	地
村	村	宮	村	村	野	野	村
堤	大	宮	彈	鹿	六	西	赤
村	月	田	正	野	重	上	石
村	村	村	村	村	村	秋	村
橫	呂	福	上	和	櫻	木	石
屋	久	嶋	礪	羽	大	振	神
村	村	村	村	村	門	村	村
村	村	村	村	村	村	村	村

高屋村 屋井村 有里村

海老村 下方村 國領村

谷汲村 下長瀬村 上長瀬村

東津汲村 檜原村 小津村

東本庄村 宇津志村 吉尾村

水鳥村 大井村 大河原村

稻畑村

高壹万六千九百拾石四斗四合

本巢郡之内 三拾壹箇村

山口村 木知原村 神海村

佐原村 木倉村 河内村

奥村 金原村 苔野村

板所村 市場村 神所村

中村 越卒村 門脇村

長嶺村 天神戸村 長嶋村

黒津村 越波村 上大須村

下大須村 惡田村 西小鹿村

東小鹿村 東板屋村 西板屋村

口谷村 奥谷村 樽見村

内野村

高三千三百六石壹斗壹升八合

都合拾万石

與書右同

寛文四年四月五日

戸田采女正殿

下總國葛飾郡之内三拾壹箇村三拾壹箇村七千九百貳拾九石餘猿嶋郡之内三箇村千貳拾三石餘下野國都賀郡之内百九箇村三万九千七百五拾三石餘安蘇郡之内貳拾四箇村壹万八千四百七拾九石餘寒川郡之内拾箇村五千九百三拾壹石餘近江國伊香郡之内貳拾壹箇村七千四百五拾五石餘甲賀郡之内七箇村三千九百石餘蒲生郡之内七箇村三千三百拾七石餘野洲郡水俣村三百貳拾八石餘武藏國埼玉郡之内拾三箇村六千三百八拾貳石餘常陸國河内郡之内九箇村五千五百石餘都合拾万石^{目録在別紙}事如^ニ前々^一宛^ニ行之^一訖全可^レ令^ニ領知^一之狀仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者飯高七兵衛

土井大炊頭とのへ

目錄

下總國

葛飾郡之内 三拾壹箇村

古河町 原町村 牧地村

鴻巣村 駒崎村 新久田村

辰崎村 伊賀袋村 鳥喰村

坂間村 中田新田 中田町

大山村 前林村 長谷村

釋迦村 駒場村 礮邊村

上砂井村 女沼村 下大野村

關戸村 大堤村 下邊見村

上邊見村 上大野村 稻宮村

柳橋村 西牛谷村 東牛谷村

小堤村

高七千九百貳拾九石八斗三升壹合

猿嶋郡之内 三箇村

大和田村 駒込村 下砂井村

高千貳拾三石五斗三升九合

下野國

都賀郡之内 百九箇村

今里村 立木村 澁井村

島田村 黒本村 荒川村

卒嶋村 高谷村 中仕上村

上石塚村 宮田村 平川村

合戰場村 久保田村 小宅村

升塚村 藤田村 平柳村

大宮村 大内川村 桶田村

間中村 鹽澤村 石上村

下國府塚村 萩嶋村 下石塚村

大行寺村 上國府塚村 大谷江村

禰谷村 稻葉村 横倉村

犬塚村 喜澤村 中久喜村

泉崎村 鉢形村 出井村

栗宮村 千駄塚村 犬塚新田

土塔村 大町新田

半田村 國分村 柴村

向野村 駒場村 柴村

三谷村 下岡村 上岡村

小野寺村 尻内村 大久保村

小室村	野渡村	本野木村
新野木村	友沼村	間島村
丸林村	赤塚村	若林村
佐川野村	下生井村	新羽村
綠川村	下宮村	藤岡村
庭谷村	幡張村	沼尻村
大谷田村	中井村	西浦村
太田和村	荒井村	只木村
大田村	羽貫村	茂呂村
御門村	小池村	大崎村
飯塚村	赤間村	乙女村
間々田村	飯田村	河田村
野田村	武井村	田間村
塚崎村	雨谷村	下初田村
上初田村	下高島村	上高島村
土與村	横堀村	川連村
東片柳村	岡村	西片柳村
藺鳩村		

安蘇郡之内

高三千九百七十五拾三石貳升四合
貳拾四箇村

飯田村	馬門村	高山村
淺沼村	富岡村	鎧塚村
黒袴村	下津原村	盈岡村
新里村	古江村	水野木村
中村	戸室村	船渡川村
植野村	赤坂村	田嶋村
免鳥村	奈良淵村	新吉水村
小見村	石塚村	山越村
高壹万八千四百七拾九石貳升八合		

寒川郡之内 拾箇村

網戸村	馬場村	楢木村
生井新田村	上生井村	中里村
鏡村	井岡村	小袋村
川原田村		

近江國 高五千九百三拾壹石九斗貳合

伊香郡之内 貳拾壹箇村

片山村	西柳野村	磯野村
宇根村	渡岸寺村	井口村
雨森村	保延寺村	洞戸村

馬上村 高野村 小山村

古橋村 大箕村 下丹生村

上丹生村 菅並村 小原村

田戸村 鷺見村 尾羽梨村

高七千四百五拾五石五斗六升五合

甲賀郡之内 七箇村

岩根村 菩提寺村 朝國村

下田村 松尾村 上村

下村 高三千九百石六斗壹升八合

蒲生郡之内 七箇村

小口村 葛卷村 宮井村

木村 十林寺村 收村

畠中村 高三千三百拾七石八斗五升

野洲郡之内

水保村

高三百貳拾八石八斗

武藏國

埼玉郡之内 拾三箇村

寬文印知集卷第十

向古河村 柏戸村 小野袋村

柳生村 麥倉村 飯積村

大曾村 本郷村 前谷村

駒場村 細間村 砂原村

佐渡村 高六千三百八拾貳石壹斗貳升八合

常陸國

河内郡之内 九箇村

犬塚村 藤ヶ谷村 井上村

辻村 保未村 木戸村

梶内村 若柳村 關本村

高五千五百石五斗四升八合

都合拾万石

奥書右同

寬文四年四月五日

土井大炊頭殿

武藏國埼玉郡之内六拾壹箇村貳万八千三百五拾五石

七斗餘是立郡之内貳拾八箇村九千六百五石九斗餘下

百九

野國都賀郡之内六拾五箇村三万四千五百石六斗餘寒
川郡之内廿六箇村壹万六百三拾八石五斗餘上總國夷
瀨郡之内四拾八箇村貳万五千八百六斗餘下總國葛飾
郡之内拾五箇村三千九百四拾貳石餘都合拾壹万五千
六拾石三斗餘^{別錄在紙}事如^三前々^一宛^三行之^二訖全可^レ令^三
領知^レ之狀如^レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者飯高七兵衛

阿部伊豫守とのへ

目録

武藏國

埼玉郡之内

六拾壹箇村

西原村	東原村	箕輪村
加倉村	柏崎村	井沼村
王戸村	駒崎村	平野村
野嶋方村	新井村	浮谷村
新福寺村	横根村	高曾根村
黒谷村	笹窪村	尾崎村
釣上村	飯塚村	村國村
本宿村	金重村	掛村

平林寺村	馬込村	下蓮田村
上蓮田村	川嶋村	黒濱村
城村	小久喜村	新宿村
實谷村	江崎村	千駄野村
辻村	花積村	慈恩寺村
上野村	道順川戸村	小場村
相原村	鹿室村	岡泉村
爪田谷村	百間須加村	太田新井村
野田村	久米原村	高岩村
太田袋村	寺塚村	上比留田村
下比留田村	徳力村	梅田村
内牧村	平野村	小溝村
大野嶋村		
高貳万八千三百五拾五石七斗貳升貳合		
足立郡之内	貳拾八箇村	
倉田村	領家村	小針村
源谷村	羽貫村	原宿村
平塚村	桶川上村	同南村
同窪村	同宿村	井戸木村
平方村	小敷谷村	領家村

下野國

都賀郡之内 六拾五箇村

上野村 地頭方村
中新井村 奈良賴戶村
西方村 大山村
下野田村 平林寺村
堀崎村之内 染谷村
高九千六百五石九斗七升貳合

上殿村 玉田村
上日名田村 花岡村
笹原田村 符所村
押原村 坂野谷村
下奈良新村 上奈良新村
沓掛村 小林村
下澤村 山口村
鹽山村 新田村
上南摩村 口栗野村
梅澤村 小曾戶村
河原田村 古宿村
新宿村 大澤田村
野澤村
堤崎村
大門村
寺山村
染谷村
村井村
見野村
武子村
中里村
富岡村
下日名田村
糴山村
西澤村
出流山村
正雲寺村
中宿村
野澤村

寒川郡之内 貳拾六箇村

佐目村 富張村 下宿村
田谷村 深見内村 峯村
金井村 柴村 金崎村
大内川村 和久井村 皆川城内村
大皆川村 東新井村 西新井村
藺部村 岩出村 風野村
野中村 吹上村 木野地村
柏倉村 小野口村 志鳥村
宮村 犬塚村 千手村
星野村 鍋山村
高三万四千五百石六斗壹升五合

白鳥村 部屋村 鑑新田村
石川新田村 帶刀新田村 三藏新田村
新井村 豐後新田村 兵庫新田村
野田村 戸恒村 西水代村
眞弓村 東水代村 武井村
樋口村 沼和田村 片柳村
寄居村 平井村 立花村
山田村 古橋村 富田村

白岩村 沖嶋村

高壹万六千三百八十五斗八升九合

上總國

夷瀨郡之内 四拾八箇村

小高村	江波戸村	日在村
中魚落村	岩舟村	小澤村
小池村	岩和田村	上布施村
實谷村	長志江村	山田江村
舟子村	正立寺村	柿和田村
大野村	柳戸村	細尾村
万喜村	推木村	中原村
泉村	神置村	勝間村
岩熊村	岩井村	明樂寺村
小土呂村	横山村	泉水寺村
上原村	西部田村	櫻谷村
小谷松村	堀内村	大戸村
三俣村	黒原村	市野村
市川村	松野村	蟹田村
小松原村	貝掛村	奥津村
久保町村	猿稻町村	根小屋町村

下總國

高貳万五千八百六十六斗貳升九合

葛飾郡之内 十五箇村

大谷村	長宮村	増富村
増戸村	大戸村	大口村
須賀村	大森村	恩間村
大竹村	大道村	増長村
三宮村	中曾根村	袋村
高三千九百四拾貳石七升三合		

近江國

淺井郡之内 三箇村

庄村 中村 東川道村

高三千八百七十九升三合

都合拾壹万五千六拾石三斗九升三合

奥書右同

寛文四年四月五日

阿部伊豫守殿

加賀國江沼郡百三拾四箇村能美郡之内六箇村都合七

万石^{目録在別紙} 事如^二前々^一宛^二行之^一 訖全可^レ令^二領知^一之 狀如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保善右衛門

松平飛驒守とのへ

目録

加賀國

江沼郡一國 百三拾四箇村

高六万五千七百三拾壹石五斗九升

能美郡之内 六箇村

串 村 佐 見 村 日 末 村

松 崎 村 嶋 村 馬 場 村

高四千三百貳石壹斗四升

但貳郡之内三拾三石七斗三升依^レ爲^二分限帳之

外^二籠高也

都合七万石

右今度被差上候郡村之帳面相改及^二上聞^一所^レ被^二成

下^二御朱印也此儀兩人奉行依^レ被^二仰附^一執達如^レ件

寛文四年四月五日

永井伊賀守尙庸
小笠原山城守長頼

松平飛驒守殿

上野國甘樂郡之内三拾六箇村壹万七千九百九拾五石
四斗餘多胡郡之内長根村千四百貳拾四石五斗餘碓氷
郡鉢埵村五百八拾石都合貳万石^{目録在別紙} 事如^二前々^一宛^二行之^一 訖全可^レ領知^二之狀仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保金右衛門

織田内記とのへ

目録

上野國

甘樂郡之内 三拾六箇村

小 幡 村 金 井 村 天 引 村

白 倉 村 福 嶋 村 星 田 村

田 篠 村 轟 村 國 峯 村

善 慶 寺 村 後 村 大 嶋 村

高 瀬 村 田 嶋 村 黒 川 村

下 高 田 村 左 京 分 村 八 木 連 村

十 二 村 中 里 村 古 館 村

行澤村 大牛村 八城村
岳村 諸戸村 菅原村
上小坂村 中小坂村 下小坂村
中澤村 蚊沼村 原村
下丹生村 上丹生村 宇田村
高壹万七千九百九拾五石四斗貳升
多胡郡之内

長根村

高千四百貳拾四石五斗八升

碓氷郡之内

劔崎村

高五百八拾石

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

織田内記殿

相模國高座愛甲大住三郡之内壹万貳千八百五拾五石
餘武藏國橘村都筑久良三郡内八千四百四拾七石八斗

餘上總國望陀郡市原長柄地生夷瀧五郡之内七千六拾
壹石四斗餘下總國結城郡之内壹万六百四拾八石貳斗
餘下野國都賀郡之内三百八拾石九斗餘常陸國河内郡
之内六百六石五斗餘都合四万石
目録在別紙事宛_レ行之_レ訖
全可_レ令_レ領知_レ者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者建部傳右衛門

久世大和守とのへ

目録

相模國

高座郡之内 貳拾四箇村

中村	社家村	川原口村
上村	座間入谷村	座間宿村
新田宿村	新戸村	磯部村
當麻村	下溝村	上溝村
田名村	大嶋村	上九澤村
下九澤村	小山村	橋本村
淵野邊村	相原村	下川尻村
上川尻村	中澤村	三井村
高八千貳百六拾貳石四斗八升七合		

愛甲郡之内 貳拾三箇村

大井村 中野村 又野村

三木村 須澤嵐村 若柳村

千木良村 與瀬村 吉野村

澤井村 佐野川村 小淵村

名倉村 日連村 牧野村

青根村 青野原村 鳥屋村

青山村 長竹村 根古屋村

小倉村 葉山嶋村

高四千四百五拾四石

大住郡之内

酒井村

高百三拾八石五斗七升

武藏國

橘樹郡之内 九箇村

上平間村 下平間村 小向村

古川村 戶手村 塚越村

矢向村 小倉村 駒岡村

高貳千六百四拾七石八斗六升七合

都築郡之内 三箇村

市尾村 北八朔村 西八朔村

高八百石

久良郡之内 貳拾三箇村

田中村 嶺村 矢部村

栗木村 雜色村 關村

松本村 日野宮谷村 日野宮下村

日野金井村 日野吉原村 最戸村

久保村 釜利谷宿村 釜川谷赤井村

谷津村 柴村 寺前村

町屋村 洲崎村 六浦村平分

六浦村社家分 六浦寺分

高五千石

上總國

望陀郡之内

推津村

高六百貳拾石八斗九升

市原郡之内 拾箇村

入不斗村 片又木村 風戸村

中高根村 上高根村 奉免村

池和田村 幸田村 菊間村

君塚村

高貳千七百三拾五石三斗三升壹合

長柄郡之内 三箇村

立鳥村

長栖山村

皿木村

高貳百貳石七斗四升三合

埴生郡之内 八箇村

矢貫村

坂本村

葛田村

大井村

久原村

下小野田村

小澤村

上小野田村

高千四百貳拾四石壹斗五升六合

夷廬郡之内 貳箇村

小土呂村

下大多喜村

高貳千七拾八石三斗壹升

下總國

結城郡之内 拾四箇村

結城本村

作谷村

鹿窪村

林村

中村

同所新田村

窪田村

小森村

同所新田村

大谷瀬村

中川原村

中嶋村

福良村

高橋村

下野國

高壹万六百四拾八石四斗七合

都賀郡之内 五箇村

延嶋新田村

下吉田村

大覺分吉田村

上吉田村

三本木村

高三百八拾石九斗貳升四合

常陸國

河郡之内 四箇村

舟玉村

下川嶋村

下川新田村

下江連村

高六百六石五斗壹升五合

都合四万石

奥書右同

寛文四年五月八日

久世大和守殿

卷第十一

肥前國松浦郡之内貳百三拾箇村六万三千三拾貳石五斗筑前國怡土郡之内三拾八箇村貳万九拾六石五斗餘

都合八万三千百石餘目錄在別紙事如前々宛行之訖全
可令領知者也依如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久左衛門

大久保加賀守とのへ

目録

肥前國

松浦郡之内 貳百三拾箇村

唐津村	大石村	神田村
菅牟田村	竹木場村	山田村
和多田村	養母田村	千々賀村
波多嶋村	竹有村	山本村
石志村	橋本村	牟田部村
伊岐佐村	黒岩村	大野村
双水村	相知村	梶山村
中山村	千束村	横枕村
山崎村	鷹取村	町切村
本山村	楠村	田頭村
湯屋村	長部田村	嚴木村
岩屋村	牧瀬村	波瀬村

筥木村	瀬戸木場村	廣瀬村
浦河内村	中嶋村	篠原村
平山村	大川野村	川原村
駒嶋村	立川村	山口村
田代村	佐里村	久保村
徳末村	蔭田村	田中村
大杉村	岸山村	水留村
大曲村	古里村	高瀬村
志氣村	井手野村	大河野原村
原屋敷村	苜招村	笠椎村
古川村	小麥原村	黒川村
小黒川村	黒鹽村	横野村
牟田村	立目村	清水村
椿原村	荒瀬村	花房村
波多川内村	重橋村	眞手野村
平原村	波多津村	内野村
辻村	中山村	板木村
田代村	福田村	煙屋村
筒井村	井野尾村	津富村
主屋村	行合野村	上平野村

石田村	長尾村	大嶋村	平冒津村	名場越村	田代村	日付佐原村	梨子河内村	唯河内村	星賀村	京泊村	針木村	新木場村	入野村	赤坂村	大浦村	仁田野尾村	切木村	下平野村	重河内村
牟形村	狩屋村	有浦村	山道村	轟木村	中尾村	八尋峯村	小次郎冠者村	見借村	梅崎村	田下久村	納所村	爪坂村	田野村	木場村	中浦村	杉浦村	奥村	山彦村	成淵村
加倉村	大蘭村	諸浦村	大久保村	枝去木村	藤平村	佐志村	太郎村	後河内村	寺浦村	昌津村	絃卷村	高串村	上倉村	曲川村	滿越村	湯野海村	湯野尾村	唐川村	小平野村

仁部山	野田村	玉嶋村	大嶋村	高嶋村	西原村	加々羅嶋村	串尾村	平尾村	普恩寺村	德賀村	大久保村	赤木村	小川嶋村	小友村	神集嶋村	屋形石村	相賀村	浦村	小加倉村
馬川山	瀧川山	平原村	加奈草村	横田村	梶原村	鏡部村	加部嶋村	名護屋村	向嶋村	外津村	高野村	鹽鶴村	井上村	中野村	呼子村	中里村	鳩川村	唐房村	石室村
荒川山	木浦山	山田村	淵上村	濱嶋村	水嶋村	原村	馬渡嶋村	波戸村	濱浦村	德加河内村	馬部村	横竹村	菖蒲村	批把首村	大友村	横野村	港村	八床村	石原村

藤川山 白木山 星領山

鳥巢山 山瀬村 天川山

平野山 廣川山 半田村

宇木村 夕日村 久里山

柏崎村 中原村

高六万三千三十拾貳石五斗

筑前國

怡土郡之内 三拾八箇村

鹿家村 吉井村 福井村

眞名子村 堀村 佐波村

大入村 深江村 一貴山村

淀川村 河原村 片峯村

松末村 片山村 濱窪村

田中村 加布里村 岩本村

神有村 本村 河上東村

松國村 武村 瀬戸村

波呂村 石崎村 長石村

滿吉村 唐原村 小藏村

長野村 飯原村 藏持村

八嶋村 香刀村 有田村

平原村 鷗村

高貳万九拾六石五斗七升

都合八萬三千百貳拾九石七斗

奥書右同斷

寛文四年四月五日

大久保加賀守殿

豊前國下毛郡八拾貳箇村三万九千九百六拾七石貳斗餘
上毛郡之内十九箇村六千六百四拾七石餘宇佐郡之内
百貳拾四箇村四万三千三百八拾五石餘都合八万石
紙事如三前々宛三行之訖全可令領知者也仍如別件

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡部七郎兵衛

小笠原信濃守とのへ

目録

豊前國

下毛郡一圓 八拾貳箇村

高三万九千九百六拾七石貳斗四升貳合

上毛郡之内 拾九箇村

原井村 百富村 上唐原村

下唐原村 垂水村 廣津村

今吉村 掄生村 幸子村

鈴熊村 吉岡村 宇野村

八並村 中村 土屋垣村

直江村 別府村 大瀬村

土佐井村

高六千六百四拾七石九升
宇佐郡之内 百貳拾四箇村

高家村 敷田村 宮熊村

庄村 大根川村 黒水村

佐野村 時枝村 清水村

中野村 猿渡村 山下村

木部村 麻生村 末尾村

木内村 元重村 赤尾村

上田村 今成村 山袋村

城田村 葛原村 今井村

乙女村 平加倉村 矢部村

正覺寺村 川部村 辛嶋村

四日市村 中須加村 住江村

石田村 法鏡寺村 森山村

荒木村 澳洲村 尾永井村

芝原村 畑田村 樋田村

大塚村 山本村 香下村

櫛野村 沖本村 北山村

中原村 高並村 拜田村

別府村 廣瀬村 小坂村

御杳村 山城村 大副村

景平村 宮原村 大門村

月俣村 副原村 二日市村

上納持村 平原村 落加倉村

齋藤村 有德原村 定別當村

田所村 野地村 温見村

推屋村 來鉢村 和田村

羽馬禮村 惠良村 餘田村

大坪村 土岩屋村 田平村

萩廻村 栗山村 小平村

瀧貞村 岡山村 臺平村

惠良村 松本村 若林村

塔尾村 楢本村 房畑村

古川村 六郎九村 廣谷村

大尼尾村 口坪村 篠平村

矢津村 萱籠村 推屋尾立村

板場村 川崎村 五郎九村

大井村 壘石村 森山村

今井村 鳥越村 釜口村

内河野村 水車村 新貝村

佛木村 船板村 川底村

村部村 平山村 番木村

境坪村

高四万千三百八拾五石六斗六升八合

都合八万石

奥書右同

寛文四年四月五日

小笠原信濃守殿

武藏國入間埼玉比企高麗多摩五郡之内都合七万五千石
目録在ニ事如ニ前々宛ニ行之一訖全可ニ領知一者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

松平甲斐守とのへ

目録

武藏國

入間郡之内 八拾壹箇村

松江村 河越町 小久保村

寺井伊佐沼村 寺井松江村 寺井宿村

東明寺村 寺井上地村 脇田村

野田村 野田新田村 今成村

上寺山村 中寺山村 下寺山村

府川村 高畑村 綱代村

宿粒村 志垂村 福田村

石田本郷村 北田嶋村 石田村

菅間村 谷中村 伊佐沼村

杉下村 大仙波村 大仙波新田村

新宿村 鴨田村 豊田村

大袋村 大袋新田村 増形村

下奥富村 上奥富村 柏原新田村

入間川村 藤倉村 山城村

大塚村	高嶋村	古谷上郷村
八嶋村	古谷本郷村	南田嶋村
牛子村	小中居村	大中居村
並木村	木目村	久下戸村
大窪村	上南畑村	下南畑村
南畑新田村	宗岡村	澁井村
古市場村	今泉村	福岡村
福岡新田村	竹間澤村	龜窪村
砂村	的場村	上戸村
上廣谷村	下廣谷村	五味谷村
吉田村	小堤村	鯨井村
平塚村	平塚新田村	下小坂村
中小坂村	小沼村	赤尾村
高三万六千八百八拾六石七斗六升		
埼玉郡之内 五拾三箇村		

町場村	西谷村	下崎村下分
下崎村上分	内田谷村	上崎村
上會下村	新井村	境村
中目村	上程足村	中程足村
下程足村	戸室村	芋莖村

鴻莖村	牛重村	割目村
中曾根村	臺村	河原井村
除堀村	原村	樋口村
篠津村	野牛村	正能村
上高柳村	下高柳村	舟越村
水深村	中妻村	久品寺村
葛梅村	上内村	青毛村
上早見村	下早見村	青柳村
江面村	所久喜村	下清久村
上清久村	六万部村	今鉾村
辻村	大室村	小濱村
常泉村	日出安村	根古屋村
外川村	杓子木村	
高貳万九千三百壹石壹斗五升		
比企郡之内 三拾八箇村		

角泉村	下伊草村	上伊草村
一本木村	小美濃村	雲塚村
梅木村	吹塚村	松永村
谷中村	賀胡村	鳥羽井村
鳥羽井新田村	白井沼村	安塚村

奥書右同

寛文四年四月五日

松平甲斐守殿

越後國古志三嶋蒲原三郡之内都合七万四千貳拾三石
餘日録在
事任寛永二年十月廿三日十一年八月四日
先判之旨宛行之訖全可領知者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半右衛門

牧野飛驒守とのへ

目録

越後國

古志郡之内 百八拾貳箇村

- | | | | | | | | |
|------|-----|-----|------|------|------|-----|------|
| 釜嶋村 | 東山村 | 中瀉村 | 瀧谷村 | 渡澤村 | 竹ヶ花村 | 曲方村 | 宮内村 |
| 岩野村 | 浦柄村 | 妙見村 | 蛇山村 | 猪澤村 | 村松村 | 豐詰村 | 三十八村 |
| 十田町村 | 横渡村 | 白岩村 | 六日市村 | 犬茂嶋村 | 廣道村 | 上嶋村 | 新町村 |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|------|-------|-------|------|------|---------------|------------|------|------|------|-----|------|-----------|-----------|------|--------|---------|
| 飯嶋村 | 上貉村 | 山谷村 | 牛谷村 | 下新堀村 | 下大屋敷村 | 曲師村 | 中老袋村 | 高九千六百八拾四石七斗九升 | 高麗郡之内 拾四箇村 | 笠幡村 | 大谷澤村 | 上新田村 | 脚折村 | 大田谷村 | 高五千七拾七石三斗 | 多磨郡之内 三箇村 | 所澤村 | 高貳百五拾石 | 都合七万五千石 |
| 紫竹村 | 下貉村 | 表村 | 宿村 | 中江村 | 本村 | 下江村 | 下老袋村 | | | 柏原村 | 高萩村 | 中新田村 | 藤金村 | 戸宮村 | | | 上安松村 | | |
| 宮前村 | 釘無村 | 吉原村 | 上新堀村 | 上大屋敷村 | 西谷村 | 上老袋村 | | | | 下廣瀬村 | 高倉村 | 下新田村 | 三木村 | | | | 下安松村 | | |

三宮村	黒津村	稻葉村	漆山村	龜崎村	浦瀬村	水穴村	宮下村	乙吉村	西片貝村	野崎村	河崎村	高瀬村	寺嶋村	大町村	町田出倉村	梯村	蟲龜六箇村	定明村	片田村
榎山村	天神小屋村	下條村	百束村	耳取村	桂澤村	新保村	富嶋村	宮地村	東片貝村	長倉村	中澤村	千年村	高山村	土合村	横枕村	青木高畑村	四郎丸村	下條村	中屋敷村
高野村	芹川村	高見村	福島村	烏屋脇村	加津保澤村	小曾根村	龜貝村	麻生田村	栖吉村	常願寺村	谷内村	新町村	前嶋村	釜澤村	上條村	鷺巢村	鉢伏村	田中村	大石村

栗山澤村	半藏金村	大河戸村	泉村	枋堀村	小向村	市渡戸村	山屋村	神保村	葎谷村	瀧下村	中子村	西野俣村	輕井澤村	牛ヶ嶺村	時水村	田井村	南新保村	下柳村	大荒戸村
金澤村	中野俣村	吹谷村	菅畠村	宮澤村	來傳村	上檜出村	荷比村	山口村	原村	蜜谷村	卷淵村	木山澤村	一貝村	土ヶ谷村	本尊村	椿澤村	新町村	河袋村	福道村
下鹽村	本津川村	森上村	天下嶋村	松尾村	赤谷村	熊袋村	平村	惡戸河村	下檜出村	嶋田村	本所村	中村	楡原村	枋窪村	太田村	和田村	小貫村	李崎村	上柳村

鹽新町村 梅野俣村

九川村 地之嶋村

平中野俣村 水澤村

上鹽村 柄尾村

田口村 入鹽川村

鹽中村 人面村

鴉嶋村 宮野原村

横下村 道滿村

西野村 三江屋村

片端村 草生津村

種芋原村 永田村

溝村 蓮瀉村

柄尾村 攝田屋村

高四万千貳百拾石

三嶋郡之内 四拾箇村

中條村 田尻村

馬越村 吉津村

瓜生村 下河根川村

河根川村 王番田村

上除村 本大嶋村

瀧口村

文納村

二日町村

大野村

比禮村

名木野村

左近村

玄番村

田屋村

竹澤村

宮原村

卷嶋村

片貝村

澤新田村

富安村

飯嶋村

水梨村

堺村

青山村

安田村

福田村

高壹万四千八百四拾石
蒲原郡之内 六拾七箇村

粟生津村

大嶋村

本町村

下和納村

卷村

田嶋村

出江屋村

下山村

松野尾村

下條村

下山村

深山村

前嶋村

成澤村

福山村

寶地村

喜多村

親澤村

才津村

大嶋村

篠花村

青嶋村

廣野村

富岡村

吉田村

鴻巢村

原村

割前村

大野郷屋村

小瀬村

鱧江屋村

仁村

稻嶋村

中江屋村 保古野木村 明田村

大友村 赤縮村 曾根村

中野小屋村 升潟村 波加屋場村車場村

笠木村 押付村 眞田村

高山村 五十嵐濱 中濱

四門郷屋村 角田濱 横戸村

遠藤村 五野上村 熊谷村

杉澤村 新潟濱村 下粟生津村

楨嶋村 布目村 越前濱

泉村 尺子木村 勘介江屋村

楨尾村 小嶋村 坂井村

旗屋村 法花堂村 善光寺村

桑山村 藤野木村 中野村

高壹万七千九百七拾三石八斗五升

都合七万四千貳拾三石八斗五升

奥書右同

寛文四年四月五日

牧野飛驒守殿

山城國大世綴喜紀伊相良四郡之内貳万三千八百六拾石八斗餘近江國淺井蒲生野州栗本高嶋滋賀甲賀七郡之内四万九千七百四拾石六斗餘都合七万三千六百石

餘目録在紙之事如三前々宛行之訖全可令領知者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部傳右衛門

永井右近大夫とのへ

目録

山城國

久世郡之内 拾四箇村

嶋内村 楨嶋村 市田村

田井村 下津谷村 佐山村

佐古村 大久保村 林村

廣野村 枇杷庄村 富野村

御牧村 野尻村

高壹万貳千九百三拾壹石八斗貳升四合

綴喜郡之内 拾八箇村

戸津村 岩田村 三栖葭嶋村

松井村 大住村 田邊村

川原村 草内村 飯岡村

山本村 北奥戸村 南奥戸村
駄々羅村 高木村 江津村
天王村 高船村 打田村
高八千七百七拾石貳斗三升五合
紀伊郡之内 六箇村

納所村 納所葭嶋村 波田村
富森村 水垂村 大下津村
高千九百九拾六石壹斗八升五合
相樂郡之内

南稻八妻村
高七百六拾貳石五斗七升

近江國

淺井郡之内 三拾五箇村

上庄村 小山村 八田邊村
山田村 岩熊村 中村
横波村 余村 集福寺村
沓掛村 野坂村 祝山村
鹽津村 月出村 市場村
津里村 圓勝寺村 下八木村
五坪村 速水村 南速水村

小倉村 大安寺村 稻葉村
小觀音寺村 錦織村 小今村
川毛村 高畑村 瓜生村
田川村 富目村 別所村
大寺村 巢村
高壹万七千八百九拾貳石九斗八升七合
蒲生郡之内 三拾五箇村

武佐村 御所内村 長光寺村
長福寺村 石寺村 杉森村
中村 治土村 小船木村
大房村 寺内村 畑中村
西鍛冶屋村 東鍛冶屋村 東中小路村
西中小路村 西出村 小西路村
中小森村 田中江村 淨土寺村
横山村 宮井村 南池村
鈴村 下小房村 内池村
十膳寺村 野田村 川原村
音羽村 北藏王村 南藏王村
平子村 熊野村
高壹万三千二百拾七石六斗貳升四合

野洲郡之内 拾五箇村

六條村 野村 安治村

井口村 小比江村 須原村

播磨田村 赤野井村 十二里村

戸田村 水保村 川田村

行合村 三宅村 久野部村

高壹万六百五拾三石五斗八升三合

栗本郡之内 拾九箇村

古高村 燐魔堂村 二町村

針村 上山依村 坊袋村

小野村 小柿村 寺内村

上鉤村 平井村 小平井村

上寺村 上笠村 下笠村

吉田村 品村 下寺村

穴村

高五千三百六拾五石三斗六合

高嶋郡之内 貳箇村

永田村 下小川村

高千石

滋賀郡之内 貳箇村

千野村 谷口村

高千五石三斗四升八合

甲賀郡之内

北内貴村

高六百五石七斗六升八合

都合七万三千六百壹石四斗三升壹合

外高千九百九拾石三斗六升九合爲御用地被召

上替地以物成積被下故延高也本高不載

之

奥書同前

寛文四年四月五日

永井右近太夫殿

豊後國大野郡三万九千六百六拾四石九斗直入郡三万

四百拾八石八斗餘大分郡之内三百五拾六石四斗餘都

合七万四百四拾石^{別紙在}事任ニ元和三年九月五日先

判之旨ニ宛ニ行之^訖全可^ニ領知^ニ者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保金右衛門

中川山城守とのへ

目 錄

豐後國

大野郡之内 貳百五拾貳箇村

高三万九千六百六拾四石九斗四升

直入郡之内 貳百四拾箇村

高三万四百拾八石八斗

大分郡之内 五箇村

高三百五拾六石四斗三升

都合七万四百四拾石壹斗七升

奥書右同

寛文四年四月五日

中川山城守殿

卷 第十二

陸奥國盤城郡之内四拾六箇村壹万九千六百壹石六斗
餘磐前郡之内九拾七箇村三万三千七百九拾九石餘菊
多郡内四箇村千六百九拾七石六斗餘檜葉領三拾四箇
村壹万四千九百壹石六斗餘都合七万石

目錄在
別紙ニ
事如ニ

前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者飯高七兵衛

内藤帶刀とのへ

目 錄

陸奥國

磐城郡之内 四拾六箇村小物成高ニ入

柴原村 上平窪村 中鹽村

鯨岡村 四浪村 山田小港村

四倉村 北神谷村 絹谷村

下片寄村 原高野村 中神谷村

鹽野村 上小川村 買場村

上平村 下小川村 中平窪村

西平窪村 下平窪村 幕内村

上柳生村 下柳生村 藥王寺村

駒込村 山小屋村 八莖村

玉山村 長友村 名木村

狐塚村 中嶋村 白岩村

戸田村 鹽木村 新田村

細谷村 大森村 馬目村

水品村 上片寄村 泉崎村

下神谷村 上神谷村 大室村

鎌田村

高壹万九千六百壹石六斗壹升三合

磐前郡之内 九拾七箇村小物成高ニ入

愛谷村 高萩村 今新田村

合戸村 渡戸村 榊小屋村

中好間村 山崎村 荒田目村

菅波村 上大越村 下高久村

上高久村 下山口村 上山口村

沼内村 薄磯村 豐間村

永崎村 中山村 上荒川村

谷川瀬村 御臺境村 綴村

金成村 林城村 住吉村

岡小名村 上神白村 下神白村

中町村 馬玉村 長孫村

下船尾村 湯本村 下湯長谷村

上藤原村 中藤原村 熊野堂村

北目村 川中子村 三嶋村

下好間村 上好間村 北好間村

中寺村 下一萱村 上一萱村

大利村 久保町村 十五村

北白土村 町分村 南白土村

藤間村 下大越村 神谷作村

江名村 中作村 吉野谷村

小泉村 下荒川村 小嶋村

長橋村 御厩村 高坂村

高野村 宮村 白水村

内町村 松久須根村 上矢田村

下矢田村 三澤村 米田村

走熊村 上藏持村 下藏持村

久保村 船戸村 御代村

飯田村 岩出村 相子嶋村

大原村 中嶋村 南富岡村

嶋村 岩岡村 野田村

水野谷村 關村 上船尾村

上湯長谷村 下藤原村 北白鳥村

南白鳥村

高三万三千七百九拾九石九升七合

菊多郡之内 四箇村小物成高ニ入

關田村 植田村 新田村
洞村之内

高千六百九拾七石六斗五升三合イ貳

檜葉領 三拾四箇村小物成高二入

小濱村	佛濱村	波倉村
井出村	下小埦村	淺見川村
折木村	夕筋村	末續村
田綱村	大菅村	本町村
手岡村	小良濱村	毛萱村
下郡山村	上郡山村	北田村
大谷村	上小埦村	前原村
木戸山田村	北迫村	金澤村
小山田村	小久村	久濱村
大久村	下川内村	上川内村
上桶賣村	下桶賣村	川前村

高壹万四千九百壹石六斗三升七合

都合七万石

奥書右同

寛文四年四月五日

内藤帶刀殿

美濃國厚見郡之内四拾八箇村三万四千八百九拾三石
壹斗餘方縣郡之内貳拾貳箇村壹万五千八百九拾八石
三斗餘本巢郡内拾六箇村壹万三千九百六石餘席田郡
内七箇村四千四百貳拾四石四斗餘大野郡内兩村七百
八拾八石都合七万石別紙在事如三前々宛三行之訖全
可三領知一者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋長左衛門

松平丹波守とのへ

目録

美濃國

厚見郡之内 四拾八箇村

上加納村	下加納村	茜部村
本庄村	清村	六條村
西庄村	鏡嶋村	江崎村
江口村	管生村	東嶋村
岩戸村	日野村	野一色村

北一色村 前一色村 岩地村

水海道村 高田村 藏前村

切通村 細畑村 領下村

上川手村 下川手村 佐波村

鶉村 次木村 下奈良村

今嶺村 高河原村 日並江村

高桑村 中村 西嶋村

萱場村 中嶋村 北嶋村

且嶋村 近嶋村 成光村

若宮地村 上印食村 下印食村

北及村 南及村 坂丸村

高三万四千八百九十三石壹斗四升貳合

方縣郡之内 貳拾貳箇村

尻毛村 川邊村 一日市場村

下西郷村 河戸村 木田村

東改田村 曾我屋村 寺田村

小嶋村 又丸村 上西郷村

西改田村 鷺山村 黒野村

下鶉飼村 古市場村 御望村

下土居村 則武村 正木村

交人村

高壹万五千八百九拾八石三斗六升九合

本巢郡之内 拾六箇村

北方村 高屋村 生津村

上穂積村 下穂積村 別府村

前野村 見延村 宗慶村

小柿村 十四條村 輕海村

早野村 文珠村 法蓮寺村

美江寺村

高壹万三千九百九拾六石七斗五合

席田郡之内 七箇村

芝原村 石原村 加茂村

郡府村 春近村 三橋村

佛生寺村

高四千四百貳拾四石四斗壹升四合

大野郡之内 貳箇村

高科村 岐禮村

高七百八拾八石

都合七万石

奥書同前

寛文四年四月五日

松平丹波守殿

信濃國安曇郡百四拾四箇村三万四千三百貳石之餘筑
摩郡之内百四拾貳箇村三萬五千六百九拾七石九斗餘
都合七万石^{別紙}在^ニ事如^ニ前々^一宛^ニ行之^ニ訖全可^ニ領知^一
者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

水野出羽守とのへ

目録

信濃國

安曇郡 百四拾四箇村

氷室村	上角影村	下角影村
横澤村	北大妻村	南大妻村
杏村	龍田村	九田村
小室村	北條村	大窪村
田屋村	中村	寺家村
花見村	燒山村	大野田村

稻核村	大野川村	嶋倉村
中萱村	長尾村	小倉村
多田井村	楡村	岩原村
及木村	二木村	下堀金村
上堀金村	野澤村	中曾根村
熊倉村	飯田村	眞々部村
鳥羽村	成相村	成相新田村
岩岡村	小宮村	高松村
南中村	青嶋村	下方村
北中村	町村	穂高町
上平瀬村	下平瀬村	穂高町
穂高村	柏原村	牧野村
橋爪村	貝梅村	吉野村
寺所村	蹈入村	矢原村
細萱村	白金村	保々刀町
重柳村	耳塚村	嶽下村
荒屋村	立足村	古厩村
鼠穴村	板取村	松川村
西山村	上一本木村	下一本木村
細野村	深沼村	清水村

押野村	鹽河原村	萩原村	二重村	大鹽村	左右村
大日向村	宇留賀村	筆尾村	船場村	大平村	中村
小泉村	日岐村	北山村	高 三 萬 四 千 三 百 貳 石 九 升 壹 合		
池田町	正科村	中嶋村	筑 摩 郡 之 内 百 四 拾 貳 箇 村		
半在家村	宮本村	山寺村	田澤村	光村	塔原村
堀内村	相道寺村	花見村	明科村	大足村	潮村
瀧澤村	澁田見村	鷯山村	潮山中村	潮澤村	上生野村
中郷村	青木花見村	林中村	小立野村	下生野村	上生坂村
十日市場村	寺村	宮本村	下生坂村	高村	桑山村
會根原村	閭田村	丹生子村	上井堀村	下井堀村	麻績町
木舟村	館内村	常光寺村	市川村	長井村	安坂村
松崎村	大町村	野口村	矢倉村	野口村	桑關村
借馬村	木崎村	森口村	仁熊村	別所村	竹場村
稻尾村	海口村	中綱村	青柳村	中條村	苅屋澤村
青木村	佐野村	澤渡村	西條村	東條村	龍橋村
飯田村	飯森村	蕨平村	井苅村	落水村	西宮村
鹽嶋村	堀内村	千國村	宮本村	會田町	小岩井村
來馬村	石坂村	大綱村	兩瀬村	金井村	原山村
深原村	中谷村	土屋村	横川村	矢久村	召田村
青貝村	千見村	高地村	永越村	藤池村	穴澤村

二重村	大鹽村	左右村	塔原村	潮村	上生野村	上生坂村	桑山村	麻績町	安坂村	桑關村	竹場村	苅屋澤村	龍橋村	西宮村	小岩井村	原山村	召田村	穴澤村
船場村	大平村	中村																
高 三 萬 四 千 三 百 貳 石 九 升 壹 合			筑 摩 郡 之 内 百 四 拾 貳 箇 村															
田澤村	光村																	
明科村	大足村																	
潮山中村	潮澤村																	
小立野村	下生野村																	
下生坂村	高村																	
上井堀村	下井堀村																	
市川村	長井村																	
矢倉村	野口村																	
仁熊村	別所村																	
青柳村	中條村																	
西條村	東條村																	
井苅村	落水村																	
宮本村	會田町																	
兩瀬村	金井村																	
横川村	矢久村																	
永越村	藤池村																	

三溝村	北栗林村	中井村	荒井村	三才村	埋橋村	蟻崎村	兩嶋村	庄內村	林入村	中井村	藤井村	薄井村	荒井村	橫田村	水汲村	洞村	下岡田村	七嵐村	取出村
上波多村	南新村	嶋立村	堀米村	小嶋村	中林村	桐原村	白坂村	渚村	南小松村	南方村	桐原村	兎川寺村	湯原村	惣社村	淺間村	三才山村	井深村	保福寺村	板場村
下波多村	北新村	大庭村	小柴村	鎌田村	筑摩村	征矢野村	宮淵村	松本村	北小松村	橋倉村	北入村	荒町村	上金井村	下金井村	大井村	原村	稻倉村	岡田村	荊屋原村

出川町	並柳村	平田村
神戶村	二子村	上神林村
下神林村	溝代村	村井村
小屋村	吉田村	野井村
高井村	棧敷村	長町村
堀內村	大小屋村	鹽尻村
柿澤村	金井村	大井村
小野村	上西條村	下西條村
平出村	麻尾村	洗馬村
牧野村	本山村	日出鹽村
江原村	堅石町	今村
小俣村		

高三万五千六百九拾七石九斗九合

都合七万石

奥書同前

寛文四年四月五日

水野出羽守殿

近江國栗本郡内六拾九箇村三万四千百拾九石五斗餘
滋賀郡之内貳拾箇村八千六百四拾五石九斗餘高嶋郡

内貳拾六箇村八千六拾八石七斗餘甲賀郡内六箇村四千六百七拾七石餘淺井郡内七箇村三千四百八拾九石四斗餘伊香郡内四箇村九百九拾八石五斗餘河内郡錦郡内四拾箇村八千九百九拾八石貳斗餘石川郡内兩村九百七拾七石八斗餘丹南郡向野村貳拾三石八斗餘都合七万石^{別紙在}事如^三前々^ニ宛^ニ行之^ニ訖全可^ニ領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

本多下總守とのへ

目録

近江國

栗本郡之内 六拾九箇村

橋本村	神領村	大江村
大萱村	矢橋村	野路村
南笠村	黒津村	太支村
買津村	東村	大石中村
龍門村	淀村	小田原村
曾束村	富川村	稻津村
里村	枝村	森村

羽栗村	堂村	新免村
桐生村	芝原村	中野村
牧村	平野村	大鳥居村
今宿村	大門村	長束村
北中小路村	古高村	十里村
集村	笠川村	平井村
下釣村	下笠村	北山村
澁川村	草津村	矢倉村
追分村	品中村	片岡村
部田村	御倉村	南山田村
井上村	上山依村	今勝中村
東坂村	觀音寺村	伊勢落村
林村	六地藏村	辻村
出場村	千代村	勝部村
中澤村	岡村	下砥山村
川邊村	山寺村	岡本村
高三万四千百拾九石五斗七升		
滋賀郡之内 貳拾箇村		
西庄村	木下村	膳所村
中庄村	別保村	北大路村

國分村 鳥居川村 平津村

千町村 南郷村 内端村

外端村 苗鹿村 千野村

南庄村 上龍花村 下龍花村

鵜川村 家田村

高八千六百四拾五石九斗壹升五合

高嶋郡之内 貳拾六箇村

川嶋村 岡村 日爪村

平井村 東河原村 北端村

太田村 永田村 下古賀村

武曾村 鴨村 五十川村

南市村 鍛冶屋村 下城村

馬場村 産所村 三田村

仁和寺村 坂村 上寺村

請所村 三重生村 十八川村

庄堺村 五番領村

高八千六拾八石七斗八升壹合

甲賀郡之内 六箇村

西寺村 東寺村 柑子袋村

吉永村 正福寺村 石部村

高四千六百七拾七石七斗壹升貳合

淺井郡之内 七箇村

大浦村 菅浦村 安養寺村

青名村 野寺村 高田村

海老江村

高三千四百八拾九石四斗四升

伊香郡之内 四箇村

井口村 持寺村 中郷村

今市村

高九百九拾八石五斗八升

河内國

錦部郡之内 四拾箇村

小山田村 唐久谷村 下里村

日野村 鬼住村 喜多村

下岩瀬村 天見村 流谷村

上岩瀬村 寺本村 彼方村

古野村 上原村 西代村

市村 長野村 新家村

甲田村 惣作村 原村

石佛村 野村 向野村

清水村 三日月市村 伏見堂村

新町村 加賀田村 片添村

天野村 石見川村 鳩原村

大井村 小源村 畑村

小鹽村 廿山村 板持村

觀心寺村

高八千九百九拾八石貳斗四升六合

石川郡之内 貳箇村

佐備村 龍泉寺村

高九百七拾七石八斗七升

丹南郡之内

向野村

高貳拾三石八斗八升六合

都合七万石

奥書同前

寛文四年四月五日

本多下總守殿

出羽國最上郡内五拾九箇村四万六千三百五拾七石壹

斗餘村上郡内拾三箇村貳万八千八百四拾貳石八斗餘都

合六万八千貳百石^{目録在別紙}事任寛永貳年十一月十一

日先判之旨ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡部七兵衛

戸澤能登守とのへ

目録

出羽國

最上郡之内 五拾九箇村

富澤村 本城村 向町村

黒澤村 滿澤村 月楯村

若宮村 法田村 下村

大堀村 長澤村 新城市十日町村

新城五日町村 金澤町村 角澤村

鳥越村 京塚村 清水村

仁間村 升形村 川口村

飛田村 中渡村 曲川村

羽根澤村 福田村 船形村

猿羽根村 合海町本合海村 萩野村

神田村 眞室新町村 眞室内町村

戸澤能登守殿

播摩國明石郡百拾四箇村四万八千三百八拾七石五斗
美囊郡内六拾七箇村壹万六千六百拾貳石四斗餘都合
六万五千石^{別紙}日録在事如三前々一宛二行之二訖全可ニ領知
者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久左衛門

松平日向守とのへ

目録

播磨國

明石郡一圓 百拾四箇村

高四万八千三百八拾七石五斗四升

美囊郡之内 六拾七箇村

四合谷村 上和田村 高男寺村

中村 池野村 井上村

上村 大谷山村 大戸田村

小戸田村 三津田村 下村

中村 北僧尾村 南僧尾村

石奈坂村 高澤村 川内村

庭月村 大澤村 指首鍋村

木野下村 及位村 上臺村

有屋村 安澤村 下野明村

中田村 金山村内古城前 金山村内七日町村

金山内十日町村 山崎村 扑山村

飛森村 田茂澤村 南山村

赤松村 角川村 堀内村

藏岡村 古口村

高四万六千三百五拾七石壹斗貳升八夕

村上郡之内 拾三箇村

横山村 田澤村 駒井村

山内村 大久保村 上野村

大真木村 白鳥村 湯野澤村

岩木村 吉田村 北口村

工藤小路村

高貳万八千八百四拾貳石八斗七升九合貳夕

都合六万八千貳百石

奥書右同

寛文四年四月五日

大二谷村 小二谷村 入野村

萩谷村 南畑村 鍛治分村

原坂村 小川寺村 上芝原村

谷口村 下芝原村 升田村

田屋村 湯谷村 法光寺村

山上村 久次村 同所澤田分村

上松村 古市村 實樂村

上中村 出前田村 西浦村

熊谷村 山崎村 下荒川村

有安村 鍛治村 西大澤村

安場村 吉谷村 田井村

畑枝村 上荒川村 小屋寺村

同所門前 竹原村 毘沙門村

箕畑村之内 箱木村 西畑村

奥畑村 宮脇村 南大澤村

大畑村 草田村 桃尾村

二瀬川村 渡瀬村 同所下町村

長谷村之内

高壹万六千六百拾貳石四斗六升

都合六万五千石

奥書同前

寛文四年四月五日

松平日向守殿

壹岐國一圓壹万七千七百貳拾九石肥前國松浦彼杵

兩郡之内四万三千九百七拾壹石都合六万千七百石

別紙事如三前々宛三行之訖全可三領知一者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

松浦肥前守とのへ

目録

壹岐國一圓

壹岐郡 拾三箇村

高九千八百拾六石壹斗四升三合

石田郡 拾四箇村

高七千九百拾貳石八斗五升七合

肥前國

松浦郡之内 三拾六箇村

平戸村 小引村 大野村

目錄

讃岐國

三野郡一圓 貳拾七箇村

高壹万九千四拾三石七斗六升壹合

多度郡一圓 貳拾壹箇村

高壹万四千六百七拾六石八斗壹升

豐田郡一圓 三拾九箇村

高壹万千七百九拾三石四斗八升七合

那珂郡之內 拾九箇村

上金倉村 下金倉村 買田村

宮田村 追上村 山脇村

新目村 後山村 帆山村

生間村 大口村 福良見村

今津村 中府村 津森村

田村 山北村 櫛無村

佐久村

高四千四百九石五斗三升貳合

鶴足郡之內

下土井村

中野村 下方村 師子村

根師子村 糸屋村 津吉村

生月村 多久嶋 大嶋

小德賀 野崎嶋 六嶋

納嶋 班嶋 藪路木嶋

大嶋 田平村 上龜村

御厨屋村 星鹿村 青嶋

志佐村 調川村 今福村

福嶋 江迎村 船之村

佐々村 小佐々村 鷹島

吉田村 相神浦村 高島

高三万七千七百壹石

彼杵郡之內 五箇村

佐世保村 日宇村 早岐村

針尾村 指方村

高六千貳百七拾石

都合六万千七百石

與書右同

寛文四年五月廿五日

松浦肥前守殿

高百四拾三石九斗壹升

播磨國

揖保郡之内 貳拾八箇村

横濱奥濱村 大江島村

天満村 田井村

津市場村 上余部村

濱田村 刈屋村

黒崎村 片村

稻富村 山田村

中島村 碓岩村

馬場村 金剛山村

袋尻村 市場村

稱田村 山津屋村

高壹万石

近江國

蒲生郡之内 貳箇村

長田村 野田村

高千四百四拾五石

都合六万五千五百拾貳石五斗

内三千石者京橋賴母拜領之

奥書同前

寛文四年四月五日

京極百助殿

信濃國小縣郡内五万石更級郡河中島領之内壹万石餘
都合六万石^{別錄在紙}事任寛永二年十月廿三日同十一年八月四日雨先判之旨宛^宛行之^訖訖全可^{領知}者也
仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小島久左衛門

仙石越前守とのへ

目錄

信濃國

小縣郡之内 八拾六箇村

小牧村 諏訪形村 御所村

中條村 下條村 上田原村

筑地村 福田村 吉田村

小泉村 下室賀村 上室賀村

仁古田村 岡村 馬越村

當江村	奈良本村	殿戸村	八木澤村	山田村	十人村	保屋村	五賀村	平井寺村	加澤村	上鹽尻村	西脇村	常田村	青木窪村	染屋村	篠井村	洗馬村	甲石村	漆戸村	大屋村
村松村	水田懸村	越戸村	別所村	手塚村	本郷村	神畑村	下郷村	東松本村	武石村	秋和村	鎌原村	踏入村	下青木村	大久保村	野竹村	曲尾村	原江村	林郷村	田澤村
田澤村	夫神村	舞田村	野倉村	前山村	中野村	小島村	西松本村	田中村	下鹽尻村	生塚村	尻山村	國分寺村	岩門村	東城村	塚原村	横尾村	矢澤村	岩下村	栗林村

大塚村 中曾根村 本海野村

大川赤石村 太平寺村 河善寺村

東上田村之内 諏訪邊村 深井村

吉田村 上田城廻村

高五万石

更級郡之内 八箇村

稻荷山村 鹽崎村 岡田村

今井村 今里村 上氷鮑村

中氷鮑村 戸部村

高壹万八拾八石八斗五升三合

都合六万八拾八石八斗五升三合

奥書右同

寛文四年四月五日

仙石越前守殿

卷第十三

下總國印旛郡之内九拾八箇村壹万九千五百四拾九石
六斗餘相馬郡之内三拾五箇村壹万貳千百九拾七石六
斗餘垣生郡之内三拾三箇村九千貳百三拾壹石四斗餘

香取郡之内三拾壹箇村五千七百九拾四石壹斗餘千葉郡之内十八箇村三千八百三拾六石五斗餘匝瑳郡之内七箇村四百九拾三石餘常陸國筑波郡之内貳拾五箇村五千貳百三拾八石四斗餘上總國山部郡之内拾三箇村貳千四百八拾三石貳斗餘武村郡之内兩村貳百五石三斗餘都合六万石^{別紙}事如^三前々宛^三行之^三訖全可^三領知^三者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋長左衛門

松平和泉守とのへ

目録

下總國

印幡郡之内 九拾八箇村

新橋村	高野村	榎戸村	瓜坪新田村	和田村	八木村	鐮木村
須美村	文達村	大關新田村	下勝田村	別所村	寒風村	寺崎村
泉村	中澤村	高松村	上勝田村	米戸村	天邊村	高崎村

古澤村	高岡村	上代村	彌勒村	飯田村	飯野村	田町村	長岡村	本佐倉村	大和田村	小篠塚村	木子村	岩留村	用草村	下泉村	酒々井村	上岩橋村	下岩橋村	伊辨須村	臺方村
馬橋村	六崎村	城村	鍋山村	岩名村	下根村	角來村	法目村	本佐倉村町方	大篠塚村	和田村	宮本村	内田村	瀬田村	上泉村	中臺村	伊篠村	柏木村	大袋村	船形村
長熊村	石川村	大蛇村	大佐倉村	土浮村	山野崎村	江原新田村	本町村	萩山新田村	山梨村	神門村	岩留本村	飯塚村	砂子村	吉田村	中川村	伊篠新田村	下方村	飯塚村	北須加村

八代村 根本名村 大輪村
久能村 日吉倉村 公津新田村
小神村 釜狩村 武西村

谷田村 清戸村 師戸村
飯江村 龍福寺村 留澤村
白畑村 大廻村

高壹万九千五百四拾九石六斗六升貳合

相馬郡之内 三拾五箇村

大宿村 桑原村 井野村
青柳村 新田村 吉田村
小泉村 飯田村 百井戸村

酒詰村 中谷原村 澁沼村
小文間村 神浦村 大留村
田數村 押切村 平野村

宮和田村 片町村 藤代村
谷中村 小浮氣村 櫛木村
中内村 神住村 配松村

山王村 和田村 岡村
吉田村 毛有村 鬼長村
川崎村 寺畑村之内

高壹万貳千九拾七石六斗壹升四合
埴生郡之内 三拾三箇村

小管村 松崎村 大竹村
上福田村 龍角寺村 麻生村
興津村 佐野村 南鳥羽村

下福田村 押畑村 山口村
江部村 土屋村 成田村
關戸村 和田村 畑田村

川栗村 大和田村 西吉倉村
山野作村 下金山村 長田村
赤萩村 泉村 成毛村

大生村 飯岡村 水掛村
土室村 大室村 小泉村
高九千貳百三拾壹石四斗六升六合

香取郡之内 三拾壹箇村

一鉄田村 中里村 冬父村
名木村 七澤村 小菅村
名古屋村 高倉村 小野村

佐原村 林村 小高村
香取村 三分目村 先崎村

井土山隠田村

油田村

石成村

間倉村

中佐野村

大倉村

飯笹村

坂村

山川村

和田村

毛成村

伊能村

大戸川村

新市場村

吉原村

高萩村

高五千七百九拾四石壹斗三升九合

千葉郡之内 拾八箇村

野呂村

五十土村

高田村

谷津村

大草村

坂月村

仁戸名村

宮崎村

千葉寺村

寒川村

千葉町村

登戸村

川井村

佐和村

森村

赤井村

長峯村

原村

高三千八百三拾六石五斗貳升八合

葛飾郡之内 拾八箇村

臼井村

上座村

下市場村

村上村

萱田町村

大和田町村

米本村

保科村

行々林村

黒砂村

犢橋村

米崎村

若宮村

佐山村

車方村

田町村

芋窪村

眞木野村

高九百七拾石四斗七升

匝瑳郡之内 七箇村

貝塚村

横須加村

籠邊田村内

傍示戸村

小川臺村

宮川村

尾垂村

高四百九拾三石八升四合

常陸國

筑波郡之内 貳拾五箇村

下平柳村

中平柳村

上平柳村

狸淵村

山谷村

彌柳村

長渡路村

豐體村

成瀬村

下小目村

加藤村

古川村

丸山村

下長沼村

上長沼村

川俣村

樫木村

箕輪村

押砂村

同月村

東猶戸村

谷口村

市野深村

福田村

小張村

高五千貳百三拾八石四斗四升五合

上總國

山邊郡之内 拾三箇村

土氣村 平澤村之内 田中村

清名幸谷村 富田村 上谷新田村

小食土村 森村之内 湯坂村之内

姫嶋村之内 福田原村 北幸谷村

道庭村

高貳千四百八拾三石貳斗貳升

武射郡之内 貳箇村

菱田村 下吹入村

高貳百五十三斗七升貳合

都合六万石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平和泉守殿

陸奥國行方郡九拾四箇村三万千八百七拾五石七斗餘
標葉郡五拾壹箇村壹万三千六百九拾三石貳斗餘
宇田郡之内三拾六箇村壹万四千四百三拾壹石都合六万石
目録在事如三前々一宛三行之一訖全可三領知一者也仍如
別紙

レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者松浦伊右衛門

相馬長門守とのへ

目録

陸奥國

行方郡一圓 九拾四箇村

高三万千八百七拾五石七斗四升貳合

標葉郡一圓 五拾壹箇村

高壹万三千六百九拾三石貳斗三升六合

宇多郡之内 三拾六箇村

山上村 中野村 成田村

今田村 中野村 大曲村

馬場野村 程田村 小泉村

百槻村 小野村 富澤村

大坪村 岩子村 新田村

新沼村 南飯淵村 北飯淵村

黒木村 石上村 西山村

柚木村 磯部村 日下石村

坪田村 和田村 立谷村

塚部村 柏崎村 粟津村
初野村 蒲庭村 尾濱村
原竈村 椎木村 長老内村
高壹万四千四百三拾壹石貳斗貳升
都合六万石

奥書右同

寛文四年四月五日

相馬長門守殿

伊豫國喜多郡之内八拾三箇村浮穴郡之内五拾五箇村
伊豫郡之内拾七箇村風早郡之内六箇村攝津國武庫郡
之内貳箇村都合六万石^{別紙在}事内壹万石加藤織部可
進退之殘五万石宛^レ行之訖全可^レ領知^レ者也仍如
^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

加藤出羽守とのへ

目錄

伊豫國

喜多郡之内 八拾三箇村

上新屋村	藤繩村	田所村	川中村	川内村	五百木村	只海村	北表村	知清村	宿間村	成野村	中居谷村	植松村	四分市村	宇津村	黒木村	正信村	梅川村	柚木村
德森村	北山村	柳澤村	袋口村	論田村	城廻村	大瀬村	中津惣川村	重松村	大久喜村	奈良野村	川崎村	横山村	宇和川村	森山村	大竹村	桑野村	長谷村	北多田村
一新木村	下新屋村	戀木村	中山村	立山村	内子村	村前村	椽谷村	天神村	古田村	弦卷村	名荷谷村	宮谷村	鳥坂村	藏川村	菅田村	野佐來村	鳥坂村	松尾村

田口村	中村	若宮村	浮穴郡之内 五拾五箇村	北平村	小屋村	葛川村	大山谷村	上土谷村	高山村	阿藏村	大洲村	高萬三千九百三拾九石七斗七升	
五郎村	多田村	春川村		南山村	立石村	寺川村	本川村	露峯村	薄木村	中川村	上田渡村	日野川村	堦村
宇山村	八多喜村	戒川村		町村	中川村	本川村	露峯村	薄木村	中川村	多居谷村	猿谷村	高市村	下田渡村
手成村	米津村	加屋村		上川村	父川村	露峯村	薄木村	中川村	上田渡村	惣津村	高市村	下田渡村	石壘村
大越村	上老松村	黒田村		中川村	父川村	露峯村	薄木村	中川村	上田渡村	中田渡村	下田渡村	石壘村	堦村
柴村	下須戒村	櫛生村		上川村	父川村	露峯村	薄木村	中川村	上田渡村	中田渡村	下田渡村	石壘村	堦村
出海村	今坊村	上土谷村		南山村	立石村	寺川村	本川村	露峯村	薄木村	多居谷村	猿谷村	高市村	下田渡村
下土谷村	上須戒村	高山村		町村	中川村	本川村	露峯村	薄木村	中川村	多居谷村	猿谷村	高市村	下田渡村
阿藏村	大洲村			南山村	立石村	寺川村	本川村	露峯村	薄木村	多居谷村	猿谷村	高市村	下田渡村

麓村	串村	大久保村	伊豫郡之内 拾七箇村	中村	森村	三秋村	高壹萬四千四百三拾六石貳斗七升	麻生村	兩澤村	上唐川村	萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村
高峯村	上灘村	高川村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
出淵村	佐禮谷村	宮内村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
川井村	七折村	大角藏村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
外山村	五本松村	大南村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
岩屋口村	大平村	川登村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
三津野村	玉谷村	栗田村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
鷯崎村	兩澤村	上唐川村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
麻生村				市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
高壹萬三千五百三拾六石貳斗七升				市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
伊豫郡之内 拾七箇村				市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
中村	森村	三秋村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
市場村	本郡村	尾崎村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
稻荷村	大平村	下唐河村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
米湊村	吾川村	黒田村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
下三谷村	上三谷村	南神崎村		市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
八倉村	釣吉村之村			市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
高壹萬四千四百三拾六石壹斗六升				市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村
風早郡之内 六箇村				市場村	本郡村	尾崎村		萬年村	北河毛村	千足村	川登村	栗田村	上唐川村	栗田村	上唐川村	上唐川村

大浦村 小濱村 栗井村

宇和間村 怒和村 無須喜村

高千四百八拾三石八斗

攝津國

武庫郡之内 貳箇村

池尻村 南野村

高六千石

都合六万石

但喜多郡之内拾二箇村浮穴郡之内七箇村
伊豫郡之内四箇村高合壹萬石 加藤織部正

拜三領之一

奥書同前

寛文四年四月五日

加藤出羽守殿

上野國群馬郡之内九拾箇村五万貳千七百六拾八石五斗餘片岡郡之内三箇村四千貳百六石四斗餘碓氷郡上蔭田村貳拾五石近江國神崎郡之内五箇村貳千四百四拾貳石五斗餘高嶋郡藁藁村五百五拾七石四斗餘都合六万石

別紙目録在ニ事如ニ前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者

也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

安藤對馬守とのへ

筆者森 新兵衛

目録

上野國

群馬郡之内 九拾箇村

赤坂村 上並榎村 下並榎村

上小埜村 我嶺村 菊池村

西新波村 樂間村 行力村

北新波村 南新波村 下小埜村

筑繩村 上小鳥村 大八木村

井出村 濱川村 保渡田村

生原村 金敷平村 下小鳥村

中里村 足門村 柏木澤村

新井村 山子田村 下野田村

池端村 永岡村 上野田村

下野田村 小倉村 有間村

米原村 漆間村 阿久津村

河嶋村 湯中子村 金子新田村

飯塚村	菅谷村	小米村	濱尻村	新保田中村	小相木村	江木村	矢嶋村	南大類村	栗崎村	上佐野村	新後閑村	高關村	下城村	萩原村	河曲村	中嶋村	高五万貳千七百六拾八石五斗八升壹合	片岡郡之内	乘付村
正觀寺村	中泉村	中尾村	猪野村	日高村	内藤分村	上大類村	西嶋村	柴崎村	倉加野村	下佐野村	下和田村	上中居村	上新田村	横手村	箱田村	小見之内	三箇村	石原村	寺尾村
棟高村	三寺村	貝澤村	江田村	古市村	大友村	宿大類村	新保村	矢中村	綿貫村	和田多中村	岩押村	下中居村	下新田村	大澤村	稻荷新田村	稻荷臺			

高四千貳百六石四斗壹升四合
碓氷郡之内

上蒔田村
高貳拾五石

近江國

神崎郡之内 五箇村

山上村 佐目村 萱尾村

蓼畑村 杜葉尾村

高貳千四百四拾貳石五斗五升五合

高嶋郡之内

藁藺村

高五百五拾七石四斗五升

都合六万石

奥書右同

寛文四年四月五日

安藤對馬守殿

卷第十四

播摩國赤穂郡百拾九箇村三万五千貳百石賀西郡之内

三拾三箇村八千九百貳拾石八斗餘賀東郡之内貳拾四箇村八千貳百壹石九斗餘佐用郡之内五箇村千貳百拾貳石貳斗都合五万三千五百石^{別紙}日録在事如三前々宛二行之畢全可領知二者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋長左衛門

淺野内匠頭とのへ

目錄

播磨國

赤穂郡一圓 百拾九箇村

高三万五千貳百石

外三百六拾貳石六斗七升五合籠高

賀西郡之内 三拾三箇村

上野村	廣原村	佐谷村
下芥田村	上芥田村	上萬願寺村
下萬願寺村	東道山村	大内村
下若井村	上若井村	河原村
田井村	山川村	馬渡谷村
大工村	鍛冶屋村	湯谷村
田屋村	奥山寺	國正村

同所新田	柳山寺	中三原村
上三原村	明樂寺	同所新田
水尾村	落方村	下江波田
合山村	同所新田	新田村
高八千九百貳拾石八斗五合		

賀東郡之内 貳拾四箇村

穗積村	曾我村	貝原村
垂水村	窪田村	鳥居村
家原村	中村	梶原村
北村	木梨村	上田村之内
仁我井村	大門村	澤部村
黍田村	下三草村	上三草村
牧野村	多井田村	田中村
北野村	河高村	野村
高八千貳百壹石九斗七升四合		
佐用郡之内 五箇村		
西本江村	海田村	藏垣内村
中山村	山田村	
高千貳百拾貳石貳斗		
都合五万三千五百三拾四石九斗七升九合		

奥書同前

寛文四年四月五日

淺野内匠頭殿

和泉國泉南郡之内四拾七箇村貳万三千八百四拾九石
四斗餘日根郡之内四拾貳箇村貳万九千五百五拾石五斗
都合五万三千石^{別紙}目録在ニ事如ニ前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ
領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者小嶋小左衛門

岡部内膳正とのへ

目録

和泉國

泉南郡之内 四拾七箇村

岸和田町	春木村	加守村
野村	沼間村	藤井村
西内村	別所村	下松村
上松村	尾生村	額原村
包近村之内	作才村	土生村

日根郡之内

四拾四箇村

高貳万三千八百四拾九石四斗七升六合

畑村	極樂寺村	流木村
神須屋村	八田村	瀧村
河合村	和川村	塔原村
蕎原村	木積村	水間村
三松村	森村	名越村
清兒村	大川村	柜谷村
馬場村	三山村	中井村
半田村	鳥羽村	新井村
久保村	永吉村	小瀬村
堀村	福田村	嶋村
貝塚村	津田村	
脇濱村	浦田村	神前村
鍛冶村	畠中村	窪田村
堤村	石才村	橋本村
地藏堂村	王子村	七山村
大久保村	五門村	紺屋村
野田村	小垣内村	小谷村
久保村	土丸村	大木村

日根野村 上江村

瓦屋村之内

鶴原村之内 佐野村

嘉祥寺村之内

安松村 長瀧村

葛畑村

楠畑村 童子畑村

金熊寺村

六尾村 中村

牧野村

市場村 大苗代村

岡田村

樽井村 瀧村

馬場村

幡代村 男里村之内

高貳万九千五百五拾石五斗貳升四合

都合五万三千石

奥書右同

寛文四年四月五日

岡部内膳正殿

信濃國伊那郡之内九拾七箇村五万石上總國長柄郡之

内四箇村三千石都合五万三千石

行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

脇坂中務少輔とのへ

目録

信濃國

伊那郡之内 九拾七箇村

赤須村 田切村 石曾根村

本郷村 片切村 名子村

新井村 古町村 出原村

吉田村 大嶋山村 牛牧村

市田村 座光寺村 上黒田村

下黒田村 飯沼村 南條村

別府村 上飯田村 山村

名子熊村 一色村 北方村

大瀬木村 上殿岡村 下殿岡村

嶋田村 毛賀村 駄科村

桐林村 時俣村 上河路村

久米村 中村 三日月場村

竹佐村 山本村 伊豆木村

下瀬村 下河路村 柏原村

虎岩村 知久平村 伊久間村

伴野村 阿知原村 山田河内村

親田村	入野村	鎮西野村
新井村	雲雀澤村	古城村
栗野村	新木田村	鷺巢村
淺野村	門原村	小中尾村
田上吉田村	井戸村	早田村
和知野村	平久村	小野村
千木村	深見村	中屋御伴村
大平大那木村	大森平石村	神子野屋村
河田村	新野村	小河内村
長岡村	三日町村	福與村
下寺村	福嶋村	御子柴村
田端村	殿村	窪村
木下村	松嶋村	大出村
上古田村	下古田村	八乙女村
富田村	羽廣村	與地村
中條村	上戸村	大萱村
大泉村		

高四万九千九百七拾六石四斗八合六夕

上總國

長柄郡之内 四箇村

本江村 新笈村 藪塚村
 水口村
 高三千石
 都合五万三千石
 古今度被_レ差上_二郡村之帳面都合高之通及_二上聞_一所
 被_レ成下_一御朱印也此儀兩人奉行依_レ被_二仰附_一執達
 如_レ件

寛文四年四月五日

脇坂中務少輔殿

日向國那珂郡之内三拾九箇村四万貳千五百七拾三石
 九斗餘宮崎郡之内四箇村八千五百拾貳石四斗餘都合
 五万千八拾石_{別紙在}事如_二前々_一宛_二行之_一全可_二領知_一
 者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者飯高七兵衛

伊東出雲守とのへ

目録

日向國

那珂郡之内 三拾九箇村

恒久村	田吉村	郡司分村
隈野村	加江田村	鏡洲村
酒谷村	吉野方村	楠原村
板敷村	星倉村	戸高村
平野村	西辨分村	隈谷村
北河内村	郷原村	大藤村
東辨分村内	殿所村	益安村
平山村	風田村	宮浦村
富士浦	伊比井村	塚田村
大窪村	萩嶺村	毛吉田村
上方村	下方村	橋口村
谷口村	中村	津屋野村
潟上村	脇本村	熱波村
高四万貳千五百七拾三石九斗五升		
宮崎郡之内 四箇村		
加納村	木原村	今泉村
田野村		
高八千五百拾貳石四斗六升三合		
都合五万千八拾六石四斗		

奥書同_二于岡部内膳正_一

寛文四年四月五日

伊東出雲守殿

石見國那賀郡之内六拾箇村貳万四百石七斗餘邑知郡之内三拾五箇村壹万七千八百七石七斗餘美濃郡之内四拾貳箇村壹万貳千貳百三拾四石餘都合五万四百四拾貳石餘_{別紙在}事如_二前々_一宛_二行之_一訖全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者渡部七郎兵衛

松平周防守とのへ

目録

石見國

那賀郡之内 六拾箇村

原井村	黒川村	淺井村
長澤村	上府村	下府村
久代村	波子村	宇屋川村
都農津村	加久志村	千金村

高田村	神主村	飯田村
千田村	大津村	神田村
渡野村	姉金村	有福村
南川上村	阿部市村	本明村
宇野村	宇津井村	七條村
伊木村	細谷村	鍋石村
野坂村	栃木村	木都賀村
西郷村	黒澤村	上古和村
下古和村	田橋村	内田村
中場村	吉地村	和田村
室谷村	蘆谷村	西濱村
門田村	周布村	長濱村
日脚村	平原村	津摩村
折居村	平原村	西河内村
岡崎村	古市場村	岡見村
向田村	河内村	矢原村
高貳万四百石七斗壹升		
邑知郡之内 三拾五箇村		
市山村	渡賀村	田津村
因原村	鹿賀村	築瀬村

龜村	瀧原村	信喜村
八色石村	宮内村	高見村
宇津井村	日和村	村郷村
原村	布施村	木須田村
都賀西村	口羽村	上田村
戸河内村	阿須那村	今井村
井原村	出羽村	鱒淵村
和田村	雪田村	比敷村
中村	八上村	田所村
龜谷村	市木村	
高壹万七千八百七石七斗九升四合		
美濃郡之内 四拾貳箇村		
宇治村	金山村	平原村
土田村	木部村	津田村
遠田村	久城村	下本郷村
上本郷村	中須村	中島村
乙吉村	益田村	吉田村
多田村	乙子村	大谷村
久々茂村	篠倉村	小原村
朝倉村	三谷村	仙道村

久原村 都茂村 九茂村

下波田村 上波田村 廣瀬村

千原村 澄川村 小平村

内谷村 内石村 七村

道谷村 西村 東村

道川村 三葛村 廣見河内村

高壹万貳千貳百三拾四石八合

都合五万四百四拾貳石五斗壹升貳合

奥書同前

寛文四年四月五日

松平周防守殿

陸奥國白川郡之内八拾八箇村三万貳千五百拾四石五斗餘菊多郡之内拾箇村七千五百七拾三石三斗常陸國多珂郡之内拾六箇村壹万貳石九斗餘都合五万拾石

紙_在別事如_三前々_ニ宛_ニ行之_ニ畢全可_ニ領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者森 新兵衛

目錄

陸奥國

白河郡之内 八拾八箇村

伊野上村 伊野下村 金澤内村

瀬野村 小爪村 祝部内村

富岡村 山際村 强梨子村

大梅村 上手澤村 下手澤村

北山本村 中山本村 下山本村

寺山村 八槻村 臺宿村

伊香村 植田村 眞名畑村

茗荷村 内川村 關岡村

板橋村 玉野村 一色村

福井村 堤村 天王内村

逆川村 上臺村 檜木村

小菅生村 仁公儀村 花蘭村

關口村 上澁井村 下澁井村

塙村 竹内村 板庭村

上石井村 中石井村 下石井村

戸塚村 東館村 金澤村

小田川村 寶坂村 下關河內村

上關河內村 高野村 山下村

流村 塚原村 山田村

岡田村 西河內村 東河內村

常世中野村 常世北野村 中塚村

田作村 山形村 川上村

木反村 湯岐村 片海村

大蕨村 田代村 那倉村

渡瀬村 菅生村 赤坂東村

赤坂中村 赤坂西村 堀越村

竹貫村 松川村 大久田村

山上村 論田村 田口村

鎌田村 石井草村 千石村

西山村

高三万貳千五百拾四石五斗四升

菊多郡之内 拾箇村

上遠野村 石住村 大平村

入遠野村 上根本村 深山田村

根岸村 瀧村 上山田村

小山田村

常陸國 高七千五百七拾三石三斗五升

多珂郡之内 拾六箇村

關本上村 關本中村 關本下村

山小屋村 八反村 平方村

神岡村 薄葉村 中妻村

車村 下相田村 小津田村

小豆畑村 花蘭村 材丸村

山小川村

高壹万貳石九斗九升

都合五万九拾石

與書如前

寛文四年四月五日

内藤豊前守殿

卷第十五

豊後國海部大野大分三郡之内所々都合五万六拾石餘
日在事任元和三三年五月廿六日寛永拾一年八月四
別紙
日兩先判之旨充行之訖全可領知者也仍而如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋長左衛門

稻葉能登守とのへ

目錄

豊後國

海部郡之内 九拾七箇村

吉小野村	中原村	才倉村	提内村	山内村	河内村	鬼丸村	赤木村	長野村	岡前村	門前村	志手村	長目村	風成村	海添村
久木小野村	岩屋川村	狭岡村	正願村	高須村	東神野村	葛畑村	原畑村	皿口村	平岩村	小園村	警固屋村	堅浦村	坪江村	内畑村
松原村	井上村	半三村	廣原村	小切畑村	乙見村	松川村	垣籠村	藏富村	道尾村	道籠村	松崎村	德浦村	深江村	大泊村

大野郡之内 百四拾三箇村	高壹万八千八百拾三石七斗貳升五合	廣内村	大津留村	岡村	久土村	市尾村	下江村	大濱村	町屋敷村	福良村	田井迫村	中尾村	家野村	市濱村	江無田村	井無田村	三重野村	藤ヶ河内村	通村
		毛井村	誓願寺村	原村	里村	藤田村	中津浦村	平岡村	仁王座村	野村	深田村	搔懷村	門前村	田篠村	田篠村	芝尾村	田井口村	田井口村	中川村
		宮河内村	久所村	一木村	屋山村	佐志生村	黑岩村	碓江村	原村	小河内村	望月村	左津留村	荒田村	戸室村	末廣村	北川村	大野村	松ヶ嶽村	

寺小路村	持田村	筒井村	菅無田村	芝尾村	鹽柏村	城崎村	備後尾村	田良木村	塚田村	溜水村	戈原村	持丸村	板屋村	落谷村	白岩村	中野村	岩崎村	內平村	西神野村
下藤村	中山村	赤迫村	寺田村	小切畑村	花原村	名塚村	田之平村	福青田村	松尾村	岩瀬村	田中村	竹邊村	市口村	野口村	蕨野村	岩屋村	今俵村	泊河村	垣河內村
廣原村	日當村	桐木村	池原村	生野原村	若山村	田良原村	小屋川村	藏園村	笠良木村	大內村	水地村	迫熊村	八熊村	竹下村	黑土村	豐藏村	清水原村	田代村	遠久原村

山田村	田町村	松谷村	小坂村	竹脇村	谷ヶ平村	大內河村	奧畑村	白岩村	一木村	篠枝村	赤峯村	長谷村	荻原村	細口村	寒田村	桑畑村	於牟連村	木所村	牧原村
深田村	久原村	山中村	松尾村	田中村	橘原村	山口村	折立村	出羽村	前河內村	吉岡村	天手村	高松村	黑坂村	鍋田村	松原村	長小野村	利野村	生野村	波津久村
羽飛村	中尾村	小津留村	鷺谷村	入北村	石之上村	尾原村	津留村	細枝村	椎原村	川平村	長小野村	山奧村	戸上村	久原村	御靈蘭村	福原村	平野村	內河野村	黍野村

鬼塚村	内山村	久知良村
内田村	赤嶺村	市場村
肝煎村	玉田村	川邊村
向野村	百枝村	法泉庵村
西原村	田原村	宇對瀨村
又井村	蘆刈村	菅生村
森迫村	淺水村	宮尾村
深野村	德瀨村	
高壹万八千四百石六升貳合		

大分郡之内 三拾九箇村

福良村	宮尾村	月形村
辻村	志津留村	長小野村
原村	月原村	上尾村
影木村	大塔村	利光村
市村	川床村	備後村
佐柳村	楠木生村	小津留村
大内村	横尾村	葛木村
猪野村	小池原村	森村
森町	家嶋村	上宗方村
下宗方村	桑本村	市村

世利村 田原村 横瀨村
 北方村 赤野村 柏野村
 鬼瀨村 池上村 東行村
 高壹万三千四百拾七石九斗八升貳合
 都合五万六拾五石餘
 奥書同上

寛文四年四月五日 稻葉能登守殿

遠江國城飼郡之内六拾七箇村三万七千九拾四石壹斗
 餘山名郡之内三拾七箇村壹万貳千九百拾六石五斗餘
 都合五万石餘
別紙
 領知者也仍如件
 事如前々充行之一訖全可令

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡邊七郎兵衛

本田越前守とのへ

目録

遠江國

城飼郡之内 六拾七箇村

國包村	來福村	合戶村	佐倉村	上柴村之内	新野村	奈良野村	下内田村	小貫村	板澤村之内	今瀧村	向村	毛森村	海戶村	西大坂村	濱野村	中新井村	下野中村	大淵村	三輪村
國安村	堂山新田村	門屋村	宮内村	上朝比奈村	河東村	土橋村	岩滑村	高瀬村	岩井寺村	落合村	下土方村	公文村	西谷村	東大坂村	大荒井村	藤塚村	雨垂村	石津村	岡崎村
成行村	坂里村	池新田村	下柴村之内	下朝比奈村	嶺田村	半濟村之内	中方村	子隣村	入山瀬村	峯村	川久保村	下方村	大石村	三俣村	野賀村	上野中村	沖須村	清谷村	中新田村

新川村	濱村	同笠新田村	東同笠村	高橋村之内	赤土村之内	小出村之内	高三万七千九拾四石壹斗壹升四合九勺	山名郡之内 三拾七箇村	馬場村	柴村	上諸井村	下諸井村	赤尾村	神長村	石野村	梅田村	石原村	持廣村	岡山村	小口市場村	高部村	太良助村	同笠村	東山村	松山村	松原村	新堀村	松下村	篠谷村	彌太井村	小嶋方村	港村	初越村	西崎村	中野村	平民村	善能寺村	永長村	米丸村	一色村	扇野村	中村	長溝村	八幡村	小野田村	高壹万貳千九百拾六石五斗八升五合	郡合五万拾石六斗九升九合九勺
-----	----	-------	------	-------	-------	-------	-------------------	-------------	-----	----	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	------	------------------	----------------

奥書同前

寛文四年四月五日

本多越前守殿

日向國臼杵郡之内貳万五千六拾九石五千餘宮崎郡之内壹万六千六百七石貳斗餘那阿郡之内貳千八百四石七斗餘兒嶋郡之内五千拾石壹斗餘諸縣郡須志田村五百八石壹斗餘都合五万石^{別紙}目録在事如前々一充一行之訖全可令領知之狀仍如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者大橋長左衛門

有馬左衛門佐とのへ

目録

日向國

臼杵郡之内 六拾九箇村

北方村

南方村

岡富村

祝子村

稻葉崎村

栗野名村

大武町村

河嶋村

長井村

河内名村

宮浦村

三河内村

市振村	古江村	熊野江村
須怒江村	浦尻村	出北村
恒富村	大貫村	三須村
三輪村	伊福形村	土々呂村
櫛津村	鯛名村	赤水村
庵川村	加草村	尾末村
門川村	河内村	黒木村
入下村	宇納間村	田代村
立石村	小原村	水清谷村
神門村	鬼神野村	上渡川村
中渡川村	山三箇所村	坪屋村
下三箇村	山陰村	鹽見村
財光寺村	平岩村	口田高村
日知屋村	七折村	岩戸村
山裏村	三田井村	下野村
上野村	田原村	河内村
五箇所村	鞍岡村	三箇所村
押方村	向山村	岩井川村
分城村	家代村	七山村
高貳万五千六拾九石五斗七升七合		

宮崎郡之内 貳拾三箇村

瓜生野村 上北方村 名田村

下北方村 上別府村 池内村

南方村 村角村 大嶋村

大田村 福嶋村 源藤村

庵屋 船引 生目村

大塚村 細江村 長嶺村

浮田村 跡江村 柏原村

富吉村 小松村

高壹万六千六百七石貳斗八升六合

那珂郡之内 四箇村

吉村 下別府村 江田村

新別府村

高貳千八百四石七斗八升九合

兒嶋郡之内 九箇村

穗北村 童子丸村 三宅村

清水村 調殿村 右松村

岡富村 黒生野村 現王嶋村

高五千拾石壹斗九升貳合

諸縣郡之内

須志田村

高五百八石壹斗五升六合

都合五万石

奥書右同

寛文四年四月五日

有馬左衛門佐殿

備後國三須惠蘇兩郡并御調世良二郡之内四万七千

五拾石餘安藝國佐伯豐田高田三郡之内貳千八百四拾

石餘都合五万石^{別紙}在^{目録}事任^{寛永拾一年八月四日}先

判之旨^充行之^訖全可^{領知}者也依如^件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

淺野因幡守とのへ

目録

備後國

三須郡之内 四拾貳箇村

原村 青河村 上布野村

下布野村 戸河内村 茂田村

泉吉田村

櫃田村

横谷村

門田村

大山村

香淀村

上作木村

光盛村

西野村

大津村

森山西村

下作木村

大畑村

伊加和志村

東村

穴笠村

森山中村

昌敷村

南島敷村

後山村

東河内村

西河内村

小文村

日下村

三原村

入君村

藤兼村

石原村

川立村

志和地村

下板木村

福田村

羽出庭村

西酒屋村

東酒屋村

大力谷村

高貳万貳千九百五拾石七斗壹合

惠蘇郡之内 貳拾四箇村

木戸村

下村

上村

下原村

戸江村

田原村

本江村

市村

門田村

河北村

木屋原村

三河内村

比和村

森脇村

湯川村

高山村

古比村

宮内村

竹地谷村

大月村

白泉村

湯木村

濁川村

高茂村

高貳万千七百貳拾九石八斗六合

三須惠蘇兩郡之内

鐵山高

吹役鐵穴役 高三百五拾七石七斗六升

御調郡之内 貳箇村

吉和村

二野村

高七百九拾六石五斗八升

世羅郡之内

加茂村

高千貳百八拾七石四斗七升三合

安藝國

佐伯郡之内 貳箇村

草津村

渡田村

高百五拾貳石五斗七升五合

豐田郡之内

忠海村

高千七百三拾九石九斗壹升五合

高田郡之内

上甲立村

高九百八拾五石八斗貳升

都合五万石

奥書右同

寛文四年四月五日

淺野因幡守殿

丹波國多紀桑田兩郡之内四万八千八百三十九斗餘攝

津國兎原嶋下貳郡之内千百九拾六石餘都合五万石

在別紙事如前々充行之訖全可領知者也依如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者飯高七兵衛

松平若狹守とのへ

目錄

丹波國

多紀郡之内 百九箇村

八上々村

八上下村

八上奥谷村

野垣村

曾地村

後川村

波々伯部村

福住村

般若寺村

本明谷村

川原村

枋無村

縣守村

幡路村

井串村

泉村

市野村

宮代村

中村

三熊村

大藤村

福井村

藤坂村

細工所村

向井村

小田中村

山田村

小立村

鹽岡村

貝田村

小原村

笹見村

奥畑村

里畑村

小野奥谷村

本庄村

安田村

貳坪村

小野波多村

藤木村

草上村

奥縣守村

春日江村

新庄村

小多田村

池上村

野中村

真南條村

小枕村

谷山村

栗栖野村

當野村

矢代村

味間村

犬飼村

波賀野村

大澤村

岩崎村

宇土村

油井村

不來坂村

小野原村

本庄村

黒石村

市原村

立枕村

木津村

本岡屋村

西岡屋村

黒田村

川北村

大山上村

大山中村	大山下村	追入村
西吹村	東吹村	綱掛村
古佐村	坂本村	大野村
郡家村	野尻村	濱谷村
今福村	熊谷村	藤岡村
佐倉村	大谷村	鷺尾村
知足村	寺内村	西谷村
宮田村	高屋村	木部村
板井村	垣屋村	打坂村
乘竹村	小坂村	高坂村
倉本村	栗栖村	草山村
澤田村	野間村	大熊村
黒岡村		

桑田郡之内 三拾五箇村
高四万三千八百四拾五石五斗五升 但山役共

周山村	五本松村	井崎村
下熊田村	宇野村	淺江村
西村	矢代中村	淺谷村
上熊田村	鹽田村	清田村
澤矢谷村	弓削中村	赤石村

攝津國

兔原郡之内 貳箇村

大野村	岩江土村	小笹尾村
音海村	向山村	脇谷村
萱野村	河合村	洞村
松尾村	神谷村	名島村
北村	南村	中島村
下村	江和村	田歌村
杉村	印地村	

高四千九百五拾八石四斗

嶋下郡之内
稗田村 新在家村
高百八拾石四斗七升六合

太田村

高千拾五石五斗七升四合

都合五万石

奥書同前

寛文四年四月五日

松平若狹守殿

陸奥國田村庄之内八拾貳箇村都合五万石別紙在ニ事
 如ニ前々ニ充ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ之者也依如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡邊七郎兵衛

秋田安房守とのへ

目録

陸奥國

田村庄之内

八拾貳箇村

三春町村	牛縊本郷	黒木村	蛇石村	込木村	木目澤村	蛇澤村	高倉村	齊藤村	貝山村
片澤村	過足村	駒板村	春田村	瀧村	狐田村	下枝村	赤沼村	沼澤村	平澤村
樂内村	上石村	樋渡村	柴原村	根本村	西方村	海老根村	細田村	鷹巢村	御祭村

奥書右同

都合五万石

笹山村	永谷村	上大越村	廣瀬村	牧野村	遠山澤村	三町目村之内	北成田村	板橋村	七草木村	堀田村	山根村	船引村	西向村	今泉村	北宇津志村	北鹿股村	青石村
熊耳村	桐山村	菅谷村	湯澤村	門澤村	葦澤村	常葉町村	土棚村	李田村	關本村	小檜山村	古道村	上宇津志村	久保村	津島村	門鹿村	實澤村	
春山村	下大越村	神役村	栗出村	堀越村	鬼生田村	高柴村	大畑村	南成田村	早稻川村	岩井澤村	新田作村	南宇津志村	鹿山村	石森村之内	石澤村	長外路村	

寛文四年四月五日

秋田安房守殿

伊勢國鈴鹿郡之内七拾貳箇村四万三千三百餘三重郡之内五箇村貳千七百四拾石五斗餘川曲郡之内八箇村五千九百五拾九石四斗餘都合五万石^{目錄在別紙}事如^レ前々充^レ三行之訖全可^レ領知之狀依如^レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者建部傳右衛門

石川主殿頭とのへ

目錄

伊勢國

鈴鹿郡之内 七拾貳箇村

龜山東町 同所西町

野尻村 落針村

木崎村 新所村

沓掛村 鷺山村

白木村 高宮村

住山村 羽若村

野 小野村

一瀬村

大岡寺村

小川村

龜田村

和田村

海善寺村

原尾村

岩森村

和泉村

菅内村

木下村

上野村

南畑村

小岐須村

水澤野田村

國府村

井舟村

堂賀村

鹿間村

下大久保村

平田村

甲斐村之内

高四万三千三百石壹斗五合

井尻村

小田村

鳥法寺村

田村

西富田村

安野田村

池山村

安樂村

平尾村

山本村

原村

八野村

小社村

波牟田村

津賀村

上田村

弓削岡田村

甲斐無里

川合村

椿世村

太田村

長明寺村

中富田村

山下村

坂本村

北畑村

長澤村

大霏村

川崎村

深溝村

岸田村

伊船野田村

廣瀬村

平野村

算所村

三重郡之内 五箇村

北小松村 萩村 貝家村

南小松村 川島村

高貳千七百四拾石五斗七合

河曲郡之内 八箇村

北若松村 南若松村 中若松村

岸岡村 野部村 竹野村

三日市村 安塚村

高五千九百五拾九石四斗七升八合

都合五万石

奥書同前

寛文四年四月五日

石川主殿頭殿

但馬國出石郡七拾九箇村貳千七百三拾三石四斗養父郡之内六拾三箇村壹万六千六百餘氣多郡之内三拾箇村九千八百六拾壹石三斗餘美含郡之内三拾七箇村六千貳百九拾貳石餘朝來郡八代村百六石五斗餘都合五万石^{目録在別紙}事如^三前々^一充^三行之^二訖全可^三領知^レ之者也依如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小島久左衛門

小出大和守とのへ

目録

但馬國

出石郡一圓 七拾九箇村

日野邊村 上野村 桐野村

寺坂村 水石村 畑野村

河本村 天谷村 矢根村

出合村 三尾村 佐々木市場村

中佐々木村 小谷村 相田村

正法寺村 平田村 栗尾村

佐田村 久畑市場村 後河内村

中村 小坂村 大河内村

藥王寺村 赤花村 坂津村

畑山村 中山村 藤森村

坂野村 高龍寺村 西野村

東里村 太田市場村 木向村

加羅川村 三原村 日向村

奥山村 弘原上村 中村

下村	鍛冶屋村	長砂村
細見村	荒木村	福見村
暮坂村	鳥井村	尾崎村
森村	中谷村	九谷村
大谷村	三木村	片間村
島村	權現村	伊豆村
多田地村	安良村	倉見村
長谷村	鉢山村	霞村
立石村	三宅村	森尾村
穴見市場村	奥野村	奥小野村
口小野村	袴狹村	宮内村
坪井村	水上村	出石村
出石村	出作	

高貳万貳千七百三拾三石四斗

養父郡之内 六拾三箇村

宿南村	赤崎村	淺倉村
青山村	三谷村	淺間村
下小田村	上小田村	坂本村
大江村	岩崎村	網庭村
舞狂村	大藪村	藪崎村

門前村	養父市場村	米地村
大塚村	土田村	寺谷村
平野村	東谷村	小城村
上野村	上村	廣谷村
十二所村	稻津村	伊豆村
畑村	大坪村	淺野村
新津村	左近山村	玉見村
宮垣村	樽見村	宇山村
中屋村	夏梅村	加保村
大屋村	大杉村	笠谷村
藏垣村	中間村	筏路村
若杉村	橫行村	山路村
糸原村	宮本村	門野村
須西村	和田村	小佐村
小山村	朝倉村	米里村
高柳村	國木村	八木村 <small>入作分</small>

高壹万千六百六拾五合

氣多郡之内 三拾五箇村

清冷寺村	伏村	加屋村
上佐野村	引野村	土淵村

中江村	芝村	野庄村
上石村	池上村	堀本村
府市場村	片貫村	山本村
水上村	土井村	松岡村
伊福村	上江村	日置村
江原村	宵田村	國分寺村
石立村	禰布村	夏栗村
久斗村	道場村	海老原村
山宮村	若色村	栗栖野村
大岡寺村	八代中村	
高九千八百六拾壹石三斗三合		
美含郡之内 三拾七箇村		
竹野村	須井村	相谷村
安木村	訓谷村	無南垣村
久斗村	米地村	丹生地村
隼人村	下岡村	上岡村
畑村	土生村	三川村
本見塚村	大森村	丹生浦上村
丹生沖村	丹生上村	境村
一日市村	若松村	香住村

七日市村	矢田村	下濱村
由良村出作	須栖村	森村
加鹿野村出作	小原村	中野村
藤村	八原村	久斗山村
余部村		
高六千貳百九拾貳石六升五合		
朝來郡之内		
八代村		
高百六石五斗六升七合		
都合五万石		
奥書右同		

寛文四年四月五日

小出大和守殿

越後國蒲原郡之内五万石目録在別紙事任慶長十五年十二月廿八日寛永十一年八月四日兩先判之旨充二行之訖全可領知者也依如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

溝口出雲守とのへ

目錄

越後國

蒲原郡之内

貳百五拾箇村

新發田町

猿橋村

富塚村

弓越村

奥山新保村

則清村

佐々木村

中曾根村

新田村

小船渡村

中田村

中谷内村

道賀村

桑口村

長島村

西名栖村

西塚目村

東塚目村

嶋潟村

板敷村

金屋村

五十公野村

古寺村

上新保村

下新保村

小美村

山崎村

牛首村

山内村

中山村

米藏村

大崎村

八幡村

松岡村

法正橋村

赤井橋村

浦梅村

荒町村

二牧橋村

切梅村

二堂村

北菱口村

西菱口村

竹花村

北飯嶋村

西飯嶋村

宮内村

品奥野村

池端村

中目村

乙次則持村

飯塚村

吉浦村

三例村

竹俣萬代村

加地萬代村

岡屋敷村

本田村

中嶋村

川崎村

高田村

駒林村

里飯野村

堀田村

山飯野村

長戸呂村

高森村

三屋村

下條村

拾四村

荒屋村

五分一

新飯田村

五箇村

下里村

加勢嶋村

分田村

小潟村

沖館村

七日町村

新津村

下興野村

北上興野村

梅木村

出戸村

四興野村

新保村

小須戸村

橫川濱村

小向村

水田村

矢代田村

古津村

西嶋村

東嶋村

程嶋村

中嶋村

田家村

割町村

鹽谷村

金津村

湯川村

田上村

羽生田村

猿毛村

河船町村

坂田村

上條村

中條村	鍋嶋村	尾崎村	中興野	赤沼村	丸山興野	中嶋村	小古瀬村	黒坂村	櫻森村	九々曾根村	戸口村	藏内村	矢田村	長嶺村	新保村	五明村	片口村	塚目村	嘉茂町村
狐興野	芹山村	道金村	六所興野	三林村	野口村	安田興野	坂井村	田尻村	高安寺村	萩嶋村	岩淵村	入藏村	大面町村	吉野屋村	曲淵村	中村	西鱈田村	月岡村	狹口村
關根村	二俣村	今井村	中西村	鬼木村	三右衛門興野村	猫興村	芝野村	大和田村	小瀧村	小谷内村	新堀村	東光寺村	袋村	鴨池村	吉田村	本成寺村	東鱈田村	女法寺村	鶴田村

鳥屋野村	嘉喜村	横越村	赤澁村	上八牧村	東笠卷村	鳥原村	高井興野村	平瀨村	白根通村	櫛笥村	蛛手興野村	庄瀬村	後須田村	宮内村	思川村	大口村	品木村	池嶋村	嶋田村
大淵村	楚川村	藏岡村	大江村	上八牧村	西笠卷村	合子作村	山崎興野村	大倉興野村	白根村	戸頭村	眞道嶋村	菱瀉村	五反田村	鷯森村	大曲戸村	四牧橋村	長呂村	高島村	横山村
直山村	俵柳村	笹山村	二本木村	臼井村	二郎興野村	立佛村	松橋村	保坂村	鯨瀨村	上曲通村	牛崎村	鑄物師興野	北瀨村	前須田村	下山吉村	坪根村	大保村	杉森村	眞弓村

松山村 細山村 本所村

新崎村 岡山村 中興野村

一日市村 津嶋屋村 海老瀬村

松崎村 上木戸村 下木戸村

鶉俣村 西酒屋村 沼垂町村

蒲原村 大夫濱村 嶋見濱村

太郎代濱村 龜塚濱村 次弟濱村

藤塚濱村

都合五万石

外貳百貳拾貳石八斗九升九合依爲御朱印高
之外不載之

奥書右同

寛文四年四月五日

溝口出雲守殿

筑前國夜須郡之内貳万六千貳百拾七石六斗餘嘉麻郡
之内壹萬五千九百六拾石九斗餘下庄郡之内七千八百
貳拾壹石三斗餘都合五万石別紙在事任寛永十一年
八月四日先判之旨充三行之訖全可領知之者也仍

如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

黒田甲斐守とのへ

目録

筑前國

夜須郡之内 三拾箇村

江川村 上秋月村 下秋月村

野鳥村 長谷山村 千手村

下淵村 甘水村 檜原村

隈江松 彌永村 依井村

久光村 栗田村 三ヶ山村

畑嶋村 中牟田村之内 四三嶋村之内

上高場村 下高場村 高田村

馬田村 上浦村 下浦村

草水村 千代丸村 牛木村

菩提寺村 持丸村 大塚村

高貳万六千貳百拾七石六斗九升貳合

嘉麻郡之内 拾壹箇村

桑野村 馬見村 屏村

椎木村 西江村 上臼井村

平山村 泉河内村 大力村

戈田村 東千手村

高壹万五千九百六拾石九斗八升四合

下庄郡之内 拾七箇村

中寒水村 平塚村 小田村

屋永村 牛鶴村 堤村

柿原村 板屋村 屋形原村

田代村 山見村 頓田村

古賀村 西津留村 一本村

來春村 古江村

高七千八百貳拾壹石三斗貳升四合

都合五万石

奥書右同

寛文四年四月五日

黒田甲斐守殿

河内國若江茨田河内讃良四郡之内壹万六千四百八拾七石八斗餘和泉國日根大鳥和泉三郡之内壹万三千九

百九拾九石四斗餘攝津國住吉河邊嶋下三郡之内八千九百五拾七石壹斗餘芥川領之内五百五拾五石壹斗餘遠江國敷知郡之内五千石相模國大住郡之内貳千九百九拾五石三斗餘武藏國橘樹荏原兩郡之内貳千四百六斗餘都合五万石^{別紙}日録在事任慶長十五年十二月廿八日寛永十一年八月四日雨先判之旨充^レ行之訖全可^レ領知之狀如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

青山因幡守とのへ

目録

河内國

若江郡之内 拾七箇村

穴太村

近江堂村

箕輪村

都塚村

小坂合村

下若江村

佐堂村

西郡村

長田村

中田村

萱振村

小若江村

友井村

横枕村

新家村

形部村

上若江村

高壹万千三百拾貳石六升

茨田郡之内 三箇村 改出高ニ入

三ッ嶋村 新田村 諸福村

高貳千三拾貳石九斗八升

河内郡之内 六箇村

池嶋村 横小路村 六万寺村

出雲井村 中新開村 水走村

高貳千五百貳拾貳石八斗六升六合

讃良郡之内 貳箇村

太子田村 御領村

高六百貳拾石壹斗四升四合

和泉國

日根郡之内 拾箇村

貝掛村 舞村 箱作村

淡輪村 深日村 孝子村

東畑村 西畑村 谷川村

小嶋村

高八千六拾四石八斗九升

大嶋郡之内 四箇村

土師村 深井村 家原寺村

草部村

高三千七百貳拾壹石六升六合

和泉郡之内 九箇村

池浦村 宮村

長井村 辻村

桑原村 今在家村

高貳千貳百拾三石六斗五升壹合

攝津國

住吉郡之内 拾貳箇村

南田邊村 北田邊村 砂子村

鷹合村之内 遠里小野村 淺香山村

大豆塚村 貞村 山内村

寺岡村 新家村 林寺村

高六千四百八拾七石四斗九升三合

河邊郡之内 八箇村

推堂村 法界寺村 尾宮村

水堂村 加茂村 寺畑村

滿願寺村 山本村

高貳千四百四拾七石三斗八升九合

嶋下郡之内 太田領 三箇村

中城村 下中條村 夙名村

高三百貳拾貳石貳斗七升六合

芥川領内

宮田村

高五百五拾五石壹斗八升五合

遠江國

敷智郡之内 貳拾貳箇村 内貳拾箇村ハ新田高ニ入

大崎村 津々木村 佐久米村

駒場村 宇志村 津々崎村

三箇日村 駒村 鶴代村

南脇村 日比澤村 本坂村

下尾奈村 横山村 利木村

大知波村 上尾奈村 神座村

太田村 入出村 吉美川尻村

山口村之内

高五千石

相模國

大住郡之内 六箇村

片岡村 飯嶋村 矢崎村之内

北金目村 九嶋村 北大繩村

高貳千九百九拾五石三斗壹升九合

武藏國

橘樹郡之内 四箇村

德持村 嶺村 鶴木村

矢口村

高千七百六拾貳石壹升四合

荏原郡之内

下丸子村

高貳百四拾貳石六斗六升七合

都合五万石

奥書右同

寛文四年四月五日

青山因幡守殿

卷第十六

三河國碧海額田幡豆賀茂四郡之内都合五万石 目録在別紙
事如三前々宛三行之訖全可令領知者也依如三件

寛文四年四月五日御朱印 不知筆者

水野監物とのへ

目録

三河國

碧海郡之内 五拾壹箇村

阿彌陀堂村	押鴨村	森越村	大友村	浦部村	野畑村	土井兩村	下青野村	中江村	宇頭村	高木村	新堀村	小望村	村高村	西牧內村	矢作村
中嶋村	渡荊村	北野村	橋目村	三木村	下和田村	上和田村	淺井村	上青野村	尼崎村	別江村	桑子村	嶋村	木戸村	東牧內村	筒井村
川端村	配津村	上野村	舳越村	中園村	坂左右村	井內村	牧御堂村	合歡木村	赤澁村	別所兩村	山崎村	池端村	藤井村	佐々木兩村	渡兩村

宗定村 中切村 乙尼村
高貳万九千百貳石壹斗八升三合
額田郡之内 七拾貳箇村

法味村	須淵村	秦梨村	八町村	大谷村	蕪木村	小丸村	米河內村	西阿知和村	伊賀村	八木村	西藏前村	大樹寺村	日名村	若松村	羽根村	久後村
南須山村	高薄村	友久村	關村	渡通津村	小須山村	一色村	安戸村	東阿知和村	井田村	日記村	磯部村	井口村	大門村	宮地村	柱村	六名兩村
古部村	大川村	栗木村	洞立村	駒立村	柳山村	外山村	新井村	上里村	百々村	能見村	岩津村	東藏前村	藪田村	法性寺村	針崎村	明大寺村

櫻井寺村 鍛冶谷村 土楠村

麻生村 名内村 小楠村

毛呂村 切山村 木下村

小呂村 箱柳村 田口村

板田村 大井野村 藏次村

中畑村 岩谷村 伊賀谷村

中保久村 桃久保村 町廻村

高壹万四千四百貳拾九石七升八合

幡豆郡之内 四箇村

高落村 永井村 野場村

羽角村 永井村 野場村

高貳千貳百七石七斗四升五合

賀茂郡之内 三拾八箇村

白川村 大岩村 大平村

寺平村 荷掛村 大洞村

三久保村 北村 田代村

大藏連村 前洞村 雜敷村

柏洞村 川見村 市野村

荊茅村 宮代村 仁木村

遊屋村 永太郎村 松名村

大倉村 大野村 澤田村

笹平村 百月村 大坂村

大草村 李村 市場村

川下村 日面村 喜左平村

萩平村 千洗村 上田代村

蘭村 一色村

高四千貳百六拾石九斗九升四合

都合五万石

奥書同前

寛文四年四月五日

水野監物殿

常陸國那賀郡内四拾五箇村茨城郡之内三拾貳箇村眞壁郡之内貳拾七箇村下野國芳賀郡三谷村所々都合五万石^{目錄在別紙}事如^三前々宛^三行之^三訖全可^三領知^一者也依如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

井上河内守とのへ

目録

常陸國

那賀郡之内 四拾五箇村

今泉村	本植村	猿田
曾根村	高幡村	松田
加茂部村	小塙村	友部
磯部村	橋本村	水戸
谷中村	青柳村	岩瀬
大岡村	本新田村	犬田
西新田村	桑田村	富岡
小幡村	中泉村	飯岡
小敷三江村	堤上村	下泉
本郷村	大泉村	飯淵
久原村	富谷村	中里
入野村	飯田村	間中
平澤村	池龜村	小鹽
福崎村	龜岡村	稻村
大月村	坂本村	山口
高壹万六千四百拾四石八斗九升貳合		

茨城郡之内 三拾貳箇村

上市毛村	寺崎村	間黒
日澤村	金井村	大淵
飯田村	福田村	石寺
眞端村	大綱村	徳藏
赤澤村	片庭村	箱田
大江戸村	飯塚村	飯岡
下稻田村	上稻田村	關戸
中山村	田上村	本戸
吉原村	來栖村	古町
甲山村	阿彌陀村	石井
下市毛村	日草場村	
高壹万四千六百七拾壹石六斗六升壹合		

眞壁郡之内 貳拾七箇村

羽田村	阿部田村	本木
大曾根村	飯田村	上小幡
下小幡村	白井村	櫻井
飯塚村	古城村	町屋
田村	山尾村	伊佐々
羽鳥村	山田村	椎尾

酒寄村 塙世村 龜熊村

高久村 原方村 矢貝村

井出村 海老澤村 長岡村

高壹万九千八拾七石八斗六升三合

下野國

芳賀郡之内

三谷村

高五百石壹斗八合

都合五万石

但四郡之内高六百七拾四石五斗貳升四合依

レ爲二分限帳之外一籠高也

奥書同上

寛文四年四月五日

井上河内守殿

備中國英賀郡拾九箇村壹万三千七百五拾七石八斗餘
哲多郡之内五拾四箇村壹万貳千五百九拾壹石八斗餘
上方郡之内七箇村七千九百七拾七石三斗餘河上郡之
内拾五箇村四千百八拾九石五斗餘淺口郡之内拾貳箇

村四千九拾四石四斗餘賀夜郡之内七箇村三千四百七
拾三石壹斗餘下道郡之内六箇村九百拾五石六斗餘都
合四万八千石目録在別紙事宛ニ行之ニ訖全可ニ領知一者也
仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

水谷左京亮とのへ

目錄

備中國

上方郡之内 七箇村

松山村 廣瀬村 今津村

河面村 古瀬村 竹庄村

有漢村

高七千九百七拾七石三斗七升六合

英賀郡之内 拾九箇村

正田村 唐松村 草間村

中津井村 熊谷村 多治部村

小坂部村 大井野村 菅生村

千屋村 花見村 此口部村

阿口村 野々上村 津々村

西方村 水田村 井殿村
新見村

高壹万三千七百五拾七石八斗六升九合

哲多郡之内 五拾四箇村

長屋村 花木村 高井野村
田淵野上村 舞尾村 足立村
石加野々上村 大谷村 大忠村
田口村 佐角村 千屋村
熊野村 老廻村 成松村
則安村 金屋村 谷内村
木戸村 矢谷村 内草村
芋原村 三坂村 常盛村
和忠村 釜戸村 蚊家村
莊尾村 矢戸村 井倉村
石蟹村 西方村 法曾村
布寄村 井原村 山室村
宮河内村 井村 坂本村
多曾村 吉川村 茂本村
奥谷村 小谷村 城谷村
高瀬村 感家村 神代村

矢田村 中間村 大竹村
八鳥村 大野部村 畑木村

高壹万貳千五百九拾壹石八斗六升四合

河上郡之内 拾五箇村

石浦村 遠原村 東方村
田井村 飯部村 春木村
神原村 近似村 河龍村
阿部村 玉村 西野々村
割手村 宇治村 丸山村
高四千百八拾九石五斗九升壹合

賀夜郡之内 七箇村

野山村 延原村 宇山村
種井村 美袋村 日羽村
八田部村
高三千四百七拾三石壹斗五升貳合

下道郡之内 六箇村

草田村 下倉村 久代村
山田村 陰村 蘆村
高千九百拾五石六斗九升五合

淺口郡之内 拾貳箇村

黑崎村 屋守村 佐見村

南浦村 長尾村 長尾新田村

船尾村 船尾新田村 柳井原村

水江村 乙嶋村 柏崎村

高四千九拾四石四斗五升三合

都合四万八千石

奥書右同

寛文四年四月五日

水谷左京亮殿

攝津國河部郡内貳拾八箇村壹万六千百貳拾六石三斗

餘武庫郡之内三拾箇村壹万貳千三百八拾六石貳斗餘

兎原郡之内四拾壹箇村九千八百三拾九石八部郡之内

拾八箇村九千六百四拾八石三斗餘都合四万八千石

紙在別事如前々宛ニ行之訖全可領知者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久左衛門

青山大膳亮とのへ

目錄

攝津國

河部郡之内 貳拾八箇村

額田村 西川村 神崎村

同所波多村 三反田村 大西村

栗山村 上嶋村 同所波多村

東難波村 杭瀬村 尾濱村

尼崎町地子 西長洲村 中長洲村

東長洲村 大物村 梶嶋村

別所村 今福村 塚口村

萩野村 荒牧村 嶋池村

西難波村 山田村 南野村

東富松村

高壹万六千百貳拾六石三斗七升貳合

武庫郡之内 三拾箇村

廣田村 越水村 西宮町

西崑陽村 常吉村 時友村

常松村 段上村 藏人村

津門村 上尾林村 下尾林村

小松村 小曾禰村 東大嶋村

西大嶋村 濱田村 生津村

今北村 神尾村 東新田村
西新田村 今津村 武庫庄村
西富松村 武庫村 高木村
伊弉志村 河面村 見佐村
高壹万貳千三百八拾六石貳斗貳升九合

兔原郡之内 四拾壹箇村

熊内村 生田村 中尾村
瀧寺村 中村 河原村
中野村 津知村 五毛村
東青木村 鍛冶屋村 原田村
大石村 高羽村 上野村
奥森村 三條村 岡本村
住吉村 魚崎村 波多村
田中村 味泥村 岩屋村
石屋村 打出村 深江村
北畑村 畑原村 横屋村
田邊村 郡家村 濱御影村
小路村 西青木村 蘆屋村
森村 野寄村 八幡村
口平野村 篠原村

高九千八百三拾九石貳升三合^{イ貳}

八部郡之内 拾八箇村

大手村 北野村 神戸村

駒林村 宇治野村 西尻池村

西須磨村 東須磨村 坂本村

生田宮村 板宿村 荒田村

走水村 長田村 兵庫津

二茶屋村 東尻池村 中宮村

高九千六百四拾八石三斗七升六合^{イ貳}

都合四万八千石

奥書右同

寛文四年四月五日

青山大膳亮殿

陸奥國津輕郡之内四万五千石上野國勢多郡内貳千石
都合七万七千石^{別紙}目録在事内四千石津輕左京千石津輕
一學可進退之殘七万貳千石宛三行之訖全可領知
者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

津輕越中守とのへ

目錄

陸奥國

津輕郡一圓 百三拾三箇村

山口村	山形村	飛内村	野田村	田澤村	新田村	原別村	新城村	竹鼻村	高樋村	德下村	大俵村	原子村	喜良市村	高野村
小湊村	温湯村	小屋敷村	黒石村	瀬戸子村	堤村	野内村	細越村	波岡村	本江村	川邊村	藤崎村	吉野田村	金山村	薄市村
童子村	茂浦村	久味木村	目内澤田村	蓬田村	油川村	淺蟲村	荒川村	高屋敷村	吉内村	田舎館村	矢澤村	杉村	神山村	金木村

高畑村	八幡館村	大鰐村	唐牛村	深浦村	馬次木村	關村	中村	浮田村	小友村	種市村	獨狐村	中別所村	植田村	熊嶋村	兼平村	宮地村	紙漉澤村	櫻庭村	村市村
沖館村	森山村	虹貝村	長峯村	岩崎村	追良瀬村	金井澤村	赤石村	鯨澤村	十面澤村	高杉村	町田村	蒔苗村	鼻和村	高屋村	駒越村	新岡村	五所村	國吉村	田代村
新館村	乳井村	三目内村	藏館村	碓關村	廣戸村	風合瀬村	程里村	十三村	十腰内村	鬼澤村	中崎村	外瀬村	宮館村	八幡村	一町田村	五代村	百澤村	相間村	中畑村

原田村 岩館村 石川村

館田村 大光寺村 町井村

新屋村 尾崎村 廣船村

淺瀬石村 猿賀村 蒲田村

日沼村 境關村 和德村

福上村 撫平子村 小比内村

清水森村 門外村 堀越村

小澤村 大澤村 小栗山村

湯口村 大和澤村 坂本村

高四万五千石

上野國

勢多郡之内 六箇村

大館村 安養寺村 村田村

赤堀村 下枝村 女塚村

高貳千石

都合四万七千石

内 四千石 津輕郡之内貳千五百石 津輕左京拜二領之一
千石 津輕郡之内五百石 津輕一學拜二領之一

奥書右同

寛文四年四月五日

津輕越中守殿

丹波國天田郡之内七拾九箇村四万四百四拾九石八斗
餘何鹿郡之内七箇村五千四百五拾九石九斗餘都合四
万五千九百石餘別紙在事如三前々一宛三行之畢全可三領
知一者也仍如一件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久左衛門

松平主殿頭とのへ

目錄

丹波國

天田郡之内 七拾九箇村

福知山村 木村 南岡村

岩間村 堀村 田野村

多保市村 長田村 土師村

前田村 土村 戸田村

石原村 興村 川北村

井崎村 中村 池部村

安井村	荒河村	下天津村	正明寺村	新庄村	和久寺村	榎原村	畑中村	小牧村	十二村	夷村	猪野々村	田和村	一尾村	天座村	北村	額田村	日置村	小倉村	直見村
筥卷村	漆端村	原村	今安村	岩井村	大門村	石場村	樽水村	牧村	大内村	上小田村	梅谷村	大呂村	長尾村	上野條村	上佐々木村	千原村	高内村	平野村	畑村
和久市村	上天津村	笹尾村	半田村	奥野部村	拜師村	北山村	談村	立原村	野端村	下小田村	宮垣村	溜木村	行積村	下野條村	下佐々木村	末村	大油子村	板生村	今西村

井田村

高四万四千四百九十八斗貳升

何鹿郡之内 八箇村

報恩寺村

山口村

印内村

私市村

志賀中村

小畑中新上村

物部村

本桑目

高五千四百五拾九石九斗六升八合

都合四万五千九百九十七斗八升八合

奥書同前

寛文四年四月五日

松平主殿頭殿

下總國葛飾猿嶮相馬豐田四郡之内貳万六千六百石常陸國新治筑波兩郡之内壹万石武藏國豐嶋新庄貳郡之内千石攝津國嶋下郡之内七千四百石都合四万五千石
日録在別紙ニ 事如ニ前々宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者建部與兵衛

板倉隱岐守とのへ

目錄

下總國

葛飾郡之内

貳拾三箇村

江戸町村

元町村

東西高野村

江川村

小福田村

大福田村

新高野村

川妻村

高野村

惣新田村

字和田村

新田戸村

柏寺村

桐作村

新野井村

次木村

高五千八百九十石九斗貳升壹合

古布内村

猿嶋郡之内

五拾箇村

境村

谷貝村

猿山村

塚崎村

久能村

稻尾村

北山田村

志鳥村

東山田村

上片田村

栗山村

上小橋村

山崎村

蛇池村

西泉田村

大歩村

逆井村

染谷村

一谷村

若林村

借宿村

富田村

岩井村

小泉村

小山村

三村

高壹万六千九百貳拾九石八斗壹升壹合

相馬郡之内

七箇村

新宿村

杉下村

報恩寺村

高貳千百九拾石貳升九合

豐田郡之内

三箇村

尾崎村

高千六百七拾石貳斗三升九合

菅野谷村

下小橋村

金岡村

伏木村

生子村

駒跣村

沓掛村

中里村

矢作村

鵜戸村

長須村

長谷村

桐木村

邊田村

半谷村

出嶋村

寺久村

百戸村

浦向村

山内村

御出子村

平沼村

寺畑村

細代村

蘆谷村

崎房村

常陸國

新治郡之内 拾九箇村

半田村 川俣村 下林村

金指村 加生野村 月岡村

青田村 泉澤村 弓絃村

柴内村 辻村 菖蒲澤村

小野越村 佛生寺村 下青柳村

上青柳村 細谷村 須釜村

小幡村

高六千貳百貳拾石貳斗四升七合

筑波郡之内 三箇村

戸崎村 賀茂村 牛渡村

高三千七百七拾九石七斗五升三合

武藏國

豐嶋郡之内 三箇村

中荒井村 中臺村 堀内村

高四百九拾九石貳斗

新座郡之内

上新倉村

高五百石八斗

攝津國

嶋下郡之内 拾壹箇村

上村 中村 小川村

下村 才寺村 南村

小路村 東村 七尾村

味舌村 片山村

高七千四百石

内高四百五拾五石六斗八升三合從吹田村出作

都合四万五千石

奥書右同

寛文四年四月五日

板倉隱岐守殿

越前國坂井郡之内六拾八箇村南條郡之内兩村都合四

万三千三百石^{別紙在}事如^二前々^一宛^二行之^一訖全可^二領

知^一者也仍而如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

本多飛驒守とのへ

目錄

越前國

坂井郡之内 六拾八箇村

荒生村	八口村	端保村	末廣村	友末村	牛嶋村	高瀬村	下久米田村	大森村	内田村	竹田山口村	石塚村	長屋村	女形谷村	曾々木村	丸岡村
堀水村	笹和田村	定重村	油爲頭村	樋爪村	坪内村	儀間村	小物成高 <small>二八</small> 村	野中山王村	小黒村	吉谷村	桑原村	千田村	山窪村	田屋村	長畝村
波松浦村	坪口村	南横地村	高田村	金屋村	爲安村	牛ヶ嶋村	筑後村	末政村	升田村	猪爪村	田嶋窪村	池口村	宇田村	一本田村之内	里九岡村

山高村	梶浦村	平山村
覺善村	瀧谷村	濱地浦村
牛谷村	澤村	瀧村
川崎村	石丸村	高柳村
東村	稻越村	中濱村
兵庫村	五本村	鳴鹿山鹿村
金谷村	板倉村	
高四万貳千八百四拾六石五斗三升三合		
南條郡之内 貳箇村		
合波村	大門村	
高四百六拾三石五斗六升壹合		

但貳郡之内拾石餘依爲三分限帳之外籠高也
都合四万三千三百拾石九升四合

奥書右同

寛文四年四月五日

本多飛驒守殿

石見國鹿豆郡之内五拾六箇村美濃郡之内四拾六箇村
那賀郡之内貳拾六箇村邑知郡之内兩村都合四万三千

石目録在ニ事如ニ前々ニ宛ニ行之二訖全可ニ領知ニ者也仍如
別紙ニ
ノ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

龜井能登守とのへ

目録

石見國

鹿足郡之内 五拾六箇村

星坂村	樋口村	九郎原村
立河内村	六日市村	廣石村
立戸村	澤田村	注連川村
朝倉村	蓼野村	椎谷村
拔舞村	七日市村	田丸村
高尻村	木部谷村	大野原村
福川村	柿木村	篠山村
中座村	森村	徳次村
高田村	鷺原村	喜汁村
横瀬村	市尾村	寺田村
直地村	和田村	地原村
高野村	木部村	長野村

美濃郡之内 四拾六箇村

高壹万四千八百七拾貳石貳斗三升壹合

奥賀野村	左鏡村	野廣村
横道村	枕瀬村	相撲原村
須川村	木野口村	小直村
程狩野村	野口村	脇本村
野池村	小瀬村	漆谷村
青原村	大木村	柳村
宿谷村	野地四箇所村	
板井川村	宇津川村	原村
東長澤村	西長澤村	瀧谷村
篠田原村	柚木村	大屋形村
馬谷村	杉山村	本俣加村
梅月村	小俣加村	本横田村
須子村	北仙道村	左山村
角井村	安富村	飯田村
薄原村	大峯破村	三星村
寺垣内村	向横田村	金地村
蟲追村	松原村	高津村
内田村	持石村	市原村

白上村 木阿禰村 戸田村
小濱村 中垣内村 川登村
飯浦村 美濃地村 城九郎村
鹿谷村 柏原村 植平村
黒谷村

高壹万四千三百九拾三石三升貳合

那賀郡之内 貳拾六箇村

井野村 長見村 田原村
長安村 小坂村 波佐村
小國村 徳田村 宇栗村
來原村 長屋村 久佐村
丸原村 今市村 柚根村
鼠原村 和田村 都川村
重富村 本郷村 木田村
今福村 入野村 追原村
佐野村 田原村

高壹万貳千七百拾貳石四斗三升三合

邑智郡之内 貳箇村

日貫村 長谷村

高千四百九拾石九斗貳升三合

但四郡之内四百六拾八石六斗壹升九合依ニ分
限帳之外ニ籠高也
都合四万三千石
奥書右同

寛文四年四月五日

龜井能登守殿

筑前國鞍手郡之内貳拾九箇村貳萬九千四百三拾九石
四斗餘遠賀郡之内拾箇村六千八百八拾七石五斗餘嘉
鹿郡之内四箇村三千六百七拾三石 都合四万石
別紙ニ
事如ニ前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者森 新兵衛

黒田宮内とのへ

目録

筑前國

鞍手郡之内 貳拾九箇村

上有木村 下有木村之内 水原村

上新入村 龍徳村 宮田村

頓野村 南良津村 勝野村

金丸村 新北村 八尋村

中山村 室木村 野面村

篠田村 金剛村 上境村

下境村 磯光村 新多村

赤地村 上大隈村 鶴田村

山部村 本城村 御徳村

新山崎村 竹原村之内

高貳万九千四百三拾九石四斗四升

嘉麻郡之内 四箇村

鹿毛馬村 口原村 勢田村

下白井村之内

高三千六百七拾三石

遠賀郡之内 十箇村

市瀬村 穴生村 引野村

馬場山村 則松村 上香月村

下香月村 折尾村 本城村

永犬丸村

高六千八百八拾七石五斗六升

都合四万石

奥書同上

寛文四年四月五日

黒田宮内殿

信濃國高井郡之内六拾箇村貳万石水内郡之内五拾九

箇村貳萬石都合四萬石別紙ニ事如三前々ニ宛三行之ニ訖

全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

松平遠江守とのへ

目録

信濃國

高井郡之内 六拾箇村

志久見村 箕作村 大瀧村

七卷村 蟲生村 平林村

野澤村 重地原村 柏尾村

前坂村 篠澤新田村 小菅村

關澤村 神戸村 犬飼村

和栗村 小見村 稻荷村

松平遠江守殿

三河國渥美寶飯八名三郡之内都合四万石
目錄在別紙事如
前々宛之行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

小笠原山城守とのへ

目錄

三河國

渥美郡之内 貳拾八箇村

吉田町地	吉田方村	牟呂村
花崎村	飽海村	仁蓮木村
田尻村	岩崎村	手洗村
飯村	小池村	雲谷村
中原村	原村	橋良村
小濱村	草間村	高足村
佛餉村	切田谷村	野依村
東植田村	西植田村	大津村
杉山村	谷熊村	片神戸村

百々村

納方連上高ニ入
高壹万六千四百五拾八石五斗七升
寶飯郡之内 三拾貳箇村

大木村	谷川村	樂筒村
楠木村	石原村	雨谷村
當古村	三橋村	馬場村
北金屋村	南金屋村	鍛冶村
瀬木村	西嶋村	正岡村
行明村	柑子村	長瀬村
大井村	大蚊里村	下地村
平井村	日宮野村	横須賀村
下五井村	篠束村	小坂井村
宿村	前芝村	梅藪村
伊奈村	大塚村	
高壹万四千九百石六斗七升		
八名郡之内 貳拾七箇村		
若宮村	赤岩村	多米村
牛川村	浪上村	暮川村
五井村	八反谷村	天王村
藤池村	犬子村	竹内村

堀内村 和田村 高井村

金田村 神谷村 神江村

長良村 月谷村 嵩山村

長彦村 三渡野村 埴之上村

平野村 萩平村 中山村

高八千六百四拾石七斗六升

都合四万石

今度壹万石以上之面々就_レ被_二成下_二領地之御判并御朱印_二而其方與_二永井伊賀守_二奉行被_二仰附_二因_レ茲以_二兩判_二被_レ出_二郡村之目録_二訖雖_レ然自分之知行目録依_レ難_レ成判形爲_二後鑑_二加_二印判_二者也仍如_レ件

寛文四年四月五日

久世大和守

稻葉美濃守

阿部豊後守

小笠原山城守殿

卷第十七

飛驒國一圓三万八千七百六拾石_{目録在_二紙_二}事如_二前々_二宛_二行之訖全可_二領知_二者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

金森長門入道立軒

目録

飛驒國一圓

益田郡 八拾壹箇村

高九千貳百貳拾四石三斗餘

大野郡 百三拾三箇村

高壹万貳千三百拾貳石餘

荒城郡 百八拾箇村

高壹万七千貳百貳拾八石餘

都合三万八千七百六拾四石四斗

右今度被_二差上_二郡村之帳面相改及_二上聞_二所_レ被_二成下_二御朱印也此儀兩人奉行依_レ被_二仰附_二執達如_レ件

寛文四年四月五日

永井伊賀守尙庸

小笠原山城守長頼

金森立軒

丹波國桑田郡氷上船井多紀四郡内三万八千石_{目録在_二紙_二}

事如三前々ニ宛三行之ニ訖全可ニ領知一者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保金右衛門

松平伊賀守とのへ

目録

丹波國

桑田郡之内 五拾五箇村

上矢田村	中矢田村	下矢田村
古世村	荒塚村	追分村
安町村	余部村	三宅村
柏原村	馬堀村	篠田村
王子村	森村	廣田村
淨法寺村	杉生村	田能村
中畑村	出灰村	二料村
柏原村	鎌倉村	小泉村
神原村	南條村	犬飼村
重利村	西條村	山本村
保津村	勝林嶋村	國分村
江嶋里村	中津根村	美濃田村
山階村	宇津根村	金津村新田

土田村	小林村	北金木村
高野林村	小川村	湯井村
千原村	灰田村	神知村
宮川村	西加舍村	蘆山村
佐伯村	南金木村	吉田村
穴川村		
高壹万八千六百六拾貳石六斗四升貳合		

氷上郡之内 貳拾貳箇村

中村貳箇村	長谷村	棚原村
野村	平松村	朝日村之内
天王村	長見村	新才村
牛河内村	山田村	黒井村
戸坂村	白毫寺村	與戸村
乙河内村	酒梨村	勅使村之内
多利兩村	多田村	七日市村
野上野村		
高九千六百貳拾貳石八斗貳升八合		
船井郡之内 貳拾六箇村		
中野村	赤熊村	松熊村
大内村	若森村	殿谷村

口人四箇村 木原村 半田村

黒田村 山室村 廣瀬兩村

屋賀村 觀音寺村之内 青戸村

刑部村 水戸三箇村 八田六箇村

須知村 市森村 蒲生村

鹽田兩村 下村 東股村

中村 奧村

高八千四百拾五石三斗五合

多紀郡之内 五箇村

中原山村 下原山村 奥原山村

西野村 安口村

高千貳百九拾九石貳斗貳升五合

都合三万八千石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平伊賀守殿

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

高力左近太夫とのへ

目録

肥前國

高來郡之内 三拾壹箇村

嶋原村 三會村 三澤村

東空閑村 大野村 湯江村

多比良村 大黒村 西江村

伊古村 伊福村 三室村

山田村 野井村 愛津村

千々石村 小濱村 北串山村

南串山村 賀津佐村 口之津村

南有馬村 北有馬村 有家村

布津村 深江村 中木場村

西古賀村 日見村 茂木村

花嶋村

都合三万七千石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

肥前國高來郡内三万七千石^{目録在別紙}事如^三前々^一宛^三行之^訖訖全可^三領知^一者也仍如^レ件

高力左近太夫殿

攝津國有馬郡之内五拾三箇村三万石丹波國氷上郡内
拾箇村六千石都合三万六千石^{目錄在別紙}事宛^三行^二之^一訖全
可^レ領知^レ者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

九鬼長門守とのへ

目錄

攝津國

有馬郡之内 五拾三箇村

三田村	寺村	鹽田村之内
田中村	高須村	桑原村
山田村	香下村	志手屋村
尼寺村	小野村	小柿村
母子村	乙原村	上青野村
下青野村	西末村	東末村
東山村	井野草村	野々倉本庄
野倉上村	岩倉村	波田村

丹波國

氷上郡之内 拾箇村

曲村	藍木庄村	日出坂村
大川瀬村	上相野村	下相野村
四辻村	廣野村	伊澤村
賀茂村	東野上村	福島村
小原村	川除村	三輪村
深田村	貴志村	西野上村
下内神村	澤谷村	上内神村
市原村	藤村	日西屋村
中大澤村	上大澤村	深谷村
屏風村	附物村	
高三万石		
氷上郡之内	拾箇村	
石負村	横田村	氷間下村
氷上村	南由良村	北由良村
棧敷村	絹山村	川原村
伊佐口村		
高六千石		
都合三万六千石		
奥書右同斷		

寛文四年四月五日

九鬼長門守殿

攝津國嶋上郡之内三拾六箇村嶋下郡之内貳拾貳箇村
東生郡之内兩村丹波國桑田郡拾五箇村都合三万六千
石別錄在事宛三行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

永井日向守とのへ

目錄

攝津國

嶋上郡之内 三拾六箇村

高槻村	上田邊村	芥川村
庄所村	津江村	下田邊村
眞上村	芝生村	東五百住村
古曾部村	安滿村	下嶋村
西天川村	冠面村	前嶋村
唐崎村	西面村	三嶋江村
小物成高三八入		
柱本村	成合村	大塚村

櫻井村	鵜殿村	野田村
東天川村	別所村	磯嶋村
川窪村	大澤村	梶原村
神内村	尺代村	氷室村
土室村	西五百住村	塚原村
高貳万五千五百壹石九斗五合		
嶋下郡之内 貳拾貳箇村		
鮎川村	鳥養中村	岸部村
粟生村	福井村	鳥養六箇村
佐保村	泉原村	大門寺村
生保村	車作村	下音羽村
錢原村	安元村	千提寺村
大岩村	清坂村	高山村
野々宮村	栗生村	二階村
馬場村	新田高二八入	
高壹万貳千七百四拾三石八斗壹升四合		
東生郡之田 貳箇村		
七道村	刈田村	
高七百八拾七石五斗四升三合		

丹波國

桑田郡之内 拾五箇村

寺 中 法貴村

犬甘野村 笑路村 柚原村

神地村 寺田村 湯屋村

倉谷村 萬願寺村 大槻並村

大野村 南掛村 東掛村

高三千五百三拾八石壹斗四合四五拾壹升

内高貳千五百七拾壹石三斗六升六合爲御用也
被召三上管
地以二物成積二被レ下放
延也本高ニ不レ載レ之

都合三万六千石

奥書石同斷

寛文四年四月五日

永井日向守殿

如件

志摩國一圓壹万九千七百貳拾五石貳斗餘伊勢國度會
多氣飯野三郡内壹万貳千七拾四石七斗餘常陸國信田
郡之内五千石三河國渥美郡内貳百三拾石都合三万五
千貳百三拾石目録在
別紙ニ事宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍

寛文四年四月五日御朱印 筆者飯高七兵衛

内藤飛驒守とのへ

目録

志摩國一圓

塔志郡 三拾六箇村

高壹万千八百四拾貳石六斗壹升三合小物成高ニ入

英虞郡 貳拾箇村

高七千八百八拾貳石六斗七升貳合小物成高ニ入

伊勢國

度會郡之内 五箇村

村松村 東大淀村 小畠村

稻木村 野依村之内

高四千八百八斗三升九合

多氣郡之内 七箇村

中大淀村 根倉村 屋木戸村

行部村 馬上村 中海村

坂本村

高三千貳百三拾五石三斗壹升壹合

飯野郡之内 六箇村

庄 村 阿波曾村 伊勢場村

土田村 射和村 横地村之内

高三千三拾石五斗六升五合

常陸國

信太郡之内 拾五箇村

奥原村 井岡村 正直村

小坂村 久野村 大和田村

上條村 小池村 嶋田村

植村 太田村 沼田村

犬塚村 月出村 羽黒村

參河國

渥美郡之内

伊良子村

高貳百三拾石餘

都合三万五千貳百三拾石餘

奥書右同

寛文四年四月五日

内藤飛騨守殿

遠江國長上郡之内六拾六箇村壹万五千八百三石四斗

餘敷替郡内五拾三箇村壹万三千六百六拾貳石五斗餘

豐田郡内貳拾七箇村三千四百七拾九石五斗餘引佐郡

之内三箇村千九百八拾貳石五斗餘龜玉郡内三箇村百

九石七斗餘都合三万五千三拾七石 目録在別紙 事宛二行之

訖全可領知者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神風小左衛門

太田備中守とのへ

目録

遠江國

長上郡之内 六拾六箇村

欠下村 有玉村 小池村

漆嶋村 西崎村 中條村

横須加村 高畑村 美園村

油一色村 萬解村 笠井村

上前嶋村 大瀬村 天王村

上新屋村 丸塚村 上郷村

西塚村 將監名村 宮竹村

植松村 永田村 原嶋村

笹瀬村	喜多嶋村	藥師村
橋羽村	龍光村	長鶴村
青屋村	次廣村	下切村
渡瀬村	別久村	名切村
塚越村	頭陀寺村	糸野村
恩寺村	本郷村	彌十村
安松村	西郷村	小松方村
福増村	上飯田村	下飯田村
金折村	古川村	石原村
向金折村	西村	立野村
蒲嶋村	四本松村	江川村
下中嶋村	下前嶋村	富屋敷村
清光庵村	御給村	西嶋村
鼠野村	大柳村	八反畑村

高壹万五千八百三石四斗六升壹合

敷智郡之内 五拾三箇村

和地村	西大山村	東大山村
須木澤村	佐濱村	宇布見村
西嶋江村	片草村	富塚村
入野村	伊場村	東嶋江村

若林領家村	若林村	増樂村
小澤渡村	堤村	新橋村
法枝村	田尻村	明神野村
淺田村	白羽村	中田嶋村
福塚村	寺脇村	瓜内村
三嶋村	三嶋新屋村	馬領家村
上中嶋村	向宿村	堀込村
佐藤一色村	馬込村	野口村
船越一色村	茄子一色村	新津村
嶋江村	早出村	上嶋村
一本杉村	高林村	助信村
中澤村	下池川村	上池川村
八幡村	寺嶋地村	田町村
板屋町村	新町村	

高壹万三千六百六拾貳石五斗九升四合

豐田郡之内 貳拾七箇村

上嶋村	中嶋村	蠟燭嶋村
小島村	中野村	細嶋村
一貫地村	上神増村	下神増村
三家村	松木嶋村	新野村

中瀬村 永嶋村 八幡村

新堀村 高園村 倉中瀬村

本澤村 羽鳥村 恒武村

常光村 白鳥村 松小池村

長命村 大見村 大明神村

高三千四百七拾九石五斗貳升九合

引佐郡之内 三箇村

上形部村 下形部村 前山村

高千九百八拾貳石五斗壹升七合

龜玉郡之内 三箇村

灰木村 堀谷村 大平村

高百九石七斗六升三合

都合三万五千三拾七石八斗六升四合

奥書右同

寛文四年四月五日

太田備中守殿

遠江國佐野周智城飼養原山名豐田六郡之内都合三万五千石_{目録在別紙}事宛三行之訖全可_レ領知_レ者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者飯高七兵衛

井伊兵部少輔とのへ

目録

遠江國

佐野郡之内 七拾三箇村

家代村 遊家村

田中村 嶺村

増田村 馬苦勞町村

下股町村 北西郷村

上垂木村 仁藤町村

留部村 桑地村

高山村 宮嶋村

成瀧村 中宿村

井尻村 孕石村

丹間村 太和田村

正道村 久井島村

中嶋村 河原田村

市井平村 捨子村

大畑村 炭焼村

下垂木村

南西郷村

長谷村

本所村

上西郷村

枋原村

寺田村

黒股村

萩間村

平嶋村

上嶋村

栗嶋村

田代村

道脚村

印內村	宮脇村	蘭谷村
池下村	千羽村	安養寺村
小原子村	伊達方村	水垂村
初馬村	榑澤村	倉真村
五明村	飛鳥村	結緣寺村
上張村	滿水村	杉谷村
龜甲村	大池村	新村
高御所村	領家村	細田村
平野村	篠場村	梅橋村
德泉村	黑田村	厚川町村
澤田村		

高壹万九千三百九拾八石八斗六升七合

周智郡之内 貳拾七箇村

向天方村	城下村	大鳥居村
間誥村	鍛冶嶋村	龜久保村
西股村	葛布村	薄場村
上末本村	下末本村	大日村
馬谷村	三澤村	一色村
中山梨村	上山梨村	中山梨村
下山梨村	市場村	下山梨村

谷川村	村松村	別所村
上久野村	中久野村	下久野村
高八千三百貳拾四石六斗貳升七合		
荻原郡之内 六箇村		

植松村	青池村	川崎町村
柏原村	下庄内村	四宮村
高貳千三百九拾六石貳斗九升六合		
城飼郡之内 六箇村		

和田村	段村	桶田村
堀内村	西方村	半齊村

高貳千四百八拾九石七斗四升貳合

山名郡之内 六箇村

岩井村	明嶋村	松袋村
菅谷村	不入斗村	西田村

高千五百拾壹石貳斗壹升八合

豐田郡之内

深見村

高八百七拾九石貳斗五升

都合三万五千石

奥書右同

寛文四年四月五日

井伊兵部少輔殿

豊後國國崎郡内八拾貳箇村貳万七千八百拾壹石九斗
速見郡内四拾壹箇村四千八拾八石壹斗都合三万貳千
石別錄在事如前々宛ニ行之ニ訖全可ニ領知一者也仍
如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者小嶋久左衛門

松平市正とのへ

目録

豊後國

國崎郡之内

八拾貳箇村

赤根村	千燈村	西方寺村
竹田津村	櫛海村	野田村
新渥村	姫嶋村	來浦村
富來村	成佛村	見地村
中田村	岩屋村	横手村
赤松村	原村	河原村

田深村	今在家村	安國寺村
興道寺村	小原村	次郎九村
綱井村	重田村	池内村
内田村	古市村	今市村
成吉村	麻田村	狹間村
丸小野村	小倉村	吉廣村
手野村	志和利村	三井寺村
糸原村	小城村	馬場村
下原村	古城村	鹽屋村
西本村	横城村	奈多村
狩宿村	野邊村	鍋倉村
守口村	灘手村	大内山村
草場村	菅尾村	鴨川村
岩屋村	藤野川村	篠原村
大添村	山口村	成久村
中園村	瀬戸田村	掛樋村
吉松村	油留木村	杉山村
富永村	兩子村	諸田村
久末村	辨分村	俣見村
釜口村	白木原村	小野村

永松村 沓掛村 石丸村

波多方村

高貳万七千八百拾壹石九斗

速見郡之内 四拾壹箇村

三尾平村 拂川村 尾廻村

河平村 筒木村 中津屋村

尾上村 船部村 二坂村

溝井村 乙王村 荒平村

鴨川村 五田村 廻平村

山廻村 馬場尾村 宮司村

守末村 次郎丸村 木田村

下原村 安住寺村 下司村

菊本村 生地村 宗近村

中野村 本庄村 廣瀬村

宮原村 山中村 新庄村

日明村 中村 片野村

高須村 原村 加貫村

歲田村 眞那井村之内

高四千八百八拾八石壹斗

都合三萬貳千石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平市正殿

信濃國伊那郡之内七拾五箇村貳万五千貳百石筑摩郡内拾九箇村五千石都合三万貳千石
別紙在ニ事如ニ前々ニ宛三行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如ノ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者森 新兵衛

鳥居兵部少輔とのへ

目録

信濃國

伊那郡之内 七拾五箇村

片倉村 御堂垣外村 水上村

小原村 荒町村 臺村

栗田村 黒澤村 四ヶ市村

中條村 中村 板山村

野笹村 的場村 荊口村

山室村 比持村 溝口村

高貳万五千貳百石	横川村	新町村	今村	辰野村	赤羽村	宮田村	表木村	山寺村	上牧村	川手村	蘆澤村	中山村	本曾倉村	菅沼村	栗林村	福地村	山田村	勝間村	黑河内村
	鉾持村	羽場村	宮所村	上嶋村	澤底村	諏訪形村	下牧村	西伊奈部村	野底村	狐嶋村	笠原村	田原村	中曾倉村	吉瀬村	増田村	火山村	新山村	板町村	市瀬村
	彌勒村	北大出村	宮木村	雨澤村	平出村	樋口村	中越村	小出村	御園村	東伊奈部村	大嶋村	殿嶋村	大曾倉村	高見村	大窪村	稻村	貝沼村	小原村	浦村

筑摩郡之内 拾九箇村

本洗馬村	小曾部村	西洗馬村
小野澤村	針尾村	古見村
大池村	小坂村	武田村
荒井村	衣外村	殿村
南和田村	中村	下和田村
和田町村	境村	今井村
岩垂村		
高五千石		

都合三万貳百石

奥書右同

寛文四年四月五日

鳥居兵部少輔殿

卷第十八

日向國那珂郡之内壹万貳千貳百拾壹石餘兒湯郡之内
 壹万七千八百五十九石五斗餘都合三万七拾石之餘
 在別紙事任三元和二年九月五日先判之旨一宛三行之一訖全
 可三領知者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

嶋津又四郎とのへ

目録

日向國

那珂郡之内 拾箇村

上田嶋村 下田嶋村 袋廣瀬村

石崎村 鹽路御手洗村 山崎村

上那珂村 下那珂村 廣原村

新名爪村

高壹万貳千貳百拾壹石貳斗壹升^{イ四}三合

兒湯郡之内 拾壹箇村

山田村 三才村 荒武村

妻萬村 鹿野田村 平郡村

三納村 加勢村 藤田村

富田村 新田井倉村

高壹万七千八百五拾九石五斗

都合三万七拾石七斗餘

奥書同斷

寛文四年四月五日

嶋津又四郎殿

播摩國安栗郡之内百七拾箇村都合三万石<sup>日録在ニ事
別紙</sup>如^ニ前々^一宛^ニ行之^一訖全可^ニ領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

松平備後守とのへ

目録

播摩國

安栗郡之内 百七箇村

山崎^{門前共}村 奥小屋村 高下^{波田市場共}村

青木^{門前共}村 安志村 狹戸^{波田市場共}村

下波田村 三坂村 鹽野^同村

上野^{安志谷之内}村 三森^同村 名坂^同村

末廣^同村 皆河村 枋原^同村

宇原村 波田^{宇原之内}村 川戸^同村

須加村 蟬澤^{宇原之内}村 波田^{長野之内}村

高所村 中村 三谷^{長野之内}村

引原村	飯見村	有賀村之内	谷村	東安積村	倉床村	黒原村	千町村	下牧谷村	落山 ^{半濟之内} 村	川原田村	福地村	深河谷村	木野谷村	與位村	神戶 ^{五十波之内} 村	梯 ^{五十波之内} 村	野々上村	神谷村
鹿 ^{引原之内} 伏村	野 ^{都多之内} 尻村	上野村	小野村	杉田村	閨賀村	公文 ^{牛濟之内} 村	岸田 ^{牛濟之内} 村	上牧 ^{伊澤之内} 谷村	上町 ^{味方之内} 中町 ^{伊澤之内} 共	波 ^{味方之内} 田	味方 ^{味方之内} 町	生栖 ^{染河之内} 村	能倉 ^{染河之内} 村	杉瀬 ^{神戶之内} 村	波 ^{神戶之内} 田	田井村	三津村	矢原村
土倉村	原村	皆木村	安賀村	日見谷村	西安積村	横山 ^同 村	井内 ^同 村	草木 ^同 町	下 ^同 町	森添村	福里村	西深村	東河内村	母栖 ^{染河之内} 村	野尻 ^{染河之内} 村	清野村	五十波村	岸田村

奥書右同斷

寛文四年四月五日

松平備後守殿

都合三万石

葛根村	春安村	鶴木村	小茅 ^{都多} 野村	下野 ^{都多} 村	生谷村	今宿村	下廣瀬村	道谷村
今市村	加生村	金谷村	千本屋村	中野村	横須村	高家 ^{波田共} 村	船本 ^{波田共} 村	比地村
鹽田村	段井 ^{引原} 村	中井 ^{引原} 村	上野 ^{引原} 村	大谷村	上寺村	中廣瀬村	御名村	

日向國兒湯郡之内貳拾七箇村壹万貳千百七拾五石貳斗餘那珂郡之内拾八箇村壹万三千六百三拾八石壹斗餘諸縣郡之内六箇村三千貳百三拾石六斗餘^{目録在別紙}如^{前々}宛^一行之^一訖全可^二領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

秋月佐渡守とのへ

目錄

日向國

兒湯郡之内 貳拾七箇村

高鍋村 日置村 上江村
市山村 推木村 三納代村
持田村 岸上村 高城村
平田村 川原村 持見村
石村 板屋村 鹿遊村
上別府村 落子村 寺迫村
田原村 丸山村 征矢原村
長野村 荒生村 岩山村
篠別府村 猪窪村 大池村
高壹万貳千七百七拾五石貳斗六升

那珂郡之内 拾八箇村

西方村 高松村 奴久見村
一氏村 南方村 大平村
奈留村 北方村 秋山村
大矢取村 本庄村 崎田村

市木村 六郎坊村 海北村
都井村 御崎村 大納村
高壹万三千六百三拾八石壹斗七升
諸縣郡之内 六箇村

伊佐生村 三名村 木脇村
岩地野村 吉野村 嵐田村
高三千貳百三拾石六斗八升
宮崎郡之内 三箇村
潤田豐松共

金崎村 堤内村 宮王丸村
高八百七拾五石八斗五升

臼杵郡之内

才脇村

高八拾石四升

都合三万石

奥書右同

寛文四年四月五日

秋月佐渡守殿

信濃國諏訪郡之内拾貳箇村貳万七千石筑摩郡之内三

千石都合三万石目録在別紙事如前々宛ニ行之ニ訖全可ニ
領知者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部傳右衛門

諏訪因幡守とのへ

目録

信濃國

諏訪郡一圓 七拾貳箇村

御體山神戶村	先達村	池袋村	程底村	乙事村	下蔦木村	栗澤村	古田村	芹澤村	鹽澤村	矢崎村	上桑原村	下桑原村	植原田村	柏原村	南大鹽村	中澤村	上原村	瀬澤村	平岡村	田端村	圓見山村	机村	金澤村
千野村	小東村	葛窪村	高森村	神代村	木曾村	上蔦木村	福澤村	中村	湯川村	北大鹽村	神戶村												

都合三万八拾七石五斗九升	高三千石	神田村	竹淵村	小池村	中挿村	筑摩郡之内	飯嶋村	下金子村	田邊村	高木村	湯町	西山田村	今井村	岡谷村	駒澤村	花岡村	眞志野村	安國寺村
		泉村	白川村	百瀬村	北熊野井村	拾貳箇村	赤沼村	新井村	上金子村	大和村	友町	東山田村	西堀村	小口村	新倉村	橋原村	有賀村	神宮寺村
		赤木村	白姫村	瀬黒村	南熊野井村		福嶋村	横内村	中金子村	文出村	富部村	下原村	東堀村	小井川村	三澤村	鮎澤村	小坂村	大熊村

奥書右同

寛文四年四月五日

諏訪因幡守殿

伊豫國越智郡之内六拾八箇村都合三万石目録在別紙事如
前々宛之行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保金右衛門

松平美作守とのへ

目録

伊豫國

越智郡之内 六拾八箇村

今治村	大濱村	石井村
別宮村	日吉村	片山村
小泉村	別名村	高橋村
法界寺村	大野村	三段地村
摺木村	與和木村	鍋地村
植村	御馬屋村	葛谷村
龍岡村	長谷村	鈍川村

奥書右同斷	都合三万石	都合三万石	別所村	德重村	鄉村	拜志上村	高市村	國分村	高野村	木浦村	有津村	宮窪村	棕名村	餘所國村	沖友村	正味村	弓削村	中幡村	八幡村	中寺村	鳥生村	拜志北村	町屋村	新谷村	朝倉中村	佐嶋村	伊方村	名浦村	田浦村	泊江村	仁江村	臥間村	沖嶋村	小鴨部村	四町村	八町村	藏敷村	松木村	寺川原村	古谷村	朝倉上村之内	叶浦村	北浦村	本庄村	早川村	福田村	津嶋村	沖浦村
-------	-------	-------	-----	-----	----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	------	-----	--------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

寛文四年四月五日

松平美作守殿

大和國葛上郡之内貳拾八箇村壹万八千百四拾三石餘
葛下郡之内五箇村貳千六百七十六斗餘高市郡之内六
箇村千七百壹石九斗餘北海郡内五拾箇村千九百九拾
貳石壹斗餘平群郡之内拾五箇村五千五百五拾五石壹
斗餘都合三万石^{別紙}事如^{目錄}前々宛^三行之^一訖全可^三
領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者飯高七兵衛

本多中務大輔とのへ

目録

大和國

葛上郡之内 貳拾八箇村

今住村 稻宿村 戸毛村

古瀬村 奉膳村 重坂村

内谷村 佐味村 伏見村

小窪村之内 小野江之内 持田村

小殿村 佐田村 宮戸村

森脇村 檜原村 三室村

蛇穴村 松本村 五所村之内

朝町村 城村 本馬村

十三村 茅原村 大谷村

下田村之内

高壹万八千百四拾三石六升四合

葛下郡之内 五箇村

柿本村 笛堂村 曾根村

勝目村 東室村

高貳千六百七十六斗五升

高市郡之内 六箇村

奥田村 同出村 寺崎村

越村 北越知村 市尾村

高千七百壹石九斗九升壹合

忍海郡之内 五箇村

上村之内 平岡村 山口村

蓋村 柳原村

高千九百九拾貳石壹斗八合

平群郡之内 拾五箇村

辻村 菜畑村 檨原村

椿村 白石畑村 福貴畑村

西向村 梨本村 福貴村之内

幸前村 高安村 椎木村
今國府村 池澤村 馬司村

高五千五百五拾五石壹斗九升貳合

都合三万石

奥書右同

寛文四年四月五日

本多中務大輔殿

越後國蒲原郡之内百四箇村都合三万石

目録在別紙ニ事如

御先代宛ニ行之訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

堀丹波守とのへ

目録

越後國

蒲原郡之内 百四箇村

村松上町 村松下町 西石曾根村

東石曾根村 木越村之内 矢津村

阿彌陀瀬村 大口村 別所村

庭月村	森町	檜山村	嶋川原村	桑切村	大平村	原村	荒屋村	谷地村	曲谷村	上大浦村	西山村	大谷村	上土倉村	牧村	上大浦原村	田中村	中野橋村	寺田村	中嶋村
院内村	荒澤村	田屋村	江口村	飯田村	笹巻村	長澤村	鹿熊村	蝶名林村	牛頸村	高屋敷村	下大浦村	高柳村	長谷村	高松村	下戸倉村	上野村	荻羽村	山屋村	安出村
北五百川村	小長澤村	棚鱗村	花淵村	中村	大澤村	駒籠村	萩堀村	中浦村	落合村	鹿峠村	馬場村	宮崎上村	黒水村	下土倉村	上戸倉村	下大浦原村	青橋村	笹野町村	蛭野村

南五百川村 大谷地村 各下村

栗山村 鹽野淵村 笠堀村

大谷村 長崎村 中野村

牛野尾村 濁澤村 早水之村

葎谷村 遅場村 吉平村

堀溝村 庄川村 石地村

嶋切窪村 見付町 内町村

嶺崎村 葛卷村 一野坪村

傍所村 反田村 山吉村

一野坪興屋村 中村 新潟村

本所村 會津興屋村 中名澤村

長橋村 中村

都合三万石

奥書右同

寛文四年四月五日

堀丹波守殿

上野國利根郡之内壹万八千貳百貳拾三石九斗餘勢田
我妻兩郡之内壹万七千七百七拾六石餘都合三万石
別錄

紙事如三前々宛ニ行之訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御判 筆者杉浦半左衛門

眞田伊賀守とのへ

目錄

上野國

利根郡一圓 九拾五箇村

高壹万八千貳百貳拾三石九斗三升八合

勢多郡之内 七箇村

生越村 多那村 輪組村

青木村 砂河村 日影南江村

下水良村

高六百九拾八石六斗三升九合

吾妻郡之内 七拾三箇村

大笹村 干俣村 門貝村

大前村 西窪村 中井村

赤羽根村 鎌原村 蘆生田村

小宿村 袋倉村 古森村

狩宿村 與木屋村 荒井村

今井村 長野原村 坪井村

羽尾村	立石村	桃木村
日影村	赤岩村	生須村
横壁村	河原湯村	河原畑村
横谷村	岩下村	矢倉村
松尾村	江原村	三嶋村
原田村	河戸村	金井村
岩井村	植栗村	小泉村
泉澤村	新卷村	奥田村
市城村	青山村	中野條村
伊勢村	西中野條村	原町村
山田村	折田村	下澤渡村
上澤渡村	四萬村	五反田村
蟻川村	横尾村	猿京村
須川村	入須川村	湯宿村
長井村	吹路村	林村
大塚村	赤坂村	平村
布施村	師田村	田代村
入山村	草津村	前口村
小雨村		

高壹万千七拾七石四斗貳升三合

都合三万石
奥書右同

寛文四年四月五日

眞田伊賀守殿

信濃國佐久郡内五拾五箇村小縣郡内拾貳箇村都合三万石
別紙 佐久郡内五拾五箇村小縣郡内拾貳箇村都合三万石
如件
事如三前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知一者也仍

寛文四年四月五日御朱印 筆者飯高七郎兵衛

酒井日向守とのへ

目録

信濃國

佐久郡之内 五拾五箇村

市町村	本町村	與郎松井村
加増村	諸村	菱野村
西原村	瀧原村	落合村
耳取村	下塚草村	前田原村
鹽野村	上塚原村	借宿村

東和田村 根今井塚原村

市村 長土呂村

沓掛村 輕井澤村

小田井村 岩村田村

下曾根村 森山村

前田原村 油井村

御馬寄村 桑山村

八幡村 望月村

茂田井村 蘆田村

藤澤村 鹽澤村

印内村 下城村

羽毛山村 嶋河原村

柏木村 鹽澤村

根々井本郷

高貳万三千三百七拾九石八斗六合

小縣郡之内 拾貳箇村

長瀬村 中九子村

御嵩堂村 内村

井子村 芝生田村

大石村 鹽川村

塚原新町

大和田村

追分村

鹽名田村

平原村

山浦村

蓬田村

望月新町

山部村

細谷村

大日向村

布下村

前澤村

高八千六百貳拾石壹斗九升四合

都合三万石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

酒井日向守殿

卷第十九

丹波國船井郡之内百三拾壹箇村貳万七百拾五石五斗餘桑田郡之内五拾貳箇村五千百拾石六斗餘河鹿郡内拾箇村千八百八拾四石九斗餘上野國甘樂郡内四箇村二千石都合貳万九千七百拾壹石別紙在事如「前々」宛行之「訖全可」領知「者也仍如」件

寛文四年四月五日御朱印 筆者森 新兵衛

小出伊勢守とのへ

目録

丹波國

船井郡之内 百三拾壹箇村 内百貳拾八箇村小物成高ニ入

中山村 小畑村 安栖里村

稻次村	大簾村	廣瀬村	本庄村	篠原村	下栗野村	上栗野村	鹽谷村	奧村	谷村	黑瀬村	知野部村	上野村	胡麻中村	下草原村	室谷村	海老谷村	和田村	上小畑村	中村
出野村	才原村	中村	市場村	上乙見村	西川内村	佛主村	長瀬村	紅井村	高屋村	尾長野村	白土村	上胡麻村	胡麻畑村	佐々江村	大谷村	東谷村	新村	下小畑村	上谷村
廣野村	角野村	坂原村	大倉村	下乙見村	細谷村	大廻村	升谷村	新宮村	坪井村	蕨村	曾根村	大戸村	上草原村	田貫村	吉野部村	片野村	殿村	殿村	下谷村
牧山村	宮村	下程生村	胡麻上野村	家田村	山口村	藁無村	瓜生野村	船枝村	神田村	池内村	大藪村	室河原村	上木崎村	東半田村	船坂村	宋人村	下天引村	法京村	填生村
上世木村	上木住村	安鳥村	久保村	志和加村	新堂村	松尾村	桐高屋村	室橋村	廣垣内村	玉井村	八木村	小山村	下木崎村	西半田村	下新江村	西山村	八田村	土畑村	大谷村
世森村	下木住村	下胡麻村	角本村	西谷村	岡田村	熊崎村	熊原村	鳥羽村	雀部村	八木嶋村	柴山村	園部村	下横田村	南横田村	大坪村	上天引村	大河内村	廣野村	垣内村

今林村 千妻村 曾我谷村

上新江村 麻氣村 篠田村

上横田村 大村

高貳万七百拾五石五斗壹升四合

桑田郡之内 五拾貳箇村 内四拾八箇村小物成高三入

枋本村 中地村 栗生谷村

弓槻村 柏原村 原村

板橋村 宮脇村 俣林村

下吉田村 棚田村 澤田村

檜原村 川谷村 上司村

和泉村 嶋村 中村

市場村 今宮村 枋原村

砂木村 上吉田村 田土村

船津村 脇村 棚森村

殿壁村 庄田村 山及村

熊壁村 林村 大及村

下平屋村 上平屋村 安掛村

荒倉村 大内村 上久保村

知見村 中村 平松村

中野村 浮井村 明石村

深見村 長尾村 野添村

蘆生村 佐今里村 白石村

大井村

高五千百拾石六斗七升八合

何鹿郡之内 拾箇村 内七箇村小物成高三入

西方村 西保村 白道路村

清水村 遊里村 山内村

長野村 引地村 小田村

眞野村

高千八百八拾四石九斗八升四合

上野國

甘樂郡之内 四箇村

南蛇井村 岩漆村 内匠村

高瀬村

高貳千石

都合貳万九千七百拾壹石壹斗六升六合

奥書右同

寛文四年四月五日

小出伊勢守殿

肥前國彼杵郡内四拾八箇村都合貳万七千九百石餘日録
在別紙事如_ニ前々_ニ宛_ニ行之_ニ訖全可_ニ領知_ニ者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部傳右衛門

大村因番守とのへ

目録

肥前國

彼杵郡之内 四拾八箇村 但島共

大村	萱瀬村	郡村
江串村	千綿村	彼杵村
川棚村	波佐見村	宮村
鈴田村	三浦村	壹岐刀村
佐瀬村	長支村	時津村
滑石村	幸田村	戸町村
福田村	式見村	三重村
神浦村	雪浦村	松嶋村
瀬戸村	多井良村	中浦村
加喜村	江嶋	平嶋

奥書右同斷

寛文四年四月五日

大村因幡守殿

大多和村	面高村	大嶋
天寵村	横瀬浦村	河内浦村
八木原村	大串村	形上村
長浦村	西海村	日并村
浦上古場村	浦上北村	浦上家野村
浦上西村	陌苺平村	黒崎村
都合貳万七千九百七拾三石八斗七升七合		

常陸國行方郡内拾九箇村新治郡内拾四箇村鹿嶋郡内
貳拾八箇村河内郡之内若柴村那郡門毛村下野國芳賀
郡之内四箇村都合貳万七千三百拾七石壹斗別紙目録在_ニ事
如_ニ前々_ニ宛_ニ行之_ニ訖全可_ニ領知_ニ者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

新庄隱岐守とのへ

目録

常陸國

行方郡之内 拾九箇村

船子村 水原村 大生村之内

石神村 小屋村 嶋並村

橋門村 井貝村 南村

小高村 麻生村 藤井村

出沼村 西蓮寺村 井上村

手加濱村 高岡村 沖須村

手賀村

高九千四百壹石五斗四升五合

新治郡之内 拾四箇村

篠崎村 菊間村 妻木村

花室村 境村之内 吉瀬村

上室村 大角豆腐村 廣岡村之内

古來村 追戸村 中村

大岩田村 高須賀村

高九千百拾九石四斗八升七合

鹿嶋郡之内 貳拾八箇村

山野上村 沼尾村之内 須賀村之内

中村之内 奈良毛村 立原村

津賀村 武井村之内 塙村

志崎村之内 林村之内 上幡木村之内

札村之内 阿玉村之内 小見村之内

大舟津村之内 須柴村之内 青塚村之内

泉川村 下幡木村 知手村

溝口村之内 平泉村 谷田部村之内

奥谷村 日川村 梶山村之内

高須賀村之内

高六千五百九拾九石壹斗三升四合

内延高貳千六百九拾壹石九斗五升壹合
爲御用地一被召上替地以物成積被下附而高二不
ノ載レ之

河内郡之内

若柴村

高千貳百貳拾六石貳斗七升九合

那賀郡之内

門毛村

高七百七拾壹石八斗六升

下野國

芳賀郡之内 四箇村

飯村 木幡村 大澤村

西田井村之内

高貳千八百九拾石七斗四升六合

都合貳万七千三百拾七石壹斗

奥書右同

寛文四年四月五日

新庄隱岐守殿

常陸國新治郡内五拾壹箇村貳万三千五百八拾三石七斗餘那珂郡之内三箇村千百九拾貳石五斗餘河内郡佐倉村之内百八石五斗餘下野國芳賀郡之内四箇村千四石九斗餘近江國高嶋郡之内四箇村千百拾石貳斗都合貳万七千石目録在別紙事如三前々宛ニ行之ニ訖全可ニ領知者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者久保金左衛門

朽木伊豫守とのみ

目錄

常陸國

新治郡之内

五拾壹箇村

土浦

上高津村

中高津村

下高津村

糟毛村

尖塚村

佐野子村

矢作村

飯田村

太田村

田戸部村

高岡村

藤澤村

大畑村

田宮村

澤部村

小山崎村

山本村

今泉村

中貫村

神立村

白鳥村

平野村

沖宿村

下大堤村

木田余村

眞鍋村

殿里村

常名村

蟲掛村

下坂田村

上坂田村

深谷村

根本村

中臺村

上大堤村

有賀村之内

小松村

小岩田村

右籾村

鳥山村

永國村

廣岡村之内

田村之内

大形村之内

太田村

山口村之内

小和田村

網村之内

小栗町之内

八田村之内

高貳万三千五百八拾三石七斗壹升貳合

那珂郡之内 三箇村

蓬田村

高森村

青木村

高千百九拾貳石五斗五升七合

河内郡之内

佐倉村之内

高百八石五斗六升五合

下野國

芳賀郡之内 四箇村

桑野川村之内

鹿

村

下

村

反町村

高千四石九斗六升六合

近江國

高嶋郡之内 四箇村

東萬木村之内

元古賀村之内

長尾村之内

追分村之内

高千百拾石貳斗

都合貳万七千石

奥書右同

寛文四年四月五日

栃木伊豫守殿

備中國賀規郡之内貳万千六百石餘上方郡内三千三百

九拾九石九斗餘都合貳万五千石

別紙在事任二元和元年七月二十七日同三年八月二十八日先判之旨宛行

之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保金左衛門

本下淡路守とのへ

目録

備中國

賀陽郡之内 三拾五箇村

上足守村 下足守村 大井村

日近村 吉村 下高田村

上高田村 山上村 石妻村

杉谷村 眞星村 皆竹部村

上野村 山内村 間倉村

粟井村 小山村 大崎村

門前村 下土田村 上土田村

田中村 高塚村 福崎村

三手村 東阿曾村 西阿曾村

奥坂村 溝手村 窪木村

長良村 久米村 平山村

黒尾村 刑部村

高貳万千六百石八斗

上方郡之内 五箇村

吉川村 黒山村 田土村

矢野村 岩村

高三千三百九拾九石九斗壹升

都合貳万五千石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

木下淡路守殿

出羽國村山郡内三拾八箇村都合貳万五千石目録在三事別紙
如三前々宛三行之三訖全可三領知三者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部傳右衛門

土岐山城守とのへ

目錄

村山郡之内 三拾八箇村

城廻町 高松村

川口村 藤五村 石曾根村

阿彌陀地村 小穴村 細谷村

中關根村 上關根村 下關根村

稻下村 宮脇村 皆澤村

牧野村 原口村 金澤村

大笹村 大久保村 江田板村

庄部澤村 上生居村 大門村

下生居村 仙石村 中生居村

金谷村 高谷村 小泉村

權現堂村 小倉村 長野村

臺村 仁田村 溝延村

日和田村 箕輪村 小泉村

都合貳万五千石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

土岐山城守殿

出羽國

豊後國速見郡之内拾六箇村都合貳万五千石目録在ニ事別紙如ニ前々宛ニ行之訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者森新兵衛

木下右衛門大夫とのへ

目録

豊後國

速見郡之内 拾六箇村

日出村	辻間村	大神村
藤原村	八代村	八坂村
廣瀬村	小武村	倉成村
恒道村	貫井村	後川内村
目差村	久木野尾村	南畑村
山浦村		
都合貳万五千石		

奥書同斷

寛文四年四月五日

木下右衛門大夫殿

伊豫國新庄郡之内三拾八箇村貳万五千石目録在ニ事別紙如ニ前々宛ニ行之訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久左衛門

一柳監物とのへ

目録

伊豫國

新居郡之内 三拾八箇村

永見村	西田村	洲田村
安知生村	中西村	樋口村
中野村	北川村	神拜村
古川村	北濱村	朔日市村
明神木村	下嶋山村	半田村之内
福武村	大町村	大保木村
菟野山村	藤野石村	流田村
長安村	船屋村	中村
角野村	船木村	別名村
庄内村	金子村	新居濱村
新須加村	澤津村	宇高村
郷村	垣生村	松見子村

河嶋村 大嶋村

高貳万三千九百七拾貳石四斗五升四合

宇摩郡之内 貳箇村

蕪崎村 小林村之内

高千貳拾七石五斗四升六合

都合貳万五千石

奥書右同斷

寛文四年四月五日

一柳監物殿

駿河國志太郡之内四拾九箇村壹万八千六百七拾八石八斗餘益頭郡之内拾八箇村六千三百二拾壹石壹斗餘都合貳万五千石^{目録在別紙}内五千石者西尾圭水可^ニ進退^一之殘貳万石宛行訖全可^ニ領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保金右衛門

西尾右京とのへ

目錄

駿河國

志太郡之内 四拾九箇村

志太村 青木村 南新谷村

大住村 三ヶ名村 保福嶋村

小川村 鬼嶋村 水守村

小柳津村 前嶋村 水上村

若王寺村 新田高^ニ入^ル時谷村 村良村

桂嶋村 羽佐間村 殿村

宮嶋村 玉取村 青羽根村

野田澤村 五堀内村 潮村

市部村 原村 稻葉堀内村

清水村 瀬古村 岸村

阿知谷村 東光寺村 高柳村

築地村 中根村之内 道原村

上當間村 小屋敷村 稻川村

柳新谷村 鬼岩寺村 上藪田村

下藪田村 中藪田村 中江村之内

高田村 借宿村 小土村

五十海村

高壹万八千六百七拾八石八斗五升⁴三合⁴

益頭郡之内 拾八箇村

益頭村 北村 城腰村之内

大^{新田高に入}村 岡當目村 成澤村

吉津村 野秋村 鹽津村

石脇村 平嶋村 八幡村

下當間村 長樂寺村 新谷村之内

郡村 濱當目村 大覺寺村

高六千三百貳拾壹石壹斗四升七合

都合貳万五千石

此内五千石西尾主水拜領之一

奥書右同斷

寛文四年四月五日

西尾右京殿

卷第二十

美濃國郡上郡之内百三拾四箇村都合貳万四千石^{目録在別紙}
事如^紙前々宛^レ行之訖全可^レ領知者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者森 新兵衛

遠藤備前守とのへ

目録

美濃國

郡上郡之内 百三拾四箇村

木尾村	繁在村	根村
勝原村	下田村	大矢村
野尻村	新羽根村	福野村
高原村	荏安村	粥川村
赤池村	杉原村	三日月村
圖本村	門福手村	桐戸村
深戸村	梅原村	名津佐村
東乙原村	千虎村	那比村
龜尾島村	寺本村	鈴原村
腰細村	穀見村	中野村
向中野村	勝皿村	安久田村
赤谷村	寺畑村	田尻村
川佐村	市嶋村	在原村
小久須見村	畑佐村	小川村
漆原村	鎌邊村	坂本村
長尾村	二間手村	東氣良村

西氣良村	神谷村	石原村	小野村	中桐村	原村	鳩畑村	中神路村	西俣村	大間見村	中西村	折村	藤林村	切立村	西洞村	鮎走村	步岐嶋村	白鳥村	越佐村	中津屋村
大久須見村	下津原村	符道村	中坪村	西洞村	深皿村	宇津須村	上神路村	茂多井村	成村	野添村	掃洞村	高久村	陰地鷺見村	穴洞村	正洞村	長瀧寺村	向小駄良村	大嶋村	萬場村
寒水村	吉田村	鶴佐村	是本村	印雀村	爲安村	皆佛村	東俣村	小間見村	陰地村	橋詰村	畑谷村	阿多岐村	鷺見村	中桐村	前谷村	二日町村	爲真村	野里村	鶴儀村

那皿邊村	牧馬場村	大瀬古村	五町村	野尻村	田平村	尾那比村	鬼谷村	都合貳万四千石	奥書右同
德永村	河邊村	小瀬古村	土京村	鹿倉村	厚波村	具間村	安具村		
八日町村	口神路村	坪佐村	澤村之内	東野村	唯郷村	熊石村			

寛文四年四月五日
遠藤備前守殿

參河國幡豆郡之内七拾貳箇村都合貳万三千石
事如三前々宛ニ行之ニ畢全可ニ領知一者也仍如レ件
別紙ニ

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保金左衛門

土井兵庫守とのへ

目錄

三河國

幡豆郡之内 七拾貳箇村

羽塚村	執池村	下矢田村	針曾根村	久八荒子村	大戸村	川口村	平嶋村	池頭村	天竹村	須脇村	鎌谷村	細池村	寄近村	味崎村	小嶋村	中野村	西尾村
新在家村	菱池村	長繩村	德永村	行用村	下新居村	深池村	新齋荒子村	市子村	野宮村	齊藤村	鶺鴒池村	小燒村	雁田村	寄住村	米野村	八面村	道光寺村
住崎村	國森村	上道目記村	上矢田村	下道目記村	借宿村	矢曾根村	八尻村	一色村	横手村	十郎嶋村	下今川村	宅野島村	上今川村	德次村	熊子村	志籠谷村	戸崎村

楠村	田貫村	下町村	平口村	篠曾根村	惣五郎村	都合貳万三千石
平坂村	小間村	上町村	熊野村	對籠村	赤羽村	
中畑村	法光寺村	味濱村	中田村	野田村	花藏寺村	

奥書右同斷

寛文四年四月五日

土井兵庫頭殿

美濃國石津郡之内拾七箇村多藝郡之内拾七箇村都合貳万貳千七百七拾七石_{目録在別紙}事如_ニ前々_一宛_ニ行之_ニ訖全可_ニ領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

小笠原土佐守とのへ

目錄

美濃國

石津郡之内 拾七箇村 内拾壹箇村太田新田共從前之高ニ入

高須村 馬目村 東駒野村

西小嶋村 東小嶋村 萱野村

安田帆引村 宮地村 上野河戸村

山崎村 駒野村 澤田村

牧田村 深濱村 梶屋村

多郎村 札野村

高壹万百八拾三石七斗四升三合

多藝郡之内 拾七箇村 内七箇村從前之高ニ入

飯木村 押越村 島田村

五日市村 白石村 飯積村

直江村 金屋村 有尾村

大場村 岩道村 上江村

明德村 小倉村 大跡村

根古地村 津屋村之内

高壹万貳千四百拾六石貳斗五升七合

都合貳万貳千六百石

右今度被差上郡村之帳面相改及上聞如御先代之高所被成下御朱印也此儀兩人奉行依被仰付一執達如件

寛文四年四月五日

小笠原土佐守殿

備中國都宇郡之内九箇村壹万五千六百四拾八石七斗餘賀夜郡之内四箇村六千八百五拾石七斗餘都合貳万貳千五百石別紙在事任寛永八年三月八日先判之旨一宛三行之畢全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

戸川土佐守とのへ

目錄

備中國

都宇郡之内 九箇村

妹尾村 大内田村 撫川村

東庄村 山地村 矢部村

鳥羽村 栗坂村 德芳村

高壹万五千六百四拾八石七斗餘

賀陽郡之内 四箇村

庭瀬村 宮内村 立田村

原小才村

高六千八百五拾石七斗

都合貳万貳千五百石

右今度被ニ差上ニ郡村之帳面相改及ニ上聞ニ所レ被ニ成
下ニ御朱印也此儀兩人奉行依レ被ニ仰付ニ執達如件

寛文四年四月五日

戸川土佐守殿

豊後國大分郡之内百二拾箇村都合貳万貳千貳百石
目録在
別紙ニ事宛ニ行之ニ畢全可ニ領知ニ者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

松平左近將監とのへ

目録

豊後國

大分郡之内 百貳箇村

府内町 松末町 千手堂町

笠和町 同慈寺町 勢家町

駄原村 生石村 由原村

六坊村	律院村	古國府村
羽屋村	豐饒村	畠中村
永興村	太平寺村	田中村
尼瀬村	奧小路村	上村
竹上村	井蕪村	東院村
中尾村	賀來村	野田村
志手村	椎廻村	金谷廻村
大山村	白木村	田浦村
三船村	古原村	黒野村
來鉢村	山口村	七曹子村
宮苑村	高崎村	新村
平床村	田代村	中畑村
内成村	朴木村	埴坪村
時松村	下市村	上市村
小野津留村	國分村	平横瀬村
鶴田村	向原村	中村
海老毛村	橋爪村	葛原村
瀬口村	畠田村	影戸村
竹中村	中尾村	柚木村
田口原村	平原村	小受間村

宗壽寺村 武宮村 後田村
平良石村 小原村 東家村

雲取村 六郎丸村 中無禮村

桑畑村 甲斐田村 透内村

久保村 岩下村 櫟木村

蛇口村 五福村 野畠村

入小野村 下田向村 中淵村

上淵村 奈良田村 荒生田村

富村 直野内山村 今津留村

中津留村 花津留村 牧村

萩原村 下郡村 羽田村

都合貳万貳千貳百石

但外貳千四百拾石七斗八升貳合從前々之籠

高也

奥書右同

寛文四年四月五日

松平左近將監殿

肥後國球麻郡四拾壹箇村都合貳万貳千百石餘

別紙在

事任寛永十一年八月四日先判之旨宛行之訖全
可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋長左衛門

相良遠江守とのへ

目録

肥後國

球麻郡一圓 四拾壹箇村

間村 西村 田代村

大畑村 西裏村 大牟田谷村

松谷村 毎床谷村 一勝地谷村

大瀬谷村 渡村 神瀬谷村

原田村 中神村 林村

薩摩瀬村 萬江村 大村

山田村 川邊村 平川村

晴山村 田代村 初神村

築瀬村 木上村 深水村

蓑毛村 目良村 永池村

免田村 多良木村 深田村

須惠村 上村 湯前村

一武村 久米村 奥野村
宮原村 岡本村

但六拾五石依_レ爲_二分限帳之外_一籠高也

都合貳万貳千百六拾五石

奥書右同斷

寛文四年六月朔日

相良遠江守殿

大和國高市郡之内六拾八箇村都合貳万貳千石_{別紙在_二}
事如_二前々_一宛_二行之_一畢全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部傳右衛門

植村右衛門佐とのへ

目録

大和國

高市郡之内 六拾八箇村

土佐町村 土佐村 觀覺寺村
子嶋村 清水谷村 阿部山村
大根田村 栗原村 平田村
立部村 野口村 橋村

檜前村	大歌留村	羽内村	谷田村	森村	兵庫村	寺崎村	北越知村	秋吉村	八木村	四分村	高殿村	岡村	入谷村	稻淵村	尾曾村	飛鳥村	八鈎村	雷土村	都合貳万貳千石
御園村	松山村	藤井村	丹生谷村	薩摩村	車木村	與樂村	觀音寺村	西坊城村	四條村	木殿村	和田村	中曾司村	畠村	悅戸村	細川村	小原村	興山村	見瀬村	
眞弓村	吉備村	市尾村	樂水村	田井庄村	越知村	妙法寺村	萩本村	新堂村	繩手村	田中村	石川村	柏森村	冬野村	坂田村	嶋庄村	豐浦村	小山村		

奥書右同

寛文四年四月五日

植村右衛門佐殿

上總國望陀郡之内七拾八箇村壹万七千三百八拾石餘
市原郡之内佐瀬領貳拾三箇村三千六百貳拾六石餘都
合貳万千七石六斗餘^{別紙}在^録事任^ニ寛永二年十二月十
一日先判之旨^ニ宛^ニ行之^ニ訖^ニ全可^ニ領知^ニ者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者杉浦半左衛門

土屋民部少輔とのへ

目録

上總國

望陀郡之内 七拾八箇村

眞里村

百米木村

下内橋村

二階堂村

萱野村

山本村

西原村

貝淵村

宗政村

河窪村

大河原村

砂田村

三田村

末吉村

長谷川村

臺村	河谷村	青柳村	俵田村	寺澤村	向江村	愛宕村	宿戸村	胡立村	築瀬村	鳴畑村	麻栖村	女食村	網場村	四町村	大録村	高水村	笹林村	折木澤村
瀧村	小市部村	蓑輪村	戸崎村	富田村	浦田村	平山村	小瀧村	外ヶ野村	打路木村	小坂村	蓮見村	谷向村	田面村	關村	名殿村	野中村	香木原村	草河原村
大谷村	市場村	新田村	岩出村	栗坪村	怒田村	西野村	大山田村	千木村	稻瀧村	戸穴村	片野村	切畑村	細野村	石崎村	柳城村	菅間田村	河股村	坂畑村
																		黒玉村

四方木村 大和田村 河田村

高壹万七千三百八拾石六斗七升四合

市原郡之内 貳拾三箇村

菅野村 石塚村 根向村

折津村 大窪村 國本村

田淵村 月崎村 河崎村

日竹村 德氏村 飯給村

柿木臺村 大戸村 平野村

本郷村 宮原村 賀茂村

小佐貫村 北崎村 大和田村

不入村 萬田野村

高三千六百貳拾六石九斗八升八合

都合貳万千七石六斗六升貳合

奥書右同

寛文四年四月五日

土屋民部少輔殿

肥後國天草郡一圓八拾七箇村都合貳万千石

目録在別紙

事

宛三行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

戸田伊賀守とのへ

目録

肥後國

天草郡一圓 八拾七箇村

志岐村 富岡町村 内田村

上津深江村 坂瀬川村 荒川内村

城木場村 上野原村 井手村

下内野村 二江村 鬼池村

御領村 佐伊津村 廣瀬村

本泉村 下河内村 新休村

本川村 馬場村 町山口村

龜川村 食場村 櫛宇土村

楠浦村 大宮地村 小宮地村

大多尾村 古江村 湯船原村

馬場村 打田村 川内村

下浦村 志柿村 大嶋子村

小嶋子村 下浦津村 上津浦村

赤崎村 須子村 大浦村

楠浦村 教良木村 内野川内村

今泉村	合津村	阿立村
上村	中村	登立村
宮田村	棚底村	浦嶋村
二間戸村	姫浦村	樋嶋村
高戸五箇村	大道村	御所浦村
早浦村	龜浦村	魚貫村
牛深村	久玉村	深海村
宮河内村	壹町田村	益田村
今村	市野瀬村	平床村
白木河内村	久富村	今富村
宮地岳村	碓石村	中田村
立原村	津富村	崎津村
大江村	高濱村	小田床村
下津深江村	福連木村	都品村
都合貳万千石		

奥書右同

寛文四年イ四月五日五月廿五日

戸田伊賀守殿

出羽國由理郡之内四拾九箇村都合貳万四拾壹石餘
紙在別事任寛永二年十二月十一日先判之旨宛三行之
 訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

六郷伊賀守とのへ

目錄

出羽國

由理郡之内 五拾箇村

子吉村	前江村	河向村
曲澤村	五十土村	加仁澤村
土藏村	窪田村	山田村
吉澤村	河西村	屋敷村
河東村	宮内村	黒澤村
沼田村	河崎村	出戸村
雨善寺村	潟保村	新輪村
澤村	鮎瀬村	館赤村
福嶋村組	瀧澤村組	加津羅林村
室澤村之内	琴浦村	福田村
横山村	土屋村	河口村之内

芹田村 三森村 黒川村
金浦村 飛村 赤石村

前川村 大竹村 百々目木村

樋口村 立井地村 中村

三日市村 中野村 三十野村

伊勢路村之内 鹽越村 是者依爲新村ニ不
レ載ニ御朱印

都合貳万四百拾壹石餘

右今度被ニ差上ニ郡村之帳面相改及ニ上聞ニ如ニ御先判

之高ニ所被ニ成下ニ御朱印也此儀兩人奉行依レ被ニ仰付ニ

執達如レ件

寛文四年四月五日

六郷伊賀守殿

近江國高嶋郡之内三拾貳箇村壹万七千七石餘野淵郡

之内五箇村貳千九百九拾四石餘都合貳万石餘 目録在
別紙

事任ニ寛永二年十二月十二日先判之旨ニ宛ニ行之ニ訖全

可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

分部若狹守とのへ

目錄

近江國

高嶋郡之内 三拾貳箇村

大溝町 打下村 石垣村

音羽村 伊黒村 畑村

上小河村 大田村 武曾村之内

横山村之内 鴨村之内 藁園村之内

下古賀村之内 永田村之内 鹿瀬村

下弘部村之内 蘭生村之内 藤江村之内

今在家村之内 深溝村之内 東萬木村之内

庄堺村 森村 北端村之内

河嶋村之内 横江村 下小河村之内

今市村 北生見村 木津村之内

南生見村 宮野村

高壹万七千七石三斗壹合

野淵郡之内 五箇村

矢嶋村 小嶋村 今濱村

河田村之内 笠原村之内

高貳千九百九拾四石壹斗六升九合

都合貳万壹石貳斗

右今度被_二差上_一郡村之帳面相改及_二上聞_一所_レ被_二成_一
下_一御朱印也此儀兩人奉行依_レ被_二仰付_一執達如_レ件

寛文四年四月五日

分部若狹守殿

參河國碧海郡之内三拾箇村都合貳万石餘_{別紙在}事如_二
前々_一宛_二行之_一畢全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

稻垣信濃守とのへ

目録

三河國

碧海郡之内 三拾箇村

本蒨谷村

蒨谷村

熊村

高津波村

半城土村

小垣江村

吉濱村

高濱村

野田村

八田村

中村

篠目村

今村

重原村

高棚村

小山村

筑地村

一木村

智鯉鮒村

牛田村

來迎寺村

里村

八橋村

若林村

堤村

花蘭村

駒場村

今岡村

泉田村

東堺村之内

都合貳万石

内三百貳拾五石壹斗五升七合八勺雖_レ爲_二不
足_一新田も有_レ之故任_二分限帳之趣_一高_二載_レ之

奥書右同

寛文四年四月五日

稻垣信濃守殿

出羽國村山郡之内七拾四箇村壹万貳千石飽海郡之内
貳拾八箇村五千貳百拾貳石九斗餘田川郡之内七箇村
貳千七百八拾七石餘都合貳万石_{別紙在}事如_二前々_一宛_二
行之_一畢全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者神尾小左衛門

酒井大學頭とのへ

目錄

出羽國

村山郡之内 七拾四箇村

大卷村	和江村	古真木村
道橋村	下足澤村	上足澤村
針生村	杉山村	宇津野村
大瀧村	助卷村	末吉良村
新宿村	中江村	能中村
八沼村	高田村	長沼村
石須部村	白倉村	多良村
松程村	大船木村	今平村
須野瀬村	水口村	赤釜村
新崩村	一石猶村	夏草村
雪谷村	西助卷村	西船渡村
立木村	藤田村	本富澤村
新富澤村	中澤村	藝息坂村
本左中村	新左中村	船渡村
栗木澤村	川通村	堂屋敷村
鹽平村	所部村	材木村

本彦谷村	本橋上村	十八才村
新橋上村	大久保村	猶山村
本月布村	新月布村	大鉢村
新彦吉村	葛澤村	瀧澤村
上北山村	下北山村	萩袋村
本小漆川村	新小漆川村	一野澤村
丸竹村	雨池村	吉川村
原村	入間村	渴俣村
宮中村	古澤村	
高壹万貳千石		
飽海郡之内 貳拾八箇村		
渡場村	小出村	堀場村
中山村	土淵村	上名荷澤村
下名荷澤村	引地村	石名坂村
桐澤村	德田村	中棚村
牧野嶋村	田尻村	山寺村
外里村	普門寺村	飼澤村
地見興屋村	新興屋村	杉澤村
坂本村	田澤村	上餅山村
下餅山村	中北目村	上北目村

小見村

高五千貳百拾貳石九斗壹合

田川郡之内 七箇村

八色木村

西袋村

新興屋村

廻飯村

三本柳村

柴野村

余目村

高貳千七百八拾七石九升九合

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

酒井大學頭殿

出羽國由理郡之内八拾八箇村都合貳万石
目録在別紙 事如
前々宛行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

岩城伊豫守とのへ

目錄

出羽國

由理郡之内 八拾八箇村

大野村

神澤村

蘆川村

親川村

大谷村

米坂村

下黒川村

上黒川村

下蛇田村

上蛇田村

福俣村

瀧俣村

赤寺村

富田村

赤平村

六呂田村

天鷲村

麓村

中帳村

高尾村

中野侯村

德澤村

大倉澤村

加賀澤村

葛葉見村

及位村

須山村

長坂村

葛岡村

平岫村

中田代村

小栗山村

中向村

代内村

川倉村

猶淵村

増澤村

瀧村

見岫村

蘆淵村

岩野目澤村

鹿爪村

小羽廣村

大羽廣村

坂邊村

輕井澤村

平岡村

畑谷村

柴野村

川口村

中野目澤村

山岡村

赤田村

牛寺村

女岡村

中館村

漆畑村

深澤村 院内村 黒瀬村

大浦村 石脇村 麓内越之内村

川口村 町村 拂川村

増川村 福田村 道川村

二古村 君野村 勝手村

新谷村 羽川村 長濱村

桂根村 名澤村 八田村

黒瀬村 繁村 新波村

神村 鉦田村 萱澤村

圓行寺村 北野目村 三條河原

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

岩城伊豫守殿

下野國那須郡之内四拾七箇村都合貳万石
別紙ニ事如
前々宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如ノ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保吉右衛門

堀美作守とのへ

目録

下野國

那須郡之内 四拾七箇村

酒主村 瀧田村 宮原村

大澤村 大木須村 小木須村

横枕村 上境村 下境村

小原澤村 野上村 向田村

生井村 黒田村 竹原村

所草村 大畠村 大瀬村

鳥生田村 九石村 文谷村

八平村 神長村 月次村

中井上村 熊田村 下川井村

鹿子畑村 鹿子畑新田村 金枝村

小倉村 小倉新田村 宇井村

曲畠村 瀧村 中山村

白久村 谷田村 谷田新田村

吉田村 戸田後澤村 片平後澤村

志鳥村 矢倉村 大久保村
寺内村 興野村

都合貳万石

外貳千三百拾九石貳斗貳升依_レ爲_二分限帳之
外_一籠高也

奥書右同

寛文四年四月五日

堀美作守殿

豊後國海部郡之内貳拾六箇村都合貳万石_{別紙在}事如_二
前々宛_三行之_一畢全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部新兵衛

毛利伊勢守とのへ

目録

豊後國

海部郡之内 貳拾六箇村

鹽屋村 下野村 古市村
上岡村 切畑村 下直見村

上直見村 赤木村 仁田原村

横川村 因尾村 中野村

上野村 大坂本村 床木村

長瀬村 久部村 堅田村

木立村 戸穴村 海崎村

狩生村 津久見村 上浦村

中浦村 下浦村

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

毛利伊勢守殿

陸奥國菊多郡之内壹万石能登國羽咋鳳至珠洲能登四
郡之内壹万石都合貳万石_{別紙在}事如_二前々宛_三行之_一
訖全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

土方河内守とのへ

目録

陸奥國

菊多郡之内 拾九箇村

窪田村 四澤村 酒井村

白米村 瀬戸村 三澤村

旅人村 黒田村 荷路夫村

貝泊村 大平村 中田村

山玉村 小川村 沼邊村

長子村 大高村 大津村之内

九面村

高壹万石 所々入二小物成高

能登國

羽咋郡之内 拾七箇村

白瀬村之内 福水村之内 神子原村之内

原村 針山村 敷波村

太田村之内 四町村 千路村

上棚村之内 二所宮村之内 阿津見村

町村之内 安部屋村 松木村

豐後名村之内 佛木村

高三千三百貳拾六石九斗四升五合

鳳至郡之内 貳拾壹箇村

鹿島村 鶺鴒島村 大町村

川島村 天神谷村 唐川村

七海村之内 梶村 藤卷村

中谷村 岩車村 鹿並村

曾良村 院内村 黒川村

川内村 伏戸村 大野村

時國村之内 井面村 黒島村

高三千五百九拾壹石壹斗八升壹合七勺

珠洲郡之内

眞脇村之内

能登郡之内 貳拾箇村

高貳百三拾五石壹斗四升三勺

大泊村 東濱村 花園村

山崎村 熊淵村 佐々波村

庵村 江泊村 大野木村

八幡村 川田村之内 祖濱村之内

石崎村 瀬嵐村之内 谷内村之内

別所村之内 深浦村之内 外村之内

田岸村之内 横見村之内

高貳千八百四拾六石七斗三升三合

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

土方河内守殿

陸奥國菊多郡之内三拾二箇村壹万四千五百貳石三斗
餘磐前郡之内八箇村四千百三拾七石七斗餘磐城郡赤
井村千三百五拾九石八斗餘都合貳万石_{別紙}事如_{目録}前
前_二宛_三行之_二畢_三全可_二領知_三者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

内藤右近大夫とのへ

目録

陸奥國

菊多郡之内 三拾貳箇村

大島村 岩間村 小濱村

佐糖村 鹽田村 東坂村

江栗村 大津村之内 井上村

林崎村 下山田村 高藏村之内

後田村 石塚村 漆野村

江畑村 上釜戸村 中釜戸村

松小谷村 渡部村 神田村

洞村之内 泉村 黒須野村

下川村 瀧尻村 甘露寺村

玉崎村 晝野村 本屋村

泉田村 西江村

高壹万四千五百貳石三斗九升七合小物成高_二入

磐城郡之内

赤井村

高千三百五拾九石八斗三升貳合小物成高_二入

磐前郡之内 八箇村

西小川村 鹽田村 永井村

指鹽村 上三坂村 中三坂村

下三坂村 北方村

高四千百三拾七石七斗七升壹合小物成高_二入

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

内藤右近大夫殿

參河國幡豆郡之内拾九箇村七千九百七拾六石餘碧海郡之内七箇村六千石三斗餘額田郡之内拾貳箇村三千三百拾石貳斗餘武藏國比企郡之内西村七百八拾五石壹斗餘相模國鎌倉郡之内五箇村九百八拾石五斗餘綾郡万田村四百四拾九石餘大和國十市郡矢部村四百九拾八石五斗餘都合貳万石^{目錄在別紙}事如^三前々宛^三行之^二畢全可^三領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

松平備前守とのへ

目録

參河國

幡豆郡之内 拾九箇村

西戸城村 富田村 大塚村

萩原村 吉田村 酒井村

友國村 中野村 小牧村

津平村 駿馬村 瀬戸村

木田村 善明村 寺津村

淀海村 桐山村 宮崎村

佐久嶋村 高七千九百七拾六石八升九合 碧海郡之内 七箇村

川嶋村 小川村 東端村

野寺村 高取村 榎前村

和泉村

高六千石三斗五升貳合

額田郡之内 拾貳箇村

岩堀村 鷺田村 高力村

久保田村 長峯村 小美村

土呂村 山畑村 上地村

高須村 大谷村 橫落村

高三千三百拾石貳斗壹升貳合

武藏國

比企郡之内 貳箇村

神戶村 葛袋村

高七百八拾五石壹斗四升七合

相模國

鎌倉郡之内 五箇村

岡本村 關谷村 植木村

城廻村 渡内村

高九百八拾石五斗七升九合

餘綾郡之内

万田村

高四百四拾九石九升

大和國

十市郡之内

矢部村

高四百九拾八石五斗三升壹合

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平備前守殿

下野國都賀郡之内貳拾七箇村壹万三千壹石八斗餘下

總國結城郡之内拾五箇村五千六百拾三石三斗餘猿島

郡之内四箇村千三百八拾四石八斗餘都合貳万石

紙事如三前々宛ニ行之ニ畢全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

三浦志摩守とのへ

目録

下野國

都賀郡之内 貳拾七箇村

表町 通町 福和田村

國谷村 助谷村 上臺村

細谷村 橋本村 箕輪村

小金井村 川中子村 藤井村

大光寺村 癸生村 大塚村

家中村 上稻葉村 下稻葉村

龜和田村 赤塚村 羽生田村

七石村 磯村 楡木村

奈佐原村 久野村 柏木村

高壹万三千壹石八斗五升九合

下總國

結城郡之内 拾五箇村

新宿村 大木村 今宿村

山王村 芳賀崎村 濱野邊村

水海道村 糴禮村 佐野村

瀬戸井村 菅谷村 水口村

平塚村 御名村 鹽本村

高五千六百拾三石三斗四升貳合

猿嶋郡之内 四箇村

山田村 柳橋村 新和田村

仁連村

高千三百八拾四石八斗壹合

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

三浦志摩守殿

常陸國眞壁郡之内四拾七箇村下野國芳賀郡之内兩村

都合貳万石^{目録在別紙}事宛^ニ行^ニ之^ニ訖全可^ニ領知^一者也仍如

レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋長左衛門

増山兵部とのへ

目録

常陸國

眞壁郡之内 四拾七箇村

西板生村 野田村 石田村

稻野部村 高嶋村 中館村

蒔田村 樋口村 江戸村

和泉村 筑瀬村 石塔村

子孟儀村 谷中村 下谷貝村

篠塚村 外塚村 菅谷村

二木成村 田中村 市野部村

小林村 折本村 谷部村

飯嶋村 岡芹村 西江谷村

大嶋村 神分村 玉戸村

小坊村 石原田村 灰塚村

東板生村 西芳町 上川中子村

塚原村 下岡崎村 下中山村

成田村 直井村 嶋村

小川村 横嶋村 野村

下野國

芳賀郡之内 貳箇村

谷田貝村 境 村

但兩郡之内千八百貳拾四石八斗依_レ爲_二分限帳之過_一籠高也

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

増山兵部殿

上野國碓氷郡之内三拾四箇村壹万六千四百五拾石七斗餘群馬郡之内五箇村三千五百四拾九石貳斗餘都合貳万石_{別紙在}事如_二前々_一宛_二行之_一畢全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

水野備後守とのへ

目録

上野國

碓氷郡之内 三拾四箇村

上野尻村 下野尻村 谷津村

常木村 中宿村 岩井村

大谷村 高別當村 原市村

古屋村 嶺村 築瀬村

江原村 松井田村 新堀村

五料村 原村 横川村

入山村 坂本村 土鹽村

新井村 高梨子村 國衝村

下増田村 上増田村 小日向村

上後閑上村 上後閑下村 下後閑村

小俣村 下秋間村 中秋間村

上秋間村

高壹万六千四百五拾石七斗餘

群馬郡之内 五箇村

石原村 澁川村 金井村

木工村 中村之内

高三千五百四拾九石貳斗餘

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

水野備後守殿

卷第二十一

攝津國住吉西生河邊豐嶋四郡之内壹万石山城國相樂
久世綴喜三郡之内六百五拾九石九斗餘三河國幡豆碧
海額田三郡之内七千五百四拾八石四斗餘上總國葛飭郡之内
埴生兩郡之内九百八拾貳石八斗餘下總國葛飭郡之内
八百八石七斗餘都合二万石^{目録在別紙}事如^ニ前々^一宛^ニ行
之^ニ訖全可^ニ領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者

板倉内膳正とのへ

目録

攝津國

住吉郡之内 九箇村

猪飼野村

腹見村

大友村

桑津村

堀村

前堀村

我孫子村

庭井村

船堂村之内

高四千三百四拾壹石壹斗九升四合

西生郡之内 六箇村

本庄内 三津屋村

堀上村

新在家村 十八條村

佛生院村

高四千拾六石三斗四升五合

河邊郡之内 三箇村

久々知村 御影塚村之内

岡院村之内

高千四百貳拾壹石八斗四升八合

豐嶋郡之内

南町村之内

高貳百貳拾石六斗壹升三合

山城國

相樂郡之内 貳箇村

吐師村 神堂寺村之内

高四百七拾貳石五斗四升九合

久世郡之内

平川村之内

高百六拾五石貳斗六升七合

綴喜郡之内

南興戸村

高貳拾貳石壹斗四升

三河國

幡豆郡之内 拾貳箇村

永良村

尾花村

和氣村

高川原村

大和田村

貝吹村

室村

家武村

平原村

須美村

下六栗村

上六栗村

高五千五百八拾九石貳斗壹合八勺イ升

碧海郡之内 四箇村

中嶋村

高畑村

中新居村

館出村

高千三百貳拾六石七斗六升

額田郡之内 貳箇村

土呂村之内

永井村

高六百三拾貳石四斗四升壹合

上總國

山邊郡之内 四箇村

小西村

中臺村

宮崎村

高谷村

高七百七拾八石八斗七升九合六勺

埴生郡之内

押目村

高貳百三石九斗八升三合

下總國

葛飭郡之内 貳箇村

長峯村

花和村

高八百八石七斗七升九合三勺

都合貳万石

奥書右同

寛文四年四月五日

板倉内膳正殿

河内國茨田交野讃良若江四郡之内都合貳万石目録別

紙事如三前々宛三行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

永井伊賀守とのへ

目録

河内國

茨田郡之内 貳拾三箇村

木屋村 太間村 池田村

仁和寺村 對馬江村 北村

黒原村 一番村 二番村

梶村 六番村 七番村

下番村 諸口村之内 赤井村

岸和田村 下馬伏村 巢本村

神田村 大利村 平池村

高柳村 三井村

高壹万貳千六百四拾五石七斗九合

交野郡之内 拾三箇村

楠葉村之内 上嶋村之内 下嶋村之内

宇山村 坂村 小倉村

渚村之内 招提村之内 星田村之内

郡津村之内 村野村 山上村之内

打上村之内

高六千五百七拾七石八斗六升五合

讚良郡之内 三箇村

秦村之内 太秦村之内 國松村之内

高三百七拾九石八斗九升八合

若江郡之内

永田村之内

高三百九拾六石五斗貳升八合

都合貳万石

右今度壹万石以上之面々就_レ被_二成下_一領地之御判并御朱印而其方與_二小笠原山城守_一奉行被_二仰付_一因_レ茲以_二兩判_一被_二書_一郡内之目錄_一訖雖然自分之知行目錄依_レ難_レ成判形爲_二後鑑_一加_二印判_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日

久世大和守
稻葉美濃守
阿部豐後守

永井伊賀守殿

伊勢國河曲郡之内拾六箇村壹万石河内國石川郡之内貳拾三箇村八千四百七拾九石八斗餘古市郡之内六箇村千五百貳拾石壹斗餘都合貳万石_{別紙}在_二事如_二前々_一宛_二行之_一全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

石川若狹守とのへ

目錄

伊勢國

河曲郡之内 拾六箇村

十日市場村

矢田部村

矢橋村

權現町村

寺家村

西條村

河田村

北長太村

南長太村

十宮村

山邊村

木田村

國分村

高岡村

甲斐村之内

柳村之内

高壹万石

河内國

石川村之内 貳拾三箇村

東山村

半室村

畑村

平石村

持尾村

弘川村

下河内村

上河内村

寺田村

北加納村

南加納村

白木村

中村

馬谷村

寛弘寺村

水分村

二河原邊村

切山村

吉年村

千早村

中津原村

北吹村 龍泉村

高八千四百七拾九石八斗九升貳合

古市郡之内 六箇村

東坂田村

新家村

西坂田村

新町村

碓井村

藏内村之内

高千五百貳拾石壹斗八合

中

都合貳万石

右今度被ニ差上ニ郡村之帳面相改及ニ上聞ニ所被ニ成

下ニ御朱印也此儀兩人奉行依レ被ニ仰付ニ執達如レ件

寛文四年四月五日

石川若狹守殿

下野國足利郡之内拾四箇村下總國豐田郡之内拾六箇
村岡田郡之内三箇村常陸國筑波郡之内三箇村都合貳
万石^{別紙}_{日録在}事如ニ前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍
如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者神尾小左衛門

土井能登守とのへ

目錄

下野國

足利郡之内 拾四箇村

松田村 板倉村 五十部村

五箇村 五箇新町村 助戸村

名草村 田嶋村 猿田村

大岩村 今福村 菅田村

桃崎村之内 大月村之内

高七千貳百四拾四石壹斗六升三合

下總國

豐田郡之内 拾六箇村

本石下村 新石下村 大坊村

東原村 山口村 平内村

取納屋村 曲田村 三坂村

中妻村 小山戸村 中山村

桐野谷村 水海道村 横曾根村

大輪村

高壹万九拾四石四斗九升三合

岡田郡之内 三箇村

花嶋村 古間木村 鵠山村

常陸國

筑波郡之内 三箇村

北袋村 宮戸村 上小目村

高八百貳拾四石貳升九合

都合貳万石

内千四拾八石五斗八升貳合雖爲小以上之高不足新田も有之故任ニ分限帳之趣高不載

之

奥書右同

寛文四年四月五日

土井能登守殿

丹波國何鹿天田兩郡之内貳拾七箇村都合壹万九千五百石別紙在事如前々宛行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者森 新兵衛

九鬼式部少輔とのへ

目錄

丹波國

何鹿郡之内

八箇村小物成高二入

中村

新庄村

鍛冶屋村

小西村

栗村

嶋村

綾部村

高津村

高壹万貳千七百四拾三石三斗四升三合

天田郡之内

拾九箇村 内拾七箇村者小物成高二入

日尾村之内

大身村

觀音寺村

河合村

千束村

草山村

蘆淵村

萩原村

上野村

興村之内

生野村

三俣村

堀越村

正後寺村

坂室村

大内村

宮村

池田村

細見村之内

高六千七百五拾六石六斗五升七合

都合壹万九千五百石

奥書右同

寛文四年四月五日

九鬼式部少輔殿

美濃國惠奈郡之内拾六箇村土岐郡之内拾三箇村都合

壹万九千石

別錄在ニ事如ニ前々ニ宛ニ行之訖全可ニ領知ニ者也仍如ノ件

者仍如ノ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者渡邊七郎兵衛

丹羽式部少輔とのへ

目錄

美濃國

惠奈郡之内

拾六箇村

串原村

漆原村

上村

棕實村

馬場山田村

佐々良木村

小田子村

永田村

飯羽間村

富田村

阿木村

飯沼村

藤村之内

澤中村

下村

岩村

高壹万九百六拾石四斗五升六合

土岐郡之内

拾三箇村

柿野村 細野村 駄知村

川合村 肥田村 定林寺村

神籠村 猿子村之内 淺野村之内

中野村 久須見村 竹折村

東村

高八千五拾貳石九斗六升七合

都合壹万九千拾三石四斗貳升三合

右今度被_レ差上_二郡村之帳面相改及_二上聞_一所_レ被_二成

下_二御朱印也此儀兩人奉行依_レ被_二仰付_一執達如_レ件

永井伊賀守

尙庸

寛文四年四月五日

小笠原山城守

長頼

丹羽式部少輔殿

下野國那須郡之内六拾四箇村壹万四千三百三拾八石

六斗餘芳賀郡之内六箇村三千六百六拾壹石三斗餘都

合壹万八千石_{別紙}目録在_二事如_二前々_一宛_二行之_一訖全可_二領

知_二者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

大關主馬とのへ

目録

下野國

那須郡之内 六拾四箇村

八鹽村 阿久津村 堀之内村

前田村 野上村 須佐木村

河上村 南方村 須賀川村

寺宿村 礪上村 大藏村

大輪須村 小瀧村 棚橋村

蓑澤村 追分村 河田村

大輪村 横岡村 峯岸村

境明神村 逸室村 松倉村

綱子村 夕狩村 蛇澤村

七箇村 原村 寺子村

高久村 松子村 板室村

湯本村 小嶋村 岩崎村

沼井村 稻澤村 越堀村

杉渡戸村 寒井村 樋澤村

野間村 羽田村 檜木澤村

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡邊七郎兵衛

秋元但馬守とのへ

目錄

甲斐國

都留郡之内 百七箇村

小金丸村	長倉村	木立村	菅野村
白簾村	余瀨村	蜂巢村	薄原村
南金丸村	中之内村	石井澤村	河面村
田中村	根小屋村	大豆田村	下谷村
湯殿村	龍澤村	木手澤村	夏狩村
山田村	龜山村	落合村	暮見村
上稻毛田村			上暮地村
高壹万四千三百三拾八石六斗七升			白野村
芳賀郡之内 六箇村			淺川村
上大羽村	益子村	生田目村	大石村
清水村	深澤村	七井村	小明見村
高三千六百六拾壹石三斗三升			新藏村
都合壹万八千石			新屋村
奥書右同			
寛文四年四月五日			
大關主馬殿			

甲斐國都留郡之内百七箇村都合壹万八千石_{別錄在事}
如三前々宛三行之訖全可領知者也仍如件

忍草村	山中村	大櫓村	蘆垣村	桐原村	丹波山村	八澤村	立野村	犬目村	四方津村	藤崎村	強瀬村	奥山村	瀬戸村	宮谷村	淺利村	下初狩村	戸野上村	小篠村	朝日小澤村
内野村	上野原村	大曾根村	和見村	西原村	新田村	河合村	大野村	烏澤村	新倉村	駒橋村	岩殿村	林村	駒宮村	下和田村	眞木村	小形山村	猿橋村	秋山村	玉河村
平野村	鶴河村	大藏村	桑窪村	小菅村	松留村	鹽瀬村	野田尻村	綱上村	鶴嶋村	大月村	幡倉村	奈良子村	淺川村	加津野村	中初狩村	花崎村	古河渡村	小澤村	戸澤村

朝日曾雌村 朝日馬場村 余繩村

伊倉村 嶋澤村

但千五百八拾三石壹斗依爲二分限帳之過籠

高也

都合壹万八千石

奥書右同

寛文四年四月五日

秋元但馬守殿

武藏國榛澤郡之内九箇村四千三百七拾七石八斗攝津國豐嶋郡之内拾貳箇村三千八百六石四斗餘有高郡之内二箇村千六百拾五石五斗餘河邊郡之内四箇村千四百八拾四石壹斗餘能勢郡之内三箇村千九拾三石八斗餘參河國八名郡之内三千三百貳拾四石六斗餘寶飯郡之内兩村之内六百七拾五石三斗餘上野國勢多郡之内四箇村八百七拾四石三斗餘都合壹万七千貳百五拾石餘日錄在事如三前々宛行之訖全可領知者也仍如別紙

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部傳右衛門

安部丹波守とのへ

目錄

武藏國

榛澤郡之内 九箇村

岡部村 剪齋寺村

手斗村 血洗嶋村

河賀野村 伊勢方村

高四千三百七拾七石八斗

攝津國

豐嶋郡之内 拾貳箇村

半丁村 野島村

内田村 芝原村

南刀根山村 利倉村

垂水村之内 曾根村

高三千八百六石四斗三升貳合

有馬郡之内 貳箇村

中村 下司村

高千六百拾五石五斗七升四合

河邊郡之内 四箇村

久代村之内 北河原村 下河原村

田能村

高千四百八拾四石壹斗四升三合

能勢郡之内 三箇村

山邊村 神山村 栗栖村

高千九拾三石八斗五升壹合

三河國

八名郡之内 七箇村

中宇利村 下宇利村 黒田村之内

庭野村 八名井村 御園村

養父村之内

高三千三百貳拾四石六斗四升壹合

寶飯郡之内 貳箇村

江村 鶺鴒嶋村

高六百七拾五石三斗五升九合

上野國

勢多郡之内 四箇村

岩松村之内 米澤村之内 中根田嶋村

細谷村之内

高八百七拾四石三斗

都合壹万七千貳百五拾石

奥書右同

寛文四年四月五日

安部丹波守殿

外原村 上豊浦村 下豊浦村

西本郷村 森尻村 安養寺村

鏡村 河上村之内 御所内村之内

宮井村之内

高壹万三千七百貳石四斗

野洲郡之内 貳箇村

三上村之内 大篠原村

高貳千貳石壹斗

河内國

交野郡之内

星田村之内

高千三百石

都合壹万七千四石五斗

奥書右同

寛文四年四月五日

市橋下總守殿

近江國

蒲生郡之内 貳拾貳箇村

仁正寺村 小井口村

上駒月村 五反田村

鑄物師村 大谷村

岩井村 三屋村之内

上野田村

十禪師村

上小房村

上田村之内

目録

近江國蒲生郡之内貳拾貳箇村壹万三千七百貳石四斗
野洲郡之内兩村之内貳千貳百壹斗河内國交野郡星田
村千三百石都合壹万七千四石餘別紙事如前々宛
行之訖全可領知者也仍如件
寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門
市橋下總守とのへ

下野國芳賀郡之内貳拾五箇村壹万石常陸國河内郡之
内拾箇村三千百三拾壹石九斗餘筑波郡之内八箇村三

千三拾三石貳斗餘都合壹万六千貳百六拾五石餘在別錄
紙事如前々宛_ニ行之_ニ訖全可_ニ領知_ニ者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

細川豊前守とのへ

目錄

下野國

芳賀郡之内 貳拾五箇村

藤	繩	村	槻	木	村	神	井	村
坂	井	村	渡	江	村	天	子	村
馬	門	村	福	手	村	小	井	村
三	坂	村	石	下	村	河	井	村
檜	山	村	牧	野	村	菅	俣	村
河	俣	村	飯	野	村	林		村
高	岡	村	蘆	沼	村	増	井	村
鮎	田	村	小	深	村	青	梅	村
山	内	村						
高壹万五拾四石六斗壹升								
但五拾四石六斗壹升依 _レ 爲 _ニ 分限帳之過 _ニ 籠高								
也								

常陸國

河内郡之内 拾五箇村

房	内	村	若	栗	村	大	井	村
下	横	場	村	南	中	妻	村	北
榎	戸	村	立	野	村	中	内	村
上	横	場	村	大	沼	村	原	村
松	木	村	千	代	木	村	小	野
高三千百三拾壹石九斗七升							崎	村
筑波郡之内 八箇村								
羽	成	村	臺	町	村	内	町	村
新	町	村	飯	田	村	片	田	村
萱	丸	村	眞	瀬	村			
高三千百三拾三石貳斗四升								
都合壹万六千貳百六拾五石餘								
奥書右同								
寛文四年四月五日								
細川豊前守殿								

攝津國豊嶋郡之内拾三箇村河邊郡之内九箇村有馬郡

之内六箇村能勢郡之内四箇村近江國信香郡之内三箇村上總國周淮郡之内八箇村望陀郡之内四箇村下總國香取郡之内兩村安房國長狹郡之内泉村所々都合壹万五千石^{目録在別紙}事如^三前々^二宛^一行之^二訖全可^一領知^二者也^一仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡邊七郎兵衛

保科越前守とのへ

目録

攝津國

豐嶋郡之内 拾三箇村

小曾根村 濱村 長嶋村

北條村 寺内村 石蓮寺村

長興寺村 新免村 轟木村

勝部村之内 走井村之内 櫻村之内

垂水村之内

高三千百八拾六石九斗壹升貳合

河邊郡之内 九箇村

戸内村 富田村之内 岩屋村

酒井村 桑津村 若王寺村之内

岡院村之内 米谷村之内 堀池村

高三千百七拾石八斗九升九合

有馬郡之内 六箇村

鹽田村之内 次郎村 道場河原村

上宅原村 岩谷村 上津下村之内

高貳千七百七石九斗壹合

能勢郡之内 四箇村

森上村 今西村 大里村

長谷村

高千三拾九石六斗三升貳合

近江國

伊香郡之内 三箇村

國安村 池原村 中江村之内

高千石

此内御用地被^ニ召上^ニ替地以^ニ物成詰被^ニ下付^一而百五石三斗四升四合者高^ニ不^レ載也

上總國

周淮郡之内 八箇村

前久保村 飯野村 二間塚村

平井村 篠部村 川名村

青木村 原村之内

高貳千六百六拾五石三斗三升九合

望陀郡之内 四箇村

本佐眞津村之内 大久保村 矢部村之内

玉野村

高七百九拾壹石壹斗五升壹合

下總國

香取郡之内 貳箇村

泉村 溝原村之内

高三百五拾石

安房國

長狹郡之内

泉村之内

高百九拾三石五斗壹升

都合壹万五千石

奥書右同

寛文四年四月五日

保科越前守殿

上總國天羽郡之内四拾貳箇村壹万三千三百三拾四石三斗餘望陀郡之内三箇村千八拾三石六斗餘下總國香取郡之内五箇村千七百貳石葛飭郡之内貳箇村三百八拾石大和國山邊郡向淵村之内五百石都合壹万石
別紙
事如三前々宛三行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡邊七郎兵衛

松平出雲守とのへ

目錄

上總國

天羽郡之内 四拾貳箇村

佐貫町 花香谷村 法龍寺村

牛房谷村 岩富村 迎原村

北上村 小久保村 中村

大坪村 含富里村 古船村

八幡村 篠毛村 湊村

數馬村 木村 横嶺村

忍田村 大和田村 田倉村

宇藤原村 高溝村 大河崎村

大多和村 關村 小幡村

神德村 御代原村 中倉村

小倉村 宇藤木村 山中村

志駒村 稻子澤村 山脇村

關尻村 上後村 田原村

大森村 鬼洞山村 岩本村

下草高

高壹万三千三百三拾四石三斗貳升

望陀郡之内 三箇村

烏田村 請西村 我妻村

高千八拾三石六斗八升

下總國

香取郡之内 五箇村

井土山村 次浦村 出沼村

大門村 阿玉村

高千七百貳石

葛飭郡之内 貳箇村

宮久保村 岩瀬村

高三百八拾石

大和國

山邊郡之内

向淵村之内

高五百石

都合壹万五千石

奥書石同

寛文四年四月五日

松平出雲守殿

下總國香取郡之内貳拾九箇村千九百七拾貳石六斗餘

海上郡之内兩村三百貳拾壹石六斗餘下野國都賀郡之内

六箇村三千六百七拾九石九斗餘安蘇郡之内貳箇村

千貳拾五石八斗餘都合壹万五千石

宛三行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保吉右衛門

内田出羽守とのへ

目録

下總國

香取郡之内 貳拾九箇村

大根塚村 木内村 蟲幡村

上小堀村 下小堀村 増田村

富田村 分郷村 八ヶ市場村

野田村 本郷村 中沼村

竹内村 田部村 川頭村

平山村 布野村 窪谷村

高部村 青馬村 谷津村

宮本村 櫻井村 栗野村

小南村 高野村 仁良村

小高村 三倉村

高九千九百七拾貳石六斗四升八合

海上郡之内 貳箇村

富川村 忍村

高三百貳拾壹石六斗

下野國

都賀郡之内 六箇村

押原村 西鹿沼村 酒野谷村

野尻村 板荷村 梅原村

高三千六百七拾九石九斗壹升貳合

外に高百八拾石四斗六升三合爲御用地被召

上替地以物成積被下故延也本高に不載之

安蘇郡之内 貳箇村

上加蘭村 下加蘭村

高千貳拾五石八斗四升

郡合壹万五千石

奥書石同

寛文四年四月五日

内田出羽守殿

常陸國茨城郡之内八箇村五千石武藏國埼玉郡之内八

箇村五千石都合壹万石別紙事宛行之訖全可領

知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡部七郎兵衛

土屋但馬守とのへ

目錄

常陸國

茨城郡之内 八箇村

上岩間村 下岩間村 泉村

羽鳥村 大谷村 中臺村

小曾納村 花野井村

高五千石

武藏國

埼玉郡之内 八箇村

莊嶋村 西新井村 末田村

砂原村 小曾川村 後谷村

野嶋村 越卷村

高五千石

都合壹万石

奥書石同

寛文四年四月五日

土屋但馬守殿

河内國志紀古市兩郡之内三千八百七石四斗餘和泉國大鳥和泉貳郡之内六千六百貳拾貳石五斗餘武藏國比企郡之内三千五百貳拾石四斗餘都合壹万三千五百貳拾石餘別紙ニ事如ニ前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如ノ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

渡邊丹後守とのへ

目録

河内國

志紀郡之内 四箇村

大井村 北木本村 國府村

田井中村之内

高貳千貳百壹石貳斗六升貳合

古市郡之内 四箇村

壺井村 大黒村 駒谷村

飛鳥村

高千六百七拾六石壹斗四升八合

和泉國

大鳥郡之内 拾壹箇村

小代村 大平寺村 大場寺村

豐田村 富藏村 逆瀬河村

畑村 鉢峰寺村 田中村

片藏村 釜室村

高四千五拾貳石貳斗壹升七合

和泉郡之内 五箇村

大津村 板原村 池上村
伯太村 黑鳥村

高貳千七拾石三斗七升三合

武藏國

比企郡之内 五箇村

野本村上下 下青鳥村 今泉村

長樂村 葛袋村

高三千五百貳拾石四斗八升貳合

都合壹万三千五百貳拾石四斗八升貳合

與書右同

寛文四年四月五日

渡邊丹後守殿

事如三前々一充三行之畢全可三領知一者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久左衛門

片桐石見守とのへ

目錄

大和國

添上郡之内

園田村

高三拾石八升

添下郡之内 九箇村

小南村 田中村 西村

萬願寺村 七條村 小林村

池内村 小泉村 筒井村

高六千五百六石八斗四升四合

河内國

交野郡之内 三箇村

郡門村之内 山上村之内 招提村之内

高七百貳拾五石内百七拾五石與力給

河内郡之内

吉田村

和泉國 高貳千三十拾九石壹斗五升

和泉郡之内 四箇村

豐中村 池上村之内

黑鳥村之内

肥子村

高千百三拾三石壹斗四升五合

攝津國

河邊郡之内 貳箇村

米谷村之内 常光寺村

高八百四拾七石貳斗五升壹合

兔原郡之内 四箇村

御影村之内 青木村之内 篠原村之内

中野村之内

高七百貳石貳斗内四百拾石九斗與力給

八部郡之内

花熊村

高貳百八拾八石八斗三升

山城國

相樂郡之内

平尾村之内

高三百石

久世郡之内

枇杷村之内

高百四拾三石貳斗

丹波國

船井郡之内 三箇村

水所村之内 中臺村之内 井尻村之内

高七百七拾三石與力給

都合壹万三千四百八拾八石五斗貳升

内千三百五拾八石九斗與力給也

與書石同

寛文四年四月五日

片桐石見守殿

丹後國丹波郡之内峯山廻壹万四拾四石餘内百四拾四石者改出近江國蒲生郡之内貳千石下總國猿嶋郡之内七百六拾四石武藏國埼玉郡之内貳百三拾六石都合壹万三千百四拾四石餘^{目録在別紙}事任寛永二年十二月十二日先判之旨^宛行之^一詔全可^二領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保吉右衛門

京極主膳正とのへ

目録

丹後國

丹波郡之内 拾八箇村

嶺山町村 河部村 荒山村

長岡村 善王寺村 丹波村

杉谷村 橋木村 菅村

五箇村 小西村 赤坂村

矢田村 久次村 安村

内記村 石丸村 口大野村之内

高壹万百四拾四石餘 内百四拾四石所々改出自

前之高ニ入

近江國

蒲生郡之内 四箇村

弓削村 鷺川村 上畠村

河上村之内

高貳千石

下總國

猿嶋郡之内 四箇村

田間村 上成村 矢畑村之内

上和田村之内

高七百六拾四石

武藏國

埼玉郡之内

種足村之内

高貳百三拾六石

都合壹万三千百四拾四石餘

奥書右同

寛文四年四月五日

京極主膳正殿

大和國葛上郡之内七箇村三千五百七拾貳石七斗葛下郡之内拾八箇村九千四百四拾九石九斗餘都合壹万三千貳拾石餘
目録在別紙 事如三前々一宛ニ行之ニ訖全可ニ領知一者也仍如ノ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

桑山修理亮とのへ

目録

大和國

葛上郡之内 七箇村

下茶屋村 樋野村

原谷村 富田村

池内村

高三千五百七拾貳石七斗六升

葛下郡之内 拾八箇村

今里村 横大路村

花内村 大中村

松塚村 土庫村

有井村 新庄村

藤井村 辨庄村

桑海村 西室村

高九千四百四拾九石九斗六升

都合壹万三千貳拾貳石餘

奥書右同

寛文四年四月五日

桑山修理亮殿

南室村 柏原村

田井村 高田村

神東村 正道寺村

中戸村

道穂村

中戸村

中戸村

中戸村

中戸村

中戸村

中戸村

中戸村

目録

下總國

相馬郡之内 拾八箇村

守谷村 立澤村

大木村 鈴塚村

戸頭村 米野井村

稻村 大鹿取出村

市野代村 同地村

小山村 坂手村

高七千七百九拾四石三斗六升六合

下總國相馬郡之内拾八箇村七千七百九拾四石三斗餘
猿嶋郡之内兩村九百八拾石八斗餘岡田郡報恩寺村百
六拾壹石七斗餘相模國馬座郡之内八箇村三千石常陸
國新治郡之内四箇村千六百三十石餘都合壹万三千石
紙在別事如三前々宛三行之訖全可領知者也如レ件
録目

寛文四年四月五日御朱印

堀田備中守とのへ

筆者大橋長左衛門

野木崎村

乙子村

野々井村

高井村

赤法花村

高野村

猿嶋郡之内 貳箇村

幸田村 神田山村

高九百八拾石八斗壹升

岡田郡之内

報恩寺村

高百六拾壹石七斗三升貳合

相模國

高座郡之内 八箇村

本江村 上河内村

杉窪村 國分村

吉岡村 用田村

高三千石

常陸國

新治郡之内 四箇村

青木村 青木古新田村

長渡路古新田村

高千六拾三石九升貳合

都合壹万三千石

奥書右同

寛文四年四月五日

堀田備中守殿

肥前國松浦郡之内所々都合壹万貳千五百三拾石在別紙事如前々宛之行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

五嶋淡路守とのへ

目錄

肥前國

松浦郡之内 五拾六箇村 内拾六箇村鹽竈運上高ニ入

福江村 籠淵村 奥浦村

六方村 崎山村 本山村

堤村 野今切村 大濱村

鬼宿村 幾山村 河原村

唐船浦村 白石村 玉浦村

大寶村 小川村 小川幾山村

濱畔村 貝津村 荒川村

嶋山村 牛浦村 柏村

久賀村 巖村 奈留村

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

久留嶋信濃守とのへ

目錄

豊後國

球珠郡之内 拾箇村

森 村 帆 足 村 岩 室 村

松小野村 日 出 生 村 古 後 村

太 田 村 綾 垣 村 平 井 村

山 本 村

高六千九百六拾五石壹斗

日高郡之内 拾四箇村

羽 田 村 諸 留 村 月 出 山 村

池 邊 村 小 寒 水 村 石 松 村

上 手 村 城 内 村 平 嶋 村

堤 村 中 尾 村 左 寺 村

市 瀬 村 長 小 野 村

高三千五百貳石三斗

速見郡之内 貳箇村

辻 間 村 鶴 見 村

船 廻 村 大 串 村 相 浦 村

庵三郎村 若 松 村 浦 内 村

夏 井 村 土 井 浦 村 太 浦 村

高 浦 村 有 川 村 小 河 原 村

赤 尾 村 供 栖 村 江 濱 村

大 田 村 宿 浦 村 平 村

飯 良 村 木 場 村 大 田 江 村

手 羅 嶋 村 日 嶋 村 赤 嶋 村

黄 嶋 村 嵯 峨 嶋 村 見加農浦村内

荒川村内 今里村内

郡合壹万貳千五百三拾石三斗七升壹合

奥書右同

寛文四年四月五日

五嶋淡路守殿

豊後國球珠郡之内拾箇村六千九百六拾五石五斗餘日

高郡之内拾四箇村三千五百貳石三斗速見郡之内兩村

貳千三拾貳石六斗都合壹万貳千五百石餘日録在別紙事如

前々一宛三行之訖全可領知者也仍如件

高貳千三拾貳石六斗イ五

都合壹万貳千五百石

奥書右同

寛文四年四月五日

久留嶋信濃守殿

伊勢國三重郡之内拾五箇村壹万石餘近江國栗本郡之内四箇村貳千石都合壹万貳千石餘別紙在事任ニ元和三年五月二十六日先判之旨ニ宛ニ行之一訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者森 新兵衛

土方備中守とのへ

目録

伊勢國

三重郡之内 拾五箇村

東薦野村 西薦野村

福村 神田村

宿野村 水澤村

中薦野村

森村

小山村

小山田村

間田村

吉澤村

池庭村

上鶉河原村

黒田村

高壹万石九斗四升四合

近江國

栗本郡之内 四箇村

部田村之内

南笠村之内

羽栗村之内

上笠中村之内

高貳千石

都合壹万貳千石九斗四升四合

奥書右同

寛文四年四月五日

土方備中守殿

參河國渥美郡之内貳拾四箇村都合壹万貳千石別紙在事如ニ前々ニ宛ニ行之一訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者無之

三宅能登守とのへ

目録

參河國

渥美郡之内

貳拾四箇村

田原城廻

浦浮役高ニ入村

波浮役高ニ入瀬村

加治浮役高ニ入村

今田浮役高ニ入村

赤羽根浮役高ニ入村

野田浮役高ニ入村

大久保浮役高ニ入村

白谷浮役高ニ入村

和地浮役高ニ入村

若見浮役高ニ入村

院内浮役高ニ入村

高松浮役高ニ入村

大草浮役高ニ入村

長仙寺村

片濱浮役高ニ入村

都合壹万貳千七拾貳石四斗三升

奥書右同

寛文四年四月五日

三宅能登守殿

吉胡浮役高ニ入村

神戶浮役高ニ入村

蘆村

仁崎浮役高ニ入村

越戸浮役高ニ入村

濱田浮役高ニ入村

久美原村

字津江村之内

常陸國新治郡之内拾三箇村八千貳百九拾貳石壹斗餘
近江國淺井郡之内六箇村貳千石安房國長狹郡之内五
箇村千三百三拾石餘上總國望陀郡木左良津村三百七

拾七石八斗餘都合壹万貳千石別紙在ニ事如「前々」宛ニ
行之訖全可「領知」者也仍如「件」

寛文四年四月五日御朱印

筆者森

新兵衛

堀市正とのへ

目録

常陸國

新治郡之内 拾三箇村

佐村

山木村

田中村

大曾根村

前野村之内

安直村

今箇嶋村

長高村

前野村之内

玉取村之内

蓮根村

今村

境村之内

高八千貳百九拾貳石壹斗四升三合

近江國

淺井郡之内 六箇村

富田村

十九村

新井村

野寺村

佐野村

太井村之内

高貳千石

安房國

長狹郡之内 五箇村

貝次賀村之内

泉村之内

上小原村

下小原村

曾呂村之内

高千三百三十拾石貳升七合

天面共

上總國

望陀郡之内

木佐良津町之内

高三百七拾七石八斗八升

内拾五石七斗六升七合

從波太村之納米

都合壹万貳千石

奥書右同

寛文四年四月五日

堀市正殿

卷第二十二

下總國香取郡之内拾貳箇村三千四百貳拾三石五斗餘
匝瑳郡之内三箇村八百八石五斗餘印幡郡之内三箇村
五百石六斗餘上總國武射郡之内三箇村貳千貳百貳拾
貳石七斗餘周淮郡之内貳拾壹箇村貳千五拾七石三斗

市原郡之内七箇村貳千貳拾九石壹斗餘望陀郡之内八
箇村四百四拾三石九斗餘都合壹万四千四百八拾五石九

斗目錄在
別紙

事宛三行之一訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者建部與兵衛

井上筑後守とのへ

目錄

下總國

香取郡之内

拾貳箇村

室米村

猿山村

高岡村

小浮村

大和田村

高村

野馬込村

青山村

植房村

立野村

高谷村

餘津屋村

高三千四百貳拾三石五斗九升六合

匝瑳郡之内

三箇村

柴崎村

蟲生村

富下村

高八百八石五斗三升壹合

印幡郡之内

三箇村

平塚村

立澤村

高松村

高五百石六斗六合

上總國

武射郡之内 三箇村

木原村 半谷村 大堤村

高貳千貳百貳拾貳石七斗六升九合

周淮郡之内 貳拾壹箇村

大谷村 森戸村 鹿子崎村

長谷堂村 大月村 澤卷村

金岡村 大野臺村 鎌瀧村

高原村 駒窪村 原村

練木村 南谷村 南子安村

北子安村 高原村 畑澤村

上鴈田村 中鴈田村 下鴈田村

高貳千五拾七石三斗九升三合

市原郡之内 七箇村

山小河村 賀茂村 郡本村

小田部村 葉地村 大作村

大成村

高貳千貳拾九石壹斗壹升五合

望陀郡之内 八箇村

請西村 貝淵村 中尾村

椿村 大鳥居村 瀧口村

阿部村 堂谷村

高四百四拾三石九斗五升九合

都合壹万四千四百八拾五石九斗六升九合

奥書右同

寛文四年四月五日

井上筑後守殿

近江國淺井郡之内三拾三箇村八千四百三拾石大和國葛上郡之内五箇村九百八拾石三斗葛下郡之内兩村千五拾石和泉國日根郡之内二箇村千石都合壹万四千四百六拾石餘別錄在事如前々宛行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

小堀備中守とのへ

目錄

近江國

淺井郡之内 三拾三箇村

甲津原村 曲谷村 甲賀村

吉槻村 江野村 岡谷村

野瀬村 徳山村 高山村

醍醐村 中村 寺師村

田村 西村 黒部村

北江村 小野寺村 南江村之内

鍛冶屋村 谷口村 龍安寺村

小室村 保樂寺村 龍岸寺村

北野村 力丸村 大門村

池奥村 上野村 野田村

木尾村 南濱村 曾根村

高八千四百三拾石

大和國

葛上郡之内 五箇村

名栖村 豊田村 井戸村

關屋村 大井田村之内

高九百八拾石三斗六升貳合

葛下郡之内 貳箇村

逢坂村 穴蟲村

高千五拾石

和泉國

日根郡之内 貳箇村

中ノ庄村 瓦屋村

高千石

都合壹万四千四百六拾石三斗六升貳合

外於江州一高九百拾貳石六斗八升六合本田小

物成共ニ依レ爲ニ分限帳之過ニ高ニ不レ載レ之

奥書右同

寛文四年四月五日

小堀備中守殿

下野國那須郡之内六拾六箇村六千七百九拾壹石餘芳

賀郡之内八箇村四千貳百壹石八斗餘鹽屋郡之内拾三

箇村千四百貳拾四石都合壹万貳千四百石

千石ハ太田原長次郎可レ進ニ退之ニ其外不レ殘充ニ行之ニ

畢全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

太田原山城守とのへ

筆者久保金左衛門

目録

下野國

那須郡之内

六拾六箇村

戸之内村	荒井村	篠沼村
西遲澤村	富山村	高柳村
上井口村	下井口村	關根村
上興澤村	槻澤村	袋嶋村
上中野村	嶋村	東連澤村
中内村	高林村	大和地村
箭坪村	赤坂村	赤淵村
小結村	鳥目村	狐嶋村
石林村	箕輪村	小瀧村
上櫻井村	乙連澤村	久保村
堀米村	上石上村	下石上村
金輪崎村	波立村	鹽崎村
中内村	鹿崎村	無粟屋村
上江屋村	下中野村	町嶋村
中田原村	太利久村	星久田村
赤瀬村	刈切村	川下村

大田原南町村	荻目村	西戸内村
五倫塚村	大田原北町村	沼袋村
船山村	今泉村	寺方村

吉際村	竹内村	小塙村
嶋山村	入江野村	八代村

太金村	中内村	狹原村
-----	-----	-----

高六千七百九拾壹石

芳賀郡之内

八箇村

祖母井村	上延生村	稻毛田村
------	------	------

芳志戸村	七井村	推貝村
------	-----	-----

大平村	小藥村
-----	-----

高四千貳百壹石八升七升七合

鹽屋郡之内

拾三箇村

上太貫村	下太貫村	金澤村
------	------	-----

和田山村	高阿津村	宇都野村
------	------	------

荻田村	關屋村	墓沼村
-----	-----	-----

下田野村	折戸村	接骨木村
------	-----	------

横林村

高千四百貳拾四石

都合壹万貳千四百拾六石八斗七升七合

内千石者太田原長次郎拜領之
奥書右同

寛文四年四月五日

太田原山城守殿

美濃國惠奈郡之内拾四箇村六千六百八石四斗餘加茂
郡之内二拾四箇村三千九百拾三石餘都合壹万五百貳
拾壹石^{別紙在}事如^紙前々^宛行之^訖全可^領知^者也
仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者飯高七兵衛

遠山信濃守とのへ

目錄

美濃國

惠奈郡之内 拾四箇村

昆野村	上池村	瀬戸村
坂下村	上野村	田瀬村
下野村	福岡村	高山村
蛭川村	毛呂窪村	姫栗村

河合村 中野方村
高六千六百八石四斗七升七合

賀茂村之内 貳拾四箇村

飯地村	岸下立村	福地村
切井村	赤河村	犬地村
上田村	黒川村	久須見村
越原村	神土村	柏本村
宮代村	下野村	大澤村
中屋村	須崎村	名倉村
廣野村	宇津尾村	田嶋村
寺前村	大野村	佐見村
高三千九百拾三石四升三合		
都合壹万五百貳拾壹石五斗貳升		

奥書右同

寛文四年四月五日

遠山信濃守殿

下總國香取郡之内八箇村百貳拾石餘葛飾郡之内七箇
村千八拾四石六斗餘印幡郡之内三箇村四百五拾三石

三斗餘上總國天羽郡之内八箇村貳千百七石餘埴生郡之内四箇村千四百三拾五石八斗下野國都賀郡之内五箇村三千石武藏國那珂郡之内三箇村八百石大和國山邊郡向淵村之内五百石都合壹万五百石餘

目錄在ニ事別紙

如ニ前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者大橋左兵衛

目錄

下總國

香取郡之内 八箇村

方田村 飯塚村之内

駒居野村 檜村之内 坂村之内

屋中村 大戸村之内

高千百貳拾石九升五合

葛飾郡之内 七箇村

泉水村 今井村 坪井村

古和釜村 大穴村 今堀村

小池村

高千八拾四石六斗六升七合

印幡郡之内 三箇村

上總國

天羽郡之内 八箇村

金谷村 萩生村 海良村

相川村 六野村 長崎村

賣津村 梨澤村之内

高貳千百七石五升八合

埴生郡之内 四箇村

又留村 米備村 藏持村

棚毛村之内

高千四百三拾五石八斗六升七合

下野國

遠賀郡之内 五箇村

下皆川村 泉川村 木村 郷

樋口村之内 牛奈村

高三千石

武藏國

那珂郡之内 三箇村

新井村 久々字村之内

八丁川村之内

高八百石

大和國

山邊郡之内

向淵村之内

高五百石

都合壹万五百石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平傳次郎殿

備中國下道郡之内拾箇村七千五百八拾三石六斗餘美濃國池田郡之内兩村貳千石河内國高安郡之内貳箇村四百五拾七石三斗餘攝津國豐嶋郡止々呂美村三百貳石都合壹万三百四拾三石

目録在別紙

事如前々宛行之訖全可領知者也仍而如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者建部與兵衛

伊東信濃守とのへ

目録

備中國

下道郡之内 拾箇村

川邊村 蘭村

二万村 陶村

妹村 尾崎村

水内村

高七千五百八拾三石六斗七升六合

美濃國

池田郡之内 貳箇村

膳長村 沓井村

高貳千石

河内國

高安郡之内 貳箇村

黒谷村 教興寺村

高四百五拾七石三斗貳升四合

攝津國

豐嶋郡之内

止々呂美村

高三百貳石

都合壹万三百四拾三石

奥書右同

寛文四年四月五日

伊東信濃守殿

信濃國高井郡之内拾三箇村都合壹万五拾三石餘目録別紙
紙事如_三前々_一任_三寛永二年十月廿三日先判之旨_一充_三行之_一畢全可_三領知_一者也依如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者森 新兵衛

堀肥前守とのへ

目録

信濃國

高井郡之内 拾三箇村

須坂村 綿内村 灰野村

野邊村 八重森村 高梨村

坂田村 鹽川村 沼目村

小嶋村 小山村 日瀧村

五閑村

都合壹万五拾三石壹斗七升

奥書右同

寛文四年四月五日

堀肥前守殿

近江國甲賀郡之内八箇村六千六百六拾六石六斗餘常
陸國河内郡之内拾五箇村三千三百五拾石三斗餘都合
壹万拾七石目録別紙紙事如_三前々_一宛_三行之_一訖全可_三領知_一者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

山口但馬守とのへ

目録

近江國

甲賀郡之内 八箇村

倉治村 馬杉村 野川村

柑子村 池田村 磯尾村

多喜村 野尻村之内

高六千六百六拾六石六斗六升六合

常陸國

河内郡之内 拾五箇村

牛久町村 屋敷小出野錢高二入

城中廻村 野錢船役高二入

同所新田村

高崎村 野錢高二入

中根村

岡見村

天寶喜村 野錢高二入

田宮村

新川沖村

同所本郷村 野錢高二入

猪子村

遠山村

新地村 野錢高二入

小具喜村

下根村之内

高三千三百五拾石三斗五升八合 野錢船役高二入

都合壹万拾七石貳升四合

奥書右同

寛文四年四月五日

山口但馬守殿

上野國甘樂郡之内拾八箇村都合壹万石別紙在ニ事如前

前宛行之ニ訖全可ニ領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者大橋左兵衛

前田右近大夫とのへ

目錄

上野國

甘樂郡之内 拾八箇村

七日市村

野上村

岡本村

曾木村

君河村

別保村

黒岩村

高尾村

藤木村

大桑原村

小桑原村

相田村

白岩村

後加村

坂口村

都合壹万石餘

奥書右同

寛文四年四月五日

前田右近大夫殿

河内國丹南郡之内拾箇村錦邊郡之内拾貳箇村河内郡

之内兩村常陸國筑波郡之内七箇村都合壹万石別紙在ニ

事如前々宛行之ニ訖全可ニ領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者久保金左衛門

北條久太郎とのへ

目録

河内國

丹南郡之内 拾箇村

野中村

池尻村

宮村

丹上村

郡戸村

多治井村

今井村

今熊村

岩室村

眞福寺村

高五千九拾五石三斗四升

錦邊郡之内 拾貳箇村

甘山村之内

錦部村之内

小鹽村

瀧畑村

向野村之内

彼方村之内

嬉村

河合寺村

石見川村

小深村

太井村

鳩原村

高千八百三拾壹石九斗六升

河内郡之内 貳箇村

出雲井村内

福万寺村内

高七拾貳石七斗

常陸國

筑波郡之内 七箇村

福岡村 臺村 南村

田村 西猶戸村 奉社村

古新田村

高三千石

都合壹万石

外三百九拾三石五斗七升爲先地一箇林領之

替地以物成詰一依被下之高ニ不載之

奥書右同

寛文四年四月五日

北條久太郎殿

丹波國何鹿郡之内拾貳箇村都合壹万石餘
目錄在紙内事如前々宛之行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

谷出羽守とのへ

目録

丹波國

何鹿郡之内 拾三箇村

山家村之内

下村

幾見村之内

位田村之内

西股村之内

朽村

一之瀬村

水無村

辻村

於見谷村

小中村

志賀村之内

高槻村之内

都合壹万八拾貳石八斗三升 但山役入高之内

奥書右同

寛文四年四月五日

谷出羽守殿

攝津國豐嶋郡之内拾六箇村三千七百三石八斗河邊郡之内拾三箇村三千六百七拾壹石貳斗餘備中國後月郡之内四箇村千貳拾八石三斗餘小田郡之内兩村八百七拾六石九斗餘淺口郡之内二箇村七百三拾八石七斗餘都合壹万石餘^{目録在別紙}事如^三前々^ニ宛^ニ行之^一訖全可^ニ領知^一者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者飯高七兵衛

青木甲斐守とのへ

目錄

攝津國

豐嶋郡之内 拾六箇村

麻田村

箕輪村

玉坂村

石橋村

産所村

宮之前村

轟木村

今在家村

東市場村

中ノ嶋村

野村

井口堂村

東畑村

西畑村

上澁谷村

下澁谷村

高三千七百三石八斗三升三合

河邊郡之内 拾三箇村

北村

大鹿村

坂井村

十倉村

下村

布木村

田中村

河原村

片古村

波豆村

木器村

槻瀬村

波豆川村

高三千六百七拾壹石貳斗九升

備中國

後月郡之内 四箇村

種 村 佐 屋 村 井 山 村

稗 原 村

高千貳拾八石三斗貳升三合

小田郡之内 貳箇村

川 面 村 關 戸 村

高八百七拾六石九斗壹升

淺口郡之内 貳箇村

新 庄 村 濱 中 村

高七百三拾八石七斗壹升四合

都合壹万拾九石七升

外高三拾五石九斗九升五合多田銀山付之替地

以ニ物成_註被_レ下ニ付高ニ不_レ載_レ之

奥書右同

寛文四年四月五日

青木甲斐守殿

和泉國大島郡之内六箇村貳千九百三拾壹石七斗餘河
内國錦部郡之内三箇村千貳拾石餘攝津國西生郡之内
兩村千四拾八石但馬國氣多郡之内拾箇村千三百八拾

三石六斗餘美含郡之内二拾八箇村三千六百拾六石三
斗餘都合壹万石_{別紙}日録在ニ事如ニ前々ニ充ニ行之ニ畢全可ニ
領知ニ者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾十左衛門

小出大隅守とのへ

目 録

和泉國

大嶋郡之内 六箇村

北 村 深 坂 村 辻 村

高 藏 寺 村 田 蘭 村 上 村

高貳千九百三拾壹石七斗九升

河内國

錦部郡之内 三箇村

板 持 村 上 原 村 横 山 村

高千貳拾石壹升

攝津國

西成郡之内 貳箇村

山 口 村 西 村

高千四拾八石貳斗

但馬國

氣多郡之内 拾箇村

太多村 枅村 東河内村

水口村 萬劫村 山田村

万場村 枅本村 比垣村

名色村

高千三百八拾三石六斗貳升七合

美含郡之内 貳拾八箇村

川南谷村 桑野本村 江野谷村

門谷村 河内村 御又村

神原村 小城村 森本村

坊岡村 林村 金原村

大谷村 下塚村 轟村

小丸村 蘆谷村 鬼神谷村

須谷村 圓通寺村 川田村

草飼村 切濱村 阿金谷村

羽入村 松本村 宇日村

田久日村

高三千六百拾六石三斗七升三合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

小出大隅守殿

卷第二十三

大和國城上郡之内拾八箇村八千三百五拾五石五斗餘
山邊郡之内五箇村千六百四拾四石四斗餘都合壹万石
日録在別紙事如三前々宛三行之三訖全可領知者也依如件

寛文四年四月五日御朱印

織田信濃守とのへ

目錄

大和國

城上郡之内 拾八箇村

柳本村 備後村 東田村

茅原村 豐前村 大西村

大泉村 上座村 赤尾村

白河村 中白木村 北白木村

芹井村 瀧藏村 笠間村

安田村 宮奥村 笠村

高八千三百五拾五石五斗壹升七合

山邊郡之内 五箇村

修理枝村 三味田村 佐保庄村

成願寺村 中山村

高千六百四拾四石四斗八升三合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

織田信濃守殿

伊豫國周敷郡之内拾壹箇村七千四百拾四石六斗餘新

庄郡之内四箇村貳千八百八拾五石三斗餘都合壹万石

紙在別事如「前々」宛「行之」訖全可「領知」者也仍如「件」

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

一柳山城守とのへ

目録

伊豫國

周敷郡之内 拾壹箇村

新屋敷村 今在家村 河無北南村

廣江村 妙口村 吉田村之内

千足山村 大江村 周敷村之内

大頭村 北條村

高七千四百拾四石六斗三升壹合

新居郡之内 四箇村

上嶋山村 同村之内半田分 萩生村

大生院村

高貳千五百八拾五石三斗六升九合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

一柳山城守殿

播磨國揖東郡之内貳拾五箇村都合壹万石

紙在別事如「前々」宛「行之」訖全可「領知」者也仍如「件」

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久右衛門

建部丹波守とのへ

目 録

播磨國

揖東郡之内 貳拾五箇村

紀美村 澤田村 入野村

構村 筒井村 橋崎村

北村 平方村之内 野邊村

奥村 東南村 柳中村

矢田部村之内 奥佐見村 田中村

松山村 出屋敷 中大田町

宿村 下野村 橫落村

六九谷村 寄井村 東俣村

大堤村

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

建部丹波守殿

石見國安濃郡之内貳拾箇村壹万石

目録在別紙ニ事如ニ前々ニ

宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保五兵衛

加藤内藏助とのへ

目 録

石見國

安濃郡之内 貳拾箇村

上山村 長原村 志學村

加淵村 圓城寺村 池田村

市原村 小屋原村 川合村

多根村 吉永村 小豆原村

山中村 大田北村 大田南村

戈坂村 朝倉村 神原村

刺賀村 用田村之内

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

加藤内藏助殿

越後國蒲原郡之内拾九箇村八千石上野國甘樂郡之内
兩村貳千石都合壹万石^{別紙}事如^{目録}前々宛^在行之^訖
全可^レ領知^レ者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者小嶋久右衛門

溝口土佐守とのへ

目録

越後國

蒲原郡之内 拾九箇村

澤海村	滿願寺村	木津村
江口村	小杉村	新飯田村
割野村	嘉瀬村	茅山村
酒屋村	和田村	舞瀨村
平賀村	保内村	橋田村
尻上村	四屋村	小熊村
旭村		

高八千石

上野國

甘樂郡之内 貳箇村

馬山村 高瀬村

高貳千石
都合壹万石
與書右同

寛文四年四月五日

溝口土佐守殿

目録

筑後國

三毛郡之内 拾五箇村

稻荷村	大牟田村	加納開村
片平村	下二部村	早米來村
馬籠村	臼井村	一部村
勝立村	藤田村	船津村
今山村	櫟野村	教樂來村

筑後國三毛郡之内拾箇村都合壹万石^{別紙}事如^{目録}前
前充^在行之^訖全可^レ令^レ領知^レ者也仍如^レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

立花和泉守とのへ

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

立花和泉守殿

播磨國賀東郡之内三拾箇村都合壹万石

別紙在事如前

前宛_ニ行_ニ之_ニ訖全可_ニ領知_ニ者也依如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

一柳對馬守とのへ

目錄

播磨國

賀東郡之内 三拾箇村

敷地村	高田村	王子村
葉多村	久茂村	鹿野村
下大部村	片山村	兩谷村
西谷寺村	中嶋村	黒川村
上大門村	下大門村	土橋村
奥村	中村	門前村

宮脇村

大部前村

喜多嶋村

嶋村

太郎大夫村

山田村

池尻村

檜村

船木村

名村田村

中番村

家原村

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

一柳對馬守殿

信濃國水内郡之内九箇村五千百拾九石壹斗餘近江國

高嶋郡之内拾箇村四千三百八拾石八斗餘常陸國筑波

郡之内兩村四百石餘都合壹万石

別紙在事如前々宛_ニ行_ニ之_ニ訖全可_ニ領知_ニ者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者小嶋久右衛門

佐久間備中守とのへ

目錄

信濃國

水内郡之内 九箇村

長沼村 津野村 神代村之内
 平出村 寶飯村 石村
 南江村 三戈村 吉村
 高五千百拾九石壹斗壹升八合

近江國
 高嶋郡之内 拾箇村

濱分村 井口村 中野町村
 北仰村之内 酒波村 岸脇村
 大伴村 新保村 上弘部村

蘭生村

高四千三百八拾石八斗八升貳合

常陸國

筑波郡之内 貳箇村

山口村之内 平澤村之内

高五百石

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

佐久間備中守殿

播磨國揖東郡之内貳拾六箇村都合壹万石
 元和三年九月十一日先判之旨宛三行之訖全可領
 知一者也仍如件
 目録在事任別紙

寛文四年四月五日御朱印 筆者森 新兵衛

池田又八郎とのへ

目録

播磨國

揖東郡之内 貳拾六箇村

吉嶋村	段上村	宮内村	助久村	山田村	下篠村	平方村之内	中庄村	平松村	揖東郡之内
太子之内	中村	下野田村	鷗村	曾加伊村	原村	馬場村	上香山村	宿村	貳拾六箇村
	篠首村	井原村	新宮村	一野保村	中井村	大住村	上篠村	馬立村	

都合壹万石

奥書石同

寛文四年四月五日

池田又八郎殿

播磨國神崎郡之内三拾五箇村九千四百九拾貳石壹斗
餘印南郡曾根村五百七石八斗餘都合壹万石
目録在
別紙事
如三前々宛三行之訖全可領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者久保金左衛門

松平能登守とのへ

目録

播磨國

神崎郡之内 三拾五箇村

栗賀町村	福本村	中村
屋形村	貝野村	柏尾村
加納村	穢多村	下吉富村
上吉富村	山田村	根宇野村
千原村	小室村	谷村

田中村 今井村 鶴井村

美佐村 下澤村 新野村

穢多田村 比延村 寺前村

上岩村 高朝田村 宮野村

小田原村 鍛冶村 岡村

用田村 爲信村 犬見村

淵村 栗村

高九千四百九拾貳石壹斗八升四合

印南郡之内

曾根村

高五百七石八斗壹升六合

都合壹万石

奥書石同

寛文四年四月五日

松平能登守殿

伊勢國桑名郡長嶋領貳拾箇村都合壹万石
目録在
別紙事如
前々宛三行之訖全可領知者也仍如件
寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

松平佐渡守とのへ

目録

伊勢國

桑名郡之内長嶋領 貳拾箇村

千倉村 西外面村 平方村

下坂手村 上坂手村 高産村

間々村 押付村 松嶋村

大嶋村 殿名村 俣木村

出口村 小嶋村 中川村

西川村 新所村 松木村

杉江村 五明村

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

松平佐渡守殿

大和國葛上郡之内七箇村三千六百三拾貳石六斗餘忍
海郡之内六箇村千五百七拾壹石七斗平群郡之内五箇

村千三百六拾九石六斗餘十市郡之内三箇村九百貳拾
五石餘葛下郡俱見羅村貳千三百七拾四石高市郡土橋
村百貳拾七石餘都合壹万石別紙在事如前々宛行
之訖全可令領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部傳右衛門

本多肥前守とのへ

目録

大和國

葛上郡之内 七箇村

北窪村 小野江村之内 南郷村

栗坂村 竹田村 五所村之内

下田村之内

高三千六百三拾貳石六斗六升五合

忍海郡之内 六箇村

上村 小林村 柳原村之内

林堂村 十楚村 東辻村

高千五百七拾壹石七斗

平群郡之内 五箇村

小明村 懐口村 谷田村

山崎村 鳴川村

高千三百六拾九石六斗四升七合

十市郡之内 三箇村

矢部村 倉橋村 大納村

高九百貳拾五石四升七合

葛下郡之内

俱見羅村

高貳千三百七拾四石

高市郡之内

土橋村

高百貳拾七石壹升貳合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

木多肥前守殿

出羽國田川郡之内 貳拾壹箇村 都合壹万石 目録在ニ事別紙

如三前々宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也依如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡部七郎兵衛

酒井備中守とのへ

目録

出羽國

田川郡之内 貳拾壹箇村

大山前田面村 砂押村

下川村 橡屋村

湯濱村 千安京田村

播磨京田村 野興屋村

新興屋村 葛蒲沼村

谷阿彌村 東沼村

天神堂村 論田村

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

酒井備中守殿

安房國朝夷郡之内 拾九箇村 六千八百九拾四石餘長狭
郡之内 四箇村 三千百五石九斗餘 都合壹万石 目録在ニ事別紙

任ニ寛永貳年十二月十一日先判之旨ニ宛ニ行之ニ訖全
可ニ領知ニ者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印

不知筆者

西郷若狹守とのへ

高三千百五石九斗五升
都合壹万石
奥書右同

寛文四年四月五日

西郷若狹守殿

目録

安房國

朝夷郡之内 拾九箇村

御子神村

石堂原村

珠師谷村

小物成高ニ入

五十藏村

石堂村

小物成高ニ入

瀧野原村

小物成高ニ入

三原村

小物成高ニ入

柴野村

花崗村

眞門村

内遠野村

沼村

小物成高ニ入

西原村

川谷村

小物成高ニ入

小物成高ニ入

高六千八百九拾三石六斗

長狹郡之内 四箇村

東條村

内浦村

天津村

小物成高ニ入

栗斗村

小物成高ニ入

小物成高ニ入

小物成高ニ入

小物成高ニ入

小物成高ニ入

越後國

蒲原郡之内 拾七箇村

目録

寛文四年四月五日御朱印

筆者久保吉右衛門

牧野新三郎とのへ

越後國蒲原郡之内拾七箇村三嶋郡之内拾三箇村都合

壹万石別紙ニ事如ニ前々ニ宛ニ行之ニ訖全可ニ領知ニ者也

仍如レ件

佐渡山村

並木村

雀森村

米納津村

岩室村

富永村

樋曾村

石瀬村

泉村

林鹿村

老出村

觀音寺村

矢作村 井田村 松橋村

平澤村 角見濱村

高五千百貳拾八石六斗四升八合

三嶋郡之内 拾三箇村

與板村 山澤村 槇原村

氣比宮村 逆谷村 藤川村

中川村 宮澤村 荒卷村

富岡村 阿彌陀瀬村 中永村

蓮花寺村

高四千八百八拾九石八斗八升

但貳郡之内拾八石餘依爲三分限帳之外一籠高也

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

牧野新三郎殿

卷第二十四

陸奥國石川郡之内拾六箇村都合壹万石別紙目録在事如三
前々宛行之訖全可令領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

本多山城守とのへ

目録

陸奥國

石川郡之内 拾六箇村

下泉村 高田村 内真木村

山形村 双里村 形見村

谷澤村 坂路村 谷地村

北山村 湯江渡村 母畑村

中野村 鹽澤村 澤井村

中田村之内

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

本多山城守殿

大和國城上郡之内拾貳箇村四千百九拾七石四斗餘山
邊郡之内九箇村三千六百五拾四石四斗餘攝津國嶋下

郡太田領之内五箇村貳千四百拾八石餘都合壹万石目録
在別紙事任寛文二年七月廿七日先判之旨一充行畢全
可領知者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門

織田豊前守とのへ

目録

大和國

城上郡之内 拾貳箇村

戒重村 大西村 江包村

岩田村 箸中村 穴師村

備後村 角栖村 柳村

中谷村 和田村 小夫村

高四千百九拾七石四斗五升三合

山邊郡之内 九箇村

勾田村 山口村 内馬場村

菌原村 兵庫村 新泉村

岸田村 乙木村 藤井村

高三千六百五拾四石四斗九升

攝津國

嶋下郡太田領之内 五箇村

上村 坪井村 庄屋村

下村 正音寺村

高貳千四百四拾八石五升七合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

織田豊前守殿

上總國市瀧郡之内八箇村壹万石目録在別紙事如前々充
行之畢全可令領知者也仍如件

寛文四年四月五日 筆者大橋長左衛門

阿部播磨守とのへ

目録

上總國

夷瀧郡之内 八箇村

中瀧村 鴨根村 臼井村

内野村 釋迦谷村 下布施村

御宿村 小池村之内

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

阿部播磨守殿

常陸國河内郡之内七箇村四千百拾壹石六斗餘下野國
足利郡之内六箇村貳千八百七拾五石壹斗餘武藏國埼
玉郡之内三箇村千三百拾八石七斗餘下總國岡田郡大
輪村九百貳拾九石壹斗餘葛飭郡加養村七百六拾五石
貳斗餘都合壹万石^{別紙}目録在事如_レ前々_ニ充_ニ行_ニ之_ニ畢全可
_レ令_ニ領知_ニ者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

土井信濃守とのへ

目録

常陸國

河内郡之内 七箇村

關本村 上野村 江村

平方村 黑駒村 尻手村

澁井村

高四千百拾壹石六斗九升三合

下野國

足利郡之内 六箇村

葉鹿村 大前村 江川村

月谷村 名草村 花崎村

高貳千八百七拾五石壹斗壹升六合

武藏國

埼玉郡之内 三箇村

道目村 平野村 下新井村

高千三百拾八石七斗七升九合

下總國

岡田郡之内

大輪村

高九百貳拾九石壹斗九升三合

葛飭郡之内

加養村

高七百六拾五石貳斗壹升九合

武藏國埼玉郡之内下總國葛飭郡之内延高合百

石壹斗九升四合爲_二御用地_一被_二召上_一替地以_二物成積_一被_レ下右高_二不_レ載_一之

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

土井信濃守殿

常陸國河内郡之内拾四箇村五千四百七拾六石貳斗餘
下總國豐田郡之内六箇村貳千六百四拾壹石壹斗餘岡
田郡之内三箇村千八百八拾壹石七斗餘結城郡之内三箇
村七百石八斗餘都合壹万石_{別錄在紙}事如_二前々_一充行畢
全可_二領知_一者也仍如_レ件

寛文四年四月五日御朱印

筆者大橋長左衛門

土井周防守とのへ

目録

常陸國

河内郡之内 拾四箇村

袋 村 野 爪 村 坪 井 村

下總國

豐田郡之内 六箇村

沼 森 村 貝 谷 村 河 尻 村
若 村 原 宿 村 本 石 下 村

高貳千六百四拾壹石壹斗壹升四合

岡田郡之内 三箇村

法 木 田 村 栗 山 村 中 大 間 木 村

高千八百八拾壹石七斗四升九合

結城郡之内 三箇村

古 河 菅 谷 村 下 妻 菅 谷 村 乙 女 菅 谷 村

高七百石八斗六升五合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

土井周防守殿

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

板倉伊豫守殿

攝津國嶋下郡之内拾箇村九千石下野國都賀郡之内三箇村千石都合壹万石^{別紙}目録在事如三前々一充二行之一畢全可三領知一者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者神尾小左衛門

板倉伊豫守とのへ

目錄

攝津國

嶋下郡之内 拾箇村

穂積村 水尾村 鮎川村

戸伏村 總持寺村 道祖本村

郡村 中條村 三宅村

味舌村

高九千石

下野國

都賀郡之内 三箇村

蛙沼村 鎧村 前原村

高千石

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

板倉伊豫守殿

下總國葛飾郡之内拾八箇村七千石運璫郡惣領村貳百九拾六石七斗餘上總國武射郡屋形村三百七拾五石九斗餘長柄郡長谷村四百貳拾五石九斗餘相模國大住郡之内四箇村千百拾石餘鎌倉郡笠間村七百九拾壹石三斗餘都合壹万石^{別紙}目録在事如三前々一充二行之一畢全可三領知一者也仍如レ件

寛文四年四月五日御朱印 筆者杉浦半左衛門

森川出羽守とのへ

目錄

下總國

葛飾郡之内 拾八箇村

北小弓村 南小弓村 村田村

濱野村 有吉村 小花輪村

大金澤村 谷津村 駒崎村

古市場村 落井村 荻田子村

小金澤村 富岡村 中西村

室村 平山村 邊多村

高七千石

逆瑤郡之内

惣領村

高貳百九拾六石七斗四升七合

上總國

武射郡之内

屋形村

高三百七拾五石九斗四升壹合

長柄郡之内

長谷村

高四百貳拾五石九斗四升壹合

相模國

大住郡之内 四箇村

名古屋村 落合村 尾尻村

堀村

高千百拾石六升

鎌倉郡之内

笠間村

高七百九拾壹石三斗壹升壹合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

森川出羽守殿

越後國沼垂郡長橋領五千五百石上總國夷溝埴生市原

長柄四郡之内四千百三拾石餘下總國香取郡之内三百

石武藏國高麗郡之内六拾九石九斗都合壹万石

事如三前々充之行之畢全可領知者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者建部與兵衛

堀式部少輔とのへ

目錄

越後國

沼垂郡之内 貳拾三箇村

椎谷町村 濱忠村 大崎村

大津村 甲田村 上山田村

伊毛村 下山田村 藤懸村

二田村 池浦村 坂田村

油田村 妙法寺村 北野村

內方村 五日市村 十日市村

和田村 鬼王村 禮拜村

鎌田村 廣田村

高五千五百石

上總國

夷瀧郡之內 六箇村

荊谷村 國府臺村 深谷村

八乙女村 行川村 増田村

高貳千拾壹石六斗九升七合

埴生郡之內 三箇村

石神村 千田村 棚毛村

高六百四拾貳石貳斗七升

市原郡之內 四箇村

八幡村 平藏村 小草畑村

米原村

高千四百貳拾石壹斗九合

長柄郡之內

初柴村

高五拾五石九斗六升三合

下總國

香取郡之內 貳箇村

新市場村 米野井村

高三百石

武藏國

高麗郡之內

川崎村

高六拾九石九斗六升壹合

都合壹万石

與書右同

寛文四年四月五日

堀式部少輔殿

甲斐國山梨郡之內貳拾箇村七千九百拾三石貳斗餘上
總國天羽郡之內三箇村貳千六拾五石壹斗餘武藏國豐
嶋郡佐々木村貳拾壹石六斗都合壹万石

別錄在二事如三

前々ニ充ニ行之ニ畢全可ニ領知ニ者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

伊丹大隅守とのへ

目録

甲斐國

山梨郡之内 貳拾箇村

下井尻村 上鹽後村 東方村

西方村 三日市場村 小屋敷村

藤木村 下柚木村 上柚木村

川浦村 下於曾村 上於曾村

千野村 下栗生野村 上栗生野村

上萩原村 上小田原村 下小田原村

竹森村 福生里村

高七千九百拾三石貳斗壹升四合

武藏國

豊嶋郡之内

佐々木村之内

高貳拾壹石六斗

上總國

天羽郡之内 三箇村

姉崎村 嶋野村 二日市場村

高貳千六拾五石壹斗八升六合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

伊丹大隅守殿

安房國安房郡之内貳拾四箇村九千五百石朝夷郡賀茂村五百石都合壹万石_{別紙}目録在ニ事如ニ前々ニ充ニ行之ニ畢全可ニ領知ニ者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者大橋左兵衛

屋代越中守とのへ

目録

安房國

安房郡之内 貳拾四箇村

北條村 安布理村

瀧川村 大作村

新田高ニ入

國分村

山本村

新田高ニ入

稻村 新田高二入
 二子村 新田高二入
 新田小物成高二入
 安藤村 新田小物成高二入
 大井村 新田小物成高二入
 御庄村 新田小物成高二入
 長須賀村 新田小物成高二入
 古河村 新田高二入
 高九千五百石
 朝夷郡之内
 賀茂村
 高五百石
 都合壹万石
 奥書右同
 室貝村 新田小物成高二入
 南片岡村 新田小物成高二入
 園村 新田小物成高二入
 竹原村 新田小物成高二入
 中村之内 新田小物成高二入
 江田村 新田小物成高二入
 加戸村 新田高二入
 北片岡村 新田高二入
 水玉村 新田高二入
 廣瀬村 新田高二入
 腰越村 新田高二入
 高井村 新田小物成高二入

寬文四年四月五日
 屋代越中守殿

遠江國豐田郡之内拾貳箇村四千三百六拾九石三斗餘

山石郡之内四箇村貳千六百三拾石六斗餘武藏國比企郡之内五箇村貳千五百石相模國高座郡之内兩村千石都合壹万石別紙在事如三前々充三行之一畢全可三領知三者也

寬文四年四月五日御朱印 筆者杉浦伊右衛門
 加々爪甲斐守とのへ
 目錄

遠江國

豐田郡之内 拾貳箇村

小山村 横井村 延久村
 太田村 箕取村 大海村
 向笠上村 同中村 同新屋村
 同竹内村 同西村 勿坂中村
 高四千三百六拾九石三斗八升
 山名郡之内 四箇村
 新池村 西嶋村 玉越村
 沖山梨村
 高貳千六百三拾石六斗貳升
 武藏國

比企郡之内 五箇村

高坂村 本宿村 悪戸村

小代村 早俣村

高貳千五百石

相模國

高座郡之内 貳箇村

町屋村 田端村

高千石

都合壹万石

奥書石同

寛文四年四月五日

加々爪甲斐守殿

河内國丹南郡之内貳拾三箇村都合壹万石
別紙在目錄事如
前々宛行之畢全可領知者也

寛文四年四月五日御朱印 筆者渡邊七郎兵衛

高木主水正とのへ

目錄

河内國

丹南郡之内 貳拾三箇村 内拾壹箇村ハ小物成高ニ入

丹南村 太村 黒山村

阿彌陀寺村 北余部村 南余部村

原寺村 北村 高松村

丈六村 北野田村 菅生村

平尾村 小平尾村 河原城村

柏山村 野河 伊賀村

藤井寺村 岡村 夙村

西川村 夙村之内

都合壹万石

奥書石同

寛文四年四月五日

高木主水正殿

陸奥國石川郡之内拾六箇村六千八百六石七斗餘白川
郡之内四箇村三千百九拾三石貳斗餘都合壹万石
別紙在目錄事如前々宛行之畢全可領知者也

寛文四年四月五日御朱印 不知筆者

本多吉左衛門とのへ

目 録

陸奥國

石川郡之内 拾六箇村

淺川町村 瀧輪村 大畑村

裝輪村 袖山村 根岸村

大草村 中里村 松入村

畑田村 白石里村 白石山村

板橋村 南山形村 福貴作村

染村

村六千八百六石七斗三升貳合

白川郡之内 四箇村

大田和村 小貫村 上野出嶋村

下野出嶋村

高三千百九拾三石貳斗六升八合

都合壹万石

奥書右同

寛文四年四月五日

本多吉左衛門殿

寛文印知集終

補遺

讃岐國三野多度豐田三郡并那珂鵜足兩郡内五万六拾
七石餘播磨國揖保郡内壹万石近江國蒲生郡内千四百
四拾五石都合六万五千五百石目録在別紙事内三千石京極頼
母可進退候殘五万八千五百石餘宛行之訖全可
領知者也仍如件

寛文四年四月五日御朱印

筆者飯高七兵衛

京極百助とのへ

右本文は百四十一頁に入るべかりしを同頁校了後に之を脱漏せしを發見したれば此に補ふと云

琉球國郷帳

琉球國

惡鬼納島

一高千三百七拾五石四斗九升四合四勺六才

南風原間切

內千廿九石貳斗貳升貳合三勺三才

三百四拾石三斗貳合壹勺三才

五石九斗四升

一高貳千三百六拾八石壹斗三升九合三才

眞和志間切

內千六百三拾五石三斗九升壹合七勺四才

七百拾壹石五斗五升七合貳勺九才

貳拾壹石壹斗九升

一高三千三百三拾七石七升六合九勺四才

豐見城間切

內貳千三百四拾貳石八斗貳升八合八勺九才

七百五拾七石壹斗五升八合五才

三拾七石九升

一高千八百三拾貳石八斗貳合八勺七才

島尻大里間切

內千六拾五石貳斗六升九合五勺七才

七百三拾八石九升三合三勺

貳拾九石四斗四升

一高八百五拾五石三斗三升九合八才

眞賀比間切

內三百三拾四石貳斗五合三才

五百拾六石貳斗四升九合五才

四石八斗八升五合

一高五百六拾五石五斗五升貳勺六才

喜屋武間切

內百拾七石七斗七升八合六勺七才

四百貳拾五石四斗壹升壹合五勺九才

貳拾貳石三斗六升

一高五百八拾三石四斗七升五合六勺五才

摩文仁間切

內百三拾九石七斗五升五勺八才

四百三拾壹石貳斗七才

拾貳石五斗貳升五合

一高八百貳拾九石五斗九升壹合六勺

具志頭間切

內三百七拾三石壹升壹合七勺七才

四百五拾壹石壹斗壹升四合八勺三才

五石四斗六升五合

桑田 役方

一高千五百八拾四石四斗六升八合貳勺九才

東風平間切

內千八拾五石壹斗七升五合貳勺

四百七拾七石七斗壹升三合九才

貳拾壹石五斗八升

桑田 役方

一高千三百六拾九石五斗八升貳合五勺

玉城間切

內千貳拾石八斗壹升貳合九才

三百廿貳石八斗四勺壹才

貳拾五石九斗七升

桑田 役方

一高八百九拾八石九斗六升三合六勺六才

知念間切

內四百拾三石九斗壹升八合五才

四百六拾八石九斗三升壹合六勺壹才

拾六石壹斗壹升四合

桑田 役方

一高九百廿八石六斗九升貳合三勺八才

佐敷間坊

內七百八石貳斗三升五合三勺四才

貳百拾六石四斗三升七合四才

四石貳升

桑田 役方

一高三千貳拾九石三斗五升四合四勺

島添大里間切

高貳千四百廿九石五斗四升五合三勺八才

五百八拾貳石八斗九升六合六勺六才

拾六石九斗壹升貳合

桑田 役方

一高貳千八百九拾七石四斗六升六合貳勺七才

西原間切

內貳千百廿五石七斗七升貳合八勺八才

七百六拾貳石四斗四升三勺九才

九石貳斗五升三合

桑田 役方

一高五千三百三拾五石三斗三升壹合八才

浦添間切

內貳千七百四拾五石六斗九升八合六勺貳才

貳千五百七拾貳石四斗七升貳合四勺六才

拾七石壹斗六升

桑田 役方

一高三千六百六石六斗六升六合六勺六才

中城間切

內貳千百五拾八石九斗四升七合五勺八才

八百拾七石三斗四升九合八才

百三拾石三斗七升

桑田 役方

一高三千四百三拾五石六斗八升六合四勺六才

北谷間切

内八百拾貳石七斗六升三合六才

貳千六百拾石五斗三合四勺

拾貳石四斗貳升

田方 桑役

一高四千三百八拾壹石三斗三升八合七勺五才

越來間切

内貳千四百七拾九石四斗七升六合四勺六才

千七百七拾八石八斗四升貳合貳勺九才

百貳拾三石貳升

田方 桑役

一高四千七拾三石三斗壹合七勺七才

具志河間切

内千五百四拾八石四斗六合八勺七才

貳千四百五拾三石三斗五升四合九勺

七拾壹石五斗四升

田方 桑役

一高貳千貳拾貳石五斗五升四合七勺九才

勝連間切

内九百拾四石九斗七合貳勺四才

千六拾四石七升七合五勺五才

四拾三石五斗七升

田方 桑役

一高四千九百六拾三石貳斗三升九合三勺五才

讀谷山間切

内六百廿六石三斗五升貳合八勺壹才

四千貳百八拾五石九斗五升壹合五勺四才

田方 桑役

五拾石九斗三升五合

一高千九百五拾三石貳升貳合五勺七才

金武間切

内千六百六石七斗八升九合五才

三百四拾貳石八升三合五勺貳才

四石壹斗貳升

田方 桑役 村

一高千六百五拾壹石貳斗五升三合三勺貳才

名護間切

内千五百拾七石八斗三升三勺九才

百五石八斗六升六合九勺三才

貳拾七石五斗五升六合

田方 桑役 村

一高五千三拾五石三斗三升八合九勺九才

今歸仁間切

内千四百四拾七石八斗壹升三合九勺壹才

三千四百四拾六石壹升五合八才

百四拾壹石五斗壹升

田方 桑役 村

一高千九百八拾五石四斗壹升壹合九勺

羽地間切

や か 村

内千九百拾七石九斗壹升五合貳勺九才

五拾壹石八斗四升四合六勺壹才

拾五石六斗五升貳合

一高千貳拾九石七斗五升四合三勺八才

國頭間切

内八百六拾石三斗九升貳合貳勺四才

百三拾五石六斗五升九合壹勺四才

三拾三石七斗三合

一高九百七拾石壹斗貳合九勺五才

兼城間切

内五百九拾六石壹斗八升八合九勺六才

三百七拾三石九斗壹升三合九勺九才

合高六萬貳千百九拾九石

村數四拾五

内三萬四千五拾四石四斗

貳萬七千貳百四拾石三斗

九百四石三斗

琉球國之内

惠平屋島

桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方

とのきや
あさわ
おとくた
や
村村村村村

桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方

桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方

一高五百四拾壹石六斗 惠平屋島

内三百七拾七石九斗五升

百五拾九石七升

四石五斗八升

琉球國之内

伊是那島

一高七百五拾石貳斗

内六百貳拾八石八斗貳升八合

百拾九石九升八合九勺

貳石貳斗七升三合壹勺

琉球國之内

伊惠島

一高三千六百四拾三石

内三千六百拾九石貳斗

貳拾三石八斗

琉球國之内

計羅摩島

一高貳百三石

斗羅摩島

桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方

桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方

桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方 桑田 役方

前座間味島
赤座間味島
けこるま

内百六拾三石九斗三升壹合
三拾八石七斗九升貳合
貳斗七升七合

琉球國之内

戸無島

一高四拾五石壹斗

内壹石貳斗六升

四拾三石貳斗三升

六斗壹升

琉球國之内

粟島

一高七百貳拾七石四斗

内七百貳拾五石六斗

壹石八斗

琉球國之内

久米島

一高三千六百七拾七石七斗

久米

島
中志河間
城尻村

田方
島方
桑役

戸無島

田方
島方
桑役

粟島

田方
島方
桑役

内貳千八百四拾五石壹斗九升
六百四拾五石七斗五升壹合
百六拾六石七斗五升九合

琉球國之内

德之島

一高三千九百八拾貳石三斗

面縄間切 あごん村

内貳千四百八拾三石五斗三升

千四百拾七石八斗五升

八拾石九斗貳升

一高貳千五拾壹石貳斗 東間切

内千四百八拾六石貳斗五升

五百貳拾貳石

四拾貳石九斗五升

一高三千九百七拾六石貳斗

西目間切 てなまき村

内貳千四百八拾六石九斗貳升

千四百五拾五石四斗壹升

三拾三石八斗七升

合高壹万九石七斗 村數九ツ

田方
島方
桑役

田方
島方
桑役

田方
島方
桑役

田方
島方
桑役

田方
島方
桑役

奈瀬間切
桑田
敷役方
村

內千貳百四拾七石壹斗五升

三拾三石貳斗八升

百三拾八石五斗七升

一高千五百壹石

焼内間切

すうなけい
けおせん
こんんか
村村村村村

內千三百八拾六石五斗七升

三拾三石壹斗八升

八拾壹石貳斗五升

一高貳千百九拾石

西間切

ようおたす芝西へこ小
る しさけこ の 名
けか こたし
の いなし 瀬
く み
島島村村村村村村村村

內貳千百三十拾貳石六斗五升

三拾八石七斗八升

拾八石五斗七升

一高千七百三拾壹石

東
間
切

かしかくあか
めふちねきと
のとよつなく
川んく
村村村村村村

內千六百五拾九石六斗三升

貳拾五石貳斗貳升

四拾六石壹斗五升

一高九百四拾七石

住ス用ヨウ間切

內九百貳拾石四斗九升

五石八斗七升

貳拾石六斗四升

一高千六百六拾五石五斗

小見間切とくち村

內千五百九拾五石九斗

六石壹斗

六拾三石五斗

合高壹万四百五拾五石五斗

村數四拾

內九千五百九拾五石六斗

四百六拾壹石八斗

三百九拾八石壹斗

琉球國之內

鬼界島

一高千八百六拾貳石

碗
間
切

内千三百七拾壹石九斗九升

四百七拾九石貳斗三升

拾石七斗八升

一高千三百貳拾貳石

内九百貳拾九石四斗壹升

三百七拾五石貳斗五升

拾七石三斗四升

一高千九百八拾六石

内千九百拾貳石四斗五升八合

六拾石九斗貳升

拾貳石六斗貳升貳合

一高七百拾貳石

内四百九拾五石壹斗

貳百貳石九斗四升

拾三石九斗六升

一高千五拾石四斗

内八百壹石壹斗八升

貳百廿八石貳斗

貳拾壹石貳升

合高六千九百三拾貳石四斗

荒木間切

田方
桑役
しつる村

東間切

田方
桑役

志戸桶間切

田方
桑役

西目間切

田方
桑役
いしやく村

村數七ツ

内五千五百拾石壹斗三升八合

千三百四拾六石五斗四升

七拾五石七斗貳升二合

琉球國之内

宮古島

一高三千六百七石九斗五升五合貳勺六才

下地間切

上地
與那覇村

内貳百五拾石七斗四升三合貳勺八才

三千三百三拾八石壹斗六升三合九勺八才

拾九石四升八合

一高三千三百拾石七斗壹升四合八勺三才

平良間切

新里村
いり中それ村

内百三拾壹石貳斗壹升四合壹勺七才

三千百廿五石壹斗三升六合六勺六才

五拾四石三斗六升四合

一高千五百五拾七石四斗壹升七合九勺壹才

狩俣間切
尻村

内八拾八石六斗三升壹合九勺七才

千四百拾四石七斗六升七合九勺四才

五拾四石壹升八合

田方
桑役

一高三千三百八拾九石三斗貳升六合貳勺六才

おろか間切

百^{ヒヤク}中^{ナカ}友^{トモ}荒^{アラ}宮^{ミヤ}
きんき
里^{サト}利^リ川^{カハ}泊^ト
村^{ムラ}村^{ムラ}村^{ムラ}村^{ムラ}村^{ムラ}

内百拾七石八斗貳升貳合六勺九才

三千百拾四石壹斗六升五勺七才

百五拾七石三斗三升七合

田方
桑役

琉球國之内

たらま島

一高三百三拾八石五斗九升五勺四才

たらま島

内貳百九拾九石四斗七升五合五勺四才

三拾九石壹斗壹升五合

田方
桑役

琉球國宮古島之内

あらふ島

一高貳百五拾四石七斗八升七合六勺貳才

くかい村

内壹石三斗九升七合八勺九才

貳百三拾七石九斗八升壹合七勺三才

拾五石四斗八合

田方
桑役

合高壹万貳千四百五拾八石七斗九升貳合四勺貳才

村數二十

内五百八拾九石八斗壹升

壹万五千五百廿九石六斗九升貳合四勺貳才

三百三拾九石貳斗九升

田方
桑役

琉球國八重山島之内

石垣島

一高九百八拾石五斗八升八合七勺四才

石垣間切

殿^{テン}城^{シロ}
崎^{サキ}枝^エ村^{ムラ}村^{ムラ}村^{ムラ}

内六百八拾三石七斗七升四合四勺三才

貳百七拾九石三斗三升四合三勺壹才

拾七石四斗八升

田方
桑役

一高千四拾四石壹斗六合五勺貳才

大濱間切

内七百四拾四石三斗七升三合五勺貳才

貳百五拾石壹斗六升三合

四拾九石五斗七升

一高貳百七拾石九斗貳升五合八勺八才

宮良間切 しろほ村

内百八拾三石八斗貳升三勺壹才

七拾四石七斗三升五合五勺七才

拾貳石三斗七升

一高貳百四拾貳石四斗五升八合三勺七才

河平間切 つか筋村

内百九拾五石壹斗八升五勺

四拾五石貳斗七升七合八勺七才

貳石

桑島田 役方方

琉球國八重山島之内

入表島

一高千三百三拾六石六斗貳升四合六勺三才

入表間切

うたほなふかあ 村
らかしかのみなと 村
打たう河 村
らてけ 村
村 村 村 村 村 島

内千貳百六拾七石九斗九合五勺九才

五石八斗七升五合四才

六拾貳石八斗四升

一高千九百九拾六石壹斗七升五勺五才

古見間切

崎みひい小 濱
つはらけ 村
枝なれ 村
村 村 村 村 島

内千八百七拾七石九斗三升壹合貳勺六才

九拾七石五斗三升九合貳勺九才

貳拾石七斗

桑島田 役方方

琉球國八重山島之内

波照間島

一高四百貳拾七石四斗七勺三才

波照間島

内三拾七石四斗七升三勺九才

三百六拾六石壹升三勺四才

貳拾三石九斗貳升

琉球國八重山島之内

黒島

桑島田 役方方

一高貳百八拾六石七斗四升六合六勺四才

黒島

内貳百五拾九石七斗四升六合六勺四才

貳拾七石

桑島
役方

琉球國八重山島之内

たけと見島

一高五拾貳石貳斗九升九合

たけと見島

皆島方

合高六千六百三拾七石三斗貳升壹合六才

村數三十

内四千九百九拾石四斗六升

千四百三拾石九斗八升壹合六才

貳百拾五石八斗八升

田方
桑役方

總合高拾貳万三千七百拾壹石八斗壹升三合四勺八才

村數百七拾六

内六万八千貳百六拾四石五斗貳升七合

五万三千百貳石壹斗五升五合三勺八才

貳千三百四拾五石壹斗三升壹合壹勺

田方
桑役方

寛文八年申十月

日

琉球國郷帳終

松前島郷帳元祿十三年

從三松前二西在郷并蝦夷地之覺

一 ねふた村	一 さつまい村	一 あか神村
一 雨たれ石村	一 もくさ村	一 のしの下村
一 幾よべ村	一 ゑら町村	一 おこしへ村
一 はらくち村	一 石崎村	一 はねさし村
一 汐吹村	一 扇石村	一 瀧澤村
一 木の子村	一 かみの國村	一 喜多村
一 とゝ川村	一 ふるべち村	一 こかつて村
一 もしり村	一 つばな村	一 江差村
一 とよべ内村	一 つめき石村	一 おこない村
一 とまり村	一 おやま村	一 田澤村
一 目名澤村	一 ふし木戸村	一 こりん澤村
一 乙部村	一 小茂内村	一 大もない村
一 とつふ村	一 みつ屋村	一 かはじら村
一 あいの間内村	一 泊川村	一 けんにち村
一 くま石村	一 ほろむい村	一 小島

一大島
從レ是蝦夷地
一 おこしり島

一 うすべち	一 ふとろ	一 せたない
一 はませたない	一 あふら	一 ちわし
一 しまこまき	一 夕まき	一 六條間
一 をたすつゝ	一 たんねしり	一 しりべち
一 いそや	一 岩内	一 しりぶか
一 むいの泊り	一 ふるう	一 しやこたん
一 びくに	一 ふるびら	一 ざまゝき
一 もいれ	一 よいち	一 しくずし
一 かつち内	一 おたる内	一 はつしやぶ
一 しろの	一 しやつほろ	一 いしかり
一 おしよろこつ	一 あつた	一 ましけ
一 べつかり	一 ほろとかり	一 はしへつ
一 つるをつへ	一 とまゝい	一 ういべち
一 てしを	一 ばつかいへ	
是よりそうやの内		
一 つさん	一 のつしやむ	一 そうや
離島之分		
一 へうれ	一 りいしり	一 れぶんしり

一 いしよこたん

從松前一東在郷并蝦夷地之覺

一 およべ村

一 大澤村

一 れいひげ村

一 よし岡村

一 宮のうた村

一 ねまつり村

一 しらふ村

一 福島村

一 しりうち村

一 わきもと村

一 きこない村

一 しやつかり村

一 いつみ澤村

一 六條間村

一 かまや村

一 みつ石村

一 大當別村

一 小當別村

一 もへち村

一 やげ内村

一 富川村

一 三屋村

一 しよやま村

一 へけれち村

一 ある川村

一 大野村

一 龜田村

一 箱館村

一 しりさぶ村

一 ゆの川村

一 しのり村

一 錢神澤村

一 汐とまり村

一 石崎村

一 おやす村

一 うか川村

一 汐くひ村

從是蝦夷地

一 はらき

一 しりきし内

一 ゑけし内

一 こぶい

一 ねた内

一 おさつへ

一 おとしつへ

一 のたへ

一 ゆうらつふ

一 くんぬい

一 しつかり

一 べんべ

一 おこたらへ

一 うす

一 ゑんども

一 あよろ

一 ひらをひ

一 たるまへ

一 まこまへ

一 あづま

一 む川

一 さる

一 もんへつ

一 けのまへ

一 にかぶ

一 しぶちやり

一 みついたし

一 浦川

一 もこち

一 ほろべつ

一 うんべち

一 ほろいづみ

一 たもち

一 とまり

一 おんべつ

一 とかち

一 しらぬか

一 くすり

一 ちよろべつ

一 あつけし

一 のつしやむ

一 べけるゝ

一 ちべ内

一 しろい所

一 るうしや

一 りいしやし

一 べりけ

一 ふなべち

一 しやる

一 りんにくり

一 うらいしべち

一 はいしり

一 のとろ

一 つころ

一 ゆうべち

一 のとろ

一 しよこつ

一 おこつべ

一 ほろ内

一 ほろへつ

一 つうへち

一 つもしり

一 きいたつふ

くるみせ島の方

一 いるゝ

一 くなしり

一 もうしや

一 もしりか

一 へちの内

はるたまこたん	まかんるゝ	おやこば
しやむらてふ	らせうわ	しりんき
あとゑふ	くるみせ	ゑかりま
うるふ	ゑとろほ	ほんしりおゝい
しいあしこたん	ゑばいと	もとわ
けとない	もしや	しいもし
らつこあき	うせしり	れにんげちや
ふかんるゝあし	まさおち	しいもしり
ゑかるまし	まかな	しりおゝい
こくめつら		
いしかりよりいふつまでの蝦夷居所		
ぬまかしら	夕ばり	あつ石
つうさん	おさつ	いちやり
つうめん	島まつふ	いべちまた
ついいし狩	かばた	めいぶつ
夕べち		
からと島		
うつしやむ	こくわ	つなよろ
まをか	のたしやむ	おつちし
きどうし	いといまて	おれかた

松前島郷帳終

ちやほこ	なふきん	にくぶん
きんちば	びんのき	うへこたん
かれたん	せうや	しろいところ
しいた	ないふつ	あゆる
人居村數八拾壹箇所	蝦夷人居所百四拾箇所	
惣島數四拾八箇所	田地高無御座候	
元祿十三庚辰年正月日	松前志摩守	

藝備國郡志序

班史有地理志。范書有郡國志。其後歷代有州志。有郡志。其目載在經籍志。本朝之古郡國各有風土記。今則亡矣。僅存出雲一國及豐後之殘簡而已。方今淺野君領安藝一國及備後國內六郡。法眼黑川道祐筓仕有年。自洛屢來。往藝備。而詳知其風土山川。寺社舊蹤。人物土貢。今茲從邦君之世子僑居東武。陪侍乃暇。傲大明一統志標題。而編著安藝國備後六郡之事。所見所聞之外。參攷舊記。以附益之。不日而成。編就。余求之。是正。余粗見其大概。則殆如遊藝備之地。可以嘉焉。可以感焉。乃知使其邦君及世子一覽之。則於治民施政亦有小補。乎若夫使郡國遊歷之書生。與祐同志。則六十餘州之風土記亦不可謂難。修乎然。則此編是祖生之鞭乎。聞祐也。還洛在近余頃。官事裨益不遑細論。然草創既成。則修飾之精潤色之美。有待于在洛閑暇之日。而可見于藝備重遊之時。乎。寬文癸卯五月下。潯向陽林子序。

凡例

- 一 藝備國郡志二冊。藝國八郡爲上卷。備後六郡爲下卷。其條目不_レ用本朝風土記之例。而倣大明一統志之標題者也。
- 一 諸條目以_レ郡分之爲_レ令有_レ便_レ考索也。
- 一 此書成後。明年源大君有_レ命諸國之郡名復舊。然此書從_レ於中世以來所傳之名。蓋便_レ土人暗誦之易也。
- 一 陵墓門郡名混雜。然人有_レ前後專以_レ時代次之。勿以_レ他條下一視之。
- 一 人品門之中。人物名宦流寓隱士婦女釋子悉列_レ于此。見者擇_レ之可也。
- 一 凡書中所_レ援用_レ中華本朝之書。依_レ條下而按_レ出之。無_レ拘_レ書之前後。
- 一 凡書中行程其里數。以_レ本朝之量法三十六町爲_レ一里。其斗量尺寸專從_レ本朝之所_レ定。
- 一 舊記之故事所_レ關涉藝備二州之事而不_レ入_レ于條目者。別置_レ拾史之門。以_レ載_レ之。聊爲_レ助_レ博覽也。

所援用本朝書目錄

日本紀

續日本後紀

三代實錄

延喜式

扶桑畧紀

竹林寺緣起

本朝文粹

古事談

歌枕

東鑑

八雲御鈔

玉葉集

廣解文集

法燈年譜

庭訓往來

鹿苑院嚴島紀行

不二稿

拾芥鈔

續日本紀

文德實錄

萬葉和歌集

類聚國史

沼田緣起

源順倭名鈔

國名風土記

本朝無題詩

平家物語

千五百番歌合

土御門院嚴島紀行

風雅集

懷中鈔

類聚和歌集

類聚名所和歌鈔

釋愚中年譜

雪嶺集

毛利元就記

所援用中華書目錄

三車一覽

文選

本草綱目

登壇必究

海東諸國記

五雜俎

酉陽雜俎

食經

大明一統志

武備志

文獻通考

藝備國郡志上

黑川道祐撰

安藝州建置沿革

日本紀云 神武元年十有一月天皇至筑紫國山岡水門十有二月至安藝國居于埃宮云々今考埃宮不知其處矣國名風土記云 神功皇后曾欲征三韓經西海道王師所到簠食壺漿以迎之到斯邦則四方之貢物飽足故名曰飽國云々今改稱安藝飽與安藝倭語相同故然也上世安藝國分八郡曰沼田曰賀茂曰安藝曰佐伯曰山縣曰高宮曰高田曰沙田曰通計萬七千八百四町云々類聚國史順倭名鈔延喜式拾芥鈔等之所載悉如此後世改沙田郡號豐田郡割安藝郡爲安北安南二郡佐伯郡亦今分爲佐西佐東兩郡賀茂山縣高田通計爲八郡古所謂沼田不知今之沼田也否按日本紀使佐伯氏居沼田云々然則佐伯郡之稱號本于此乎淳田者蓋今之沼田乎續日本紀曰元正天皇養老三年令備後國守正五位

下大津宿禰宿奈麻呂管安藝周防國又曰 聖武天皇天平六年九月制安藝周防二國以大竹河爲國界也云々到今從其制之所定也三代實錄曰貞觀四年秋七月廿七日甲午安藝國安藝郡始置主政一員又曰貞觀五年六月廿一日安藝國佐伯郡加置主政主帳各一員延喜式曰安藝國正稅二十三萬束公廩二十萬八千八百束國分寺料三萬束文殊會料二千束修理池溝料一萬束救急料三萬束驛子料三萬一千二百束安藝國陸路四十二束海路自國漕與等津船貨石別一束三把挾抄三十束水手二十五束但水手一人漕米十五斛自餘准播磨國海路十八日上十四日下七日云々

郡名門

安南郡 凡邑數計三十八田通算二萬五千三百五十六石零
佐東郡 凡邑數計一十田通算一萬六千五百五十五石零
豐田郡 凡邑數計五十六田通算五萬四千四百四十四石零
高田郡 凡邑數計六十二田通算四萬三千七十五石零
今合八郡田通算二十六萬五千五百五十石零也八郡戶十萬二百九十二口二十五萬六千三百二十二牛馬二萬八千

百七十四也蓋今府治廣島城下之戶口非此限別載之可并按一

形勝門

西隣周防北環出雲石見東接伯耆備後備中南連伊豫西北枕山嶽之險東南帶江海之阻地勢廣濶風氣和暖二川交流夾環州治田宅豐饒四民安逸

風俗門

人性寬舒而無疎豪之氣國多文雅之士而有才藝之人

城池門

廣嶋城今府治而屬安南郡斯地元五箇村之一村而連于海潮汐盈虛船舶往來曾毛利輝元見地之利埋海以築城中架五重之樓倭俗號天守其外大小城樓百三十六城之內外屈曲之壁圍合八千二百間餘關門二十餘石壁屹立而廻以深池板橋圯路通四方食祿之家千三百五十餘市中之街衢縱橫七十町餘農工商之戶三千五百四口三萬六千四百十二祠廟四座寺觀百七箇寺僧

千七十七口市中之板橋七條其中大者號京橋通東西橋以東則安南郡也橋以西則佐東郡也

三九 在城中矣倭俗列侯達伯構城營以平日所居名曰本丸所謂天守在于此中也到其外郭或曰二九或曰三九今此丸內設館舍以講武於斯矣或有習射之時或有試劍之日又馳駿馬以論其遲速又放鳥銃以比其優劣

竹丸 在本丸之東南是亦一方之要地也太鼓丸 在本丸之內矣東南角樓之上懸太鼓而晝夜使十二時以擊之蓋教四方知時刻也對面所 在本丸之內曾福島正則爲國守之日此所構別館待他方之賓客使价蓋不使他邦之人見國守平日之居處也倭俗高貴之遇來客曰對面對彼面顏之義也

八町馬場 在本丸之外東西約八町也凡倭邦之量法三步爲一間積六十三間爲一町今此場地坦平而無沙石故馳馬以使習馳驅之法倭俗謂試馬之地曰馬場

加子町 今府治之南沿海濱以並軒連字大凡柁工篙師之類悉居焉因稱加子町倭俗謂棹郎曰加子其西南

鑿池導大河之水。廻以塘太守之艤艦船舶悉繫之。凡柁工棹郎之所關。于船役之類殆近千人。皆是丁壯輕捷之徒。而是亦廣城海濱之一藩也。按日本紀曰。日向諸縣君牛仕。于朝廷。年既老矣。仍致仕退。於本土。則貢上己女髮長媛。始至播磨時。應神天皇幸淡路島。而遊獵之於。是應神天皇西望之數十麋鹿浮海來。便入于播磨鹿子水門。天皇謂左右曰。其何麋鹿也。泛海多來。爰左右共視而奇。則遣使令察使者至。見皆人也。唯著鹿皮爲衣服耳。問曰。誰人也。對曰。諸縣君牛。是年老雖致仕。不得忘朝。故以己女髮長媛而貢上矣。天皇悅之。即喚令從御船。是以時人號某著岸之處曰。鹿子水門。也。凡水手曰。鹿子。蓋始于此時也。今稱加子。倭俗謂街衢曰。町。凡街衢之四通猶田間之町畦。則其義通者乎。

流河、囹圄

流河在郭外。近世導大河之水。以入泉

水館之池。

倭俗謂假山曰泉水。

其餘流出郭外。其水清潔而民

人用之名曰流河。其河邊營方地。以置囹圄。爲

使民人戒懲罪惡也。偶有犯人。則命糾察之

使考罪之淺深。論刑之輕重。故訟無奸辭。罪無

冤獄。依之有咎者。雖死不恨。

竹鼻。在今府治之東。凡犯人之罪至大辟。則於茲

地殺之。或梟首或磔。屍於草津海濱。倭俗謂阿曰

鼻。蓋取突出之義。乎。偶有竹因。是名之。夏松般柏

周栗。三代之社皆植木。竹亦有貞有節。合刑戮之

律者乎。

苑園門

泉水館。在廣島之郭內。太守遊樂之地也。方近五百

步。中有池。又有島。池周圍深廣。波光澄徹。綠荷芳藻

含香吐秀。遊魚浮鳥。競戲群集。玄鶴白鷺。產卵黃鸝

翠禽。結巢鳴嶼之間。奇石巉巖。磊砢下瞰池水。上有

背月亭。棟宇翬飛。金碧交映。複閣長廊。左右拱向。喬松

古檜。煙雲繚繞。也登樓。則西北之連山。在一望之前。

遙原之樹。恰如薺矣。上山。則東南之蒼海。供寸眼之

中。嚴島之山。更誤萍矣。誠隱然一天地而別乾坤也。庭

砌造大焚籠。聚群鳥於其內。俗所謂庭籠者是也。西

北塘上有亭。一望可極千里之眼。背月之北有閑

睡庵。樹林陰翳。幽閑閑寂之境也。東面設花徑。或三

或五。有寒梅之綻臘前矣。有山櫻之開春初。

矣桃之夭々杏之艷々芍藥有綽約牡丹有富貴隱逸之黃菊高傑之紫蘭或海棠之含笑也或水仙之發芳四時之幽賞無一日而不見花也加之藥圃之良也備急救危之使用而民人實所依賴也且又納夏天之涼於池邊冬日之雪於窓間有浴室有茶店有釣臺有吟榻有略約有板橋又別設茶寮倭俗所謂數奇屋也按數奇者不遇之義也本邦之茶寮雖高貴之人以茅茨蓋屋以竹木爲椽曲木爲爐邊之柱蒲席爲屋背之飾坐纔容三五人壁懸古畫瓶插奇花瀨戶之茶器倭邦作大蓋製磁器者所々多尾州瀨戶之產殊爲佳矣古所造之茶器價到五百金者間有之是又近世之流風也高麗之茗碗若碗倭邦製造者所々多尾州瀨戶之產殊爲佳矣古所造之茶器價到五百金者間有之是又近世之流風也然出高麗織部之茶杓織部正氏古田諱重能始仕于豐臣秀吉者爲珍茶杓公天性嗜茶嘗暇時于宗易探數奇之秘奧曾採竹片製茶茶笥者茶寮之一具而不起是號茶杓茶人甚重之高山之茶笥可無之故所々製之其中高山某得其巧好事者爲其用野酌山羞纔喫白茶爲足矣衣用鹿絹袴用兔布如剃髮之人則十德八德爲異體之粧是皆學隱者之事以爲不遇世之體者也宜哉有數奇之名也曾始自周光紹鷗到千宗易古織部益熾矣今此數奇屋并庭前粧者利休之高弟上田宗箇之所造也宗箇者曾仕豐臣秀吉公一晚

年遊事我藝牧少壯有勇武之名曾難波之役戰櫻井而獲首級是世人之美談也晚年好茶作數奇會故今太守令彼造之自茶寮之窓間遠望己斐山山上本無樹宗箇植松以爲眺望之佳觀國人到今稱宗箇松太守政務之暇屢來遊以與衆同樂之地也

養鶴坊 郭外之河邊使養鷹鶴鶴隼是曰鷹匠町周圍五百步廻以鷹坊坊內以或壁或板遮隔之橫施架每坊繫鷹一連或有取鶴者又抓鷹者又有宜鶴宜鷹者各擇其能以使取之凡倭邦高貴所嗜之物馬與鷹也大概以紅條繫鷹其鷹初取鶴則改紅爲紫倭俗貴紫色諸物之褒寵旌異悉用紫色一故到鷹亦然之也中爲複閣太守政務之暇來遊試放鷹之藝矣倭俗謂鷹師曰鷹匠也

花畝 倭俗謁菜畝曰畝故種花園又稱花畝在本地之池西花木交枝芳草含笑矣傍有菜畝一種青嫩菜越諸葛之術早韭晚菰勝周顒之園日新館去今府治一里許新山之東南也其地後山前水今世子頃相其攸以爲遊樂之處名曰日新館其經營之巧不勞民力茅茨以蓋屋松竹以爲

椽其淡薄之風天然之趣非世人之所窺識也世子之盛德增添日新之光輝者是所期望也而其山中之所近視也其境八曰日新館曰醉翁亭曰無量峯曰櫻花峯曰瀑布泉曰岩清水曰竹細路曰馳馬場是也就中醉翁亭上之眺望不可勝言亭中之板壁書歐陽氏醉翁亭之記因名曰醉翁亭嗚呼歐陽氏千歲之後逢此奇遇再添醉顏之色者乎若有靈魂則須合笑於九原矣其所遠望也其景八曰嚴島春霞曰廣城夕照曰洪河歸帆曰新山秋月曰古寺晚鐘曰山下落鴈曰武田殘雪曰大芝暮雨是也四時之變態朝昏之風景千變萬化非筆舌之所及也思非長棲之人則難識其意味者乎世子講武之暇與衆偕營之與衆同樂之則其結構之巧有待日新月盛之成功而悠久之期須約山礪河帶之佳盟

山川門

江波山 屬佐東郡今府治廣島城南之步下船舶所輻湊而藝州四通之津要也然潮盈則大舡浮浪直到山岸潮虛則小艇亦粘泥不能行是則藝陽天府之國而爲天造之要害者也周防出雲石見伯耆備

後亦通自此處矣和歌集載長門島卽今之江波也歌枕曰君代波長門之島之小松原神左備氏又若葉左須磨氏萬葉集曰我命遠長門島乃小松原幾代遠經以加神左備和多留此兩首相傳天平八年遣新羅使等繫船於此浦所詠也自古遣唐使遣新羅使船使安藝國船工造之到今所造大船者多四方海賈來買之矣

氏名島 在江波之海面屬安南郡往來船舶之泊所也上世所謂我島卽今之氏名也氏與我字形相似誤我作氏乎一說佐西郡海上有島名我島是則古所謂我島也今西州往來之船直過蒲刈之海路者不繫我島經隱渡而赴西島者必繫船於此島以待順風古歌曰和多津海之於幾登古呂古曾字幾多禮登古留我志麻曾古禮波和賀島云々未知何人之所詠也

仁保島 屬安南郡與氏名島相比漁人在海濱農家在山門秋米二千石零島周圍二里許四方有七浦

肱山 在今府治東屬安南郡其山高峙臨海地接江波山是亦廣城之一藩鎮也初毛利輝元欲移吉

田城於此山有故而不果遂築今廣島之地熟思吾邦者神靈之所產而又稱君子國茲藝陽者西州之津而國多文雅之士安宅廣居待曲肱之人者乎

國府山 此山去廣島一里屬安南郡古藝州府在子斯故曰國府山也

似島 在安南郡海中古稱二島後世島之形容以似富士山改字號似島二與似倭語相同故然也一說島形狀似側箕故號箕島云々未之孰是

鐵輪島 在安南郡海中倭俗鐵輪爲坐堅施三脚小鐵柱脚頭小屈之以置爐中安釜或鑄以煮物是曰鐵輪是島形容似是故曰鐵輪島元赭赤地也近世種松子今蕃茂成林矣

蒲刈 屬安南郡而西海船路之津湊也三韓入貢之船每繫此岸以待順風

新山 在安南郡去廣島一里許其山連東南松杉成林到秋末松葦黃傘葦生松間其馨香勝他山之所產按本朝文粹十二卷都良香富士山記曰富士山東麓有小山俗謂之新山元平地也延曆二十一

年三月雲霧晦冥不分晝夜歷十日餘而一旦雲散此山勃起蓋鬼神之所造乎此山偶同名此亦神之所造未可知

甘津水 新山麓有清泉風味爽口汲之煮茶則香氣發今栗柱焚之禁漫用

倉橋島 在安南郡海中周廻七里餘民家數百宇農商雜居

江田島 屬安南郡周廻七里田園多

矢賀山 屬南安郡南連國府山松檜繁茂矣福島臣可兒才藏之墓在此山麓矣

牧場 一號情島屬加茂郡一號生島屬豐田間兩島之間相去海面九里餘其島有山有溪山下平曠自春至秋百草繁茂群馬畜養其間生育蕃息每歲出良駒國人實有賴焉倭俗謂牧養之地直曰牧上古京師八月十六日有駒牽之儀式甲斐穗坂

武藏小野同立野信濃望月皆是諸國牧養御馬之地而仲秋牽之以獻朝廷矣今悉失其法告朔之禮已絕饌羊亦知其名者鮮矣嗚呼衰哉

尾長山 在今府治東北屬佐東郡東照宮并菅神祠

明星院石泉亭在此山

圓地 在佐東郡大芝之塘下一周圍二百步中多菱莢

鴈鴨之類太守弋獵於此擊石舉聲則鴈鴨驚起

太守親放海東青鶻擒之以爲樂矣

八木山 屬佐東郡去今府治三里嶺上松杉交枝

山間民家雜居

溫井 在佐東郡村中阡陌交通民舍相連每歲暮春桃

花之爛熳殆可謂小桃源乎

夜須 在佐東郡大河挾此村五月微雨之節螢火之

散乱如衆星之墜地也

己斐山 在今府治之西佐西郡矣

己斐葬地 古葬人厚棺槨猶恐速朽故以石灰

炭末埋槨傍以避水濕中世以來佛教盛行于

世愚民信之或火葬或水葬其不仁之甚莫大於

斯也今從流俗令國民火葬于此也

草津 在佐西郡海濱是亦船舶之所輻湊而商賈之

會津也自古領石州濱田之人假此泊於我藝陽

常繫船以使舵工守之矣

登壇必究日本考謂草津曰窟撒子

大竹村 在佐西郡海濱而與周防州脇村相並大竹

村有海無山脇村有山無海古來互以其所有

易所無之物故二村民人薪魚共得其便近世爭

其利互絕交易大竹川在此村外因號大竹村

波牟佐宇原 在佐西郡而隣周防大河流出歷飯

山吉和村而至廣城西郭外以入江波海其行程

十六里餘

十方辻 倭俗道路四通岐曰辻十方辻在佐西郡南

連吉和東北環山縣郡筒賀村西北按石州境比

喜美村南西隣周防境宇佐其山突兀四時常有雪

夏六月之中暫消自山頭臨見北海往來之船舶云

云

二橋溪水 佐西郡宮內村二橋有溪水人飲此水則

立患腹痛重者到死思碗霜礬石之類伏地中乎

大野瀑 在佐西郡大野村

能見島 周圍七里許屬佐西郡農工商並宇連隣船

匠造船賣四方

大崎島 周圍七里屬豐田郡年々出田租收海賦

瀬戸田島 屬豐田郡西州來往之船舶多繫焉此處

多船匠造大船小艇以賣于四方

廣瀑 賀茂郡廣村有瀑西條黑瀬川流爲二級瀑經

廣村而入于海

穴村 佐西郡中自穴村到吉木村自出本地轉通高田郡多治井村其間嵯峨屈曲相比大行劔閣之險歷此地通出雲石見二州

狩龍山 在山縣郡其山至高也山路峻峻難攀躋嶺上雖夏日雪無消曾傳自西州赴高麗者必認斯山以爲海路之標準云々山下多生蕨土人採其根以造蕨粉其色甚潔白勝和州芳野葛粉

寒曳山 在山縣郡大朝村

觀音ノ瀑 在山縣郡都志見村

龍頭ノ瀑 在山縣郡筒加村其形如龍頭之臨溪澗其瀑有兩條一稱女瀑一稱男瀑其巖石嵯峨屈曲非筆舌之所及也相傳西海道中第一之瀑泉也

根ノ谷 在安北郡從此谷通雲州日本紀曰使素蓋鳥尊逐根國云々按根國者今雲州大社乎此谷通彼因名根谷者乎根谷有釋自休所居之遺址

蓋鳥尊 逐根國云々按根國者今雲州大社乎此谷通彼因名根谷者乎根谷有釋自休所居之遺址

通彼因名根谷者乎根谷有釋自休所居之遺址

日本紀二十五卷載 孝德天皇白雉元年冬十月遣倭漢直縣白髮部連鏡難波吉士胡床於安藝國使造遣百濟船二雙續日本紀首卷載 文武天皇二年九月

十三日壬午令安藝長門二國獻金青綠青同五卷載和銅三年秋七月備後安藝等其外二十一箇國始令織綾錦同六卷載和銅六年夏四月戊寅制諸國庸錦丁五兩但安藝國絲丁二兩十一卷載天平六年正月癸亥朔安藝但馬等國獻木連理同十六卷載天平十七年十月丁巳令安藝國造船二艘同載天平勝寶七年六月安藝國獻白鳥續日本後紀三十三卷載寶龜五年六月辛巳以正四位下佐伯宿禰今毛人爲遣唐大使正五位上大伴宿禰益立從五位下藤原朝臣鷹取爲副使判官錄事各四人造船使船四隻於安藝國同九年十一月庚申造船二艘於安藝國爲遣唐使也三代實錄三十三卷載貞觀十六年冬十月十日己未免安藝國遠管驛之當年調

延喜式二十四卷載凡貢夏調絲安藝五百絢七月三十日以前訥訖又輪絹

延喜式二十四卷載安藝國調兩面五疋一寬綾十七疋二窠綾三窠綾各四疋薔薇綾三疋白絹十疋帛四百疋絳絲四十絢綠絲十絢橡絲三十絢練絲二百五十絢絲五百絢夏調自餘輪絹絲鹽庸白木韓櫃十合自餘輪絲鹽中男作物紙木綿紅花茜黑葛胡麻油脯比志古鱒同二十

日本紀二十五卷載 孝德天皇白雉元年冬十月遣倭漢直縣白髮部連鏡難波吉士胡床於安藝國使造遣百濟船二雙續日本紀首卷載 文武天皇二年九月

日本紀二十五卷載 孝德天皇白雉元年冬十月遣倭漢直縣白髮部連鏡難波吉士胡床於安藝國使造遣百濟船二雙續日本紀首卷載 文武天皇二年九月

日本紀二十五卷載 孝德天皇白雉元年冬十月遣倭漢直縣白髮部連鏡難波吉士胡床於安藝國使造遣百濟船二雙續日本紀首卷載 文武天皇二年九月

日本紀二十五卷載 孝德天皇白雉元年冬十月遣倭漢直縣白髮部連鏡難波吉士胡床於安藝國使造遣百濟船二雙續日本紀首卷載 文武天皇二年九月

日本紀二十五卷載 孝德天皇白雉元年冬十月遣倭漢直縣白髮部連鏡難波吉士胡床於安藝國使造遣百濟船二雙續日本紀首卷載 文武天皇二年九月

日本紀二十五卷載 孝德天皇白雉元年冬十月遣倭漢直縣白髮部連鏡難波吉士胡床於安藝國使造遣百濟船二雙續日本紀首卷載 文武天皇二年九月

土產門

卷載安藝國羚羊角四具又曰諸國貢蘇番次第六番安藝國八壺二口各大一升六口各小一升又白絹十二疋絲八百絢木綿二百五十斤油三石四升苦二十五枚櫛子四合鹿皮二十張鹿革廿張

延喜式三十七諸國進年料雜藥部載安藝國卅二種黃連四斤十一兩前胡柴胡白木藍漆菖蒲商陸各六斤獨活牛膝各十八斤桔梗二十一斤黃蘗十斤玄參橐本白頭公夜干各三斤細辛十五斤苦參當歸茜根各十斤石斛四十斤地榆續斷各二斤天門冬十二兩榧子二斤葶藶吳茱萸蜀椒各一斗桃仁麥門冬一升六合五味子三升葶藶子四合白姜蚤二兩

延喜式二十八卷兵部省載諸國健兒安藝國出四十人一同二十八卷諸國進貢之器仗載安藝國甲三領橫刀十口弓二十張征箭二十具胡鑊二十具同諸國驛傳載安藝國驛馬眞良梨葉都宇以上沼田郡佐字鹿木綿以上賀茂郡大山宗山安藝以上安藝郡伴部大町篋暗濃喉管各二十疋云源順倭名鈔所載同之

刀 今府治之輝廣者鍛冶之精者也曾毛利輝元授諱字一號輝廣到今世其業製短刀長刀其莖鑄播磨守輝廣字又有冬廣者同鑄利刀以行于

世矣

鐔 今府治之人法安以銅鐵製刀劍之鐔彼光人法安者能得鍛鍊之妙也到今以法安爲名

藏合 在今府治倭俗鐵器以金銀鍍刻鳥獸或花草是名藏合此工人倣漢南阿蘭陀之製極其細密四方武人使彼飾兵器上矣

竹籠 竹工元嚴島之人而今在府治割竹以編造花籠菜籠篋篋簽篩之類也

銅器 今府治之產名銅蟲者能造銅盆以學高麗佐波里之巧今直以銅蟲盆爲號矣

革具 在府治號越前革屋馬之粧具刀之革袋矛戟之袋篋篋之袋其巧極精妙也

三原屋酒 本住備後州三原其種族在今府治釀酒開大舖其酒倉之大非他州所依之屋裏富榮起家揚名每歲大守獻此酒於東武且又釀忍

多酒藥莫酒覆盆酒諸品

蝦屋酒 在今府治近世釀酒以開墟相比三原屋蠟燭

在府治以漆木蠟製燭也

染色物 倭俗以青藍汁染帛布及木綿曰紺屋今

府治之染家藍青色并梯油色之類其色彩爲宜矣

印章 在今府治刻文字於櫻木板又彫印章於水

牛角其巧尤爲勝印色亦隨所請以製之也

豆腐皮 在今府治凡製豆腐時所浮其湯面之

泡沫以竹串或木槩挑之則隨竹木皺以成房陰

乾以炙食則其皮之磊砢其味之淡薄聊足以助膳

食又足以引酒茶所々製之今此府治者菲薄而

甘脆他方者來求之矣

漆器 在今府治朱漆青漆黃色白色隨其所好以

漆諸物其中稱岡某者爲巧手也

竹器 在今府治以竹作匙又製小刀柄

筆 今府治南郭門外有製筆者能得其巧

鞞 在今府治夫蹴鞠之戲黃帝之所造而兵家者流

輕捷疾足之術以斯爲習練之法矣

刀鞘 今府治多鞘工大凡厚朴樹取皮日乾以刀削

之定其寸法自頭至尾以刀二割之其兩片內

互刻刀形再合之以牛膠貼之漆其表爲刀

室其中有二人殊爲勝使彼造之則室中不鳴

動且誤雖落水中水濕不入鞘內其鞘口之巧

精密之至也近境之良賤多使此工製之矣

駕輿 今府治作竹輿者多矣俗曰乘物

蹈皮 今府治造皮襪者極精其居處曰革屋町倭俗

謂皮襪曰蹈皮其名相當者乎

鐵具 今府治又草津之人家有治工鑄釜罐鼎鑑之

類也佐西郡二十日市治工山田某亦作諸鐵具

陶器 今府治之竹鼻作大窟燒屋瓦矣

絲具 今府治多女工絲製之具無不有也

黃楊櫛 今府治木匠以黃楊木製櫛其細密非他邦

之所及也

祭器 倭俗祭佛之具香爐花瓶鐃鈸磬鐘之類總稱佛

具今府治之工人多製之也

柄卷 倭邦纏刀劍之柄以革或絲惡其緩以好

其緊今府治之工皆極其精就中稱阿波者爲

上工也

馬鞍 今府治東條流半兵衛某所造之鞍堅剛而雖

行千里其馬不痛矣始平貞盛之裔有伊勢貞孝

者其先貞繼任伊勢守爾來以伊勢爲稱號世

仕室町家爲執事之一員又兼勢州之任伊勢守

貞繼嘗師事大坪道禪而受鞍工之業最得其妙

矣今稱伊勢因幡者亦彼之類葉也彼等之所刻名

曰作鞍作鞍作鐙其形摸亦異于他矣凡俗諺造蒲席馬鞍舞面總曰打故伊勢因幡亦以鞍打一稱其餘派東條平尾相並稱巧手矣

弓

今府治工人岡越前某作大弓半弓短矢長箭凡造

弓之法以苦竹之大者直破之其內取兩片之直者存其皮削其裏以牛膠挾波世樹於兩片之間以爲心採之以作弓其外或五所或七所以枯藤蔓條緊卷之令不至破裂施弦以射之蓋苦竹性軟柔波世樹剛直其剛柔相須以爲一張一弛之用而得飛箭之便今越前某得巧手之名箭亦然也故近境武人來索之京師清水坂西建仁寺南有入家百餘字其種族不僧不俗非士非農半雜頭髮常帶大刀此徒皆業弓箭之巧本邦四方之用多資于此弓弦亦然也名曰弦指其家居在清水坂又號坂者舊記所載之犬神人者今弦指也未知然否京師六月祇園祭祀之會神輿巡遊之日此弦指老少共著甲冑負胞衣胞衣者倭俗所謂保呂也武人赴戰場時鐵甲背上負之以竹造圓籠蒙以絹或白或紅也是旌旗之屬而所以飾武威驚心目也進前驅之列其內有六人之隊長名曰六人衆甚振勇猛以驚兒女今越前某亦彼弦指徒也又近世東山蓮華王院堂上矢數之

日松井三河某三河某者知蓮華王院之事者也率其徒自侍梁側以

試飛箭之通塞是稱堂見者蓮華王院俗號爲三十三間會平忠盛奉白河帝詔建之東西若干間

南北三十三間大凡六尺三寸爲一間六十三間爲

一町此吾邦之量法也試射者就堂背之南而北面

跪坐以持滿發矢高者中簷牙卑者流三板斜者

飛左右其直透者爲善或十發七八善者有焉或十

發四五善者有焉凡自朝至暮不有間斷其所用

弓之強弱矢之大小由其人之力也列國之士卒志

射者登斯堂必試己能否是曰矢數院僧爲籍

以記其善射者之姓名郡里是又近世士林之流風也

弦在今府治阿波某製弓弦京師坂者也

矢在今府治次左衛門某作矢得其名也

鶴隼藝州所々高山到秋末使人上嶺頭張網於

樹間置罔於其間鶴隼逐媒鳥以繫其網名之

曰網懸其所取者多々其內擇其能者以養之近

世偶有得蒼鷹之雄是曰兄鷹其雌是曰弟鷹

凡鷹之能在雌故愛之勝雄鷹矣

麻苧所々出以此織布又結網

茶所々出雖非菟道之上品又勝桐尾楨尾之龜

茶

巨竹 所々有之爲椽爲柱又代屋瓦或作花筒
春末生筍風味爲尤佳也

銀杏子 所々出銀杏一名鴨脚倭俗曰伊知也宇木其
實到秋熟矣燒食之又合羹亦可也

橘橙柚柑 所々出凡橘類在海濱者味甜俗傳海風
帶潮氣觸此風則柑橘甘熟矣橘之善者肥後之八
代豐後之臼杵紀伊之和歌山是人口之所稱而皆沿
海之州也所傳亦然乎駿河甲斐之所產亦佳也東武
至秋末春初有黃橘其外皮有澤其內房多津皆
出自三州之蓄藏矣倭俗謂黃柑曰金柑謂橙
曰大大又有二種曰九年母形類橙謂黃橘
曰蜜柑橘類以蜜柑爲上品其外加武須又溫州
橘或花柚或佛手柑之類所々產者不_レ及蜜柑之佳
味

西條柿 在賀茂郡秋初取之剝皮陰乾爲白柿
到冬初外皮霜浮內肉味熟則爲佳菓之第一味大
和之生柿美濃之熟柿非_レ所_レ及也

竹原鹽 近世賀茂郡之小吏考潮沙之盈虛就海濱
相其攸教居民燒鹽凡倭邦鹽竈之多者南紀之

雜賀西蜀之赤穗千賀之鹽竈田子之浦邊人口之所

稱也今此地之鹽竈十倍于他鄉也且鹽色之鮮白
堪愛又宜用四方之商船輻湊而爭求之再燒者稱

燒鹽以供賓客助膳味

登壇必究謂竹原曰他加垂刺

土器 賀茂郡西條鄉作陶器或燈盞或酒器隨用在

矣

皮鞋 出賀茂郡西條小民農桑之暇以竹籜造鞋

以革布鞋底近世謂之世喜多行濕地一步庭

園又可也

鰯魚 ナヨシ 安南郡氏名嶋邊佐東郡江場海邊多取之其

小者曰伊奈又曰須波志里又曰名吉又曰保

羅又曰伊勢鯉此魚隨成長而易其名且稱名

吉故本邦冠婚賀慶之饗具必用此魚其形小者隨

海潮噉嚼而游泳于水上或網之或釣之一時得

數百喉膾之則近江之鮒山城之鯉亦不足望之

鮮藏者亦可也

海苔 出安南郡仁保嶋之海濱潮乾則採之或生用

之又陰乾送遠方也

新山松茸 生安南郡新山倭俗以松茸爲山珍風

味馨香可愛又堪用也

海參^{ナマコ} 倭俗所謂奈麻古也安南郡隱渡之漁人多取之

去其腸入釜內一沸以出之候其冷以木櫛貫之日乾以爲脯是稱伊利古其腸醃之以號古能和多腸內之子別造醃是稱古之子海參四時雖常有自秋末至春初味爲勝矣生則茹而切之加生薑以醋食之大嚼者恰如喫麵子矣煮亦可也古能和多之行于世也凡良賤之膳食無不用之參州之佐久島相州之本目其製造勝于他產世人以比熊掌猩唇今隱渡之所造亦足以爲佳矣按古來以本草綱目所載之土肉爲奈麻古余思不然明謝肇淛之五雜俎所謂海參是也云海參遼東海濱有之其性溫補足敵人參故名海參又其形似人勢因稱海男子以與東海夫人相配云云以此併按則其性味形狀爲奈麻古也必矣伊利古者煮以食之剉又用之其形之柔脆易消故倭俗病人之膳食必用之宜哉有海參之名也又慶賀之饗禮必與乾石決明同和羹用之

小鰯醃^{ヒシコ} 鰯倭俗訓伊和志中華之書未見下鰯之爲

伊和志者也其爲物也雖下品之食高貴之人亦間用之其小者取之以爲醃名稱伊和志比志古

攝州尼崎出者殊爲勝今安南郡隱渡之製亦可也宜哉藝州之小鰯醃被載于延喜式也

牡蠣 在安南郡海田其色白其味甘出于佐西郡草

津海亦可也倭俗以牡蠣爲石花文選所載海賦有石華卽牡蠣也

鯛 所々海有之安南郡蒲刈特多潮盈則張網以一切

取之名曰立切倭俗張網曰立矣按源順倭名鈔所載崔禹錫食經曰鯛^{都條切倭名太比}味甘冷無毒貌似鯽

而紅鰭者也又云龍魚與鯛相似而灰色倭名久呂太

比又按鬼谷子三車一覽有平魚其形似鯛倭俗謂鯛曰御比良平與比良倭俗相同彼此符合矣朝

鮮人謂之掉尾石決明 藝州海中古無石決明自他邦求之放隱

渡今蕃息以足國用矣白楊梅實^{ヤナギモノ} 凡楊梅實紫色而形小也出于安南郡氏名

島者其色皎白而有磊砢其味美甘而多津液爲菓實之上品也^{五雜俎云楊梅以吳興太子灣者爲佳紫黑者桑椹入口甘而不酸又有二種白色者名爲水精梅}

梅云々 鳴子 安南郡蒲刈之漁人取目張魚之遺子於海巖之際以醃之其色或青黃或紫黑食之則齒牙之間有

聲故名曰鳴子。每歲磁器盛之充方物。以獻東武。矣。又海濱有楊堪。作楊枝。倭俗以楊作小槓去齒牙之垢名曰楊枝

又有葦其幹可作杖

箭幹竹。出安南郡海上竹島。矢人取之造箭兵器之內特所爲用也

船。安南郡倉橋嶋多船匠。作巨船小艇。賣之

大山刀。安南郡瀨野村大山之麓有鍛冶。製刀世曰

大山宇治。是也倭俗鑄刀曰宇津。宇津字知倭語相同

菰。出佐東郡。蕪菁根其大如毬子。其甘似蜜。作羹

食之與江州兵主之菜根膽吹之蘿蔔相比。又產高

田郡吉田。佐東菰與吉田蕪互競形味。共令悅

人口也

祇園坊柿。佐東郡祇園社僧接柿枝。以至繁榮。其

實大恰如小瓜子。其味苦澁而不可生用。秋初採

之。剝取其皮。以絲繫蒂高懸屋檐內。陰乾及其

熟。食之則雖蔗糖蜂蜜。非所及也。近世不稱柿

名。直呼曰祇園坊。其柿形與社僧之圓頂偶合。是

知其名之不妥誕也。聊堪發胡盧矣

夜須川鱸魚。川屬佐東郡。春初產鱸。先他之所產

矣。其生鮮堪食。鮮藏者亦可也。大凡藝國多河。其河魚

不遑枚舉

葛藤箱。佐東郡夜須之人以藤製筐。俗曰津々

羅。或納衣服。又入雜具矣

大芝土筆。中華書未見其名。其形似筆。故名之。春

末生矣。湯燂之。合醬食。又作羹。可也。大芝屬佐東

郡

可部鱸魚。安北郡可部之漁人自春末到秋初。設

梁或結網。又養鸕鷀。取之。鰻鱺魚鱸魚亦多取之

味勝他之所。有以其流水之清潔也。凡鴈鴨鶉蒿

雀之類在斯地者。其風味爲佳絕。是亦水草之所

使爲也。安藝國設梁取鱸其處不爲不多矣安北郡佐西郡并山縣郡中十六箇所有魚梁

黑石。出自安北郡可部山。其色至黑。或造硯。又爲

黑碁子

桔梗。在安北郡處々之山中原野

柴胡。在安北郡可部之河邊

栗實。高田郡三田村出者。其形極大。其味大甜。生用之

又蒸食之。燒亦可也。山縣郡山中出之。凡山縣郡山中

有二十五村。其地所出之栗。極小。土人號柴栗。陰

乾去皮者。是稱加治栗

雲母。出佐西郡。能見島。安南郡似島。或山中。其外皮倭

俗所謂雲母銀者是也。以此裁作小方片，中心穿小孔，置香爐灰上，以沈香置銀上，則火氣通。自小孔香氣芬發。

櫻木 凡櫻木性堅剛，條理細緻，鐫印章或書畫，不虧不剝。堪用之本邦，則嗣氏之刊書大概用此木。或作槌，又作盤，大半出自佐西郡水內山也。

巨材 出佐西郡水內山，梗楠、櫟、樟、檜、杉、雜木，隨用有之。則國中之便利而四方之所資用也。日本紀載皇極元年九月，天皇詔群臣曰：「起是月，限十二月以來，欲營室可於國々取殿屋材，然東限遠江，西限安藝，發造宮云々。」以此觀之，則自古出巨材者必矣。

山縣郡土人亦以材木爲浮筏，乘之到廣島城下賣之，其水程十六里許。

水精 佐西郡大野山同郡能見嶋、安南郡似嶋，其產水精。凡水精之所出，多是巖石之山嶽，土人以斧鑿穿破石巖，其下有水精，或多或少，水精之所，在上

下左右障土氣，有隔卽是香爐中之所。用倭俗所謂石銀者是也。凡藝州之水精，其形多是六角防州之所產，悉八角也。其土氣之所使，然乎是未可解。大明一統志倭邦土產載：水精，宜哉外國之人稱之也。

鱈鱓 佐西郡水內安北郡，可部之漁人等造之家々。

養鳥鬼，或設梁或結網以取鱈魚，則茹而切之，肉與腸交截，以鹽藏者，名曰切字留賀，專用其子者，名曰子字留賀。中華所謂鱈鱓是也。所造之此地之所出，風味爲勝，每歲磁器盛之獻東武矣。大野蛭，佐西郡大野海上取之，煮食之，或以竹串貫之，陰乾贈他鄉充食物。

諸口紙 佐西郡山縣郡居民多製之，世稱廣島紙者，是也。

片口紙 同上，其色潔，其形小而包片，戔又入懷中，以供雜用。世稱半紙者是也。

紙 佐西郡菅澤出紙，其色潔而薄，似美濃之所製。倭俗材小者曰桁，久禮出，自佐西郡水內山，以此製木箱桶器之類，玄慧記所謂安藝桁蓋謂此乎。

覆盆子 出佐西郡能見嶋，土人取之賣酒店，酒家漬此於酒中，以爲覆盆子酒，其味大甜，楊梅實亦多出，自此嶋中。

曾木 出佐西郡二十日市，倭邦檜木或槲樹或椿木，杉木以鋸截之，尺餘，再以木槌加片刀之上，薄擘之，以爲小片，而覆屋上者，稱曾木，又號久禮。

古藝州多巨材，切之充棟梁之用，今掘其根，祇之。

在地中其大近三十圍者多矣以此作會木山中小民或牛馬或筏船隨其地方之便稱載會木以來二十日市以賣之藝州之人稱曰二十日市會木薪木并燒炭凡藝州多山所々伐薪又燒炭稱載大船以賣于攝州大坂商家京師四民之厨料多用之是皆出自佐西郡中之山間

黃連 出佐西郡吉和村

高良香 出佐西郡處々山中

枋木 出自山縣郡本草綱目所載之厚朴也倭俗曰枋木其姓堅硬又避濕氣故倭邦刀劍之鞘悉用之京師善四郎之秤箱亦是也

木器 山縣郡山中木匠以樟木造盆或椀以致四方矣漆之便難用

蕨索 山縣郡山中農民到秋掘蕨根以槌擣之取其心水飛以爲蕨粉以其皮絢索名曰蕨索其形堅剛而堪水濕其色淡黑而不鄙野用之或縛牆或纏椽又合作帆綱又編代簾箔其所爲用幾許不及枚舉矣

蕨粉 出山縣郡蕨根洗淨以槌碎之水浸一夜漉其渣脚以其汁器盛水飛則其白汁凝滯如葛粉

陰乾致遠方水鍊作餅名曰蕨餅請雨鳥 在山縣郡山中俗稱下米古比鳥其形如雀其毛如火焰之赤性好水然臨水則吾形映水如火自懼之不得飲天欲陰雨則仰天飛鳴纔喫其雨水以爲足故山中人占此鳥聲以爲雨兆蓋聞商羊爲雨兆則非獨斯物爲然耳

蜂蜜 山縣郡山中處々出

和佐尾 其形似生姜其味如白芥磨加魚膾又和鳥羹中華之書未見其名恐本草綱目所載山葵姜之類乎磨入蕎麥麵亦可也京師之所用多出山縣郡木坂村云々

忍冬酒 山縣郡溝口某近世釀之開大舖賣四方風味爲佳也

棒實 在山縣郡山中秋末採之盛筐充方物五倍子 山縣郡并高田郡山中處々出矣五倍子倭訓富志

二王刀 山縣郡石井村有治工二王者相傳古二王之末也到今鑄刀鎗

熊膽 凡熊膽僞者多矣殆如買茯神以得老芋今山縣郡山中之獵人以鳥銃殺生熊則取其膽陰乾爲肺充藥劑之用矣

石茸^{イナダケ} 產^ニ于山縣郡山中所々^ニ也倭俗好^レ食^ニ菌蕈^ニ其

生^ニ於岩石之間一名曰石茸尤賞^ニ之生用^レ之或采曝
餽^レ遠

銅鐵 凡倭邦產^ニ銅鐵^ニ之山所々不^レ爲^レ不^レ多矣但山

縣郡之產也其性堅剛最爲^レ堪^レ用銅諸品用^レ之鐵亦
然也就^レ中宜^ニ甲冑之具^ニ宜^ニ鳥銃之筒^ニ或刀劍或矛

盾又農器之所^レ用如^ニ鋤耨銓艾^ニ也木匠之所^レ用如^ニ

斧斤鋸錐^ニ也鑪錫之於^ニ玉人^ニ也針刀之於^ニ女工^ニ也

皆鐵之所^レ關而大概出^ニ於此州之山^ニ以資^ニ四方之

用^ニ針或缺尤爲^レ佳也

鐵處々雖出
山縣郡殊多

漆 山縣郡太田庄山中多^ニ漆木^ニ土人以^ニ小刀一段々

剝^ニ其樹皮五分許而歷^ニ日數^ニ則其刀痕生^レ漆卽是

倭邦所^レ用之漆也

狸皮并鹿皮 高田郡或山縣郡山中出^レ之狸皮能避^ニ風

寒^ニ海客買^レ之賣^ニ韓之商客^ニ韓人以^レ之製^ニ裘鹿皮

筆工求^レ之取^ニ其毛^ニ以結^ニ筆

鳥銃 高田郡吉田村居民以^ニ鐵製^ニ鳥銃之鐵筒^ニ

黑皮葦 高田郡山中或佐西郡飯山秋末出^レ之生用^レ之

陰乾食^レ之亦可也

河苔 倭俗海苔總曰^ニ苔^ニ凡海中生^レ苔處々出^レ之河水

生^レ苔者稀矣高田郡吉田川冬月生^レ苔形狀風味似^ニ

海苔^ニ柔脆堪^レ食又生^ニ河蜷^ニ倭俗訓^ニ爾奈^ニ其形小如

螺其味淡似^ニ蜆^ニ吉田村多治井生^レ芹其根白如^ニ緒風

味勝^ニ他產^ニ民間傳言石端三物吉田之名產而毛利元

就知^レ州之日以^ニ此三物^ニ獻^ニ朝廷^ニ云爾

苔倭訓古計
或訓^ニ農里^ニ

寺觀門

明星院 在^ニ今府治東北^ニ矣高野山金剛峯寺之派而安

藝州中密宗第一練若也山名^ニ高月^ニ寺號^ニ大日^ニ院

稱^ニ明星^ニ蓋象^ニ三光^ニ也寺僧數口祈^ニ國守之壽福^ニ

寺中有^ニ觀音堂^ニ相傳始在^ニ瀨野山中^ニ大
同年中之所^レ建者也上梁文今猶存云々

松榮寺 在^ニ今府治東北^ニ矣天台宗門而爲^ニ東照宮之

社僧^ニ

國泰寺 在^ニ今府治東南^ニ矣曾毛利輝元之所^ニ剏建^ニ也

豐臣秀吉公薨號^ニ國泰院^ニ輝元者秀吉公恩顧之人也

故爲^レ之建^ニ一字一名^ニ國泰寺^ニ使^ニ京師五山第四位惠

日山東福寺中退耕庵主僧瑤甫諱惠瓊者住^ニ此寺^ニ

世人稱^ニ瓊長老^ニ又號^ニ安國寺^ニ門前有^ニ川架^ニ板梁^ニ

土人名曰^ニ西堂橋^ニ惠瓊爲^ニ西堂^ニ時所^レ令^レ造也此僧

爲^ニ毛利輝元所^レ愛領^ニ二萬石之采地^ニ甚極^ニ奢侈^ニ

入則兵士擁_二左右_一出則刀鎗列_二前後_一強僭之餘與_二奸臣石田三成_一自率_二軍士_一會_二關原之戰場_一石田氏不_レ日而潰矣長老潛逃_二戰場_一雖_レ經_二過大原志津原鞍馬_一所_レ到無_レ地_レ容_レ足終被_二梟首_一京師_一毛利家亦減_二七箇國_一纔爲_二兩國守_一自_二古妖僧之亂_一世誣_レ民其害不_レ可_二勝數_一矣如_二瓊長老_一特尤甚者也宜哉果遭_二巨害_一也今爲_二曹洞宗_一今太守先君之墳墓存_二于此_一賜_二采地三百石_一令_二寺僧_一掌_二香燈_一上也

正清院 在_二今府治_一洛陽紫雲山金戒光明寺之法流今太守爲_二母堂_一賜_二年俸_一也

禪林寺 在_二今府治_一關山之派而屬_二妙心寺花園之一種_一

興禪寺 在_二今府治_一屬_二京師妙心寺_一而嗣_二關山慧玄之法流_一

金龍寺 在_二今府治_一臨濟宗門僧數口住焉屬_二正法山妙心寺_一

興德寺 在_二今府治_一濟家僧住焉屬_二京師妙心寺_一妙慶院 在_二今府治_一專念宗也福島正則母稱_二妙慶院_一其塔所也

慈仙寺 在_二今府治_一專念宗而其法流屬_二西山派_一卽京

師東山禪林寺之末流也淨國寺清住寺亦同

誓願寺 在_二今府治_一專念宗而深草派也至_レ今一遍上人廻_二諸國_一時每寓_二此寺_一

圓龍寺 在_二府治_一日蓮宗也長久寺妙風寺妙法寺亦同

光明院 在_二今府治_一白鳥_一密宗而屬_二明星院_一

佛護寺 在_二今府治_一西本願寺之派而親鸞之徒也

妙眞寺 在_二今府治_一東本願寺之門徒所_二廩建_一也

石泉亭 在_二今府治_一東長尾山東麓禪林寺之派也僧虛

檀者新營_レ之四際巖壁屹立澗水廻_二其間_一因號_二石泉亭_一亭上一望極_二滄海之渺茫_一上有_二通玄堂_一安_二觀音大士之像_一

洞春寺 始筑前州聖福寺湖心禪師之弟子嘯岳諱虎

關_二斯基_一而傳_二中峯之派_一嘯岳之嗣法筠溪諱輟得_二毛利宗瑞之寵遇_一宗瑞移_二住長州萩城_一之日此寺亦

遷_二彼城中_一今廣島城西有_二洞春寺之基址_一

不動院 舊名安國寺在_二安南郡新山下_一東福寺之僧惠

瓊始開_二此墓_一惠瓊住_二斯寺_一依_二之世人_一呼_二瓊長老稱_二安國寺_一到_レ今有_二圓爾之像_一法堂山門今尙存矣其所_レ用_レ之巨材悉用_二朝鮮木_一

其四角檐牙鐫_二朝鮮木文祿四年七字_一山中有_二鳥形類_一鸚鵡_一聲似_二伯勞_一是亦瓊長老自_二朝鮮_一携來放_二

雌雄於此山。其所蕃息也。民間名曰韓鳥。以下其種自三韓來也。今太守變禪門令爲密宗。改名不動院。此地後山前水景象可愛矣。

道隆寺 在安南郡國府山上。山名桑山。寺號道隆。

堂內安藥師佛之尊像。古有七堂之伽藍。今悉廢壞。礎石間存道隆字。相傳藤道隆公所建也。公者天兒屋根命之苗裔。而大織冠鎌足之末流攝政太政大臣兼家之子。而御堂關白道長之兄也。人臣之最誰有比肩者哉。然鎌足創興福寺。道隆造藥師像。道長作法成寺。道家建東福寺。使此等之大臣信儒如信胡佛。則儒風之興於我國也如指掌乎。可嘆而堪慨矣。今此寺亦有何故而及此舉乎。

極樂寺 屬佐西郡。安觀音像。山號上不見山。僧傳密宗。

洞雲寺 在佐西郡佐方村。曹洞家僧住。此寺堂後

有高山。庭際有涌泉。門前有松成林。是名鷲森。又有清泉。名金剛水。其源雖小。逢大旱而無乾枯。

海藏寺 在佐西郡草津山上。爲曹洞宗。海岸上一望可極千里之眼。山名久木山。堂前有北條氏直之

墓。想前代北條氏恩顧之人。領此所爲氏直設之乎。

國分寺 在賀茂郡西條鄉。曾聖武天皇天平丁丑九年。日本六十六州。每州令建一國分寺。同己卯十一年。又每州置國分尼寺。寄三年料。以養僧尼。其費不知幾許也。到後世。則淫奔無賴之惡少。難髮染衣。寄身於國分寺。誠爲遁逃之禍窟。嗚呼痛哉。今在賀茂郡西條鄉者。卽是藝州之國分寺也。寺僧相傳曾聖德太子乘甲斐黑駒經過諸刹。到此寺止宿矣。太子何人也。自攝天下之政。而投身於寺院。本朝異教之盛行也。始自太子。其禍遂使諫臣守屋受逆臣之名。然則太子者名教中之罪人乎。

鎌倉寺 賀茂郡瀬野大山之半腹。古有鎌倉寺。今盡廢壞。其基址石壁存什之一矣。

林光菴 在賀茂郡竹原西村。後有高山之嵯峨。前有細路之屈曲。古松大數圍。枝條下垂。蓋地名曰下松。洛東數里之下。松北野之下。松異處同名者乎。曹洞宗之僧住焉。

佛通寺 在豐田郡。愚中周及入唐。登徑山寺。從卽休。受禪法。歸朝。日路歷此州。小早川平春平請周

及建一宇一號曰御許山佛通禪寺有寺院數箇其中號含暉院者尼松岩之所造而爲周及之塔所到今有周及并卽休之像四際山圍水流有瀑布泉高超數丈響聞數里絕勝可愛相傳其景配濃州巨景山永保寺云々門外下馬之籍土肥次郎實平之筆也時代之前後迥異也嗚呼徒然草所謂道風之朗詠乎聊書此正謬傳也一說此山上舊有八幡社矣御許山者八幡山之號也後不改之直以八幡爲鎮地之神以御許山爲佛通寺之山號若然則爲八幡神祠實平設下馬之籍乎本邦之公門神社佛閣設下馬之簡使人於此處下馬徒步以進之

竹林寺 在豐田郡沼田之近境密宗僧住焉有緣起

一卷倭俗寺社來由之記錄總曰緣起其記曰古此山下有女子名三八

千代曾登此山手握巨竹忽有所感而遂娠果生男子長而穎悟異于凡兒携入京師世所稱之小野篁卽八千代之子也此寺亦爲小野篁建之故山曰篁山寺曰竹林云々其文字卑俚不足見之蓋好事者依篁字以假托而言者也今淨土專念之僧住焉

樂音寺 存豐田郡沼田庄奈子羽鄉置丈六藥師像蓋藤原倫實奉勅而建之也密宗之僧數員居焉

米山寺 在豐田郡沼田之近境山號眞露山古土肥次郎實平領此所到今存木像傍有三河守源範賴之像思實平之所設而寺僧合祭者乎塔頭有二坊其內六坊掌實平之香火六坊祭範賴之靈像云々實平之子孫有十七代之木牌土肥氏後號小早川毛利元就三男隆景領此所變毛利氏稱小早川繼實平之遺跡實到隆景十八代也隆景死後號黃梅院秦雲大居士今京師龍寶山大德寺中之黃梅院也隆景歸佛教生前豫爲小像兼祈冥福今之鍊供養者蓋其遺事也凡佛寺之修鍊供養也本朝纔三箇寺也此寺居其一云堂前有鐘樓鐘者隆景自朝鮮齋來物也寺僧爲曹洞宗門矣

栖真寺 在豐田郡山名應海其寺之爲境也峯巒高聳一望極南海之渺茫瀑泉遠落百尺迸石壁之屹立其景象不遑枚舉相傳土肥實平始相攸創建七堂之伽藍安置千手之觀音爾後佛照禪師歸自宋而住洛東慧日山東福寺晚年老衰厭叢林之規務寄跡於此山遷化後法筵久廢殿堂門廡盡

頽壤圓通堂上纔蔽風雨十三重塔婆跡已陳一百餘
坊字名徒存而已今考元享釋書曰釋慧曉讚州人幼
上叡山學台教更衣聽律於泉涌不幾謁爾
公於慧日服勤者數稔矣又泛舶入宋周旋二浙
晚依曇希叟於瑞岩適附商船而歸痛自縊埋學徒
從空閑寂寞之濱者多矣正應五年主東福永仁五
年十二月二十五日化栗棘菴謚佛照禪師云々依
之則佛照禪師之住斯寺也未知其據也

福王寺 在安北郡綾箇谷村釋空海曾登斯山以

山上植木手自刻不動佛之像其後歷年所人不
知之一旦樵夫以斧欲伐此木于時靈光奪眼
樵夫大驚熟視之則佛像全備自茲土人仰之此近
鄰有武人號武田伊豆守尊崇此佛建一宇伽
藍山名金龜寺名福王遠招禪智房爲斯寺之
監事禪智房設一院號事直院又別
置二十二坊其僧交供香燈毛利家亦世々仰之以
斯寺爲安藝國中密宗之僧錄司寺物有盆石號
硬礮釋自休曾登此山題詩曰攀嶮登臨之字
路始知身在梵天宮數聲清磬人間外一箇閑僧法
界中湛水接藍浸碧澗青山擎筆簞虛空偉哉

不動明王境萬像同揚古佛風

興元寺 在高田郡多治井村曾毛利備中守弘元歿後
其子興元嗣之興元之子幸若丸九歲而夭亡依之興
元傳毛利家於弟元就故元就以興元爲父歿後
建一宇伽藍號興元寺今悉廢壞纔存其基址今
尚有興元墓地之存矣蓋多治井者毛利家之采邑而
元就亦產于此矣相傳興元寺者元屬京師東山建
仁寺云々

祠廟門

按三代實錄云貞觀元年春正月二十七日甲申七道諸
神進階及新叙總二百六十七社其中安藝國正五位下
伊都岐島神叙正五位上從五位上速谷神叙從四
位下從五位下多家神叙從五位上同年二月二十
六日壬午安藝國正六位上大麻天神伊都岐島中子天
神水分天神共授從五位下一同五年十月二十九日戊
子安藝國正六位上天磐門別神在屋神并叙從五位
下一同八年十月三日戊寅安藝國從四位下伊都岐島
神速谷神并授從四位上從五位上都彥神授正五
位下正六位上生石神叙從五位上正六位上伊都

岐嶋宗形小專神楹櫨神授正五位下天慶八年十二月二十八日庚申安藝國正六位上風伯神授從五位下延喜式云安藝國佐伯郡一座速谷神社安藝郡一座多家神社云々今考之多不知其處速谷神社與今佐西郡平良村速田大明神郡名相合谷與田倭語相近國諺之誤乎多家神社與今地御前郡名相同恐謂此乎自古安藝國嚴島神爲一宮速谷神爲二宮到今嚴島造營之日地御前速田神社共改造之然則速田爲速谷多家爲地御前也果爲必者乎管見如此

東照宮 在今府治東長尾山下今太守奉源大君之命以建之四時之祭祀肅々然也太守實神君之外孫也宜哉尊崇之也松榮寺者其供僧也

碓明神 在今府治古此處海中之一小島而有小祠往來之旅客沈碓繫船於社邊以祈順風鐵錨或曰碓故稱此社曰碓明神未知祭何神也毛利輝元自移城地於今府治以來日盛月豐故民人埋海爲家居今此社在今府治東北去海半里許也到後世而傳說亦絕則碓之稱號恐有怪之者乎嗚呼陵谷變遷今親見之滄海爲桑田亦非可疑

者也

白神 在今府治東南而四民之所同祭也故老傳言此處元海中之一小島也往來之海客結白紙於樹梢以爲海路之標準爾後好事者置小社白紙白神倭語相同遂稱白神移嚴島神於此社者也

虛鞘明神 在今府治西未知祭何神也

八幡 在今府治東北明星院之門前

洞春寺宮 在今府治西五座者廣島城下四民之所同祭也

天神祠 在今府治西南加子町

觀音堂 在今府治南

嚴島 在佐西郡海中去地御前海上一里許島周圍七里本社六座客人宮五座相比向北與地御前宮遙相對廼廊百八十間自本社之左右出于此通于彼本社前有舞臺右部左部之樂屋在東西寶庫在社後華表在社前相去三町餘有額表書嚴島大明神五字相傳釋空海之筆也背書伊都岐島四字小野道風之筆也客人宮東有荒夷祠恐祭蛭兒命者乎經藏有兩宇一額有轉法輪之三字傳言釋自休之筆也一額有龍宮海藏之四字經堂寶塔

在「山腹」是豐臣秀吉公之所「剋建」也。其外末社小祠不「遑」枚舉。矣。潮盈則社壇之下廻廊之間悉爲「海華表半沒海巨海往」來于其間。四時之變態其風景非「筆頭之所」述盡也。情思本社實天照太神第一御子市杵島命是也。第二瀧津姬命是豐前國宇佐明神是也。今嚴島山頭有「瀧權現祠」恐祭「瀧津姬命」者乎。第三田心姬命者筑前國宗像明神是也。按今阿波國小鳴戶之傍堂浦有「宮號」青宮。又稱「安藝神」。相傳嚴島姬命之妹也。恐田心姬命乎。青宮卽滄海宮乎。今嚴島本社五座未「知」。合「祭何神」也。客人宮并地御前傳言嚴島姬命之御母也。六座未「知」。合「祭何神」也。凡詣「宮嶋」者先祭「客人宮」。依此則所「出」之神而祭「天照太神」者必也。五座與「六座」是配「陰陽」之數。而四時之祭奠肅々然也。社司有「六家」。曰祝師曰大行事曰小行事曰檢校曰橫竹。按橫竹稱號不詳其義此社司之采邑在左西郡橫竹村因號橫竹者乎曰修理行事是也。上卿者六家之外而神職之第一也。又稱「神主代」。俗奉神社之人曰神主言古神職佐伯氏常在「二十日市櫻尾城」隔「海面」一里許或被「風雨障」則臨時之祭禮不能「勤」之然則上卿代「神主」以修「祭祀」因號「代」又藝州國府八幡傍有「稱」田所「者」相傳上世每歲十

一月初申日二月初申日嚴島八幡兩社祭祀之時朝廷之奉幣使來「兩社」十一月與「二月」其間相近勅使厭「往復」遂至「此處」今田所者其末裔也。到「今十一月與「二月」勤奉幣之役」田所者姓藤原而道隆公之庶流也未「知」然否野坂氏田氏稱「兩棚守」。野坂掌本社田氏掌客人或號「社奉行」掌「社米之出納」知「社頭之雜務」者。也。又有「數十巫女八人乙女」一內侍者其長也。古內侍之中有「妓者」平清盛爲「安藝守」時嬖「之」產「女子」號「嚴島內侍腹之子」者是也。凡祭祀之日伶人數輩勤「舞樂」猿樂一座是又作「鼓舞」四時之祭禮其度雖「多就」中自「六月初七」到「十七日」修「大祭會」十七日夜從「地御前宮」社司乘「月浮」船伶人奏「音樂」社司供「案盛」嚴島百八十間之廻廊懸「百八之燈籠」本社之燈舌前之簾。俗稱舞臺突出之處曰舌前商客之樓遊人之艇管絃雜還歌舞狼籍到「天明」則止晝有「大般若經」之法會。又有「劍舞御湯等之儀式」此間商客自「四方」來成「市交易之便民之所」依賴「也」冬十二月作「市」自「肥前國長崎港」海賈齋「蠻舶之奇貨」來絹帛珠玉藥石書畫無不「有」矣。島之四方有「八浦」其內七浦有「小社」凡詣「嚴島」者伴「社司」一兩輩乘「船廻」七浦

每浦祭其小社一或祈福或祈壽是稱島廻一東始自杉浦一歷鷹巢腰小數崎山代濱青苔須也一以終御牀一始登杉浦一喫朝飧一青苔浦喫午飯倭俗謂陰苦此浦產陸盤陰乾細米和飯喫之也一須也浦喫一白餅一御牀浦讀祭文一數崎浦不登其岸一載案盛於木案一自船中一浮海面一社司吹笛一聲于時靈鳥自山上飛下食其案盛祈之者喜以爲神享之也夫本朝者神國也神武自繼天建極已來皇緒不絕王道惟弘是我天神之所授道也嚴島明神者天照太神之御子而德光輝今然空海輩一旦來于此漫設左道說所謂日本之神社本地佛而垂跡神也大權同座故名曰權現一結緣利物故名曰菩薩一時之王公大人國之侯伯刺史信伏不悟遂至令神社佛寺混雜而不疑遂謂嚴島姬命爲沙竭羅龍王之女本社五座與客人宮六座合十一之數牽強附會以爲本地十一面觀音之證嗚呼痛乎自是以來巫祝僧道雜居座主建水精寺一本願營大願寺一供僧數輩各構寺院看掠神地一座費神物其勢却壓倒社家社司愚昧之徒而不知異端離我而難獨立上漫尊僧道終爲彼所蔽譬如藤蘿之纏殺大樹一誰敢不大大息哉社

庫有安德天皇之御衣木笏檜扇大刀弓矢等一又有高倉院之扇扇面有歌數首一相傳卽高倉院之御筆也平清盛親筆之願書一卷并平氏一族三十二人連筆之紺地金泥法華經一部八卷其裝潢之美牙籤之巧非今人所及也有木馬以黃楊木造之其形小而可愛粧具全備其巧之細密可謂奇觀矣其外代代武人所納之甲冑弓劍不可勝數源義家之甲冑平重盛之甲冑源賴朝欲討秦衡之願書一卷鎌倉將軍家賴經所獻之劍并願書久明親王令旨平時賴書尊氏直義其外近世武將之願書御教書不遑枚舉一又釋空海金字法華經一部并古佛梵經與神物混雜島之高峯名彌山浮屠等相比須彌山有求聞持堂修驗之僧或百日或五十日入此堂修虛空藏求聞持之法一本願多門坊監此堂堂中安觀音像寺物有三光石曾自土佐國月浦携來其狀如甜瓜石色紫黑而日月星之形狀有白點一堂外之樹下或岩穴無不置佛祭神是皆浮屠爲攫金之計而欺愚民者也有鐘樓鐘者平重盛之所寄也自古主上仙院嚴島之行幸御幸不爲不多矣承安四年高倉院及建春門院幸嚴島手染御筆寫

願文倭俗神社祈願之文或曰願文又曰願書令普賢寺關白改書之上御製詞特爲卓絕藏人宮內少輔親經奉表賀之一說令右大辨藤俊經作願文云々此兩院之御幸亦因平清盛之執奏也故以彼所愛內侍之家爲皇居三月十六日上皇詣社頭僧正公顯從之題瀧宮拜殿之柱曰雲井與利落來瀧之白絲爾契遠結事會宇禮志幾神主佐伯景弘加階叙從五位上國司藤原有綱叙從四位下被聽昇院之殿上座主尊永叙法眼位同二十九日船將出嚴島時風烈波起故留船於蟻浦少將隆房獻和歌曰立歸留名殘茂蟻之浦奈禮波神茂米具美遠加久留白波土御門內府通親從御幸作宮島御幸記前此承安二年德大寺實定依嚴島之神助遂轉左大將二月上丁侍釋奠獻詩曰豈圖并按杏壇宴衣鉢遂歸四十年永範嘆美之同三年實定爲報賽赴嚴島大納言實國中納言實家亦赴之時被風隔泊高砂浦修理大夫經盛詠歌贈之泊須留湊之風茂計和志幾爾浪高砂之浦波伊加爾曾云々土御門左府三條左大臣時爲中將六條太政大臣弟亦爲中將此三人亦同詣之雨中將於神前舞臺舞大平樂可謂

逸興也古事談第五卷云初平清盛補安藝國司依重任之功被造高野山之大塔清盛手自運石轉材于時異僧忽然而來告云日本靈驗之神社者即伊勢太神宮并蘆州嚴島社也然太神宮至嚴也至重也國王鎮護之神宮而非汝等之可奉事者也汝適爲國司當尊崇嚴島清盛問曰僧爲何人乎答曰與院阿闍梨也言畢不見一日清盛詣嚴島神託巫女曰君須位至從一位官至中太政大臣後藤太能盛在後又告之曰汝亦可爲此國之守果如神之所託也玉葉集釋西行曾將赴蘆州一宮到多賀登美浦所阻風自蓬窓見月影詠歌曰波之音遠心爾加計天阿加須加奈蓬漏月之影遠友登天按一宮即宮島也高富浦在今安南郡蒲刈之東三里許其臨海濱號高富鼻倭俗山海突出之處悉號鼻故此號處多西連海尻古洋東接橫島小松原往來之船必繫此處以待順風懷中鈔題龜島和歌曰阿多奈羅牟人爾波美世志龜島波之奴禮幾奴伊久與茂之加波云々鹿苑院義滿曾赴宮島今川氏作紀行今宮島社悉是平清盛之所建也本社毛利元就改造之考其故元就之家臣和知某饗元就之嫡子隆元於私第

其治具盡_レ美隆元還_レ家後俄爾逝去元就疑以爲_下和知竊進_二毒藥_一以弑_レ之者_上也和知知_二其不_レ可_二逃避_一以據_二居宮島之社內_一訴_レ無_レ罪然元就不_レ肯_レ之遂使_二刺客_一殺_レ之社頭觸_レ穢光源院義輝公使_二元就_一新營_レ之請_二吉田兼右_一刷_二遷宮之儀式_一于_レ時祝師亦與_レ之或說客人宮者近衛院改_二造之_一也嚴島山下有_二龍翔寺_一之遺址京師大德寺大燈來_二此所_一建也

速田大明神 在_二佐西郡平良村_一即安藝國之_二宮也_一按延喜式所_レ載之速谷神社乎谷與_レ田倭語相近所傳之誤乎

地御前宮 在_二佐西郡海濱_一去_二嚴島_一海面一里許是亦市杵島命也一說市杵島姬命之御母也然則合_二祭天照大神素盞鳴命_一者乎按神武天皇元年十有一月丙戌朔甲午天皇到_二筑紫國山岡水門_一十二月丙辰朔壬午至_二安藝國埃宮_一今考_レ之埃宮恐謂_二地御前宮_一乎

八幡 在_二佐西郡五日市之海濱_一也相傳以_二蒲冠者範賴_一準_二八幡之神社_一以祭_レ之者也

天神祠 在_二佐西郡篠尾山_一宮島神職佐伯親實始置_レ之相傳齊院次官親能之子親重爲_二周防前司_一其裔

爲_二宮島之神職_一佐伯親實者親重十七代之末也未_レ知_二然否_一

大首明神 在_二佐西郡_一未_レ知_二祭_レ何神_一也

八幡 在_二安南郡_一此地古之安藝國府也故俗稱_二國府八幡_一所謂田所在_二此處_一嚴島祭祀之日彼地之社司艤_レ舟迎_二田所_一以歸_二嚴島之東浦_一嚴島社家等以_二七度半_一之使者招_レ之倭俗凡招_二貴客_一有_二七度半_一之使_一言及_二八度_一之半途而其客到來之謂也是俗傳之禮式也中華三請之類乎社庫有_二邯鄲枕_一妄誕不_レ足_レ取_レ之又有_二神功皇后之馬銜_一云山間有_レ泉號_二出合清水_一歌曰安藝國出合之清水鷺森阿彌陀峯爾嚴島姬鷺森在_二佐方村洞雲寺_一阿彌陀峯在新山下_一此歌未_レ知_二何人之所_一詠也

鷹宮 在_二安南郡江田島本浦_一社中安_二鷹圖_一祭_レ之今斯地放_レ鷹則必失_二其所_一往恐鷹靈之所_レ使_レ然乎俗傳古有_二百合弱大臣者_一武門而甚好_二放鷹之術_一其所_レ愛之鷹名_二綠丸_一其鷹死後祭_二其靈_一今鷹宮是也

祇園社 在_二東郡高田郡各有_一社即是素盞鳴神也

賀茂社 在_二賀茂郡東村_一曾毛利隆景築_二城於此處_一以暫居焉因移_二洛陽上下鴨社_一云々兩社之間有_レ川名

稱鴨川

靈社大明神 曾傳吉川與經住山縣郡樋山死後甚爲崇土人建社以祭之號靈社大明神其後災絕社司領秋米十石

古蹟門

佐伯郡 日本紀云 仁德天皇三十八年秋七月天皇與皇后居高臺而避暑時每夜自兔餓野有聞鹿鳴其聲寥亮而悲之共起可憐之情及月盡以不聞鹿鳴爰天皇語皇后曰當是夕而鹿鳴不聞其何由焉明日猪名野佐伯部獻菰荳天皇令膳夫以問曰其菰荳何物也對言牡鹿也問之何處也曰兔餓野時天皇以爲是菰荳者必其鳴鹿也因謂皇后曰朕比有懷抱聞鹿聲而慰之今推佐伯部獲鹿月夜及山野卽當鳴鹿其人雖不知朕之愛以適逢稱獲猶不得已而有恨故佐伯部不欲近於皇居乃令有司移鄉于安藝淳田此今淳田佐伯部之祖也云々萬葉集第七臨時部有佐伯山卯花以之哀我子鴛取而者花者知留輶之和歌歌枕曰佐伯山者安藝國佐伯伎山也然從古誤爲五月

山之事譬如敏馬訓騰志麻比治伎灘訓響灘之類互誤之者乎

大竹河 天平六年九月制安藝周防二國以大竹河

爲國界也到今從之川邊有大竹村故名之又

名木川以木村亦在河邊也川屬佐西郡

裝束濱 在佐西郡大竹村之海濱相傳嚴島明神改

衣裳之處也又有錦濱明神乘舟到嚴島之日

曝錦帆於此浦蓋好事者附託而言之者也

佛原 在佐西郡三宅村仙洞村之山上連極樂寺之

山

小方 在佐西郡海濱今太守家臣上田主水之采邑其

地接周防州之境有城壘之遺址相傳福島正則之

臣福島伯耆守之所築也登壇必究日本考謂小方

曰翁家塔

二十日市城 在佐西郡今存遺址曾大內氏之家臣

所居也登壇必究日本考謂二十日市曰法予加一

知

酒返 在佐西郡五日市之近隣源範賴逐平氏之軍

赴西州所到供酒餉以迎之到此極多故返所

送之酒樽故名之矣

車返 在佐西郡五日市傳言三河守源範賴爲源賴

朝卿被貶謫西州到此俄然薨矣從者徒率其車駕以返鎌倉因號車返會聞藤原良經返車於不破關外雖有生死之異而其稱號偶相同矣按東鑑源範賴忤賴朝之旨謫豆州尋薨逝然則返車於此亦謬妄乎

明石村 佐西郡宮內之明石村者相傳山邊赤人之所

產也舊記未見其據

伯母石 在佐西郡水內河中其石橫河中屹立峨々

也往來之船動觸之故篙師到此轉棹避之

俱盧尊佛 佐西郡吉和村山中岩壁彫刻俱盧尊佛之

像因土人稱此處曰俱盧尊佛

溫湯 佐西郡下多田中雪村有河其河水之一條有溫

湯流出其源出于河水縈廻之隈其末到數十步

猶覺微溫四時雖常然冬益熱夏減半

溫泉清水 在佐西郡國府藥師堂之溪間俗諺謂溫

泉曰出湯此水雖炎旱不枯竭冬月溫暖故曰

出湯清水云々一說和歌之所詠出合之清水者即出

湯之清水而非安南郡出合之清水云々安南郡出合

清水自安南安北兩郡之間流出故曰出合清水其

義懸隔

櫻尾城 佐西郡有櫻尾之城址古蒲冠者源範賴之裔

吉見氏築之也近世嚴島神職佐伯教親住焉曾陶氏

弑大内氏之日教親屬陶氏因爲元就所殺城

郭罹鬱攸之變當斯時嚴島之神書舊記等悉爲

鳥有嗚呼惜哉

己斐城 在佐西郡己斐山上今有基址民間號次

郎城楠正成所築者也恐近謬傳乎

誰曾森 在南安郡國府之側土人傳言八雲御鈔所

載誰曾森是也然今考之誰曾森伊賀州也異處同名

者乎

隱渡 在安南郡之海相傳平清盛尊崇嚴島年々

詣此社故厭舟路之迂遠鑿開此山間直通海

路往來之客船到今得其便也清盛之石碑在海

中之小島矣今太守之別館在海濱

警固屋 在隱渡之東岸清盛鑿隱渡之日警衛監護

之士在此山上而視事之處也

武田城 在佐東郡凡武田氏有三家曰安藝武田曰

若狹武田曰甲斐武田是也

阿武山 在佐東郡有城壘之址

熊谷城 在安北郡古熊谷氏之所築也岩壁石階到

今存矣其經營爲要害之地

多治井 高田郡有一小村號多治井毛利元就之所

產也始纔領二千貫之地到晚年遂有中國世

稱十州太守以中華言之則韓信之淮陰諸葛之

南陽乎

吉田城 卽是元就之所築也星城亦元就之家臣所居

也此外吉田近隣山岳城壘之遺址不可勝數

青鼻城 在高田郡吉田川之北毛利興元之所築也

釜潭 在高田郡吉田川之上

尼子城 在高田郡吉田川之南曾出雲尼子氏築城

于此山與毛利元就對戰有年遂爲元就所滅

出雲國亦爲元就被合矣

壬生城 在山縣郡相傳壬生忠岑之所築也不知

其據近世庄野五郎守此城爲毛利氏所敗一時

焦土矣到今堀地則得古銅器古磁器或得米穀

也

平家城 在山縣郡山上土人傳言平氏一族奉安

德帝在此城也不知其據思通志於平氏者之

所築乎

出雲石 在豐田郡土取村之田間土人傳言此石遂

年而長大也似可疑者然按西陽雜俎云利州臨江

寺石曾得水中初才如拳置佛殿中石遂長不已

云々依此則民間之言亦有所據乎

貓瀬戸 在賀茂郡海上海岸如貓因名之倭俗謂

海灘曰瀬戸

秀吉馳道 豐臣秀吉公欲征三韓赴肥州名護屋

城其行程經西海道之陸路其道兩畔植松爲界

自攝州大坂到肥州名護屋如此矣今太守所領

自備後尾道到周防界其松間之舊路今所存者

纔什之一嗚呼秀吉公之遺愛乎

金山城 在佐西郡已斐村武田氏之所築也自武田

朝信至光廣十六代爲割據之地毛利元就滅

之

吉和城 在佐西郡川野藏人住焉爲毛利元就所

合

高松城 在安北郡三入庄熊谷伊豆寺信直之所居

也爲毛利元就所擒

矢野城 在安南郡野間隆則之所築也毛利元就屠

之

陵墓門

聖武天皇陵 在賀茂郡西條國分寺

津久禰島石碑 在宮島之海表傳言古佐西郡海濱

且溫泉涌出號此處稱湯蓋此近隣有豪農名

道空今宮島客人宮昔年頽敗雨漏露濕道空捨資以

改其之死後宮島人建石碑以祭之云々道空沒

後溫泉亦枯竭

清盛墓 在安南郡隱渡之海島矣

親王石棺 在豐田郡一間餘許有國有蓋號曰油

塚相傳親王之墓也未知何世人而又爲何親王

土肥次郎實平墓 在豐田郡米山寺自土肥實平以

後十七代之墳墓存于此矣

齋藤五齋藤六之墓 在豐田郡沼田鄉蓋按平家物語

此二人者平維盛之子六代御前之傳也平氏族滅之日

賴朝卿依文覺坊之勸而暫助六代之命然是平家

之族種而他日之難未可知賴朝卿遂命安判官資

兼捕之招關東命岡部權守泰綱於相州手越

河邊斬之此二人不知其所終也今其墓之在於

斯也可怪者也

蒲塚 在佐西郡八代村岡山下相傳蒲冠者範賴之塚也

北條氏直墓 在佐西郡草津海藏寺未知名因何而

在于此乎

毛利興元墓 在高田郡吉田鄉多治比村矣

小早川隆景墓 在沼田米山寺也

所塚 在佐西郡大竹彌追村此村中古有所左衛門

則秀者曾毛利元就討陶氏之日所左衛門爲鄉

導以赴宮島元就大勝而滅陶氏元就賞之與

采邑於所左衛門後有故而爲元就被殺塚上種

櫻因或稱櫻塚

福島八介墓 在今府治之西穢多新開也蓋八介者福

島正則之子也然天性疎豪而有凶暴之氣正則殺

之以棄海邊國人憐之設墓今其地爲田疇然

存其墓地以不耕種倭俗謂墾田爲新開也

人品門

河邊臣 日本紀云推古天皇二十六年遣河邊臣

名於安藝國令造船至山竟船材便得好材

以各將伐時有人曰霹靂木也不可伐河邊臣曰其

雖_レ雷神_ニ豈逆_ニ皇命_ニ耶多祭_ニ幣帛_ニ遣_ニ人夫_ニ令_レ伐
則大雨雷電之爰河邊臣按_レ劔曰雷神無_レ犯_ニ人夫_ニ當
_レ傷_ニ我身_ニ而仰待_レ之雖_ニ十餘霹靂_ニ不_レ得_レ犯_ニ河邊
臣_ニ卽化_ニ少魚_ニ以挾_ニ樹枝_ニ卽取_レ魚焚_レ之遂修_ニ理其
船_ニ

御主人 續日本紀卷第二載 文武天皇大寶元年春三
月壬寅右大臣從二位阿倍朝臣御主人賜_ニ安藝國田
二拾町_ニ

大足 續日本紀第十九卷載 孝謙天皇天平勝寶五年
三月癸丑從五位下安曇宿禰大足爲_ニ安藝守_ニ

市守 續日本紀第二十卷載 孝謙天皇天平寶字元年
五月丁卯從五位下柿本朝臣市守爲_ニ安藝守_ニ

小黑丸 續日本紀第二十九卷載 稱德天皇神護景雲
二年二月癸巳從五位下藤原朝臣小黑丸爲_ニ安藝守_ニ

水通 續日本紀第三十二卷載文室真人水通爲_ニ典藥
頭_ニ又任_ニ安藝守_ニ

大浦 續日本紀第三十三卷載陰陽頭從四位上大伴連
大浦爲_ニ兼安藝守_ニ

氣多王 續日本紀載 光仁天皇寶龜九年二月庚午從
五位下氣多王爲_ニ安藝守_ニ

陽侯王 續日本紀載 桓武天皇延曆元年二月壬申從
五位下陽侯王爲_ニ安藝守_ニ

公足 續日本紀載 桓武天皇延曆八年從五位下石川
朝臣公足任_ニ安藝守_ニ

風早富麻呂 續日本後紀第二卷載 仁明天皇天長十

年冬十月辛卯安藝國言賀茂郡人風早富麻呂德行懿
美孝養自厚父母沒後口絕_ニ五味_ニ哀暮之情無_ニ暫忘_ニ
勅叙_ニ三階_ニ免_ニ戶田租_ニ
按賀茂郡海邊有風早村

伊福部五百足同姓豐公若櫻部繼常 續日本後紀第二
卷載 仁明天皇天長十年冬十月辛卯安藝國言刀田

佐伯郡人伊福部五百足同姓豐公若櫻部繼常等所_ニ
耕作_ニ田各三十町已上貯積之稻亦各四萬束以上並
立性寬厚周施_ニ困乏_ニ往還糧絕風雨寄宿之輩皆得
_レ賴焉詔各叙_ニ一階_ニ

總雄 續日本後紀第十七卷載 仁明天皇承和十五年
春正月甲戌紀朝臣總雄叙_ニ從五位下_ニ任_ニ安藝守_ニ

眞直 續日本後紀載 仁明天皇嘉祥二年秋八月五日
壬辰從五位上橘朝臣眞直爲_ニ兼安藝守_ニ

清原真人瀧雄 文德實錄第六卷載 文德天皇齊衡元
年春正月瀧雄叙_ニ從五位上_ニ任_ニ安藝守_ニ

百濟王安宗 文德實錄第十卷載 文德天皇天安二年

夏四月壬寅終日雨降空中有聲如雷一度安藝國言

上守從五位上百濟王安宗卒

太和真人吉直 文德實錄同卷載同年六月太和真人吉

直爲安藝守從五位上如故

凡直貞刀自 三代實錄第二卷載 清和天皇貞觀元年

夏四月三日戊子安藝國采女凡直貞刀自賜姓名笠

朝臣宮子一隸左京職宮子中務小丞正六位上笠朝

臣豐主之女母雄宗王之女大同元年雄宗王以伊豫

親王家人配流安藝國宮子小年從母不知父旅

貫安藝國賀茂郡凡直氏預采女之貢美濃守從五

位上笠朝臣數道越前守從五位下笠朝臣豐興等證

之仍復本貫姓名

藤原開主 三代實錄第五卷載貞觀三年正月十三日戊

子藤原朝臣開主任安藝守

三眞貞觀 同卷載同年三眞貞親任安藝介而會母

喪去官令赴之

伊豫守豐前王 三代實錄第九卷載貞觀六年二月二日

從四位下行伊豫守豐前王者一品舍人親王四世之裔

從五位上木工頭榮井王之子也少以涉學爲稱天

長三年爲大學助十四年出爲安藝守性簡傲言語
夸浪接物之道爲人所避尋常直於侍從局品藻
人物爲己任談笑消日放縱不拘六十歲而卒

基兄王 三代實錄第十卷載貞觀七年五月十六日丙申

從四位上基兄王爲安藝守基兄今年正月已任安

藝守丁母憂去職詔以本起之授陸奥國俘囚

藤原朝臣與世 三代實錄第十六卷載貞觀十一年春正

月從五位上守刑部大輔藤原與世爲安藝守

榎本連福佐賣 類聚國史第五十四卷載貞觀十四年十

二月壬戌安藝國佐伯郡人榎本福佐賣有節婦之名

故叙位二階免戶田內租表於門廬以旌異

佐伯宿禰春繼 三代實錄第三十三卷載 陽成天皇元

慶三年從五位下行大隅守佐伯宿禰春繼任安藝介

肱主 三代實錄第四十九卷載光孝天皇仁和二年正月

十六日丙申從五位下安部朝臣肱主爲安藝守

伴忌寸行爲 扶桑畧紀載 醍醐天皇延喜四年甲子三

月二日安藝守伴忌寸行爲賦試射之詩

資良 扶桑畧紀載 圓融院天元三年六月任安藝守

藤原倫實 豐田郡沼田樂音寺緣紀載 朱雀帝天慶年

中備前國有藤原純友者又東奧有平將門者兩首

共勇猛之人也。同氣相求。同類相應。東西相共。與兵欲
傾天下。承平年中。將門建都於興州。相馬郡。自稱
平親王。純友搆城郭於備州。釜島奪取四國九州之
貢船。斷絕七防九之糧食。朱雀帝詔群臣。擇節
度使之任。僉曰。藝州貶謫之人。藤原倫實。智勇兼備。思
無如彼者。依此免倫實之罪。賜招討使之命。倫
實不能拒辭。率數萬之官軍。向釜島。與純友
相戰。官軍敗績矣。倫實雖出萬死。無地避之。自
仰臥戰場。取死人之腸。加己之腹上。佯爲死者。
戰了後。鳥鳶群集。或抓裂皮肉。又鷲啄眼睛。倫實在
側。小有動搖之氣。鳥鳶爲一時飛散。純友卽疑生者。猶
在其間。令士卒探索之。倫實自蒙勅日造一寸二分
之藥師佛。籠吾髻中。致信敬。當斯危急。起願云。我
年自十三。今至齡三十一。日夜仰藥師之本願。朝昏特
醫王之效驗。願令助吾一死。若所願則凱還之日。攄
一字之伽藍。安置髻中。靈像信敬之至。感應忽呈。自
海中大龜俄出。頭諸卒見之。茫然失倫實之所。在入
夜潛逃出。遂歸京師。奏曰。純友勇猛非某之所當討也。
願可命他之將。勅云。純友之體勢如何。答曰。非人間之所爲。殆如鬼神。

勅云。果如鬼神。則借佛力。以可壓之。於茲倫實
再祈髻中之靈像。深傾信敬之心。奉勅令。淀河尻
濱。艤艤艦。又領攝州。驅役夫。刈探小屋野。印南野之
草茅。運載數千之兵船。乘順風。廻柁釜島。放火於舟中
之草茅。猛焰蔽城。飛箭如雨。純友之士卒。慌惚失所。
措途刳純友頸。獻之於京師。朱雀帝賞倫實之功勞。
被任左馬允。賜安藝國豐田七鄉。倫實於茲建一字堂。
令造丈六之藥師佛。以籠一寸二分之小像於丈六之佛頭。
今沿田奈子羽鄉之樂音寺是也。考舊記。未見倫實者。
扶桑略紀載純友追捕使左近衛少將小野好古爲長官。
以源經基爲次官。以右衛門尉藤原慶幸爲判官。
以右衛門志大藏春實爲主典。卽命播磨讚岐等國。
令造二百餘艘船。好古馳馬於陸路。慶幸春實等鼓棹於海上。
相共赴筑前博多津。一舉欲決死生。兵及既接。春實進前陣。
短兵急挫。大破賊軍。云々。今按古軍談之所載。亦稱春實然則緣起所
謂倫實則略紀古軍談所載之春實乎。竊思倫與春字形相似。
互誤之乎。且又據緣起。則破純友於備前釜島。考略紀則敗純友於筑前博多津。兩說未可知。

孰是矣

藤原時善 本朝文粹第二卷云藤原時善爲安藝守國內濫惡之僧聚爲群盜竊鑄錢貨國守依法勘糺之僧徒霧合雲集爲暴逆官符急發朝使速行僧徒則被誅戮事涉遲怠則時善等果爲魚肉乎

橘在列 姓橘名在列字卿和州員外秘樹第三子也少遊大學聰識拔群歲三十而始補文人天下惜其晚達在列亦自倦去業就爵卽除藝州別駕累遷御史中丞居職歲餘臺務肅清霜威彌嚴風譽益遠然猶厭榮朝市棲心釋門天慶七年冬十月遂脫俗網遊天台山剃髮名尊敬世人以尊敬上人稱之其平生所著之詩賦歌贊啓牒記狀等若干錄成七卷甲寅歲三月廿八日前進士源順爲之序見于本朝文粹八卷

平清盛 桓武天皇之後也其先世有軍功清盛曾事鳥羽崇德近衛後白河二條六條高倉安德之八朝威權大振遂任相國爲帝室外戚自是朝廷恭己武家秉權清盛初任安藝守尊崇嚴島年々詣社頭其靈驗詳見于嚴島之條下一于時厭海路之迂遠鑿開隱渡之山岸直通嚴島其外事蹟多々不

遑枚舉矣

平基盛 平清盛之子而重盛之兄也曾任安藝守後藤太能盛曾從平清盛脂嚴島神告之曰汝必可爲當國之守果如神託

基明 古事談六卷云基明爲嬰兒時正月喫餅少納言入道信西祝云此兒才智如祖父文章如父後果如信西之所言曾任安藝守

長谷部信連 東鑑載信連曾侍高倉宮有戰功其後賴朝卿滅平家爲三十六箇國總追捕使當斯時命信連補安藝國檢非違使所矣今松平賀州太守之家臣長九郎左衛門者其後也取長谷部之長爲氏信連之事蹟詳于信濃前司行長之記也

沼田次郎 平家物語載能登守平教經率兵船向讚州之八島干茲伊豫國人河野四郎通信者安藝沼田次郎之甥也通信欲通志于次郎以到沼田平教經出于八島逐之其夜宿備後國竊島翌日圍沼田城沼田次郎與河野四郎互合力雖拒戰教經勇悍而兩將辟易沼田次郎即降矣河野率殘黨五十騎逃城而出教經之家臣平八兵衛爲員逐之河野殘黨悉散亂繼率七騎欲乘舟而歸伊豫平八

兵衛之子讚岐七郎義範得_二弓箭之術_一七騎之內射_二五騎_一中_レ之河野之_二騎兵與_二讚岐七郎_一互相爭遂倒_二河野之家人_一欲_レ刎頸於_二茲河野四郎直進截_二讚岐七郎之首_一投_二深泥中_一大呼曰伊豫國人河野四郎越智通信年廿一唯今自_二戰場_一逃歸若有_二勇士_一則須_レ留_レ之即從_二家人_一赴_二伊豫國_一教經雖_レ有_二漏_一河野之遺憾_二又率_二降人沼田次郎_一歸_二八島城_一沼田次郎雖_二勇士_一爲_二教經_一所_二屈伏_一嗚呼痛哉

山方介爲綱 東鑑三卷載壽永元年十月十二日賴朝卿命_二三河守源範賴_一一谷之戰場有_二軍忠_一之輩被_レ行_二恩賞於安藝國_一當國人山方介爲綱殊盡_二戰功_一故褒_二稱之_一又有_二恩賞_一

大江廣元 東鑑載仕_二賴朝_一任_二因幡守_一又轉_二安藝介_一略通_二中華之文字_一又諳_二本朝之禮式_一在_二鎌倉_一爲_二公文所別當_一近世也毛利元就者其裔也

葉山介宗賴 東鑑載安藝武門葉山介宗賴依_二伊澤五郎信光_一之德憑_レ將_レ從_二賴朝卿東奧之征戰_一自率_二兵士_一赴_二東海道_一時聞_二賴朝已出_一鎌倉自_二駿河國蘆科河邊_一歸_レ國梶原景時告_レ之賴朝卿遂沒_二其領所_一蓋怒_二彼人任_一意恣歸_二本國_一也

山形五郎爲忠附小代八郎 東鑑載此二人論_二安藝國壬生庄地頭職_一將軍家自出_二訴庭_一親決_レ之安藝掃部助太夫親定同左近大夫親繼 按東鑑將軍家每歲正月之賀席此二人必列_二其座_一然不_レ知_二其家系_一恐武門之一武將乎

安藝介景弘 東鑑載景弘嚴島之神職也文治元年平氏沒_二長門國之海底_一本朝三種神器之中寶劔者二位尼帶_レ之抱_二安德帝_一沈_二海中_一賴朝遍問_二海濱_一搜_二求之_一然不_レ得_レ之因_二茲使_一景弘_二禱_一嚴島之社_上

安藝右近大夫重親 東鑑載正元二年六月於_二油井濱鳥居邊_一天文博士爲親朝臣修_二風伯祭_一重親者將軍家恩顧殊厚故令_二彼讀_一舊祭文_上

毛利季光 大江廣元之季子也稱_二毛利四郎_一任_二左近將監_一又補_二安藝介_一叙_二從五位下_一剃髮號_二毛利入道西阿_一

毛利時親 毛利入道西阿之嫡子也任_二修理亮_一曾從_二賴朝卿_一領_二安藝國吉田鄉地頭職_一

熊谷直經 相傳熊谷直實直家相續住_二武州熊谷_一到_二直經_一從_二足利尊氏卿_一而賜_二安藝國三井入庄_一於_レ是全家族_二於安藝_一故其譜牒家寶及直實手筆悉直經齋

待而去今武州熊谷寺直實像請於京師東山黑谷而模刻之且又家訓世系等再請於藝州而謄寫之云々今藝州安北部可部北有熊谷城恐直經之所築乎三井入庄今不知其處熊谷城今僅存其石壁而已譜牒家訓亦不知其所惜哉一說直家之孫直時領安藝國安北郡三井入庄又領安南佐東二郡爲安藝石見目代子孫相續領之云々

倭俗國郡監謄之人曰目代

藤原範宗 壽永三年二月二十六日任安藝守公卿補任

藤原範時 文治二年二月二十日任安藝權守公卿補任

藤原高通 承久二年任安藝權守公卿補任

藤原賴範 承久三年任安藝權守公卿補任

藤原淳高 延應二年十二月二十八日任安藝守公卿補任

源敦有 弘安二年任安藝守叙從三位公卿補任

藤原業定王 至德二年三月任安藝守叙從三位

公卿補任

藤原行家 文永五年任安藝守叙從三位公卿補任

小早川持平 海東諸國記載明應庚申年遣使來朝書

稱安藝州小早川美作守持平約歲遣一舡父常賀近

侍一國王

村上國重 同載大永甲申年遣使來朝書稱安藝州海

賊大將藤原朝臣村上備中守國重受圖書約歲遣

一舡

武田教通 同載大永戊午年遣使來賀觀音像書稱

安藝州太守藤原武田大膳大夫教實

藤原公家 同載大永戊午年遣使來賀觀音像其書

中稱安藝守嚴島太守藤原朝臣公家

八千代 淫婦而雖不足取之有竹林寺之舊記則

聊存茲以助博識云

吾妻婦人 西條有瀑泉土人相傳上世吾妻二婦人失

子尋之到西州此處始聞吾子之死不堪哀

慕即投瀑泉而沒嗚呼痛哉與曹娥之沒海雖

有母子之異其情相同者乎以八千代之淫行比

之則天淵遼遠存其善惡於斯以爲婦人女子之

戒耳

釋愚中 諱周及濃州岐縣人也歷應三年入宋從卽休

禪師傳達磨宗門之旨住丹州金山天寧寺又移

藝州佛通門遷化諡佛德大通禪師其勅書云晦跡

韜光安心空門是道人之本志立號易名以褒寵

旌異是王者之良規丹州金山愚中和尚者廣靈山軍

傳正音得_レ少室密付の旨_一雖_レ寄_二身於林壑_一而名喧_二宇宙_一其道甚尊顯心切慕_レ之諡曰_二佛德大通禪師_一應永十六年九月十四日云々此僧雖_二方外之人_一其力遊之志又足_レ取_レ之故記_レ之以激_二勵衣架飯袋之浮屠等_一者也有_二詩集并年譜_一今行_二于世_一且古有_二寺法三條_一一曰不_レ許_二酒肉入_二寺中_一事二曰不_レ許_二年少沙喝入_二寺中_一事三曰不_レ許_二女人入_二寺中_一事今悉失_二其法_一

釋自休 始不_レ知_二何處人_一也居_二于藝州根谷_一因號_二根自休_一相傳不_レ僧不_レ俗風狂之人而好_二文字_一者也曾題_二嚴島_一詩曰水是島山光相映落_二波瀾_一不_レ離_二當處_一神仙境百八廻廓一社壇又曾題_二江州竹生島_一有_二綠樹影沈魚上_一木清波月落魂奔流之句一說自休相州鎌倉建長寺之僧而晚年寓_二佛通寺_一未_レ知_二是否_一

武田時綱 曾新羅三郎義光之子義清號_二刑部三郎_一又稱_二逸見冠者_一又號_二武田冠者_一其末葉時綱稱_二六郎_一後補_二安藝州_一今藝州武田城山相傳武田伊豆守所_二曾築也考_二武田系譜_一稱_二伊豆守_一者惟多武田氏世守_レ之者乎時綱者即武田信玄之祖也

武田信宗 時綱之子也爲_二安藝國之守護職_一而住_二藝州_一

大內義興 左京大夫政弘之子也任_二左京大夫_一永正八年八月二十二日率_二大軍_一入_二京師_一而戰_二于船岡山_一大有_二軍功_一同九年三月二十六日叙_二從三位_一依_二去_一年船岡之戰功也且補_二周防長門豐後豐前安藝石見山城七箇國守護職_一剃髮號_二凌雲寺義秀_一大永六年五十歲而薨

掃部頭廣就 嚴島之神主職也相傳承久三年鎌倉右大臣實朝公以_二安藝國佐伯郡一萬六千貫之田地_一供_二嚴島之社米_一齋院次官親能之子周防前司親實坐被_レ補_二神主職_一世々住_二櫻尾城_一至_二廣就_一十七代也自_二承久三年_一至_二天文十年_一三百五十年相續爲_二神職_一天文十七年廣就爲_二大內氏_一所_レ滅云々

大內義隆 義興之子也享祿二年十二月二十三日叙_二從五位下_一天文元年十月二十九日叙_二從五位上_一同日任_二周防介_一同三年四月晦日叙_二從四位下_一同五年五月十六日任_二大宰大貳_一同六年正月六日叙_二從四位上_一同十二月二十三日叙_二從三位_一同十四年叙_二正三位_一同十七年叙_二從二位_一曾補_二周防長門豐前筑前

石見安藝備後七箇國守護職一 天文二十年辛亥九月二日爲三家臣陶氏所逐自殺長州大寧寺一年四十五號隆福寺殊天一

毛利元就 大膳大夫兼因幡守中原廣元之末裔也廣元

改中原爲大江一子孫皆稱大江一也將軍義輝公

使元就一任大膳大夫一且賜菊桐紋足利將軍家一切物悉畫菊花桐葉以爲證近臣之親得恩又賜錦直垂倭邦

顧者皆賜此紋以示寵遇故元就亦然又賜錦直垂高貴

之人所著會領安藝時周防國主左京大夫大內義隆

家臣尾張守陶晴賢弑義隆奪其國而從豐後國

迎大友氏之季子立爲主號大內八郎義長晴賢

剃髮改名全姜專國政元就嘗屬義隆忽聞全

姜弑奪之亂欲爲義隆報讎遂率諸卒與全

姜相戰有年每戰吉川元春小早川隆景爲魁首

有軍功弘治元年十一月朔日全姜率兵攻安藝嚴

島宮尾城一城將隆景防之以待外援於是一夕風

雨晦冥元就隆元元春乘暗夜潛襲全姜陣中大亂

元就急挫之隆景亦出城奮戰全姜及子阿波守戰死

全姜老臣三浦越中守突騎進戰隆景自橫槊以刺殺

越中守敵軍敗績元就登嶺入谷徧求殘卒以殺

之自同一年至三年元就擊陶氏之餘類以入

長門周防陶軍悉敗走而八郎大內義長自裁於長州

長福寺下野守內藤隆世自殺於長府勝山陶五郎

自殺於防州富田若山彈正江良忠伊香賀左衛門大

夫自殺於防州須々磨於是元就領安藝周防長

門永祿五年欲擊尼子氏圍出雲國富田城尼子

對捍及七年同十一年遂屠其城虜尼子氏因幡

伯耆石見隱岐悉平夷其後元就略備中備後之地凡

所領安藝周防長門備中備後因幡伯耆出雲隱岐石

見總稱十州太守元龜二年六月十四日卒七十歲法

諱倭法凡從僧剃髮改其日賴號洞春院平素頗讀書

又嗜和歌元就詠草行于世元就始任陸奥守又

爲右馬頭後任大膳大夫

毛利隆元 元就之嫡子也號少輔太郎任備中守永

祿五年八月四日先元就卒法名常榮

毛利輝元 隆元之子也號少輔太郎任右衛門佐又

轉右馬頭領安藝周防長門石見出雲隱岐備後備

中半國伯耆半國將軍義輝卿賜諱字及屋形號

倭俗稱巨室曰屋形豐臣秀吉公及令天下自任關白以

毛利家准清華家故使輝元任中納言寬永二

年四月二十七日薨享年七十二法諱號宗瑞

吉川元春 元就之季子而繼吉川氏稱治部少輔又

號駿河守天正十四年十一月十五日卒法諱海翁

小早川隆景 元就之季子也領安藝國沼田鄉繼土

肥次郎實平之遺跡氏稱小早川名號又四郎又

稱又左衛門佐從元就相共助軍謀入三韓之

地施其勇名謀才智略世人之所徧識也始領伊

豫國豐臣秀吉公使彼叙從三位任中納言又

賜筑前國及晚年無嗣子養中納言秀秋以

讓其國退居備後三原城倍臣之榮耀無敢比肩

者慶長二年六月十二日六十三歲而卒號黃梅院泰

雲居士

金剛和尚 釋金剛和尚伊豫州之產而曾隱嚴島山中

于時櫻尾城主嚴島神職佐伯親實請之令住今二

十日市洞雲寺

福島正則 尾州二子村人也曾從豐臣秀吉公志津嶽

之戰七人同時合鎗出稱七本鎗正則亦其一人也

始領二百石因茲加倍三千石之采地其後從軍

數回每出無不有軍功慶長五年遂爲安藝備後

二州太守叙從四位上任參議元和五年六月忤

秀吉公之命配遠國其子孫亦絕矣惜哉有其始

而不克其終也

可兒才藏 才藏濃州可兒郡人也從福島正則戰功數

回斬獲惟多每出戰場以綠竹挾背後其所殺

者不取首級以所插之竹葉一箇納死尸之鼻

口以過之凱還日檢其首竹葉之在鼻口皆彼之

所取也以是爲徵矣人無爭之者世稱篠才藏

遂沒廣島矣矢賀之松山有石碑

山田次左衛門 相傳宮島神職佐伯氏壽永年中以病

死此後神職絕跡鎌倉右大臣實朝公令周防前司親

實兼補神主職住二十日市櫻尾城親實主嚴島

造營之事招集鎌倉中之工師鐵匠瓦工依之經營

不日而終其功其工人之末裔住處々神主家賦

年俸其中治工山田次郎貞則者鎌倉扇谷之產也山

田越後守藤原貞正之二男而爲今次左衛門之先祖

也嚴島造營之日鐵具悉令貞則鑄之遂爲安藝一

方治方之長

新里又右衛門 佐西郡坪井里人也曾從毛利元就

有軍功少壯時詣郡中極樂寺觀音之靈像祈禱

力勝人果有應驗極樂寺之坂路有岩石往來之

人憂之又右衛門手自提之下下十八町之坂路置

我所居之門前一其石到今存又右衛門生三男一女其女嫁己斐奧員力勝人己斐城中脩竹繁茂塞路奧員憂之令役夫掘之損傷手足者日々多矣奧員妻夜潛出手拔其竹靠城壁人皆驚又庭際有大石一役夫七十餘人雖斃之不敢動搖此女以兩手輕舉之自是夫妻之間自相隔安國寺瓊長老藝州安南郡戶坂村人也履歷詳見于國泰寺條下

拾史門

類聚國史百七十三卷災異部第七載 文武天皇大寶元年八月辛酉參河遠江相模近江信濃越前佐渡但馬伯者出雲備前安藝周防長門紀伊讚岐伊豫十七箇國蝗大風壞百姓廬舍損秋稼

同百七十三卷 淳和天皇長八年十月庚寅安藝國兩年田租不四得六以土地澆薄年穀不登按不四得六文理不審然從舊本之所記

同百七十三卷疾疫部載 文武天皇大寶三年四月壬寅河內出雲備前安藝淡路讚岐伊豫等國飢疲遣使賑恤之是年天下諸國疾疫百姓多死始作土牛大儺又載

廢帝天平寶字四年三月丁亥伊勢近江美濃若狹伯耆石見播磨備前備中備後安藝周防紀伊淡路讚岐伊豫等十六箇國疫疾給之考延喜式一本邦山陽道八箇國通計七十二郡也安藝州亦其一也文獻通考三百二十四卷四裔之內日本考載山陽道有播磨美作備前備中備後安藝周防長門凡八州共統六十九郡與延喜式之所定不相合矣通考之所記本朝何世之制法乎未之知其據矣

登壇必究載日本考稱安藝曰安計蓋譯傳之誤乎海東諸國記載安藝州郡八水田七千二百五十町九段又謂藝州蒲刈稱龜戶

無題詩載釋蓮禪宿藝州赤崎泊言志詩云沙路渺茫行不窮汎乎唯任掉歌翁月殘白石曉波上白石渡名也今曉所日暮赤崎秋泊中赤崎泊名藝州之地也防州之境也過也夕所留也故句及此楚夢澤望分

八九吳興山勢願西東荻花浦遠看如雪蘆葉蓬穿臥有風清淚長吞同病鶴旅情忽引伴賓鴻縱歸舊里無眉目家族併厭貧賤躬

同載釋蓮禪宿道口津賦所見詩云山重江複客遊淹景趣蕭疎不耐瞻岫幌晴望富鳥路沙村秋實富魚鹽月隨歸棹千程遠煙起行厨一穗纖身

與浮雲無定處、自哀自吟淚相霑、

風雅集云藤原公重九月十三夜詣安藝國嚴島、時備後國鞆浦見海邊月、詠歌云、阿多羅夜之月遠獨曾詠津留思波奴磯爾波枕志天

不二稿曰山陽道藝州路法華山永福禪寺見虛主席吾門議舉前栖真傳嚴說禪師以薦檀越平作州總州二公各喜荷法得人遂請之又云永福寺僧東明知客請東明說又云永福寺和翁春和尚贊曰薰人和氣蓋世高風米山閑房養母何纖蒲履楊岐種草舉話不拋栗逢離句絕非說法克纘乃祖崖崩石裂臨行無所藏踪藝山青分藝水碧當陽一句自流通云々今按永福寺不知其處贊中有米山之句則在米山爲必矣米山屬藝州沼田郡

雪嶺集曰武田信武藝州人也屬尊氏卿有軍功信武三傳至信繁其子一號信榮奉普廣相公之命伐離於和州其二號信賢嘉吉初戰播州人丸墓應仁丁亥亂築城於洛東白河其三號國信仕慈照相公一年十九戰和州有忠公賞以二邑應仁之亂發武名廣解文集曰爲安藝國守之人每歲以二櫟子二合獻朝廷云々

由良法燈國師年譜曰師到藝州應開寺訪惠峯徒白雲曉禪師二師合起背梁坐禪國人久祈拜觀音真容大士夢中告曰汝往應開寺翌早入寺見二比丘坐禪須臾變二觀音國人供敬禮拜其一師也

藝備國郡志上終

藝備國郡志下

備後州建置沿革

日本紀曰 神武天皇乙卯春三月徙入吉備國一起行宮以居之是曰島宮積三年間備舟楫蓄兵食將以下一舉而平天下也其後吉備國三分之一曰備前曰備中曰備後即今備後也古置十五郡一曰安那曰深津曰神石曰奴可曰沼隈曰品治曰葦田曰甲奴曰三上曰惠蘇曰御調曰世羅曰三谿曰三茨曰吉刀也計九千二百九十八町其內御調郡世良郡奴可郡三上郡甲奴郡爲藝州之附領安藝八郡與備後六郡田通計三十七萬石也延喜式二十六卷載備後國正稅公廩各廿四萬束國分寺料二萬束文殊會料二千束鑄錢司俸料二萬八千束修理池溝料一萬五千束救急料八萬束備後國陸路三十三束東海路自國漕與等津船賃凡石別一束三把挾抄二十四束水手一人漕米十斛自餘准播磨國

郡名門

形勝門 風俗門 土地門

御調郡 凡邑數計五十九田通算二萬九千二百六十九石零
世良郡 凡邑數計四十九田通算二萬九千二百六十九石零
三谿郡 凡邑數計三十八田通算一萬八千五百五十六石零
奴可郡 凡邑數計三十八田通算一萬七千四百六十一石零
上郡 凡邑數計十七田通算一萬二千七百八十石零
甲奴郡 凡邑數計八田通算四千五百十三石零
六郡合十二萬石零戶三萬五千七百七十萬四千六百七牛馬合二萬四千五百五十六

形勝門

西北山峙東南海通西州往來之衢也西隣安藝北接出雲東通美作伯耆南出備中也東有福山城水野氏之所領也西有三原之城藝牧之家臣淺野右近守之

風俗門

人性柔慧民專漁鹽之利俗喜商賈之業

土地門

三原 在御調郡西洋往還之街衢而船舶之所輻湊也城外阡陌四通也土地坦平天候和暖民人庶富尾道 屬御調郡四民並居雜品之具無不有西洋海陸之通衢而海客商夫必投宿於此而資用於此

登壇必究謂尾道
曰和奴密知

向島 與尾道相對中間有海隔故號向島

因島 在御調郡島中加宇瀨浦小民汲潮燒鹽以

足國中之用

甲山 屬世良郡其地廣曠而四野闢山圍川流民人安

居

土產門

延喜式二十三卷載備後國斐紙麻一百斤又載諸國貢

蘇次第六番備後國十壺二口各大十升八口各小一升

同二十四載凡貢夏調絲備後國七月三十日以前納

訖又輸絹調白絹十匹帛一百匹絲九十絢縹絲二十

絢自餘輸絹鐵鐵鹽庸白木韓櫃三合自餘輸米鹽

鐵鐵一中男作物紙木綿紅花黃藥皮黑葛漆胡麻油押

年魚煮鹽許都魚皮大鰯雜脂又白絹十二匹油二石櫛

子四合隔三年進醬大豆十石延喜式二十八卷兵

部省載諸國健兒備後國安郡品治者度各二十匹同載

備後國行程上十一日下六日

延喜式三十七卷載諸國年料雜藥備後國二十八種白

頭公五斤石斛四十九斤桔梗三十五斤白朮三十四斤

六兩細辛三十斤菖蒲四斤黃蘗十斤當歸六斤薺藟二

十三斤芍藥二斤木斛十五斤茯苓五斤升麻一斤紫苑

十三斤夜干二十一斤赤石脂三斤八兩桑螵蛸十兩署

預一斗四升麥門冬三斗六桃仁一斗一升車前子二斗

三升葵梨子三升外麻子一斗四合亭藤子一斗六升蜀

椒一斗三升獾肝三具猪蹄朴硝大三斗

類聚國史百七十三卷載文武天皇大寶元年十一月

備後國神石奴可三上惠蘇甲奴世羅三谿三次等八郡

調絲相授鐵鐵

日本紀云備後國獻白雉云々今考之不知出

自何處矣

三代實錄卷第十一載清和天皇貞觀七年秋八月十

七日乙丑備後國神石奴可甲奴惠蘇世良三谿三次三

上八郡居山間土宜株鐵連年早疾民庶弊土四年

之間每年四郡更後課役

三原酒 御調郡三原城下釀酒者多矣惣號三原酒

尾道酒 尾道屬御調郡去三原不遠釀酒者與

三原相同其酒味醇厚經久不損故自古大明朝鮮

東京東浦寨呂宋琉球往來之倭船必繫斯處以求

酒滿樽充船中之用云々

尾道石 山岳之間多出巨石石工鑿穿之以鐵鑿

劉之凡石壁石橋柱礎渠石皆採用之

木綿蹈皮 御調郡尾道之民家多女工能作木綿之

襪子倭俗謂之蹈皮倭訓多備

疊面 出御調郡其外備後州中所造之連乾燈心

草以麻緒編之倭俗是號疊面疊倭記曰多々美以此加蜀牀之止故

面上自王公下到庶人坐席之用悉取于此矣

此外丹波面近江面手島席之類所々製之其細密不

及于此州之製造農桑之暇居民業之

荑若 倭俗所謂多波古也考本草綱目屬毒草部曰

氣味苦寒無毒主治齒痛出血肉痺拘急久服輕身

使人健行走及奔馬強志益力通神見鬼多食

令人狂走云々時珍云荑若之功未見如所說而

其毒有甚焉煮一二日而芽方生其爲物可知矣能

使下痰迷心竅蔽其神明以亂其視聽唐安祿山

誘契丹飲以荑若酒醉而坑之又嘉靖四十三年二

月陝西遊僧武如香挾妖術至昌黎縣民張柱家見

其妻美設飯間呼其全家同坐將紅散入飯內

食之少頃舉家昏迷任其奸汚復將魔法吹入

柱耳中柱發狂惑見舉家皆是妖鬼盡行殺死

凡一十六人並無血迹官司執柱囚之十餘日柱吐

痰二碗許聞其故乃知所殺者皆其父母兄嫂妻子

姉姪也柱與如香皆論死云々按本朝古不聞有

斯物近世蕃舶載來而自長崎港達於群國始以

刀織細刻之名曰長崎多波古賓客之玩贈答之贊

偶用之若今則上自王公下至庶人一爲流風之

物而無不用之賓客之供給以此先茶禮故本

朝丹波近江上野下野上總下總甲斐信濃加賀肥後等

國多種荑若賣之其外所出不可勝數矣安藝

備後之地亦宜荑若特備後三原之產爲勝矣凡製

荑若之法秋初採之陰乾去心莖以片刀細刻

以希施婁盛之火薰以吸其煙氣矣賣喜佐美多

波古者始少以麻油塗之多波古葉以刻之然則其

葉滑潤而不裂不碎刻之甚爲有便矣然吞之

有油氣今厭之各使家僕刻之無論其細龜唯

以不用油爲佳是曰手刻俗倭凡物不求市中我僕之所刻是又

朋友之會或以片紙裹之又以小宮

盛之各携之互比其色又論其味以催佳興更

助談柄其樂不爲不多矣以今觀之荑若之煙

氣少用之則消癰塊除風濕以爲有利矣至其

多則傷肺損目生痰發狂其害不可勝數矣希施婁之製始以小竹管尺許切之去其節其未盛多波古以其本吸之今不用之以餉爲之狀如牛翠花樣其底尾開小孔以連續于竹筒上又別以鑰造小筒連竹管之本以此吸煙氣矣希施婁京師高倉町洛外之粟田口近江之水口肥後之熊本武州之忍岡其外所々製之先是三韓入貢之使始自正使下至奴隸悉好其苦特以我邦之產甚爲佳矣彼方言謂多波古曰煙酒謂希施婁曰煙筒其名不野於理亦相當也

鹹蠅タイラキ

魁蛤タイラキ

三原海物倭訓阿加々伊

倭訓多伊羅岐

白紙 三上郡庄原製紙其色甚鮮白是曰奉書紙

倭訓傳命令之書總曰奉書此所用之紙尤擇純白者故今稱紙之白曰奉書紙又稱杉原紙杉原地名

雉島 俗傳雉生山谷之間者其形雖小其味大勝也

凡物生北方之寒國者其性強健雉亦在山谷者其形小其肉實而有脂不如此則不堪其味亦厚

又曰不飲海潮者又佳也凡鳥獸飲潮則其肉柔軟而無脂其味亦薄奴可郡

東城山深海遠故雉之產于此地者爲上品

備後沙 在奴可郡帝釋之溪間鮮白可愛以鐵椎

碎之布盆石底得水其光彌潔白得之者爲坐上之一珍玩矣

寺觀門

金剛寺 在世良郡甲山村山名今高野相傳沙門空

海暫住焉有空海畫像并松蟲銅鈴爲寺物之重器

蓋鈴者密宗之具而空海入唐所携來也紀州高野山

舊記載備後國太田庄者高野山之領地也云々今不

知其處古奴可郡恐有太田庄乎

帝釋天 在奴可郡山上相傳祭帝釋天王而本地者

觀音也去此山一里許有石橋相傳山神一夜造

之橋長五間餘厚近一間去水上三間餘橋下不

架柱自然屹立而天造之基也其奇絕殆非人力之

所及也曰未渡橋去此半里許而又有石橋山鬼

將造之半途天漸明故不落成矣名曰相渡云々

我國者神國也山靈之所造亦然乎未渡與相渡其

名達實恐互誤之乎自帝釋到未渡橋之間有

巖洞來往目洞裏過

尾道伽藍 御調郡尾道之寺院不可舉數其中大者

今列於茲矣淨土宗門有持光寺光明寺安養寺密

宗有_二西國寺樂師院_一又有_二妙宣寺之日蓮宗_一又有_二專光寺宗光寺之曹洞宗_一時宗有_二願成寺茅堂瓦堂之稱_一藤澤一遍上人每_レ廻_二諸州_一暫住_二此寺_一矣有_二律宗_一號_二淨土寺_一上世有_二七堂之伽藍_一今悉廢壞有_二足利尊氏之木像_一并存_二石碑_一思尊氏赴_二筑紫_一時過_二此寺_一者也寺僧依_レ之所_レ設乎

祠廟門

延喜式神名帳載備後國神座御調郡一座加羅加波神社世羅郡一座和理比賣神社三谿郡一座和波夜比古神社奴可郡一座爾都比賣神社三上郡一座蘇羅比古神社甲奴郡一座意加美云々按凡備後國中十三郡之間神社名帳載_二十七座_一今舉_下所_レ屬_二我藝國之六郡_一神座然今悉不_レ識_二其處_一記_二其名_一者亦稀矣惜哉唯有_下胡鬼夷佛之掠_二神地_一而誣_二惑愚民_一者不_レ知_二其數_一矣

天神祠 在_二御調郡尾道之向島_一相傳菅神貶謫日客船泊_二此島_一時六月二十三日也菅神苦_二炎熱_一納_二涼子海邊_一有_二金屋某者_一取_二未耜_一耕_二田間_一憐_二菅神之勞倦_一不_レ忍_レ視_レ之則獻_二麥餅與_一濁醪_二菅神感_二其深

志_二自解_一所著狩衣之片袖_一手寫_二菅神衣冠之像_一與_二金屋某_一留別矣到_レ今每歲六月二十三日供_二餅酒_一以祭_レ之今天神祠即祭_下所_レ自畫_一之像_上也

八幡社 在_二御調郡尾道山上_一

絲崎八幡 在_二御調郡絲崎島_一

陵墓門

於兔墓 世良郡小泉有_レ寺堂前古塚相傳虎之墓也虎娘者曾我十郎祐成之愛妾也祐成殺_二父之敵_一弟時宗亦從_レ之傳曰父之讐弗_二共戴_一天故本邦之士討_二父兄之讐_一者不_レ爲_レ不_レ多然以_二此兄弟_一爲_二口實_一嗚呼孝道之感應乎賴朝卿亦憐_二祐成死_一而欲_二助_一時宗之命然時宗不_レ肯_レ之則賜_二死祐成沒後虎娘哀慕不_レ已遂薙髮歸_二佛教_一其貞節之操雖_二婦人_一亦可_レ取者乎死後靈魂化爲_二巨石_一于_レ今在_二相州小田原東大磯之邊_一東武往來之人必來觀_レ之號曰_二虎石_一其志之貞堅變爲_レ石者乎與_二中華望夫石_一可_レ併按_一矣今此寺有_二祐成之朱鞍_一按於兔之墓在_二于此地_一不_レ知_二其據_一祐成之馬鞍亦不_レ審_二然否_一世多_二妄傳_一不_レ可_レ悉信_一

古蹟門

舊事紀第三卷載素盞鳥尊帥其子五十猛神降於新羅曾尸茂梨之處矣乃與言曰此地吾不欲居遂以埴土作船乘之東渡到于出雲國簸之河上安藝之國可愛之河上所_レ在鳥上峯矣云々今按可愛則今之可部乎鳥上峯不_レ知其處

備後牛岩 在備後州安藝州之境也峨々石岩相對而

角立其形似牛民間稱其一之在備州曰備後牛

其一在藝州稱之曰安藝牛

高杉城 在三谿郡祝市正住焉被元就滅

江田城 在三谿郡江田小次郎隆達營焉爲元就所

合

人品門

吉備兄媛 日本紀載應神帝之妃御友別之妹也應神

帝二十二年春三月帝幸難波居於大隅宮登高

臺而遠望時妃兄媛侍之望西以大歎於是帝問

兄媛曰何爾歎之甚也對曰近日妾有戀父母之情

上便因西望而自歎矣冀暫還之得省親歟爰帝

愛兄媛篤溫清之情則謂之曰爾不視二親一既經多年還欲定省於理灼然則聽之仍喚淡路御原之海人八十人爲水手送吉備

常摩公廣島 日本紀第二十八卷天武紀載近江朝聞

大皇弟入東國其群臣悉愕京內震動或遙欲入

東國或退將匿山澤爰大友皇子謂群臣曰將

何計一臣進曰遲謀將後不_レ如急聚驍騎乘跡而

逐之皇子不_レ從則以韋郡公磐楯書直藥忍坂直大

摩侶遣于東國以穗積臣百足及弟百枝物部首日

向遣于倭京且遣佐伯連男於筑紫遣樟使主盤

磐手於吉備之國並悉令與兵仍謂男與磐手

曰其筑紫大宰栗隈王與吉備國守常摩公廣島二人

元有隸太皇弟疑有反歟若有不服色即殺之

於是磐手到備國授符之日給廣島令解刀磐

手乃拔刀以殺之

佐伯宿禰麻呂 續日本紀卷第四載慶雲四年三月戊寅

正五位下佐伯宿禰麻呂爲備後守

石川朝臣夫子 續日本紀第十一卷載天平三年九月乙

巳從五位上石川朝臣夫子爲備後守兼知安藝守

事

諸人 續日本紀第十三卷載天平十年八月乙亥外從五位下小治田朝臣諸人爲_二備後守_一

廣成 同十五卷載天平十五年六月外從五位下葛井連廣成爲_二備後守_一

久勢王 續日本紀第廿二卷載天平十五年春正月壬午正五位下久勢王爲_二備後守_一

豐野真人出雲 續日本紀第廿三卷載天平寶字四年冬十月從五位上豐野真人出雲爲_二備後守_一

笠麻呂 續日本紀第廿三卷載天平寶字四年正月外從五位上高松連笠麻呂爲_二備後介_一

正道 續日本紀廿五載天平寶字八年正月從四位下道朝臣正道爲_二備後守_一

色夫多 續日本紀廿八載神護景雲元年五日癸酉從五位下道朝臣色夫多爲_二備後介_一

國益 續日本後紀第廿九卷載神護景雲二年六月乙卯以_二近衛少將從五位下佐伯國益_一爲_二兼備後守_一

法均尼 續日本紀第二十七卷載 高野天皇天平神護二年十月詔授_二道鏡_一以_二法皇位_一同第二十八卷載神

護景雲三年道鏡使_下和氣清麻呂一行_二字佐太神宮_一告_中我卽位之事_上太神託宣曰我國家開闢以來君臣定

矣以_レ臣爲_レ君未_二之有_一也天之日嗣必立_二皇緒_一無道之人宣_二早掃除_一清麻呂來歸奏如_二神教_一於_レ是道鏡大怒解_二清麻呂本官_一出爲_二因幡員外介_一未_レ之_二任所_一尋有_レ詔除_レ名配_二大隅_一其姊法均還俗改_二名廣蟲_一賣_二配_一備後國_一

人主 神護景雲三年五月外從五位下 堅部人主爲_二備後介_一

沙彌麻呂 續日本紀卅二卷載寶龜三年十月辛酉從五位下山口忌寸沙彌麻呂爲_二備後介_一

廣川王 續日本後紀第三十三卷載寶龜五年正月丁未從五位下廣川王爲_二備後守_一

高志麻呂 寶龜七年從五位下橘戶高志麻呂爲_二守後介_一

眞子 續日本後紀第三十六卷載寶龜十一年從五位下紀朝臣眞子爲_二備後守_一

正月王 同第三十七卷載延曆元年三月壬申從五位下正月王爲_二備後守_一

於保 延曆三年乙酉從五位下文室真人於保爲_二備後守_一

園人 延曆四年從五位下藤原朝臣園人爲_二安藝守_一又爲_二備後守_一

善道朝臣眞貞 續日本後紀第十五卷載承和十二年二

月八日丁酉散位從四位下眞貞卒右京人也伊賀守從

五位下伊豫部連家守之男也十五入學諸儒共推其

才行補得業生歷諸國任天長五年上表賜姓善

道朝臣七年叙正五位下八年遷阿波守是時有

識公卿一兩人依詔旨與諸儒等修撰令義解眞

貞亦參其事不赴任所五年授正五位上明年

爲從四位下眞貞以三傳三禮爲業兼能談論但

舊來不學漢音不辨字之四聲致於教授總

用世俗踏駿之音其情在進取不能沈寥比懸

車被拜東宮學士遭皇太子廢出爲備後守十

一年聖主憐其國老喚令入京諸儒言代讀公羊

傳者只眞貞而已恐斯學墜焉廼命眞貞於大學

講之後卒家時年七十八

直臣 續日本後紀第十六卷承和十三年正月七日乙酉

從五位下大枝朝臣直臣爲備後守

長岑宿禰秀名 文德實錄第七載齊衡二年正月秀名

叙從五位下一任備後守

門繼 文德實錄第七載齊衡二年閏四月散位從四位下

清岑朝臣門繼卒門繼左京人也達練世俗無他才

學嵯峨天皇殊錄恩舊弘仁四年二月爲典藥頭同八年正月拜備後守

藤原有年 文德實錄第八卷載齊衡三年夏四月藤原朝

臣有年爲備後守

眞野麻呂 三代實錄第一載天安二年十一月大春日朝

臣眞野麻呂爲備後介曆博士如故

太神庸主 三代實錄第四載貞觀元年十二月九日甲戌

從五位下行典藥頭太神朝臣庸主卒庸主者右京人也

自言大三輪大田田根子之後也庸主奉姓神直成

名之後賜太神朝臣幼而俊辨受學醫道針藥之

術殆究其奧物部廣泉沒後庸主繼塵甚收聲價

承和二年始爲左近衛醫師遷侍醫十五年授外

從五位下兼參河掾後遷兼備後掾

平麻呂 三代實錄第四十卷載元慶六年十二月五日己

卯弔張國中島郡從五位下行丹波介卜部宿禰平麻呂

卒元伊豆國人也幼而習龜卜之道爲神祇官之卜

部揚火作龜決義疑多效承和之初遣使聘

唐平麻呂善卜術依之備使員歸本朝後爲

神祇太史貞觀十年授從五位下一累歷備後丹波

介卒年七十五

藤原朝臣最實 三代實錄第四十五載元慶八年三月九

日庚申從五位下藤原朝臣最實爲備後守

氏助 扶桑略紀載 宇多天皇寬平二年任備後守

能通 同載 後一條院治安三年七月十七日備後守能

通與前大相國入道詣紀伊國金剛峯寺

藤原定賴 治安四年任備後守叙從三位公卿補任

藤原資房 長久五年十二月十四日任備後權守兼

右京大夫叙從三位公卿補任

藤原行經 永承二年正月二十九日任備後守公卿補任

藤原雅隆 長寛二年正月任備後守公卿補任

藤原實宗 保元四年正月二十六日任備後守公卿補任

藤原長方 治承二年任備後權守公卿補任

藤原宗隆 治承二年正月二十八日任備後守公卿補任

藤原賴定 嘉應二年十二月晦日任備後介叙正四位下公卿補任

藤原隆仲 應安八年任備後介叙從三位公卿補任

土肥實平附梶原景時 東鑑載賴朝卿命土肥實平梶

原景時遣專使以須下守中護播磨美作備前備中備

後五箇國上云々

櫻山四郎 太平記載元弘之亂櫻山四郎入道屬官軍

源義兵半傾備後國乘其勢以爲赴備中國

乎又入安藝國乎雨端未決時間笠置之城已潰而

楠正成亦歿矣慨然而大息遂入當國之一宮自裁

使家臣燒社頭入道常憂斯社之廢頽欲改造

之然無經營之資用思而止矣今燒之其志令人

新造之欲達平素之願望其志誠可憐矣

淺山備後守 太平記載建武之亂後醍醐天皇使淺

山備後守補備後國之守護職與兒島高德并力

攻福山城淺山兒島之軍以出其不意兩將遂敗

走

源吉安 海東諸國記載應仁丁亥年遣使來賀觀音現

像上書稱備州海賊大將梶原左馬助源吉安

源政良 同載戊子年遣使來朝書稱備後州高崎城大

將軍源朝臣政良以貞宗國請接待

藤原光吉 同載戊子年遣使來朝書稱備後州興津代

官藤原朝臣光吉以宗貞國請接待

源家德 同載戊子年遣使來朝書稱備後州三原津太

守左京助源家德以宗貞國請接待

源忠義 同載文明己丑年遣使來朝書稱備後州守護

代山名四宮源朝臣忠義以宗貞國請接待

拾史門

日本紀神代卷云伊弉諾伊弉冊生吉備子洲又云素盞鳴尊斷蛇之劍今在吉備神部許也云々而上在大和石上或又在吉備始存兩說耳又曰應神天皇二十二年幸吉備割吉備國封御友別之子分川島縣封長子稻速別是下道臣之始祖也次以上道縣封中子仲彥是上道臣香屋臣之始祖也次以三野縣封弟彥是三野臣之始祖也復以波區藝縣封御友別弟鴨別是笠田始祖也即以苑縣封兄浦凝別是苑丘之始祖也即以織部縣賜兄媛是以子孫於今在吉備國其緣也

類聚國史第百九十九卷田地部載陽成天皇元慶三年五月二十三日壬午備後國司申請貞觀十四年十一月十七日進官班田授口帳則註一萬三千四人而民部省元慶二年四月二十五日下國符稱男一萬二千九百七十四人既脫落三十人據授口帳之數將被加給三十人之口分從之

海東諸國記載備後州產銅郡十四水田九千二百六十九町二段自尾路至兵庫關水路七十五里云

云按尾路即今備後尾道也

古事談六卷云珍材朝臣從美作國歸京之日曾宿備後國品治郡令郡司女摩吾腰脚上別後懷孕生男子到七歲而郡司携彼子見珍材悅之爲己子珍材素相人見以爲此兒成長後位至二位官至大納言果然也

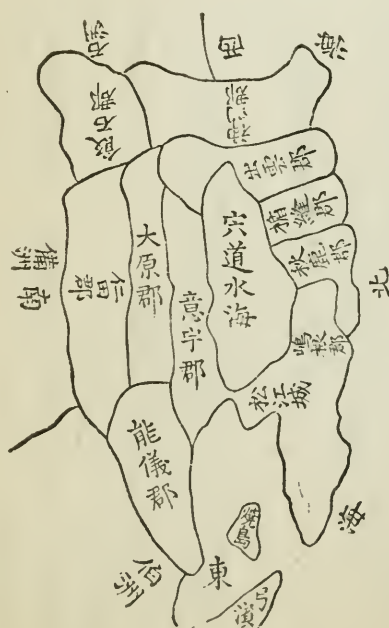
廣解文集曰凡爲備後守之人每歲以淡杼茅一合獻朝廷云々

藝備國郡志終

懷橘談序

承應二年水無月の比八雲立出雲の國司なりし令子君暇給はりて其國に下り給ふやつがれも其國の側に尺寸の食邑有ければ從ひ奉りて行ぬたらちね聞て是をよろこび暑氣をのぞく藥水毒を消す薑など包みて給り親子の天性慈愛といふ可ければ仁人の號を辭すべきにもあらずとて言を以て餞別せられけるは禮を勤め驕をやめ性を養ふ三言を忘るゝ事なかれと宜ふぞ有がたき又汝歸鞍の土産には武藏野をはじめ近江の湖までは胡蝶洞の紀行に見えたり九重の都伏見の里は我むかし豐國明神の盛なりし日東照權現宮の治たりし世に能見聞し事なれば記すに及ばず大坂の城住吉の松四天王寺などは我子や孫共の彼城の秋を訪し折々のつとに能語り侍ればこれ又記するに及ず難波津の浦より八雲立國の海陸山野の眺望十日是非共に并せざるして見せよ用捨は工夫に有べしと仰を承侍れば智のつたなき才のみじかきを憚るべきにもあらず釣する翁にとひ草かる童にたづね公務のいとまに

ゑるし侍る趙季仁が三の願の一つには世間の好山水を見つくさんといひ朱文公は徑行する所ごとに佳山水ありと聞て迂塗數十里をいとほす孔夫子も水を樂山を樂川上にいまし東山にのぼり給ふと也道機を觸發し心志を開豁にするは山水にしくはなし玄かはあれども公程心にまかせねは一步の迂塗も叶はず詠めやりたる山水村里神社佛寺人の指しをしゆるに玄たがひて筆を染侍る



懷橘談上

海陸眺望

今茲名越のはらへする日武藏國を出夏加はれるみな
月十日あまり六日難渡津に至りぬ昔神武天皇東征の
日難波の崎に至り給ひて奔潮太急きに會給ふ故に浪
速の國といひ又波花とも云今難波と云は訛なりとぞ
時しも土に旺する比なればあつさぞまさる道すがら
吳牛の如くあへぎ大暑酷吏にあへる心地して汗衫ま
ばるばかりなり偶茶店に立より或は腋風を生じ或は
避暑の飲を催さんとすれば青蠅袖に入裳を穿てやす
き心もなし國司の水曹さへ雀部氏彩船に帆を揚順風よし
といひて苛てければ令子君既に乗せ給ひ人々皆舉て
のりぬ徘徊の月海上を照し清風故人に逢てこそ夏な
き年と思ひ侍れ船即聲を揚て棹の歌を發するに耳を
傾くる人もあり

わたのへや大江の岸に宿りして

雲井にみゆる伊駒山かな

と良暹法師が歌を吟する人もあり福嶋中津川右は化
美野の嶋左は岸の姫松あれは住吉是は和泉の境の浦
江口の妙か心とむるなど西行法師に返しゑたる昔物
がたりする人もありいさり火のかげならで昔の光ほ
の見えしは葦の屋の里に飛螢世にあらば又歸りこん
と藤原の基俊がよみし御影の松など指さして教る人
もあり武庫の山を詠めて思ひ出ぬよめがはぎと云て
歌あり

住吉の遠里小野のよめかはき

あらくな吹をむこの山風

是いかなる人の歌にやしりたる人はましまさぬか
和田のみさきも程ちかしやととへば玉葉集に

夕つくひ和田の御崎を漕舟の

片帆にひくやむこの浦風

と入道前太政大臣の歌なりと吟する人もあり
けふこそは都の方の山のはも

見えず鳴尾の沖に出ぬれ

と權大納言實家卿の詠せしも是也それより西の宮こ
れなん蛭兒を祭れり夷三郎共澳の夷共云り日本紀に
記す二神蛭兒を生給ふすでに三歳になるまで脚猶不

レ立故に天の盤椽樟船に載せて順風に放乗とあり蛭
とは水蟲の名なり此神初て生れて六根不備此蟲に似
たればとて蛭兒と申大己貴命の兄事八十神も此宮の
五社の中なりと舊事紀に見えたれば我行國の神とも
縁ある宮なんめりとぬかづきて過ぬ雀の松原毘野々
もあれにやと生田の昔を聞ば天照太神の御妹稚日女
尊也藤原基隆が歌に

津の國の生田の川の水上は

今こそみつれ布引の瀧

と讀たればあなたにこそあたれりなどつぶやきけれ
ば龍縮千尺の勢も心にうかみて過ぬ十七日兵庫に至
り風止ぬれば此磯に船つなぎぬ此所に大なる浴室あ
りと見侍るに玄蘇禪師が此地にて

浴後自誇清淨身 江頭山色共相均

兼全名實古來少 地是福原民是貧

東にあたりて湊川などいへば順徳院の瀬々の夕して
の御製楠正成が軍功戦死の昔までもひ出にけり和田
の御崎經の島たどり／＼見ありきぬ昔平相國が都
移し有べしといひ松王丸を此島に生ながら築入しな
ど云傳ふれどたしかならず平家物がたりには福原の

經の島築て上下往來の船の今の世に至るまでわづら
ひなきこそめでたけれ彼島は去ぬる應保元年二月上
旬につきはじめられたりけるが同八月二日俄に大風
吹大波立て皆ゆり失ひてき同三年三月下旬に阿波の
民部重能を奉行にて築れるに人ばしら立らるべき
なんと公卿せんぎ有しか共それは中々罪業なるべし
とて石の面に一切經をかいて築れたりける故にこそ
經の島とは名付けれとあり清盛の作り給ひし春は花
見の岡の御所秋は月見の濱の御所いづみ殿松陰殿馬
場殿二階のさじき殿雪見の御所かやの御所里内裏い
づれも／＼三年がほどに荒はてたりといへばまして
今は礎も見えず奢れるものは久しからずたゞ春の夜
のごとしと信濃前司行長が書たりしもげにもと覺え
侍る此所に清盛の石塔有と人をしへぬ行て見れば弘
安九年二月日と彫りて諱も諡も銘もなしあやしや清
盛逝去養和元年より弘安九年迄は百七年後の事也清
盛の忌日は二月四日也月は同じ月なれば平家の子孫
年月をへて此石塔を建立し侍るにやと思へどゑらず
と云ふ十八日に兵庫を出て須磨の浦につく光源氏の
左邊の秋も思ひ出ぬ又松風村雨兄弟の海士塚あり謠

物に見えて人あまねくゑれる事なれ共體なる説は未
レ聞行平立わかれの詠は齊衡二年に因幡守に任じて
後下國三年過て辭退せられし時の歌なり又天安三年
に播磨守に任じ給ひし事は聞侍れ共中納言左遷の事
はゑらず伊勢物語にかたみこそ今はあだなれと云歌
をととりて中納言立わかれいなばの山歌に附會して作
りし謠物にやとかたりて過行けば一本の松あり船郎
是は盜人松と云此松の根のびあがりたる所盜せんと
おもふ夜は是をくゝりて障なければ能盜得る若又肘
臂など松にさはりぬれば其夜は止ぬと語る秦朝には
松を太夫に封じ陳朝は石を三品に封じけるためしも
有に盜人松の名を得る不幸何事ぞや伊尹が墓の棘は
皆直なる事矢の如しとこそきけ此松の根まがりて盜
人の吉凶を告るも材とやいはん不材とやいはんゑか
し材と不材の間にたてれかし孔子は渴すれども盜泉
の水をのみ給はず曾參は勝母の里より車を歸し給ふ
ぞや此松は詠てよしなし船急ぎ仕れとて過ぬ又此浦
に若木の櫻といひて名におふ一本あり彼松とは異也
源氏物語にうへし若木の櫻ほのかに咲そめて空のけ
しきうらゝかなると紫式部が筆の跡とめしより紫宸

殿常寧殿の櫻共色をあらそひ吉野高間の花よりも名
高し詩人騷客皆心をよせぬ洛陽の人は牡丹を花とい
ひ成都の人は海棠を花といふ我朝の人は櫻を花と云
も品格超絶たる故也生田のほとりに三位通盛の塚も
ありなど舟人指點してをしへぬ一の谷手蓋の岸鷗越
山の半に段々あるは平家の陣嶺に一樹の松有は鐘か
け松此松は義經金鼓をかけて諸卒の進止を整へられ
たりとぞ爰なん源平の古戰場とはあまねく人の聞傳
へし事なれば洩し侍る磯の邊に苦むせる石塔あるは
敦盛のゑるしと云數百歳の後に行人皆睫を濡してけ
り又一の石塔あり是は境の商人此沖にて船を覆し死
たるを相馴し遊女が建たりといへど是は虚説也一と
せ豊臣秀吉公三韓征討の時筑紫名護屋へ出陣の海路
にて豊臣の船曹明石與次兵衛と云者船を洲に乗かけ
既に危く見え侍りしを兎角してをし出しぬ豊臣大に
忿て長門の國下の關内裏と云所にて自殺せしめぬ彼
明石が妻是を傳へ聞てなきかなしみ石塔を立たるに
てぞ有けると語る其日の暮に播州室の湊に船をつな
ぎぬ此明神は上賀茂同體にして別雷神也新古今弘法
大師の歌に

法性の室とはいへと我すめは

有爲の波風たゝぬ日そなき

と讀みしも殊勝に覺へぬ十郎藏人行家が平家とたゝ
かひ負て萬世の包彈をまぬかれざるも此所也など語
りてとかくせし間に順風吹出て眞帆をひき室の泊の
朝風に聲を帆に揚て船を出し明石の浦を詠やり彼人
丸が此浦の朝霧に扁舟を思ひて詞を綴りし昔もおも
ひ出で

明石屢回首

清波洗塵垢

有昧人九歌

世膾炙人口

春宮の太夫公實が

我こそは明石の迫門に旅ねせめ

同じ水にもやとる月かな

とよみしは今朝の曉の月の残りしも同じ詠ぞといと
おもしろく高砂の松に昔をとへば颯々の聲まきりな
りまかまのかちろといへるはかちんを染る名所なれ
ばまかまにそむるかちろより來ぬと萬葉集にも見え
たりあれは姫路など指して過行ば左は淡路右は明
石の浦其間わづかに一里ばかり也淡路は國の初めな
ど人のかたりければ

潮満風閑碧玉流

揖師指點四方洲

扶桑六十可成弟

上古先生淡路洲

榕葉つばきはが嶽も見えけり鳴戸の沖もあなたにこそと語れ
ば新後拾遺の歌おもひ出ぬ

淡路かたせとのをひ風吹そひて

やかてなるとにかゝる舟人

江島も程ちかしなどいへば

赤石瀉江島をかけて見渡せば

霞の上も沖津白波

と俊成卿の歌の心も今さら目の前に見えたり夜に入
て船こぎ行程に數十里の海上を過て十九日の曉天に
備の前州片上と云所につき郷關の眇邈はるけきことをなげき
侍れば乾櫓かんろもほらひにけり驛馬に跨りて和氣鹽田の
里これより美作の國と云うばらからたち生茂りてと
みに行べくもあらず吉ヶ原坪井久瀬など云險難を
過行程に谷川のいさぎよきに爰を瀬にふす鮎のこゝ
らさばしるをさてさしてすくふも興あり嶺に攀のぼ
れば咽乾き魏の武帝の梅林をおもひ出谷に下りて水
の流を求れば人はこぞりて渴羗のごとし或は逆流に
舟浜りて魂を冷し或は石蹊の梯危に肩を潜め向上れ

ば青壁萬尋直下せば碧潭千仞深き谷地を帶り崖岸の形を鑿もて穿ち高き嶺天に横りて崗巒の勢を刀をもて削れり人の跡は及罕にして鳥の道のみぞ纔に通へり馬の蹄疲れ人の脚乏みてたどり行程に巖洞のふかくうけたるが三つならびてあり南の洞いとひろくふかし俗是を鬼の穴と云千萬尋の石壁峙て君子の立べからざる所誠に鬼のすむべき所なりけり數十里行ぬれば穴窄くして身を斜にしても行がたければ人其源をえりがたし翻翻多く飛むらがり水滴り石滑なり聞き事五更の如く出れば又午天也古老傳て云此窟へ犬を入ていはやの口を閉たれば東五六里ばかりをへて一つの里に出たり是を犬の庄と云など語り侍る彷徨徒倚詠れば山靜に水清く無量の石岸虎の立がごとく豹の蹲が如きあり誠に靈奇しき目にも見ず耳にもきかざる所也高田の驛は硯石の出る所也柳州の山水興平の石穴より出たる石にもおとらずなどほこれり里を過て高田こふじろなどいふ嶮難あり此國にて岨の細道をこふじろと云徑路とかくにや三嶋の邑新庄の驛を経て嵐峰より下は伯耆の國なり四十曲といふ行路難あり九折の道四十有餘ヶ所有なればかく云

ならし暫旅屈を慰せんが爲に絶句作る

往下深溪還上岨 榮廻曲路四十餘

絶嶺自_レ此伯國界 艱嶮兩州同一如

劔閣褒斜と云共是に比せば平視すべし我昔奥羽二州率土濱まで見たりしか共かゝる非常險阻は見侍らず或は細き葛を縁り或は壯夫に扶られ國の制禁をも恐れず若き人も杖をつき世の無禮をも憚らず貴き人も祖き大木杯を攀が如く邪許を呼てぞ登り侍る先に進む人の髻は跡に歩む人の沓のはなより猶卑し一夫忿れば三軍も進みがたきは此地形なるべし板井原根兩部溝口など云ふ所に田舎びたるいと目なれぬ山の形のみ多し霧ふかうしては妖魅を栖しめ雲あつうしては杜鵑をうらみ谷水激して時ならぬ雪を飛ばし翠松をびへて天を拂ふ弓手にあたつて高山傑出せり其形勝富士に肖たり人にとへば伯耆の大山といふ語て曰大山の大智明神は稱徳天皇の時神託によりて社を建たり山下の砂夕に山に昇り朝に山をくだる其前岡に松あり枝必神前を指とぞ本地は地藏菩薩也昔俊方と云人此地に狩して多くの鹿を射侍る俊方常に地藏を念じ家の内に像を安じぬ一日狩して歸り彼像を

見るに終日鹿を射ける矢皆佛像に中れり俊方大に驚きて自警を截り宅を捨寺となし殺生戒をたもてり又法隆寺の明達と云聖法華經をよみけるに七卷に徹して第八卷を誦する事不能年月を經れ共かなはず稻荷泊瀬金峯山などに詣で、祈れども其感應更になし明達又熊野に參り百日祈りしに神夢に託し住吉の明神に祈れと又住吉に參れば伯耆の大山に祈れと託し給ふ明達此上に上りて祈りければ神告げ給ふ作州の人此山に登り牛に糧を負す其人は神祠にまふで、牛を僧房になぎ置侍る僧房の比丘夜更て法華を誦す牛是を聞て慈善の心をぞ生じ侍る第七卷に至て夜已に明けぬれば牛主牽て歸り八卷をばきかでやみにけり彼牛は汝が前身也聞法の功力によりて今比丘の形を受法華をたもつ事を得たれども第八卷を聞ざりし故に讀事不能今よりつとめて來世の善果を策れと示し給ひて夢さめぬ明達一心に手を合ていはく畜類すら法を聞て人身を受たり何に況や人身をや説のごとく修行せん夙因を聞て神の呪報じがたし生々世々に誓ひて法華を持ち大菩提を證せんと有がたくおもひて下向し侍と語て行しほどに一絶を賦して曰

諸峯兒子大山尊

況是有靈名自存

聞法痴牛今在否

牧童不_レ對過_二前村_一

行々てあれこそ伯耆守長年が楯籠し船上山後醍醐天皇再び帝位に即せ給ひしも名和が戰功なりとむかしを思ひ出で今一しほと詠やりぬそれより米子と云所につく是は相模守光仲が陪臣在原の庶流荒尾氏が守りし城ぞといひつゝ行けば我古郷を出てけふ幾日青海原の鹽あひをまのぎ八重たつ雲の山路を分て漸く出雲の國吉佐の里につく今年五月の初より早魃苗を枯し萬民悲みし折しも令子君此國に入せ給ひし日より甘雨くだりて草木も蘇生し侍れば雲陽に麥ふれりと野人は拵てよろこび浦々の蟪蛄も去て又還れりと漁夫は腹を鼓していさみ侍るぞ目出度き

出雲大概

千早振神代の昔_{やつかみのをんつ}八束水臣津野命八雲立と詠せしより國を出雲と名付け三十一字の權輿風賦六義の濫觴也誠に此國は神明道をひらき天險疆を堅うし土肥民富國風淳にして而も工商の業を通はし魚鹽の利に便ある所也其上君は時を以て使ひ賦を薄くし民は東作

西收を專とせし故に神人和して雨露したがひ寒暑も時有本より神仙の遊窟なれば神社三百所内百八十四所は神祇官に記されたり郡の數は九つ今は十郡後に委しく註せり郷の數は六十里の數は百七十九とぞ風土記にも見へたり今計り見るに東西二十三里南北十七里國の大體震を首とし坤を尾とせり此國にて十月を神在月と云事祠官の常談也吉田兼好が書たりしは十月を神無月と云て神事に可憚由は記したるものなしもと文にも見えず但當月諸社の祭りなき故に此名有か此月萬の神達太神宮へ集り給ふなど云説あれども其本記なしさる事ならば伊勢には殊に祭月とすべきに其例もなし十月諸社の行幸其例もおほし但おほくは不吉の例也と詞林采葉抄に曰く一天下の神無月をば出雲の國には神在月とも神月とも申也我朝の諸神參り集り給ふ故也其神在の浦に神々來臨の時小童の作れる如くなる篠舟波上に浮ぶ事數もえらず諸神は彼浦の神在の社に集り給ひて大社へは參り給はず此神在の社は不老山と云所に立給ふ神を佐陀明神と號すと申也是則傳奏の神にてまします大社をば杵舂明神と申也別當をば國曹と申也大社は素盞鳴尊に

ておほします日本國の諸神は天照太神をこそ宗廟の神なれば尤尊敬有べきに何とて此大社を御祖神として參りあがめ給ふと不審あるに其子細神祕なる也と此説も又覺束なき事共なり篠舟波の上に浮ぶ事を尋ぬれども玄かあらず又佐陀の緣記を見侍りしに初二三葉は日本紀混沌未分より天神七代地神五代國土出生の次第を書て後は佛菩薩の化現毛胡利などやうの妄言卑俚の説を書つらねたり其略に曰異國の諸神當社へ來り集る事須彌の南方の諸國同して日本國中大小の諸神毎年十月に必ず當社へ來り給ふ十一日より廿五日に至るまで不退散毎年異國よりの獻物に二蛇あり其形尋常の蛇と異なり海の水泡を聚め箱のごとく是をつゝみ彼兩蛇は惠積の津に著也今小浦伊非諸濱といふ蛇の背に龜甲輪の紋あり當社大明神は本朝の宗廟諸神の父母にて御座也然る間諸神孝行の義をあらはさんがために必當社へ來り集り給ふなり此故に他國は十月を以て神無月と名付當國には十月を以て神在月と號するは此義也十月廿五日午の刻に社人等幣を捧て神の目山に登り異國の諸神を送奉る當社よりの獻物には那羅の葉一百枚へつかづも染葉一百根十六艘の舟を造り十三艘の舟に

は是を盛二艘の舟には異國の諸神を乗奉り給ふ社人
高聲に御船夫と呼其時三郡の内禽獸一つ必死此船夫
と成事往古より今に至て不_レ違也此十五艘の舟神を
以て七重の籬を結十五艘の舟を其中に置株を以て船
の尾を透し其株地に入事二尺計固して不動神在の間
社人輪番に是を守る然といへども其船或は一艘或は
二艘此七重の籬を穿て出る事あれば天下に必凶事あ
り四月も又神在と云事住吉大明神は諸神當社へ來臨
し給ふ故國家守護のため毎年十月出給はず明る四月
十一日に當社へ來り給ふ故に十月の如く神事を修行
奉る故に毎年二度神在と云也と書たり或神書に曰伊
弉册尊一年の内に生滅をはらはし十月に死して十一
月によみがへり給ふ十月を神無月と云は是也十月に
大社へ諸神會集し給ふ故に神無月と云本説なしとい
へり八雲御抄に十月神無月出雲國には鎮祭月と云と
あり然は神在と書に非ず羅浮子が曰卜部流の神書を
說者書けるは素盞鳴のかくれましますは十月也是故
に十月を素盞鳴のつかさどり給ふべき也と勅しまし
ます故に諸神出雲の國へ參り給ふ故に出雲には神在
月と申と語りき兼好すでに其家に生れて神道をゑる

べき人也然れども此兩説こゝに沙汰せざる時は本據
とするにたらざるか十月を陽月と名付る事は陽なき
を疑ふと東雅などにもあり十一月は初めて一陽來復
する故に十月は極陰の月也されども陽月といふ陽の
果して絶無なるまじき道理なり陽神のなき月と云儀
にて神無月と名付るかと料簡する人もあり予謹て案
ずるに梁元纂要曰十月孟冬を上冬といひ陽月と云と
あり詩の采薇篇に曰く采_レ薇采_レ薇歲亦陽止傳曰陽は
十月也時純陰用_レ事嫌_ニ於無_ニ陽故に名_レ之曰_ニ陽月_一也
然れば唐にも陽月と云極陰の月なれば陽なき月とい
ひ陽の絶無の理なければ陽ある月ともいふべし陽を
神と訓する事又其理なきにしも非ず上は陽にて神な
り上をかりて神と訓せり陰は鬼なれば陰の字をかり
て鬼と訓せるが如し然れば詩の歲も又陽止とあるを
かみな月ともかみあり月ともよむべし出雲にては神
在月他國にては神無月といへる神道の奥義有とぞ當
國は古より不思議のみありし國なり推古天皇廿五年
六月此國の神戸に瓜あり大如_レ缶是歲五の穀登れり
意宇秋鹿出雲神門の諸郡皆神戸あり何の神戸にや玄
る人なし又齊明天皇四年此國より言北海の濱にて魚

死たり積厚き事三尺計其大さ鮎の如く雀の啄針の鱗あり鱗の長さ數寸俗に曰雀海に入て化して魚となれり名て雀魚と云庚申の年七月に至りて百濟使を遣し奏しけるは大唐新羅力を併せ我國を伐既に義慈王の後太子を虜にして去りぬこれによつて國家兵士甲卒を以て西北の畔に陳ぬ城柵を繕修山川を斷塞の兆なりとぞ不思議なりし事共也抑此國は八雲立出雲八重垣の陰に立よりて歌よむ人も多かめれと思ひ人に尋ね侍ればさはなくて和歌の正風も變じ神樂の律呂も亂れて今は夷曲たりし歌舞伎と云ることを近き頃久仁と云巫女が舞出したり白拍子の朔半にや抑白拍子の起は信濃前司が説には島の千歳和歌の前を初とし兼好法師が物語には磯の禪師を根元とせり昔通憲入道舞の手の中に興ある事をえらびて禪師に教て舞せけり白き水干にさうまきをさゝせ烏帽子を引入たりければ男まひとぞいひける此頃のかぶき初は僧衣をきて鉦をうち佛號を唱へて念佛躍といひしに其後名古屋山三郎といふ者久仁に刀をさゝせ頭をつゝみて早歌を教へまはせければ歌舞伎と云羅浮子此事を惺窩にかたりて世の風俗の衰へたりし事を悲めば惺窩

これは胡元の天魔舞にたりと申されしと也彼歌舞伎の歌に比太の横田の若苗とうたふも皆出雲國の里の名にしてこの國よりぞ初りける貴賤是を興じてけり誠に鄭衛の驕情浮靡の習ある國なりかゝる淫佚の舞なれば寛永年中に是を制禁し給ふ又小童を女の形に出立せてまひける程にいよゝゝ男色にふけりて淫風猶甚し秦の符堅が時に一雌又一雄習ひ飛て紫宮に入とうたひしも實もとぞ覺へし鄭聲の雅樂を亂り淫聲の風俗をまよはす事上に惡ませ給ひければ今は小童の舞をも制し給ふぞ目出度き正始の道行れ王化の基立て二度上古の淳風に立歸りなんとぞおもふ抑俗間にいふ出雲國むすぶの神とはいかなるゆへにや分明の神書舊記ありもやすらん我未^レ見而かあれ共伊弉諾伊弉冊は日域男女の元神なれば此陰陽の神をいふ成べし夫婦配耦は神力にあらずば有べからず唐に韋固と云人婚を求て宋城の店にやどりしに客ありて議しけりは潘昉が女は明旦隆興寺の門にて期約すべしとなり韋固行て見れば老人布囊に倚り階に座して月に向ひ書を見るにぞ有ける韋固立よりて是は何の書をよみ給ふぞや老人是は天下婚姻の書なり囊の中

にはいかなる物や侍る曰赤繩子あり夫婦の足に繫れば讐敵の家吳楚異郷富貴懸隔たりといふとも此繩一たびかけ侍れば終に邂逅べからずと語りける韋固が云吾潘昉が女を娶らんと思ふ事成べしやといひければ老人曰汝婦は適に今三歳也十七歳になりて君が門に入べしとぞいふ韋固が曰其女は何にありや老人曰店の北の市に菜を賣嫗が女也君見まく思ひ給はゞ見せ奉るべしとて夜明て市にいざなひ行見侍れば菜をうる一人の嫗女を抱きゐたるが甚醜かりけるに指さして示しぬ韋固驚き侍れば老人は行方玄らず失ぬ韋固時に奴に申けるは此女を殺しなば汝に萬錢を與ふべしと約しける程に奴喜びて明日市に行彼嫗が女を劍にて刺てぞ逃たりけるされども命死までもなく眉に創けるがかくて十四年をへて相州の大守王泰が女を韋固に妻し侍る常に眉間に花鈿を貼侍る容色類ぞなかりける年頃相馴て是を尋聞侍れば王泰が姪也父は宋城の宰たりしが父死して後乳母是を養ひ市に出て菜を賣朝夕の資として過しけるが一日賊人來て刺ける乃に眉を傷られける此女王泰が姪なれば哀におもひ養ひて己が女とし撫育して今韋固に妻けるぞふし

ぎなる是よりしてぞ婚成を喜諸月下老之書といひ又は赤繩繫足とも申侍る此故也夫婦は人倫の始なれば神力の助にて人力の態に非ず彼月下老人はむすぶの神の類なるべし善相公曰我朝家は神明統を傳へ天嶮彊を開き土壤膏腴にして人民庶富り故に東の方肅慎を平げ北の方高麗を降し西の方新羅を虜にし南のかた吳會を臣とし三韓入朝し百濟内屬す大唐の使驛於焉賒を納れ天竺の沙門爲之歸化す其所_二以爾_一者何也國俗敦樸にして民風忠厚也賦稅の科を輕くし徵發の役を疎にす上仁を垂て下を救ひ下誠を盡して上を戴き一國の政猶一身を治るが如し故に范史是を君子の國といひ唐帝其倭皇の尊を推す羅浮子曰夫我邦は天神地祇の鎮所にして靈仙異人の産する所也太陽耀靈於是赫暉たり扶桑若木於是榮揚す洪波大瀾之所_レ激湍千山萬島の秀出する處推て君子の國と稱す固に當れり且夫元氣の淳流運會の隆熾時に太人才子を挺出する事勝て數べからず於是予亦云豐葦原の國の中にして邦畿千里は姑舍之彼八雲立國は神祇集會の地にして陋邦僻壤の比にあらず世人我祖神追慕の情はなくして異域無縁の法を慕こそ愚なれ佛法の

息を去りぞけ一氣の元源を汲こそ皇道神道二つにし
て一つなれば理當心地の神道とこそいふべけれ神道
は天性なり天性は父子の道なり父子の道たつてこそ
一氣の元源も立べけれ其親を不_レ愛して他人を愛し
ぬる是を悖德と云其親を不_レ敬して他人を敬する是
を悖禮と云と聖經にも見えたり彼悖德悖禮の人は神
道の巨敵聖門の罪人なり鼓をならして攻つべし偶其
弊を知人あれども其位なければ流俗の塵に同じ光り
をつゝみて獨り樂しむ君子もあるべしとぞおもふ

意^お宇郡附能儀郡

能儀郡或は能美に作る風土記に能儀の郡見えす思ふ
に聖武天皇の御宇天平の後意宇郡を割いて兩郡とせ
しか知れる人に尋ぬべし安來は昔意宇郡に見えたり
今は能儀郡に屬し侍れば後世二郡とせし事猶明なり
意宇の社あれば郡の名とせり此國の風土記を記して
國人奏覽せしは天平五年也今年承應二年迄通計一千
一十一年也

安來

安來の郷今は能儀郡也昔神須佐烏命天の壁立廻し座
す時に來りて此所にましまして吾御心は安く平かな
りと語ふ故に安來とは云ふなり淨見原天皇甲戌の歲
七月十三日安來の北の海にて猪麻呂が女の脛をわに
くらひてけり父猪麻呂なきかなしみて天神地祇當國
にまします三百九十九社及海若等大神の和魂は靜り
て荒魂は皆悉くより合給ひ神靈ましまさばあるしを
見せ給へと天によばひ地に踊りしかば須臾ありてわ
に百あまり一のわにを圍繞して來れり其時父の猪麻
呂鉾をあげて一のわにを殺しければ百餘のわには解
散りぬ彼わにを割てみれば女子の一脛ありわにをば
串にかけて路のほとりに立たりとぞ今の世の人の過
を文り非を遂て天神地祇の冥鑑をも恐れぬ人はかの
わににもおとりたるなるべし鹽谷高貞が討手の大將
山名伊豆守時氏子息右衛門佐師氏も此所に陣どりし
たるとなり

母理

母理の郷は今能儀郡なり大穴持命青垣山廻給て守る
と詔故に文理と云聖武天皇の御宇神龜三年に字を母

理と改めぬ大社の左に母理と云所ありこれ御神の御旅所と云此地を杵築へ移したるなるべし

富田^{トタ}

富田今は能儀郡也此所に古墟あり古老傳へて云昔惡七兵衛景清初て築し城なりと此地に八幡の社ありしを景清祈て曰爰に城郭をきづかんと思ふ願くば神社檀をかへ給はんや否やと闔をとりしに遷座ましまさんと闔をとりて大に悦び白羽の矢を闇夜に虚空を射て矢の落たる所に社を建立し奉らんと誓ひて射ける程に其矢の落たる所に社を建て侍りぬ今の富田の八幡是なり彼白羽の矢今に傳へて神寶の第一とす曆應の比鹽谷判官高貞も此城に居住し後醍醐の天皇に奉りし月毛の龍馬も此所より出たりとぞ明德年中に佐佐木治部少輔高範此國を領し鹽谷駿河守も此城を守りぬ尼子氏も世々此城に住せり尼子左衛門尉晴久卒して子義久嗣家然るに義久驕甚し義久の叔舅尼子刑部少輔同式部少輔兄弟智勇兼備たる臣なれば義久の傳となり時々諫言を奉れども更に信じ給はず時に毛利元就雲州を併吞せんと心を盡し問者一人商人に眞

似て富田へ遣はし國の政道人の善惡を察し給ふ然に義久一人の瞽者を寵し給ひ朝夕側に有て好色不義の物語のみして酒をすゝめ惡をむかふ故に行儀日々に惡しく成給ふを家の長刑部式部是をかなしみ瞽者を追はらはんと議しけるを聞て義久に訴へいとまを乞て京へ上り侍る問者此由を聞て急ぎ元就に告ければ元就謀をめぐらし律義なる瞽者に密謀をいひ合同く京へぞ遣はしける去程に備後の輅にて雲州の瞽者に逢ひ同船して打解物語などし侍る程に尼子刑部兄弟元就と入魂の事をぞ語りける雲州の瞽者去らぬふりにてよく尋ね聞侍るが漸く舟は津の國尼崎に著ければ藝州の瞽者京へ上り雲州の瞽者は用ありとて尼ヶ崎に留りそれより取てかへし直に出雲へ歸りけるが義久に告てければ義久大に恨み程なく刑部兄弟を闇打にゑてけり吁義久は瞽者を用ひて國を亡し元就は瞽者を用ひて國を起し給ふ況や智徳ある臣皆大將の用捨にありぬべしかくて問者元就此由を告ければ元就大に悦び計畧成就しぬと弘治三年正月下旬より石州吉見大藏政頼に牒し合て其外益田全貞入道祖式數布出和羽根佐波等悉く歸伏し侍る永祿三年二月上

旬吉川元春小早川隆景を先鋒の將とし嫡男隆元を右將とし穴戸隆家を左將とし我身は三月廿八日藝州を打立石見路を経て雲州神門郡に屯し諸寺諸社へ安堵の狀を下し高ノ瀬米原平内神在等の城を攻落し楯縫郡横撫山に陣を張り諸卒雲霞の如くなびき宇賀、満田、平田、東江、西江、國富、林木、まで充滿せり處々の城廓或は降り或は屠り凡雲州十郡の中七郡は元就に歸伏し島根意宇能儀三郡猶未レ降尼子に屬し侍れども白髮の城既に攻敗られて大將元就は熊谷伊豆守信直子息兵庫頭隆直を召て富田へ遣し城の虚實地の死生を見せらる永祿八年正月の下旬先登の軍士荒隈の陣より直に富田へ馳向ふ小早川熊谷の一族駒返山を経て成恩寺山に陣す同二月朔日元就湖水に船を浮べ府中をへて境良木山に屯す後陣は川尻に支へたり吉川元春は八幡山に帷幕を張り翌日早旦に小早川隆景川端に打臨て矢軍を初め大將凱歌を執行ひ給ひて後は一尙普請の用意なれば中々敵は是に氣を屈しける元就の歩卒に小河内と云者長七尺計にして勇猛強力の人あり度々の高名あらはし侍る程に大將近習の士にめし加へてぞ仕れける雲州尼子が内に山中鹿之助

といふ勇士ありと聞くいかにもして彼と雌雄を決せんと朝暮ねがひけるが極の若葉を鹿が喰は必ず角を落し狼には鹿も喰殺さるゝといへば鹿之助をうたんな者は我なるべしと自負して常々廣言を吐自名をかへて極木狼介とぞ名乗ける或時鹿之助唯一人下部に眞似て城外物見に出けるを狼介是を聞て天の與る所と悦び急ぎ堤のかげよりねらひ寄て鹿之助に近付極木狼介と名乗ければ鹿之助申けるは麒麟の二字は鹿を偏にして毛獸の長たり狼などは蟪蛄が斧を以て車に向ふに似りと嘲笑ひけるを狼介走よりて二つ三つ大刀打していざ組んとて引組ぬ鹿之助は氣早なる士なれば組とひと敷刀を抜て組ながら狼をつくつかれて弱る所をはね返して首をとらんと云ける所へ敵大勢よせ來りければ首とる隙もなく引退にけり鹿之助は本來士にて優に素生ければ色白く髪黒く言葉もさまで不レ賤長け高く横脹肥たる男也狼之助は元來下郎なれば色黒く髯赤く口は耳の根までさけて大の男の言葉だみたるが無双の大力なれば組打にはたやすくかちなんと諸人おもひしに鹿之助は武功の者なれば組と同じく刀を抜てまきりに下より突ける故に敵を

ばやすく打てけり同八月十五日寄手稻薙に出けるを城中より見すまし鋭卒をすぐり出して向ひけるを寄手幸と悦び四方よりをり合て攻戦ひすけ入にせんと勇みかゝれ共城中つよく防ければ力及ばず新宮谷より吉川元春矢田崎より宍戸隆家馳合て敵を二つに追靡け多く首級を得たり尼子が勢も城中へ入兼たりし者共は皆清水寺吉田山邊へ逃たり時に國中降參の武士共連判の狀を書義久和を乞給へと云遣しける義久は再三合點し給はざりしを少將と云女房とかく申されければ義久心たゆみて終に和睦し翌日義久城を出給へは宍戸熊谷兩人に預けらる吉川元春は雲伯兩州の守護として此富田の城にをかせ給ふ其年の暮に元就藝州へ凱旋し給ひ尼子にも采地少々宛行れけるとぞ聞えし抑天文年中に鐵砲我朝に渡り漸く國々に流布しける然に此城は弓の術計にて鐵砲には便り宜しからずとて慶長年中に當國の守護堀尾帶刀高階吉晴子息出雲守忠氏と相議して此城を松江へ移し侍るが忠氏早世して祖父吉晴嫡孫山城守忠晴と共に慶長十三年に松江の城へ移り給ふ程に富田の城は草のみ生

茂りて野人の住家となり侍るを見て

富田古壘起_ニ秋風_一 村老銷_レ兵今事_レ農

到此諸郎論_ニ地利_一 人和不_レ識有_ニ新功_一

と口にまかせて吟じ侍る

岡庄

岡の庄今は能儀郡_ニ此所に清水寺と云寺有洛陽の清水寺は寶龜九年沙彌延鎮白衣の老翁に逢て延暦十七年鎮守府將軍坂上の田村磨妻善の高子と力を助て寺を建同二十四年に功畢る此清水寺は洛陽の清水寺より以前に建たりなど云道風が朗詠集義之が千字文にや覺束なし又雲樹寺と云寺あり是は法燈圓明國師の法嗣孤峯覺明禪師の開山なり三光國濟國師と申せし人なり古老傳て曰昔一の化人來りて國師に作禮して參得し傳衣を得て血脈など附屬し歸りしを見れば二十尋の大蛇となりて飛去ぬ其席を見れば大なる鱗を落せり今に此寺の重寶とせり後に杵築の社を開きて見れば國師附屬の袈裟あり扱こそ國師は大明神に佛法を傳へられたりと人あまねく信ず彼けさも今にありとぞ兼好法師の草子にも世に語り傳ふる事まこと

はあいなきにやおほくは皆空言なりと又世俗の虚言を懇に信じたるもおこがましくよもあらじなどいふも詮なければ大かたは誠しくあいしらいて偏に信せず又うたがひ嘲るべからずといへる實にもとぞおぼゆる情思ふに玄賓僧都が三輪の明神に衣を授奉り佛鑑禪師が北野の天神に附法したりしなど云彼三光國師と同日の物がたりなり佛神のきとく權者の傳記さのみ信せざるべきにもあらずとこれも兼好が筆談なれども又思惟有べき事にや

尖道

尖道の郷は大穴持命追給ふ猪の像兩山に二つあり一つは長さ二丈七尺高さ一丈周五丈七尺一つは長さ二丈五尺高さ八尺周四丈一尺と云へり猪を追ふ犬の像長さ一丈高さ四尺周一丈九尺其形石となりて猪犬にことなる事なし故に尖道と云天平の頃まで猶在といへり里人に尋れどもさだかならず飛鳥川の淵瀬常ならぬ世なれば土は埋れ侍るにや弘治三年毛利元就當國發向の時此尖道の城を攻給ふ城主尖道五郎兵衛尉防戦に及ばず降りぬ今按に堅六里横三里の湖水あり

是を尖道の湖と云又は佐太の湖とも記には見えたり末次の里より伯州米子まで七里の舟路也湖水の中末外赤壁十六禿など云湖水の左右一步に一景十歩に十景水瀾々花繁々柳葱々蘆莫々鳥關々魚潑々戸重々樓亭々船搖々人來々無聲の詩にも有聲の繪にも寫しがたきは此風景なり

佐々布

佐々布の神社白石より西十餘町にあり鹽谷判官高貞都を落て此國に下りし時籠城せんと謀りしも此山なり高貞自害し侍る時木村源三首を泥土に埋し深田今は少き池となりていかなる旱魃にも洪水にも不_レ盈不_レ減と里の翁語り侍るそれより里の名を高貞と云皆尖道の郷の内也

忌部

忌部は國造朝廷へ參向の時御休し忌給ふ故に忌部と云ふ

熊野山

熊野山は熊野の大神の社まします檜檀ありと風土記に見えたり今は賣炭の翁おほし國造火を嗣ぐ時火割の板とて火をもみ出す木を此山より出せり弘治三年毛利元就當國發向の時此熊野の城を攻給ふ城主不_レ及_二防戰_一子岩松丸を質に出し和を乞ふて解ぬ岩松丸は無双の男色たりしかば元就近習に召加られ侍りぬとぞ

玉造山

枕草子に玉作りの湯とあるも此地にや未_レ詳

玉造山按するに記に曰忌部の川邊に湯を出す出湯の在所海陸を兼たり一度濯へば則形容端正也再あらへば則萬病悉除く古より今に至る迄驗を得ずと云事なし故に俗人神湯といふとあり今玉作りの湯と云あり是成べし玉作湯の社一座と記に見えたり今俗に湯谷の明神と云是成べし彼驪山の神女溫泉を出す類にや

布自奈

富士名に布自奈の明神あり昔後醍醐の天皇船上山へ

潛幸の時鹽谷判官と一所に一番に參り叡威に預りしは此富士名の判官也

賀茂

賀茂は大穴持命の御子阿遲須枳高日子根命まします葛城の社此神の御子なる故に鴨と云神龜三年字を賀茂と改む古事記云大國主神胸形與津宮の神多紀理毘賣命を娶ましゝて阿遲鉦高日子根の神を生り此阿遲鉦高日子根神は今賀茂の大御神をいふなりと

乃木

乃木保に能儀の明神あり又善光寺と云寺あり古記には見えす寺僧の語りけるは此寺の本尊は三國傳來の如來にて然も金佛なれば盜人幾度か盜取侍れども佛祟りまして歸り給ふ緣起の趣は一崎山善光寺の如來は阿難迦葉の御作閣浮檀金一磔手半の金像生身の彌陀極樂の教主也昔天竺月蓋長者安置供養中に依て百濟の清明王となる然則是を百濟國に移し給ふ一千二廻の間衆生を利益し給ふ其後欽明天皇の御宇貴樂元年壬申十月十三日吾朝攝津國難波の浦に渡り給ふ其

比守屋の大臣惡逆天下一統の亂をなし神明伽藍に火をかけ空敷如來を難波の堀江に沈め程を経る事三十四廻也然所に東山道信濃國伊那郡の住人本田善光在京の時靈夢を蒙り堀江より擔ぎ奉りて如來を得たり程を経て鎌倉の御所相續て崇敬し給ふ事不_レ斜爰に又宇多天皇九代の後胤佐々木源三秀義が四男四郎高綱既に發心修行の志ありて此如來を負奉り法名心瀧房と號して廻國有然者此尊容心瀧房に對し奇瑞ありて雲州伊宇郡乃木保に此山を開き給ひ當寺建立せしめ如來を移し奉る事後宇多院御宇建久元年庚戌二月十五日也其時心瀧房常に阿彌陀を念じ此尊容を安置供養し終に往生の素懷を遂給ふ也と記せり平家物語には善光寺の如來は昔中天竺舍衛國に五種の惡病起つて人僧多くほろびし時月蓋長者がちせいに依て龍宮城より閻浮檀金を得て佛目蓮長者心を一つにして鑄あらはし給へる一チャクシユハンの彌陀の三尊三國無双の靈像也佛滅度の後天竺に渡らせ給ふ事五百餘歳されども佛法東漸のことほりにて百濟國に移らせ給ひて一千歳の後百濟の帝清明王我朝の帝欽明天皇の御宇に及びて彼國より此國へ移らせ給ひて攝津

國難波の浦にして星霜を送らせおはします常に金色の光をはなたせ給ふ是に依て年號をば金光と號す同き三年三月上旬に信濃國の住人大海本田善光都へのぼり如來にあひ奉り頓ていざなひまいらせ下りけるが晝は善光如來を負奉り夜は善光如來におはれ奉て信濃の國へ下り水内の郡に安置し奉りしよりこのかた星霜は五百八十四歳とぞ書侍る然ば則信濃と當寺といづれが生身の如來にてましますと問ければ寺僧申けるは彌陀の三尊とは觀音勢至彌陀の三尊とは申せ共月蓋長者が鑄奉りしは彌陀一佛三體也三尊共に傳來し一佛は信濃の善光寺一佛は何の國か我是を忘れき一佛は賴朝の守り本尊たりしを佐々木高綱廻國修行の時右大將より申請たりとぞ故に四郎高綱が塚も此寺にあり四郎が髑髏も是に有とて見せ侍る

拜志バイシ

拜志は大穴持命御幸の時此所樹林茂生す爾時に詔く吾御心の波夜志と詔ふ故に林と云ふ神龜三年に字を拜志と改ぬ

大草

大草の郷は須佐乎命の御子青幡佐久佐日子の命まします故に大草と云

野城

野城は野城の大神の坐す故に野城と云又野白の明神あり今民家よく紙を造る國司直政公越州より紙の上手をめし下して水能に隨て爰に居らしめ給ふ播州越州濃州等の紙に勝れり

來待附菅原

來待俗來海と書誤り乎來待川あり古記に見えたり來海の明神座す此所に菅原といふ里あり昔菅家の素生し給ふ地なり菅君幼稚の御時梅の核を糸にて貫き集め植給ふ故に今に至るまで此地の梅の核に小き孔あり我親是を見侍る程に土産に二ツ三ツ懷にせり凡梅は書に記し詩に詠じぬ然共皆其實を云へり六朝の時略花を詠め唐に及て多く賦し宋朝に到りて群芳の首とせり三百篇に清香をもらせるは百世の不審離騷に

明潔を殘すは千歳の恨也我朝にては難波津の昔より菅神殊に詠め給ひて東風吹ばの神詠には梅花配所に飛來り薩天錫が詩にも千里飛梅一夜松洪席が贊にも一夜飛香度海雲と作れり菅家其先を尋ぬれば素戔鳴尊の御子天穗日命十四世の孫野見宿禰出雲の國に居給ふ時に垂仁天皇七年秋七月左右奏て言當麻の邑に勇悍の士あり當麻の蹶速と云其爲人也強力にして能角を毀釣を申恒に衆中に語り曰く四方に求めて我力に比ものあらんやいかなる強力者に遇て死生を不期して頓爭力せんと天皇群卿に詔て朕聞當麻の蹶速は天下の力士也と若これに比人あらんや一の臣進て曰く臣聞出雲國に勇士あり野見の宿禰と云試に此人を召て蹶速に當給ひなんや即日長尾市を遣て野見を喚給ひ蹶速と搦力しむ二人相對て立各足を舉て相蹶ほどに蹶速が脇骨を蹶折又其腰を蹶折て殺てけり故に蹶速が地を奪て悉野見に賜る是を以て其邑に腰折田あるはこれ也野見は乃留りて仕れり是を相撲の初として七月相撲の節會に國々へ使を下して相撲をめす是を萬葉集にはコトリ使と申也廿六日に内とり廿八日召合廿九日に拔出など云て代々の聖主今に絶せ

ぬ節會也同卅二年秋七月皇后日葉酢媛命薨す臨葬とする事あり天皇郡郷に詔て從死の道前に不可と知れり今此行の葬にいかせん時に宿禰進でいはく夫君王の陵墓に生人を埋立は是不良いかん後の葉に傳へんや願くは今便なる事を議りて奏す使を出雲國へ遣し土部一百人を喚下し埴土を取て人馬及種々の物の形を造りて天皇に獻り今より後此土物を以て生人に易て陵墓に樹後の葉の法制とせん天皇大に喜て汝が便なる議寔に朕が心に洽へりとて其土物を初て日葉酢媛命の墓に立仍此土物を名付て埴輪といひ又立物といふ時に令を下して今より後陵墓に必此土物を樹て人をな傷りそと天皇厚く野見が功を賞給ひ鍛地を賜り土部の職に任給ひ本の姓を改めて土師臣と云此土部連等天皇の喪葬を主るの緣也一説に神武天皇の時神を祭る土器を作り初めたるによりて土師と云などいへるは皆異説也唐にも古にしへの葬に明器あり芻靈有て後には流俗の弊にのりて俑を作り侍るを孔子是をかなしみ不仁にして無後と宣ひき秦の武公の時も從死者六十六人穆公にいたりて百七十七人に三良も去たがひしかば國人黃鳥の詩を賦して悲めり穆

公の亂命に康公の從ひ給ふも先儒をしり侍る其後始皇の葬に後宮皆死に從ひ工匠生ながら墓の中に閉籠らる不仁の殃子孫に及ぬる事は經史に昭々たり誰か是を疑べき陳乾昔子魏顆といひし人は父の治命に從ひて殉を用ひ侍らぬを君子も是を美給ふ然れば殉を用る事父子共に罪あり本より俑は夷狄の俗より出たりされば下に賢人君子有といふ其流俗の弊ふせぎがたし賤者は禮を行事を不得貴者は無禮を行ふ事を得ると王荊公が末世の風俗を論じたりしも實もとぞ覺ゆる孔子を天子とし孟子を宰とし陳乾昔子魏顆野見宿禰などを諸侯とするに非ずば此弊止がたかるべしとぞ光仁天皇天應元年土師宿禰古人同く道長等其居る所の地の名によりて土師を改めて菅原の姓とならんと奏しければ詔して許し給ふ桓武天皇延暦元年土師宿禰安人も土師を改秋篠の姓を賜る四年十二月菅原の古人詩讀の勞によりて子四人衣糧を賜り學業を勤む九年菅原の眞仲土師菅麻呂其姓を改て大江の朝臣となる古人の子清公律令を斟酌して義解を作る清公の子是善は清和の侍讀となりて孝經論語經史群書を講せらる大江菅原名を齊して世に是を菅家江

家といひ大學寮釋尊の曹主となる是善の賢息右大臣道眞字はサンとぞ申侍る左府時平等右大臣を議して昌泰四年正月廿日茲年延暦元年也大宰の權帥に左遷せらる延喜三年二月廿五日配所にて薨じ給ひ安樂寺に葬る御年五十九にならせ給ふ天曆元年祠を北野に立て天滿大自在天神と崇め奉る元來野見は菅公の姓にして世此國の公侯たり能義郡一には能美に作る然ば今の能義は野見の舊號にて郡となし侍るにや未_レ詳知人に尋ぬべし時に菅君の系譜律にかゝはらず川八一編を賦曰

穗日奉_レ詔主_ニ祭禮_一 野見代_レ殉掬_レ力勢

古人詩讀桓武王 是善師範清和帝

清公律令若干編 道眞國史數帙製

點鬼薄體我不_レ慙 記得日本儒宗系

山代附伊弉諾宮

山代郷は大穴持命の御子山代日子命座す故に山代と云山代の社一座あり此所に伊弉諾宮有社南面殿も南面北に向て拜す門客人二神あり

大庭^{ナホ}附伊弉冊宮

大庭の保に伊弉冊の宮あり正殿東向内殿右より入て西に向ふ凡殿の制大社伊弉諾伊弉冊の兩社八重垣の明神の社皆同じ内殿自餘の社とはかはれり何れも内へ入て側向たるは女神にてまします故に深閨の心にやと云人もあれども大社は女神にあらねばさもいひがたし此宮にも天井に八雲を繪り神職の者かたりしは此神は伊弉冊より先に神退去す故に神魂明神ともいへり一抄に熊野權現出雲神魂明神共に伊弉冊尊なりと此尊は紀伊國熊野の有馬村に葬まつる共出雲の國と伯耆の界比婆山に葬とも兩説也女神かくれ給ひしかば男神おひつきてあひ給ふによりつひぐひせりと給ふ故男神きたなしとて歸り給ふこれより世人の同火を忌事おこり日本紀に詳也此宮には門客一神あり凡神社には門客人とて二神有是男女の二神子孫の神々を守り給はんために天より下りて諸社を守護し給ふ故に客人とは云也此宮に一人在は伊弉冊の宮なれば男神ばかり客人となり給ふぞと此山を比婆山と昔より申傳へ侍る十一月中の卯の日國造新嘗會も

此宮にて遂行る瓜茄子の類までもくひ給はず禁中にも行はせ給ふとぞ凡神今食に同じくひらでの數十二也其外はかはらず是は今年の初稻を神に奉らせ給ふ儀なり世のはじめには大嘗會と云年毎には新嘗會と申す也禁裏には用明天皇二年より初るといへども事の起りを尋ぬれば日本紀に日神當新嘗之時と有は是也又唐には嘗は秋のまつりにして新穀を嘗也國造代のかはりに火を嗣といへるも此社にて行なり事は大社の下に詳也一とせ隱岐國後鳥羽院の御墓へ勅使水無瀬の中納言氏成下向の時此宮に參り給ひて詠じ給ふ短尺なりとて見せ侍るを見れば

めぐりあひし神の慮やうき橋の

初めもしろく世をわたる哉

天文年中豐臣大閣朝鮮征討の時細川玄旨齋も筑紫へ下りけるとて此國に立より當社へまへりて

そのかみや左右にめぐりあへる

ちきり絶せぬ天のうき橋

是は日本紀に陽神左より旋り陰神右よりめぐる國の柱を分巡て同じく一面に會きと云心にてよめる成べし予も又神慮のたうときに催されて

聞説胎生權輿神 立浮橋上信猶淳
更知天地又夫婦 父子君臣次第春

佐久佐

佐久佐の里に八重垣の明神在す佐久佐の社一所と有是成べし昔素盞鳴尊出雲國簸の川上一書に簸川上所在鳥上之峯と云々

に至ります一人の老公と老婆とあり中間に一人の小女を置いて撫て哭しゐたり尊問給へば我は是國神也

號は脚摩乳我妻の號は手乳摩此童女は奇稻田姫と云一書稻田宮主實狹之八箇耳女子號眞髮觸奇稻田姫又名曾波姫國狹槌之後也と云々

我子八箇少女年毎に八岐の大蛇に吞れぬ今此少女も吞れなんとす脱免によしなし故以に哀傷といへり尊

曰汝女を吾に奉れと宣ひ立化奇稻田姫の御髻に湯津の爪櫛を爲て八醞の酒を醸し八の槽を置いて待給ふ果

して大蛇頭尾各八岐眼は赤酸漿の如く背の上に松栢生ひ八丘八谷に蔓延飲に至りて酔して睡時に尊帶せ

る十握の劔にて寸々に斬給ふ尾に至りて劔の刃少しかけぬあやしみて其尾を割て視すれば中に一ツの劔

あり尊見給ひて是は神劔也とて天神に獻るなり今天子の三種の寶の一つなり出雲の清地に至りて曰吾心

清々彼所に宮を建んと宣に其地より雲立騰りぬ然るに御うた作りていはく

夜句茂多菟伊都毛夜霜餓岐菟麻語味爾夜霜餓枳菟
俱盧贈迺夜霸餓岐廻

その時稻田姫の返歌に

日茂句禮奴媒妹迺登與波夜登智豫固顧盧能夜彌爾
和禮磨登播須奈

此御歌は神道の極秘たる故に好色の家にも傳はらず當社神祕の神詠也さくさめのと云事衆說區々なり藻鹽草歌林良材などには玄うとめの事なりと定家酌の説には佐は早苗のサ草は若草の草女は難波女の類なりと中納言氏成卿の了簡にはサクサメノトとあるは佐草丁年なるべきかサクサメノトシとは若き女の名也と申されしと也又一説には媒と云字をサクサとよみけるは大蛇を撃謀に稻田姫を媒とせられし故に媒が爲言謀也サクサメは女の惣名なれば媒の字にサクサメと訓するは日本をやまとよませたる類に文字になづまず心に通ひたる成べし又一説には醗の酒を醗し給ふ故にサカクサシと云心なれば媒は與酶と同じく酒酔也と云人もあり當社の神主佐草氏媒

氏共かけり稻田宮主の後胤なりなど語り侍るかくして尊と稻田姫と遵合し大己貴の神を生給ふそれよりして此地を八重垣と申侍る本社は稻田姫に素戔雄大己貴を合祭り左右の社は手摩乳脚摩乳祭りたてまつる八重垣とは北垣萬定垣秘彌垣方垣神垣大垣西垣中垣とて八の垣に名あり四月三日の祭に本社より御垣の二本の杉の本へ陰陽の神光臨ならせ給ふと申傳へて榊に木綿付て祠官等銚を持鞍をならし大麻三百六十本かざし明燐に薶糞をませて光臨の道にまきちらし清酌を御垣にそゝぎ奉り神樂歌にいはく

千早振其八重垣の榊葉に

心の玄めをかけぬ日そなき

とうたひ奉る十一月中の卯の日には八重垣を毎年修理し奉り東西に榊を立清酌を灌奉る又巳の日の祭これを見かへしの神事と云古今の序にもすさのおの尊よりみをもじあまりひともしよみける女とすみ給はんとて出雲の國に宮作りし給ふ時に其所にやいろの雲の立を見てやくもたつの歌をよみ給ふ今反歌の作也と貫之もかきたり八色の雲立つを見て八重垣とはかさね詞也此所のさまを大やうにいひ出せりつまご

めとは稻田姫をすへん爲に宮を經營し玉ふ心也八重垣作るその八重垣をとほ丁寧反復の詞也古の歌は淳にしてかくの如くいへる類多し八重垣とは女はおくふかく居る物なれば深閑九花帳などいへるが如し此神詠は四妙そなはる又上の句の八重垣のか文字を清てよみ下の句の二つのか文字を濁りてよむ天地上下清濁の習也命の日の神と和し玉ひて後の歌なれば悦の詠なりなど歌人の家の秘訣とし祠官の輩卷數にも此歌をかき巫女の神樂にも此歌をまひかなでける八重垣の宮の制大小は異なれども大抵大社に同じ社は東面内殿は西面社司佐草氏扇を開き予も昇殿して拜み侍るに正面東向に男女二人の手に書を持玉ふ所を繪に寫しける書は表紙ありてとち本なり天照大神日御崎の神の尊體也北の方壁に夫婦是も書をもてり是手摩乳なり拱手を侍るは脚摩乳也南の方にかべに寫せるは素戔雄稻田姫の靈像也是は昔金岡が靈夢に依て寫し奉る御影也とぞ語り侍る誠に妙を繪かき靈に通じて神を傳へ照を寫す事は六法を得たる好手金岡が筆と云ぬべし然ども素戔雄は八握の鬚髯生たる故に八束水臣津野命と申奉りしに御髯のなきこそ不審なれされども命

は髪を抜きて罪を贖給ふと云事あればかくもありぬべしそれよりも猶覺束なきは本朝のいにしへ冠なし推古天皇より其法制始れり上古は男は兩方へ髪をはけてびんづらにゆふ此總角偶數をとれり女はさか髪にわけて額にひとつにゆふてさしぐしをさす女は陰にて却て奇數をかたどれり冠の制女服の品代々に少の不同ありて中古より唐の衣冠をうつされたりと承るに此尊像皆今の世の衣冠制法はいかにやと尋侍ればさやうの事は詳ならずといふ程に再問に不及やみぬ門客人も二神あり本社と八重垣の間に流るゝ川を大神川といふ此川より少しばかり山へ入て八つの垣を過少し谷へ下りて池あり是を鏡の池と云稻田姫を祭ると云り又此上のおくに巖洞あり人を見らる事不能國造社司といへども見たる人なし偶あやまつて是を見れば忽死すると語り侍る當國の風土記曰意宇郡磯より西の方に窟戸高廣各六尺斗窟の内に穴あり人入る事を得ず深淺を不知此磯の邊に至るもの必死す故に俗人古より今に至て土黃泉之坂黃泉の穴と號す古事記に其所謂黃泉比良坂者今謂出雲國伊賦夜

坂なりと日本紀に所謂伊弉諾伊弉冊を追て泉津平坂に至ると云是なりといへば此窟穴は黄泉平坂にやされども一書に泉津平坂と云は復別に處所有に非ず臨死氣絶の際はをいふかとあれば慥に此所を黄泉平坂とも定めがたしなど語り侍る其後當社に人奉りし短尺とも見せける其中に水無瀬氏成の歌二首

神の代の昔をかくる色なれや

白ゆふ花のさくさめの森

思ひ入其八重垣の一重たに

こゆるはかりの言の葉も哉

細川玄旨か短尺とて

更に今見るも妙にし古へしの

其八重垣も杉のゑるしに

又宗養といへる連歌師か此社にて發句に

若草のつまこめに啼雉子かな

花もその八重垣がこふ宮木かな

前國司堀尾出雲守高諸朝臣忠氏當社の側に生ふる竹に彫付侍る發句に

神垣や八重立けふの霞かな

其外竹に彫壁に書たる歌連歌詩賦いかほどもおほけ

れど歌物がたりの歌のわるきこそはいなければすべていともゑらぬ道の物がたりゑたるかたはらいたくききにくしと兼好がをしへにゑたがひてやみぬれども又心うかれて我も一絶手向にもやと

昔時好相脚摩乳 坤徳高哉曾波神

青竹題詩千萬首 更無窺八重垣人上

又

一聲杜宇似催詩 斯日敲推却屬誰

八重垣中神如_レ在 竹君勁直立猗々

其後中秋の比此所に詣て來て月見んと催しければ月陰り侍る時に

河漢布_レ陰君莫嘆 一年十二月猶圓

夜來縱掩馴輪影 又愛八雲神代天

又

偶會_二中秋_一意轉迷 天如_レ懸與_二晦宵_一齊

嫦娥却在_二雲屏裡_一 料識蟾宮亦籠_レ妻

手間

爰に一つの小島あり其れを手間と云俗天満と書は誤也貴賤男女船に棹し逍遙す納涼の地にして此州の一

蓬萊也古關あり故に源の顯仲か

九月盡の歌に

さりともとおもひしかとも八雲たつ

手間の關にも秋はとまらず

と讀しは是也古廟あり手間の天神なりしを天滿と俗聞あやまりて菅君天滿天神也と人おもへり是は少彥名の命の神祠也抑手間と云事は千早振神代に大己貴神國を平げ給ひて當國の御太の御崎に到ましゝて飲食せんとし給ふ時に海原に忽人の聲あり乃驚て求給ふに都て目に遮る事なし時に浪穂より天羅摩船に乗て一箇の小男あり白麋の皮を船とし鵜鷺羽を衣として潮水に隨ひ浮ひ大己貴命の所に到れり命取て掌の中に置て翫給ひしかば跳りて其頬を嚙でけり命は其物色を恠給ひ其名を問給へども不答從ひ給ふ諸神に問給へども皆不知と宣ふに多途且久白て言久延彦ぞ必きり給ふらん久延彦を召て問給へば答曰これは神皇產靈命の御子少彥名の神なりと有しかば神產靈日命是を聞給ひて吾所產兒凡一千五百座あり其中一兒最惡不順敎養指間より漏落は必彼矣又は我手俣より久岐斯子也共云り故にこゝを手間と云と也かく

て汝葦原の色男と爲兄弟宜愛養矣此神足雖不行盡天下の事を知給ふ神也大己貴命謂少彥名神曰吾等所造之國は豈謂善成乎少彥名命對曰或は成所あり不成所ありと談じ給ふ事は皆幽深の致也葦原の中津國は如水母浮漂之時爲造號成已訖て少彥名命は熊野の御崎に至りて遂に常世國に適給ふとも又淡路に至りて後栗莖彈かれ渡りて常世の郷に至り給ふとも云りかくて國の中所未成をば大己貴命獨能巡造給ひて遂に當國五十狹々少汀に至りて興言曰大葦原の中國は本自荒芒磐石草木に至るまで成能強暴然るに吾共に天下を理しは盖有之乎と宣へり初め大己貴命と少彥名の命と力を戮せ心を一つにして天下を經營り復顯見蒼生及畜產の爲に其病を療方を定め又鳥獸昆虫の災異を攘はんために其禁厭の法を定め給ふ是をもて百姓今に至るまで皆恩賴を蒙れり此神の身形短少なりし故に此名を得たり五條の天神と此手間の天神と同體の神也五條にては今も毎年節分には人皆此社に詣て餅及白朮を奉り疾病を除かんといのれり是又神代の遺風なるべし天子不豫又は世間騷動の時には五條の天神の宮に劔を懸らる報は看督長の負侍る物也此手

間は偏土なれば天子御腦に靱をかくる事もなく天満といひ天神といへば俚民も北野の聖廟とおもひて除夜に餅朮を奉る事もなしされば後世の人伏羲神農岐伯などを祭り素靈二經の徳用ありがたしと思へるはむべ也我國醫方の祖神の名をだにゑらで胡狄萬里の一法を信じ藥師如來などことゝ敷たうとみけるこそ誠に家鶏を輕し野鶏を愛するにひとしかるべし我國の靈神威力仰げばいよゝ高哉今里民のかたりけるは毎年除夜には無量の烏賊魚どもが此島の邊へ集り侍るを漁人網を曳て取けるに神社へ參詣とげたりし魚は背上に黒點あり參詣不遂し魚は黒點なしとぞ申ける彼龍門には暮春毎に黃黒の鯉魚ども海及諸川より爭來り赴て上り得るものは化して龍となり登る事不能ものは即額に點せられて退き侍ると也いかなれば烏賊魚は社參して點せられ鯉魚は不登して點せらる點不點はかはれりといへども物理の妙こそ不思議なれ烏賊と申魚は常に自水上にかびて鳥見て死せりとおもひ則往て啄けるを捲て鳥を取侍る故に烏賊魚といふ賊の名を得るは不幸なれども或曰烏鰂々者則也昔秦王東遊せし時算袋を海に棄給ひしか化

して此魚となれり故に形若_レ革囊_二口在_二腹下_一兩髯如_レ帶甚長くして腹中血及膽正如_レ墨可_二以書_二字世言烏鰂懷_レ墨知_レ禮といへば水畜すら禮を知て此神詞へ詣でけるこそ難_レ有けれ此島の風景殊にすぐれて面白き所なれば我も人に誘れ一葉に掉さし網を曳釣を垂て興じ人々歌よみ詩作り給ふほどに或人の云けるは此島にては皆菅君を題して詩歌作る人はあれど少彦名と知人なし今幸神の名を聞けり詩を賦せよとすゝめられし程に人の嘲を不顧硯取よせ壁に題し侍る

醫術不_レ教_二岐伯_一後_上 斯神調藥壽_二斯民_一
清流自是上池水 今亦有_下看_二癥結_一人_上

又

一島如_レ萍湖水邊 古詞風月小神仙
我今敲_レ針釣魚事 人謂吟_レ詩獨叩_レ舷

又

暑去秋來疎_二素統_一 得_レ時湖上釣魚竿
棹歌必應_レ禁_二雲語_一 只作_二江城三勝看_一

人々小竹筒持來り酒のふで遊びけるが童子隅にゐて云けるは日本にて小竹筒唐には如何云ける又破籠今はべんたうと云是も如何云侍るといへば側の人さら

ば小竹辨當と云字にて詩作れといひしほどに

宮南宮北皆糊水 更執_ニ漁竿_ニ忘_ニ苦辛_ニ

君暫勿_レ歸詩欲_レ就 鄆筒_ニ籩_ニ任_ニ庖人_ニ

童子よろこび酒を載て字を問といへばとてひたすら
酒すゝめぬ

出雲里_{アサカヘ}

出雲里_{イツモサト}風土記に説名國の如く伊弉奈枳の麻奈古座すとあり里人あだかへと云出雲里と書てあだかへとよめる事不詳或人曰賀茂の競馬の事書たりし文を見るに出雲江の馬一疋と有をあたかへと假名付たりと語る然れば中古よりいひならはせる事にや凡和訓多は理の明あり東は日出る方なれば日あかしと云儀也南は光高くして萬象みなみゆると云儀なり西は日沈て去程にいにしと云儀也北は一陽來復の方なればきたると云儀也鼻は人間第一の飾りなればはたと云草木の花は又いかにや花と云が先か鼻といへるが先かゑりがたし字儀も得て解べきあり強て通すべからず昔東坡荆公に問ふ何として波といふ答ていはく波は水の皮也と東坡か曰然は則滑は水の骨ならんや時に荆

公詩作りていはく

昇湖龍公字書存 開闢神機有_ニ聖孫_ニ

湖海老臣無_ニ四目_ニ 漫將_ニ糟粕_ニ汗_ニ脩門_ニ

正_ニ名_ニ百物_ニ自_ニ軒轅_ニ 野老何知強討論

但可_ニ與_ニ人_ニ漫_ニ誓_ニ願_ニ 豈能令_ニ鬼哭_ニ黃昏_ニ

漫甌之句言_ニ知者少_ニ也荆公すら如此又樂師あつしけか博學の自讃にて鹽は土偏といひし類なれども愚按するに關東の武士に東海林と云人あり人は是をせうじとよむ其理心得がたし思ふに東海林の庄司に武士ありしを近隣の民供東海林を略して庄司といひ侍る程に庄司といへば東海林が事成と心得たり田舎のならひ文字に心をつけず東海林とだにいへば庄司とよむぞと心得ていひあやまり來りたり出雲江にも阿太加夜明神の社を勸請し本名出雲江をば云ずして社あるにまかせ阿太加夜と云けるにや大穴貴命の御子阿陀加夜努志多伎吉比賣命は神門郡多伎に座すとなり今此里にあたか夜の社勸請の地有やと尋ね侍れとも人ゑらずと云洛陽東山に苦集滅道と云所を代末になりて俗云あやまり今はくちなわの厨子と云都さへ如此況遠國の土民所の舊名を失ひてあらぬ名いふ類多し

されども宇治川の邊に一口と書いていもあらひなと讀
侍れは出雲江阿太加夜も子細あるにや博覧の人に猶
尋ぬべし

錦の浦

あだかへの海邊を錦の浦と云と人をしへぬ道命法師
が歌に

名に高き錦の浦をきてみれば

かつかぬあまはすくなかりけり

宗養が發句に

花鳥はにしきの浦のうき藻かな

天正十五年細川玄旨殿下の供奉して西國へ下りし時

此浦に船をよせて

船よする錦の浦の夕浪に

たゝむや歸る名殘なるらん

とよみ侍る

袖師浦

袖師の浦も此海邊馬形と云あたりなりと指點して人
をしへぬ藤原國房の歌に

唐衣袖しの浦のうつせ貝

むなしき戀に年のへぬらん

藤原信實朝臣が歌に

よる浪の涼しくも有か敷妙の

袖しの浦の秋のはつ風

從三位成實が歌に

戀すてふ袖しの浦に引あみの

目にたまらぬは泪なりけり

俊頼朝臣の歌に

侘人の泪は海の波なれや

袖師の浦によらぬ日そなき

多々良の持世朝臣の歌に

さらてたにほさぬ袖しの浦千鳥

いかにせよとて寢覺とふらん

皆此所をよめる歌なるべし宗養が發句に

ほさて見よ袖師の浦の春の月

焼島ヤク

俗に大根島といふて周三里餘の島あり古記には如何
いひ侍りけるにや蘿蔔の風味宜しければかくいひ侍

る記曰砥神山周三里一百八十步高六十丈とあり此島の事にや覺束なし又村老かたりけるは此島はもと多久島と云昔伯耆國の人と出雲國の人と境を爭ひ訴へ有し時出雲の人證歌に

出雲なるたく島にたにもたかぬ木を

木梨の里に何をたくらん

とこれ古歌なるよしを申て争ひに勝たりとぞたく島は此大根島なり木なしの里とは伯州弓濱米子邊を申也と語る一説に出雲より訴に出たりし人は多賀の時隆と云辨者也又焼火島と云隱岐の國焼火權現この島に暫くましまし、故にかくは云といへど俗説信じがたし

國分寺

竹屋と云所に昔國分寺有とかたれり今は礎のみにて其かたちもなし善相公の意見封事を見侍りしに欽明天皇の代佛法初て傳る推古天皇より後此教盛に行る上群公郷士より下諸國黎民に至るまで寺塔を建る事なき者は人數に列せず故に資産を傾盡し浮圖を興し作り田園を競捨て以て佛地となし多く良人を買て以

て寺奴となし降て天平に及て彌以尊重す遂に田園を傾け多く大寺を建其堂宇の崇佛像の大なる工巧の妙なる莊嚴の奇き鬼神の製が如き有て人力の爲にあらざるに似たり又七道諸國國分寺を建て造作の費各々其國の正税を用る於是天下の費十分にして五ツ也と書れたり浮屠の費遊民の弊心あらん人はおもはさるめかも

蠶婦采^{モリス}桑衣^{スデ}ニ萬民ニ
儻渾^{モリス}淫^{スデ}ニ溺衆教術ニ

農夫負^{モリス}耜食^{スデ}ニ君子ニ
豈但飢寒金屋人ニ

平濱

平濱の八満宮は應神天皇本の名は譽田の天皇諸州に垂跡し玉ふ殊に當國には八所の八幡など云て所々に勸請す此宮の神主名は義廣紀氏也と申侍る

白潟

白潟今は府の城下也女月尾明神座す誓願寺と云淨土宗の梵宇あり毛利元就富田の城を攻落し國中平均の後此白潟には毛利元康を置玉ふとぞ

松井

松井邑に道祖神の社あり當國風土記意宇郡に狹井の社あり今能儀郡なるは是なるべし昔一條院御宇に藤原中將實方朝臣不敬に坐せられて奥州に謫せらる或時實方馬に騎て一社の前を過けるに里人のいひけるは是は陸奥名取郡笠島の道祖神也往來の人かならずこゝにて馬より下る實方聞きていかなる神にてましますぞや里人の曰く王城加茂川の西一條の北出雲路の道祖神の女なり密に商人に通じける故に放逐せられて此地に來りしを州人祭り侍る祈る者は陰相を造て神前に懸侍れば必ず靈驗あり今君も歸路を祈り給へといへば中將聞て是下品の女神也我いかなぞ馬より下なんといひて打過ける程に實方の馬俄に斃れ中將も身まかりしかば社の側に葬りてけり其靈化して雀となり王城に飛來り内裏殿上臺盤に入て飯啄飛鳴しけるとなり今童部共のいふ道の端の道祖神といへるは是成べし又は正月十五日に童部共寄合て竹の葉松の枝を取集めて社を作り道祖神を辻々に祭り陰相を作りて女をたゞき打蠡斯を祝するも此遺風成べ

し又一説には皇孫此國に且降の間先驅者還ていはく一の神ありて天八達之衢に居れり其鼻の長さ七尺背の長七尺餘且口尻明耀眼は八咫の鏡の如にして絶然赤酸醬に似たり即從神を遣し問せ給ふに八十万神たち皆目勝て問答し給ひ難かりしかば特に天鈿女命に勅して汝は是目人にすくれたる者なれば往て問べしと時に天鈿女其胸乳をあらはして裳帶を臍の下に押たれて笑喙て向立給ふ此時衢神はいく汝爲之何故ぞや對て曰天照大神の子所レ幸道路に如此居る事は誰そや衢神對て天照大神の子今尙降行とさく故に迎奉らんと相待侍る我名は是猿田彦大神也時に天鈿女問ていはく汝將我に先て行給はんや抑我汝に先て行んや答曰吾先啓行かんと天鈿女復問曰汝何處に到耶皇孫何の處に到や對曰天神子は則筑紫日向高千穗櫛觸峯に到べし吾は則伊勢の狹長田五十鈴の川上に至るべしといひしより旅行の人門出に是を祭りて先啓行神と云心にてさいの神と云也又道祖神女を祭るには幸ある神と云心にて是もさいの神と云なるべし唐にも祖道の祭有は昔黃帝の子累祖好で遠くあそび道にて身まかれり故に後人は是を祭行人とせりいにしへ

より行者は土を封じて山の象をなし菩芻棘柏を神主となし既に祭て車にて轆え去故に轆といひ道祖といひ皆みち祭りと讀み侍る轆を先にして餞を飲み侍る也和漢ともに道の神を祭れり今この道祖神は衢の神猿田彦の命なるべしといふ人おほく侍る

島根郡

島根とは八束水臣津野命より名付ける郡なりといへど説名未詳重て可考

府城

末次は此島根郡也末次明神まします白潟は意宇郡也此邑今は松江と云唐松江に地境相似て鱸魚菰采又多し故に先國主堀尾出雲守忠氏富田の城を此地へ移し松江と名けぬ今國司の府城也宇賀明神も城の北にあり湖水を東西南北にほり入たれば船の往來自由にして商賈運送に便あり誠に本朝無双の金城中國第一の天險也人にいざなはれ湖水の邊に行て竿を投ずれば鱸魚をつり籠を提ては蔬菜を摘て晋の張翰が事思ひ出ぬ

金城高聳柱ニ天壁ニ 地險往々回ニ四維ニ

白路宿江如ニ雪夕ニ 青龍横水不ニ雲時

忽看侯泊放鷹地 聞説神人逐鹿涯

旅客問余家國富 只言上下詠ニ蠡斯ニ

凡城下に熊野揖屋橋姫伊勢の宮など諸神の社ありて二仲の神事御神樂又は能あり江戸にて見し能とは事かはれり先七座の神事と云あり一に劔舞是は七徳武の翁の遺法なるべし二に鹽是は潮を没て席を清る心也三に御座の舞是は八月廿四日佐陀宮の御座をかける舞也四に勸請五に祝言六に手草神を以て舞奏で侍る七には乙女是を七座の翁と云其外王子立などいふ事有て式三番の舞有八雲の歌をうたひて笛鼓調子をならして舞かなで能には切目荒神天照大神共いへり揖屋惠美酒など云能をぞいたしける神歌なんと云を聞ば俚俚の言葉いなかびたる歌かなといとおかしければ又は催馬樂今様など古風の残りたる歌もあり殊勝なりし社司などと思へばふつゝかなりし狂言などせり大抵おこがましき事共なり其外靈寺佛閣又おほし府城の良維に金胎寺といふ寺あり毎月國家の繁榮を祈り侍るいにし年予にもとめてこの寺の鐘

の銘をかゝせ侍る其詞にいよく

雲州島根郡尊照山金胎寺千壽院雅是釋風弘通之招
提靈驗殊勝之名區也今新鑄^{モト}三晷鐘^カ一高殿^ニ堅樓^ニ奉^ニ
佛意^ニ吁因^ニ此丹忱^ニ胡願不^レ滿^ニ易作不^レ成庶幾乎子
孫之眉壽與^ニ鶴算^ニ齊永久國家之豐饒兼^ニ天地^ニ同無^レ
盡也懇禱之趣在^ニ于茲^ニ也

銘曰

維斯梵刹 函蓋靈場 萬歲竹緣
千秋菊芳 蒲宇殷々 拘簾藹々
登摘^ニ星宿^ニ 叩稱^ニ宮商^ニ 春夏禮樂
早化^ニ四方^ニ 昕夕聲教 遠被^ニ八陳^ニ
上順下睦 德音無^レ疆

慶安二年己丑之歲秋九月如意珠日

摩訶陀那大江氏女

爰に旅寓せし主の男桔梗屋と云ける情ありて詩など
つらねて見せ侍る能酒を造ければ

先喜旅居富貴門

瀟湘此景豈堪論

主人雲液仙家造

扶^レ老一盃報^ニ聖恩^ニ

家居潮水に望て作りなしければ翠屏晩に對し馬周が
いにしへ思ひ出て悠然として獨酌て吟じ侍る

食^ニ邑雲陽城北邊^ニ

暫時旅寓暖^ニ青甌^ニ

降看星宿水樓裡

不^レ識斯身坐^ニ上天^ニ

黒田

黒田は土の體黒し故に黒田と云記には意宇郡に屬す
今は此郡にあり府城の西十町斗りにあり

匏池ひょうこいけ

匏池周一里一百一十步生^レ蔣とあり俗ひしやくか池
といふ是なり鳧多し

荒隈あらわい

荒隈は毛利元就白髮の城を責給ふ時先此所に陣をと
り諸軍は佐陀末次に充滿せり弘治三年七月廿八日廿
九日兩日白髮近邊の竹木を切八月一日白髮の城を攻
給へども城の險難地の利を得たる所なれば力攻には
かなひがたしとて此荒隈に普請をせられける山の長
さ二十餘町其外谷々おほし山の頂平なる所に乾堀を
ほり逆木をかまへ六十間四面に本陣を立たり諸士四
方谷々に帷幕をはり外に町屋を立商賣の道を通す陣

久しければ京都より諸將の内該にて雖知苦齋道三を呼下し山瘴の毒霧を除く保養の豫薬を用らる如し此陣をとりかためゆるく攻給へば道三銳氣を避て情氣をうつと云兵法醫術の物がたりせられける故とも申傳へたり道三此地に滞るの時雲陣夜話と云醫方の書を編たりといへり或は花の本の連歌師を招て千句を興行し或今春太夫を召て能など有しと也此地湖水に月浮て風景殊に興ある所なれば元就

秋の月雪にやはのはま千鳥

又湖水の汀に白沙平々たるを見給ひて

ふらてたに雪を汀の白洲かな

又元就詠草を見侍りしに詞書に雲州小石見と云所に在陣し侍りし比大庭加賀守遅参たりしかばいにし年對顔をへだて侍りしに裡り共かくと聞ゆれば睦月二日彼もとへ遣しける

石見瀉雪より馴る友とてや

心の限り打とけにけり

大庭兼賢が返し

石見瀉かたき氷も雪もけふ

とくる心の恵み嬉しも

三條大納言實澄卿の判に此贈答一毫のへだても聞えず誠に上下怨なしと云明文にかなへりとかゝれたり此あたり満願寺にて椿を見侍りて元就

俤は三山木ながら花さとも

けさ白露の玉椿哉

梓弓春の光の玉椿

八千代も同じ盛をやみん

實澄卿の判に八千歳を春とし八千歳を秋とする由侍れば外國のさりへをしはかられ候と書かれ侍る誠に陸奥守從四位大江元就は文武兼備の名將とぞ聞えし

白髮城

此白髮の城は昔幼稚の大將を忠臣義士助て守りけるに大將已に白髮に成給ふまで落る事なかりし故に白髮の城と申傳へ侍る中比尼子晴久の妹婿松田左近將監を大將として舍弟兵庫頭等楯籠る城の麓常福寺と云禪院は松田が末子不門西堂と云惡僧出城をかまへ一族四人楯籠る本城より三丁餘を隔て寨營あり松田二郎三郎是を守る是を白髮の城と云抑此白髮の城は

北西誠に高山有弘治三年陸奥守元就當國發向之時吉川元春小早川隆景南陣を先鋒として向ひ給ふ春の末には青麥をかり秋の初には稻葉を薙て敵をつからかし軍久しくさらく食攻にせんと議せられける白髪之城と荒隈の陣其間はづかに三十町を隔て日夜矢軍斗にて月日を送りける或日吉川が陣へ矢文を射ける開て見れば

元就は白髪の糸にとちられて

引もひかれすよるもよられす

とぞ書たりける折節大庭入道宗分其陣に居たりければ

義久か命と頼む白髪糸

今ぞ引切あきの元就

と書て森脇と云精兵に射返させけり一日小早川中務少輔敵城を見おろし侍るに三の丸に大なる井あり水卓山に汲と見えし程に吉川元春と相議して石州の銀山より堀子を數十人呼下し薄き方よりぬけ穴をほらせけるほどに水次第に耗て城中水に渴し難に及ぬされども馬の湯洗常の如くなりしを不審して生捕の者共に委尋ければ城中水渴糧乏く已に危く聞え侍る馬

の湯洗は白き砂に灰をませて汲かけ寄手に見せ侍る也とぞ語りけるにて寄手はいよ／＼いさみけり時に元就へ降参きたりし國中の諸卒連判の狀をかきて鰐淵寺の僧和多坊を使にて不門西堂へ松田和睦し給へと云遣しければ西堂則左近兄弟に告げる程に松田如何有べきと案じけるを左近將監が妻は義久が伯母たりしが申けるは初元就家兄の晴久と和睦有しか共やがて約變じき今又あるべしとひ百年を保たりとも不忠不義の名は千歳に残りぬべし人々はともかくも斗ひ給へ某は女なり共此城に尸をさらさんと思ひ定め侍る也といへば一族皆此議に伏し尤と同じて和多坊をそ返しける元就令曰明後日東西より符を合て攻入べし降参の者あらば一人もころす事なかれ高名にせんとて是非なく若し降参を討ものあらば從類ともに罪科たるべしとかたく下知し下郎の生捕あまたゆるし給へば此由敵へや聞えけん其夜城中の勢大半落失ける程に其日になりし未明に三方より責のぼり本城に火をかければ一方より我先にと落失城は程なく落にけり此城は元春に預け給ふ其後富田城落て國中無爲に成しかば此白髪之城をば破却し後の新山に

多賀元信をぞ置れける

朝酌

朝酌の郷は熊野大神命詔婦朝御餼勘養夕の御餼勘養五寶緒の處定め給ふ故に朝酌と云

枕木

枕木山は智元和尙の開山天台止觀の月を澄し藥師の像を安置せり當國四箇寺の其魁也四箇寺とは能儀郡雲樹寺同郡の成安寺竹屋の安國寺當山の華藏寺也寺僧の語りけるは源家の陪臣武藏坊辨慶は此枕木の里にて生れ當山の兒たりし時同寮の兒を良もすれば打擲し侍る程に院主折檻の爲にあの島へ流し給ふ去程に辨慶石をひろひ集め陸へ通ふ道を造りやがて山へ歸り侍る程に今に至て辨慶島と申ならはし侍る永見と云里に辨慶が産水辨慶が母の墳墓も今に存せり父は意宇郡熊野山の人也天照太神生れ給ふ時の産水も此山にあり辨慶曙毎に此水を汲ければ辨慶水とも申ならはし侍る水を守護せるは妙見菩薩也人恐て常にはまいり侍らず其後東福寺開山聖一圓に法嗣佛智禪

師と云活僧は東福正覺院の住山叟和尚と申て黒梅の詩を賦し悟入せし禪道此山に住給ひ龍翔山と云額佛智の手澤是也とて見せ侍る然に此山に天狗あり鐘樓に上りて鐘を叩人あれば或は擲て虚空に走り或は提て高樹に上せなんと云ける程に或夜佛智禪師みづかららうにのぼつて鐘をならす時に天狗來て禪師をとらんとす禪師拂子を揮てたゝきふせ彼をとらへて縲繼し給ふ天狗曰我は是此山の主なり禪師何ぞ我を縛するや禪師あらゝかに申されけるは魍魎何ぞ人に寇する天狗云然則今より後此山の八分より上へ來る事有まじ許し給へと云ける程に禪師ゆるし給へり其より人に寇する事もなかりしが此山や住うかりけん隱岐の國へ飛去けるが人の夢に見えて我を祭らずば此山に讎をせんといひし程に今に至りて毎年二月十七日に巫祝集りて彼天狗をぞ祭りける昔後鳥羽院隱岐國へ潜幸の時雨ふり夜更に御船の行衛白浪高くして既に危く見えさせ給ひし時いさり火かすかに見へ侍れば島なればこそ火は見ゆれあの火をたよりに船つかまつれと勅定に任せ水主梶取此火を守りて行侍るに其時院の御製に

灘ならはもしほやく屋と思ふへし

何をたくもの煙なるらん

と詠じ給ふとかくして御船はいづくともまらぬ島に
着給ふ時に一人の老翁來りて是は君の御幸なるべき
隱岐の國にて侍る先に御船の中にて詠じ給ふ御製お
ほそれながら難じ奉らん藻のけぶりならば何をたく
と御疑有まじき事にや何をたく火と遊され候は神慮
にも人道にもかなひ候べしと申ければ院大に叡感あ
りて翁の名を尋ね給へども我は君の御船を守り奉ら
ん爲に來りたりといふて打失ぬそれよりして隱岐國
焼火權現と崇奉る往來の船人何くの浦にても方角を
うしなひ侍る時に此權現に祈念をいたし火を乞候へ
ば必ず行べき方に火は見えぬ或は火を二つとこひ候
へば二つ火みゆる二つの火の間に船を行侍れば岩に
もあたらずつゝがなく船つぎぬ我知れる人も一兩人
夜中に方角をうしなひ火を祈て無爲に渡海したりと
たしかに語り侍りぬ佛神の奇特權者の傳記さのみ信
せざるべきにも非ずといまおもひまられぬ彼焼火山
雲上寺へ參りし道者の奉る散錢を入る壺ありいつも
八分ほどありその錢を一錢申うけて餘の錢二錢を奉

る此神錢を布袋に入れて持人は船に乗て恙なく少き男
女痘疹或はまぬかれ或は安じ侍るぞ不思議なる彼枕
木山花藏寺今は關山派の僧住し侍る

東照權現宮

湖水の邊に東照權現の宮あり國司毎月十七日に奉幣
し給ふ前は湖水後は高山石の花表波に移り丹の玉垣
日に映じ誠に殊勝の靈地となり侍る

市成

市成と云所湖水の邊に豐國大明神の古廟あり今は參
り通ふ人もなければども祠宇猶存せり亡國の戒にもや
魯國に二社あり一日周社是は天子の大社也一日亳社
是は商社也武王商に勝て其社に諸候を班列せるも此
心也揚誠齋の詩に

君不見何陽花

今如泥土昔如霞

君不見武昌柳

春如金系秋作帶

と世事翻覆を賦せしも和漢古今同じと哀に思ひき

方結

方結は須佐鳥命の御子國忍別命詔吾敷坐す池は形宜者故方結と云方結のはま廣さ一百八十歩東西に家ありと記す

法吉ほうき

法吉とは神魂命の御子宇武賀比賣命法吉鳥に化して飛渡り此所に静りまします故に法吉と云神社あり

生馬

生馬は神魂命の御子八尋鉾長依日子命の詔吾御子平明不愼詔故に生馬と云神社あり

山口

山口と云は須佐鳥命の御子都留支日子の命の詔吾敷坐す山口の所にありと詔ふ故に山口と云今神門郡に山口と云所あり名同じて所異乎

野浪

野浪に川あり源系江山より出で西に流て大海に入と記せり我未見人に尋ぬべし

加賀

加賀の郷本かゝと書加賀の神崎に窟あり一十丈計周五百二步計東西此道を大神の產生し給ふ所也產生の時に望て弓矢を亡給ふ然時に御祖神魂命の御子枳佐賣命願くは吾御子麻次羅神の御子座は亡給ふ所の弓矢出來らんと願ます時に角の弓矢水にしたがひ流れ出る時に御子是我弓矢に非ずと詔て擲すて給ふ又金の弓矢流れ出來る即待所に座て闇尊窟哉と詔て射返し座す即御祖支佐加地賣命社此所に座す今の人はいはやの邊に行時心聲礪磕して待若密に行は神現して飄風起り行舟必覆と古記に見へたり我此度加賀の神窟へまかりしに記せしがごとく也窟の内水のはやき事矢の如し故に小舟にのり櫓楫なくして行事すみやか也數十間行て東西へぬけ穴あり俗是を潜門と云窟の中にて仰ぎ見れば乳のかたちありて水滴る伊弉册尊すみ給ひ此潜門に座て天照大神を生給ふ故に乳房の形岩となり其露のしたゝり絶ず海中の草此乳味に潤をうくるにより其味旨也又浦の女必左の乳大なるは此窟乳も左大なるが故也岩間の水の滴る聲岸打

波のひゞき音木魂なりて百千の雷の如し人の物いふ
聲もさだかならず偶咳すれば山彦こたへておびたゝ
し過し頃堀尾山城守忠晴目盲者を舟にのせ此潜戸見
に行たりし時警者を驚さんとして窟の内にて鐵砲を放
ければ中に天地にひゞき坤軸も摧るかとおびたゝし
警者はいふに及ばず壯夫勇者といはれし人もとかく
の言葉なく色をうしなひ興をさましてぞ見へしと語
る棹の歌をうたへば十人の聲千萬人に聞へ侍る窟を
出て舟さしまはしみればきしのうへに馬の足跡あり
是は大神龍馬をのり上給ひし所也又磯の岩の上に龍
馬の四下槽ありといへど折節鹽滿て見えす此浦をか
かと云は大神生れ給ふ所なるにより今人の世に至る
まで母をかゝと云など語り侍る古記には見えす情思
ふにかゝあるは母の御崎又はいろの神崎などゝこそ
いふべきにいかにかぞや凡小兒は言語不明ゆへに上の
一字はいひ侍れども下の文字にうつる辯舌ならざる
ゆへに下のかなをととりて云類多し母を上といへばか
かと云父を殿と云ひ亭と云をとゝと云ひてゝと云が
ごとしこれ皆後世の言葉にして神代にかゝと云べか
らず恐らくは俗言なるべし佐陀の小縁起と云を見侍

りに書たりしは此所加賀と名付る事伊弉册尊潜戸
に棲て未出給時天下暗き也潜戸を出給ふ時天下明也
其時伊弉諾尊嗚呼赫奕と宣ふゆへに其地をかゝと名
付るとあり此神窟より加賀の浦へ半里かゝより水の
浦へ一里の海上也隱岐國も石見瀉も間近く見へ侍る
細川玄旨此處にて狂歌に

哀にもいまた乳をのむ海士の子の

かゝのあたりやはなれさるらん

とよみしと也予も又風景にもよほされて

海船振^レ柁加賀窟 西巖對峙似^ニ龍門^一

激磯逆浪頻逆^レ眼 回岸盤渦又斷魂

巫祝唯今嗚^レ鼓處 神人大古弄^ニ璋根^一

黄金弓矢微^ニ幽壑^一 猿臂將軍不^レ足^レ言

かく吟じて行程に水の浦より馬にのり松江へは三里
の續路也

千酌

千酌は伊差奈枳命御子都久豆美命この所に座す然は
都久豆美とこそいふべきに今の人なを千酌と云と記
けり今もかくぞ云なる此津より隱岐國へ行津也濱の

ひろさ一里六十歩と云此より異國三韓へも渡れり持
統記に三年壬戌出雲國司に詔して風浪に遭値蕃人を
上送すと云々

雲津

雲津は隱岐國へ渡る津也昔賴朝卿の馬生喰は隱岐よ
り此津へ泳來りしとなり故に今に至るまで岩に蹄の
跡あり又岩に馬の形理ありて繪にかけるがごとく鮮
に今に存せり按に記に踞踏島これなるべし

美保

美保の郷は大己貴命高者國に座す神意與都久支爲命
の子俾都久辰爲命の子奴奈宜置波比賣命を娶て神御
穗須々美命を産給ふ是神まします故に三保と云又云
高皇產靈尊子三保津姫は大己貴命娶給ふ三保の明神
是也と云り大己貴の御子事代主神遊行て出雲國三保
の崎に在す釣魚を以て樂とし給ふ或は鳥あそびする
を樂とす八雲御抄に出雲三保の崎事代主神釣しける
所に隱岐國島渡へ此湊より海路三十六里と云後鳥羽
院配流の時御製に

弓の濱三保の關弦よりかけて
心やすきにいたき頃かな
と讀給ひぬと里人語り侍る弓の濱は伯耆の國なり濱
の形弓の如くなり

懷橘談上終

懷橘談下

秋鹿郡あしか

秋鹿は秋鹿日女命座す故に秋鹿と云也

佐太

佐太に橘あり秋鹿島根の境也神佐太の山の麓に佐太の神社あり佐陀の御子の社神祇官にあり佐太の海水は諸流の會也祠官語りていはく此神社は伊弉諾伊弉冊の二神の御魂納し所也正中殿は伊弉諾伊弉冊の尊北の殿は天照大神瓊々杵尊南の殿は月讀蛭兒素盞雄命也當社門客人北の門は賀茂の大明神南は熊野權現也外の門東は阿式明神西は玖潭の明神也當社の神主は昔天智天皇の御時蒙古蜂起して日本に亂入既に帝都に攻入らんとせし時大伴氏勅を蒙り播磨の國蟹坂にて胡敵を打平給ふ帝大に寂感有て勝部氏を賜り當國の別駕となり當社の神主職を兼給ふ神勅によりて扇を幕の紋とせり玄かりしより大伴氏にて今は正

神主權神主と申て兩家也千早振神代にも胡利國の鬼共我國を攻けるに數萬艘の兵船を海上に浮べよせ來るされ共此國には伊弉諾伊弉冊の二神まします故に恐れて陸へは上らず諸神いかにもして鬼を陸へのぼせ討んとはかり給ふ所に二神俄に崩御なりとふれて此佐太に葬り奉る烟を鬼ども見て悦び此國の主二神は崩じ給ひぬ何の恐れか有べきとて船より飛下り飛下りせめけるを諸神謀りよせて一度に攻かへり多きりふせし給ひければ殘黨皆逝去ぬ生捕所の鬼八十八員を二神めして我に歸伏せば命を助くべしと詔ひけるを鬼其大に悦び命を助かれば此國の守護神と成べしと誓約し二神に仕へ奉りぬ後には其形を板に刻て社頭の四面に立置ぬ八十八員の早人と云是也天下に凶怪あらんとては必早人鳴騒ぎ殿より下へおちけるを早人の飛給ふとて諸人恐れぬ事なり抑世に語り傳るもくりといへるものはいかなる鬼にや不審也昔宋朝亡て元朝にうつり太祖は蒙古國の人也此時に日本を攻んとせし事國史に詳也是ははるか人皇の時也彼蒙古を世俗誤りてもくり國と云也又佐太と書てかばねをさらすとよむと云事一向筋なき事也又火葬

の我朝に初りし事を文武天皇四年道昭和尙より事起れり二神を葬るまねして煙を見たるなどあまりに無下の事也天神地神の御代に異國より日本を攻し事神書舊記にも見へ侍らず胡元日本を攻し事を千早振神代の事にも非ず東の蝦夷の類共いひがたし皆是信用すべからず一年細川玄旨下向の時も伊弉諾伊弉冊の尊と聞て歌に

千早振神の社や天地と

わかちそめつる國の御はしら

と讀侍る一決して傳ふる所は正殿は皇孫天津彥火瓊杵尊也左右は國常立尊天照大神を勸請し奉れり八十八員の早人とは天照大神天津彥火瓊々杵尊に三種の寶物を賜はりて葦原千五百秋之瑞穗國の王とし且降時に配侍らしむ天兒屋根命太玉命天鈿女命石凝姥命玉屋命其從類從神先驅者を神早人と申也此所を佐太と申侍るは經津主神武甕槌神出雲國五十田狹の小江に到りて大己貴に問ていはく皇孫此地に君とし臨む汝まさに避べしと大己貴對曰我子事代主神既に避ぬ吾も亦去べし如_レ吾是を禦ば國の内の諸神必同く禦てん今我避奉る誰か敢て順はざらんと_レの給ひて乃

廣矛を二神に授て曰我此矛を以て卒に功を治有り天神若此矛を用て國を治ば必當平安と遂に百不足八十隈に隱れたまふ此より宇宙定りけるによりて此所を佐太と云り天孫は日向の高千穗槌觸の峯にいたり給ふ國家の根本一統の基は此佐陀なれば齋風の昔にもこし侍り有難かりし宮居なり又社の前二町計に田中の社風土記にも見えたり巫祝の説に此御神は伊弉冊尊姪て潜戸に座し、時伊弉諾尊天赤女を召てあひなれ給ふ伊弉冊尊潜戸より歸り給しかば天赤女をば佐太の北橘の木の下にかくし置給ふ今の田中の神社是なりと語り傳ふるも信じがたし是は天照大神の皇孫に配侍しめ給ふ天鈿女命目人に勝れたる御神衢神猿田彥と物語せし命也と承るぞ殊勝に覺え侍る時に早人を拜して戯に綴り侍る一首

官暇逍遙湖水流 佐陀祠宇幾千秋

如何今借_二早人脚_一 直到_二東關東武州_一

と吟じければ人皆胡廬とわらひぬ

手結浦

手結の浦いにしへは島根郡に屬す手結の崎濱邊に檜

あり窟あり高一丈裏の周三十歩浦の廣さ四十二歩船二つ計泊べしと記せり我未^レ見重て可^レ考

伊の浦

伊の浦は伊農郷成べし赤食伊農意保須美比古佐和氣命の居天咫津日女命國巡行座す時此所に至り座て伊農波夜と詔ふ故に伊努と云神龜三年に字を伊農と改め記せり楯縫郡の境に伊農橋あり

大野

大野とは和加布都怒志能命御狩し座す時猪の跡亡矣然時に詔自然哉猪の跡亡失と詔ふ故に内野と云然に今の人猶誤て大野と云ふと記せり高宮と云あり西光寺と云あり

楯縫郡

楯縫とは太神の御装楯造給所是也仍て今に至^{まで}で楯杵造りて公皇神等に奉る故に楯縫と云

佐香^{さか}

佐香とは佐香河内百八十神等集り居て御厨立給ひて酒を醸し給ひ百八十日喜燕して解散座す故に佐香と佐香社あり神祇官に見へたり佐香の浦あり佐加の川あり佐加の濱あり廣五十歩と記す川は神名樋山の東南に流て大海に入ぬ

一畑寺^{いちばた}

一畑寺に藥師の靈像あり縁起有や否未^レ見此郡には大領出雲臣太田が造りし嚴堂一字とあれど此寺を云にや尋ぬれ共知れる人なし

玖潭^{くたみ}

玖潭郷は所造天下大神命天御飯田の御倉將に造り給はんとて並覓巡行し給ふ然る時に波夜佐雨久多美の山と詔ゆへに忽美と云神龜三年に字を改て玖潭と云久多美社神祇官にあり

沼田^{ぬた}

沼田郷は宇乃沼比古命爾多水を以て御乾飯爾多爾食坐詔て爾多との給ふ然則爾多と云べきに今の人猶努

多と云のみ神龜三年に字を沼田と改めぬ

平田 附生浦

平田古記には見えす此所鳧雁の多き所なれば鷹狩に宜しき地にて國司在國の時は常に放鷹し給ふ細川玄旨が詞書に湖水の小舟にのりて平田まで行に生浦也と船人の云を聞て

磯枕うらみや生ふの浦千鳥

見はてぬ夢のさむる名残に

或人の語りしは新古今入道前關白太政大臣の歌に

五月雨は生ふの河原のまこも草

からてや波の下に朽なん

とあり出雲里のほとりに飯宇海飯宇河原有と云平田のほとりは湖水なればまこも草生ぬべし此所にや新勅撰集に寂蓮法師が歌に

おふの海の思はぬ浦にこす鹽の

さてもあやなく立煙かな

と云歌にてみれば猶以て平田畔は鹽焼べき地にも非す思はぬ浦にとあればよその鹽やくけぶり又見えがたし島根郡に生海と云所有是なりと語る人あり是に

ちかし平田に熊野權現あり

十六島 うしろしま

十六島此島を俗にウツブルイ島と云十六善神影向の地なりとぞ水底に氣味宜しき海草あり三瓶山に雪ふり此浦へかげうつろふ時に此苦をとれば宜しと語る世に是をウツブルイノリと云古記に北海の雜物を注すといへどウツブルイといふのりなし此郡の海に在所の雜物は海藻海松紫菜凝海草とあれば紫菜の類にや予按するに彼水底の海苔を取て露打振ひ／＼日に乾しければ打ふるひ海苔といふをだみたる聲にてウツブルイといひ十六善神島の海苔と文字に書ては言葉長々敷故に善神を略して俗のウツブルイといふを其まゝ文字によみならはしたりと見えたりといへば人皆點頭しぬ

出雲郡

郡を出雲と名附る故に風土記にも説名國の如しと書たり然れば今の俗出東しやとうと書國の東にも非ずあやまり成るべし又シユツヲウと云はいかなる故にや出雲郡

といへば國の名にまざるゝゆへに音にてシユツヲウといふなるべし雲は音ウン漢音にはツン吳音にはヲウ我國先づ吳國へ通じたれば今にいたるまで國人の言葉多くは吳音也故に雲の字を吳音にいへばヲウ也出の字をつむる響にてヲウをトウと云なれば出ヲウ郡といひしを俗の了簡に雲の字にとうのこゑなしと思ひて東の字に改め書たる成べし猶君子の正しを待のみ出雲郡出雲社古しへは此郡にありて説名圖の如しと今は意宇の郡に屬す故に爰に不_レ贅杵築郷杵築大社古は此郡にあり今は神門郡に屬す故に爰に省略す

美談みだん

美談の郷は所造天下大神の子和加布都怒志命天地はじめて別れし後天の御領田の長供奉座まします即彼神郷中に座す故に三太三と云神龜三年に字を美談と改め彌陀彌社神祇官にあり

宇賀うが

宇賀郷は所造天下大神の命神魂命の御子綾門日女命に讓座す爾時に女神不肖にして逃隱るゝの時太神伺

ひ求め給所なるゆへに宇賀と云今俗に奥宇賀曰宇賀と云て二郷となす

鰐淵山わいせん

鰐淵山は此郡と神門郡の境也大社參詣して下向の時遙勘と云所より嶮岨の道にて牛馬も肩輿もかなひ侍らず步にて攀上り松源院松本房と云僧に案内させ順禮し侍りぬ本堂は觀音樂師の二像を安置して鎮守は山王祇園北野三社を勸請せり右に鐘樓あり珍しき銘も有にやと上てみれば壽永四年癸卯歲伯州櫻山大日寺とありて銘もなし櫻山に有もいかなる故にや左に摩多羅神の社あり是は傳教大師渡唐の時青龍寺にて鎮守を祈る則素盞鳴尊是を摩多羅神と號す天台の守護神也それより谷に下り岩間をつたひゆく瀧あり坐王權現の社をたて數百尋峙たる岩尾に布をさらせるがごとし當山の來歷松本坊あらゝ語り侍るは抑當山開基は推古天皇の御宇に知春上人と申て六根淨にかなへる聖有再來して書寫性空上人といひしは此智春上人の後身也と申傳へ侍る古き記錄に出雲の上人と云るも此聖を申也智春此山の開山と也寺を鰐淵と

申侍る由來は或時上人此瀧坪に下り佛具花皿を洗給ふ時あやまりて花皿を水底に落し給ふ或日御崎へ舟にて參詣し給ふ時御崎山のこなたに大にかけたる穴あり其洞より鰐と云魚彼花皿をくはへて上人に捧奉る上人手に取て見給へば彼瀧つばにて落し給ふ花皿也扱こそ瀧坪より此海邊へ通じたりと知せ給ひ鰐淵寺と名附らる昔の人は寺院の號もすこしも求ずたゝ有のまゝに安く附けゝる也此頃はふかく案じ才覺をあらはさんとゑたるやうにきこゆいとむづかしと兼好が申したりしもげにもとぞ覺る時に推古天皇御眼をいたませたまひしに上人へ勅使下り侍ぬ上人勅に應じ其日の暮ほどに山を出て翌朝京著し則參内せられ加持し侍れば御門の御眼病忽に平癒してんけり叙感のあまりに直江國富の兩邑を永代寄附せられ侍るゆへに今に到る迄兩眼領と申ならはし侍るを前國司堀尾氏の時沒收せられ畢ぬ此藏王權現の社の柱の下より別して滴る水にて今も眼を患る人丹心の誠ありて洗へば則平癒し侍る扱も此山は推古天皇敎倒二年に草創せられたりと當山にては云傳へ侍る年號の初は後の事などいへば敎倒といへる年號を客はゑろ

しめしてや候承り度こそ候へ當山より美保の崎までを北山と云天竺靈鷲山の乾角自然に崩かけて蒼海萬里を流れ豐葦原に漂しを素盞雄尊杵にて築き留給ふゆへに杵築といひ此山を浮浪山とも流浪山共云傳へたり一説には不老山とも申侍る此山の岸へ進雄尊上り給ひし時の神詠に

駒ならず轡に鞭を取添て

誰此山をのりはしめけん

と詠じ給ふとは申せ共社家の傳とは矛盾し侍る又日本紀一書曰素盞鳥尊居熊成峯而遂入根國者也云云卜部氏の口傳に熊成峰はワニ也と讀べし出雲の國に鰐淵と云山ありワニと云は龍也と云り是又當山の云傳る説とは異也弘治二年毛利元就當山發向の時當山に參詣し和多坊を宿坊とせられ坊の主榮藝法師を國の嚮導に召具せられ侍る一年宗養といへる連歌師も

此瀧を見て

瀧の糸やから藍染の夏木立

と發句仕り侍るなど語りける予亦詩を賦て曰

寺號ニ鰐淵ニ信ノ脚行

嵐光秋色盡難成

瀑泉雨後數千尺 欲_レ洗_ニ無才無藝名_一

とかくして日も漸かたぶきければ主の坊に暇乞して山を下り川下と云所につき馬にのりて北の方十六島など詠めやり西の方に森木高く鳥井有をみて人に問へば垂水の明神と云神の名を尋ぬれ共_レえらすと云奥宇賀口宇賀など云所は皆出雲郡也さい川と云ふ川より楯縫郡なりとぞ

神門郡

神門郡とは神門臣等古へより今に至るまで常に此所に居れば神門と云也

朝山

朝山の郷は神魂命の御子眞玉著玉之邑日女命座す爾時に所造天下大神大穴持命娶給ひて朝毎に通ひ座す故に朝山と云今朝山の觀音といふて靈佛あり

鹽治_{えんや}

鹽治郷は阿遲須枳高日子命の御子鹽治毗古能命坐す故に止屋と云神龜三年に字を鹽治と改む鹽治の社あり

り出雲の飯入根が振根に殺されし止屋の淵と云も此所也今八幡の宮あり佐々木の一族此所にゐて世々鹽治を氏とす

今市

今市と云所に神門寺と云あり今淨土派の僧住せり記曰新造院一所朝山の郷の中嚴堂を建立す神門臣等が造る所也と有_レ知此寺を云にや

八野_や

八野は須佐能烏命の御子八野若日女命座す爾時に大穴持命將に娶り給はんとして屋を造らしめ給ふ故に八野と云按するに八野若日女命と大穴持命は兄弟也同姓を娶らず況兄弟をや嬪に娶り給はん成べし是も伯母也いかんぞや娶の字誤り成べし居の字か神道_レえれる人に尋ぬべし

高岸_{たかし}

高岸は大穴持命の御子阿遲須枳高日子命晝夜哭座す仍て其所に高屋を造り登り降り養ひ奉るゆへに高岸

といふ神龜三年に字を高岸と改む今は小山の邑の中
高木と云所成べし小山に觀音の靈像あり

古志こし

古志は伊弉冊命の時日淵川を以て池を築作る爾時古
志國等至り來て堤を爲る即宿居の所也故に古志と云
今古志氏の神職の家有て弘法寺あり

多伎たぎ

多伎は所造天下太神の御子阿多加夜努志多伎吉比賣
命坐す故に多吉と云神龜三年に字を多伎と改む

神門湖かんのうみ

神門の水海は周卅五里七十四步裡に鰐魚鎮仁鮎須々
枳玄礪有と記せり今神在の湖と云是也大社の南二里
餘りにあり毛利元就當國發向の時此神在の城も破り
給ふ辨慶が硯今は里の通路の橋となりぬ辨慶は古今
の勇者人の普く知れる事也ふとおもひ出て綴りぬ

壽皇鐵杖陶氏覽
致力中原男子意

辨慶麿雲同日談
平生優逸自堪慙

藺松山そのまつやま

藺の松山とは神門水海と大海の間に山あり長さ廿二
里二百卅四步廣三里此は意美定努命の國引座時の總
矣今俗人號て藺の松山と云地之形體壤石並びなし白
砂のみなり積り上つて即松林茂繁し四風吹時沙飛流
て松の林を掩埋云々今の人高濱と云柴引廻し垣した
るありいかにぞと里人に尋ぬれば耕作を白沙にて吹
埋むゆへに田畑を柴垣にて圍ひ侍る也と云向に藺の
妙見の社あり日本紀に云初大己貴尊の平國也出雲の
國の五十狹之小汀に行到て且當飯食といへるも此所
なりとぞ

赤塚

赤塚は大社の南二十餘町にあり民家漁獵を業とす里
人の曰和歌の仙山邊赤人の塚有故に赤塚といふ赤人
のゑるしの松も有しが去年の風に倒れ侍る赤人は父
祖未詳神龜天平の比の人とも云又は聖武天皇同時
の人也ともいへり人丸と同時ともいへり古今の序に
山のべのあか人といふ人ありけり歌にあやしくたへ

なりけり人丸は赤人が上にたゝん事かたく赤人は人丸が下にたゝん事かたくなありけるといへるはこれなり

菱根池

菱根池は大社の前にあり池の中に株をたてゝ是より殺生禁斷の境とす昔は國造身退は赤牛にのせて此池に沈めしと也孟子曰上世其親死則舉而委之於壑といひ易曰古之葬者厚衣之以薪葬之中野不封不樹期無數といへるもみな是上古の風儀成べし弘仁年中に穗日命二十五世の孫國造千國よりぞ土葬にし侍る浮屠の諸經要集を見侍りしに凡葬法四種あり一曰水漂二曰火焚三曰土埋四曰施林と云々五分律には若火に焼時は安在石上不得草土恐傷蟲とあり火葬は佛氏よりぞ出たり

杵築

杵築古は出雲郡にあり今は此郡に屬す戰國には此郡を彼へ掠め彼を此郡に奪る也と古老語り侍るぞ實もとぞ覺ゆる千早振神代に八束水臣津野命の國引給ひ

し後所造天下太神の宮を諸ノ皇神等宮所に參り集りて杵にて築かせ給ふ故に寸付と云神龜元年に字を杵築と改む易曰上古穴居而野處後世聖人易之以宮室とあれば我朝も又同じ此宮居を宮室の初とすべし於是知宗廟を先とし廐庫を後にする事をされば古歌にも八雲なる大たけ山の宮作り

是や社のはしめなるらん

とよみしは是也風土記に出雲の御崎山高三百六十丈周九十六里一百六十六步西下所謂所造天下大神の社座すとあり八雲山出雲山又は蛇山共いへり藻鹽草に不老山といへるも此山也古歌に

年經ても老せぬ山の松の風

幾萬代の數に吹らむ

近き比宗養と云連歌師が發句に

鴈もまておなし常世の春の月

又沙門江南が堂社十景の詩其不老山に

不老仙郷雲水間 瓊林瑤草密還閑

直提羅刹睡眠杵 築得閭浮本國山

大己貴命と少彥名神と國を作りて後少彥名命は熊野の御崎に至て遂に常世國に適共云淡路に至て後栗葉

に彈れ渡て常世の郷に至ると云傳ふるは此不老山に來りたる成べし又古歌によみ人ゑらす

浪にうく山つきとめてすむ神の

内外の海の月をみる哉

是は浮浪山と云説鰐淵寺の下に詳なり信用しがたし此山の麓素戔の社風土記には出雲の社古事記に須賀宮素盞烏稻田姬大己貴合祭は此大社也一に多生とかく日本紀曰顯國玉神其子凡一百八十一神有す故に多生ともいへり神書抄に杵築の宮は乾の方にあり日の入所也故に日隅宮と云又時に高皇產靈の二神を還し遣し大己貴命に勅して曰今者汝が所言を聞に深く其理有故更に條々にして勅し給ふ夫汝が所治顯露の事宜く是吾孫に治すべし汝は則神の事を治すべし又天の日隅の宮に住へし今當供造則千尋の栲繩を以て結て百八十紵にせんととの給ひしは詩にいふ其儀則直く縮版以載作廟翼々といへるなるべし其宮を造る制は柱は則高く太板は則廣く厚くせんと故に大社と申侍る此社は自餘の社にかはりて正殿南向柱は九本何も丹青にて彩り後の不聖不丹と云聖法神勅とは事かはれり階を昇れば正面の障子に金彩色に當社の地圖を

寫し左の障子には競馬を繪き昇殿して左へまはり内殿西に向ふ故に人東に向て拜すいかなる故にや日本紀曰父母の二神素盞烏尊に勅して汝甚無道以宇宙に君とし望むべからず固に當に遠く根の國に適と遂に逐之是を以て思ふに二神の勅勸なれば直に拜し奉らぬにやといふ人もあり社の高さ七丈以上を御正殿造と云七丈以下を御假殿作りと云正殿は大營たる故に正殿假殿かはるゝに造立あり齊明天皇五年に出雲國造に命じて神の宮を修造せしより以來代々の天子將軍建立せらる此時の國造日本紀には闕名とあれ共國造の系譜を考るに穗日命二十世の孫布禰の宿禰が時なるべし國司帥中納言藤原家任が日記に云天仁三年七月四日大木百支海上より稻佐浦による件の木御示現有て方尺寄來れり所以何者因幡上宮御近邊長十五丈口一丈五尺の大木一本寄來る然に在地の人民疑をなしながらこれを切とらんとする所に大蛇件の木を纏侍る程に人恐て退ぬ伐とらんとはかりし者は皆病苦頻也故に種々の祈禱をなす所に御示現に云出雲大社毎度御造立のとき諸國の神明大行事となる今度是我大行事に相當已に御材木採進せしめ畢ぬ仍て件

の木一本は我得分也急に此木を以て我社を造立すべしと示し給ふ件の寄木正殿營作は永久三年十月廿六日丁卯戌の時の遷宮也是を寄木の造營と申也國司右衛門尉藤原昌綱が記に云建久元年正殿御造立の時課亡國之民被營作事神慮に不叶嘉祿三年假殿造營御柱に蠹あり其文曰

居大煩^レ物 朕非^ニ素志^一 若人歸^レ德 栖^ニ高木^一足

御示現の趣右衛門尉昌綱佐々木信濃前司泰清公家に奏し武家に訴へければ寶治二年正殿宮作には庄園の課役を止られ關東より米穀一萬石黃金千兩下し給りて土木の功を遂てければ民戸豐饒にして神明納受し給へりとぞ素盞雄尊出雲の清地に到まして曰吾心清々彼地に宮を立乃ち相與に違合して大己貴神を生ず因て勅して曰吾兒宮首は即脚摩乳手摩乳也故に名を二神に賜て稻田宮主の神と云已に尊は根の國に就ます神祇令注曰出雲の大社は素盞烏尊也故に朝廷及社家此社に素盞雄を祭れり日本紀を以て見れば大社は天神大己貴の爲に造供所なり素盞雄は根の國に行故に中國に於て降跡なし後の世大己貴を祭る故に素盞烏を合祭るものなりと云り惣じて末社三十八座あり

虚空社は素盞烏也社なき故に虚空と號す御供に水を供しぬるは行潦^{カクレ}の水を羞或は周家の粟を食ざる伯夷叔齊が志にや御向社は稻田姫也本社の左の側にあり天前の社又天先共書く御向の社の次なり是は稻田宮主の神を祭れり築紫の社は素盞烏の三女本社の右の小社也其外御崎阿式鷺宮等なり社より外七十二町に大鳥井ありしが今は株のみぞ残れる八雲山麓北島が亭あり一國造の世よりの屋地也とぞ東の谷より流る川を吉野川と云ふ萬葉集に八丸が歌に

八雲立出雲の子良か黒髪は

吉野の川のおくになりそふ

とよめるはこれ也こらとは伊勢の子良と云者の類なるべし藻鹽草にはからと有少女の惣名なりと何をか是とせん西の谷より出る川を素峨川と云清地又同じ二條院讃岐が歌に

千鳥鳴そかの河風身に玄めて

眞菅片敷あかす夜半哉

藤原の隆祐朝臣が歌に

降初るそかの川原の五月雨に

また水淺し眞菅からなん

後京極攝政前太政大臣歌に

今霄たれ眞菅片敷明すらん

そかの河原に千鳥啼なり

と皆此川をよめる歌也社の東は龜山西は鶴山此鶴山の麓に國造千家が亭あり此亭の前に井垣しまはしたる石あり尋ねれば是こそ天の磐椽樟船と申萬葉集に久堅の天のたくめる岩舟の

とめし高川はあせにけるかな

とよめるは是也又素盞鳥の命新羅曾尸茂梨之處より填土を以て船を作り乘り降り給へるが石と化したるにや唐崇安縣武夷山に石船峯あり船の形のごとし洪汝元が詩に

萬仞峰頭駕三石舟 謾傳仙子半空遊

と作りしも思ひ出られぬ又社中に三井有一に曰鶏卵の井此水を以て御供を炊侍る井の側に左抛子の石と云あり二に曰眞名井龜山の麓にあり天照大神の素盞鳥の帶給へる三の劔を天の眞名井に振濯然に咀嚼給ふも此井なるべし沙門江南が詩に

摩那井庭倒天河 但似西州馬腦坡
往昔從瀨斬蛇劍 村雲日起水光多

三に曰御手洗これは六月一日廿八日に祭あり此三井は神の井なれば人恐て汲む事もなし龜山の麓に森あり出雲の森と云一には母理と書今能儀郡の母理を爰に移したり共いへり涼殿と是をいふ是も六月一日廿八日國造出て祭ありされば古歌による人まらず心ありや出雲の森の櫻花

その神垣の八重に咲なり

沙門江南が詩に

松樾相清境亦均 年々夏月此迎神

但將一掬晚涼好 吹醒五衰三熱身

詩句は尤巧なれ共五衰三熱は俗間に云事にて信用しがたし天人の五衰は佛書に見えたり神明に五衰三熱といへる事理道心地の神道には一向なき事也皆浮屠の託説妄語也神代の神寶も殘たるにやと尋侍れば抑當社の御神寶多き中に神代より傳る寶劔二柄有しを元和三年後醍醐天皇の勅により國造孝時神劔一柄を奉る賞として建武三年に肥後國八代の郡を寄附し給ふ綸旨なりとて見せ侍る今に一柄残りたるこそ神世よりの靈劔也とて見せしに劔より柄直に作り付たる劔也其外は後世の人の納めたりし雄劔也神寶種々の

中に田器農具も有けるこそ有がたき凡農功を以て國を開きし事と漢共に同じく後世の天子諸侯に稼穡の
かなんを能く知らしめんが爲也異朝にて后稷時百
穀を播は周室の祖棄と云聖人也我朝にて民に粒食を
教給ふは此神の御子倉魂神なり上一人より下萬民に
至るまで重すべきは農の時誠に國の基なれば有がた
かりし神慮也後の世に至りて田舍翁得此已過矣とい
ふ類多きぞかなしき然るに中子染紙やうの神寶とい
へるも又多し宮中を見れば御正臺と申して鏡のごと
き内に佛像を鑄顯しいくつ共なくかけならべ旗は佛
前の幢幡の制にて四方にかけなびかせ社共阿良々伎
共見分がたし社の西に輪藏あり三重の塔あり大日堂
は胎藏界本尊は行基菩薩の作なりなどほこる鐘樓に
のぼりて鐘の銘は如何にやと見れば承和六年伯州某
山某寺とえり付たりさればこそ上古には鐘はなきと
見えたり六條右大臣北方歌に一本作和泉式部歌

神垣のあたりと思ふに夕たすき

おもひもかけぬ鐘の聲哉

とよめるは今の折からおもひ出られぬといへば老翁
語り曰仰のごとく上古の神風は佛法の息を退け侍る

が近き比國造雅孝が記に云明星客院といへる沙門は
先國守佐々木尼子伊豫守源經久に勸め多胡悉休を奉
行とし大永四年大日堂を建立し同四月廿八日供養を
途畢ぬ大永七年六月十五日に三重塔成風の功畢て多
賀新左衛門尉監之天文六年六月九日輪藏建立して攝
津の國兵庫より一切經を買下し是を納む目賀多與四
郎監之永正七年當社造營の時伯州より九乳を買取て
寄附す皆尼子經久が建立也我もとより佛神氷炭の差
別不^レ知にはあらねども國主の旨をむきがたきゆゑ
とぞ語りける抑日本に大社二座あり近江の多賀は素
盞鳥を崇て西向に立給ふ當社は穴持を祭て東向に
立たまふ丹波の大神は此神を勸請せし也延喜式祈雨
神の祭は八十五座の中にも大社二座とあり此社の天
井に四方の正色四隅の間色にて彩り八雲を繪き侍る
然に七雲かきける事は神秘にてかるく敷申さぬ事
なりとぞ或は一雲には素盞雄尊駕し給ひて妣國根の
堅洲國に罷給ふ故に繪侍らぬとも申傳へたり脚摩乳
手摩乳を吾兒の宮首となし給へば今の國造は其苗裔
にやと尋侍れば左は候はず八重垣の神主佐草氏こそ
脚摩乳の後にて候へ日本紀に高皇產靈尊大己貴神に

勅して曰汝が祭禮を當主ものは天穗日命是也と詔ありしより國造は天穗日命是也と詔ありしより國造は穗日命の後也十八世の孫宮向宿禰始而賜出雲姓中年七十二度祭禮中にも正月一日七日三月一日二日の御頭千家執行之同三日北島執行之此日鰐淵寺の僧會所と云處へ來て大般若を轉讀する事は近年の例也五月五日九月九日の御頭十月の齊は北島是を修行す天正年中より朝鮮の征役につかれ御頭の祭も朔羊ばかり也七月四日は國造及神官等身退の館に參籠して祭あり別火と云祠官是は財氏也と申す物部十千根大連が後胤にや今に至る迄守鑰の役也彼別火今雷神を負て社の内外ありくと云信じがたき事也故に人恐て門戸を閉て今霄外へ出す若出て神に逢へば忽死すと云ひならはせりされば傳記にも日域は二神開闢の地就中出雲は陰陽始終の神國杵築は神祇聚會の靈社太神鎮座于日隅宮により已來ことに十月專祭禮を侍る此月十一日より十七日迄を齊と云此日の間に風烈く波高くよせくる波に化度草と云藻にのれる龍蛇龍宮より貢し侍ると云是も龍は陽の物なれば陽月のゑるし成べし地下人是を見出し國造へ奉れば則祿給はる彼龍

蛇をば捲に入て神殿に納奉る十一月中の卯の日新嘗會は大庭にて遂行むかしは一國造たりしを穗日命四十八世の孫國造孝時に三子あり嫡子清孝多病にして無子二男千家の祖孝宗亦不肖にして父に不_レ從故に三男北島の祖貞孝家督を續にぞ有ける時に清孝が母孝時を諫て曰清孝多病也といへ共爲嫡男願は一代神職を繼て後貞孝に神火を繼しめ給へかしと孝時諾之建武三年清孝神火を繼て後に父の命を背き當職を二男孝宗に譲る貞孝奏聞を経て任父之讓狀神火相承侍る是より兩酒造に分れ年中行事祭禮をも月代に勤め侍る夫天の穗日命より五十八世今の國造北島晴孝六十一世千家尊能に至る迄不生不滅にして父身退は衣冠正しく座せしめ食膳常の如く備へ侍る時に子は大門より出て大庭へ行神火を繼侍る道の程十里計なれば彼宮にて祭禮事畢たりと告來る時父の國造をば北門より出して瓦葺に遣し葬りぬ嗣子は入かはりて酒宴遊興してぞ有ける其神火神水を嗣と申侍る事は神代より傳りし木をもみ火を出し膳夫調へ祭る事也是によりて三年の喪もなく酒肉斷つ事もなく五服の忌もなく悲難する事もなく誠に聖門の哀の道もなく神

道忌の法もすたれたるに似たれ共凡身體髮膚は皆父母の遺體なりたとへば木の實生に不_レ窮が如し神道儒佛共に此事をいへり楞嚴經に佛波斯匿王に告たまはく汝年十三の時垣河の水を見る今と異なる事なし是汝が皮肉は皺といへ共見精は不皺是は身に老少ありて見精は常に存じ身に死生あり本姓は常に在事を明せり晁文元と云人隱者劉海蟾に不死の道を問ふ海蟾笑て曰何ぞ嘗て死せんや然るを君は乃畏て生をもとめんや死すべき所の者は形のみ形と共に滅せざる物あり是も常にして此理本より存せり但し異端は皮に黏り骨に着く故に死生に迷ふ也と佛老の見解にも火の薪に傳ふるは猶神の形に傳ふるが如し惑へるものは形一生に朽ぬるを見て便神精共に喪とおもへり猶火の一木に窮を見て便終期都て盡と思へるが如し易曰精氣物となり遊魂變をなす孟子曰過る所のものは化し存する所の物は神也伊川曰堯舜幾千年其心今に至て在り横渠が曰物を物とす故に能過化す性を性とす故に能存す存する時は吾順にして事へ歿する時は吾寧といへり其上無後不孝とする聖人の戒め今更身にまみて覺へ侍る此理をかく工夫し給はゞ父母の

孝より起て神慮にも人道にも背かざるべし誠に殊勝の神勅遺風也浮屠の種子を絶つさこそ神慮にも聖教にも背きなんと思ひ侍る然るに國造は叙位叙爵と云事もなく公侯貴人といへども獻酬の禮もなし偶地下人其殘瀝餘殮を喰へば唇缺齒落若し誤て沓をはけば忽脚癱とかや國造許すといへば則愈など語るいかなる故にや昔後醍醐天皇御祈禱の爲に官位下さるべしと思召て尋仰られけるに國造孝時勅答曰夫國造は忝くも天照太神の勅を受けてより以來神々相續て鑽_ニ神火_一烹_ニ神水_一未_レ混_ニ流俗_一也神水は天穗日命の眞水今に至て源流不斷神火は天照太神より受繼て今日に至るまで不消滅而此身穗日命と一體也故に自往古官位なしと申せり然則風土記曰國造上六位出雲臣廣島と位署正して有は如何にやと問へば傳記曰穗日命十七世孫意宇足奴命加國作二字意宇足奴命九世孫千國弘仁年中に改_レ作爲_ニ造字_一爾來稱_ニ國造_一云々舊事紀にも國造百四十四國と記せり又瑞籙朝以_ニ天穗日命_一十一世孫宇賀都久志_ニ定_ニ賜_ニ出雲國造_一と又源親房公曰成務天皇四年初て國造を定め給ふ國造は國司の名也

後に改て守と云ふ按するに崇神天皇の御時は穗日命十世孫毛呂須命阿多命也成務の朝には民祖命襲髓命也系譜に宇迦都久慈も廣島も見へ侍らず思ふに今も當國須佐の國造と云あり上六位廣島は此須佐の國造が祖なるべし昔は國造の下に神主檢校の兩職あり文治年中には内藏資忠武士に屬しながら神社と稱し補惣檢校職たりしが後に忠房還補せられぬ神主檢校上官など云祭の時は御供を國造に備へ國造故有時は神前に備偏に國造を神の如くに崇敬する事は周家の戸と云類にや夫戸カタシロは詩に詠じ禮に糺せり孟子曰弟爲戸則誰敬將曰敬弟在位故也朱子曰戸は祭祀所主以象神雖子弟爲之然も敬之當如祖考也と國造も戸の位にて然も敬之當如大己貴命乎又人の盃をのみ給はぬも火を忌みし故にや凡神道同火を忌む事の起は伊弉諾伊弉冊尊を追て黃泉に入ましゝて共に物語し給ふ時に伊弉冊尊曰吾夫君尊何來之晚也吾已に滄泉之竈矣時に伊弉諾尊大に驚給ひて吾不意不須也智汚觸國に到りけりと宣ひ乃急に走廻歸給ふ纂疏曰神事に火を忌は何也曰火は是淨といへども物に仍て穢る故に炊爨の物を食はざるのみと國造は

此心にて火を忌給ふなるが世の人と盃禮もなきを民俗の説に國造は天子と位齊しき故に盃給はぬなどいへり又此國は素盞雄の天下也故は天照大神と夫婦になり給ひ正哉吾勝其外五男三女を生給ひ代々の天子の祖神は大社也伊勢は外戚の祖神なる故に天子國造位ひとしきなど云天に二つの日なければ國に二の王はあるまじ天照大神素盞雄夫婦とならせ給ふなど云神徳をかすめぬる巫祝の説こそ神慮の程もはかられておそろしけれ日本紀及古事舊紀の兩紀其外の神書にも天照大神勅して曰彼五男神は悉是吾兒也と宣て乃取而子とし養ふなど云所をよく見明らめざる故也纂疏曰所生男兒を以て日の神に付屬す故に吾勢尊日の神の養ふ所にして後代百王皆其下より出たり何況所實三種神器進雄の暴行を以て因縁とす蓋此尊吾邦に大功有事は得て稱すべからず吁々舜の弟象なき時は舜の大孝傳らじ佛の黨弟天授なき時は則佛の正覺なる事なからんといひしぞ實と覺へ侍る同姓さへ不聚況同胞婚姻の説今より信すべからず餘に無下なる出雲巫祝の妄言なれ素盞雄或は進雄と云蓋暴惡の義也爲惡逆一疾故素盞雄と云常に哭泣を以て行とし

鳥の鳴が如くなる故に素盞鳥と云御鬚八握有故に八束命と云童子たりし時は或は牛頭天王或は武甕天神など云はみな巫祝の説也又曰素盞鳴尊には八の天罪あり一勇二悍三安忍四哭泣^{イナリ}是性惡也一重捲二放駒三放屎四生剝是修惡也然其父の神の命を不^レ背根國に往給ふは孝也阿姊に訣別をとり清心ありけるは敬なり孝敬の二德を備へ給ふ御神なり御子大己貴命に七つの名あり一曰大國主命世界の主と云心也二曰大物主命萬物の主たると云ふ儀也三曰國作大己貴命又國造大穴牟遲共書く國造の名爰に出たり國土を造作て我を貴とす心也四曰葦原醜男命娑婆世界の荒惣神を主る也五曰八千戈神とは九萬八千の軍神なり六曰大國主命とは世界人民の魂魄也七曰顯國王神とは顯露に國土を作り給ふ也傳教大師此七神を取て山王七社と勸請せり三輪石上布留日吉下鴨松尾など皆此神を祭れり抑國土を經營し給ふは大禹の勳まします有がたかりし御神也昔後醍醐天皇勅願の綸旨に曰

被 綸旨仰 右以王道之再興者專神明之加護也殊仰當社之冥助^二欲^レ致四海之太平^一仍退逆臣^二爲^レ令復^二正理^一舉^二義兵^一所^レ被^レ企^二征伐^一也速得^二官軍戰勝^一

之利^二可^レ歸^二朝廷靜謐之化^一旨凝^二精誠^一可^レ祈中^二勅願^一令^二成就^一勸賞可^レ依^レ請云依^二天氣^一狀如^レ件

元弘三年三月十四日

左中將在判

杵築大社國造館

又尊氏卿も願書を奉らる其文曰

凶徒對治祈禱之事於^二出雲大社^一近日殊可^レ被^レ致^二精誠^一之狀如件

觀應元年十一月廿一日

在判

杵築國造殿

細川玄旨當社參詣の時

此神のはしめてよめる言のはを

かそふる歌や手向成らん

當社本願が所望にて發句

卯の花や神のいかきの夕かつら

水無瀬氏成當社參詣の時に六月廿一日也

ことさらに此宮居をやあふるまし

今は集る神無月哉

宗養が發句に

八雲にもけふ九重のかすみかな

長嘯子其外和歌の友門弟等八雲の神詠を句の上に置

て三十一首法樂の歌奉りし卷頭長嘯子が歌に

やはらくる霞の身をも紅の

樋の川上に春や立ちむ

予も空く下向せんも本意無れば硯取寄て絶句三首

日隅宮地界乾濱 不老山從爲御屏

明信採蘋祈有應 我家白髮保龜齡

瑞雲五色起芒陽 劉季斬蛇三尺鉞

漢室龍飛纔四百 豈如十握劍光長

進雄安忍緜方命 根國羽山一樣風

大古醜男巡宇宙 禹乘四載又同功

又二十六韻

維斯杵築社 神聖一簣功 美保青不了

三韓碧直通 隱岐我藩國 目送水波洪

今古鐘神秀 當時多名公 垂跡大已貴

合祭素盞雄 三十一字詠 數萬億歲隆

父逐子造國 勳勞自然忠 是非與邪正

異曲又同工 惟文兮惟武 廟食永無窮

三井湛前後 八橋橫西東 菱熟菱根沼

松老不老嵩 御田嘉穀升 澗溪蘋繁芄

神門湖水深 接縷釣魚翁 宮制柱高大

仰看數十弓 宜哉大社號 靈德聳蒼穹

白鶴憩花表 朔羊存磐綱 崇神運神寶

齊明脩古宮 吁搆閣堆染紙 雕石昭火籠

高堂安佛像 層樓有金童 瓦葺耶祠宇

摸陵兩端中 何揮斬蛇劍 不斲黠胡衆

神道雅如在 異端奚可攻 國造辱神勅

到今潔其躬 黑心忽除去 昨夕祈國豐

聊被催美景 卑詞愧禽蟲 金烏浴西海

已哉矣匆匆

又

于思于思行何舛 閱墻重播駒放吠

忽從阿姉智鏡明 惟神可人教性善

かくて社中を出て橋あり欄干の柱に物書しありいかなる人の筆の跡にやと立よりて見れば

雲陽神門郡杵築大明神前略約數百年以往未復

落成某年之昔與兎徒戰此地已欲殞命某臨

危而不變忽禱爾于神明矣然而以短兵慶強

敵於皐欄之下寔有默禱之應者歟邇徠物換星移

不_レ遂_ニ修造之志_一今慈乙未辛而領_ニ佐世舊棲之地_一
所謂畫遊之榮也不_レ獲_レ止以築_ニ此橋_一云

文祿第四歲十月吉辰

雲州大原郡住源朝臣佐世伊豆守正勝敬白

と書たるにぞ神徳も著く佐世が武功もあられ侍る

日御崎

日御崎へは杵築より船にて詣でける道すがら船郎指
點して教へけるは是は辨才天島佐々古島蠶島此洞は
鰐淵寺の瀧坪より通徹せる穴なり屏風島豪島これは
十羅刹女の寶物を入たる豪也此山は天高間原諸神集
り給ふ山なり是成岩は鬼の眼あれは矢取の翁が腰か
け岩これは太神の的場あの鬼の眼を日夜射給ふ也此
島は幕島と申て此方は杵築の方なれば龜甲の紋岩に
あざやか也これよりあなたは御崎の山なれば柏の葉
の紋明なり故に幕島と申傳へ侍る化粧島とは十羅刹
女毎日此島に來り給ひ粉黛を施し給ふあの三本の松
は太神の御弓をかけ給ふ故に弓懸松と申なり是は矢
摺の端早矢乙矢の跡あり此穴を鬼のかまちと申也又
岩瓦に長さ一町斗白き理見ゆるは鬼の匍匐して逃た

輔車

りしあとなり左は鱸嶋と申て鬼等四萬八千艘の先舟
の鱸爰に浮びたり此島のはとりにて釣たる鰯と云魚
氣味すぐたれば國の土産とせり是なるは黒島と申な
り飯島とは鬼と合戰の時諸神の兵糧が則島となりた
る也是は經島法花經八軸其外七千餘卷の修多羅石と
なりたり此島の上に百枝の松とて神木有されば御崎
の明神の歌に

我宿の千本の松にすまんより

日の御崎なる百枝の松

と神詠により此所に影向ならせ給ふ千本の松とは伊
勢をさして申侍る連歌師宗養此松を見て發句

百枝の苔のみたれか松の宿

と仕り侍る此松近き比千年終に朽侍れば今は明神も
伊勢へや歸り給ふなど物語するほどに船岸に着けれ
ば宿坊惠光院へまかり衣服改め社參し侍る神主は檢
校從四位尊久と申て鷗鵲草葺不合尊の後胤昔は三位
まで經侍る也などことごと敷系譜を語り侍る耕雲明
魏記に云雲州日御崎明神と即杵築大明神の季女に而
十羅刹女の化現也荒地山の鎮守也孝靈天皇六十一年
現靈威云云一説には伊弉冊尊軻遇突智を斬て劔の鐔

より垂血激越て神となる瓊速日神次に熾逢日神と申奉るこれ御崎の明神ともいへり衆説まち／＼なりしに詞官の語りけるは上の三社は田心姫湍津姫市杵嶋姫の三女に素盞鳥を合祭れり下の五社は正哉吾勝尊天穗日命天津彦根命活津彦根命能野櫛樟日命五男に天照太神を合祭りて上の社下の社都て十羅刹女と崇奉りし故に杵築より先此宮へまいり下向して大社へは参り侍る古法なりなど威力をあらそひ兩部習合の神道をなか／＼敷ぞかたりける社中を見れば御正臺とて佛像を鑄あらはしたる鏡のごとき物をかけならべ香をたき帷を懸けいむとていはぬ事にもあらねば僧は經をよみ鐘をたゝきぬる事しきりなり彼内侍所に僧尼の贈物を献せず天子毎日御拜朝は僧尼不參佛經のさたなく伊勢加茂の忌詞敏達帝鎌子の神道には事かはれり神慮はかりがたくぞ覺へ侍る八人の乙女神樂を奏しけるが樂器も笛篳篥和琴やうの物も見へず大鼓に調拍子などはせめての事にや鰐口といふ鐘をぞたゝき侍る昔天照大神天の岩戸をさして籠り給ひし時天下とこやみになりければ諸神いのり申されけるに天の鈿女命手に茅纒の稍を持天の岩戸の前に

て巧に俳優せしより事初りて内侍所の神樂などは僧尼並に佛經懺之と禁秘抄にも見え侍るに是はそもいかなる神樂の因縁にや社の上の山を男山と云十二月晦日の夜檢校一人衣冠して岸に上り解除申事あり時に偶雨雪ふるといへども檢校簀箆着せずして少しもぬるゝ事なしと奇異の物がたりし侍るかくて鐘樓に上りて見れば羅浮子のかゝれたる銘あり其銘并序曰

出雲州者陰陽交合之靈區神祇集會之勝地也御崎神職者有言下祭三太日靈女貴五男子三下宮祭素盞鳥尊三女于上宮焉云爾果然乎所謂五男三女者日神與素盞雄誓約之時濯於天真名井相共所降誕也其名昭々于國史置而不論其所崇之靈鏡寶劍德照三天地威鎮四夷并祭日神素尊誰不尊信乎誰不畏敬乎緇徒有言社內有多寶塔是擬素盞鳥有十握劍是表十羅刹女其然豈其然乎或曰此地是根國也雲州者素尊所開而宮居之所所在且八重籬杵築與此社接隣則以爲其幽魂所遊乎天曆帝深崇此宮加賜日字號日御崎祭祀不怠靈驗惟新愁雲龍既古殿宇頽敗頃年社僧順式來

江戸屢因幕下左右請修造事遂得達于台聽有旨可之於是故國守京極氏蒙鈞命監造宮事有故不果今大守拾遺源直政君相繼奉命落成之宮廟改觀繪素窮工雕楹玉磬繡櫺雲楣輪奐矣嗟乎偉哉可謂盛舉也其美譽芳聲永與神德共垂于不朽茲架高樓以掛巨鐘其銘曰

英靈所_レ在 肅然神風 出雲之國

御崎之宮 陰有靈貴 陽有進雄

清鏡掛_レ日 良劍吐_レ虹 五男三女

名異體同 社分_二上下_一 名振_二西東_一

氣遍_二天外_一 水行_二地中_一 德安_二百姓_一

明達_二四聰_一 杵築隣近 山陰路通

星霜歲久 廟壘牆空 空命興_レ絕

工役呈_レ功 經營盡_レ美 威驗無_レ窮

一樓高聳 九乳惟洪 脫_レ出_二鑪韞_一

鑄_二銘鑛銅_一 似_レ示_二淵默_一 忽破_二昏蒙_一

砭針徹_レ耳 展轉驚_レ夢 深更霜白

講寺花紅 鏗爾鯨吼 殷其雷公

祈者必應 敬而可_レ崇 家齊國治

道泰時豐 洋乎來格 厚始要_レ終

寬永_{甲申}初夏吉辰 民部卿法印 道春

凡此國の神社佛閣の鐘の銘を見侍るに或は他國より取りて來るもあり或は文拙詞卑のみなりしが此鐘の銘を見てこそ目覺る心ちしてくり返しよみ侍る時に人の所望によりて一絶をつゝり侍る

帆翼如_レ飛臻_二御崎_一 山園水遠立_二靈祠_一
勿_レ言胡國西天女 皆是扶桑神聖姬

鷺宮

鷺の宮は何れの神を崇侍るにやと牧童に尋侍れば是は素盞鳥の妾にてましけるが天成の靈質にて御契り淺からざりしが後に天瘡を患ひ給ひ花の顔忽に變じて惡女とならせ給ひ素盞鳥の命と御中もはやかれにならせ給ふかくて妾女我身の色衰へたる事をかなしみ天神地祇にふかく誓ひ給ひて末世の人民我に祈る事あらば痘疹の患をまぬかれしめんと誓約し給ひし故に今に至るまで此宮の石を取て小兒の守袋に入てかけぬれば痘疹のやまひを脱といひ傳へたりとぞ年老たる社司の語しはこれは瓊々杵尊なり傳記に云所は昔神託兒童而祈我者免痘瘡之患爾來爲痘

瘡守護神云々殊勝にぞ覺へ侍る

三瓶山 サンペヤマ

三瓶山又山邊と書石見と出雲の境なり俗間に日本第五の大山と云今按するに記に曰佐比賣山は石見と出雲と兩國の境古へ飯石郡にありと今いふ山邊は是成べし多岐より北は海西は石州なり

飯石郡

飯石とは伊毗志都幣命卿の中に座す故に伊鼻志と云神龜三年に字を飯石と改む今の俗説に云飯石とは託和と云所に飯を堆く盛たるやうの岩あり故に郡の名とすといへり託和の社記に見えたり

熊谷

熊谷とは古老傳に曰久志伊奈大美土と麻奴良比賣命任身て産とする時に及て生む所をもとむ爾時に此所に至り來て詔ふ甚久麻久麻志枳谷有と故に熊谷と云

三屋 ミヤ

三屋とは所造天下太神の御門此所に有故に三刀矢と云神龜三年に字を三屋と改む御門屋の社あり岸寺と云在弘治三年毛利元就當國發向の時此三屋の城を攻給へば城主質を出して和を乞て解ぬ八幡の宮あり

多禰

多禰とは所造天下太神大穴持命と少彥神と天下を巡り給ふ時に稻の種此所に隨ふ故に種と云神龜三年に字を多禰と改む圓通寺といふ寺あり

須佐

須佐は神須佐能袁命詔ふ此國は小國といへども國所有故に我御名は木石に著に非ずと詔て則已命の御魂鎮置給ふ然して則大須佐田小須佐田定め給ふ故に須佐と云須佐の社神祇官にも見えたり今大宮と云年老たる祠官の語りけるはあれなるは於呂志古山此なるは流川社の側に流るゝは素鵜川と申侍る須佐乎命の一の女を柏葉につゝみて此川に流し給ふ故に流川と申侍る於呂志古山の岸に柏木あり一女神石見國橋の浦へ流れよらせ給しを今の日の御崎と崇奉ると申傳

へ侍る當社の卷數にも八雲の神詠を書奉る事子細あり清地は素我なり此須佐の社を申侍る須佐乎命自潮を没て此地に清め給ふ故に清地と申侍るされば尊の御歌に

潮汲あふこの浦のたはむほと

月をそ荷ふ素鵝の里人

と詠じ給ふも此里にての事なり素より此里と云る心とも申傳へ侍る此所より海邊へは五六里もあるべく候に此社の下に潮の池あり流の末には今も蛤など候へばこれ又潮にて清め給ふゑるしにて侍るとぞ語りける然其素鵝の里は杵築成べしと云人多し

宮内

宮内と云所に八幡宮あり

入間

入間と云所に八重山權現在す

波多

波多とは波多都美命天降座す家あり故に波多と云波

多の小川の源は志許斐山より北の方須佐川に流る

來島 キシマ

來島は伎自麻都美命生れ座す故に伎自麻といふ神龜三年に字を來島と改む

赤穴 アカナ

赤名は南の方備後境也八幡の宮あり弘治三年に安藝元就當國發向の時此赤穴の城をせめ給ひ城主與左衛門尉生捕れ侍りぬ

託和

託和に社あり壽福寺といふ寺あり

仁多郡

仁多とは大穴持命詔ふ此國は爾多志枳小國在と詔ふゆへに仁多と云

三處 ミトコロ

三所は大穴持命詔此地田好し故に吾此地古經故に三

處と云

布勢

布勢とは古老傳曰太神の命の宿坐處也故に布世と云神龜三年に字を布勢と改む

日田

日田と云所に日田の明神あり俗謠に云日田の横田なり比太ともかく

横田

横田とは古老傳曰郷の中に田段斗あり形聊長し遂に田に依て横田と云横田の明神あり八満の宮あり東は伯州也横田川の源は寶原山より出て北に流年魚麻須あり此川に烏帽子岩と云怪石あり岩屋山金巖寺俗岩屋寺と云役小角開基の寺也古城の跡あり中比三澤氏はを守る諏訪の明神あり

阿伊

阿伊と云所に川あり源は遊託山より出て北に流て斐

伊の河上に入年魚麻須あり

三澤

三澤の社あり神祇官に見えたり古墟あり鎌倉の城とも云諏訪明神の社あり城の鎮守也天文年中尼子右衛門尉晴久雲石伯及因作の五州の軍士を指麾して毛利元就を退治せんが爲に藝州吉田の郡山へ發向の時此三澤の城主三澤三郎左衛門尉爲幸先登に進み首十三級を得たり雖然尼子勝利を失ひける時爲幸十餘騎を從へ元就を窺ひよせけるを元就の勇士井上七郎是を見知てをし隔て相戦ひ終に爲幸討死してけり尼子か勇士本城高橋及尼子下野守も殞命尼子力盡て雲州へ引退ぬ尼子晴久卒して後嫡子義久か世になりて弘治三年毛利元就當國發向の時此城を攻給ふ城主三澤爲景爲繼兄弟素より毛利家に志を通しければ防戦にも及ず質を出し軍門に降りぬ

大原郡

大原とは田一十町斗平原也故に大原と云古しへ田十町許を大なりとす今郷里の戸口を見るに人民の蕃息

尤大なり

神原

神原とは古老傳曰所造天下大神の神御財積置給ふ所也則神財の郷と云べきに今の人猶誤て神原と云と記せり神原の社神祇官に見へたり昔崇神天皇六十年秋七月群臣詔曰武日照命天より將來れる神寶出雲の大^{モチキタ}神の宮に藏む是見まくほし則武諸偶を遣して獻らせしむ此時出雲の振根神寶を司る折しも筑紫に行て其弟飯入根皇命を被りて弟甘美韓日狹と子鷗濡淳とをさしそへて神寶を貢上てけりかくして出雲の振根筑紫より歸りて神寶を尋侍るに朝廷へ獻とぞ申ける故に弟飯入根を責て輒く神寶を許し侍るとぞ忿りける年月を經とも猶恨み忿事やみ侍らず弟を殺さんとおもふ志有て弟を欺き頃者止屋の淵に多^{オホ}苦生たり願は共に行て見んと申ければ兄に玄たがひて往侍る是より先きに兄竊に木刀を作り形真太刀に似せたり時に自佩レ之弟は眞刀を佩侍る共に淵の頭に至りて兄申けるは淵の水清冷し願くは共に游泳せん弟は兄の仰に従て各佩刀を解て淵の邊に置水中に沐る時兄は先

陸に上て弟の眞刀をとりて自佩侍る弟驚て兄の木刀を取て共に相擊んとせしが共木刀拔ざれば弟飯入根は終に殺されけり故に時の人歌て曰

椰句毛多菟伊頭毛多鷄流餓波鷄流多知菟頭邏佐波

磨枳佐微那辭珥阿波禮

椰句毛多菟古事記
事作衣都米佐須

於是甘美韓日狹鷗濡淳朝廷に參向て曲に其狀を奏しければ吉備津と武渟河別を遣し給て出雲の振根を誅し給ふ故に出雲臣等此事を畏て太神を祭らざる事玄ばしあり時に丹波の水上の人氷香戸邊と云人皇太子活目尊に啓て曰く己が子小兒あり自然いはく玉薨鎮石出雲人祭る眞種の甘美鏡押羽振甘美御神底寶御寶主山川の水沐御魂靜掛甘美御神底寶御寶主也とは小兒の言に似ず若有託言乎と申ければ於是皇太子天皇に奏し給ひ勅して祭らしめ給ふ垂仁天皇二十六年秋八月に天皇物部十千根大連に勅して屢使者を出雲國に遣し其國の神寶を檢校しむといへども分明に中人なし汝親ら出雲に行て檢校定むべしと有しかば十千根大連神寶を檢校定て分明奏し言す仍て神寶を掌しむといへり舊記如此なれどもいまは神寶一物もなく只浮屠氏の納めたりし染紙立すへののみぞ社殿には

残れる

屋代

屋代とは所造天下大神の勅木立射給ふ所なり故に矢代と云神龜三年に字を屋代と改む

佐世

佐世とは古老傳曰須佐能袁命佐世の木の葉頭にさして踊躍をなし給ふ時に判所の佐世の木の地に墜故に佐世といふ佐世の社神祇官にあり弘治三年毛利元就當國發向の時此城を攻給ひ城主と三左衛門尉元就の陣に降りぬ

阿用

阿用とは古老傳曰昔或人此所の山田を守る時に目一の鬼來て佃人の男を食ふ爾時に男の父母竹原の中にかくれて居る時に竹のは動ぬ爾時に所食男云動々故に阿用と云神龜三年に字を阿用と改む阿用の社あり

海潮

海潮とは古老傳曰宇能活比古命祖須茂彌命を恨て北の方出雲の海潮を押止て御祖の神を漂す此に海の潮至るゆへに得鹽と云神龜三年に字を海潮と改む即東北須賀小川の湯淵村中川の温湯あり同川上毛間林川中に温水出得鹽の社ありと記せり今も海潮の湯ありて瘡疥癩痺の類を患る人行て沐す弘治三年毛利元就當國發向の時此海潮の城を攻たまふ城主牛尾左馬助不_レ及_二防戰_一降ぬ俗牛尾とかく

來次

來次とは所造天下太神命詔八十神は青鹽山の裏に不置と詔て追廢故に來次といふ支須支の社あり今八幡の宮あり

斐伊

斐伊とは通速日女命此所に座す故に樋と云神龜三年に字を斐伊と改む樋の社あり斐伊川は西に流て出雲郡多茂村に入年魚麻須ありと記せり昔素盞烏尊其子

五十猛神を帥て新羅國に降到て曾尸茂梨の所に居す
乃興言して曰此國吾居まゝおもはずとて遂に垣土を
以て舟を作りこれに乗りて東に渡り出雲の國簸の川
上にある鳥上の岸に至り給ふとなり此所を云にや里
人のかたりけるば素盞鳥の尊ひの川上にて八岐大蛇
を斬給ふとは此所なり斐伊郷の八本の杉と云ありこ
れは八岐の大蛇の角を表したるなりと語り侍る

凡此行退公のいとまに或は宮司社僧或は村老宿
主なとよびて風土記に記す所の郷里山川を尋侍れ
共十に一二もさだかならず故に里民の口傳と符合
せる所々のみ記し其外は洩し侍る又は世俗の妄説
巫祝の虚誕除かんも本意なければ怪力亂神の物が
たり共筆に任せて記し侍る取捨練擇して見給へと
ぞ

此二札あらゝ草稿して猶耆老に訪ひ遺篇を尋て
潤色せんとおもひ懷に入侍る折しも客の前にて落
してけり客せひなく開き見て文拙詞卑き事を大に
わらひ侍りき予曰是他人に見すべきにあらず母の
仰を承りて書付奉らんかためなりといへは客聞て
扱は陸續の桶にやと笑ひて則題號に宜しからまし

やはとて筆を染かきてたふてげり

黒川本奥書

是斯書者國守出雲侍從源綱隆之近臣黒澤三右衛門
尉所集撰也後號石齋也因茲神社之大概國中_之有増
粲然而足以知矣誠此人之功可取鑒於後人者歟

花徑堂衆山識

懷橘談下終

隱州視聽合紀

序

丁未之季秋八月奉命到於隱州。自島前渡島後。巡見窮鄉遠井。布令於道路也。於其暇日。聞世老晨遺叟之所傳筆。水邨山郭靈社古寺之所。在矣。乃積到若干卷。號曰隱州視聽合記。吁。東野人之語難信。肉眼之所遠望。闕疑而已。唯埃博望侯。

寬文七年冬十月采筆乎八尾館下。

隱州視聽合紀卷一

國代記

隱州在北海中故隱岐嶋按倭訓海中言遠幾故名歟其在異地言

島前也知夫郡海部郡屬焉其位靈地言島後周吉

郡穩地郡屬焉其府者周吉郡南岸西鄉豐崎也從是南

至雲州美穗關三十五里辰已至伯州赤崎浦四十里

未申至石州溫泉津五十八里自子至卯無可往

地戊亥間行二日一夜有三松島又一日程有三竹島俗

磯竹島多此二島無人之地見高麗如自雲岐望

隱岐然則日本之乾地以此州為限矣民部圖帳曰凡

諸健兒免徭役隱岐國以三國造田三町地子充之然

近代所賦每年一萬千六百餘斛其餘又以漆椿實山

椒紫藻鯛、鰯、鰯、鯖、石決明、鳥賊、馬、皮等是慶長

年中堀尾氏之所定也古老傳曰昔對馬守源義親之國

也其後薩摩守忠教在雲州美保關領之忠度城跡在云保其後

鎌倉右大將家使地領人治之其人髡首故國人號

鎌倉入道而不名遂失其姓名按此人佐々木隱岐判官泰清一族歟不然夫行氏之一

類歟是必庄野五郎之先祖也又京極藏人某大和守某者來僉居東鄉小

田宮田城其子孫有京極入道常念者又有入道常意

者在宮田治國中當此時田園阡陌之法稼稅丁

夫之品一變委失古法從是京極經世佐々木繁榮

過元亨健武之世及義時義輝之時此時有清政者

始自東鄉遷西鄉築甲尾城居之自是先京極種

類曼生於國中於是時弟兄閭牆同姓爛魚清政亦

無刀可制也雲州刺史尼子伊豫守者佐々木之棟梁鄰

州之盟主也聞隱州之物忽使其臣某將兵討隱

岐蓋為清政之援兵也於是與都萬縣主豐前守宗

林其子彌二郎義秀戰于皆市誅焉義秀雲州神門郡

主之壻也郡主遣兵救義秀其兵到島前為風波

不渡豐田津島前與島後渡口也義秀遂亡又與中村縣主河渡

某戰僵焉或曰尼子將傷而死麾下秘之不發全軍

歸于雲州也清政築平村小松城置兵自攻郡隅

城其城主刑部少輔某自殺圍小路城城主箕尾戰敗

走也遂平島後而後討島前與美田人戰於福賴

或曰福賴人名號入道居海部乃與美田人同亡或曰福賴里名今福居村是也誅之築城於別府

治島前二郡於是隱州又為一其孫判官為清有識

量兼領千雲州島根郡築本城昔有城本城今言本庄時藝州毛

利元就圍_二尼子於雲州富田城_一。尼子日夜拒_レ防_二之_一。爲清以_二同族之故_一。乃出_二張于雲州_一。元就轉_レ兵戰_二於本城_一。爲清前鋒未_レ設_レ備。元就兵急戰遂敗。績卒_二千軍_一。緣今在本庄之山。或曰富田城陷。諸士散之_二四方_一。其臣山中鹿介聞_二尼子之支族勝久爲_レ僧在_二和泉境_一。奉_レ之爲_レ將。欲_レ復_レ仇。乃往說_レ之。與俱渡_二千隱岐_一。到_二東鄉宮田城_一。本京極居處也。軍_二小田海岸_一。請_二金七十兩米百廿斛_一於爲清。爲清與_レ之。又爲構_二原田村勝山_一。爲_二要害_一。居_二勝久_一。而後相引渡_二乎雲州_一。討_二島根郡_一。領_レ之。遂覃_二雲州半國_一。勝久又遷_二伯州米子_一。陣_二小田賀山_一。尼子舊臣獻_二於酒肴_一。以迎_レ之。古老或有_二流_一淚者。鹿介之猛威振_二千近國_一。於是降來者相_二繼於路_一。鹿介欲_レ得_二人情_一。多裂_レ地與_レ之。依_レ之無_レ可_レ。願_二隱州諸士_一之地。隱州諸卒憤訴_二爲清_一。携而歸_二乎隱州_一。泊_二三保關_一。待_二順風_一。鹿介聞_レ之。自_二米子_一。乘_二小舟_一。夜襲_二三保關_一。長清走去。鹿介追殺_レ焉。二說不_レ知_二何是_一。矣。初爲清有_レ子號_二庄野五郎_一。歲十二不_レ可_レ以爲_レ。將故以_二爲清之弟清家_一。爲_二留後_一。時在_二甲尾羅城_一。聞_二元就欲_レ討_二隱州_一。自量思以_二此輩爾孤島之弊邑_一。不_レ可_レ敵_二藝陽濟々之多士_一。不_レ如以_二小事_一。大之義遂遣_レ使降_二于元就_一。以_二其子才又郎_一。爲_レ質也。清家新得_二國以_一。

嚴酷_二立_一威且益_二稅賦_一。以媚_二元就_一。元就多_二事於四方_一。督責蹶急_二士民多_一憤怨者。於_レ是爲清之舊臣寺本和泉寺本中務寺本甚九郎池田八兵衛大寶寺某等潛偶語而曰。清家雖_二令弟_一。本比肩之家人五郎君雖_二幼弱_一。佐々木之根本也。而以_二才又郎_一。假_二元就威_一。以至_二此州_一。則吾儕皆渠之馬卒也。惟非_二事_一仇之理。乎死見_二先君於地下_一。何以對_レ之。況五郎君以_レ後來。何也。今俱合_二力討_一清家。以奉_二五郎君_一於_レ義而當矣。一座奮_レ臂而起。噉_レ血而盟。密謀遂成矣。初爲清有_レ事_二於雲州_一。以來但州若州之賊船入_二浦々_一。寇_二民屋_一。年々無_レ息。依_レ是處々立_レ。柵寺本等詣_二清家_一。曰。建_二柵於砂崎_一。スゴザキ西海郷濱可防_二賊船之往來_一。且西門破請改作也。清家許_レ焉。寺本等曰。其材木在_二原田山_一。可_レ往擇_レ之。叔公亦見_レ之。歟。然則以_二其次_一。矢_二魚於平村川_一。聊娛_二一日之遊_一。清家然諾矣。估朝出行。觀_レ魚以飲_二于川上_一。於_レ是伏_二兵城中_一。以使_レ告_二清家_一。曰。五郎君云。歸時應_二入_一牙城。有_二美酒_一。以供_二焉清家悅從_一之。直入_二謝_一之從者各散。清家就_二座寺本等律_一于下。設_二盛膳_一。羅_二美酒_一。清家飲且醉。和泉守左顧而歎_二五郎君_一。起行幕動。兵鳴。清家怪而走。狼狽入_二室_一。左右亂擊焉。清家之扈從池田甚三郎高井又四郎在_二門前_一。聞_レ之。拔_レ刀突而入。刀

闕甚急也死亡者多大寶寺某進勵聲謂之曰清家叛謀覺已而伏誅汝曹何以與賊徒不憶族滅乎二人傷且聞清家之死走歸寺本等遂殺清家入其館掠財物僉唱萬歲國悉奉五郎君爲主君寺本等威權行內外莫曾違於心者才又郎在藝州聞之泣告元就曰我生不可戴天若以君之靈賜命世上乃請勞二百騎然則招舊好人對隱州以其地爲附庸長守藩屏言與淚俱也元就憫之以三百餘騎與之才又郎大悅到雲州笠浦覘於隱州動靜雖然風波難期空送數日此時一州人以五郎君之年少晨夕遊宴軍制相忘不問津口之出入也時有宗菊宗花者兄弟俱清家之家奴也清家死而刺首墊居中村後出奉五郎君以承迎得幸不離起居于膝下然而內心不樂恒以慕古也忽聞才又郎在笠浦潛以書通志才又郎喜而乘舟入今津在西鄉津南山下長某亦從之某年秋七月十四日牙城毬塲有小女子歌舞五郎君觀之夜闌將入也有人來曰船多着今津不知何故也宗菊進而曰今津有備賊船不可入焉思必虛言歟吾往可見焉若賊來則可以舉火不來則否起走而行至今津見才又郎掬手而泣乃爲嚮

導催啓行才又郎走巡使士卒皆飽食執兵以至夜半聽鼓三聲即行士街校馬縛口遇行人則執留之經西田觀音寺入下西村就惣社林中聞城上柝聲欲自西門破入襲城中矣五郎君埃宗菊不來四顧無烽煙憑欄而眠宗花曰無烽火則非賊船也今夜祭佛日無故而動搖城邊且似無勇歟君固臥則衆自定五郎君入閨門宗花從容而出曰君乃寢矣吾承命而行勿施關鑰以可歸來也徐行守卒亦懈俄而才又郎師數百騎來城門洞開唯牙城門拒守前驅殺七八人其餘皆竄匿才又郎繼至譟譟動地斧其扉而入僮僕誼走相叫轉于地五郎君拔刀走出爲亂兵所殺城邊之士卒倉皇顛倒不知所爲焉寺本等馳來才又郎勸兵升城捧五郎君之首示衆而曰我以藝州之五百騎來吾所欲誅者獨爲父復仇而已若汝曹卷旗束甲以從吾則非唯避害富貴亦可圖也況我一家之氏族不可事吾爲不義佐々木之榮枯隱岐國之治亂唯羅今日諸卒以爲如何有遲疑未對者悉斬之尸於門前衆民股栗曰惟其命也於是孰和泉中務甚九郎大寶寺數人就軍中斬之餘無所問翌日張旌旗列弓弩使

士卒守四門、自師、兵陟、幸尾、布、令於國中、禁、掠者、五箇、中村、都萬之降者不、斷、二句、一國治既而藝州之兵卒倦、遠戍、各思、歸去、爭訴、才又郎、曰我來則海潮穩故免、鰐魚之口舌、今秋風將、發絕、海路、則得、無、凍死、乎才又郎知、其勢不、可、駐而縱、歸焉仍自思吾又無、助在、茲則五郎君之家人又可、窺、我不、如去、危就、大國之安、即與、泉俱至、藝州、以獻、捷於元就、元就大喜焉五郎君卒才又郎逃去寺本等皆亡不、可、以防、海賊、故但州若州之盜賊侵、匿山林、病老者顛、倒溝壑、佐々木累葉之家族於是爲、焦土、嗚呼此何年始封以來四百八十餘年時永祿某年七月其後自、藝州、使、猪頭九郎岡野木工等、守、護于此、也此時始置、館於矢尾、居、之後經、三十八年、毛利氏去堀尾氏領、之過、二世三十五年、而亡又京極若州大守領、之一世四年而亡遂歸、萬々世、矣

隱州視聽合紀卷一終

隱州視聽合紀卷二

周吉郡しきつ

西郷

西郷の古府は矢尾村やび或書八尾の西下西村之東其山を甲尾と云所謂庄野五郎が古城也松杉參差として九折三四町諒に天府の要害なり今は此地に八幡宮を奉ず東の麓一川を帶べり八尾町を廻るが故に八尾川と號す昔は橋を渡して城門に至り川より東の山上今の新府なり北の方小山につくと云へども三方は岸高く松柏羅立して通じ難く南の方海に臨で座し乍ち雲州伯州の山を見八尾の町は川にそふて南北に長く山に隨て住居なり水の上に新八幡宮あり五郎君を配祭れり下流の水口に長洲あり松處々に生て蘆葦凄々たり天神の社を此に奉ず川を帶ひ海につくと故に或は水湛へて島となり或は波沙を寄て陸地に通ず泊舟篷を連ね晴日綱を曝す風景餘ある靈場なり新府の廳事右の方に連光寺と云あり日星山と號す谷を隔て高恩寺

と云あり左は豊崎と號し蛭子命の社あり此より岩の下を左へ廻りて目貫町と云古老語曰昔在二一丈夫一見鯨游波上一棹舟隨之引繩貫其鰓急而到茲繫之岸下の樹走喚漁夫鯨跋拔其根本去故號此曰根拔今誤言目貫也町西に奈伎良明神の社あり按神明帳奈伎良比賣命神社在海部郡然則此神祠可_レ在海部郡今也在_レ之豈郡名誤歟後世或遷_ニ于茲_一歟抑又別神歟

其西に善立寺あり慶谷山と號す海に落る小川あり橋を涉りて宇屋町に至る八尾目貫宇屋此を三ヶ所と云惣て此邊を西郷と云けり甲尾の川上より此に至りて十四五町板屋茅屋檐を並べ士農工商群居せり西國東國の賈客往來の泊とし南浦北浦の商船輻輳するの所なり宇屋の東の山崎より海の入事遙にして西田村の濱邊より東の海岸に至事其間二里餘の向は山列なりて屏風の如し左右より山崎出て海門纔二町ばかり故に此内に五百艘を納れて猶餘あり疾風高波ある事を知らず北海第一の津口也

津居村きい

津口を出る左の山下に姫島あり山を鷹棲たかすいと云近き年
まで集こゝに巢をなせり故にしか云或人曰津居の上
なる故を以て高津居と云其山に次いで一峰の秀たる
を金峰山と號す絶頂松數株あり東面には古木多し西
北はなし古老傳に曰昔此山に一字の御堂あり彼賊徒
亂入の時佛像の金色なるを見て寺を燒僧を殺し佛を
取て去る是より寺も絶けり十餘年以前にや人ありて
右地を經松根の苔を穿て石肩の見ゆる有是を堀ば石
櫃なり長き事四尺ばかり披て見れば三寸の牛角の如
くなる物あり小鏡の古きに佛像を銅付其角に掛たり
村人集て曰如何さま此は金剛藏王の古物ならん徒に
捨去べからずとて小社を造り此を納ぬ西の海邊を吹
上と云崎より此を過るを立木と云山の西面に津居の
村あり其山を津居と云田園多く此にありける

按海岸之東山號津居又田園之地謂津居つゐ況此處
津口之岸上乎思必依居つゐ于津之義名之乎今以
于其居山西號曰西居歟然未改字故書津居
乎彼書東海林讀庄司書丁讀養老之類歟
山の西の半腹に蓮華寺と云あり東海岸に池二つあり
牝牡の別有けるとぞ牡池は二町四五十間にして一町

四十間牝池は少し小さし古老傳に曰昔池月と云馬此
池に産して島前に陟り大海を泳て雲州に至る浦人と
りて鎌倉へ來る生食と號するは生類を食へばなり本
の名は池月とぞ底深して計がたし岸邊の石は墨の如
し故に好事者の此を得て硯に鋼巾着之組とす亦近き
比鰻魚の二尋餘りなるが一尾死て流れ出たりと云池
の北を駄島と云高岩五十尋計頂に古松あり爰より犬
來の海邊なり津居村より越る處大門と云山徑を登り
大見山を經て犬來に行其路は十七町左の山に清土寺
あり

犬來村犬久と書

村老語て曰此より一村を隔て大久の里と云あり古へ
此村と同じ境と云後に南北に分れて一點を加へて名
を代ふなり其犬來と書ゆへは昔此村に一犬を養ふ者
あり其婦隣の少年と通ず來る時に犬吠婦此を愁て夫
に謂て曰此犬よく人を吠是故に賈客我門に不入康
衢の長者に相似たり夫此を然りとし他方に遣し放け
り婦犬の道を知て歸らん事を計りて囊に盛て此を送
る既にして少年來る犬又歸て此を吠夫寤て窓より見

て遂に其姦を得たり故に犬來と書

昔會稽張然在_レ都經_レ年其婦與_レ奴通然養_二一犬_一甚快後然歸_レ家奴與_レ婦謀欲_レ殺犬吠昨然共殺_レ奴以_レ婦付_レ官古來有_二此犬豈其類歟_一

村は海岸の東山の高下する處苦竹檐を遠り處々に分れ住む北の方山經を行事二十町あまりにして竈村に至る海邊を行も又玄かり伊島と云ふ小島あり

竈村_{今俗書二}
釜村_一

竈村は東海にして山にそふ地圖大形犬來村に似たり昔此浦は鹹地にして鹽を煮故に此屋に竈あり是故に名づくとなり山を行二十一町にして大久里に至る海岸に岩を疊て田園あり爰より又海路十二町ばかり

大久里

大久里は海を東にして三面は山を圍小川里の中を流る故に南北に分れて住居せり南に居處を居濱と云北を原と云其濱に鹽を燒南の方釜村についきて金橋と云山あり雜樹峯に有て小社西にあり人常に詣らず月明に風清き夜山靜に海穩なる夕或は笛聲鼓音等聞ふ

る事あり里人聞事熟めり往來の旅人も或は聞事あり山の形樹の立さま故ある様に見へたり恨らくは何神何靈其傳を失する事西の方良材多し此を高時山と云山の麓に戒善寺と云あり北の山下に白鬚の神社あり村人語て曰昔近江の白鬚の祠人罪ありて此に流さる渠こゝに在て神を思ふ小社を營て此を禱る既にして赦に遇是其遺蹤なりとぞ川の海に落る處平砂渺々たり海中百間ばかりにして犬島と云あり上に石あり形犬の蹲踞せるが如し其南に津目島と云島二つあり蓋大久に來る船は此津を目當とするとなり其辰巳に雀島丑寅の方に鶴島沖の方に貝島相續て立り未申の山を越れば飯田村に行也通山奥谷山と云にかゝりて卯敷村に出る其道一里三町有又東境の饒地なり海岸を北に行高岩の聳たるに點々の色あり古老傳曰昔惣神社の神舟にて此處に御幸なり是より龍馬に御して下西村に遷り玉ふ其船中の藝たる物を捨玉ふ冠名烏帽子岩此其遺跡なりとぞ山崎を出て廻る船路十五町ばかり卯敷村に至れり

卯敷村_{うつきと云}

卯敷村は海を東にし山を西にす北の方山路きはめて嶮岨なり連峰嶢嶢として高岩倒懸れり此を七尾七谷と云村は海邊の小浦なり海を行は纔二十町ばかりに平島赤島など云島あり過去て布施村に至る七尾七谷を越れば一里ばかり

布施村

布施村は寅卯は海にして濱に向ひて人家あり良材多く此より出す故に山に制有て斧斤時を以入る西は大満寺の魔尼山に次ぎて幾重と云事を知らず谷際を過て又廣く廣野を行は山なり此を中谷と云左右も皆良木なり北の方五箇に接り中村につけり尾谷と云より南谷と云に至りて深山なり山より流る小川を十町ばかり上る處十圍百尋の大杉樹あり是を山神と號して祭を致す天晴れば因州但州の山を見潮怒れば波庭に入岸をはなれて七八町ばかり小峰嶋と云あり高き事七十尋上に松樹ありて北の方割立が如し廻れば百三十間俗此を左婦嶋と云則夕されば小峰の嶋と讀し島なり音の誤りて如此と云なり山の間に松嶋あり同北に黒嶋長嶋と云あり又北なるを左婦里と云海の

岸に礪石を産す海を北に廻れば十五町にして飯尾湊に至る是より中村の境なり又轉じて大久に歸り犬久村を經れば飯田村に出づ

飯田村

飯田村は南の方内海に臨めり濱を去事四五十間ばかりにして茅屋つゞきならべり村より少上^{本ノマ}なる處ろ千養寺と云あり所謂津居村に行事十餘町計渚を來れば九町ばかりにして東郷に至る

東郷上古の府

東郷は内海の南の濱なり濱に浦松と云人家あり去事五町ばかりにして三面皆山なり小水流て里の中を通り田園に灌がり北は大満寺につゞく道北を奥本宮と云有木村に出る樵路もあり是を樋通山と云小村ども分れて左右の山下に住居せり里の長を高梨某と云其傳に曰昔平氏亡て後嶋中守りなし盜賊^{きふ}起る故に里長が遠祖鎌倉に詣り守護を請所^{せん}謂入導某をして守たらしむ其時にや僧五人を下して五山に擬して五處に居らしむ其第一を金峰山と云二は津居の蓮

華寺三は飯田の千養寺四には聖腰と號して大久の里に越る東郷の山なり第五は同松尾と云處なり又當國の守邊職するを時風波の難を治んとて大満寺大峰の二山を常に祭けり彼第五の松尾は此大峰を祭が爲境を隔て立けると云此旨鎌倉入道が時に置たとぞ凡此郷は神祠僧房多して十社十寺と號して山上山下に數多在ける又北の山趾に浦宮と云あり古老傳に曰昔漁夫綸を垂て一擧石を釣上る此を奇なりとして飯て小社を立て此を納む其石漸やく大になる故に七八年を経て左右の板を推破れり故に改作る又如此事多し今は既に七尺餘社の板壁やうやく破る又飯田に越る處ろ東の一峰秀でたり此を惣藏そうぞうと云村人傳て云往古此より調貢の時風波惡きを以て舟を覆し事有上是を憐み玉かくの如きの折から貢物を罷たまふ此時國人等其進めざるを哀れみ國中の新穀を此峰に集て西北の風を待て此を燒て天を拜す其心貢物を京師の方へ送るとなり上世民の淳魯なる事かくの如し未申の山を廻れば彼勝久が居たると云宮田の古跡あり山の南に八幡宮あり小田と云は古の城下の町あり神部と云山につゞけり小村を過て一里ばかり所しよ謂宇屋

の町に出す海を來も相似たり里長傳に曰昔到こ鎌倉之時居ゐ一舍門前有三梨樹し僉い以も其遠來不レ知レ名故曰號こ高梨し於こ是終爲レ姓而失こ其本姓し云

中村組
飯尾湊いひ中村組

布施より北の方山を越て一里計海を行ば十七町餘り飯尾の村に至る是より中村の境にして國人是を中村組と云其湊は丑寅に向ひ左右より山崎出て船の泊り難義也人家濱に在て田園まれなる荒村なり五町ばかり沖の方に青島と云あり北の方に鷗島あり岸に隨ひ北に廻る右の方に中島の瀬戸と云處波穩なれば舟を通じ又左右五六丈の高岸にして其間纔に四五間なり海路一里餘にして元谷村に至る山を越る事二十三町此路も亦嶮難にして馬蹄あやふし

元谷村ぐんや

元谷村は浦より六七町を去て南東の山際にあり浦より入る處一つ二つの人屋ありて其うしろ長くつゞける山趾なり麓に八王子の社と云あり細き川前を流て村は其川上なり村より北に飯山と云あり流て海に落

る處砂洲濱ひろし海の入處南に甲島と云あり高き事二十八間其廻り二十餘間岩臺て甲冑を置に似たり沖に出て琴嶋あり又小敷嶋と云あり皆海中の莊觀なり濱に松數株あり皆老樹なり一小堂なり其堂を會處と云彼八王子の社の神と其向の常樂寺の神と三年に一度爰に會して祭事あり此を月日の祭と云其儀式は季秋の仲の九日吉辰を卜して社より日神を奉じ寺より月神を奉ず皆長竿の上に其形を掛けて左右に玉輿をかざり出す銀を以て月を色どり金を以て日を色どれり諸人前後に獎束して立て此堂に合祭して僧徒咒を持し讀經し畢て近隣の里人老若縉素群り集り舞蹈し唱歌す

按此日月の祭古之遺法歟書曰味谷寅饒_ニ納日_ニ本朝亦會行_ニ此禮_ニ歟隱州戌亥之極地味暗也與_ニ元立日相近也上古於_ニ是地_ニ饒_ニ納日_ニ亦未_レ可_レ知焉爲_ニ好_レ古人_ニ姑記備_レ之

飯山の南に建福寺と云あり昔は當國宗洞の惣祿とぞ寺に緣起と稱する物あり其略に云願主源左金吾義尙造_レ之貞和五年己丑三月廿二日天長樹興聖福書すとあり卷末に別に勅諭國濟國師と書り緣起の文章は俗

にして野なり佛經の文字處々連て造立の意趣はなく梵語多く言のみなり寺は山の腰に在て松竹鬱々として東は亦暗たり庭前に白櫻あり花開時は必有_レ年なり故に世間櫻と云門を下て南の丘に一字の僧舎あり靈護庵と號す彼國師の基有故に此名を得たり飯山の北田園廣く濱に流る小川の橋を陟りて南西に行事十町ばかりにして中村の庄に至る

中村庄

中村庄は所_レ謂砂濱より入處一村あり田邊の小徑を七八町ばかりにして本郷に至る背は山前は田人家檐を碍り南北に連れり西の山に常樂寺あり所_レ謂月神を奉ずる處なり堂に三大佛あり梁棟の良材なる柱楹の彩色なる一村の民力の堪る處にあらず彼河度某なんと大壇那なるや院に昔し祭事の僚を得たる文或月俸の書なんと有皆百四五十年の文なり寺より南につづき山深く壑とほく材木舉て不_レ可_レ用其を葛就山と云本郷の前より西に廻れば湊村につづく山間に最明寺あり寺僧傳て曰昔鎌倉の最明寺殿天下を修行し玉へし時此寺を造れりと云其緣起甚野なり書すに足す

山の出崎五六町を過て湊村に至る山は近く左りに去て田圃の小徑海邊に接る故に潮盈れば河水満て脛を沒す

湊村

湊村は山に隨付て渚を去事遠し海に烏帽子嶋あり形似たるによれり其巖崎を廻て行ば赤嶋等の巨岩あり小岡を八町ばかりにして戊亥の方に西村ある

西村

西村は北は海岸高ふして地上より五町ばかりを去て人家あり松處々に生じて樵徑縱横にあり海に鴉嶋小白嶋帆掛嶋屏風嶋田嶋沖嶋海鹿窟など云處あり窟の上松偃波寄て白練の如く常に見ゆる岸の長く指出たる處を鷹巢崎といふ此より隱地郡の境なり岸上の山を白嶋と云村の南は所謂松尾と云岡につゞき大峯山割成が如く岩崎樹舊て尋常の山にあらず桑山につゞきたり麓に田園連なり爰かしこに小水流瑠璃と云處より西の方山路十九町を行ば伊後村に出す彼大峰を左りに廻りて穩地郡なり轉じて西郷府に出るは

元谷に飯りて上清水と云山路あり太行路難澗水を陟る事四十瀬深谷盤石顧る事難く大山高嶺幾重ともなし石口險窄攀行事二里ばかり此を長路越と云南の山口は既に原田里なり北谷上床と云を過て明光寺と云山寺の前に出て溪流に隨て下る右に八幡宮あり其より十町ばかりを下りて原田の里に出

原田里

原田の里は山間廣く道左右に分る東山布施に續南山根羽福三尾大満寺に連なれり重々の茂山深き事を知者なし北に近石と云ふ小村あり時張山と云過て穩地郡に行路あり山川又此より來る東の川と合流て聊も暴雨あれば洪水岩を翻へす故に平日は涇々たる砂石多し川を隔て上西の里に至る右の麓に小社あり其林上は勝山なり城跡今も有とぞ

上西里

上西里は原田の西川を隔て境とす西北に山を圍み南より來る大路あり西の山谷を行ば栗谷と云十町計にして宇多木と云處に出る此より都萬の境なり北の水

上に行事二十町ばかりにして一瀬村間杉村燕池床山
二重瀧と云山中より西嶺を越て五箇に行山を西に登
る處を皆市と云都て是を上東と云良材又此より出す
上西原田此を山道筋と云子丑の山に伴桂寺と云山寺
あり麓の水上に小社あり一林の蘆落を雨來と云川の
廻り龍神の淵あり岩横り樹古たり旱魃の有時は此處
に雩祭す證あらずと云事なし故に此處を雨來と云其
名亦古し古老傳に曰何れの御時にや唐橋中將となん
云人左遷ありしに初は島前の布施と云浦に在後に此
に住所求て「露の身の袖は乾かたし立寄も雨來の里
の森の下蔭」と讀しとかや其後賊來て財を奪ふとて
殺けるとぞ又中將左遷へは後罪彌あらはれ重て追て
害せらるともいふ年經て後京より蘆月と云人來れり
氏は忘れたり中將の古跡を尋て此に來り古き塚に向
ひて「天津風雲井に掛し唐橋の」と云て末次なんとす
る時塚の中より聲有て「通路たゆる森の下草」と云
蘆月是を弔祭して飯りける村人此を聞て爲として一
小堂を造て今に至る江記に云小野小町が塚よりあな
めあなめと唱れば在五此を聞て薄生たりと云に似た
る歟

昔鄭交題古塚曰塚上雨竿風吹常曷々塚中有聲
曰下有百年人長睡不知曉于漢于和有似矣
哉又此州之老或有稱村上天皇之末孫而號村
上某者問其所由出則曰唐橋之遺腹也夫唐橋
者村上之庶流也野夫雖不知其所出以之稱之
則中將遊于茲或曾有之歟恨不見正史
本郷を藏見と云南の方田園多畝を接て川堰あり長坡
處々に構へ周道を夾めり十三町を下て平村に至る

平村

平村は西山の麓にして田畦を前になせり北の山は所
謂小松が城の古跡北の山腹に等養寺の小林あり申
酉の山の高嶺を宇頭色と云麓の原に細路あり西田村
に出す前に川を帶べり先の原田上西より流來る川な
り東方十町計を過て國分寺に至る其間多く田園なり

國分寺

有寺故號之
今有稅置長

國分寺村は東山の間平村に對せり寺は昔し伽藍にし
て當國の第一なり西の翠微を禪尾と云故に寺を禪尾
山と號し又本堂に入處二王門あり堂前は高原にして

四顧空濶なり老樹處々に在て野草芳微たり院は東の山下にして左右松杉日を蓋ひ青苔自塵なし山旁くに圍み溪水浚々と流來る籬を遶て三經微徑イなり院は漸く古はてゝ香煙靡ばかり也寺僧傳て曰賊徒亂入の時經書に緣起を交へ奪去て絶けらし昔より只傳て眞言の法を修す又昔の勸進狀あり其略に曰本堂は聖武天皇の時に造立す西の側の地藏堂は安徳天皇の時に營す三重の塔婆は後鳥羽院の時に作るとなり又永正四年の比阿闍梨權小僧都憲舜と云僧此寺の廢破を哀み時の縣主新五郎宗清に請て近國に奉加を勸む其奉行は寶定寺若狹守重高村上信濃守清景とぞ然る時は其美なる知べし禪尾を隔て一村有南山を登るは有木村にいす左の岡に尼寺あり西に出れば大道あり所レ謂山道筋なり

尼寺

尼寺村は村に尼寺あり松竹一村の小岡にして農夫有南に下れば大光寺村なり

大光寺村

大光寺村も亦尼寺の類川を右にし山を背にし田園を前にす一林の松杉竹田徑を分ちて門に入寂寞たる朽塙齒棲古たり昔は美盡せるにや税に藻し柱に山形す最く破れて露も止らず階下塵積て壇上傾き佛あらはに見覺鐘處を失或曰此寺者昔は遊行の道場なり七代の上人此に來て立ると云大なる鼓側に掛たり是又其流風とぞ川に隨て山中に行事七八町計にして有木村に至る

有木村

有木村は川里を通り左右皆山なり西の山を分入らんとする道いと暗して細し國分寺に至る東の方東郷に出る道もあり川を上れば左右又山にして岩徑行還が如し二十町ばかりを入れば東の山鬱々として雜樹まげる處松尾と云高巖を間より澗水落て谷際最も深き處あり是乃精進川と號す大滿寺に詣ずる者は是に於て清す即大滿寺の坂下なり其路は最險難にして絶頂までは十八町川に隨て村より大道に出る其間は坦塗なり川より向に護國寺あり

護國寺

護國寺も又國分寺の類なり寺は當國の宗洞惣祿とぞ瑞就山と號す門前に大河流所^ヲ謂原田川又有木の精進川の末流なれば岸下最も溼^ぬ淵^みし後は山にして雜樹あり民家左に連りて岸又高く川廻り道轉て向の岡に登れば此を幸尾と云昔惣社の神を此に祭る其御幸の處なればなり其小坂を下れば八尾の町の北に出す即左野五郎の社の前に至る幸尾より東の山を南に越れば目貫町に出す即ち廳事の後に至る又寺より山に隨午未に分登れば甲尾の古城に至る此寺は昔彼爲清の願望の地なり故に爲清の神主を按ず北の方高原を経て下西村に至る其道は十町計

下西村

下西村は内海に臨み北は地上りにして南は海なり甲尾の城下の西境なるを以て下西と號す彼寺本か西門と云し處なり村の半に大杉樹あり高さ百二十尺計大サ牛を匿せり村老語て曰昔小蛇あり常に根本の空處に蟠れり後に漸大になる本根の空ろ苔生じて出る事

あはす今に到て日暖に風靜なる時は或は大鼯の聲聞樹下に徘徊して足音する時は止む諸人聞事少からず凡此里には小祠多して記るに餘あり北の高原に惣社と號して大社あり花表瑞籬拜殿本宮美して且舊たり四方の松杉皆大にして靈場他に異たり社司を國造と云渠言に曰天武天皇勅命ありて奉^レ之其祠式に曰每歲孟春鷄旦に仁王經講會自^ニ八日^一到^ニ十四日^一景勝講會十七日有^ニ毘沙之的^一退^ニ散惡鬼^一之祭也五月初五飯矢之神事毎月朔奉^ニ御膳^一古來傳曰若酢大明神なりと

按神明帳隱州周吉郡有^ニ玉若酢命一座^一乃可^レ爲^ニ此神^一然則其所^ニ由來^一者尙矣彼仁王講會自^ニ何時^一行^レ之哉嗚乎浮圖之邪法無^レ所^レ不^レ至也蔓草不^レ可^レ掃況遠徼^ニ人骨^一乎哀哉

村より未酉の山頭を傳もて行ば西田村に至る其道は十二町西の方に有^ニ未地山^一内海を棹し行ば纔に八町計

西田村

西田村は内海の西岸にして背は山高して南に田徑あ

に乗て此を過す蓋國司の惆怨を忘れらし

今津湊

り西の方小岡を越れば鴨里に行左の山に觀音寺の一林あり入海の岸を卯辰に行事十町計三羅と云處あり爰より山徑ありて今津浦に行山門又田園也左の山は矢尾町の立山にして彼甲尾に向ひ立り山に隨て内海を東の方に棹し廻れば天神の社洲崎を左に見て飯山葦山など云麓より構出れば所謂豐崎の津口也其山を御崎と云南海に指出たる事四五町許り岸登て直下すれば魂を消す此を百尋が嵩と云檜杓子と云高巖なり南に去て黒島あり左右に分れて其間小舟を廻らす其山を右に廻れば今津の境に入る山下に一箇の土饅頭あり國司塚と云古老傳に曰昔國司某此に來る時に三月雨降ず蝗害多して飢饉に至る人子を代て食司も又糧盡て歸去んとす船夫柁を振らすに力あらず日に餓して已に死なんとす於レ是匍匐して此山に來り南天を瞻望して慟號流涕終に歿しぬ此其塚也とぞ其側に浮梁と云岸石あり彼國司此に立て南國を思慕する時一老婆あり此を憐み石を投じ海を填み國司を南岸に陟さんとす終に不レ叶して俱に死す諒に精衛木を銜み東海を填めんとするが類なれども今に傳て阿婆が浮梁と云自レ是以來此國の令及假の使まで船

今津湊は三方は山にして南は海の入處人家東より北に連り往來の旅泊纜を繫時は商女の聲客船に至る或曰一宮の祠人の家に佛名經あり其軸尾の餘緒に穩地周吉の郡を分て曰南は今津の阿古屋が松藤内が廂より西田を觀音寺に引上り北は三頭より大峰の西の麓白島が崎なり永和三年實弁筆すと書せり蓋分封雙論の時に便に任せて記すならん鴨里已に周吉なる故は何ぞ今津の穩地なる事を得んや今の直裁なるに玄かず阿古屋が松は東の山にあり藤内が廂は湊の中にあり村の北に社あり鳥宮と號て鳥祭と云あり古老或は鶉羽葺不合尊と云となり海に出たる山崎を右に廻る處岩に松生波の岸を濯風致殊に面白し温崎と云處を八町ばかり棹し行ば岸の濱に至る

岸濱

岸濱は北に入處山に倚て未申に向ふ沖に白島あり崎を廻りて西に行ば箕浦に至る丑寅の山を越て今津の

北に出る道あり

箕浦

箕浦は南海北山にして岸の濱に似たれども家又多し皆常に綱を吹綸を垂旅舟の傭夫となり波上に世を渡る烏蜚子の類而已あり戊亥の山を越れば鴨里の境内松島と云處に出又山の崎を舟にて廻れば三十町ばかりにして鴨里に至る

鴨里

按應書賀茂

鴨里は未の方に向ひたる入海の濱なり左右の山崎遠く出て二十町ばかり濱に臨みて住居あり村の東隣は明神の社なり鴨大明神と號す近頃はや浮圖氏某緣起作けるとぞ軻遇突智の神起處々書畢て彼佛語を附會して奇怪を言り文章最拙し按神明帳周吉郡有賀茂那備神社一必可爲此神也然則此里以之爲名歟社の西は長嶺嶸嶸として長尾山寺床山につゞきて樹茂經轉して絶頂に登り高岸を廻其間一里餘嶮岨極て至難し汀より舟にて西に廻れば的前と云山下を過て海の入事九町ばかり糠谷と云處あり神火山を廻て直ち

に行は蛸木浦に至る

蛸木浦

蛸木浦は中西の濱邊にして左は山崎遠く出て糠谷の西より皆石山の山崎にて浦につゞいて重れり右は又大岩ありて波に出沒す其につゞける島崎に石を疊んで小社あり其仲に松島あり上に松生て樹間に荒園あり長事二町ばかり昔好事者此州に雉の無事を愁て試に雲州より雌雄を渡して此に放つ一年を経て終に亡と云少南に神島あり廻り五十七間此あたり蛇螺菜藻の類多し丑寅に出たる山崎を廻れば入海二十五町ばかり此より内津戸と云山には小松生て處々に菜園あり内津戸の入海を北に行て東の岸上穩地の郡の疆なり蛸木の蟹家は周吉の疆なれば爰にいたるまで西郷組と云高明寺と云寺人家の北にあり此より山をつたひ行は一里あまり海を渡れば四五町ばかりにして津戸の浦に至る西の方は島前の豐田湊なり其渡は三里餘又津戸に渡る半に蓬島と云あり皆大岩なり昔津戸蛸木此島をあらそふ今辨じかねて西浦より船を出し早くきたらん者可取と云左右より多力の船夫を撰

び渡を競て此に至る蛸木既に至て登らんずる時津戸
の船老簾を投掛て既に至ぬと叫ぶ蛸木をぞしと思て
退く從_レ是して簾島と號す今俗此を前平島と號する
は簾の少くして膝に當る物を前平と云によりけると
ぞ物を得て年に號け子に名け亭に名るの類とせんや

隱州視聽合紀卷三

隱地郡

津戸

白是到油井
謂都萬組

津戸浦は未申は海に向ひ子丑の岡に田園あり家業蝸木と相齊し左の入海の前平につゞきて大形島有其より西に白戸島しんぐ賤木島と云あり皆石肩岩頭の指出たるなり故に微風もあれば波浪雪の如し凡津戸蝸木は島前の向ひなれば此を渡口として海部の豊田に往來す南北の潮急にして流が如く風に逢時は橋を折櫓を摧き舟乍に覆し船更釣夫魚腹に葬る彼巫峽ふこう澗せん舒堆しゅうたい飛雲ひうん渡と云ともおさ／＼負るべからず海路半を過て大守島と云有東西三町計岩間有りて舟を倚す或は風起潮渦まく時は此島に舟を倚て生を得たる者多し誠に浦人の大守とぞ又幸にあらぬや丑寅の山を越れば彼の内津戸の入海の濱に出ぬ又西より海の入て石路遠く廻れり其入海の南に宇津島と云山崎に柱島あり高こと九尋一柱を立たる如し又北の山崎に一柱の如くな

る有高こと十尋相對して花表柱に似たり入海の濱に少く平砂ありて南の山中より流來小川あり所謂宇多木の山間一里塚と云所より來る皆都萬縣の境内なり東南は山連り西は又海なり

都萬縣

都萬縣
或都萬院
とも云

都萬縣は東より入處上西里の藏見より一里塚にかゝれり東の山保土島柄尾末路丹波尾など云をかけて鴨の里より蝸木の山里に及べり昔は海邊も蝸木の神の島津戸の白戸島に至れりとぞ海濱の巨岩を岸に上り岸に下りて海に隨て北に行汀に一村あり釜屋と云蓋潮を燒が故とぞ西に松樹列り長洲に菩提樹あり北は皆田園にして東西は遠山也東の山に隨て北に行其半腹まで蝸にして絶頂は巖並峙てり此を高山と云西の麓に一林あり高田明神の社なり傳て曰此峰に鳴澤池と云あり人至ることなし故に水源を知者なし其末流は社の左に出づ馬牛に至まで飲ことなし谷川を涉て社に行左右喬木古りたり縁起と稱する物二卷あり鄙俗言に足らず又別に一卷あり其表色は極て美なり卷頭朽て題號を失す假名の序あり半より末殘れり讀

て考るに淨阿と云もの此社に一宿して「花も夏に成澤の池の蓮哉」と云夢想を見て都に上り公卿貴人の數奇に請ふて百首和歌を咏せしめて此社に送りしとなり是淨阿上人は金蓮寺の僧とぞ至徳四年の比なりける時の歌人は准三后前關白前參議源義將同高秀菅原秀長卜部兼照藤原忠賴神祇權兼敦大中臣行廣女平貞秀師綱釋阿上人等其外云々多し多くは此地の名を讀ける歌なり 彼淨阿の興行にて所の様を語れると見へたり筆法卑しからず最遠島の珍寶也

按穩地郡可有天健金草神祠未_レ知其處豈此神

歟健金高田和訓相近也訝書以待_二知人_一

社の山に連り峰棲はりて幾重も立り其西には田園寬く一川流て中を通れり田園より西の方山長く水遠し小林處々松竹の陰に茅屋あり泉村西里と云山につゞきて千光寺あり山腹に寄て立り林宗と號する神主あり彼豐前守が謚とぞ寺の麓より東に入る處乃都萬の本郷なり西の岡には八幡宮あり松杉又老たり此より里長村老屋檐を連ねて東に長し田徑を南に行ば向に奈森の古城あり峰秀で尾上高し城跡の殘石多し彼彌次郎義秀が住し處なり東の山より一川流る水上をば

植池と云天旱と雖絶ることなし西山の外は海にして恩部島あり此を籬島と號して彼准三后の詠せし島也小山を隔て海に臨て大津久と云浦あり本郷より北の山に登て山頭を攀行ば形春岩窟紙船崎と云東に行ば上西の燕に至る或人の曰舊都萬を妻と書り昔都萬縣主の舊妻の領地なりとぞ又中塗より北に分れて五箇の都萬路村に出す又山頭より北に越れば那隅村に至る凡此郷は地饒にして田園よく境廣して人富り都萬院と號するは昔は天子の御領なるが故とぞ彼西郷の城主と威を爭し縣主あるは境嶮に人富がゆへなり

那隅村

那隅村は東西の山の麓故に民家も相分て住付石川流て中を通りぬ其末流十六町にして海に入處を下那隅と云潮を煮釣を事とす南の山の頂に古城の跡あり昔刑部少輔重基と云者住けるとぞ貞永元年に都萬縣主と境を争て討と云又西郷城主と戰て亡共傳ふ何れにしても貞永の比までは此城ある事疑はし上那隅より北の方嶺重なり山接り長して且深し其最も高處を那隅の横尾山と云川に隨水上に分入れば左右青壁嶙

岫として高く聳え其岩間碯碯にして水分れ木落或は清潭鏡の如く小鮮も潜ことなく或は盤石龍の如く鱗を踐て涉り行淺處を厲し深き處を揭す十町ばかりを過去て右の山下に一林有光山寺と云山寺なり樹古庭寂にして山行の愁を破れり坊の右に本堂あり綠羅牆を絆ひ青苔瓦に生むり本尊の左に一佛を安ず寺僧談て曰昔小野篁當國に左遷して初は島前の豐田に住しが後は爰に移り歸朝の祈の爲にとて此地藏佛を刻めり手澤今に新なり又一妾を納既して娠めり時に大赦に遇ふ篁妾に告て曰夙縁如^レ此然ども義携不^レ可^レ歸佗産して平ならば此佛を以て其子の守りとせよ必富貴なるべし宜く自可^レ重と云て別て歸去其遺腹の末とて今に至て此國に多し所^レ謂那隅の長某雲州日御崎の社司也最も浮言に似れ共其處の常談世々陳言故に白すと云寺より川に従ひ山間を上れば雙峰高く立石樹千尺天を蓋へり十七八町を行盡て壇鏡と云處あり巨岩四十丈餘屏風の如く引圍て視上れば飛流亂絲の如く見下せば奔泉と成て巖間に落崖を砮ち石を轉じ波練を翻し露玉を擢けり面的幽壑の中に小堂を接す苔蘚階に登り楓樹側に立り一の小鏡を壇上に掛

り觀音の像を鑄て此を本尊とす瀧音松嵐相和して耳に盈り徘徊すれば六月にも秋涼を生ず又國中の莊觀也那隅の村より北の方山を越れば極て嶮岨なり葛藟衣を惹坂塗鼻を摩百歩九曲古木倒縣し岸下萬仞白浪石間に澹一望する時は青眼窮天懷を慰し魂を遊しむ然ども一瞬も心を放難戰々として足下も危し此道を鑑割と云山を下れば海邊に出る此を那隅崎と云右に油井の池有三方崔嵬立圍て池の廻り四五町計水碧りに波渦まいて深きことを不^レ知古木落て綱を入こと不^レ叶池より三町ばかり油井村に至る又光山寺の前より左の山に登る處横尾越と云即五箇の那隅路に出す

油井村

油井村は西海の濱其土は惟石多く其山は惟高民あらけ居て隣遠し東の山中に入て背戸谷と云より横尾に出る路あり西戌の山崎を海岸にそふて北に行ば沖に平瀬島大領島と云有嶋嶮たる岩間二町餘を過行は藏田と云處に至る山を不動谷と云此より南方村の境なり即五箇の封内とぞ此に至るまで都萬組と云

南方村

南方村の別村藏田の濱より山徑に登り深谷に入事十町ばかり又長尾田と云小村あり海の入事三町ばかり嶮壁萬丈連り立戌亥に長く出たる山多くは屹峰にして遠く臥たり高嵩と云又不動谷と云其山の山崎を右に廻を面例御島と云岩頭水面に出て潮怒風嘯て船夫常に行を出す辰巳の方海入て十三町ばかり又北の方より山崎出て其津口は九十間山を越るに極て嵯峨し木横はり土穿ち馬蹄先危し谷口水咽び遠岫雲を巻く坂下富浦と云小村あり渚を去こと一町計にして海に孤島あり樹生じ形惟し上に辨才天女を置村に向ひて花表を立磯竹島に渡る者はに於て泊して晴を量り風を占ふ又其歸帆の無_レ恙ことを祈る山下を右に海を行こと二十町ばかりにして深沉の處あり舟を遣こと甚勞す一河の流れに沂り長塘に上り高嶺の麓を川に隨て東南に行こと數十町ばかりにして南方村に至る人家多く聚居八坂と云大山辰巳より出たり其麓根の處なり善城寺と云は沙彌覺佗の居處村の西の小岡にあり村の前は川流て向は又小山長く横る川を涉り草

を跋て東南に行こと七町餘山間に苗代田村あり

苗代田村

苗代田村は山圍み樹生たる小村西南は壑深して中山と云あり前は又田園なり右に行こと十町にして那隅路村に至る

那隅路村

那隅路村も又境界苗代田村に似たり引廻る小山處々松杉在て彼横尾山の尾崎なり其尾に登て行こと二里にして那隅村に至る中途より右に下れば油井村に出す村の向の山崎を川に隨て廻上れば十町ばかりにして都萬路村に至る

都萬路村

都萬路村も亦那隅路に似たる山間の小村なり川の上りに人家在て水に臨て分れ居る南の谷際を山に登れば都萬に出る道あり又山腹を東に分れば上西の燕にも至る凡此邊の小村は昔は驛次郵亭もなく小市も有ざる陋巷なり然るを慶長年中に貪吏有て賦を分ち貢

を殊にし里長村老を置て各其贄を納故に今に到りて
税租も品ありける或曰昔國中兵亂の時都萬より掠來
此を都萬路と云那隅より攻入此を那隅路と云とぞ川
を隔て少く平なる處願滿寺あり藏福山と云即小路の
里の境なり古は桑門多く集りて六坊を立と云徑の旁
の林門に古き二王門あり今の坊より東の原に本堂あ

り右に鐘樓あり鐘にも亦銘を不_レ鋼本堂は軒舊露混
て蘿のみ蔓生す千手觀音藥師如來を按置す一僧出て
語て曰彼亂兵の時此寺を屠しに僧房皆焦土となる壇
上の藥師佛煙中を躍出で都萬の千光寺の山上飛去左
右の觀音は横尾山の谷口に飛行して共に夜々光を放
近隣の草木此が爲に照耀く都萬縣主奇なりとして二
佛を迎へて此寺を造立し本の如くに按置ぬと云其光
を放せし處に寺を營す光明三千の義を取て千光寺と
號すとかや横尾山の古石は今に存して佛石と云舟の
形の石也とぞ三町ばかり川を下りて小路の里に至る

小路里

小路の地形は西東に斜に長く石川流て冽々たり南よ
り山長く横はり松杉栢椒白櫻青竹處々に群り生へり

人家は東の小山の下地上りにして前ひろし遠林窮井
一望に盡せり又近邊の富地なり東の山を登り行は彼
上面の二重瀧に出る其道一里二十町川を隔て西の人
家を漆原と云田園左右に多し淨土寺と云寺の前より
北に行山上古の城跡なり川を涉りて十一町右に廻れ
ば那里に至る

那里

那里は南山にして北も又岡なり民家菜圃將に蕪なん
とす然ども此里は穩地那の府なりとぞ小路の北の山
に城在て此を城下とす兵燼の餘物或は有ことあり老
嫗在語曰我曾祖傳しとて我父常に云此山城には箕尾
尾張守と云人住しが都萬縣主と戰て敗て死すと云里
より東重々の茂山あり其最も高き峰所謂三頭と云北
谷箱白金剛寺山伊後山につゞけり上西中村此那入相
の諸山をくし材木も又此より出す岡を廻り川を涉り
田畝を行こと十七町にして山田村に至る

山田村

山田村は山間にして蹊路縱横なり谷水一曲村を抱て

流故民屋軒を並べず地高下ありて田園圀れり北の山に發れば大峰の西に次きて永久寺の麓を過て周吉郡の西村に行左に轉しては伊後村に至る其間皆山林なり村に大竹あり山に産登りて長竿高林深し惟當國の淇園なり林を西に流る石川の上り田圃渺々として阡陌縱横たり十町計を隔て一林の社あり此を一宮と云

一宮村

一宮の神祠は田園の中に在四方に細路分れ鳥居前に立り瑞籬より外又小坡を築けり寶前の廣地祭の時の場なり蕭條たる林下宮様からし村は北の山下祠人も亦此に住り其言に曰此神は崇神天皇を崇め奉ると左右の園圃は皆此神の領なりとぞ山下を北西に出れば二十七町を経て北方村に至る

北方村

北方村は山を背にし田園を前にす小山を隔て南方に對す故に北方と云西は所謂富浦を境北は皆山也東の峰につゞき長く連なり立る中に秀て屹たる處あり此を御嶽と云古老傳曰昔此間山遠く地空濶なり故に高

野を移し眞言の秘法を承とす時に一夜の間此嶺出又故に今一夜嶽とも云山の半腹に平かなる地有寺あり横山寺と云谷より上る路左右樹茂り鬱々たる中より溪水流て潺湲たり二王門の前左右廣して高木參差たり本堂の左に鐘あり嚴瀧山と銘を鐫然れとも別文なく只佛語のみなり此を横山寺と云は彼一夜に山出て寺を横ざるの義也とぞ

凡天地之初土之所_レ凸爲_ニ之山_一地之所_レ凹爲_ニ之澤_一此大荒鴻濛之時乘運結氣自然之理也豈死仁天長之後有_ニ如_レ斯者_一乎俗曰上峰一夜出長淡海半夜湧來依_ニ此沿襲之荒唐_一歟獨可_レ笑

入海の長坡を左に見北なる山を越て谷間を過て又山に上り下る處代村なり

代村_{しろむら}

代村は山間の小村東の山陰より小水流て西の方田園に灌ぎ山を廻り海に入其山の北の麓南に向たる處に松樹叢り柯を接へたる中に一小社あり此を代の氏神と號す代の社と云

按諸國號二宮者僉大己貴命也然則先之所謂一宮

亦大己貴命歟依_レ是則此代村之氏神可_レ爲_ニ事代主命_ニ畧其上下二字_ニ歟雖_レ似_ニ牽合之說_ニ姑記焉

東の山に入て北の尾上を越海岸に出ること二里酌村に至る

酌村

汲とも書
又久見とも

酌村は西北の海邊故に石を疊て塘とし潮を防て村を置西岸に窘あり其より海に出て巫嶋と云あり別に大巖の高を冠嶋と號す山の出崎を酌崎と云て風波荒き處なり村より辰巳の山の麓に川を隔て内宮と云あり此を伊勢神明とあがむ

按神明帳隱地郡有_ニ伊勢命一座_ニ酌村隱地郡之境內豈知俗誤爲_ニ内宮_ニ乎

東の山に登り深き壑に降一里四町を行盡せば伊後の釜屋と云小村あり又右に轉じて高帖を經る左に荒園あり赤壤なる處を北に下れば伊後村なり

伊後村

伊後村は地高して民家上下に住り海を見下し山を分ち苦竹叢立松陰碧篠多し田園希にして漁釣も自由な

らず南は高山岡にして周吉郡の北境なり越る時は卽西村の瑠璃に出で松尾より山田にも行北は海岸甚高し或曰伊後本書_ニ隱後_ニ也言隱州の北地隱地郡の疆以在_ニ其背後_ニ故謂_ニ之隱後_ニ也理若然也俗訓不知_レ字依_レ言妄記焉嗚呼百舌之所_レ稱一望の所_レ及何得_ニ分明_ニ乎況國字不_レ辨_ニ焉馬_ニ哉然則斯書之所_ニ視聽_ニ可_ニ誤多_ニ讀者推_ニ察惟_ニ幸

嶋後中

男五千六百二人

女五千五百六十四人

僧百六人

合壹萬千二百七十二人

隱州視聽合紀卷三終

隱州視聽合紀卷四

嶋前紀

知夫郡ちふり 同別府

嶋前は地脉三つに斷て三嶋なり海部郡一つ知夫郡二つ皆峻高にして原野あらず故に嘉蔬少て菽麥多し其草は惟天かく其木は惟希なり其山は峽にして其村落は皆山を後にし海を前にす此故に綱引漁釣を事とし此を山稅海租とす海部は坤より艮に長へ知夫は其西南より北方に曲て巖巖たる巖山なり其半の東内海の濱東に向ふ處則別府なり古嶋後より一小吏へ遣はし嶋前の事を知らしむ故に此を別府と云ふ北の小岡に昔の館所あり今の驛亭は其下なり代官の家こゝにあり民家左右に分れ猶地あがりして遠を見河の南に見付嶋と云あり蓋嶋村より入來る船の先づ此嶋を見に依り其南の山崎に松樹多生出たる此より美田郷の境也即美田尻と云上に八幡宮あり別府の古史の氏神と云府より西は山にして半腹に飯田寺と云あり越て西

に下れば高崎と云高岸千丈雜樹多あり海に立嶋と云あり此を白嶋と云釣漁の宜地なりとぞ府より北の山崎を黒木と云傳に曰昔後醍醐の天皇姑らく狩し玉へる所なり故に今に到て黒木皇居と云北の方毎に隨て地東崎と云所あり過れば北の山を香嶋と云寺ありて香嶋寺と號す其崎を廻り行ば十四町ばかりにして宇賀村に至る

宇賀村は内海の岸邊地形別府に似て狹し後の山間に田園ありて往來崎嶇を經十町計を西北に越れば外海に出ず此處を鹿浦と云是より南別府山に次ぎて耳が浦と云あり皆人家なくて岩間にして漁釣をなす村より左りは倉谷と云海岸を北へ回して山下を行くこと十九町にして大宇賀小宇賀と云巖家あり十町ばかり丑寅に廻り行て海に冠嶋に鷹嶋あり北へ行くこと三十町にして沖の方に星神と云嶼あり雨を祈り風を祈る高さ五十間廻り百六十間此より北は海漫々として天を窮む別府に歸りて八幡の前より西の方小坂を越て美田に行左右は皆翠微にして或は少しく田園あり

美田郷或は美田院と云

美田郷に東より入る處小坂を下れば又田園有り左に古き神祠あり西に向ふ高平の地に舊石塔の大なるあり一國の中に似もあらず其謂れ有可きなり然ども銘消て證すべき物あらず此より下れば入海の汀に出ず南に去ること三十間ばかりにして海に出たる小嶋あり此を小山と云松根浪に濯れ岸高き上に舊坊有り此より右に行山の腰に長福寺あり岩經斜にして松竹柴門を蓋へり其麓は田圃ありて溫居市部大津小迎船越なんと云村店あり皆入海の岸に臨み山に隨て住居せり其船越と云村より外海に出こと甚だ近し東西の山勢盡て陸地十八九門ばかり海に出る經も亦如なく往來多力の賤夫あり入海の岸より船を負て外海に出釣漁盡日し又負て販て入海に入故に此村を船越と號す彗克船を遣ことあり況や近き海邊をや寓言にあらざるべし此邊の小村は皆美田の境内にして税賦も亦同じ彼小山より寺前を左りへ行ば美田本郷に至る三方は山にして未申に向ひて入海の岸上なり茂樹繁竹の間山路縱横なり板屋茅屋軒を接へ田俊船隻群り居此も亦昔は院の御領として美田院と云訝し何故か有或人曰造藏院のある處を院と云とぞ南に松山あり海の

西へ指出たり越れば遠く波止村につゞけり其間樵路多して近隣の者薪柴を探り背の山の東麓より内海を傳行美田までは三十一町其間を大山脇と云

按神名帳知夫郡有_二大山神社_一此山上燒大神歟謂_二之脇_一則斯山可_レ爲_二大山_一者可_レ知矣脇其麓根之義歟

大山脇より南に去こと海路十六町にして山南に大巖の峨々たるあり高きこと五尋あまり上に穴二つあり一口は未申に向ひ一口は已に向ふ内の廣さ丈餘ばかり此を文覺か岩崩と云昔文覺投荒せらる時此に居て修練す小松側らに生じ苦蘗石を色どれり岩下浪翻り怒潮音誼し遡回して従はんと欲すれば崖岨て且高し船中より見のみなり一嶋の出たる處の右に廻れば鉢が浦と云是より西方直ちに北に行其山址を波止と云先の美田の松山につゞけり此は彼の後鳥羽院の官船を寄玉ひし處とぞ谷際に小堂あり茅屋が軒ばの月も見と製吟有し堂なり波止村より燒大山に登る村の間谷水流旁に椿多し此より山上に至る其路二十町計嶮難九折にして又赤土あり強半を過て少しく平なる尾上あり遠望絶景なり門前に至る處又谷深く徑窄にし

て石肩高く出たり波止村より船に乘し美田に飯ること三十四町入海を斜に渡て西に行ば浦郷に至る其船路二十町あまり

浦郷

浦郷は東南に向ひ入海の濱なり西に神祠有山の半に城福寺と云あり里左りの岸に臨み松老て風興ある處に專念寺と云あり人家多く連なり北の方山に次で小徑有越て下れば外海なり北山長く列なり彼船越村を極む郷の右につゝきて薄子浦あり其山の出たる處に由良明神と號する小社あり極て小さく古はて亡が如し里人も知者なし

按神名帳知夫郡有由良比女神乃可爲斯社也恨土人知城福寺之爲佛不知斯社之爲神なり神在如亡呼哀哉

出たる山崎を右に行こと遙にして荒生城奈尺居形崎なんと云小村入海の岸に連なり處々に住居せり形崎の南の山端より郷に歸る道一里一二町山より西の外海に廻り美田居の崖鯛が崎國が浦賤が崎と云處あり其間に美田部と云蜚家あり餘は皆岩間の釣魚の地也

又彼形崎山指出て知夫山の北赤灘山に對し立て海門となり又東に出て葛嶋あり五町ばかりを行渡れば乃知夫山なり漁翁の曰斯間勢不恒或其形如丘嶽其奮如雷電澎騰奔激使人見之則雖丈夫凋顔矣其湍怒何以致之乎南有赤灘山北有形崎山崖夾勢迫瀆而濤高逆西風當東山沸澮增瀾無可退消之地如彼浙江海門故數十間嶋中第一の急灘也或風微に潮平則有一葦看渡なし

知夫湊井山

赤灘より知夫の本郷なり故に惣て知夫山と云其間小林所々あり赤灘の左りに小嶋あり棹し回れば二十餘町にして宇類美と云民村あり山南の絶頂を卯辰に行道あり二十二町を経て二部里と云山の趾に巨石多し僉牙の如し村老告曰昔此に蘭舍あり即ち宇類美坊と云又南に有をば二部里坊と云此兩寺昔は殊に美盡せり後醍醐天皇の皇后なりと云其地の跡も然らんと見ゆ

按別府黒木謂之皇后此地又號天皇行在蓋先在黒木後遷于此一歟不然則經營黒木之間姑

在ニ於此ニ終不ノ果而潜幸歟彼雞人眠而出ニ於寢所ニ
半夜歩面到ニ子知夫浦ニ可ニ交見ニ也若在ニ黒木ニ則何
得ニ歩行渡ニ形崎赤灘ニ乎是其一接也

二部里云り山崎を廻ること三町にして沖に雁島あり
高きこと三十間此を廻れば二町四十間東に去て麻島
あり高きこと八間此を廻れば四町三十間又二部里よ
り山路の曲折なるも次げり南より海の入ける所即ち
知夫津口なり左を大居と云右を郡と云人家分れ岸に
隨ひ津を夾て列なり田後兩所にあり山路を宇類美の
舊跡に行ば山上に願成寺あり郡の北に松養寺あり一
宮又此に祭れり凡此津は隱州の南岸雲州に近き浦な
れば往來の船多く泊れり又東西の旅舟も晴を量り風
を占ふ時は多此に集とぞ津を出れば西の方に多澤村
なり棹し出れば左りに渡島あり長きこと六町二十間
横は三町計り石田あり西の崎に渡明神と號する社有
り或人疑曰此神は和太酒の社成べしと云然ども其よ
る處を知らず惟言は近きのみなり南の島崎を大頭と
云此より郡り大居迄は十九町渡島と山岸との間を舟
にて行ば又海の入たるあり西の岸に宇菅と云小村あ
り先の多澤より山を傳ひて來る道あり六町三十間ば

かり宇菅より二町ばかりにして崎野と云人家あり其
南の山下を東に廻り西に廻る處皆嶮峻たる岩壁にし
て大泊を宿しむることなし岸を離れて五町ばかり南
の沖に基島あり廻り十町ばかり其上に竹を産す故に
竹島とも云西風厲しく潮煙常に灌ぎかゝる此故に竹
の色班々として節高からず葉も又短し好事の者此を
求る事多し然ども四面絶壁にして而も林中蛇多し若
此島に至らんと欲者は風浪の穩なるを窮ひ孤舟に乗
て岸に至り乃舟を岩間に引上げ杖を作て地を撃蛇を
して蟄居せしめて而後竹を伐舟を下し相喚で歸凡此
知夫山は東西一里二十八町南北二十一町山岬端とし
て木少なく谷深窄にして田園分る小徑多くわかれ人
家隔て住り麥黍惟稅釣漁惟業なり東北の海中に小竹
島あり此より海部の崎村に渡ること海路一里五町

海部郡

崎村

海部郡の西南に指出たる山崎を木橋崎と云岸登へ山
蒼々たり此より南に廻三町餘を渡り行ば山間三十間

ばかり海の入こと五十間にして崎村に至る村は岸上の山腹三面に人家あり松老て偃す間に神社あり此を崎村の氏神と號す其故あるべき所なり後ろの山に建興寺と云あり當國の山伏先達の居處なり海岸を左りに行ば大井と云小村あり専ら釣網の蛭家なり又山を越戊亥に下れば文覺が岩窟に向ひて塘と云海岸あり村老傳に曰此は彼鼓嵩と號する名區なり俗調鼓を塘と云又隨ひて字を作ると云山徑を一里ばかりにして布施村に至る

布施村

布施村は東海西山にして廣さ十五町ばかり田園少しく左右にあり右の山を越て今浦と云あり左の岸を北に傳ひ行ば四町計にして臺浦に至る

臺浦

臺浦は布施に似たる境地にして海の濱山の下なり西に越れば日須賀と云小村あり又内海の西岸にして殊に陋しき處也左りに松山あり此より別府に渡る内海の船路二十町又臺より山頭を傳ひ行こと十三町にし

て知々井浦に至る其山間に櫻本と云小寺あり

知々井浦

知々井浦は海の入こと遙にして山崎に松村あり左り殊に指出たる此を知々井御崎と云克く東北の風を防ぐ故に旅泊の輻湊する處なり老人の曰昔より傳て此處を中の湊と云此も又名場なり島前東南の諸津の半に在によれりとぞ山を西北に下れば又海濱を保々美と云浦人の小村あり其田疇を西に行山の尾上に雜樹あり門の前に巨石出活水湧て冷々たり石菖蒲茂り生て岸上は滑なり門に入れば一堂あり觀音を按置し清水寺と題す堂の左りに坊あり樹蓋ひ苔生じて自ら塵無又山に登下れば東分と云小松あり森郷の内なり

森郷

海部郡の繁地なれば國人皆海部と云

森郷は東分より行經山を越て半腹に安國寺あり岩徑斜に登れば遠望懷を伸山容肅條として佛壇高窓前松老て象緯迫れり人跡希にして鳥雀階除に馴藤蘿木々掛れ共西溪は晴たり願念の便無にしも非ず西の山下に西と云小村あり十八町を過行ば本郷に至る後は小

岡にして松竹陰繁く人家南に列りて尾上長く指出たり昔賊徒亂入の時近隣の諸民此地を要害とし柵を設て防ぎ戰賊軍常に敗績して一人を虜とせず一處を犯さず終に奔歸る其捷を烏後に獻ず時の國守佐々木氏此事を功として手から書を賜ふ其狀今に至て此郷の長某が所にあり郷に入左の丘に一字の草堂あり桑門多集まり居て念佛不斷の行を修す其麓の渚に一社あり諏訪明神と號す又長某が門前を直に行ば田園多し畦路を分過れば三町ばかりにして山下に源福寺有是を葛田山と云後鳥羽上皇の御陵なり門に二王有り側に華鯨らを懸たり此二王は君手から刻玉ふと云傳へたり此より四十間ばかり石甃を山に上る半過て左りに入左右松竹凄々として綠蘿籬に蔓り又一小門あり鞠躬として入れば拜處の前に至る御廟其後に高し欄干を設て堦上に登る四方は皆喬木にして竹籬を引圍む其間には小石磷々たり遊客も來こと希に落葉も勤めて不掃見に淚落感慨自生ず小門の前より直ちに登れば堂前に至る前庭は廣して背には樹多し本堂は胡麻を修する地として五大尊の置けり煙に薰して佛も黒し阿訶棚に菊楓折亂せり堂の左りに坊あり牆を隔て

空庭あり其内に方池あり嶼に孤松の偃す有此を葛田の池と云老僧語て曰昔王御遊の夕部蛙鳴て松風吹く折に過ば此もさすがに哀なるにや
蛙鳴く葛田の池の夕疊み

聞まし物は松風の音

と咏せさせ玉へり是より蛙鳴ことなる事にて如なり門を出て三五歩だも過ざるに其鳴こと常の如し
元之大徳年仁宗在潜邸一日駐輦於懷孟恃若群蛙亂喧終夕無寐翌旦大后傳旨諭之曰吾母慣々蛙忍惱人耶自後母再鳴其後雖有蛙而不作聲後越四年仁宗登大寶古人論曰元后者天命攸歸行在所雖未踐祚而山川鬼神以陰來相之不然則蟲魚微物耳又能聽令者乎仁宗後登祚後鳥羽遂崩于茲矣彼後爲天子此初爲至尊雖如小有小異命所以行小蟲者一也天王之令嚴矣哉按其令如此何以王師敗績遂狩遠境乎夫天壤之内唯理而已王者繼天而爲之子得理於心行之之故普天之下無不王土四海之物不得逆其理雖小蟲所以聽命也若行違其理而王之不王則敗六軍之衆棄萬葉之位爲獨夫死邊

地然則天理豈不_レ大哉戰兢可_レ持王者如_レ此況其下者乎

寛永年中に法皇より命ありて群臣に歌奉らしめて御舊跡を御弔あり勅使は水無瀬中納言氏家卿とぞ其和歌の一巻并氏家の記行あり此を寺寶物とす寺前を飯りて諏訪の鳥居の前より田徑小岡を経て六町許又轉じて西の山下に行くこと二十町あまりにして北分を過て福居村に至る

福居村

福居村は西山の下左右に荒田あり初此村を福賴と云比屋貧骨に徹す一老祝あり名を改めて福居と云從_レ是や、住付り後の山の一峰の高きを阿堂と云人常にのぼらず登る時は必怪ありと云山の麓を北に越れば菱と云小林あり并て菱野と云る處あり此より内海を舟に乗じて別府に渡る其間三十二町宇賀村に渡こ_レと十五町福居より北に出たる山岡を二十町計行盡せば又森郷の境なり左は内海右は入海此口は二町計にして宇津賀村に至る

宇津賀村

宇津賀村は小山の間人家分れて住り後ろに宇津賀明神の社あり松山蒼々として風興あり前に花表を立て瑞籬ながし按神名帳海部有_ニ宇受加命社_一可_レ爲_ニ斯神_一也北の山崎を離れて三島あり三郎島と云其沖に小守島あり島の後津戸の太守に對して云云又北に二勝島_{（たまたまじま）}二并びて大岩の出たるあり此を新島と云二勝は宇賀の海中なり昔は此を一村とせしとぞ村より岡邊を斜に下れば豊田湊に至る

豊田湊

豊田湊は海部の北境島後に渡る津口なり左右高く出て右を御崎と號す沖に向ひて高岸の立たるに佛像を刻付たるあり一里計沖に出て松島あり廻れば一里一町制有て妄りに不_レ入湊の左りの岸上に昔小野篁が住し舊跡あり潮勢來れば没_ニ砌石_一回瀾起入_ニ柴扉_一故崎岬之樹根は露出茅檐前繫_レ舟日晴見_ニ島後之遠山_一島前

男二千二百八十八人

女二千二百九十一人

僧五十人

合計四千六百三十九人

延喜格式神名帳に隱岐國

周吉郡

賀茂郡備神社

玉若酢命神社

穩地郡

天健金草神社

伊勢命神社名神大祈
雨神祭

知夫郡

由良比女神社祈雨神祭名
神大元名

海神社和多
須神

眞氣命神社

海部郡

奈伎良比賣命神社

下西惣社有號下隱州神名帳一卷上知何人所一

記隨見記之以備博覽

周吉郡

正一位玉若酢大明神

從一位日野責大明神

從一位和氣能酒大明神

從一位奈伎良姬大明神

從一位荒雄大明神

從四位上兄玉姬明神

從四位上楯鉾明神

從四位上阿良根明神

從四位上伊勢明神

從四位上酒久美明神

從四位上豐酒屋姬明神

從四位上雀雄明神

從四位上賀茂奈比明神

從四位上阿太屋姬明神

從四位上禰都加彥明神

從四位上伊志姬明神

從四位上佐知禰雄明神

從四位上阿佐遲姬明神

從四位上布施山明神

從四位上久志加世明神

從四位上大雄明神

從四位上形太屋明神

從四位上王子明神

從四位上郡久保根明神

從四位上市倉明神

從四位上大國玉明神

從四位上志都夜明神

從四位上出雲結明神

從四位上蟲神明神

從四位上志都屋明神

從四位上茅玉明神

從四位上高屋都姬明神

從四位上母呂禰雄明神

從四位上海岐都爾明神

從四位上奈岐良姬明神

從四位上東山明神

從四位上妻屋姬明神

從四位上酒岐明神

從四位上水祖明神

從四位上住吉明神

從四位上八田姬明神

從四位上辰如明神

從四位上里趣明神
從四位上宇敷明神

穩地郡

正一位天健金草大明神

正三位運如本若酢明神

正五位上木梨明神

正五位上王子闕

正五位藤姬明神

正四位上直之明神

正四位上水闕

正五位上田方屋神

正五位上高田神

正五位上加闕

從五位上伊未自姬明神

從五位下山之神

知夫郡

從一位天佐自彥大明神

從三位直氣明神

從四位上奈取彥明神

從四位上都玉責神

從四位上西里趣明神
從四位上打羅明神

正三位下國闕字

正三位水祖明神

正五位上多太闕

正五位闕

正四位上水若酢明神

正四位上阿久姬明神

正四位上峯津神

正五位上炊屋姬神

正五位上菊之神

正五位黑田彥明神

從五位上伯彥明神

從三位上海原明神

從三位柴木彥明神

從四位上云海彥神

正四位上和太酒明神

從一位比奈麻治姬大明神

從三位上由良姬大明神

從四位上熊岐姬明神

正四位上奈酒彥明神

海部郡

從一位奈伎良姬大明神

正二位直大明神

正三位上奈酒彥神

正四位上大胖神

正四位上國至神

闕 泊姬明神

闕 朝露明神

闕 多氣明神

從四位上日忌明神

從四位上柳姬明神

從四位上倭父明神

國中佛寺

周吉郡

眞言

國分寺

眞言 泉養寺

從三位上大山明神

從四位上呼乘彥明神

從四位上豐加姬明神

從一位予酒賀大明神

正三位上海原神

正三位上健酒佐雄明神

從四位上穗々美明神

從四位上闕

闕 大山彥神

從四位上御佐々明神

從四位上彌多神

從四位上每吉如本島神

從四位上大刀神

禪

護國寺

禪 地福寺

眞言

蓮花寺

眞言 圓福寺

淨土 善立寺	眞言 大光寺	眞言 東養寺	眞言 常樂寺	眞言 圓福寺	眞言 海前寺	眞言 觀音寺	眞言 隨專寺	眞言 永樂寺	眞言 常樂寺	眞言 清雲寺	眞言 高明寺	眞言 穩地郡	眞言 願滿寺	眞言 報恩寺	眞言 苗延寺	眞言 持福寺
本願寺徒 連光寺	眞言 日輪寺	眞言 明光寺	眞言 淨土寺	眞言 淨土寺	眞言 泉生寺	眞言 信樂寺	眞言 願養寺	眞言 法性寺	眞言 清雲寺	眞言 靈護菴	眞言 建福寺	眞言 淨土寺	眞言 淨土寺	眞言 橫山寺	眞言 禪隆寺	眞言 光山寺
眞言 光恩寺	眞言 尼桂寺	眞言 伴養寺	眞言 安養寺	眞言 勝玄寺	眞言 安樂寺	眞言 淨土寺	眞言 淨土寺	眞言 西性寺	眞言 報恩寺	眞言 最明寺	眞言 丁玄寺	眞言 大滿寺	眞言 幸福寺	眞言 萬清寺	眞言 千光寺	

知夫郡

眞言
性德寺

眞言
足利寺

眞言
飯田寺

眞言
香鴨寺

眞言
長福寺

眞言
專念寺

海部郡

眞言
光福寺

眞言
源福寺

眞言
建光寺

眞言
寶藏院

眞言
布施寺

眞言
松養寺

眞言
神光寺

眞言
安國寺

眞言
清光寺

眞言
金光寺

眞言
極樂寺

眞言
今在知夫郡

眞言
願成寺

眞言
神光寺

眞言
峯寺

眞言
大夫連寺

眞言
櫻本坊

眞言
清水寺

名所和歌

鼓嵩

かゝり火の所さためす見へけるは

なかれつゝみのたけはなりけり

隱岐海

われこそは新島守よ隱岐のうみ

あらしなみ風こゝろしてふけ

隱岐小島

同

輔時

後鳥羽院

なみまなき隠岐の小島の濱ひさし

ひさしくなりぬ都へたてゝ

小峯島

孔 威

夕されは小峯の島になく千鳥

あら磯なみにまはや盈らむ

中港

公 朝

敷島や中のみなとの小夜ちとり

つまよひたてゝ浦つたひ行

隠岐外山

御 製

くも霞うみより出てあけそむる

隠岐のとやまや春をまゐらん

高田山

准 三后

春さむき山は高田のたかければ

雪のまたよりたつかすみかな

離島

前左大臣

なみまより山とみへつゝ夕くれの

まかきかまにたつかすみかな

西里

淨阿上人

いつる日の高田の山はあらはれて

にしさととほくたつ霞かな

成澤池

秀 長

春にはやなる澤の池のうす氷

なをとけやられてさゆるころかな

御陵葛田山

伊勢祭主友忠

隠岐の海の憐れを思ふ人はかりと

とへとこたへすうら風やふく

知夫郡焼火山縁起

神之在_二焼火山_一號_二雲上寺_一隠州之南知夫郡之山枕_二

美田縣_二立_二海角_一秀_二諸峯_一地脉相連數百里高嶺幽澗

幾千仍麓根曰_二波止村_一自_レ是入_二山中_一松杉交_レ柯蔭_二

九折之岩路_二絕壁石峙攀_二葛藟之支蔓_一具嘗_二其嶮難_一

則僕痛馬病然而于_二春夏_一于_二秋冬_一于_二陰晴風雨_一有_二

往者_二有_二遊者_一有_二來上而經_レ宿者_一其地往來無_レ有_二虛

日_二惟神之所_レ有_レ驗也於_二人事_一見焉巔有_二巨岩_一其高

八十尋半腹有_レ穴類低頭也瞰_レ能_レ見_レ底古來傳云窟

斜去徹_二山頭_一也乃神之所在燒火之夫也攀_二欄干_一到_二

穴前_二玉堂盡_レ美臨_二深谷_一書棟紆_二石根之雲_一珠簾映_二

海門之月_一模峰倒嶺蒼色連古木奇石天籟嶋地之殊勝

不_レ可_二敢談_一矣伏窺_二松柏之間_一則基嶼葛形崎赤灘皆

目下之壯觀遠眺_二海煙之上_一則雲州伯州之山或淡難

見或晴可指朝之晚之時而變化西方又無疆海漫漫何爲大哉其記曰昔一條院之御宇海中有光數夜一夕飛而入此山村人尾之踏踟而登忽見一岩獨立其形如薩埵者各拜稽首而退仍營一字以崇之禱則有驗云々承久年中後鳥羽院狩于斯也日既暮矣暴風起波瀾立王乃詠曰「朕古曾波新嶋守與隱岐濃海荒幾浪風心志而吹」於是風波漸收然而夜闌月役官船不知所之漂泊於中流風波又欲起王心念天時遙火在雲間其餘光照海黃郎得便扈從奉賀也王奇之詠曰「灘奈羅波藻鹽屋久野土可思何遠燒藻乃煙奈類蘭而後到其津有漁翁蹲磯上勅曰是何浦翁對曰隱州知夫波止村也王有歌名今夜海上之製何爲然乎王勃然問其故翁曰燒藻則又何疑只言燒火則可也王奇之問其姓名翁對曰臣在斯者尚矣誓護海船言終不見王爲立祠祭之以空海法師所刻之藥師佛按茲號山於燒火扁寺於雲上蓋燒火在雲上之義也上一壺神錢涌出人得其錢則免水難避疾病受其錢之例投一錢受一錢故日々覃數千倍雖然無敢溢又雖祠人社僧不得私錢有用則借以償之不得納焉山中有雙鴉不

見其外常遊堂前巢山樹欲客來則啼屋上噪庭柯於是社僧祠人豫知之出神前以待之產兒則反哺而去又如恒高樓有鐘其傳云伯州米子里有鑄治甚左衛門者常有信心一日味爽關戶有老僧而立容貌太嚴也告曰隱州燒火山鯨音久斷今年新命雲州能儀郡內波善兵衛者鑄之到則可以致隱州其船五艘可在海岸就中新造船可也所券之僕等云云而去甚左衛門奇之不妄發默以待之到其日有一人來曰燒火山之洪鐘鑄成以送之問其名則善兵衛者也曰曾有僧來約之故致之齋價而歸甚左衛門走見海濱有五艘之解纜中有新舸問之則知夫郡之賈客也乃載送之社僧驚曰我自初春到勢州遊若州末有此事正知是神之所爲也卽造一樓以懸笏虛遠發晨霜響長破旅船之夢清音無絕而到今也時元和四年春三月又伯耆國之大賈村川民自宮賜朱印致大舶於磯竹嶋遇颶風落高勾麗日暮不知津船叟念燒火山忽有漁火得入其津歸帆之後益尊崇焉聞者驚懼此舉其一隅而已凡如之類司把者算潮者運於市船者爲陳言爲常談予亦聞之熟或問曰吾聞之念斯神則必使舉

火而識其處。惟爲神歟。似怪請明辨之。答曰。惟神也。非怪矣。夫神之充塞於天地也。古來常理矣。念之必有驗也。一心之應矣。其應者神之感也。村燈漁火自然出而使之知。其處者神之德也。雖然有應與不。應此亦依一心之誠與不誠。非神之不爲。神彼胡越同。舟俱恐其欲覆而無有。彼此之分也。於是知之人當急迫之地。不入譌於其間。夫恐覆也。急故其念神也。實大念神也。實故其應之忽雖異域。無不驗者是也。其誰不思而敬乎。按明人稱天妃神而游海者崇信之。是又此神之類歟。可合思也。嗚呼。吾曾遊焉。春日渡海。黃鸝遷喬。朝霞一抹。谷風習々。夏雲出則疑前峯。秋葉飛則憶紅錦。櫓聲遙入漁村之煙。雪色却映夕日之春。翠眉含雨。則爲文君之顰。海面晴來。則舉西施之粧。千變萬化。非言之所及。惟山客之朝暮余之所眼見也。如其奇談怪說。社僧以傳之。

文覺論

津吏曰。文覺修練得通。可謂尊乎。余論曰。一異人也。尊者我不知。之吏曰。感死節之婦女。悔過改行。薙髮受法。誓志苦行。入那智山一座。瀧流者七日七夜。夏日

之永臥。暖負喧不掃蚊蠅。其精修勵苦。皆人所不能也。自強行之故。無所不遂。無願不得。焉是以遊高雄。則恨神護寺將廢。勸之四方。終其願。在洛陽。則憐六代臨刑。馳到鎌倉。請之劍下。且渡天龍灘。訶海神。海神爲之降伏。在北條爲賴朝。如福原。其道一千餘里。往來不過七日。被謫于隱州。則曰。必奉迎君於貶所。果而如其言。所謂無所不遂者。豈可不謂尊乎。余曰。惟何謂也。彼既悔過。改行。則應勸聖經賢傳之理。以修己治人。之方。何爲事居瀧驛。日之苦行。街爲人祈福之術也。夫尊者。明德行。義居天下之安。它行天下之達道。雖貧爲尊焉。文覺有其志。則肉袒負荆。訪婦人之郎。涕泣以謝罪。得其宥。則尋婦人之母。盡財以弔喪。治身以磨學。若得其時。諫平相國。陳貴君賤臣之道。可學治國惠民之政。又不得其時。則考盤在澗。獨樂而可也。苦身爲行。以苟難求。虛譽於世。而後爲改行。悔過乎。嗚呼。彼詣闕。訟訴傷官人。穢禁廷。妨聖慮之歡樂。實皆無不犯上悖禮者。相鼠有禮。無入而禮。不死何矣。其罹重獄。流遠島。幸而免也。加之懷緝。桓之枯骨。計兵於豆州。余察其志。非欲爲王

起_レ兵非_下爲_二賴朝_一謀_ホ之只不_レ過_下隨_二麒麟_一欲_レ歸_二舊里_一之策_上而已故又勸_二叛於六代_一竟貶_二死于海角_一偶上皇不明而有_二承久三年之事_一不_レ可_レ謂_二咒而奉_一迎焉若得_レ通受_レ術則何自乎咒誦不_レ得_二金雞書_一乎惟不_レ知_二經傳之理_一爲_レ人不_レ爲_レ已捨_二其道_一而不由勞而無_レ功哀哉津吏唯唯欲_レ退余重曰論_二其理_一者如_レ斯矣雖_レ然彈_レ舌降_二龍王_一往_二來嶮岨之剛_一又僧中之活者也而非_二後世之所_一及也近代有_下以_二精練修行_一惑_レ世誣_レ民者_上有_下以_二祈禱加持_一貪_レ貨潤_レ屋者_上故余不_レ得_二強而不_一辨願吏退_二後贗僧_一明_二其真譌_一吏喜而大領

隱州視聽合紀卷四終

仙道會津元和八年老人覺書

岩瀨、石川、田村、鹽松、二本松、會津

加藤左馬殿御領地之時分御尋に付古人共申上候覺

岩城須賀川今泉之城様子御尋に付申上候事

一須賀川四十四郷之城主輝行代に今泉之城代本丸に矢部周防二の丸に姫川左衛門と申者其外寄合侍三十余人に今泉七郷預置被_レ申候事

一田村之城主と須賀川城主と常々敵對被_レ申終手切御座候故田村より須賀川領今泉之城へ人數を指向被_レ申候依_レ之輝行須賀川より自身と出馬候而今泉之後卷を被_レ仕玉木と申所にて一戰有_レ之田村衆多人數故輝行負大久保と申所迄引取被_レ申候處に田村衆附入大久保村に火をかけ大久保之在家焼拂輝行之人數多田村方へ被_レ討取_レ輝行敗北矢田野と申所へ落行夫より城賀川へ漸引取被_レ申候事

一今泉落城申候に付田村清顯より田村月齋と申者を今泉之城代に被_レ申付_レ候月齋は清顯の伯父にて御座候

一會津若松の城主は鎌倉殿御代佐原十郎義連十七代の末孫修理太夫蘆名盛氏其養子三浦介盛隆實父は須賀川城主二階堂遠江守盛義也盛隆と田村清顯と一戰始り申候依_レ之佐竹之人數并安積仙道筋の小城持皆々盛隆之手に附申候盛隆多人數を催し田村へ押寄被_レ申候時先田村月齋持申候今泉の城を責可_レ被_レ申處に夫には不_レ構先田村領御代田と申小城を手強責申に付清顯より和談を入懇望被_レ申候は今泉七郷之分は須賀川へ返し可申候間御代田を御責候事御免候様にと度々被_レ申候に付月齋品々今泉より田村へ引取候に付御代田の陣を引被_レ申候其後須賀川より濱尾と申者を今泉の城代に指置候事

一其後佐竹義重と伊達政宗と一戰有_レ之政宗猛勢にて安積仙道大形政宗の手に入申候依_レ之濱尾政宗の勢に畏伏し候て政宗へ附申候間先政宗より今泉七郷を濱尾に給候判形迄出し申候へ其後に被_レ取

返一候則桑折治部大夫と申者政宗より今泉の城代に被_レ指置一候太閤御代に今泉の城者御割被_レ成候事

一岩瀬之郡須賀川之城主は往古より二階堂氏之領地に御座候鎌倉殿御代二階堂の某須賀の城に被_レ指置一候須賀川盛義と田村清顯は元來敵對被_レ申度々私の合戰有_レ之互に五十騎百騎計被_レ討取一候得共終に勝負は無_ニ御座一候佐竹義重と岩瀬盛義は縁者にて御座候會津盛隆は實子にて御座候會津盛氏の養子に遣し互に親き中に御座候依_レ之盛隆より加勢を多人數被_レ遣田村領御代田之城を取かこみ即時に落城申岩瀬の手に入申候其以後二階堂盛義死去蘆名盛隆は出頭侍に大場三左衛門と申候て下品の者の子を取立近習に被_レ召仕一候少の恨にて主君盛隆を切殺立退申候を無_レ程追懸三左衛門を討留候會津も段々威勢衰申候岩瀬は無主に候得共盛隆の後室女中に候得共器量有_レ之城を堅固に持抱被_レ申候佐竹義重より諸事後見被_レ申伊達輝宗と後室は兄弟政宗には伯母に御座候依_レ之政宗より度々岩瀬の城を御渡し候へ御身の御事は諸事御心安御

座候様に可_レ仕候家中之侍もそれ_レに只今之通知行は配分可_レ仕と和談被_レ申候得共後室終に返事さへ不_レ被_レ申候に付て政宗多人數を以て須賀川の城へ押寄被申候佐竹より加勢有_レ之岩城よりも加勢被_レ申植田の城主但馬其外竹貫の城主中務等被_レ遣候佐竹よりの加勢大將川猪甲斐二百騎にて須賀川へ籠り候政宗色々謀略にて合戰有_レ之候得共即時に落城可仕體に見得不_レ申隣草の小城持衆より後卷を仕候尤須賀川家老須田美濃と申者智謀有_レ之侍に御座候美濃下知にて様々の手配日々にかわらせて伊達勢を防申候遠藤雅樂濱尾今内矢内雅樂介同與次衛門其外大浪石見高林右衛門太田七郎は長沼彦左衛門熊澤次郎右衛門佐藤主水村助七郎矢部木工大賀大學杯と申者共先手を仕竹貫中務を相扣一戰有_レ之政宗家老之内屋代勘解由長沼の城主新國上總が人數兩手を追散首數三百餘討取勝時を上げ備を立罷有所に須賀川家老の内守屋筑後と申者政宗へ返り忠仕須賀川町へ火を懸焼城中迄焼拂申候故案の外に落城仕候其翌年太閤の御代に罷成候事

元和八年七月六日須賀川老人共申上候

關山籠城之段御尋に付申上候

一四十年前佐竹義宣馬を被_レ出候刻は那須衆落葉
滿中人數二千計にて持申候義宣手強御責候得共落
城不_レ仕候事

一景勝陣と申候は河東田大膳中牧將監と申侍物頭に
て地侍新馬上鐵砲百丁近郷の百姓共夫共に千計小
屋を懸七月より翌年三月迄罷在候事

元和八年七月廿七日關山地生老人

秋場雅樂
六十二歳
六十三歳

保住十郎

一石川郡の内淺川の古城にて合戰御座候城主淺川次
郎左衛門と申者は石川城主と一つにて前代より淺
川の城主にて御座候佐竹義宣仙道へ發向方々責取
被_レ申候節次郎左衛門は佐竹へ附申候田川の城主
は會津蘆名盛隆の手に付申候て淺川城主を責被_レ
申節白川衆三の九迄責入申候處を淺川城中の者
共雜兵千計にて合戰仕白川衆大多和右近濱尾十郎
白石式部志田玄番杯申歷々衆三十五六騎程三の九
にて討取申候故白川衆早速引取申候次郎左衛門働
無_二比類_一由佐竹より褒美にて爲_二加増_一小貫大田和

染杯と申所を千石餘爲_レ取被_レ申候

一白川岩瀬より度々淺川へ働申候へ共右之通堅固に
城を持申候會津盛隆父子田村清顯自身出馬にて當
地に十二三日程兩家陣を被_レ取候處會津衆田村衆
申事有之由にて兩陣共に引取當地無事に御座候
事

一會津仙道筋不_レ淺伊達政宗責取手に入申候に付淺
川次郎左衛門も政宗の手に入申候依_レ之佐竹衆と
敵對仕候當地棚倉境目に御座候に付一兩年程は棚
倉と淺川度々合戰仕候終上御代に罷成候一年前に
佐竹領地南郷之衆寺山羽黒棚倉の勢三百騎程にて
淺川へ働被_レ申候城中より百騎計にて罷出南郷退
口へ慕寄羽黒の城主石川近江と申者を始首數四十
餘淺川へ討被_レ取申候淺川の儀は最前佐竹の下後
に政宗の手に附家頼に被_レ成候小田原落城の春迄
は持來候へ共上の御威勢強御座候段政宗聞をもち被_レ
仕私に切取被_レ申候領地不_レ殘明候て本城へ引込
被_レ申候付淺川次郎左衛門も石川の城主石川大和
と一門故城を明政宗下へ參候石川大和は一城持に
て候へ共政宗の威勢に附又政宗も大閤御威勢に畏

伏被_レ仕俄に數年骨肉何萬人之侍百姓迄命取無_三甲斐_一と城を明退被_レ申候蒲生飛彈殿會津御拜領の刻白川は關長門と申者城代の儀は淺川石川も右の長門支配被_レ申候大和も次郎左衛門も政宗領内角田と申所に于_レ今罷有候事

元和八年石川郡の内淺川村藤兵衛 右近 六十三 五十五 八十一 内記

一石川城主照光合戰之様子申上候身方は佐竹義重にて御座候事

一天正七年會津、田村、白河、岩瀬の城主金屋内と申所に被_三押寄_一候處矢吹筑後と申者田村衆三澤彌左衛門と申者に鐵砲にて被_三討殺_一候事

一天正十年大寺と申所より石川の脇村油柄と申村迄被_レ出申候所を爰元よりも出合大寺迄押込大寺修理と申者を初三十餘人討取申候事

右之通覺申候事前後之儀存知不_レ仕候事

石川町 丹後 七十一 六十一 四十九 縫殿 市右衛門

一五十九年以前に石川郡の内山取と申在所に小平八兵衛と申者草に伏罷在岩城衆通をとをり候を首を取申候此褒美に會津盛氏田村清顯より永樂錢五百文被_レ下候只今は豊後と申候て八十一歳に被_レ成候

事

一五十四年以前に會津の城主蘆名修理太夫盛氏と田村清顯と淺香の内郡山にて一戰有_レ之時小平三郎右衛門と申者會津衆之内三十人程打取申候三郎右衛門只今は淡路と申候八十一に被_レ成候事

一五十二年已前に小平村の城主大膳を清顯三千餘にて館を取卷朝より七つ時迄責申候に付城中の男女本丸に集被_レ有候處和談に被_レ成城を明渡し石川へ退候小平村を清顯被_レ仕候七八年程有_レ之上御代に被_レ成候事

一三十七年以前田村清顯と岩城の城主常陸國田村の内下枝の城にて合戰有_レ之小平喜兵衛と申者田村方赤坂彌八郎と申者と組打仕候事

一田村の内小野田原谷の城主は中津川兵衛太夫と申候後には兵衛太夫は中津川の城に被_レ有候田原谷の城は家老宗方右近と申者に預置申候其後兵衛太夫岩城の手に附三春とは敵對可_レ仕と申に付右近様々異見申候へ共承引無_レ之則右近は穿人仕候其時岩城常陸田原谷の城主を責候て翌年三月十月に落城仕候事

一田村之内小野新町の城主は田村右馬頭と申候清顯の
一類にて御座候小野六郷之者共與力に清顯より被_レ申付_レ候岩城より數度責申候へども三春より加勢をも請不_レ申候右馬頭手勢計にて城を堅固に守申候事

一三十九年以前九月十三日に岩城常隆新町の内赤沼と申所まで押寄きつとやと申山に圓居を立被_レ申候て赤沼にて一戰有_レ之候事

一同年十月又岩城常隆小野へ押寄八咲村と申所へ陣をとり被_レ申候三坂越前竹貫など申者共先手に向申候其時新町蓬田小大夫と申者十五歳之時竹貫家來水野彌五郎と申武功の者と名乗合一かど働手柄仕事

一田村大綾村の城主大綾紀伊守申候田村方へ逆心仕候て政宗の御馬を引受二三年籠城仕終に城を明岩城へ逃候て岩城にて切腹仕候事

一小野神股村城主は神股久四郎と被_レ申候三春清顯の家來にて御座候岩城より度々被_レ取詰_レ岩城の侍猪狩下野と申者に和談を入城を相渡申候久四郎は其後政宗家來に被_レ成仙臺に被_レ有候

一田村の内常盤の城主石澤修理と申候清顯之家來にて御座候南城を預申候三十四年以前に相馬より責來り三の丸迄責上り候へども能持答ひ終に三の丸より追下し相馬衆首數三十程修理介方へ討取申候一同常磐の内小泉村石井豊前と申者安積郡成田の城を田村より責申候時分右之豊前五十五の時無_レ比類_一手柄仕候後甚七郎と改名申候十六の歳會津と田村安積久保田にて大合戰御座候其時甚七郎會津方本陣へ乗込て甲首五つ取生捕三人程首を生捕の者に爲_レ持清顯の陣へ引來候又甚七郎二十五歳の時鹽松の内からやと申小城を清顯責被_レ申候敵方さほひかゝり清顯の先手あげ兼見得申に付甚四郎を召れ先手勢を引取候様にと被_レ申付_一候へ共則被戰鐵砲大將富田右近と申者に早々引揚候様にと被_レ仰由申渡候へば右近申候は敵追掛り引取り候事難_レ成由申候甚七郎申候様は先手の鐵砲一度に打懸敵をちいめ鐵砲のけぶりをはいかゝり候うちに引揚させ可_レ然由申候て其通に仕引揚申候に付て清顯殊の外感被_レ申欄山と申所を知行に給候其後又鹽松の内糠澤と申所に一戰有_レ之候時大内彌右

衛門と申者武切の者の首を取申候付清顯悦び申甚七郎名を改彌右衛門と申候事

元和八年

一 田村清顯之代に會津盛氏郡山福山福原邊迄出馬有之候清顯出向懸ニ一戰被申候て片平村と申所まで二十五里切取被申候其時福原の内郡山太郎左衛門、長谷龜喜前、西荒井五郎左衛門、高倉治部、三本木十郎右衛門、熊田掃部、蘆澤治部と申小城主其田村にて一戰有之候事

一 右の時會津より佐竹岩城一味被申鹽松、二本松同心にて三春と取合御座候田村領小野の城代は清顯の伯父にて御座候謀反被申會津へ附被申候事

一 相馬の城主は清顯の舅にて御座候中惡有之清顯死後に三春二の丸迄乘込被申候三春家老小野梅雪右衛門大夫など、申者手引を仕清顯之内室を相馬へ引取可被申に被存其刻三春にて働候て相馬衆追返々々申候者は月齋橋本刑部と申者にて御座候後には皆々政宗之手に附申候事

一 田村の内石澤の城代は田村の一門萩儀太夫と申者をも政宗の馬を請後は政宗へ附申候事

一 鹽松の内百目木の城代は石川彈正と申候後に田村方へ附田村勢を引入申候事

一 上宇津志村の城代は田村宮内と申候

一 宮森の城主は大内備前と申候是は二本松の城主に付二本松勢を引百目木村の人数千計にて働申候砌待町迄乘込申候城中より二手に備を立出合追散申候其時百目木騎馬七十人足輕千計有之事

元和八年

一 鹽松城主始は石松久吉其後大内備前其後輝宗正宗の領地其家中白石右衛門其後上御代御一統の刻蒲生飛驒の家中蒲生忠右衛門其後外池信濃城代に御座候事

一 鹽松小濱之城可申上旨右之通に御座候

一 七十年程打續隣鄉隣草之城持衆と晝夜戰御座候事
一 田村清顯と申は常々千計の人数を抱置鹽松と取合御座候一年鹽松之近郷西新館村と申所迄田村衆乘懸申所を拾石畑と申所へ鹽松勢出合六月八日巳の刻より申刻迄戰御座候田村衆敗北仕首數百五十六程鹽松へ取候て田村境へ掛させ申候
一 其後田村衆鹽松勢の内向青石と申所を取手仕人数

を立申所を鹽松より乗掛田村方の首五六十程取候て又境目へ爲_レ掛申候事

一其後又初森と申所へ田村より取手を仕候又鹽松より乗懸打散_レ富澤式部と申者を生捕其上首三十計鹽松へ取申候事

一鹽松より稻澤村の内奈女津と申在所を取手に仕勢を備置申候田村衆押懸一戰有_レ之候へ共田村衆敗軍仕成田小屋と申所迄七里之間追崩し冑首七十程鹽松へ取候て又境目へ懸申候事

一千石森と申所へ田村清顯自身出馬新城を取立鹽松之押備に可_レ申支度有_レ之に付大内備前大事に存自身出馬候て町人百姓迄能々心を合右之千石森迄乗懸柵迄も斷割捨被_レ申田村勢追崩申候清顯弟田村善九郎と申人を小濱の町人きまん新右衛門と申者討取申候其外首數八百程小濱方へ取申候

一右之通度々田村衆敗軍仕に付て後は伊達政宗と清顯一身被_レ申輝宗父子清顯と兩方より一度に鹽松へ取懸り申に付鹽松落城申候大内備前は若松へ引籠候輝宗心の儘に鹽松手に入申候て則居城として父子共に御入候夫より二本松義繼と取合出來申候

義繼之存念には輝宗父子威勢強被_レ罷成_レ候得ば終には難_レ叶候得共乍_レ去代々管領仕候領地を故なく輝宗へ渡し其上家來に可_レ被_レ成段無念至極の由と齒がみを常々被_レ仕内室は輝宗へ由緒有_レ之に付和談を入候て義繼輝宗父子之御手に附出仕御禮可_レ申旨内々より被_レ入_レ申候へども正宗承引無_レ之に付内室より様々輝宗へ被_レ入_レ申候て對面被_レ仕候儀相調申候義繼態と騎馬をも不_レ召手廻計にて小濱へ被_レ達候へば輝宗別て悦色々馳走有_レ之數盃を盡し其上に一禮御座候て玄關迄被_レ罷出_レ候へば輝宗も見送り椽迄御出候處を一禮有_レ之ふりをして供に參候鹿子田和泉と申者と目くばせして則輝宗の胸ぐらを取小脇指を抜つきかけ被_レ申候鹿子田も同時に後より組付椽より庭へ引下しめた引めた押に引出し申候輝宗近習外様の侍共あはてふためきたる分にて取留可_レ申手たでも無_レ之跡より追々馳付參候て鈴石村の内栗巢と申所迄兩人にて引付申候其内正宗は近所へ鷹野に御出候此事急に聞附走附被_レ申候へ共正宗もともかふも手指可_レ仕様無_レ之あきればて被_レ申候二本松は大熊川と申川一つ

を隔候て早二本松へも此儀相知人數を出し申を正
宗見届きびしく追懸輝宗共に打と呼懸被_レ申候へ
ば家來衆流石手出し仕者無_レ之候され共事急に成
候故義繼つきかけ被_レ申候小脇指にて輝宗を指殺
其刀にて自害被_レ仕候家老下々迄不_レ殘主之供仕候
と呼懸面々自害仕候正宗則二本松へ直に押寄被_レ
申候へ共新城彈正と申家來城を堅固に持申に付
政宗もあきれ候て鹽松へ引取被_レ申候事

元和八年極月五日鹽松小濱村 藤右衛門 源左
衛門 和泉

二本松之城主様子御尋に付覺申候通申上候

二本松義繼は伊達輝宗父子と初は入魂其上内室は
輝宗へ由緒有_レ之付輝宗相馬へ出陣の時二本松よ
り馬上五十騎鐵砲百挺加勢遣し被_レ申候段々伊達
家猛勢に被_レ罷成隣草の小城持は不_レ及_レ申二千三
千の大將分の衆も事故なく責落し被_レ申皆々伊達
の家來に成行申候依_レ之二本松鹽松へも取懸り可
被_レ申機指顯れ申に付互の爲と申合大内備前娘義
繼之惣領義總へ取合内外共に親く成候事

一伊達父子鹽松へ出馬被_レ申候は天正十二年乙酉九

月二十四日當年迄三十八年以前鹽松落城仕候其に
付伊達家と二本松手切仕候事

一義繼死去に候へ共家老新城新庵と申者明る七月十
五日迄義繼の妻子を守立兵糧弓鐵砲も盡果候へ共
妻子達無事に會津へ引越申候事

二本松籠城は酉十月八日より明る戌七月十五日迄
に御座候事

一右籠城の内合戰之様子は酉十一月十五日に正宗多
勢二本松へ被_レ打懸責被_レ申候儀不_レ被_レ成鹽松へ
引取被_レ申候事

一明る戌七月十一日に二本松年寄の内箕輪玄蕃、遊
佐源左衛門、本宮城代、遊佐丹波、氏家新兵衛此四
人逆心仕右四人正宗よりだまされ箕輪館と申城の
續坤の出丸へ片倉小十郎引入只今の塗屋町杉田町
へ火を懸申候折節南風吹城中侍屋敷へ吹附申候城
中より乗出箕輪館へ掛入小十郎手の者大勢谷へ追
落首十計取城中の者は手も負不_レ申義繼の妻子迄
引まとひ會津へ移申候事

二本松城代に正宗より成實と申侍置被_レ申候上御
代に蒲生飛驒守氏郷より蒲生源左衛門其後町野左

近城を預申候

一 上杉景勝會津御領地の城代は失念申候

一 當御代に蒲生秀行會津御拜領其節二本松梅ヶ原彌左衛門^(大膳)_(事)門屋助左衛門只今は本山豊前河内にて御座候事

元和八年二本松之老人 大内体庵^{七十} 神主主馬^{六十}

本宮の城の様子申上候

一 本宮は二本松の代々枝城にて城代を置被_レ申候義繼の代に遊佐丹波、鹿子田和泉、氏家新兵衛、堀江式部右四人にて持申候義繼死去の節鹿子田は供仕候殘三人は城を明二本松へつどひ申候三人共に心替仕政宗へ附二本松を禿し申候事

一 政宗より羽田右京と申者城代に被_二申付_一候事

一天正十五年三月十八日安積仙道不_レ殘會津の手に附正宗と本宮觀音堂より仁井田人取橋邊にて大合戦御座候事

一天正二十年に蒲生氏郷領地の時分本宮の城を割申候事

安積郡高倉之城主の事^{高倉の上より仙臺方は安達郡也川より江戸の方は安積郡也}

一 高倉の城主は畑山近江と申候天正十八年迄罷在同

年八月氏郷拜領被_レ申候時近江は逃て正宗へ參候事

一 四十一年已前田村清顯高倉の城中迄押寄被_レ申候田村勢を大熊川へ押込候て首五十餘討取

一 政宗會津へ取懸蘆名義廣と合戦有_レ之所は摺上と申候高倉近江政宗へ軍の指圖を申候故冒首七百餘正宗方へ討取大利を得被_レ申候事

安積郡日和田の城主様子御尋に付申上候事

一 日和田の城主は伊藤左衛門と申候會津氏郷拜領之時迄持來り其後城主無_二御座_一候事

一 安積の沼へいけにへをそなへ申候由語傳へ御座候へ共近年は左様之儀無_二御座_一候爲_レ何の仔細と申儀も慥に存不_レ申候

安積郡郡山の城の事

一 郡山城主は郡山太郎右衛門と申候政宗之手に附天正十六年六月より七月末迄佐竹義重、同義宣、會津義廣、白川義近、石川照光岩城岩瀬より多人數にて郡山を取巻申候政宗後卷として福原と申所に陣を取被_レ申候其間田舎道五里御座候七月四日に久保田と申所にて双方出合一戰御座候正宗方へ首二百

餘取被_レ申候岩城より和談入候て無事に被_レ成候事

安積郡片平の城主の事

一片平の城主は伊藤大和と申候會津方にて御座候田村と會津一戰の時田村へ被_二切取_一申候大内備前領内に被_レ成大内氏勘右衛門と申者城を預り申候其後天正十九年に會津氏鄉拜領被_レ申候事

一上伊豆島屋敷主伊藤平左衛門と申候片平村の枝郷にて指出たる事も無_二御座_一候事

一阿子が島の城主は伊藤勝右衛門と申候天正十年會津と田村一戰之刻阿子が島は田村の下にて田村衆打負阿子が島へ籠城仕其後會津へ諛言申會津の手下に被_レ成候事

一高出の城主は高出太郎左衛門と申候政宗手に附不_レ申政宗會津へ働の時分先高出へ押掛被_レ申候太郎左衛門朝より晝迄働終に不_レ叶妻子其外下人共二十餘人指殺し自害仕候正宗の家來牛越内膳と申者太郎左衛門が首を取申候事 高出太郎左衛門盛胤

會津猪苗代の城主の事

一蘆名盛氏は會津の城主猪苗代には盛國と申者城代

に罷有天正六年盛國五十歳にて惣領盛種に家督を讓城の北に隱居仕候然處に盛種不行儀者故後悔仕盛種會津へ出仕の折節留主居の者十二人打殺城を取返し申に付盛種無念貧金曲と申城に盛國の家來指置候是を打殺し其屋敷に城をかまへ罷在候父盛國下人共を遣し金曲へ押寄候處を盛種出向右の者共と一戰仕首數二十計打取其より猪苗代へ取懸申候へ共方々より懸入て追返し申候付籠城仕候其後和談に被_レ成盛種は横川と申所へ退申候其時若松の城主は蘆名義廣と申候後盛國義廣へ不足有_レ之天正十年六月朔日伊達政宗を猪苗代へ引込申候に付會津盛重出馬摺上と申所に磐臺山と申大山御座候其麓の野原におゐて一戰有_レ之同六月十六日盛重敗北夫より蘆名の家滅亡仕候盛重は佐竹義重の次男にて御座候盛隆の養子にて御座候正宗會津へ乘込被_レ申候故盛重は白川へ遁去夫より佐竹義宣を頼江戸崎と申所に隱居申候天正十九年蒲生飛騨守氏鄉會津拜領猪苗代には町野左近坂代被_二申付_一其後稻田數馬と申者城代仕候其後城を割申稻田助兵衛と申者代官仕候事

一慶長三年上杉景勝會津拜領の時今井源左衛門と申者罷在候

一同六年關十兵衛と申者罷在候其後元和年中岡筑前と申者罷在候事

元和八年

會津城主御尋に付申上候事

一往古よりの城主高野王の六代の末佐原十郎義連と申候鎌倉殿より會津の城主に被_レ仰付義連の御子盛連と申候其御子光盛と申候て初て蘆名氏と改申候光盛の孫小山田に城地を御見立黒川館と申候其裔孫盛政至徳元年に小山田の城築鶴の城と申候今の若松の城是也只今若松と申は蒲生飛騨守殿御改被_レ成候由に御座候鶴の城と申縁語に付若松と申由に御座候盛政の弟を猪苗代の城主として猪苗代を龜の城と申候盛政より七代目の城主を盛隆と申候其御子蘆名修理大夫盛氏と申候盛氏の武威隣郷近郡に高くふるひ皆々其下風に立申候初て安積仙道安達郡も手に入申候處老衰に付御子盛興に家督を讓岩崎と申處に隱居被_レ申候止々齋と申候又竹岩とも申候御子盛興十九歳にて早世に候世繼は

無_二御座_一候其比隣郷互に取合有_レ之候付須賀川の城主二階堂遠江守盛茂之子を人質に會津へ御取置候を盛氏御寵愛實子同然に有_レ之付幸に被_レ遊世繼に被_レ成度由所望相叶御養子に被_レ成則盛隆と申候盛氏天正八年六月十七日死去に付盛隆會津殿に仰立申候此盛隆器量人に勝隣郡の城持衆の人共不_レ存程之武勇にて伊達政宗共數度大合戰有_レ之候へ共一度もおくれを取不_レ被_レ申候其比取汰には餘武勇過申候間あふなきと申候天正九年に三浦助に任伊達晴宗の聲に被_レ成候天正十二年九月男子誕生龜王丸殿と申候其年の十月六日に大場三左衛門と申者盛隆を殺逆申候へ共早速三左衛門も打殺され申候盛隆二十四歳の時に御座候龜王丸世繼に守立申候處天正十四年十一月二十一日早世被_レ申候伊達家より御子立の内器量の仁世繼に可_レ被_レ遣と被_レ申候へ共家老共承引無_レ之佐竹義重之御子須賀川殿の親類故養子に相極會津へ移し盛重と申候盛隆の娘を取合賀君にて御座候此盛重以の外の不器量にて中々一年と城主に被_レ成申程無_二御座_一候て押付正宗會津へ乗込被_レ申候猪苗代盛國返忠に

て猪苗代城へ政宗を引込天正十七年六月十一日盛重若松を出馬有之政宗に出向磐梯山の麓摺上申所にて一戦有之盛重敗軍會津へ引返し被_レ申候處會津の留主居共心替仕新橋と申猪苗代水海の落谷へ大川の橋を引申候付引立たる大軍政宗に追詰られ大半新橋川へ飛込死申候者何千人と申數もまれなし盛重は山傳へに白川迄落行隠居被_レ申候夫より兄の佐竹義宣を頼江戸崎と申所に閉居被_レ仕候此時より會津蘆名の家滅亡仕候高野王より盛氏迄二十三代盛氏實子無_レ之他家に讓被_レ申候へ共其家は相續有_レ之候處に天運と相見え申候其より伊達政宗會津へ移居被_レ申候處大閣様御いせひ強小田原も落城關白様奥州へ御下向候由相聞え申候付會津、二本松、須賀川、田村右城共明候て伊達へ御引込候天正十九年蒲生氏郷會津、白川、須賀川、岩瀬、棚倉、二本松、田村、米澤、伊達迄御拜領候處其後宇都宮へ御代上杉景勝會津へ御移其後又蒲生秀行御知行に御座候事

元和八年十月日

仙道會津元和八年老人覺書終

東奧白河往昔之記

白川關山觀音

奈良帝聖武皇帝之勅願所也行基菩薩開基也云々成就山滿願寺光明院本尊閻浮檀金御丈一寸六分正觀音皇帝持尊之祕佛也右第一光明后宮爲御追善次田舍萬民末世結緣之慈悲依思召惟時天平勝寶七年七月九日此山安置也入佛供養之導師婆羅門良辨二僧正也從天平勝寶七年延寶六年迄曆數都向九百廿五年星霜雖遙押移不絕法水遠近國之貴賤奉尊敬靈山也從唐土日本渡夢觀集白川關高玉繩下書來我朝上代名譽有人皆詩歌連此關停心侍也

白川城之鎮守

鹿島大明神奉尋本地十一面觀音之垂跡也因之大慈大悲之和光此阿武隈川水移下化衆生之利益甚多上古之地景社內方二丁餘其中間本社拜殿樓門回廊鐘樓鳥居釋迦堂彌勒堂神護持堂一切經藏三重塔內阿彌陀

奉安置森廻伊勢熊野賀茂春日等諸神之宮有之別當最勝寺是往古此地洛陽學京北白川之最勝寺爰移山新古今集之歌前書最勝寺之櫻鞠之掛杯書歌藤原雅經卿馴々テ見シハ名殘ノ春ソトモナト白川ノ花ノ下陰依學都最明寺如是號云々最勝寺相續鳥居左右六ヶ所社僧有之六供之房云代々從城主正五九月年々三度者於本城大般若御祈禱有之最勝寺并六供房勤之會津宰相蒲生忠郷卿時代迄町長門勤之其後丹羽長重此行法絶相續神主物申其外社人馬場之雙方往祭禮之式勤如是雖盛靈地往昔亂世之頃四民共失居所依之六供跡絶今土民之栖成不淨物不恐瑞籬之內奉汗事悲世衰微連堂塔社邊近年及零落故當社緣起斷絶而所謂無知者今取近爲證歌仙之中源順歌ツラクトモワスレス戀シ鹿島ナル阿武隈川ノ逢瀬アリヤト此歌玉葉集ノ戀之部入彼源順者村上天皇之御宇天曆五年後撰集撰者之中也自天曆五年延寶六年年迄曆數凡七百廿八年也

轉寢之森

本社神鳥明神其地從鹿島之社當東半町相隔舊地

也古歌 陸奥ノ轉寢ノ森ノ橋絶テ稻負^セ鳥モ通ハサ
リケリ」此歌八雲御集入也此宮地上右方一町餘古木
枝垂雖^ニ舊地^一亂世之頃民衰神崇事絶田夫之族却宮地
賣其地悉成^ニ田畑^一此官初鹿島宮同時奉^ニ遷宮^一也古八
幡太郎源義家奥州御下向之時此森之中暫時御休息有
之因^レ是轉寢森傳云也

白川往昔傳

從^ニ白川法皇之御宇勅^一陸奥白川者雖^ニ其地狹^一地景
曠^{ハカリシ}山之姿川之流能似^ニ洛陽^一因^レ是可^ト學^レ都應^レ勅也
爲^ニ其證事^一今殘^ニ城下小路々々^一所謂鹿島小路寺小
路北小路橫小路久保小路道場小路如^レ是之例都之外
無^レ之也

白川之五山禪林

正覺寺城中有^レ之云傳今寺絶不^レ明 太白山皇德寺是
後白河法皇勅願所也其地杜鵑山之北地形東西二丁餘
雖^ニ伽藍地^一慶長年中令^ニ炎燒^一其後城南大工町移纔寺
跡殘 龍興寺其地今久松寺名而已殘寺退轉 寶陀山
大統寺其地城外東北是中頃久松寺之地住寛永年中寺

地替今馬町少地住 正雲寺 金勝寺城外西北古今同
之地洛陽東福寺聖一園師之嗣法眠叟和尚開基云傳聖
之一尊像墨跡有^レ今古伽藍之地云其後破壞成^ニ田畑土
民之栖^一也今僅寺跡殘

八龍神宮

是鹿島宮開基同時代也古城主御出陣之時此神詣志願
被^レ成必御利運有^レ之願狀於^ニ今別當所持也其外國中
旱魃之年代々自^ニ城主^一別當仰下而於^ニ社内^一請^レ雨之
法祈禱有^レ之別當雨寶山龍藏寺城下年貢町也

白川本城往昔之記

鹿島宮之地當^ニ朱雀^一山上是居城也南方谷之間大沼有
常水滿之爲^ニ要害^一家中士之居所町人之家屋等此邊有
之也 北之麓請^ニ阿武隈之流^一川究水關深淵成^ニ以^一舟
筏^一城爲^ニ通西之方爲^一追手^一東^一搦手^一定今搦村云是也北
之方山之形巖高重苔滑禽獸翼留步蹢如何泥人馬之可
及所不^レ有西米村東大村船田村續奥州關東往來之道
筋鹿島馬場崎之町通根田村新荳村出也南之方者鹿
島之前直三十三間堂之方懸八龍神森之前通旗宿村白

坂村^ニ出^ル白河者陸奥五十四郡之依^ニ關門^一上代源賴朝卿一家并北條家至迄當地奥州之爲^ニ政諸事掟^一從^ニ白川城主^一計^レ之也當時本城者小峯城結城上野入道以來爲^ニ新城^一此故入道一男親朝末孫義親迄十代號^ニ小峯^一也

三十三間堂

櫻町之南堂內觀音之像數多奉^ニ安置^一也是當地都學給時依^ニ法皇之勅命^一建立有^レ之元和年中迄佛像堂之形殘有^レ之元和末破壞今名而已殘

二所關明神

白坂村一社旗宿村一社今號^ニ堺之明神^一是則二所關明神兩社也往昔從^ニ奥州^一通旅人白川城下之禪林關川寺關錢納也其謂今以殘東奥皆調錢用^レ之從白川城下百文之中四錢拔關錢此寺納故當地京都迄目拔錢用東奥今以調錢也^ニ直之云^一二所明神一社者下野國一社者陸奥國也故^ニ兩社共^一關^ノ明神ト云野奥ノ國堺少峠有^リ

旗宿村

爲^ニ舊地^一往昔源義經陸奥勢引連關東御上之時出羽佐

藤莊司此關迄彼公奉^レ送佐藤繼信忠信兄弟義經爲^ニ供奉^一別淚琳之地也此時武者旗武具依^ニ改所^一旗宿云傳也野田土器旗宿總兵御前而御酒給其土器此野田於今有^レ之也母衣楓旗宿道少隔追分云所義經暫時御休息之間緋掛給依^レ之楓云高三丈餘下無^レ枝梢一丈程如^ニ母衣丸^一紅葉之節古今之興地也當國之爲^ニ名木^一也

皮籠村

從^ニ白川^一白坂之往還舊地有^ニ證據^一白坂白川之間皮籠村云是往昔吉次吉内吉六云兄弟三人數多財寶以奥州下盜賊聞^レ之大勢集都商人害雜物奪依^レ之此所皮籠宿號右兄弟三人石塔今皮籠村有^レ之也

大村山王權現

往昔搦山本城之時彼城當^ニ良方^一東叡山之權現奉遷宮別當東叡山山王寺號則本城鎮護之山也其地今久田野村本沼村之通路山王山是也山王寺今馬町住

白川七天神

小峰崎天神宮是小峯城鎮護之神也其地城東之山崎也

號ニ蛇之尾天神ニ時之城主尊崇之神也丹羽長重小峯城郭普請之砌寛永年中別當常法寺奉遷宮田町之天神也九葉楓彼小峯崎有之上古之名木也天神宮天神町有之別當寶藏寺天神宮道場町有之別當小峯寺天神宮寺小路有之此外三社者其地不分明城外越堀一社在之

白川七藥師

米山藥師年貢町雨寶山龍藏寺向寺藥師向寺町法雨山甘露寺小峯藥師道場町白河山小峯寺此外四佛者其地不分明若城外關山鶴生双石有之歟

羅漢山

其地鹿島森當ニ西北ニ山之石壁東西三丁餘前阿武隈川之流後古木枝茂靈地也是都學給時應法皇之勅五百羅漢像爲安置天正年中迄彼像殘在其後修理無便像堂破壞無其形於今羅漢山唱也

文殊山

其地杜鵑山東往昔彼山景巖高重前谷津多川之水流木

木堂包興最勝他尊卑共崇敬靈地也堂者亂世以來破却寛永年中丹羽長重小峯城石壁之爲用此山之石悉切取靈地失景於今文殊山唱

杜鵑山

其地久松寺之東也山姿北者岩如屏風岸立下河流青漲深淵物冷藤花木々梢傳落如瀧波躑躅紅水照則二花之名山也杜鵑先此山來初音告也近代此山草木悉伐取無景地成也於今杜鵑山唱讀人不知初音待人ノ情ヤ杜鵑山ニ我名ヲ殘シ置ラン

櫻岡村

鹿島森北七町程隔舊地也往古東奥海道也此所古櫻之依名所往來之旅人此所詞殘古歌陸奥ノ櫻ノ岡ノ櫻花散櫻アレハサク櫻アリ此古歌取宗祇法師暮春發句春ヨ待テタル櫻アレハ遅櫻

人不忘山

其地田島狩宿兩村之東新地山之事也陸奥ノ阿武隈川ノ岸ニコソ人ワスレスノ山ハ有ケレ此歌八雲御

集ニ入讀人不レ知

鹿島萬句興行

往古文明十三年三月十五日於鹿島神前一日萬句之連歌興行有レ之其懷紙亂世以來今有發句席之次第宮中納白川城主結城上野入道養男小峯親朝末孫小峯彈正少弼政朝興行也此萬句之内何之席有難句出來皆人附兼其時女性一人忽然出席其句附侍其儘本社之後行見姿不レ見失行則明神之御句也云々其連歌前句 月日ノ下ニ獨コソ住 女性附句 ヤル文ノ奥ニ我名ヲ書コメテ 右萬句興行之事都其聞有宗祇法師此地地下向也然共遲參會終宗祇三十三間堂之前行給其時鹿島方女性一人行向連歌早滿之由云則宗祇此所歸給此

白川城主之次第

太田行陸

天兒屋根二十二世裔孫皇極天智二代之臣從大織冠十四代號太田別治世所知不分明父者鎮守府將軍秋田城介賴行也

太田宗行

行陸長男散位從五位下治世所知不分明

太田行政

宗行男號太田次郎治世等不分明

太田行光

行政男太田四郎號不分明

小山政光

行光男下野大塚號小山不分明

小山朝政

政光長男小山小四郎所領等不分明

結城朝光

右大將賴朝朝男號結城七郎後任上野介朝光母八田武者所宗綱女所領等不分明

所今宗祇戻云傳也其女手綿持宗祇見其綿賣問給其時女歌詠是則明神御歌也云々阿武隈ノ川瀬ニスメル鮎ニコソウルカト云ヘルワタハ有ケレ宗祇法師此歌聞東奥之卑賤女今樣歌奇妙成被レ感都登給云々

鹿島大神宮祭禮

白川總社鹿島大明神祭禮往古城下之町内御旅屋作從七月六日八日迄二夜三日於御旅屋神樂御祈禱有レ之同八日本社鹿島還御也然所亂世之頃其例絕社内勤レ之其後天下泰平四海治依レ之氏子舊例之通城主奉願明曆元年如舊例神事執行也其後萬治四年社内依レ令破損爲修理助力城下之御幸相止也

結城朝廣

朝光長男大藏權少輔所領等不分明

結城廣綱

朝廣男號結城七郎不分明

白河祐廣

廣綱男白河彌七左衛門尉號不分明

結城宗廣

祐廣男結城上野入道於伊勢逝去法名倉山道忠所領等不分明

小峯親朝

上野入道宗廣男修理大夫號小峯法名東山所領不分明

小峯顯朝

親朝男號大體大夫法名大半文書院不分明

小峯滿朝

顯朝男號左衛門尉法名長川道久不分明

小峯氏朝

滿朝男號彈正少弼法名義秀不分明

小峯直朝

氏朝男號修理大夫法名關川院海藏湖公不分明

小峯政朝

直朝男號彈正少弼法名龜山道綱白川於鹿島一日萬句連歌發起不分明

小峯顯賴

政朝男號左京亮法名長漢道照不分明

小峯義綱

顯賴男左衛門佐尉法名門舟院治世所領不分明也

小峯晴綱

義綱男分限等不分明

小峯義親

晴綱男號顯七郎太閤秀吉公奥州御出馬白川出城伊達陸奥守政宗家中二居住

蒲生氏鄉

藤原秀鄉末孫天正十八歲會津若松城入部白川同領白川城代氏鄉彈同旗下關長門守文祿四年未二月七日氏鄉逝去出入六ヶ年

蒲生秀行

氏鄉長男文祿四年七月十三日相續同戌年野州宇都宮へ所替出入四年其内白川城代關長門守

上杉景勝

慶長三戌年二月二十四日爲會津若松白川同領白川城氏幸川越前平林藏人同五年羽州米澤へ所替出入四年

蒲生秀行

慶長六丑年九月廿七日會津白川城再宇都宮ヨリ歸賜同十七年五月十四日逝去白川城代町左近町長門

松平忠郷

秀行男下野守慶長十七年相續寬永四卯年正月四日逝去號見樹院年數十六年白川城代町長門

丹羽長重

五郎左衛門尉號加賀宰相寬永四卯五月爲白川城主入部同六巳年秀忠公依三上意白川城郭石壁水堀以下企圖謀同九申年春出來同十一戌年三月四日於白川城逝去號大隣寺

丹羽光重

長重男左京大夫寬永十一戌年家督同二十未年同國二本松へ所替

松平忠次

榊原武部大輔慶政ヨリ三代目松平式部大輔正保元申年八月當城入部慶安二丑年八月擢州姫路ト所替出入七年

本多忠義

平八郎忠勝ヨリ三代目能登守慶安二丑年八月當城入部出入十四年寬文二寅年隱居延寶四辰年卒去法號大信院

本多忠平

忠義男號下野守寬文二寅年相續二十年過延寶九酉年九月野州宇津宮所替今年天和ト改元

松平忠弘下野守延寶九酉年九月廿八日當城入部十二年過元祿五申年十月羽州山形へ所替

松平直矩古大和守直基長男元祿五年入部同八亥年四月十五日卒去法號天祐院

松平基知直矩男和泉守相續後改三和大守

松平義知主殿頭知清男大和守改寬保元年播州姫路所替

松平定賢越中守寬保元四年越後自高田當城主

松平定邦定賢男河內守後越中守

松平定信實田安黃門宗武卿三男上總介後越中守

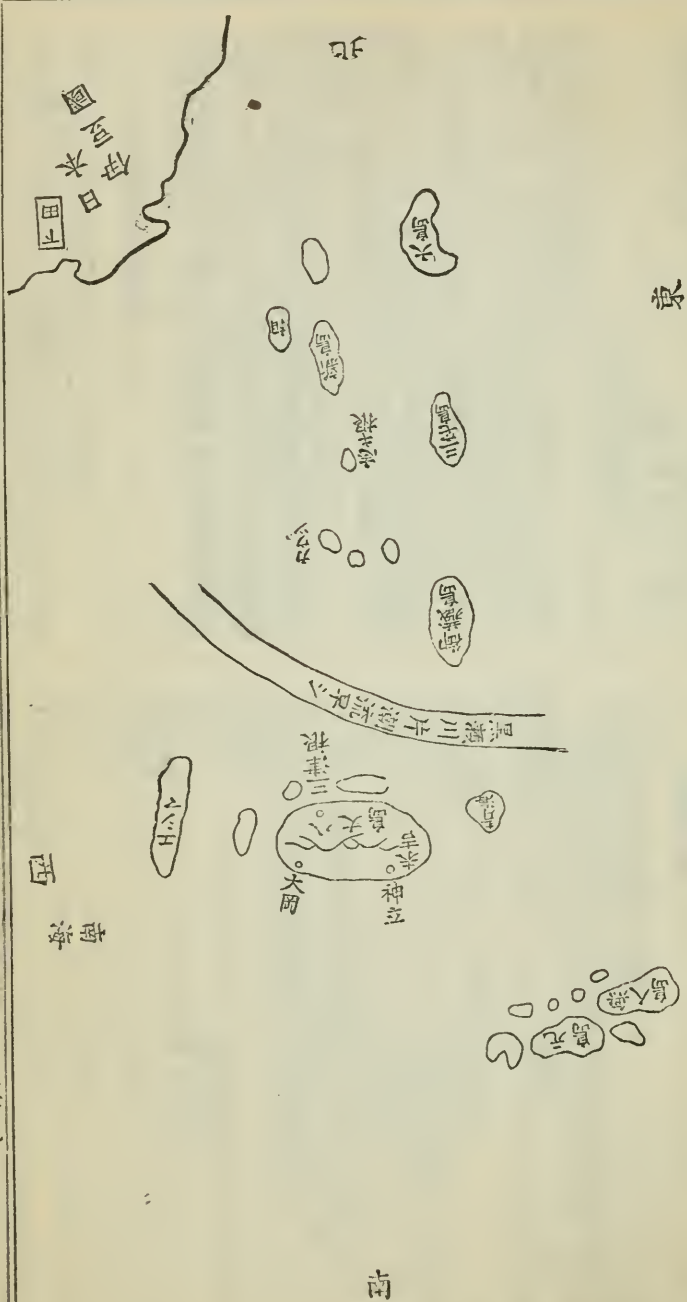
東奥白河往昔之記終

延寶三乙卯歲

辰巳無人島訴狀并口上留書

小笠原民部

御公儀唐遣御船八丈島辰巳無人島エ被レ爲レ遣聞四月五日伊豆國下田
ヲ出船同七日八丈エ著九日ニ八丈出船日數二十一日ニテ島エ著三十
七日迄留家ニ見分ニ六月五日ニ島ヲ出船日數十日ニテ下田エ歸船仕候



辰巳無人島訴狀并口上留書

下田より無人島迄海路三百五拾里程右之島御沙汰に付言上之訴狀并口上之覺書

奉願御訴訟之事

一此度唐造御船辰巳無人島へ被_レ爲_レ遣之處逐見分言上依_レ之世上之諸人日本御重寶不_レ過_レ之重而御船被_レ爲_レ遣御取立も於_レ被_レ遊者罷越度様申習候此島某共譜代之古主小笠原民部大輔文祿貳年七月二十六日以_ニ權現様御證文_一島を乗取島之様體以_ニ繪圖書付_一奉_ニ言上_一置候右之由緒も島の様子能承り傳へ罷有候間家來共差遣し候而御取立之御役相勤候様に被_レ爲_ニ仰付_一被_レ下候者大勢家來之者助にも罷成候様奉_レ願候島之委細於_ニ御尋_一者上に可_ニ申上_一候言上誠恐仍而如_レ件

小笠原民部家來

渡邊金太夫

延寶三乙卯年八月二日

三田四郎左衛門

長野市左衛門

御奉行所様

無人島土産

一桑自然に蠶あり

一榎

一白檀

一降眞香

一椰子

一檳榔子

一柿に似たるものあり味至て香美腹中煩ふものにこれを取て服さしむれば瘧漢名和名ともに知れず

一石藥

一唐烏數品

一柿色マ、

一魚類數品

一龜

一鰐魚柄鮫にも可なり

其外珍物色々可_レ有_ニ御座_一様申罷候得共名之不_ニ相知_一二分は書付不_レ仕候

口上之覺

口上之覺

右之趣久世大和守様え捧_ニ書付_一候處荒増被_レ爲_レ聞其後右之者共或日御評定所に可_ニ罷出_一土屋但馬守殿御用番様子御尋可_レ被_レ成と被_ニ仰付_一罷出候得

一唐苧

一山椒

一スワウ

一カチマン

一藥草數品

一唐烏數品

一白烏并大烏

一貝類數品

一鯨

一菊銘石

共様子御尋古來之分者申上候處權現様御證文も御座候得者民部一分入用を以取立見可申哉と御尋御座候得共過分の物も入可申間早速は自力に難及用意了簡仕重而御請可申上候若又從御公儀拜借被仰付余方え被爲仰付候者古主者不_レ及_レ申某式之先祖之者迄東照宮様御世數度御忠義仕御感狀奉_ニ頂戴_ニ罷有候得共不仕合にて年月を送り兼罷有候之間仰願は幸空地の島に御座候得者餘多之家來共後世之助にも被_レ成候様に余方え被_ニ仰付_ニ候者此方え奉_レ願度之旨申上候得者其段者尤に被_ニ思召_ニ候得共兎角公儀より入用者被_レ下間舖儀被_ニ仰渡_ニ候

一此度土屋但馬守殿え參上仕家來共を御召可_レ被_レ爲_レ聞先以不_レ淺奉_レ存候御禮申上候得者但馬守殿御直に御尋被_レ成候者無人島古民部見立候由家來共申上候通證據有_レ之候哉と御尋に付いかにも彼島に權現様御上意に而杭印立置其上御證文并に秀吉公御證文取添御座候とて則入_ニ御一覽_ニ様子申上候彼島御重寶可_下爲_ニ地空_ニ差置_上殘念に奉_レ存候と以_ニ繪圖書付_ニ祖父より申傳置候結構成此島只今迄空

罷在候唐國の内か又者高波打打越人家難_レ仕故歟と世上申習候得共先祖見分申傳候に付苦奉_レ存候に八丈島も百貳拾里餘海中にて御座候得共終に打越申程之波も無_ニ御座_ニ候其外三宅御藏何れも土地餘り高山も無_ニ御座_ニ候得共夫さへ別條無_ニ御座_ニ候増而此無人島者高き山御座候得者打越申事も前代より無_ニ御座_ニ候様相見在來草木細直に成多く御座候成程細直に成多く御座候成程細直に生立申候得者波之程も差而不_レ仕候様奉_レ存候

一島取立可_レ申所如何様に可_レ仕哉と御尋被_レ成候其段は古民部より此方色々簡仕置候併某終に彼島一見不_レ仕候得者若_レ今御請々存寄申上候而も無_ニ覺束_ニ様には奉_レ存候然共荒増可_ニ申上_ニ候一取立可_レ申様唐造御船拜借仕候者添船五六艘仕立貳百人計爲_レ乘渡海島に置先唐木唐蘆魚鳥藥種石藥桑檳榔子等船に而御當地京大坂え廻し金銀にも拂候得者船人之入用も賄可_レ仕候大方は餘分一兩年之間は銀子三十貫目程づゝも可_レ有_ニ御座_ニ候五三年も相立候内田畑に相成候處者取立人居も多く有付候者御知行所も出來可_レ仕候然時は段々に

奉_レ存御下知御物成も上納御金も上納仕様可_レ被_レ成かと奉_レ存候

一但馬守殿萬一高波坏可_レ致哉を見定候内人居候者無_ニ心元_一思召候と御尋被_レ成候彼島八丈三倉三宅島より高き所多く御座候間貳拾箇年計は人居仕候共見居中内は高き地に小屋掛仕年月風波を見合可_レ申候勿論小船共島に引付置浪高之儀御座候共取乗不_レ及_ニ難儀_一様可_レ仕候是又高浪用心に候常々高き地形を求め食物納取藏立置兼而相圖申合置大勢人寄所拵置貳拾箇年無_ニ忌様_一心得仕候は末々は別條なき様に可_ニ相成_一奉_レ存候

一島取立御忠節には如何可_レ仕哉と御尋に付貳拾箇年相立候内金子四五千兩も指上候様に毎年二三百兩程づゝ坏は上納可_レ仕かと奉_レ存候被_ニ仰付_一候様により末々其餘も上納可_ニ罷成_一候被_レ爲故公儀御不便若困窮は流人等御座候者船中公儀御物入無_ニ御座_一候様送届地下人は其身相應に走り廻り爲_レ致渡世送申儀者島に而差斗朝夕暮候様可_レ爲_レ仕候船數餘多渡し兼人をも多く遣し不_レ申内は御金坏過分上納仕兼可_レ申候得ば外分は成程上納可_ニ相成_一

と奉_レ存候

一拜借奉_レ願度與_ニ最前家來共_一申候其後用意了簡可_レ仕と申候は金銅調申儀に候はん何程調候得者能と存候哉と被_レ仰候拙者申上候者急々取立候は、金壹萬兩も入可_レ申候又連々取立申様には金子二參千兩計も相調候者其上の米坏は一家之者共に以_ニ御威光_一此度如_レ斯御役被_ニ仰付_一候由申上候船中飯米少計坏は調可_レ申候左候得者其一年は用意は相達し候其次之年より島之物取寄拂ける其金銀を以壹年増に取立申様可_レ仕と申上候

一但馬守殿彼地南よりにて土地能候半人參伽羅珊瑚樹又は金山坏は有_レ之様には不_ニ申傳_一候哉と被_レ仰候彼地色々御重寶成物多く出生申様には申置候得共兎角彼地に壹兩年も遣候而見届不_レ申内は難_ニ申上_一候權現様御上意には八丈は以前源爲朝見出し其以後至_ニ于今_一日本之重寶と成る此度は又民部八丈南島見出し是又以後我朝之重寶多く第一以_ニ御威光_一至_ニ御世_一一統_ニ御開起及_ニ末代_一被_レ爲_レ殘御名御大悅不_レ斜依_レ之家康公幕下小笠原島と可_ニ名付_一御賞美奉_レ蒙_ニ御威_一候仍而彼島に貳_レ所の概印

立置候所如_レ斯

日本國天照皇太神宮地島長源家康公幕下小笠原四位少將民部大輔源貞賴朝臣

同

日本國天照皇太神宮地島長豐蘆原將軍幕下小笠原民部大輔源貞賴朝臣

島之内兩所に如_レ是二本置候由申傳候

一但馬守殿被_レ仰候は由緒如_レ斯其上數通之御證文奉_ニ拜見趣にては如何と仕年來空何方に罷有候哉と被_レ仰候某父子上州館林に依一家の縁に蟄居父子共大坂御陣以後眼病剩耳も聞え不_レ申依_レ之姓名を隠し土民同前罷成自然一流之者共に參會仕候而も元來生れ付人を下風に不_レ立志一家にも未_ニ相知空年月を送り日々夜々及_ニ困窮既に老父難_レ及_ニ養育に付館林殿様一兩年奉_レ蒙_ニ御高恩老親養剩火難にあひ候砌も御金米材木等奉_ニ拜受殊奉_レ蒙_ニ御深恩其内老父病氣某も就_ニ病氣御斷立退申置于_レ今步行難_ニ仕症苦前後箇様之御返答申上候得共永々浪人之様尤被_ニ聞召分之旨御座候以上

小笠原島來由無人島と申候

小笠原宮内拜領地

延寶三年從_ニ公儀右之無人島へ御檢使船被_レ遣土産色々取來る此島先祖拜領島之由縁可_ニ申上候元祿十五年渡海船仕度に付奉_ニ願上候得共故有_レ之御免無_レ之候而打過享保七年之春當將軍様え先祖拜領島之由縁申上候て御老中戸田山城守様御月番にて願上候所當時御用繁多に付御吟味難_レ成候有職之家來於_レ有_レ之は可_ニ差上渡海之儀は差扣候様にと有_レ之無_ニ是非相默止候所去る六月彼島に唐木藥草并砂金魚鳥品々有_レ之由先年土產取來候節畫工に被_ニ仰付土產之品々御屏風一雙に極彩色に御書せ御城に于_レ今有_レ之候依_レ之段々御尋之御上意追日募り所により彼島之繪圖等差上御吟味之上從_ニ公儀見届之御役人被_ニ仰付既に出船に相究り候然る處宮内承_レ之俄に訴書差上先祖より家康公秀吉公の御證文頂戴の彼島拜領仕罷有候得共親如水并某二代渡海中絶仕候に付御上之御代替の度御願申上來既當御代にも去寅の春御願申上置候此度右島御見届の御用船被_レ遣候御儀に御座候はい先祖拜領之土地に御座候間御吟味之上私へ被

無人島之數

母島 橫拾里
長廿七里

弟島橫五里
長拾五里

妹島
長八里
橫三里

一孫島壹里之島五箇所

其外子島數々有之畧之

土產

一
鰭ハナ
魚イサ周シロ
鰭ハナ
魚イサ盧ロ
鰭ハナ
魚イサ師シ
鰭ハナ
魚イサ堅ケン
鰭ハナ
魚イサ留リウ
餘大
ありさ
三尺

一鮑 フナヒ 大さわたり
 壹尺四五寸
 生海鼠 ナマミ 大さ壹尺五六寸より
 貳尺餘までこれあり

一鵜
みち
なめ
ろ大さ四五尺計有^レ之まぐ
ゑびと云魚のことし

一海老エビ 大さ四五尺ばかり丸み壹尺五六寸より貳尺餘もあり

鯨クジラ
鯨サメ

一雜木 屋作船作に用べき木大分有之日本にて木

杭の木のやうなる木多く有_レ之松檜木榧木
 何れも多く有_レ之桑の木夥しくこれあり桑
 ばかりの島もこれある但幅二三尺の板に挽
 候ても望次第これあるよし

一桑寄生 澤山これあり

一山まゆ　これあり延寶三年には夏山に候得共山ま

けは織絲に成よし

一紫旦 烏木 鐵刀木 白檀

是等は四季共に取て不_レ苦よし

一 檳榔子

是は秋冬取春夏はいまた實のらず然れ共去年に實のり候分木の下に大分有_レ之ひろひ來候よし

一椰子

是は實二つに割片々に三四合計も入る大きなり
味甘く能果子なり油を取木の皮を綱に組^{ツナ}檜木綱
よりつよく尤細綱になる日本の眞芋のごとく木
は堀立柱に成何十年にても不^レ朽葉はひろく芭
蕉葉に似て家をふくに板よりつよく調法になる
唐土雲南と云處又天竺に有^レ之木也

一肉桂 耳草

此分は夏取て宜し

一大人參 蘇方木 砂糖

右甘蔗は黑白氷とも傳受これあり今薩州にて煎
じ來るは黒の糖なり

一はせの木

油を取蠟燭に用ゆ今の薩摩蠟と云これなり秋取
て宜し

一唐鳥 色々あり

片羽三間半の大鳥これあり日本の白鳥の
大なるものなり

一四足鳥

大さ鳩のごとし昔寒號鳥と云傳る鳥の類
なり本草に靈し鳥とあり延寶三年に取來

り見せ物にせしよし

一青やき 赤やき

是は海中にある生きものなり日本にて海松の如
し色よく枝さんご樹の如し

一岩山 眞砂 氷精

一金山 綠青 紺青

延寶三年渡海船被^レ遣候節谷川の流の淀にて砂
金を取來る其水上は金山と云傳ふ子細は訴書に
申上候大猷院様御代御上洛の御時酒井讃岐守殿
御吟味にて京都に於て心見の爲駿藤庄三郎に吹
見せ候様被^レ仰付一金砂二斗二升吹申候得者棹金^{サラクイ}
拾壹本になる金目三貫五百目有右之棹金七本は
御上え被^レ召上^二殘は被^レ下候

新羅三郎義光拾九代 小笠原宮内貞往系圖

長時

小笠原大膳大夫

文治年中に先祖遠光信州一國賜^レ之長時迄十八
代館相續之處武田晴信合戰に退國す其縁畧^レ之
長持 小笠原信濃守

父長時代越中信州三箇國之内を領し拾二萬石に
て越中富山に居住す父より前に早世

女

女

長隆

貞慶

當時

信濃守

備中守

其外御旗本にも數多有_レ之何れも貞慶子孫なり
長元_{信州飯山居城}
卒す

貞賴實は長元養子とす

信州離散之後兄弟上州に居住す永祿七年より三

河家康公依_レ御招_レ父子共奉_レ屬_レ御幕下_一數度軍

忠仕御感狀御神文等數通以_レ戴_レ之從_二信長公_一父

長元改先祖攝河泉三箇國にて拾貳萬石賜_レ之民

部貞賴は參州遠州播州にて四萬七千石被_レ下之

播州室に在城す天正十一年正月信濃守長元飯山

において卒去す民部貞賴親子之祿拾六萬七千石

相續之處秀吉公難題被_二仰掛_一拾六萬石御取上七

千石被_レ下_レ之貞賴述懷にて退此時家康公御宥之

御直筆御書被_二成下_一三州御引取頂崎にて被_二差

小笠原右馬亮

小笠原右近大輔

右近將監 喜三郎

山城守 佐渡守

松平市正 志摩守

小笠原信濃守

小笠原民部少輔

置_二預御扶持尤家中候之者共御存知之者は御家

え被_二召出_一御旗本被_二差加_一殘は一家共え可_レ遣

よし御下知其由緣畧_レ之其後家康公關白秀吉公

え折々御取持小笠原之嫡流たるによつて何とな

く五萬石に被_二召出_一歸_二攝州三田に住す天正拾

六年四月十四日に秀吉公聚樂之第え被_レ爲_レ請行

幸之節將軍家え行幸之先例を貞賴に御尋取一々

書付言上依_レ之小笠原嫡流壹人は子々孫々に迄

四品之少輔たるべき旨永々宣旨之趣被_二聞召_一行

幸之作法被_二差圖_一其由緣明白之旨秀吉公家康公

御連判之御證文被_二成下_一文祿二年高麗陳之節貞

賴軍檢使勤_レ之歸陳之節肥前於名古屋家康公仰

有て貞賴事小田原陳より數度の戰功雖_レ有_レ之未

本知に不_レ歸家從も其祿可_レ爲_二不足_一此度可_レ然

島國等有_レ之者手柄次第乘取可_レ申旨御證文被_二

成下_一則南海え出帆豆州八丈島之南三つ之島國

を見立順見する所に土産地廣くして人家なし開

國最上之靈地たるに依て土産等取來る家康公奉

訴夫より秀吉公え被_二仰達_一而秀吉公御直筆御

證文被_二成下_一是より度々渡海して土産を被來て

所領す家康公御上意に國島開發之由縁略之

重信

小笠原 左京

後服部右京と云大坂籠城討死服部采女と號す黃母衣二十人之内也

長直

小笠原民部少輔

父貞頼出奔之節兄弟幼年重信十八歳長直九歳なり太閤より父貞頼を御宥免有て可_レ召歸_レ旨度々奉書被_レ下候得共貞頼不_レ戻於_レ爰秀吉公兄弟御取立兄は伊賀服部右京無_レ續子一因て服部を可_レ繼_レとて三萬五千被_レ賜_レ之弟長直に一萬七千石賜て先祖播州室に二度居住す兄弟共に大坂奉仕慶長年中に成關東大坂爭戰之節關東之御方可_レ參之旨兄弟方え奉書度々なり依_レ之兄服部は籠城故弟は大坂を立退關東方え參る兄重信籠城之事家康公御立腹被_レ遊候得共其後御宥免故之品故播州室之一萬七千石御取上父貞頼に賜て島國取立所領にすべき旨御上意有_レ之二度家祿に離る尤有職之御用有_レ之節は勤之平生浪々之人也右由縁子細は略_レ之寛永年中迄島國え渡海土產を取來候得共故有て渡海相止延寶三年民部長直

上州館林にて卒す行年八十九歳

長則各居室

小笠原民部

老如六軒年

貞往

小笠原 宮内

右無人之島記者小笠原家之祕記也有_レ故石龍子法眼得_レ之則請需謄_レ寫之魯魚焉馬之誤不_レ少後見者正焉

寛政三辛申年十月十九日書_二不_レ二庵_一

中久留米侍醫野元隆萬休居士

辰巳無人島訴狀并口上留書終

蝦夷記

一抑モ蝦夷ガ島ハ日域ノ東ナリ今度寛文九己酉年蝦夷人日本松前ヨリ渡海ノ船ヲ海賊ス其濫觴ヲタヅヌルニ蝦夷國ハ異國ニ連續シテ島ノ内廣大也去ドモ日本ヘ近キ處ハ昔ヨリ商賣トシテ松前ノ郷ヘ隨フテ領主ヘ毎年貢物ヲ運送スカルガユヘニ松前ヨリ萬ノ掟法ヲ立テ今ニ至テ船ノ通用絶ザルナリ彼隨フ處ノ民首ニ鬼比志砂牟差印^{オニマシシムサシ}トテ兩長アリ如何成故ニヤ三四年已前ヨリ兩首挑ミ諍フテ終ニ一將ノ鬼比志^{オニマシ}ヲ討殺シ砂牟差印^{シムサシ}一將ト成テ威ヲ振ヒアマツサヘ寛文九年ノ夏ノ頃ヨリ松前通用ノ船ヲ賊殺シテ日本松前ノ國法ヲ背キ砂牟差印^{シムサシ}ガ弟ニ破呂ト云蝦夷岸利之ヶ洲ト云處ノ大將トシテ夷童一萬許ノ人數ヲアツメテ石狩ト云處ニ要害ヲ構ユ松前ヨリ此所ヘ陸程步行ハ八九日船ニテ六七日ノ行路ナリ彼地ノ要害一方ハ大山嶮岨ニシテ人ノ通路ヲ絶ツ一方ハ荒海ニテ二方ハ又大河ナリ此川ハ鯨

ノ上ル川ナレバ日本國中ニシテタトヘン川ナキ大河ナリ凡蝦夷ヘ討取船ノ數

一松前領主兵庫頭ヨリ大鷹ノ巢揚ニ遣ス某ガ船善共衛吉兵衛ト云頭兩人并ニ船頭梶子十五人ノリシ船ヲ討殺シテ雜物ヲ取ト云々

一右ノ處町人青地忠兵衛ト云者ヲ鯨取ニ遣ス船人數十七人ノル蝦夷地江登於ト云處ニテ討殺シ雜物ヲ取ル

一右領蠣崎藏人ガノリシ二艘人數二十九人蝦夷地補可羅^カト云處ニテコトノク賊殺ス

一松前餘米田九郎左衛門渡海ス久須賀^{スカ}ト云處ニテ賊害ス

一右領船ノリ人數十六人并ニ六ヶ處金堀鷹取ドモノ大船七艘ニノリシ人數九十餘人討取ル

一松前領眞池才八郎ト云者并ニ大澤清三郎ト申ス者ノ船二艘人數十七人ノル蝦夷上國ノ内志利邊^{シリヘ}良ト云處ニテ蝦夷ガタメニ殺サル

一同領下國內藏丞一艘人數十六人ノリ渡海右ノ處ニテ殺ス

一同領蠣崎采女ガノリシ一艘人數十五人志利夫利ト

云處ニテ殺ス

一松前領ヨリ出船十艘人數百五十餘入渡海イタセシ船行方シラズ是モ蝦夷地ニテ殺スト云以上五百餘人討失ストナリ

一同領主ノ一艘蝦夷ガタメニ荷物ヲ取ラル、船頭梶子ノ内十三人逃テ松前ヘ戻リシナリ

一松前ヨリ蝦夷ヘ行道下ノ關郡奴井ト云處ヘ蠣崎作右衛門ヲ案内者トシテ松前勢并金堀トモニ以上七百餘人鐵炮五十挺弓張差遣ハス松前ヨリ東ヘ六日路行處ナリ

一蝦夷ガ路上ノ國ト云處ヘ蠣崎采女下國內藏承人數二百五十人内鐵炮六十挺同ク弓五十張遣ス松前ヨリ一日路西ノ方ナリ已ニ蝦夷ガ島ヨリ松前ヘ押寄ベキトサタ有ルニヨツテ兵庫頭ハ城邊ノ堀ヲ堀棚ヲユヒサテ近郷隣國ノ津輕南部秋田仙臺ヘ加勢ヲ請フト云ヘドモ四ヶ所ヨリ加勢參ラズシカルユヘハ江戸ヨリノ御下知ナキ故ニモタスト云々

一其後江戸ヘ注進ニオヨブシカルニヨツテ將軍家御上意アリケルハ今度松前兵庫頭蝦夷征伐ノタメ出船ニヲヨブ兵庫頭方ヨリ重テ加勢ノ事申シ來ルニ

ヲイテハ左右次第ニ近郷ナレバマヅ津輕越中守信政南部大膳太夫重信兩人方ヨリ先立テ士卒許リヲ差遣ハスベキ旨仰セ出サセラル

一蝦夷方ヨリ砂牟差印下知トシテ角宇志魔久和ト云二人ノ蝦夷ヲ大將トシテ數百人下ノ關郡奴井ヘ夜駈ニ押寄スシカルニヨリ騷動スサレドモ松前方張番ノ者取合ヒコ、ヲセント防ギ戰フテ蝦夷人十人許討取リ九人生捕ル蝦夷ガ兩將ノ一内人鐵炮ニ當リ疵ヲ被ムル去ニヨツテ早々ニ引取ル蝦夷方ニ鐵炮ナケレバ鐵炮ヲ大ニ恐ルト云々

一松前兵庫頭伯父松前八左衛門ハ江戸勤仕タリトイヘドモ國元騷動仕ルニヨツテ將軍家ヘ御ネガヒヲ申上御イトマヲ給ツテイソギ在國ツカマツリスナハチ兵庫頭代官トシテ十月始ニ雜兵都合一千餘騎ニテ蝦夷ガ地ヘ押渡リ戰功ヲハゲマントスシカルニツキ津輕越中守方ヨリ三百餘兵加勢アリサルニヨツテ蝦夷征伐トシテ出船ス然ル後ニ蝦夷ガ島ニ此事ヲ聞モ大キニ驚キ元來山海達者ノ夷賊ドモ所ノ案内ハシツタリ方々ヘ引取ケル間向フ敵一人モナシ不知案内ナレバ何方ヘ押寄攻討ベキ案内ノテ

タテモナシ漸ク計略シテ志夫砂理ト云處ニテ大將砂牟差印并ニ子二人一族ノ内二人同下僕一人討取ケリ

一人人乙甫亂化一人知綿破住處江登母ト云處ニテ討取ル是ハ今度砂牟差印ニ一和シテ下蝦夷ヲ語フ者トモナリ

一人人於多久具印住處阿津摩ニテ討取ル

一人人楊加留母一人加奈邊住處伊弗ト云處ニテ討取ル

ル

一人人寄砂留同ジ一族一人住處宇良川ニテ生捕ル

一人人宇宛津留志住處比甫久ト云處ニテ討取ル此處

ニ於テ十六人討取内二人生捕

一人人摩加之助并ニ親屬二人住處三石ニテ討取ル

一人人仁志之助同子二人同族二人ハ佐留ト云處ニテ

討取ル

一人人伊喜利惡志住處牟川ニテ討取ル

一人人仁志天摩留住處伊砂離ト云處ニテ討取ル

一人人宇夫吉利住處伊夫夫羅ト云處ニテ生捕ル

右六ヶ村ノ頭七人同子七人親族十二人阿津摩ト云

處ニテ十月二十三日ニ生捕ル同二十四日ニ砂牟差

印ガ家ヲ燒拂從者八人首ヲ刎ネ捨ル生捕リ討取ノ夷賊都合五十五人也右ノ通ニテ彼島大形靜ルト云々

于時元祿五年壬申臘月二十三日備中宮内ニテ向ニ灯下一寫レ之焉

行年六十四歲抛ニ禿筆 野澤謙庵

蝦夷記終

蝦夷島記

蝦夷島之事

蝦夷人男長高く骨太く大は六尺程小は五尺六七寸計り額をすきあげ髪を耳のたぶ通りに剃短く鬚を長し衣類は日本人の著物の如くなるを左り前に合著平打の帶をし上著は日本の長羽折の如くに仕り五色の縫裁を花形色々の紋を切縫附候下著は木綿著物或は布子但與蝦夷は熊の皮鹿の皮獸の毛皮を著或しなど云木の皮にて織たる布を著申由松前近所の蝦夷は日本人の著古したる木綿きる物を著候而罷在由木綿著物或布類日本の商人ども船に積參候而干鮭にしん昆布に替申候由下民共の著古し候木綿著物布帷子を南部津輕の商人持行干鮭に替申候

一 蝦夷人裝束出立の體にかぶり物なし耳が子にて唐人朝鮮人などのごとくに耳に穴をあけ銀の鎖を三つくさりて左右の耳に附る

一 掛刀太刀の帶とりの如くに平打の緒を鞘に附て右

の肩より左の脇へ提る路次を歩行時は額にかけ刀を後に廻し負

一 弓と箭を持申候

掛刀拵

一 掛刀の寸一尺七八寸南部津輕の鎌鍛冶の打たる類なり菊の花色々の紋を刀に彫

一 はばゝきなし

一 鐔日本にて作る鐵の菊鐔木瓜の鐔銀にて覆輪を取切羽銀にて花形に割り鞘は本地かば綴に所々を卷太刀の帶取の如く平打の緒を附右の肩より左の脇帶通に下る

一 柄は本地かばにて卷銀の目貫を二つも三つも指表に打裏に目貫なし太刀の如く切刃に提る鞘柄共に本地の上を摺漆に塗たる物なり

弓拵

弓張立三尺七八寸おつこの木といふ木にて丸削中ふとく丸く先跡は丸く細く削たる物なり未筈木筈なく弦をかくる所に少割有り弦はあいと云草の皮

を繩にないても弦にかけ又はグミと云草の皮を繩にないても弦に用

一箭長さ一尺五六寸羽は鳶鳥鷹不_レ定

一簀はトバロツと云木を削用太さ日本人の箭の簀より細し木より下鹿の角二寸程丸削て附根先は竹なり簀入

根先如_レ此に削て角の先に指て角にあいにてまき附る角と竹との間に毒をぬる箭立候へば竹疵口に止りぬけざる様に仕たる物なり

一箭を入て持器をツチアカシと云丸平めに木をくりぬき所々をかばを以て巻蓋も同木にてやろう蓋に仕跡先き熊の皮をちいさく切て附ツチアカシにも跡先に平緒を附額にかけ背に負なりツチアカシの内に箭二十本計有

一蝦夷の女頭の髪肩の通を剃りて髪を結す唇にさきして附てタツチウと云木の皮を焼て其墨を唇にぬりて黒くするなり日本人齒を黒くすると同じ事なり

一女の衣類下著首の通り候襟をあけ脇をも手の通る程あけて脇も前も背を縫あはせ頭を著し入兩手を

通し膝ふしの下脛の半まで長けながくして著す肌裸身を人に見せぬ様に下著をこしらへて著縦令ば海川水中へ入時も下著をぬがず裸身を見せぬ由上著は縫をぬいたる單物左前に著平うちの帶をするよし

一食物は魚獸を生にて鹽をも付不_レ申煮も焼も不_レ仕候て給申候生物無_レ之候得ば干鮭を給申候

一家は草屋繩からげ土座也

一居所は海のはた川筋に村を建一むれづ罷在候魚鳥獸無_レ之候得者其村を捨て又魚鳥獸の有_レ之所を見たて其所に皆引越居住仕候故所も不_レ定よし

一穀物は粟ひへ作り申候酒にいたし給申候

一島中より年貢とて何にても納候事無_レ御座候

一蝦夷島中の大將と申事無_レ之一村々々の大將とて候なり

一主従とても切米扶持方遣候事不_レ罷成候に付てめん口すき仕候

一女房もやしなひ候事も不_レ罷成依_レ之夫とめんすきに渡世をくり申候

一馬に乗り或は乗物に乗候事無_レ御座候上下共には

だしにて歩行申候

一 蝦夷男死候へば女房己が親類兄弟の方へは返らずして夫の近き親類の方へ行男の近き親類の女に成り申候故親類廣男は一人して女房をあまた持申候たるも有_レ之候由但夫の父の女は夫の子方へ不_レ行夫の子の女は夫の親の方へは不_レ行夫の兄弟の方へは行て女に成申候

蝦夷人葬禮の事

一 病死の蝦夷をば卷申候布にてまくのよし横に長く臥せ櫃に入三年は家の内に置三年期過る地中に納上に塚を築木を立死人の所持したる室内を一色二色も塚の上の木にかけ置よし男女塚築様異なり但右三年の内妻女喪を勤子弟は五十日三十日喪に居て三年を不_レ勤妻女は三年過て夫の近き親類の方へ嫁す

一 メツカ打夷人海川にて水に溺れ死あるひは山中にて谷へ落死すれば非業なりとて愁傷して死人の親屬の方へ弔に行てメツカ打とて提刀を抜て死人の親類の方の者の額を刀のみね打一ッ打也額割れ血

出る偕其後に弔ひに來たる客の初此方を打たる者の額を刀のみね打三ッ打是又割て血いづる是弔の禮なり禮畢て歸る客十人來り死人親屬五人あれば客と主と一打づゝ打て退に依て死人の方は二人に二度額を打るゝ客の方は額を一度打るゝなり幾人にも互に一打づゝ打禮なり

一 スッ打是は蝦夷人口論をし喧嘩の上にスッ打仕べしとて打合なり先にスッ打にせんと云かけたる方先づ打るゝなり其様裸に成首に手拭を背の方より前へかけ肩骨を打たる様に身がまへして受るなり他人打るゝ者を前より腰の上を玄かと抱てかゝへ居る打者スッ棒を兩手に持て振あげ刀次第に三打うちて退く其後又打れたるものスッ棒を取て初打たる者を如_レ前にして三打うつなり

一 スッ棒太サ八寸廻り丸く削り長さ三尺七八寸也握る所を細くして緒を附る右手の小指に貫を通し緒をゆひ附るなり

一 科人をば死罪に行事は無_レ之過科を取申候過科のあがなひ不_レ成候へば鬚をぬき科をゆるし申候鬚をぬかれ候へば蝦夷人の交り成り不_レ申候死罪同

前の様に存候よし女は頭の髪を抜き申候

一貴人に對面の時は兩手をすり合するなり

一酒を呑様中椀程の盃にて酒七分盛り箸をかた／＼

添出し候得者酒を請て箸にて先酒を己れ敬する神

へ悉く祭りて後箸にて上ひげをあげて盃に口を附

呑也酒盃に一盃十分に盛て卑むるとして嫌ひ腹立

するよし向ふの人成共同道の人なりとも盃を酒を

七分程もりて盃をさす盃をうくるもの盃をいた

き酒を箸にて神に祭りて吞なり夫より盃に七分も

りて返し候得ば初さしたる者吞なり

一蝦夷は一村を一國と申候一村に家五十軒七十軒或

二十軒三十軒人數百二百三百程罷在候へば一國と

申候其一村に一人づゝ大將と申もの有之日本の

庄屋などの様に相聞候

一蝦夷島の廻り船にて乗廻り候へば三百里程有之

よし此島南部津輕に日向候此島の日本より船著を

松前と申候此外から戸島とて蝦夷島の三分二程有

之島御座候から戸島へは蝦夷島より海上十里程

有之よしから戸島より北西は高麗のよし申候是

も海上十里程隔申候よしからと島も蝦夷の内なり

蝦夷の千島と申は東の方松前居られ候蝦夷島より

海上七八十里有之風はげしく日本の船は通路成

りがたく蝦夷は船にて通路仕候クルミセの島より

ラツコの皮出て申候よし

一蝦夷の船長さ貳間幅一間程の小船にて繩からげの

船なり

蝦夷島より出るもの品々

一昆布 一千鮭

一鰯 一カヅノコ

一熊ノ皮 一鷺羽

一母鷹 一鶴

一大鷲 一クマダカ

一トマノ皮 一ラツコノ皮

一ラツトセイ 一熊ノ膽

一串蛇 一チャウサメ

一ネツフノ皮 一鹿ノ皮

一アザラシノ皮

一島中は金山有之松前志磨守代には堀申候今程は

金出不申候

一蝦夷人軍仕時は一方百人程或六七十人ばかり敵味
方と成合戦仕候出て立熊の皮或木綿にて包背を敵
の方え向け後あゆみにかゝり申候あいゝに後を
見て半弓にて射申候見かへり候目の玉足を運び候
足のうらを射申由半弓中りこまかに十の内七八程
中候と松前のもの申候

蝦夷島記終

吉野記

飛鳥井雅章撰

洛陽三月春如錦といへるもろこしの歌はあれども
よし野の芳野山の花のにしきにはなどかたまさり侍
りなん思ひやる春も幾はるにかなりはべりぬらむさ
らばことしこそとおもひたちて大宮人のいとまある
ころなればおほやけの御けしきをうかひ彌生の十
日あまり七日のそらにかの山にたどりいり侍りぬ麓
の花はやゝ散侍を山の櫻はまた盛りにて所がら折か
らいへばさらなりあなひする人にたづね行に逐所花
皆好さればなむ所々の興をおもひつゝけてはへなき
ことのはをかたはしいひのべはべるもさく花の嵐と
やいふべからむ

芳野川のわたし舟よりあがりて山のそばをゆ
くほど岸の歎冬のさかりに見へて水にうつれ
るを

芳野川きしねにさける山吹の

花の上こそ花の白波

ちらぬ間はかけを移して芳野川

波にまからむ岸の山吹

六田淀は今も柳のいとものうつはへなびくを見
て

青柳のみとりに染て河波も

六田の淀にかゝるはる風

一の坂といふ所の櫻一本みちの行てにさかり
なれば

み吉野やさくら一本に先見せて

山口まゐるく匂ふ春風

四手懸の明神をおがみて

芳野山花のゆふしてかけまくも

かしこき神の心をぞ知る

千本の櫻とて数あまたあり

吹ませてふるきやいづれ吉野山

千本に匂ふ花の春風

隠松とをしへはべるはまことや花にむもれぬ
盛なる花にかくれて名もまゐるく

たてるやいつこ御芳野の松

三船山をさしてみわたし侍るに花にてかざり

たるやうになん有ける

夕附日花にこかれて御船山

暮の浪路に匂ふ春風

四本櫻に蹴鞠興をおもひいでゝ

鞠の庭にうつし植なん御芳野の

四本の櫻面影にして

金の御嶽にて

まはしなをゆふへを殘せ入逢の

かねのみたけの花の光に

佐抛明神の山を御影山となづけはべるは天人

の御影のうつりしよりのことかたり侍しかば

さなきたにさなきの神の御影山

うつろふ花に風もこそ吹

芳野山を

雲も雪も及はぬ花をまかふとは

吉野よく見ぬ人やいひ翫

都にて聞しはふもと芳野山

花より外の雲はまよはす

聞しよりみるはまされりといひしふるごとくも

此たびにてや侍りなん

咲そめて花に日數や積るらむ

雪を分るる御芳野の山

袖ふる山は天武天皇の御琴を弾じ給ひしに天

人あまくだり乙女子の歌をうたひて袖をひる

がへしたるところなれば

むかしをもちかへすやいかに乙女子か

花の袖ふる山かせそふく

布引櫻は高根より谷のそこまで咲つゝきて見

へはべりぬ

布引もにしきと見へて吉野山

名にこえにける花の一しほ

鷺尾山とおしへ侍りしに

かねの音の雲より匂ふ御芳野の

花も上なき鷺尾の山

瀧櫻は布引といひしやうに峯より咲つゝきた

ればにや

いかなれは水なき空の瀧櫻

花の浪立御芳野の山

子守明神にまいりて

見よしのゝ山ふところにおひたちて

子守の宮の花そこと成

躑躅岡は名もゑるくみへはべれば

折にあへは芳野の花も紅ゐの

つゝしの岡の色にとられて

遙谷は深き谷にて侍りしも花にむもれぬるや

うに見え侍れば

高ねよりみれははるかの谷の戸も

花にとちたる御芳野の山

西行櫻は此法師の此山に三とせの間住居せし

ところなりと語しかば花ちりなばとよみしこ

とのほも此所ならむかし

花に入ておもひゑられぬ吉野山

やかていてゑといひし言葉

青根か峯は花も見へず侍れば

春風のあやなさそひし三吉野の

青根か峯や花の故郷

夏箕川に花のながるゝを見て

木々の色もその名にちかし夏箕川

櫻なかるゝ春の山かせ

宮瀧といふ所にて

なかれゆく花のゑらゆふかけそへて

春にいさめる神の宮瀧

櫻木の宮は高瀧のかたはらにみえて花のにし

きも瀧のいともて織いだしたるやと艶におほ

へ侍れば

瀧のいとを花にうちはへて芳野山

にしき織なす櫻木の宮

水分山にて壽證法師の

御芳野の水分山の瀧つせも

すゑはひとつのなかれなり梟

とよみ侍しを

瀧つせの水わけやまにちる花も

なかれの末に又やあふらす

國栖といふ所は大内の節會に笛を吹人の此所

より昔はまいりぬることをおもひ出て

ちりたりとふかはふかなん國栖の笛

芳野の花は今盛なり

やうく日もかたぶきはべれば麓の里に立か

へるとて藏王權現の前に櫻を三十本うへさせ
侍て

いつか又十といひつゝ三吉野に

我うゑ置し花を來て見む

吉野記終

和紀記行

岡西惟中撰

春日

花は香にゑるしあらはせ春日山

おとろの下にむれぬるとも

石上寺存原山有、在五中將之木像堂後有井幹遺跡

むかしをも誰か汲みんつゝゐつゝ

いつも見えず見くさるにけり

布留社

みゆきせし跡こそたゆれ水くきの

玉は幾代をふるの瀧つせ

三輪社

みわの山ひはしに神をかさしつゝ

玄のきし雨もすきの木のもと

めに見えぬ風をふるへに山ひこの

ひゝきたちそふみわの神垣

泊瀬山

雲かすみのほり盡してはつせ山

ふもとの杉のみとりををみる

ひとこゑの行衛は雲にこもりくの

はつせの山のやまほとゝきす

十八日滞留本願寺

十九日雨不止不意會鳥丸光雄卿門弟惠空法師

ゑるやいかに我さへわかの友ちとり 惠 空

をなし波間にかよふこゝろは

かへし

わするなよおなし心の友ちとり

立わかれてもあはて過めや

廿日欲登談岑退本願院

きゝ思ふ冬のあはれやはつせ山

ひはらにこもるかねの一こゑ

逝回岡

人よおもへうきにましりてうれしさも

ゆきゝの岡のかりのやとりを

吉野山

ふるさとを出にし日よりおもひこし

さくららはかへるみよしの山

みねも尾もひとつになりてみよしのゝ

あらしを埋む花の白雪

十歩許推^ニ連歌^ニ好士隱^ニ逸柴門^ニ公永逝而忍可^ニ棲息^ニ

花もちり人も言せぬ柴の戸を

むなしくたゝく春の山かせ

連歌に

谷風に花の香永しよしの山

尊見^ニ西行法師眠花臥雲^ニ一菴^ニ側有^ニ苦清水^ニ

苦清水淺くはありともかくれすむ

人のこゝろの汲ほされめや

玄からみて花もとゝまれよしの山

やかては出し谷川の水

蜻螟瀧

音々むみ松のひゝきに落そひて

夕日うつろふかけろふの瀧

宮瀧川

世のころは遠くも有かなみよしのゝ

瀧津河内のなかれのみして

象山

我ためにうれしくも有かつまこふる

六田淀

鹿のねきかぬ春のきき山

いつのまに玄ほれたひのあさころも

むつたのよとをきてもみなくに

廿五日入^ニ奥院^ニ骨堂靈區常燈光焰豈不^レ垂^レ涙乎^ニ三

町側有^ニ木食澗飲僧^ニ呼^ニ空識^ニ形容枯橋智解座忘暫

焉之間與^レ余交^レ談

さそなうき世をこりはてゝ深山木の

かけをたよりに人の住らん

東大寺重源上人棲遅中谷也

ある人のもとへつかはしける歌をおもひ出てこゝに

かきつけぬ

身のまゝにすみへてもみん松のかき

竹あめる戸に世をもへたてゝ

廿六日述^ニ閑居即事^ニ

風のおともうきよの外のたかの山

さくらのちりにましろのみして

廿七日詣^ニ壇場^ニ

この山のけしきにこゝろとまりて

つもりこし心のちりもおのつから

はらふ高のゝみねのあらしに

此ときある僧のいほりをとひ侍りて

露のいのちかゝらましかは柴のいほに

柴折くへてまはしなりとも

四月七日曉聞_ニ奥院摩尼峯上佛法僧鳴_一

高野山みつのみのりの一こゑに

何をかそへて何ねかふらん

おなじうたをよむとて摩尼の二字をたちいれてよみ侍りける

あすまらぬうきよの夢のさめぬまに

心をつけて佛法僧鳴

廿二日趣_ニ一乗山根來寺_一登_ニ菩提峠諸覺鏤上人廟堂_一
尋_ニ福壽院_一

あるじの僧歌をもよみてみよとすゝめられければ

こゝろなきもこゝろみせける岩木かな

山のすかたを庭にうつして

廿三日趣_ニ紀三井寺_一凭_ニ海龍院欄_一望_ニ和歌浦_一

よそにのみきゝしはものかわかのうらの

なみくならぬ松のすかたは

妹脊山

いつのまにをくれさきたついてもせ山

石のまぐらのかたき契りも

詠鶴

かものあし何なけくらんつるのはきの

ななき命も同したくひを

玉津島

名にたかくみかく心の玉つしま

あふきてかへるわかのうら波

朝ひこのあつまをてらすわかのうらに

光かはせる玉津まま姫

吹居浦詠_ニ名物櫻貝_一

潮風のふけゐのうらのさくら貝

それよりひろふあしそくるしき

和紀記行終

天正十一五月十七日貞徳他行道之覺

をはた瀬より舟にてこし行く人やりならぬ道ながら
やがてくやしく足もすゝまぬ心ちし侍りて

おもひ出もなき古郷と出しかと

猶山のはをかへりみし哉

松が島ほのかにみえ侍りければ

干鹽のひるまもゆかんみわたりを

いかにととへはあのゝ遠山

馬にのりても

くらつほにゆられて來ぬる馬の上

かちならすして身をもやすめす

宿々にて別火のむつかしきいわんかたなし

有明のつれなくみえしはたこやに

ひとり火はかりうき物はなし

鈴鹿路はふさがりて安樂ごえをせしにあげび原と云
山中にとまりて

川音に夏の夜なかし旅ねかな

明がたとく立出て其道に三上のたけ鏡山などほのか

にみやりて草津と云所にとまりてそれよりせたを心
ざして行橋をみるに是にてなん心をも慰み侍りき
みえわたるくもての數はゑらねとも

かたらん物はせたの長橋

大津より濱ばたをたどり行に石山ははや過ぬといへ
ば念なくて坂もとへ行からさきの松をみて

松かせやみるめもよらむ志賀の海

一宿して城中など見物す翌日京へ罷着ぬ先洛中町な
みをみんといふに旅衣うちゑはれたるをみて木工助
かたびらをゑたてゝ是をきかへよといはれければ目
にかくる人もあら是なんよきと云ければ木工助

ゑはたるゝ旅の衣をみる人は

これや伊勢をのあまといふらん

と申されければげにとおもしろく覺え侍りし草伏候
へば見物ものうく只所々みめぐりし一兩日うちや
すみ宇治へ心ざし行道のおぼえ

ふか草やいなりの社藤の森

木幡を行は伏見とぞ聞

かち路くたびれ侍りて

山城のこはたの里に馬はあれと

たちんなければかちにてそゆく

古ことよく出合のまゝおもしろく侍りし宇治へ罷着
槇の島聞しにまさる興地いへばさらなりその橋にて
心ある出家に逢て橋の小島山吹の瀬八の宮の御舊跡
など相尋て平等院へまいり心靜に打休み町の長の茶
いるりなど見物し宇治川の河上そこともみえず侍り
ければ

宇治川のこの河上をたつぬれば

出る朝日の山あひの水

是より堺へ越さん道はいかゞといへば大坂の城かは
りめにて路次いかゞよいふさらば京へ罷かへらん
といひく猶さかひへの道の事たづね候へばをぐら
と云所よりよき便船ありと云その家のむこなる人な
んたゞ今つなをくだすそれにいひ合せんと有ければ
幸の事とてをぐらより舟に乘日暮に淀の里に着ぬ道
に水車ところ／＼にみえ侍りければ

行水にくませてめくる水車

夕日をこほす影ぞ冷しき

淀より夜舟に大坂へ辰の刻にあがりゑたくなどして
堺は三里と云かちにて心靜にながめ行に是なん天王

寺と申誠に石の鳥井あり大坂陣に焼はらひてつい地
などもくづれ石すへの少高き所寺の跡とみえて庭の
池水も夏草にうづもれあはれ計ぞふかゝりける石の
鳥居龜井の水ぞくちせぬ名残なりける
たておきし石の鳥居のゑるしをは

龜井の水にうつしてそみる

行々みればあはち島にしのかたに山ふたつはなれて
ほのかにみえて住吉に行着ぬ原野などのやうにて松
原はる／＼とありて岸田などはいづこともみえず宮
ゐをおがみめぐりけるに是も亂に焼て宮殿おろそか
なる體也たゞ松原の様などぞ名におふゑるしなるべ
き社人に宮居など相たづねて下向也
宮柱たちかはれとも住吉の

神の昔は松にみえつゝ

さかひへおもむけば濱ばたに人家はる／＼とつゞき
てめをおどろかし侍り町など見物しわたしそのほか
はさせる伽欄もみえず法花堂ぞ里中に有ける

影すゝし月は浪まのあはち島

翌日に本の道よりのぼりて八幡へ參詣申に聞しより
宮立殊勝に碧巖雲にそびえ人家麓をめぐり誠に神の

めぐみ他の人よりいとあつくみえ侍石清水を結てみ
たるに雨こぼれければ

夕立は空にわきくる泉哉

それより東寺をさして京へ入ぬ道に後鳥羽院御舊跡
戀塚などあり牛の車をみて

くるしさはみたるにうしのよと車

ひかれて同じ世とやめくらん

京中見物の所々のこりおほかりけれど

とゝまらぬ旅にしあれば九重に

身をし分けてもみるよしもかな

夕つけの鳥や都のほとゝきす

夕つけ鳥さへ稀になん有ける

あさかせを手ことにみする扇かな

くだりには大津へ行に山道の切とをしのやうなる所
あり是なん相坂の關と云さて清水はととへばやゝ行
て里中のおもひのほかなる所にむもれ水あり

夏草に關の清水も埋れて

影みし駒の跡ものこらす

大津へ出てあづちへ舟にて夜明に着ぬ
末とをくみえしかた田のいさり火は

跡になるてふよるの舟道

安土は信長の以後かたもなくなれりといへども町並
縦横にはる／＼として殿作共山上につゞけりゑらへ
いは雪の朝とみわたされ涼しくぞひま／＼に松杉み
どりをふかめて信長の御在世思ひやられてかへりみ
がちにその日いちの勢と云所にとまり又こす安樂越
心もとまらず峰より馬にてけふ十三里の道をおもひ
のほかにゑのぎて津に着ぬ次の日はやすらひがちに
かへり侍り雲津川くし田川も過ぬ齋宮は道のほとり
に鳥る神さびてみゆ

このたひはよそにすゝかの關なれと

いつきの宮に立そとゝまる

とて目をくらし山田にかへり入ぬ

かへりてもいかに夢路のまよふらん

ゑはし旅ねの心ちのみして

右紀行は去にし嘉永五年十二月藤田長年より借取し
て影擧し冊となし其跋に書記しつらく此書は檜垣五
禰宜貞徳神主の紀行にしてゑかも自筆なるを葭田氏

に藏す貞德は前五禰宜常信の男にて永祿四年父の讓を得て禰宜に輔補す于^レ時從五位上同四年二月三日叙^ニ正五位下^一同六年從四位下天正十五年正月十六日從四位上^ニ文祿二年五禰宜にて卒すと引付類に載たる人なり司家に書翰を藏す其文に明日は早々連歌へ可^レ參候間云々とあり文事を嗜まれし事明か也此記中に山田を故郷と稱し旅宿にて別火したるなど禰宜職たる人の記なる事證するに足れり又木工助云々とあるは佐久目木工助晴實なり權官たる故同伴せられしと見えたり然るに富士谷成元貞德神主を松永貞德と謬て序を加へ芝山國豐卿それに雷同して跋を副らるされど長頭丸は元龜二年に生れ承應二年に八十三にて歿せし人なれば天正十一年は十三歳なり歌文并字體など加冠せぬ稚童の能く成すべき所にあらず不勘の妄誕なる事論するに足らねば棄て顧みず唯本文をのみ摹寫了と記し置たり然るに頃日檜垣貞吉主典其挂幅を購得して予に示さる故に答るに往事を以てす依て其考證を書記せよ紀行に副置かむと請望せらるゝを辭しもせずして老筆を馳せ囑に應ずる者也

明治十九年十一月廿六日 御巫清直 識

○近代禰宜補任次第續錄

檜垣五禰宜從四位上度會神主貞德

右神主前五禰宜貞信男也

永祿三年○月○日補任云々永祿二年十二月惣位階災名注進之咤權禰宜從五位上也

同四年二月三日叙^ニ正五位下^一一見^ニ歷名土代^一云々

天正十五年正月十六日叙^ニ從四位上^一云々略五以上

文祿○年○月○日卒

○略系

常昌一 貞香一 常廉四 貞昌一

常勝一 貞通虎福大夫常武 貞元

常信四 貞德五

天正十一五月十七日貞德他行道之覺終

宋雅道すがら之記

飛鳥井雅縁撰

應永卅四年二月二十三日社參のためいとまを申て越前國へ下向の事有その所に天皇の宮まします年久しき宿願をはたさむが爲に今日進發せしむ志賀の濱の鳥井のあたりにて日吉の御社のかたをふしおがみたてまつるにことに空よくはれて浪風ものどかなれば心中にうかび侍る

咲をまつ花はなからの山風に

きへせぬ雪の木すゑをそみる

ま野の浦を過行に比良の高根の雪いまだ残りて兼盛歌に若菜つむべく野はなりけりと讀るは宮古にての歌也此浦のあたりも磯菜つむべきころにやと見へて日影もことにうらゝかなるに海人ども春の心のはこらしげにこゝかしこ行かふけしきおかしくはべり雪はまたひらの高根に残れとも

いそなもとむるま野の浦人
かたゝの浦を見れば島さき遠く出て海士の家どもあまたつゝきたり

行するをいそくかたゝの浦つたひ

あまの宿かる程たにもなし

水うみをへたてゝ東に高き山有て雪いと白く見えたりとへば伊吹の山なりと申す

伊吹山きへせぬ雪はうつめとも

名高き峯はかくれさりけり

こよひは比良の宿と申所にとまり侍て廿四日夜をこめて立侍るひらの海はるゝと見えわたるに八十の湊と申侍るもいづくの浦々をさしてか申侍らんと覺て

比良の海やわか年浪の七十を

八十のみなとにかけて見る哉

此里の中にながれ松と號してはるかにつゝきたる松原有山ぎはより流出たる河の跡は見えていまは水もなし

山河も今は名にのみなかれ松

あらしに浪の音を聞かな

小松と云所を見れば名にたちてまことにはるかなる
松原あり

我身今老木なりとも小松原

ことの葉かはす友とたに見よ

まらひげと申所を見ればかの大明神の御社まします
ことの外に湖のなぎさちかく御社有まばらく御前に
祈念のほど

あま人のつみをすくはん爲なれや

浦近ます神の宮居は

神の名もけふまらひけの宮柱

立よる老の浪をたすけよ

此浦のついきはうちをろしと申所也西の方はたかく
そびえて木まげき山あり

寒かへる磯邊の浪のうちをろし

をろす嵐も峯にふくなり

竹生島は浪の上をへだてながらいとちかく見えたて
まつるもたのもしく覺て

吳竹の生てふ島による浪は

名にたちてこそ世を守るらめ

河原市とかや申所にまばらく立寄そのついきに里有

とへば今津と申す

いにしへにかはる今津の里ならば

過し世をゑる人にとはゝや

かいつと申所につき侍れば折ふしもことにけしきの
どかに見えわたりて海士人ならんと見ゆるあやしの
賤磯のあたりさまゝ行ちがひて船よせあみほしな
どしたるけしきめづらしく見えてをのがじゝのいと
なみどもゝあはれに見えはべり

いさゑいしけふはかいつのかいつもの

とるあま人のけしきをもみん

此浦にむかひて一村見えたる所を尋はればまほつ
となん申す霞のうちもはるゝとけぶりて見え侍り
湖海や磯やの烟たてながら

やかぬまほつのうら風を吹

かいつを過て山道の侍るに坂有とへば逢坂と申侍り
さてはこゝにも逢坂の名ありけり關は侍らぬかと尋
侍ればをのづから山がつの家だにも侍らぬ由を申す
東路にあらぬ越路の逢坂は

こゝろのとまる關たにもなし

山中と申所へつき侍らんとて道すがら山にはいまだ

消残りたる雪も見えながらいつしか花咲ぬべき梢と
ものほのめきたるもいと見どころなきにあらす

消残る深山の木々の白雪を

かつさく花になして見るかな

夜の明行ほどに此宿を立侍れば山あひの道さかしき
に西の方にあたりて鳥井の立たるを尋はればこゝ
をなんあらち山と申す古歌に峯のあは雪寒くもある
らしと侍るも思出られて朝のほどなれば折ふしとい
とはげしかるべき比なるにおもひの外に風の音もき
こえず雪はいまだ残りたれども山のけしき霞わたり
て長閑に侍れば

今朝はまた風もこゝろやあらち山

あらくもふかぬ木々の下道

みちの口と申所にてたけふのこふはいづくなるらん
とおぼへて

いく千代もなを敷島の道の口

たへす吹こせ山あひの風

かへる山と申所を見れば雪いとふかく残てさすがに
峯つゞきは霞わたりて見え侍る

越路には年たちかへる山の名を

雪にこめても霞む春かな

やう／＼故郷も近くなり侍る雁の鳴侍りければ

時しあれば我もことしは故郷に

づれてそかへる春のかりかね

同二十九日御社にまうで此まゝ一七ケ日參籠し侍る
べきなれば先寶前にて御神樂などまいらする程祈念
のついでに山中はかりの法樂に

幾春も天てる神のこのかみと

あらはれまして世を守らし

代々かけて八雲の道を守るへき

わか神かきにあへるかしこさ

鶯のすたちそめにし故郷に

かへりあふみの春ぞうれしき

かくて七ケ日の間寺僧等におほせて毎日社參の度ご
とに寶前にて大般若經をてんどく申て天下安全御運
長久萬歳々と祈念したてまつるに初の日より結願
の日にいたるまでいさゝかも雨風さはりもなくこと
に天氣快晴なれば神の納受もあらはれにけりといよ
いよたのもしく覺侍りて

萬代とわか君々を祈る身の

心のうちは神もうくらん

かやうにとかく日數を経てかへりのぼるにもことに空よくはれて日影のどかなる道すがら海山の浪風もをさまりぬれば旅人の往來までもやすき御代ぞかしとありがたくおぼえて

海山を越ゆくほとそ浪風も

けにおさまれる御代もゑらるゝ

いつしか山道里つゝきを見ればそことしもなき所々の花どもさきてまことの山櫻と申ながら都にはひきかへたる人の家居ども中々めづらしく見え侍り

都をはいそくうちにもさすかまた

心そとるゝ花のゑたみち

此春は都の花やうらむらん

遠くこしちの山めぐりして

いづくの程ともおぼえぬ山あひに烟の立を尋ぬればはたやくなりと申すそのあたりにさかりなる花あり山かつのはたやく煙立そへは

これや名にあふひさくらの花

今城と申里近くなりて見わたせばこゝかしこの山櫻さきつゝきたる暮つがたに月さし出て見どころおほ

く侍るに又そのつゝきの遠山を見れば雪さへむらむら残て雪月花の興も折にあひたる比なればいとめづらかにて

都人いかにとはゝかたらなん

雪にあらそふ月と花とを

ふたつやと申宿にはくだり侍し時とまり侍りて折ふし有明の月のほのかに見え侍しも思ひ出られてわすれがたく侍に此度はたゝうち過侍れば

行かへる道はかはらぬふたつやに

春のひと夜の月を忘れぬ

やうゝ都ちかくなれば坂本と申所にとまりて夜の明行を待はべるもをそきこゝちして

さのみしも日數へたてぬ旅にたに

都をのみと猶いそくかな

程もなく北白川を過て鴨の御社をふしをがみたてまつるもたのもしくおぼえて

吉あしをたゝすの神に任なは

さすかに道の末もまよはし

應永卅四年三月十七日

宋

雅

此一卷室町殿より此度道すがらの歌ども侍らば可
レ書進之よしたび仰下さるゝによりて殊更風
情も侍らぬ歌どもながらいなび申がたきによりてか
やうに書進上申侍る也

室町殿は鹿苑院殿御子普廣院殿義教公歟

第百二帝稱光院應永三十四丁未年今至_三于寛文三
癸卯年凡二百三十七年 宋雅は 榮雅之祖父也

飛鳥井雅章卿自筆寫_レ之畢

宋雅道すがら之記終

元和七年東海紀行

元和七酉の九月

二十二日 天快晴^マ口の時許に武藏の江戸を立したしき人々の爰かしこ馬の餞すとして申の時許に品河の里を出ていそぎけれども酉の時許に神奈河の里に著此所に一宿秉燭ほども亦友だちの名殘おしみて馬の餞すとして酒肴小壺に茶を入文添ておこせたり其へんじとり集たる言種いひやる次に別といふ心を

かへりこむとちきるもあたし人心

定なきよの定なき身に

永夜も煙にむかひて聽^ニ鶏鳴しも人どもの聲してうちしはぶきて夜もはや曙なむといふをきゝて旅行別のち朝思と云事を

日數經はするもみやこやちかゝらん

別ものうききのふけふかなと書て使は返しぬ

二十三日 天晴立^ニ神奈河^ニ惟里藤澤を過て舟渡を經

て大磯にかゝるそこを行過て磯遠を通る風靜になみの音をだやか也人にとへば爰なむこゆるぎの磯といふをきゝて寄^ニ名所^一別と云こゝろを

こゆるきのいそかぬ旅も過て行

別路とめよあしからのせき

猶ゆきくゝて夕陽山の端にかゝるときく川の里をすぎ佐川を渡りて小田原に著一宿思の外友の入來てひとりふたりして語りて其夜も更ぬ聽^ニ鶏鳴^一より雨降出風烈浪の音高忍別旅宿枕といふ心をよるなみの聲にめさますかり枕

忍ふ別の夢そみしかき

二十四日 雨降風止すけふは爰にとゞまるべきなど云巳の時許にて晴風も靜る小田原湯本相雲寺を過てあしがら山にかゝる遠近に重る山々たにくゝの木末色々に染出す錦をさらすかとうたがふあまりの面白きにゆきもやらすとある岩がねにたすけられて獨みる山の紅葉といふこゝろを

おもふかひなきよなりけりあしからの

やまのもみちも君しなけれは

漸々やまをよぢてあし川の新宿に著暫休息してそれより山中里を過て夕陽とともにやまをくだりて三島の里に一宿おりふし思ひいづる事ありてうたた寢の夢覺て

かり枕かたふくるよりうたゝ寢の

夢をみしまの人のおもかけ

此歌の詞書思子細ありて委かゝす

二十五日 清天成といへど風不_レ斜立_三三島_一沼津を通りて原の宿にかゝる面前砂吹掛行歩かなひがたし供にさぶらふ人のかくうき島が原よといふをききて誠にかぎりなき旅をもするかな何國をやどゝ定むべきかたもなしゆき留るをぞやどと定むるの歌のこゝろおもへば風雲流水の生涯なる哉とこゝろぼそく

すみはてむやとはいつことゑら波に

身をうき島のよるへゑられす

又友なる男の馬に乗たるが風に吹れてたえがたさの餘にやかく云

むさしあふみにたににかけて大風に

のらぬもつらし乗もうき島

おかしく思ひて此紛にやう／＼うき島が原をすぎて吉原の里に著暫休息して風少靜るほどに此宿を出て富士の裾野河の邊に著ぬ渡守はや舟に乗れと云此山をみれば白雲山をかくさむとすれ共はるかのすそ野にたに引雪一むらの高き事は目も及がたし時の間にいろ／＼に移替景氣詞に述がたく折ふし友とする人の云此やまをみやこの邊に置いて我おもふ人々にみせてなど戯てかくなむ

みても又またも思ひをするかなる

富士の高ねをみやこなりせば

又山の戴より煙の立をみて寄_三富士_一思と云こゝろを

我思ひいさくらへみむ富士の根の

けふりはたゝぬひまやありなむ

此歌も夢をみしまのこゝろにや侍るらむとかくまぎらはしき蒲原の里につきまた目たかけれどもけふは風のさわぎもくるし行衛もおなじ旅のやどりならむかしとてこの里にとゞまる戌の時許にゑる人の尋來て語りて其夜も更ぬ明れば

二十六日 天快晴風靜也昨日の空に似す立_三蒲原_一由

井の鹽屋はるゝの渚を過て清見が關に至りぬ寺にのぼりてみるに後は嵩聳岩松無心といへども山風に吟石はしる瀧の音に調を合たるは廣長舌におなじ前には海上漫々として霧に籠れる松原は帶のごとくにて波上に浮び釣の小舟は浪間にみえかくれ彼明石の浦の島がくれ行といへる事を思ひ出で詞に述むとするにもいはれず書は詞を盡さず詞は心を盡さずと云り寔に是ならむかしあきれて時移ぬ

東路のいつ山はあれときよみかた

なみまにうかふ三保のまつ原

いつまで爰にあるべきぞ目もはやかたぶくと云此關は心なき人のためにこそ扉結けむと語りてやうやう寺をくだりて江尻の宿に著此國の預り人我玄たしければ來てこの里にてまうけなどしてはるかにほど經てこの宿を出でうは原よし田の里をこえて府中に著むかし住馴たるなればなづかしうおぼえて我ありし宿を立よりてみるに門前草深くみしにもあらず

すみなれしやとは葎にとちられて

秋風かよふ庭のよもきふ
それより河原にいづる木枯の松詠やりて

今更に猶うらめしきたひころも

きてはうきみをこからしの松

ゆきゝて丸子の里にかゝる駒の口引たる男沓と云物を買むといふわらはべの立出て續を高く云などかくいふぞととがむれば内よりも女房の聲して爰はまり子の里にて沓のねの高き也と云口引の男は是をこゝろえねばいらへせずよしありて覺えければ爰にてかはすともありなむあすかひとくゝさきにもありゝとも戯て行すぎて問へば玄か玄かの人の口へ居たる也と語るさもあらむかしそこをゆきすぎて宇津のやまに至りぬこの里をみれば白き餅の霰のごとくなるを器に入て是めせと云とへばたうたむ子とて此里の名物なりと云扱はもろこしより渡たる餅にやあむなるといふさにはあらず十づゝ杓ふによりてとをだむごと云也と語るさばばすくはせよといへばあるじの女房手づからいひかひとりとて心のまゝに杓ふ是に慰て暮にけれども宇津の山にかゝるもとよりつたかえではしげり

てとあるところなればいとくらふみちもほそきに
うつゝともわきまへ侍らす

さしてたに夢の憂世の旅の道を

うつゝともなき宇津のやまこえ

行衛は岡邊の里に著一宿其夜は岡部の松風に夢を
おどろかし明れば

二十七日 天遠晴曉月共に岡部を出で藤枝に宿せと
島田を過て大井河の邊に著ぬ住馴たるみやこの大
井川思ひ出られて

名にしおはゝいさ事問む大井河

山の紅葉はありやなしやと

河の面をみれば水はやう淵瀬の数々をみるに行わ
らひて

こえわふる嵐の淵瀬大井河

なみかけころもほしそかねぬる

からうじて河を渡りて金屋の里に著て少時休して
衣をほすゝ佐夜の中山にかゝる年たけてまたこ
ゆべしの歌思ひ出られて哀なり過にし年月此やま
をこゆるたびゝ哀なりけりと詠てぞこえし今又
こゆるもまかなりこしかた行先思ひつゝけて

思ひきや過し年々いく度か

佐夜の中山又こえむとは

漸山をこえて日坂の里に著それよりかけ河の宿に
かゝる昔年みしあるじ立出て暫といむる

まはしとてとむれば腰をかけ河の

やとのすのこに尻はひえけり

とて土器とりあげて立出ぬ袋井の里を過て見つけ
の國府に著里人に逢て此所を何によりてかく云ぞ
ととへば富士山を初て見付けるによりてと語る扱
は是よりもみえ侍けるか不思議さよと云へば此男
空目をつかひていまもみえ侍る事もや候らんあの
白き雲のうちになど云みれ共みえす

白雲の絶まゝをそれかとて

終に富士をは見付さりけり

宿に入此ところに一宿ある人尋來て酒のませ物く
はせなどしてとり集たる物語して永夜もとりゝ
にまざる臥程もなし明れば

二十八日

朝天晴あたりちかき濱松の城守ある人な

高力攝津守忠房

れば使をこせたり見付を過て中和泉を過て天龍の
舟渡經て濱松にかゝる城守又使を出すあないせさ

せて城に入遙にありて午の時許に細雨降出ぬけふは留るべきよし懇に云されども今夜はいまぎれのほとりまでとおもふとてたち出ぬ城主名残おしみてはるゝ送りて別ぬ細雨なれば風さへ静也實なにしおふ濱松雙びたり汀に寄來るなみの音もまつの響もきくに妙なり

なみの音に濱松風の吹あはせ

おりから琴の音をや調ふる

細雨なれば濡るほどもなく新居の渡りに著俄に風烈なりて浪の音高し雨もあきなりなり

山風の秋の時雨を吟きては

なみもあらゐの渡し舟哉

袖もほしあへず舟よりあがるこの所に「一宿乗」燭ほどに京より文持て來る古郷の事どもきくゝ夜も更ぬ雨風止す

二十九日 曉天晴風はまだあらゐの里を出て夜ふかし白須賀の里を通る

よをこむるみちのかたよりの竹の杖

行衛をとふに白須かのさと

夜のほのゝと明るに鹽見坂をのぼりてはるゝ

の谷をゆく細き川ありとへば是より參河國と云こそをゆきて里あり二川と云

國は三河里は二河あはすれば

いつかはのほりつかむ古郷

それより輿にのりて一睡眠夢覺てとへばはや吉田の里にも著ぬと云夢の中にはるゝのみちを來ぬる事よと思ひて

夢とてもよしや吉田の里ならむ

さめてうつゝもうき旅のみち

松平主殿守忠利

この所の城守殊に我親き人なればたちよりて對面せむ事をいひやる城守例ならぬによりて京へと云そこをすぎて橋を渡小坂井と云所に至りぬ友とする人の中に攝泉堺の津をえる人あり相坂關より西の名津也此所も堺と云名はおなじけれども所柄は似ず是は誠に小さかいなりと戯ければ里人きゝて此里の端に小坂のあるによりて小坂井也と語るそこを行過て五位の里に至る東路に里の名おほけれどもかくゝらゐの高き里はなしといへばまたある人の鳥にも似たる里の名哉というゝにおかしき事どもしも人の云をきゝて赤坂の里に著つゝきの

さとを長澤と云

雲はれて日は赤坂の里なれと

旅の行衛のみのなかさは

ゆきくゝて二むら山に至りぬこの山の中に寺あり
法藏寺と云立よりて一見

三河なる二むらやまをはこにして

中へいれたる法藏寺かな

此山をみるに青葉にまじる紅葉のあらしにさそは
れさながら錦をたつがごとし

二むらの山の秋風はけしさに

紅葉のにしききてもこそみれ

夫より藤河と云所に著て一宿明れば

本多伊勢守康紀

三十日 天快晴あたりをき岡崎の城主ある人にて消
息あり其書に遙音信をきかず此比もやと待侍し藤
河に至ぬときより對面せむ事をよろこぶと念比
に云をこせたり返事に

今朝は猶いそき出ぬる草枕

我をかさきに人のまつやと

やがてと書て使は返しぬ日出ぬほどに岡崎に著城
守迎にとて出るともなひて城に入暫物語して巳の

出歟

時許に入城守名殘おしみて此宿まで送て來るたが
ひに馬を留て

武士の矢はきか宿にいるよりも

猶たのみある人こゝろかな

城守返し

武士のやはきか宿にいる弓も

をして歸れはかひやなからむ

とて城守も歸ぬ立別てやつ橋と云所にいたりぬ杜
若の名所なればおぼえあるらんと思ひてみれども
なし

やつ橋にはるくゝと來て三河なる

はなにはなをかきつはた哉

と云ければ友なふ人々限なくおかしがりて是に興
じて池鯉鮒の里に著ゆきくゝて川のありけるをと
へば三河國と尾張の國の堺川といふはや尾張の國
にも入ぬるよと云

けふは九月三十日なれば

東方道をは行も盡さねと

秋はけふこそおはりなりけれ

と口すさびていも川あのありまの宿をも過て鳴

海の里に著友なふ人の中に

年ことにのほりてはまたくたれとも

なにとなるみのはてはゑられす

それより笠寺山崎の里をこえて熱田の宮に著一宿
神無月一日 天遠晴風閑なり人々宮へまいるべしといふ

里の名も爰は熱田の宮なれば

けふより冬の時無月かな

義直卿

とて神前へはまいらず此國のかみの御もとへさしていふべき事侍るによりてけふはとまりぬ國守の御もとより殊懇にいたはり給ひて御船など給てくれかゝるほどより熱田を出てはるゝの海路を経てはや伊勢の國桑名の里に著船よりあがりて船人のこかれて伊勢に著里を

桑名とききは旅はくるしき

とて夜も明るほどにこの里を出る

二日 天晴風烈巳の時許に風靜る四日市場と云とこ
ろに著此里にゑる人有立よりて午の時許に出て濱
田の里をすぎて日ながのさにかゝる
里人は日なかのさといをしゆれと

おりしも冬の日こそみしかり

とて駒をはやめて杖つき野にかゝるかち人のくる
しきにやかくいふ

かち人の東の旅の草臥に

杖つき野とや人のいふらむ

やうく此野を過て石薬師と云所に著つゝきの里
を庄野といふ此所を通るにしも人の語る歌とは何
事をいふぞと問へば其中に歌ゑる人や有けむ我お
もふ事を三十一字にて云とをしへけるはさらば歌
よまむとて

ひたるさにゆく事かたき石薬師

なにと庄野のやき米をくふ

とて其庄野の名物なれば手毎に是をもとめてくふ
しも人の歌にはよしやあしや尙ゆきくゝて龜やま
と云所に至るやまのある方をみれば時雨のふるや
うにみえけり

名にしあふみやこの西の龜山の

やまにもけふや時雨ふるらし

ほどなく關の地藏に著此關のならひとて顔白くこ
しらへまことの地藏顔したる女どもの錫杖にはあ

らで杓子と云物を手毎に打ふつて旅人とり給へ
とまり給へ勞扶むく日も暮ぬ是よりさきに里はな
し通すまじとこゑくにいふ

梓弓はるくきぬる旅人を

爰にて關の地藏かほする

我には罪過もなしたのむまじ教外別てむかし南無
阿みの徳から腹もふくるゝほどくたれば杓子にて
すくはずともとこゑもはやりがにいひて尙馬をは
やめて坂の下の里に著一宿

三日 天晴風閑なり此坂の下は四方に山を戴溪深く
水の流れ目馴ぬやうの所やまの紅葉はさながら唐
紅をかざしたる心地してゆきもやらす
色々の紅葉をかさす坂の下を

ふりすてかたき鈴鹿やま哉

漸坂をよぢてはるく山路を凌て土やまを過て
水口の里にかゝる過し三月の初通りし事思ひ出て
左右の田つらをみやりて

水口を苗代にみしあふみ路を

歸れば霜のおくて田となる

それより和泉川渡りて石部のさと過るほどに京よ

り關むかへとて人々れる語りて行々鏡の山をみれ
ば時雨の雲にかくれけり

心ありて時雨に曇る鏡山

やつれぬる身の影をみせしと

かく云より又雲晴て曇もなし

旅衣やふるゝ影をみせしとて

笠きて腰をかゝみやま哉

ぬきあしになりていそぎて草津の里を過て矢橋の
渡に著あたりの人々來て舟に乗る折ふし追風吹大
ひえを詠やりて

追風に舟はやはせの渡しなれと

やふれ衣に身はひえの山

小戯事打かたらひこがれゆく辛崎の松ながら山詠
やりて

辛崎の松ときくより歸來て

むかしなからの山をみるかな

ほどなく打出の濱に著此所の預り人殊に我々たし
き人なれば常の人よりは懇にいたはるほどにはや
古郷にもきぬる心地し侍りける秋の夜のちよを一
よの心にて此夜は寢もせで明す

四日 天晴陰されども里はうちてなれば相逢の關にかゝる關山の紅葉一きは勝たり少時詠居たり

花さかり打出の里に立歸り

けふあふさかの紅葉をそみる

關こゆるに人々おぼへならひ居たりみればみし人なりそれかかれかなどいひてかち人の渡るに滯ぬ花のゑら波と詠てぞこえしいまはまた歸り相坂の關ふみならずとうちかたらひゆくほどに追分を過て山科の里にかゝる又京なる人來るめづらしさにそこなる庵に立よりて玄かゝ物語してそれより日の岡の坂のぼる住馴たる京なれどもはるゝのゐなかわたらひにいま歸てみれば目馴ぬ心地し侍る東やまの紅葉こと更なり是までは旅の行衛のつれづれなるまゝに何ならぬおかしき事をも筆にまかせ侍るいまはやおほやけ事などさしつどひてきのふのうさもこひしきほどに覺えてみやこに入ぬ

元和七年東海紀行終

澤庵和尚鎌倉記上

宮柱ふとしき立て萬代に今ぞさかへむ鎌倉の里と聞えしは昔年^{そのあひ}三浦の一黨頼朝に思ひ付申て北條より此里へむかへ奉りてより威光めでたうして天下をたなごゝろのうちににおさめたまひけるとかや鳩の峯を鶴が岡にうつります神垣も宮柱いやましに立そひ國萬代の祝歌なるべし本より神と佛は水波のへだて一體異名なれば本地をあらはせば西方の化生日の本にあとをたれ給ふ神佛如々なれば瑞垣もへだてなく神の宮寺には東方の化主醫王善逝を安置し夕あかつきの鐘の響無常の夢をおどろかし四方のかためとて里の四隅に四箇の律寺をはじめ國泰民安の祈をつとめ佛の威儀をあらはし衆生を利益したまふわが禪法流布の期なり至けん後鳥羽院の建仁二年に明庵榮西禪師大宋よりかへり土御門の建仁には洛陽河東に禪寺をたて顯密を兼をかる順徳院の建保三年に鎌倉に實朝の時壽福寺をたてらる是五山の其一なり惣じて上をうやまひ下をめぐみ現當を兼つとめられけれ共夙因

のつむ所やうすかりけん現在の果報みじかくして獅子身中の蟲とかや身のうちにて身をやぶる事と成實朝はやく公曉の爲に失なはれ給て家たじろきぬれど萬代のちかひなり里に残けん後の九代鎌倉殿とかしづかれ天下は一人の天下にあらず道あつて代をまづめたまふ人の天下なれば家は平にかはれども洪基をひらき給ふは源なり中垣のへだてをいふは人の情なりまかるに此家も數代かさぬれば上をうやまひ下を恵む心うすらぎおごりに家かたぶきて其後尊氏公天下の武將として一統の代と成て都には長男義詮國を守護し給へば關東をば二男基氏にあづけ給ふてこの里はとこしなへにさかへけらし前代の形見とて世に残る物は神社佛閣なり平時頼建長禪寺をはじめ五山の第一たり大覺禪師を開山祖とす此禪師は字は蘭溪諱は道隆大宋より後嵯峨の寛元四年に來朝し給ふ蜀の人なり昔年千光國師榮西建仁年中に入滅し給ふ我世をさつて後三十年に來朝の僧あるべし我三十三年の拈香^{ねんかう}の師に請すべし是を布施しまいらせよとて藕絲の袈裟をのこされける年月うつりて三十三年の忌を筑前國はかたの聖福寺にしていとなみけるに來朝

の僧もなし識もあらぬなりといひける所に半齋計の時分大宰府に唐船人ぬいかなる人や渡りけると尋ければ大覺禪師此船にて來朝なり即拈香に請じける拈香の語は建仁の錄にみえたり「蜀地雲高 扶桑水快前身後身 兩彩一賽」と云々千光は扶桑の人なり水快とは千光をいへり大覺は蜀の産なり雲高とは大覺自いへり自贊の語なり前身とは千光をいひ後身とは大覺の自いへるなり合て一人なりと云ければ兩彩一賽といへるなり藕絲の袈裟今に大覺禪師の塔西來院にあり千光國師三十三年に大覺齡三十三にして寛元に來朝し給ふ其上千光の遺言大覺の來朝千光の三十三年大覺の歲三十三誠に符を合するがごとし又本朝に三十三年有て後宇多の弘安元年に壽六十六にて入滅ありき瑞鹿山圓覺寺は時頼弘長三年に薨じ給ふ其先大覺禪師時頼遊山の次禪師曰此地は叢林相應の所也建立あるべしと時頼時節をうつすべからずとて折節田をかへしむたる耕夫の鋤をとりて時頼一下玄たまひ又同大覺鋤をとりて一下玄給ひ其所に草をむすびそめ給ふ其後弘安元年に大覺も入滅ありて同五年癸丑のとしに時宗公立おさめらる時に詮藏主英典座を

兩僧使して大宋へ渡され住持を請せらるその狀に曰

時宗留_ニ意宗乘_ニ積有_ニ年序_ニ建_ニ營梵苑_ニ安_ニ止緇流_ニ但時宗每憶樹有_ニ其根_ニ水有_ニ其源_ニ是以欲_ニ請_ニ宋朝名勝_ニ助_ニ行此道_ニ煩_ニ詮英二兄大覺祖之弟子莫憚_ニ鯨波險阻_ニ誘_ニ引俊傑禪伯_ニ飯_ニ來本國_ニ爲_ニ望而已不宣

弘安元年戊寅十二月廿二日

時宗和南

詮藏司禪師

英典座禪師

兩僧に依て宋に入同二年の夏佛光禪師請をうけて來朝し給ふ即圓覺寺の開山祖是なり圓滿常照國師と號す諱は祖元字は子元自無學と號せられける第三龜谷山壽福寺は實朝の時に建立し代も先なりけれど十刹の位にてありし後に五山に任せられける故に鎌倉の五山の第三に列れり千光國師開山祖たり塔を逍遙庵といふ第四山淨智寺は龜山院の文應元年に來朝ありし經山無準の法嗣兀庵禪師開山祖たり師檀の縁やあさかりけん後四年に時頼既に薨じ給ふ其後禪師は志ありて宋にかへり給ふ附法の弟子心翁禪師南洲宏海

和尚年わかきをもつて大宋徑山石溪和尚の法嗣佛源禪師大正念和尚に言を残し給ふ故に心翁佛源兩師を開山にさだむ兀庵を開山とせざる事は故ありとぞ第五山淨妙寺は山を稻荷といふ千光法嗣退耕行勇禪師開山たり塔を光明院と云このほか十刹諸山の禪院代の新營數をえらす來朝の法師歸朝の列祖此里所を残し給ふ其昔延暦の比和州大安寺行表和尚示寂そのさき神秀派師來朝あり行表和尚大安寺に禪院を立行表空海最澄參禪有之其禪は宗派斷絶す南宗の禪日本につたはりてより此里は誠に禪河のみなりとや己が十二世の先師圓通大應國師も龜山院の文安三年の秋に歸朝ありて建長寺住持し給ふ此あいだ筑前の興德寺同國横嶽崇福寺京師の萬壽寺に住し給ふ相合て四會の服あり後宇多院その道をえたひ給ひて國師遷化の後城西の安井に龍翔寺を創草し給ひて師の遺像を安置し跡猶今に残れりそのほか城南の薪の里妙勝寺所々跡を残しつるに建長寺に入滅をえめし給ふて天源庵と云あり天筆を染たまひ塔の額を普光と賜る一たびかしこに行て香をたき報恩の志をとげ其外法祖の塔を焼香順禮せばやとて寛永十年癸酉の仲冬の

はじめ江府を出れば旅より旅にたつ衣手さむきあかつき左は江水漫々として白く右にむかへば富士の根をろし玄のゝめも明ゆくそらに村寺の鐘を聞て

曉出江城對士峯

路邊水白照衰容

征人馬上知繼夢

道者緩敲村寺鐘

たひ人の朝たちて行馬のうへに

見つゝや宿に残しつる夢

またさめぬ此世の夢に夢をみて

いやはかなゝる身の行衛かな

たひころもかたしく袖に入る夢は

故郷人のよるのこゝろか

旅ころもかりねの夢は夢のよを

見ならはしともえらてはかなき

明ゆけば海道をふるに袖も引ちぎらず上下人ゑるゑ
らす打過くゆく衛いづれか世にのこりとゑまるべ
き夢にあひ夢に別るいづれをうつゝぞや行とまるべ
き終のやどりをゑる人やある本覺のみやことやらん
名には聞つらんおぼつかなし

東往西還見幾人

人々相遇孰相親

親疎不問草頭露

露脆風前夢裡身

西行法師

いつくよりいつくにかよふ道なれば

此世をかりの宿といふらん

とかゝる事を聞ても身の向後おもふ人は稀なる

とまる身も行もこの世の旅ならは

つゐのやとりを人にゑらせよ

と口内につぶやきながら行にかしこの里のこなたより左について行末こそ金澤へ入道なれと云その里の名をとへばかたびらの里と聞く

地白なる霜のあしたはいかならん

夏そきてみむかたひらのさと

と俳諧して谷合の道をへて行瀬々にして高き所に上れば古き寺など見付て山路のうれたき心もやぶれぬ魂傷山峡深愁破崖寺古と杜工部が作けん詩を思出ぬ又一坂を上れば一本の松ありおひのぼりたる正木のかづら青つゝらくる人もまれなるに山男獨爪木とるが是にとへば能化堂の松これなりと云に立よりて金澤を見おろせば詞もなくて實や此入うみは古より唐土の西湖とてなしけると聞ても偽りならし追門の明神とて入海にさし出たる山あり古木くろみ麓

に橋有はしの下よりゑほさし入ぬれば遙々と遠き山のおくまで湖水と成鹽引ぬれば水鳥も陸にまどふにこそ水陸の景氣も朝夕にかはり金岡も筆に及ばざりしとなり來てみる今は冬枯の野島が崎とをしふるは秋の千種の色もなし水結びつゝ涼みとる折にふれてや名付けん名は夏島に夏もなし島根に海士の小屋みえて網をほしたる夕附日漁村のてらしこれなり染てかはらぬ筆の跡硯のうみのうかひかや雨にきてまし笠島は人の國なる瀟湘のよるの心もゑられけり目路遠けれど富士の根を心によせてまたふらぬ江天の雪と打ながむ浪たちかへる市の聲風まちいづる沖津舟遠寺の鐘もひゞき來ぬ洞庭とても餘所ならず月の秋こそゑのばるれ水のそなる影をみて臂をやのぶる猿島は身の愚なるなげきよりおとしてけりなゑばし島海士の子どものかり残すおきのかぢめか鈍の音荒磯波に釘うたせ朝夕ゑほやきしぬらん箱崎なりとをしふるは松さへゑげりあひにあふゑるしの箱をおさめつゝ雨を守ると聞つるに東のうみのそこふかき神の心ぞたつとかりける

島々やいく浦かけて山とうた

いかになかめん三十一文字

かくて爰に日を暮しなんもいかいならんとて山を下り里に入ぬれば朔日比の山の端に纖月幽にして鏡のひいき海岸のそこにこたへ岡のやかたはなみにうつり龍のみやこに入ぬるやとおぼつかなし海士のいさをたよりに宿とひて一夜をあかし先寺に詣けるに本堂一字有諸堂皆あと計なる五重の塔も一重残りぬ此金澤山稱名寺は何の年にか龜山院の御願所と號せらる此所は在家もまじへず今の在家は皆當時界内なり殺生禁斷の浦なりし漁人など申者一人もなし時うつり國一度みだれ寺廢亡して再古にかへらず庄園悉落て武家押領の地となり房跡は漁人のすみかとなり院には跡なく海士の小屋敷そひ當時界外下部どもは武家の手につき門外に有ながらかへりてかれらが顔色をうかいふ有様思ひやるべし佛前の燈もほそく朝夕のけぶり絶々なりと老僧達三人かたられるに袖をうるほしつ昔船つかはして一切經をも異國よりとり渡し其外俗書外典共世に類すくなき本共金澤文庫と書付あるは當寺より紛失えたるなりと語らる經藏もこぼれぬれば本堂に一切經をばこめ置と也寺の致

境を見めぐらしぬれば山かこみ古木そびえ立て松杉の隙ごとに秋よりげなる紅葉のほのめきて青地なる錦をはりたらんはかゝるべきかなと云あへり

何とたゝ空にまぐれのふり分て

そむるかへてにまじる松杉

堂前の池には蓮のふる葉みだれ合水ひやかに伽藍の跡ともは野菜のたねと成一の室といへるは萱が軒端かたぶきてめぐりの房もひえわたりて人のおこなひもせずおもへば還て寂寞無人聲の扉をとち座禪觀法の床をまめたるに似たりかく佛法零落の時節いかなる人か世に出給ひ絶たるをつぎすたれたるをおこし給はんか慈尊三會の曉をたのむばかりなり世に生れて人の時めきさかへ何事をなすも心にまかせならずと云事なくいきほひに任せぬ事いく世の因縁をつみてか果報のかゝる事は至るべきぞやたい人と生るのみさへかたき事也たとへばあまつそらより針をおろしてわだつ海のそこなる一票をさして取らむとし浮木を求める龜のごとし況かゝるまれなる果報に生れあひて三葉四葉の殿つくり軒に軒をならべさき草のさき／＼いやましにさかへむ世は濱の眞砂の數もか

ぞへても猶たらぬ祈はいつの代も下より上をおしな
べてうとからぬ心ながらもいにしへのあとをみれば
淺茅が露にやどる月は夜なくかはらず何事も昔は
蓬が杣に引かへたるをおもふにも残る名や宮寺など
いとなみしはかたばかりも世にとまりて今の世ま
でも是はたれ様のはじめて草をむすび置給ふこれは
誰人の立たるをかさねて取おこし給ひて今までかく
なんと所のものゝ口に残りて傳へ申をその代の人の
形見とぞみる是をおもへばみづからのすまぬはいか
にもして形見を神社佛閣に残さまほしき事也此世に
はあだながらも残る名はくちずしてつたへ後の世は
佛果の縁とならむ玄かるを時の人はかゝることばを
かりそめにも聞てかた腹いたき事に云なせどもかし
こき世々の君いかばかり智慧ある人も信じ來たる道
なれば下りたる世のあさき智慧にては此の法をそし
り破りいなさはあるまじき事とはいひがたし安きは
道におし道はいたりがたきもの也百日かゝりていと
なみし家も破るは一日の中に有何事もかゝる理とお
もふべき也此方に來てみしますが笠の軒もおち時雨
も露も降そふありさまながら晨鐘夕梵の聲のみかつ

かつたえぬ計ぞ此法の今少残りたるゑるしとぞ聞ゆ

山言_ニ金澤_ニ寺稱名 響_レ谷晨鐘夕梵聲

時去池蓮餘_ニ敗葉_ニ 院荒籬菊尙殘英

挾_レ楓松竹留_レ秋見 聽_レ雨芭蕉入_レ夜鳴

屋上峯兮廊下海 登臨終日隔_ニ人情_ニ

池のほとりに一木かへであり古爲相卿

いかにしてこの一本に時雨けむ

山にさきたつ庭の紅葉は

とよみ給ひにしより此木時雨にも染ぬとて青葉の紅
葉と申ならはすよしかりぬむかしの主に手向とて

代々にふるそのことのはの時雨より

染ぬ色色はふるき紅葉は

二日にも爰をさがりがたくてかなたこなたを見廻りて
迫門の明神へ詣けるに千歳の古木雲を玄のぎ回岩宮
をつゝみたる山のいきほひ寔に巨靈神の手を延てい
づくよりか此山をうつしけんとかやしきばかりなり
いかなる御神ぞと尋ければ是は三島の大明神本地大
通智勝佛伊豆と御一體なりと神職こたへられける
まうてつるむかしを今に思ひいつの

みしまも同じ神垣のうち

法身妙應本無_レ方三島不_レ阻一封疆

山色涵_レ波顯_二垂跡_一朝陽出_レ海是和光

社の前は島をつき出して辨才天を勸請し島へは第一
第二の橋あり島めぐり古木浦風になびきよる波_々づ
えをあらふ一根清淨なる時六根ともに清し我人のこ
うべに神やどらざらめやたのもしうぞおぼゆる

なみ風も心もなきぬ大海を

さながら神のひろまへに見て

宿のあるじ船もよひしてみづから櫓をして汀を出る
に秋も過行野島こゝなれば

身の秋をおもひあはせて哀なり

野島の草の冬かれの色

夏島はなのみなり時は冬のなかば

みふゆにもふる_々ら雪のたまらぬは

こやなつしまの名にしきゆらむ

笠島に来て

かさしまやきとふ里の夕時雨

ぬれぬやとかす人しありやと

ゑぼし島といへるはとほどもそれと_々るし
あさ夕に波よせきぬる_々ほし島

沖よりあらかさおりやこれ

箱崎といふあり

神の守西とひかしはかはれとも

爰も_々るしの箱崎の松

澤庵和尚鎌倉記上終

澤庵和尚鎌倉記下

明れば三日鎌倉へ赴に一坂をすぐれば里有爰なんむ
つらの浦かたとへばそれと答ふ海士子共遊ぶをみて
四つ五つむつらの浦の海士の子の

あそふは玄はのとをひかたかな

海士のすみかのあはれをみて

波あらすむつらの浦のあまの小屋

かこふとするもまはらなりけり

山路十里計行て山高き所をたいに切通したるみち
を入ぬれば鎌倉山をみる峯一そびへたりこれに並て
松のまげみ是ぞ誠の千年の松萬代の鶴岡と覺ふ行て
の右に芝生の廣き所あり是は右大將の御殿の跡なり
として民今に種物まかぬと也徳ほどたうとき物はなし
大將偏に威有て徳ましますさすば争か今の世までかく
あらんや桀紂は古の人主なれ共威有て徳なれば今
の世の人を桀紂にたとふればいかる夷齊は古の餓夫
なれども賢にして道を存すれば今の世の人を夷齊に
たとふれば悦ぶ徳をねがふべき事也と思ひつゝみゆ

けば漸日も山のはに入相計に鎌倉の里につく爰をば
雪の下と云折からあひにあふやどりなり
冬されに宿とひよれば折にあふ

雪の下てふ名さへあやしき

やどりは瑞垣ちかき所なり暮かたより社頭にぎやか
なりいかにとへばけふは霜月に入て卯日なり神拜
あるよしきこゆ幸やとて夜に入て社參す拜殿には神
樂はじまり五人のおのこ八乙女戸拍子の聲松にひゃ
き笛鼓のまらべ肝に銘す宮々の御灯のかげほのかに
して社參の人々の口々音ばかりは聞えてその人はさ
だかにみえず灯ちかくなれば袖の行かひ色めく有様
よるの神事ほど殊すぐれたるはなし石のきざはし高
くのぼりて本社に詣ければ神主着座あり伶人左右に
なみゐたり御土器めぐり三獻過て樂はじまり左座よ
り伶人出てまふは音の響内陣も感動し鶴岡の松の風
千年の聲をそへ鎌倉山も萬歳とよばふ神事おはり宿
にかへり明れば四日なり冬の日は頼がたし木枯の風
やまきりけむ時雨の雲やきはひけん先いさとをき方
をきよめてわがさす所の寺に行衛をまめんとて五山
の寺々をばおくにひめおき江の島々におもむくみち

すがら浦かけてけしきも所々にかはり目をこらす所
おほし金銅の大佛新長谷寺もかへるさを心にちぎり
てたいにゆくに濱へちかき山本の一村をば坂下と
云名もくもりなくそこすみたるは星月夜の井に影み
れば身のおとろへに爰も老の坂よと越ゆけば極樂寺
と云律寺あり

たのしみをきはむる寺のうちとても

よのうきことやかはらざるらん

と云つゝ門に入てみれば極樂と云名にも似ぬ有様佛
はひぢおちみぐし傾き堂はいらがやぶれ軒おちてか
かぐべき寺僧の力もなくあらき繩もてまとひ立たる
はこれなり七寶正眞のまき柱ならむ極樂寺のかゝる
零落をみて地獄門やいやましにさかゆらんとぞゑら
れけりゑかあれどさる人のいへるは地獄と極樂の境
もさまでとをしともきこえず方寸の胸の中一心の上
よりみづからつくり出す事たれば時のまに地獄も消
て天堂と成べし地獄天宮皆爲淨土と聞ときは此寺の
めぐりにゑげき梢をば七重の寶樹とも見囀る鳥の聲
聲は頻伽衆鳥の和雅ともきく或は現大身滿虛空中と
聞時は佛はまのあたりなり億土もとをからず此を去

事遠からずと説り是に迷へる衆生にかりのすがたを
方便して己心の覺體を表すれば實に利益無邊なり誰
も心をはふらすべからず法は機によつて修すべし

極樂寺前地獄門 人々具足業障根

野燒幾夏春風草 還死受住原上魂

濱邊の道をはるくゝと行て腰越にて舟をかり島へわ
たり九曲なる坂をのぼり一坂くゝにて海のおりてを
木のまより見おろしたるけしきいふかたなし丹青も
筆及がたくぞ覺る來てみる我もよそのながめとやな
らむ見盡滿湘景乗船入畫圖ともかゝる事をや
云つらむ

なかめぬる我をもこめて江の島を

筆のあとにや人のとむへき

下從金際上登空 一島名高州八東

驅景何知自成景 人乗船入畫圖中

於同島和天祐和尚之高韵

西湖易地是君山 江島眺望天水間

潮滿則舟潮落步 波心一路有人還

おのゝかへさもよほして島をはなれもときし道に
むかふ流を片瀬川と云

おもへともおもはぬ人の片瀬川

わたらはさそやぬれまさりけん

星月夜の井を過るに夕日もかたぶけば

雲はれて道はまよはし星月夜

かまくら山はなのみなりけり

新長谷寺に詣でゝ

やまとぢやうつせは爰も泊瀬寺

おのへのかねのよそならぬ聲

あまをぶねはつせとよみしは實に爰なるべし海山かけてながめ一かたならぬ所なり暮て雪の下のやどりにかへり五山の様體とも所のものとふ建長圓覺の兩寺はならびの山也淨智寺もむかふの山也壽福淨妙は各別の所なりそこゝの道のすがらを委うかゝひ焼香順禮の爲なれば香の資など取ゑたゝめ威儀をととのへ先建長寺にむかふ左の偏門には海東法窟と云額あり右の偏門には天下禪林と額あり正門には巨福山と云額あり山門には西岡の筆にて巨福山建長興國禪寺と二行に額あり中央の爐は石なり閣はやぶれて今はなし仰で見ればかりに板をまき其上に觀音の像を安置すたゞちに佛殿にむかふゆくての右を嵩山と

云古木雲をまのぎ常磐の松に秋の色をまじへ折から山のはへいはんかたなし開山塔西來院は此山のかげ也惣門に嵩山と云額あり佛光禪師の筆なり方丈あり庫院あり照堂には圓鑑と額あり圓鑑と打たる額に故あり開山隨身の鑑なり入滅のきはに是を志ふかき隨時の僧に授給ふ開山入滅の後時頼師を慕給ひ愁嘆ななめならずある夜師夢に時頼にむかひてのたまはく我在世に隨身の鑑をまかゝの僧に授ぬ我をまたふ心あらば此鑑を見給へ其鑑に我すがたを殘すなりと示し給ふ夜明てふしぎのおもひをなしまかゝの名ついたり僧やあると尋給ひければさに候と申鑑や持たると問給へば夢の内の師の示しにたがはずさらばそのかゝみをとてとりあげ時頼つねに此かゝみを見給ひて師をまたひたまふ鑑の金をみがきたるに觀音の像とみえたる金の紋あり是をわがすがたを鑑に殘すと師のまめし給へばまことに師は大悲の示現有て佛の身をあらはし世をすくひ給なるべし時頼薨じたまひて後開山塔に籠給ふさてより圓鑑と額をかけたると寺僧語らひし鑑の體は爐形なるが爐のまるみを鑑の面に見せてみがきたる金の紋に大悲のすがたは

のかにありむかうより見ればそれとゑられぬ開山の墨跡どもをも香拜の次望て見ぬそれより先師大應國師の塔天源庵に入ぬるみちすがらよのつねならずそのむかしわが山の開山祖大燈朝參尋請して此道をゆきかひし給ふらんゑられぬむかしを今みるやうにおぼえてあはれなり爰は雲關のあとゝて石にきりつけたるはしらのあとあり透_ニ過雲_ニ關無_ニ舊路_ニを頌せられて我祖の句裡の雲關をすぎて普光の塔にいり香をたいて慈顏を仰拜す諸師の塔ども残らず願禮し次の日は圓覺寺に入開山佛光禪師を拜するに所がら常ならず仙境やかくあらんと覺ゆ塔樣殊勝なり慈顏うるはしくいける人にむかふごとく也いかなる屈強の人も泪をもよほす計也野鳥來りて肩になれ白龍けさに現すと傳へしが在世の有樣をうつし椅子に白き鳩二とまりけさに白龍をきざみそへたり實也谷虛にして山のづからこたへ人無心にして物よく感ず芭蕉耳なくして雷を聞磁石無心にして鐵をてんす無心の力いくばくぞや菩提心さへ胸に残らば煩惱なるべしましてぼんなふを胸にをかむをや煩惱卽菩提といへるは一坂越たらん人の眼より云言葉也おのが眼あきら

かならずして達人の言葉を取持來りてわが物となしていへるたぐひ世におほし玉はもと石なれ共みがかげれば光なしみがゝざる石をさして玉なりといはんや玉といはい玉なるべし光なくば何を玉の徳とせん達人のいへるこゝろは石みな玉などもみがきて光を得ざる人皆菩提なり修して何ぞ菩提の光をはなたざると也又修もなく證もなしといへ共修得證得の人のことばなり祖師先德には花實そなはりたり今の世にはあだ花のみ咲て實なし言葉をとる計なり甘と云文字となへたるとて口あまかるべからず火とゝなへたるとて口あつかるべからず口のほとりにある佛法たのもしからず何事をも腹にあちはゝん人こそゆかしけれ佛光の塔を出て第四山淨智寺に入てみれば三間四面の堂一字ふるきほとけを安置していづくを開山塔と云べき様もなく末流邊土の僧一人きたりてかつがつ茅屋ちいさくいとみなかたはらにあり其次に又一僧一字をかまへてゐたり佛前の本尊もやぶれくづれてこもといふ物にてつゝみてありしをわれらみづから負もて來りて膠付などして立置ぬと語けるあさましきありさま也天下の五山などいへるもかくの如

く成はてぬる事やありと嘆息やみがたく又次日は建長寺に入佛國禪師を拜す正統庵は夕に扉をもとぢず人すまざればよるはけだものゝすみかとなるとみえたりいかにしてかゝる故ぞと問ば所領庄園いさゝかも今はなければ兒孫末派は有ながらもわが私の庵室をさへ守かねたる事なれば本庵をいかにもゑがたくととかたり常寂の塔風とぼそをひらきさし入物は夜半の月より外はあらじ禪師そのかみ「月はさし水鶏はたゝくまきの戸をあるしかほにてあくる山風」と詠じ給けるは今みれば識の文也と覺ゆさまぐに色どりゑがきたる棟うつばりを雨にくたし現容によく似む事を思ひこゝろざしをきざみ尊像もいまは露ゑづくにうるほふ後門の方をみれば唐様にきざみなしたる曲机もくづれうづみてあれども誰おさむる人もなしいさゝか香の資を奉りしもたれにかくと云べき人もなし門派の人をたづねて授てかへりし禪居庵は大鑑禪師清抑和尚の塔なり香拜してかへりぬ一老僧後に宿坊へ尋られ古今の物語ども有し次の日は龜谷山壽福寺に入逍遙庵も今はなし逍遙池はあやにくに水かれて草あをし入定の石龜は荊棘かこみ藜藿さけ

り方丈も今はなし残りたる一院にいさゝか開山塔をかまへて香燈をそなふ千光國師の尊像嚴然たり佛殿もかたばかりの體なり淨妙寺は小佛殿方丈これもかたばかりの體なり天地只一僧寂寞の扉をとぢて音もせず開山塔をば光明院ときけど光や地におちけんとおもふばかりなり爰を出てむかふ山に報國寺といふあり惣門に漸入佳境といふ四字を題す是より認入ば岩のめぐりたるかげに佛殿方丈ありさばかりの跡也爰をも出て又むかふ谷に入ぬ左に入ふかき谷あり覺園寺と云律家あり實に古跡なり尊氏將軍の再興し給ひてよりこのかたの寺也むねの札にたしかにちかひて見所おほし長老坊の造など外にはいまだみぬ様なり年中行事の須簿あり叮嚀なりむかしはさぞ今は定て十が二三もつとめはあらじとおもふ八十の老僧一兩人うち眠て壁によりたる有様いづくにたとへむさびしさと覺えずいさゝかも世中をばゑらぬがほ也こゝろにまかせなば爰にとまりて生を送らまほしくぞおもふ捨ぬる身さへ心のまゝにならぬ事也人の思ふにちがひぬ此寺庄園も少のこり山林もあれども人おほきにより境日々におとろへぬとみえたり甲斐力

の人あらば今すこしは軒端をまかゝげ庭の木葉をもはらひつべうぞおぼえたりいづくにも任にあたる人まれなり境は人によつてあらはるゝといふ事實なり五山などのかほどまであさましく成ぬる事はいつの時よりかとへば伊豆の早雲關八州を領せられければ共そこゝの國郡をゑる人達皆北條に隨と云ちぎりばかりにて國郡はむかしのごとくあづかりぬるなれば八州の司と云ふばかりにてゑる所の料所やせばかりけん事たらざれば力もいらすしておとしやすき寺社の領知を皆おとしてわが臺をにぎほされてよりかくのごとく成ぬと也五山など云を地をけづりてはたすべきものいかゝとて僧一二人の朝げ夕げをついけよとて十貫づゝ殘しをきて皆おとされ建長圓覺は所ひろきとて百貫のこされし今もせめてむかしの地ならばもゝの數にも事たるべきにゑる所も此世に替ぬればもゝと云名ばかりにて庫院のけぶりもにぎはひうすきなどかたるに付ておもふ人は世によき名をこそ殘さまほしき事なれ早雲かゝる事をゑをきて寺社皆はてわが家さらば千代萬代もさかへば其家に善人生れあひてあらき道をよきにあらためば先祖の名も

かさねてあがりなむ家はやゝはてぬればあしき名のあしきまゝにて世に残ぬる事は殘多事なり家をば萬歲千秋と祈べき事なり一度はあしき事もあれどもあらためてよきにかへせばあしき時の名かくれてよき名を殘すはめでたしわが身にことたらぬからに外をむさばり寺社ついやす我こそ心ありてつけず其人のつけたるをとおすは重罪なりされども無道ながらもなべて世の人の心なり事たらぬより心の外の事もあるべしあまる財あらば外にもほどこして一は菩提のため一には名を後の世に残す外の徳何かあらん此ごろ神社佛閣修造の御沙汰有ときくにこそ御家も久しくつたはり御名も萬代までとゑらるれ世のやすからん事を上におぼすより下が下まで人のいきほひかりてめでたうぞみえける此山陰の僧徒までたのものしきなどいひあへり龜が江がやつと聞て

くちぬ名のあとはかはらしをのか身に
ふる萬代のかめかえかやつ

爰は梅がやつといへば

むかしたか軒端にさきし梅かやつ

わすれぬ宿の香に匂ふらん

梅谷梅開憶_ニ昔年_一 昔年榮達盡黃泉

紫羅帳裡珊瑚枕 曾宿_ニ此花_一誰作_レ眠

あふぎの谷におりゐてみればあふぎがたにほりたる
石の井あり名水とはいへどもなつとてもむすびつべ
うもおぼえず山の方にぞみえし

夕かほのまろきあふきの谷なれや

つまこかしたる山のもみち葉

花のやつにて

さそなむかし咲けむ春の花の谷

あとの名までも猶にほふかな

いにしへ阿佛此里に下り月影のやつにかりのやどり
して居たまふ所ときゝて

その身こそ露ときえてもなきたまや

今もすむらん月かけのやつ

かくて爲相もくだり給ひてもろともに爰にてなくな
り給ひぬとか爲相の石塔とて慈恩寺の上の山に有名
の手向に

石の碑はたか後の世のためすけそ

とふこそくちぬ其名なりけれ

やつゝを見めぐるに爰はたれかしこは其なにがし

すみけるあとゝいふ跡限もなし

建久封疆多變_レ寺 寺終廢壞又平蕪

千旋萬化不_レ留跡 昔日英雄骨又無

九代の跡といふを見て

麻はなく蓬とよみし言の葉や

わか代の後をかねていひけん

新勅撰に入とやらん泰時の歌に

世中に麻はあとなく成にけり

心のまゝの蓬生のみして

と有を今おもひ出てなり又

みてそけふ思ひあはする麻はなく

心のまゝのあとのよもきふ

同じき歌の心ばへなりあれなる岡邊こそは文覺上人
の遺跡なれとあない頼し人の申せばよそながらみて

かくといかてすむ世におもひ岡邊なる

一むらすゝきあはれとそみる

有_ニ文覺遺跡_一 只不_レ見_ニ其人_一

遮_レ眼霜餘草 斷_レ根水上蘋

懷今復懷_レ古 觀_レ世更觀_レ身

四百年前事 于_レ時感慨新

いくたびもとて又々八幡宮に詣で

十かへりの木するゑをならす風のをとに

こゑをあはする鶴か岡の松

添千年縁鶴岡松 永翼蔽源家後蹤

禱則感應如_レ在_レ扣 神宮寺裡一聲鐘

入_二巨福山建長寺_一拜_二開山大覺禪師_一於_二西來

院_一偈經曰照_二于東方萬八千土_一云々

不_レ覺_二從前大覺尊_一照_二東方土_一破_二群昏_一

篙師得_レ力西來意 下載清風月一痕

拜_二瑞鹿山圓覺寺開山佛光禪師_一

圓覺伽藍包_二大千_一 大千日月這中旋

展_二虛空手_一禮三拜 宇宙橫_レ身老鉅禪

入_二龜谷山壽福寺_一拜_二千光國師於逍遙院_一

照_レ暗千光本一光 逍遙大宋止扶桑

請看黑漆崑崙耳 敬爲_二祖師_一燒作_レ香

金峯山淨智寺開山塔五山の第四也

門庭不_レ設祖師禪 淨智莊巖松竹旋

見磨我宗眞建立 草深一丈法堂前

拜_二稻荷山淨妙寺開山塔_一曰_二光明院_一 今則亡天地只一僧可_二

憐生_一々々々々
五山の第五也

月沈_二野水_一光明院 峯披_二青雲_一祖塔婆

當昔決_二龍蛇陣_一處 看來今日一僧伽

拜_二報國寺開山佛乘禪師_一題_レ門曰漸入_二佳境_一

認_二題_一門字入_二佳境_一 枯木回岩裏古蹤

想見祖師行道日 其聲今聞意中鐘

拜_二佛國禪師之塔_一先問_二塔主_一山風暗答常寂塔

者無_二香燈之備_一雖_二法門之正統_一庵_二缺_一提綱之

任_二否空房而老鼠白日行_一野狐人_レ夜宿禪扉不

閉風霜飽浸_二慈顏_一吁時乎命乎聞_二昔年之盛

事_一見_二今日之頽廢_一感慨非_レ一卒賦_二裡語_一云

土曠人稀一塔荒 禪扉不_レ鎖飽_二風霜_一

可_レ憐此法今墜_レ地 佛國光輝有若_レ亡

拜_二大鑑禪師清拙和尚於建長寺禪居庵_一

盤_二結乾坤_一作_二草廬_一 大唐日本一禪居

出無_レ門矣入無_レ戶 塔樣直看先切初

入_二長建寺裡天源庵_一拜_二圓通大應國師於普光塔_一

須彌頂上普光塔 二鐵園山一塔龜

忽向_二那方_一消_二禮拜_一 元無_二西北_一絕_二東南_一

覺園律寺尊氏將軍再興有_二棟銘_一

覺園律寺日苔生 木葉鳴_レ風布薩聲

八十吳僧不_レ言_レ戒 只依_二床壁_一睡 爲_レ榮

澤庵先師從傳心印、無上妙道、左右逢原、和言漢語、不勞心力、任心所欲、漫顯紙墨、字々句々、不昧宗旨、見者不覺、袖中得珠、嗚呼先師、辭世四十八年、今讀此卷、追懷往事、如同昨夢、仍書卷末、

元祿五壬申年二月十四日

春澤叟宗晃

右澤庵和尚眞墨之寫也

澤庵和尚鎌倉記下終

立圃東の記行

守たる人江戸へくだらせたまはんとて長月のはじめ
づがた伏見に一夜とまりたまふにまみえ奉りてより
みちすがら口のうちにつぶやきける句どもを書付侍
るは長々の旅のつかれをまぎらはさんのたはぶれ事
なりかし伏見にて

門出をやよくおかみふし三日の月

逢坂やのほりくたりの月毛馬

秋風の大津まくつゝうしの波

野路草津をとをとて

花々の色をや野路の草盡し

花に口る花むらさきの石邊哉

水口あたりのわさ田は刈ておく手はまだ青かりしを
見て

たけはゝやあふみおもての稻むしろ

こ山のほとりに蔦の紅葉まけるを見て

色そへて赤土山やつたかつら

坂の下

山坂の下ひえわふるたひねかな

まはふきやせきの地藏の秋の風

龜山は蓬萊島か霧のうみ

六日の日にはかに雨ふり出て近江の菅蓑に伊勢のあ
みがさよなどゝ人々なやみさはげば日高く四日市に
といまりたまひぬ夜一よ降てあくる日もふりみふら
すみさだめがたき空にてくるゝまにゝ猶まきりに
ふるさらぬだに旅はうきにぬれてほす菊の露にもあ
らざれば所の名もつらくおぼえて

秋のたや二日はとむる四日市

桑名のわたしにて

秋風やうけとりかちのわたし舟

すゝむしや波を名よせのなるみ潟

岡ざきにて

長月の弓をや橋に矢はき川

池鯉鮒の明神にて

秋の葉はちりふのよねか神の庭

赤坂にけいとうの咲けるをみて

赤坂の名にこそたてれ鶏頭花

けふは九日也菊のきせわたは旅ながらもとてあたゝ

め酒を汲かはせしに

重陽の菊ころもをや旅ころも

鹽見坂よりゑらすがのあらゐを見おろして

秋風にあらゐは波のゑらす哉

濱まつや聲遠江きりのうみ

十日のくれがた風すこし吹て雨雲立かさなりしも夜
に入てけしきかはりければ

星ひとつ見付や晴る秋のあめ

又の日あしたは露白く露もこぼるゝ計に見えていと
さむし

旅はうし漸さむき日の踏皮はよし

懸川の橋は土橋と見えしがよく見わたせば柴をつか
ねあげて土をあつくおほへり

かけ川や橋は椎柴栗はしら

月はいささよの山中晝とをり

茶屋に立よりたづさへたるさゝへを取出たりしに

まゆくの名をきく川やよき酒の味

木々はみないろはつゝきのかなや哉

色鳥につふてやうつつの山かくれ

十三夜江尻にて

名月もえゑり申さぬたひねかな

同じ所にて富士の山をながめて

月は二度常に名高しふしの山

十四日清見をこゆるとて

過し夜の月の名やまた清見かた

田子のうらにて

身にままんあまの手あしや鹽ころも

うきしまが原よりふじの山をみて

雲きりにかくれん坊か富士太郎

其夜は三島にとまりて

光そふ月やみしまの神すかた

秋さむき山中もいさ茶屋の餅

にしきにてつゝむや何のはこね山

ともすりに赤き木葉や猿すへり

秋さむみたつや湯もとの茶屋の門

むかしがたりをおもひ出て

月やむかし見し大磯のとらの時

八穂もやとつかにあまる年貢米

とをき旅の道もさはることなくけふは口りつかんと
て上中下いさめるに川さき品川を過るもうれしくて

菊の香は咲し半や氣の藥
待まうけし人々いかにとたがひによろこびあへるを
見て

櫻田や時いたりぬる紅葉の賀

立圃東の記行終

宗因東の記行

こゝにひとりの翁有けり身はいやしくて四の民にもまじらずかたち釋氏に似て精舎にも住せず林下に心を玄めながら塵裏にはしる玄れものなりつくばの道を道としてそのともがらを友とす四方の國々にうそぶき世に玄たがひてあそぶ東のかたにこゝろざし有ける時は彌生のはじめになんもとよりすみ所もとむるにもあらず身をうき草のさそはるゝかたもなくて心のゆくところにまかせて春過秋來りすでに文月の廿餘日には陸奥のなこそこの關をこえてながしの城下にいたる此地西北にめぐりて皆山也すぐよかならずして茂林青々たり南に川有日夜東流して蒼海にのぞめば東吳萬里の舟をつなぐゆほびかなる壯觀也なこそこの關はこの御湯、野田、玉川、緒絶橋、小川橋、岩城山この城外一二里のあいだ也をのゝ興ある地也玉川の水上に城主優遊の地あり東籬に菊を愛し南山の黄葉時を得たり茸狩川逍遙のたよりおかしき玄つらひ也

世をつくすわかところかせ下紅葉

海のつらにはとまやがたの休所あり大河もかきねにながれ潮水門外にみなぎる子陵がいとなみにことよせて日を暮し夜を明すさながら仙客にことならずして斧の柄も朽ぬべしやうゝ葉月いざよひの頃ちかの玄ほがまちかきにはあらねど都よりだにおもひたつべきをともしおほせて同行をさへたまひにければ道すがらくちすさびつぶやきて相馬中村を過て名取川仙臺川みやぎが原の秋のさかりはいともさら也

宮城野を都の嵯峨は花もなし

たちて六日にやまた朝霧のほどにかの浦につきぬ聞ならく六十餘國の中々に詞もたえたり河原のおとゝのむかしも思ひやられてかの朝臣のこゝによるなんとながめし蟹の小舟に乗て霧のまがきの島がくれなくさしめぐる

鹽かまや色ある月のうすけふり

浦山はいつくはあれとあまをふね

かゝる所の秋のゆふくれ

島かくすそれしもきりのまかきかな

さて松島のたいすまゐやまかはりめづらかにていたりふかきくまぐ見所おほしそのよはあまのとまやにやどる

いのちよりうれしくみつれ松島の

まつのおもはんよはひなからも

松島のゆふへを秋のゆふへかな

月にかせをしまのあまのそてまくら

あくれば廿二日空よく晴たり又一葉に棹さして雄島が磯なにがしの島のこる所なしよのつねの松の枝さし岩のかたちめなれぬさま也天とお鴈友よぶちどりさながら畫圖にむかふが如く又詩聲をきくににたりやまゝ遠寺の鐘夕照をおどろかし遠浦の歸帆もよほしがほ也興に乗じて來りけふの樂み何にたとへんあとのゑら波かへるさはゑのぶの郡二本松御松などいふわたりをへて又岩城にかへり入ぬこゝに又日比ありて長月の末に

千々の秋よしやわかればいのちかな

此たびは白川の關にかゝりて

遠くきく秋風わくる關路かな

下野國あらるといふ所に西行法師のよめる清水なが

るゝ柳あり

時雨にもゑはしとてこそ柳かけ

風やゑくれなすの篠原露もなし

道よりたよりにつきて岩城へ

いとま申かへる山々ゑくれ哉

神無月のはじめにむさしの國にいたりぬこゝにもゑる人あまたこなたかなた一日ふつかと過行に雪霰がちなる空には老の出立もいかにぞや春待つてなどいふにとゝめられて師走の空にもなりぬ京の人きあひて物語のついでにやつがれがむすめ文月のころうせにけるとおらひを聞にとまかくもおもひわかす今まで告ざりし故郷人もおぼつかなく夢にやあらん僞にもやとよろづに思ひわくかたなし

聲をたにきかぬを聞き人傳は

さなから夢のわかれ也けり

いにし春老のわかれこそ心ぼそう思ひしにかくさかさまなる愁にゑづむはかへすゝつれなき命にこそかゝりけるわかれもゑらて老か身に

いのちはかりを思ひつる哉

からうじて故郷の文にそのほどの事こまぐなる中

に

あはれこのわかれをいひもなくさまん

人さへ旅に思ふかなしさ

忍ぶぐさのおひたつさまをきくにもこはまさるらんとこそ思ひやらるゝやみのうつゝは夢かとのみ涙にくれ行年の名残さへいとかなし

打すてゝこはなそ老のとしのくれ

かくて年あらたまり明行く四方のけしきもいちじろしあめがゑたゑろしめす御所なれば御門々々よりはじめ民の家居まで松たてわたしたるちとせのかげにさし出べきならねど世をいはひ身をことたつ日なれば

御代のはるよもの本たつ東かな

むさしのやけふは霞もなひく世の

行末とをき春はきにけり

世中のだやかにはなやかなる日數にそへても心のやみははるゝかたなく旅の空にしあれば一僧を供養することなくたいみづから念珠のついでにつゞり出る句百の數に及ぶねがはくば唱ふる御名のちからにひかれて五障の罪をかるめ九品の花ひらくるたねとも

なれかしとてなん佛前にさゝげたてまつるものなら
し

宗 因

春やあらぬさめぬや去年の秋の夢

露に馴にし月かすむ袖

草まくら旅に花さき花ちりて

あとははるけき山路くらしつ

幽なる里も人けも見ゆる野に

舟渡るらし竹ふかきかけ

川つらのすゝしさそふる日は入て

雨落るかと水上の雲

一しきり風に木葉や亂るらん

遠もちかくなれる鹿の音

かりねする麓の庵の月深く

鳴子引手もさむき小山田

露霜の行かふ空や早からん

あはれいつくを雁の故郷

慶はたゝ春ともゑらぬ左遷に

うらゝなる日もあら磯の波

霞分いそく清見か關くれて

駒つからかし歩よりそ行

袖をもる雪打はらふたひくゝに

庭につみをく陰の山柴

身をはたゝ賤か住居にならばして

何か浮世にまたはかへらん

願こそ往生るへき御園なれ

あさはかならぬ契たかはし

見初しはふりわけ髪の末かけて

ゆかしやふかきまとのよそほひ

ねぬるよの夢にも梅やにほふらん

やゝ明かたの園の初蝶

小雨せし名残は露のあたゝかに

打いつる野の春は珍らし

音たつる氷の間のさゝれ水

里はなれなる澤田あらすな

吳竹の伏見の道は草ふかみ

山松のはをおとす下かせ

月かけや霄にまかへてなく鶉

枕わひしく明す冬の夜

片敷もなこやかならぬあさふすま

うつゝにつらきいにしへのゆめ

君かいにし朝の雲のなめして

空もなみたの雨やそふらし

かきりある時をかなしむ花さかり

またふ佛やけふのきささき

墨染の夕の山はうすかすみ

繪によくにたる松をみる嶺

かさなれる岩ほそひえし瀧落て

かみつ瀬清し此よし野川

夏はたゝなかれていつらゆふ祓

月に晴のく天の八重雲

七夕にかせる扇の風たちて

露更る夜の御簾おろしてよ

こぬ人に蟲のねさへやよはるらん

玄のひしものを戀草の色

落としもおほえす袖はなみたにて

つくゝと聞すまのうら波

わかことや友まとはして鳴千鳥

分る茅原の夜道わひしも

曉のけふりとなしてかへる野に

軍のあとは民の屋もなし

時をらぬ田はくさむらにうつもれて

またさし柳枝も茂らす

たゝへたる水もすくなき池の面

霧のまかきの見入さひしき

たかふかすやとりに月の残るらん

千たひきぬたの聲そうらむる

秋ふくる風につけても物思

もろき紅葉にまさるいろく

一玄くれその間はかりのうきわかれ

いつちゆくての道のやまさ

石はしる清水をむすふ門の前

夕日かくれにはそき蟬の音

刈しほにそよめく麥の秋見えて

かよふ野守か栖ゑるしも

跡はたゝ有とはかりの三經

御法に玄かしもろこしの文

おなしくは世をいとふ身を苔衣

おもふこゝろの奥のやますみ

花待て幾有明のねさめせん

ゆふつけ鳥やさそふうくひす

いとはやも關のこなたに年越て

都の人のけはひのとけし

道すから旅をなくさめよむうたに

野山の夕浦の明仄あや

秋にたつる心やはるをわするらん

子ある契りもよそけ身に玄む

玄れものゝことかたらひて露なみた

たてらるゝ名を月もあはれめ

なかれ木となりし行衛をいかゝせん

谷川ひく五月雨の中

雲深き山ほとゝきすあとたえて

樗ましりの林玄けしも

里ひたる社をいはふかたはらに

引をうしとや野飼すてけん

をのかとち童遊にうちみたれ

よはにまろはす雪そえならぬ

朝またきひらく戸さしのさゆる日に

をもむく道の末の根おろし

漕船は比良の湊をめにかけて

波の上もやくれのこるらし

花の色は面影にして行水に

おしむ彌生のほとそみしかき

依_ニ所望_ニ染_ニ老筆_ニ

宗因華押

宗因東の記行終

中山日錄

寬永十三撰丙子春三月二十九日我亞相君詣_ニ皇考日光大權現_一恭惟皇考奉_ニ祀野州日光山_一二十一年于茲矣準_ニ大社二十一年造替之例_一大樹君命_ニ近臣_一自_ニ去年春_一運_ニ成風斧_一朱垣彫宮不_レ日成_レ之神物靈寶如_レ山奉納當_ニ四月十七日忌辰前十日_一奉_ニ遷宮_一當日行_ニ祭祀_一成_ニ神拜_一天子思_ニ其靈德_一賜_ニ奉幣使_一命_ニ右大臣致平公同兩傳奏_ニ二條前內大臣日野大納言與_一大僧正天海_一同幹_ニ此禮儀_一此外役者卿相雲客四十餘人天台_ニ三門跡竹內門主法親王并諸家龍象五十餘人_一自_ニ三月十三日_一出_ニ洛陽_一駕_ニ輶傳_一而至_ニ二十七日_一絡繹不_レ絕經_ニ中山道_一直詣_ニ日光_一岐蘇_ニ二郡者我亞相之采地也故卿相送迎驛馬皆出_レ自_レ我今日發軔禺中著_ニ小牧_一近臣升_ニ肉于俎_一崇_ニ酒于樽_一而送_レ之飲宴移_レ刻未刻著_ニ土田_一自_ニ宵間_一大雨四月朔日雨猶不_レ晴卯刻出_ニ土田_一日午到_ニ大湫_一家臣千村某獻_ニ馱餉_一頃刻雨晴今日更衣也扈從臣庶祈_レ晴僕亦綴_ニ蜂腰_一言_ニ其意_一

大ソラモ雨ノ衣ヲヌキカヘテ

ケフタチソムル白雲ノ峯

自_レ是五里皆山中也細雨濕_ニ衣深泥埋_レ鞋余乘_ニ肩輿_一開_レ戸四顧則山樹生_ニ新綠_一空翠濕_ニ人衣_一誠山徑一致也脯時著_ニ大井_一雨彌滂沱郡吏奔走別無_ニ嘉肴_一野藪亦稀唯獻_ニ小鱸_一

里名大井一河流 不_レ見_ニ金鱗_一見_ニ小鱸_一

蚯蚓青蛙鳴_ニ吠畝_一 農人將_レ有_ニ事_一西疇

二日 天晴日將_レ昇時出_ニ大井_一到_ニ落合里_一過_ニ橋上_一見_ニ北嶺_一殘雪滿_ニ巔麓有_ニ躑躅數萬株_一紅白爛熳因_レ是知山之嶽岑覺坂之嶮難擔夫揚_ニ聲攀_ニ薜蘿_一馬廐執_ニ轡_一秣_ニ青草_一休_ニ足斂_ニ氣漸登_ニ十石坂_一

四月寒岩雪未_レ融 翠微盛發映_ニ山紅_一

陽和未_ニ遍布_一天下 豈獨人生達與_レ窮

又

十石坂頭攀_ニ躋身_一 馬奚學_ニ策左聲頻_一

世營孰_ニ若山間險_一 露宿風飡皆_ニ苦辛_一

山上有_ニ多羅木_一萌茅青嫩可_レ愛可_レ殫遣_ニ奚奴_一折_レ之以充_ニ齒牙_一先師曰本草香椿與_ニ此相類_一愚謂椰栗亦此類乎

挺立多羅木青苞柚嫩芽芳蘚充口腹甘脆淨斷牙一扶
老既成杖滌煩耐代茶鱗甲欺陵鯉頑皮訝壑蛇
亭々存介操磊々不疵瑕枳棘愧形曲桑榆奈景
斜香椿因氣味椰栗共牽擎白足倚斯力十方無隔
遮山中千萬里對此忘繁華

三日 天陰出野尻三里餘至上松其間在華表
以田畝爲徑至寢覺床岩上有小社土人曰昔浦
島子之所盤旋也浦島子者雄略天皇御宇遊丹後水
江乘白龜而到蓬萊當淳和帝時歸本邦其間
四百餘歲也仙女臨別贈一雲篋教之曰必勿開君
歸人間仙術不減而得上壽矣浦島子如約持之
容貌如壯年筋骨不衰或時有欲開篋而見之意
不已少開其蓋雲氣沛勃而出別無一物俄頃顏色
憔悴形體衰憊而遂萎死嗚呼惜哉流落人間不知其
幾年其間或居此地邪後世有浦島子傳一卷說其
來由不說其居所土人傳說其或然乎相君暫慰此
地登臨任意舉杯移刻僕亦賜三杯醉中作古詩
一首效太白體

昔聞浦島子垂釣在丹陽日々水江游絲竿忘故
鄉豚魚猶有信況此白龜藏特地乘扁艇飄々

泛大洋蓬萊雲氣近金闕不藏光中有窈窕女水
膚豈假粧自然諧伉儷抗禮等爺孃一座上樽常滿
瓊筵樂未央忽起歸去嘆臨別執懿篋矢言勿開
蓋塵世經燠涼還里間親族荒墳五百霜當時無
識者脩短夢一場到處成神術卜居寢覺床風雨隨
駕御寒暑任推盪潭水充殮飯石竈自小堂怪哉
天地際仙法不遺芳十試看奇劍千金傳禁方我
今來此境窪上酌三觴

扈從人々詠和歌余亦賦和歌一首絕句二首
旅枕シハシ寢覺ノ床ノ上ニ

五井年サカフ心チコソスレ

浦島舊居名不空蒼崖有跡聽仙風
碧潭千尺難窺底知是白龜藏此中
奇石天然岐水濱見彌佳處勝傳聞
一篋忽發失仙術塵世何留蓬島雲

此晚著山村某館山村者木曾左馬頭之舊卒也庚子之
役仕大權現先登追賊徒取木曾一郡以軍功受
封今屬相君幕下今日奉迎獻潔豐盛膳扈從臣僕
亦飽酒肴相君感悅多賜金帛主人亦獻裝刀主人
子二歲召御前賜短刀

四日 天氣晴和朝飯後出山村館當面有舊壘土人曰木會舊城也山村避其跡別構館舍自是至奴原下肩輿暫息擔夫登鳥居岸去天正十年木會左馬頭與武田右馬頭戰于此岸木會戰勝武田敗北信長父子動大軍遂亡武田門族

義仲遠孫天正年不忘家業執兵權鳥居峠上交鋒乃一戰功成軀武田

過檜井著贊川驛入夜相君賜蕎麥切作法如小麥麵筋冷淘以蘿蔔汁少加醬入鰾粉葱蒜食之恣大嚼則尤宜口耽食者至數十椀木會信州之交有崇山峻嶺而無腴田土人見平岡原隰日光所指焚其草木作灰墾開蒔蕎麥其年大熟明年種之則不熟以石地磽确而然也故易地三歲一蕃畝無賦稅上自縣吏良民下至蕘夫負養以之爲常產商旅行客食之助飢渴蘿根亦異他鄉形矮小而無尾皮礫呵而有毛其味辛辣尤宜麥麵煮熟則味甘以種其子蒔他鄉則形味變化土地之所使也又有香鹿魚木會川之一物也此川急流激湍不生他魚此魚似江豚而小

香鹿沿流陟贊河

揭緒鼓腹倚盤渦

一跳翻轉化江豚吹起海風揚素波

五日 卯刻出贊川午時至下諏訪見湖水作

諏訪勝區天一隅御前池水金鱗腴

神靈若不假威力誰料山中有大湖

六日 登和田岸亭午至和田驛進晝餉嫩蕨生蒜

人皆食之

崔嵬信嶺倦登躋積雪堅水埋徑蹊

像斗未萌風力急行人掩袂意棲々

日晡著長窪驛相君賜雁脯雜魚調羹頒下奚奴

哺雁嘉魚二美并下分奴隸發歡聲

單膠猶味一河水況此山中珍產羹

七日 辰刻著八幡喫朝飯去此一里渡筑摩川

見岩花盛開知氣候之遲

越嶠流遠筑摩川浪花捲雪落岩前

崖下茶蘼堤上李唯今爛熳漏春妍

午後著追分宿淺間山在頭上白雲未消常浮黑

烟土人曰自古四月八日詣峯顛顛周廻一里餘當

中窪而如鉢不見底火焰炎々飛石吹砂皆云詣

祈後世菩提依先年晦朔差互而七日而登焚死者百

餘人自是以來恐懼而不詣天下有變則或先期山

鳴或後期_レ焚燒_二大則飛_二灰千里_一大石翻_二轉數十丈_一之外_二土人亦離_レ家往_二他鄉_一石與_レ石激鳴動破裂小則山上有_二火炎_一暗夜如_レ晝然而不_レ揚_二石飛_一灰是爲_二異矣_一大亂戰死者三日間必登_二此山_一或見_二其形_一或聞_二人馬喧嘩聲_一近時難波之役自_二前年_一焚燒至_二亂後_一燬矣前大樹薨逝之前又燒烟中現_二數千僧徒_一如_レ此之類甚夥矣眼前之所見也或曰山上湧_二砒霜硫黃_一石火相摩之氣也若然則災異之變如_レ此不_レ可_レ應_二之天壤之間怪異非_二石藥之所使_一也抑神靈之所_レ致歟本邦遐邑遠境有_二如_レ此神怪_一不_レ可_レ以_二淺智_一窺測_上焉宜_下仰_二神國之靈光_一書_レ之以與_二賢達_一論_レ之

山色如_レ煤跨_二信陽_一

峯頭萬丈吐_二烟光_一

國家災變必先識

千里飛_レ灰動_二異鄉_一

又

前度八年今又來

蹇依_二旅店_一待_二雲開_一

峯頭直上黑烟起

石火光中白雪堆

麓有_二長倉社_一土人曰諏訪明神從_二此地_一移_二諏訪_一之靈跡也祭祀必用_二鹿頭七十五_一諏訪祭同_レ之神名帳載_レ之不_レ知_二本地_一今得_二其說_一壯遊之益也

八日 陟_二碓氷峠_一陰晴不_レ定黃霧四塞峯頂祀_二熊野權

現宮_二前茅屋二十餘宇_一行旅暫休下_レ坂二里餘壘石爲_二徑曲折羊腸我僕痛矣_一

行々攀上_二碓氷嶺_一

北陸東隅在_二目前_一

揮筆何無_二山壑助_一

壯遊今日憶_二司遷_一

亭午憩_二坂本宿_一進_二晝餉_一去_レ此二里到_二松枝_一天正之間瀧川保守舊城也迹已陳而人亦亡矣往事可_レ嘆哉當面有_二白雲山_一土人僉言名蹟也杜少陵望嶽詩盪胸生_二層雲_一一言以述_二岑蔚巉岩之景趣_一僕賦_二一詩_一可_レ笑可_レ愧

三峯突兀白雲山

側視橫看不_レ可_レ攀

昔日神靈殘_二斧鑿_一

削成岩石在_二人間_一

此晚宿_二板鼻驛_一

九日 朝陰 相君曰天氣如何余應_レ之曰杜詩麥秋晨氣潤日出則雲可_レ開乘_二肩輿_一至_二高崎城_一是安藤右京之亮之領也清_レ道洒_レ水埃塵不_レ起自_レ此到_二藏金_一此處有_二三岐_一一路達_二江戶_一一路通_二日光_一午時著_二玉村_一酒井阿波守之領也郡吏奔走下民匍伏

麥秋時到索陰晴

廻_二視天邊_一幾惱情

日午玉村炊_二玉食_一

御前揚_二盞_一一詩成

去_レ此二里到_二芝渡_一是利根川也因_二其地_一易_二其名_一閭

國然也古誘_二新田義興_一沈_二此渡_一義興靈魂爲_レ雷忽蹴_二死怨敵江戶_一士人恐_二其威靈祀_一此地_一曰_二新田御靈大明神_一于_レ今三月二十二日於_二河邊_一差_二酒食祭_一之舊席零落後人爲_レ添_二神光八幡移_一此社云郡守酒井雅樂頭創_二建之_一席兒維新太平記曰矢口渡古今名異歟

義興既渡_二利根川_一 豈料姻家思_二沈_一船

二代功勳彰_二後世_一 神光烈々御靈前

此晚著_二木崎_一後有_二舊壘_一新田氏族之城也里名_二會里町_一

十日 出_二木崎_一到_二太田_一與_二新田_一交_二里間_一當_二東有

山曰_二金山_一是新田氏之本城也經_二世良田_一涉_二堺河_一

至_二足利_一前日於_二相君前_一論_二笛吹峠戰陣_一大平記點本

訓_二字須比然則信州碓氷也愚謂洛陽人不_レ遊_二遠境不

知_二土地_一碓氷者名山也故云爾義宗屯_二笛吹峠_一後_二山

前_二水是張_一鳥雲陣_二碓氷前無_一水且夫武野一戰後歸_二

本國_一而撫_二育士卒_一可_レ保_二舊土_一矣奈何棄_二西上舊壘_一

而遠逃_二他邦_一哉義宗繼_二家業播_一布武名_一與_二尊氏_一爭

雄雖_レ曰_二一敗_一遽不_レ可_レ棄_二先祖之墳墓_一矣堅執不_レ可

此日相君問_二土人_一土人曰行道山之連峯之高顛曰_二

笛吹_一義宗之所_レ屯也數年之疑義一旦豁然葛藟之言不

可_レ棄矣足利存_二學校_一余弱齡而學_二寮主三要_一遇_二於伏

見_二四書七書六經博士兼_一備_二一人_一自古既然云爾故久

思_二此遊_一今日從_二相君_一遂_二平日之素願_一今寮主迎_レ門

待_二相君_一甚謹矣庠中之什物異朝傳來先聖十哲畫像

披而拜_レ之容貌儼然又有_二款器圖_一蔣龍溪額南隣有_二伽

藍_一曰_二錢阿寺_一足利義兼之創建也義兼中年師_二理真上

人_一專傾_二心密宗_一出家入道號_二錢阿寺_一鎮守祀_二八幡

僧云義兼爲_二神是誣罔也義兼圓寂經_一百餘年_二罹_一回祿

之災_一尊氏又昇_二建之_一自_二禺中_一小雨午後報_レ晴去_二此

二里餘有_二行道山_一關東之名蹟也隨_レ駕而行雨後青山

新綠與_二殘花_一相映如_二錦綉_一漸至_二寺門_一參天松柏萬丈

檜杉隔_二離天日_一不_レ見_二人影_一山鳴谷應水湧石出自_二門

數十步有_二梯倚_一青壁_一百尺而至_二堂堂左右有_二小堂_一

有_二象寮_一有_二學寮_一有_二佛龕_一逢_二僧問_一寺由_一曰_二鎌倉建

長寺末派也中年陵遲密宗卜居今又關山會下僧居_二之

塵外之浮圖猶有_二時變_一況人間世乎寺號_二淨因_一昔黃山

谷題_二淨因壁_一我今可_レ筓_レ口而歸_二乎故賦_一七言八句_一

寺是淨因山行道 僧徒禪坐倚_二窓櫺_一

峽猿抱_レ子不_二哀淚_一 山鹿同群聞_二誦經_一

風舞_二檜杉_一喧_二午枕_一 水通_二竹笕_一滿_二銅瓶_一

險嵌千尺雖寒膽青壁有梯人上亭

逍遙徜徉半時頃而歸途中題鏤阿寺賦一絕

義兼遺跡鏤阿寺謂是密宗真道場

中歲出離無俗氣那伽大定欲傳芳

與學校主人書

謹啓野州學校堂頭老師座前僕自齠齡志學欲此遊者日奄矣今茲從我亞相君之駕而達素願矣一生之大幸也不投刺而與老師交眉宇拜先聖尊像又拜先聖并顏淵子路畫像幸之又幸也然而官事靡監談在一瞬是幸中之不幸也仄聞本邦上世朝廷建大學寮以宿儒老師爲寮頭舉學曹得業生擇其善者而從之諸國設學校遣學生々員令掌教授朝廷以先聖先師爲配享九哲從祀是摸唐朝釋奠禮法州郡不能備禮故祀先聖以顏淵閔子騫爲從祀延喜式之所定也今言從祀顏淵子路願聞其說蓋朝廷所命歟抑又東郡國主之所祀歟學校先師之所傳歟且又足利建學校始於何時以何人爲開基主歟誨示則平生之素願不空而今日之官遊有益而已且春秋二丁釋菜者從唐宋之例歟本邦之所改歟併示諭爲幸矣中世以降蠻夷猾度朝憲久

廢而帝都無大學寮諸國亦不聞有學校此地獨存是韓陵一片石而我道之不絕如綫老師當仁若能輔導斯文則後生晚學必可有聞風而興起者焉然則何幸加之是我之所欲而老師之教育人才亦不外焉老師其懋哉謹啓四月十日

學校答書

謹答尾州之大儒正意法眼之旅簪下抑野州足利之學校者往昔仁明帝之聖代小野篁之所開基也古老之所傳不知其實矣經年而後久中絕矣自中興開山快元先生至第六文伯先生而從祀先聖之儀雖有之文伯在庠之內屋宇有回祿而清規之書籍盡爲灰唯以口說傳而已又不識實否矣先聖之畫像并顏回子路之畫像以子路像可爲閔子騫旨亞相君之所宜況延喜式之所記豈可及異議哉雖然自快元先生五世東井先生之時伊勢早雲庵主寄進之裏書并河內公子路像之外題歷然誠傳錯來者乎全非予迂濶又於當庠春秋二丁者第七世九華先生之代自小田原亂入于當庄再三第八宗銀先生代關白秀吉公關左騷屑以故寺社領悉沒收之然問當庠亦然也其次秀次公爲奧州下向而舍下總國當庠第九世三要

先生行以拜謁矣公曰可移當庠於洛陽矣三要諾矣以故先聖之畫像并額書籍等皆以赴洛陽矣厥後公於高野伏誅刻東照大權現御在洛以嚴命當庠之什物還于此矣如是分崩離折故於當庠釋奠之儀式久廢亡矣右旨趣於御點頭者多幸謹答

寬永丙子孟夏十有一

睦子拜

此晚相君賜學校于南庭學校爲禮謝而來余還旅店眼閣上主人閣下賣米鹽旅客問鹽價曰一升五十錢也驚曰欺旅客乎木曾山中運送多難不如此價況此地通江戶水陸不遠如何而欺我乎主大怒曰爾去矣我口不二價余聞之嘆曰夫鹽食肴之將也口腹之資一日不可無此將矣本邦於鹽無權場又無征賦何故如此乎不獨鹽也米穀薪芻之直亦猶同之天且欲使斯民餓而死之耶有笑于列者曰四海承平日久矣金墮銀穴之出貢十倍昔日而府庫之財累億鉅萬小民懷鎰金販夫腰兩銀戶口稠密而產育日蕃矣故生之者少食之者多宜哉米鹽之湧貴也蘇秦曰京師人多薪桂炊玉自古然也今天下之貴賤少長悉集江戶富豪之家不有盛于此時矣人民之會不有盛于此都矣宜哉薪芻之如桂也白面書生

進曰否唐宋之政後世稱其美本朝因其禮貞觀之末斗米三錢行旅不裹糧矣至于晚唐紀綱漸弛水旱荐臻以錢三百買粟一斗然而魚鹽果實之直不聞如此之貴也盛晚之治其跡煥乎可見矣上今行堯舜之道而民未被堯舜之澤者獨何也時運之所使乎山東既雨而山西猶旱乎抑又天戒逸樂而惜豐穰乎請問其說余曰慎哉書生勿多言矣夫蘇秦之所言戰國侵伐之時也貞觀之盛治者撥亂反正之秋也今余與爾曹逢三朝全盛之日雷至治之餘澤目見繁華之事耳聞金玉之聲身衣布帛之暖口味芻豢之滋不亦樂乎慎哉勿多言矣居今之世反古之道蓄必及其身矣孔聖之格言而子思之所傳也殘燭既跋更忽報於拋猪筆而酌三爵臥閣上待天明

途中未見芍藥此日學校堦前芍藥兩三枝初開忽題一詩略伸心緒

堦前芍藥兩三枝

紅面忽開初接眉

今日逢僧閑未了

躊躇門外忘歸期

庠主讀詩知余之素心翌日折芍藥一枝添婪尾一樽馳使僧授吾人吾人涉筆謝其惠意又祝庠

主之遠大

金線重樓折贈來。樽前一醉絕塵埃。

庠中養得施國家。宰相花與宰相才。

重興足利學校書

日之昨之答書晨朝到來披而讀之則學校開基之年序歷代因革之興替庠主相繼之貽厥炳焉再會細論之則人皆知其教導民亦仰其德化嗚呼聖教之行世如日之中天雖雲霧掩塞豈障其明哉然則他時斯道之行天下可計日而俟矣古人云遊名山大澤而見子長之文行一萬里讀杜甫詩則可少會得僕此行也知學庠之開基聞歷代之傳統豈翹助我而已哉後來志于道者亦聞之可進也老師賜我以芍藥示將離之意者乎僧贈老師以白扇聊以欲奉揚仁風而已逆旅冗々枉閣禿筆草々不宜

學校睦子答書

重尊染薰披再三無惜而已所芳惠之雉尾寔希世之珍也他後操之則如拜翁之尊容者必矣抑晨朝攸奉投之答言記當庠之略耳汗顏不言此度通手澤正是生涯之大幸也細欲演愚之心事欲赴官路而倉卒之承聞不遑毛舉奉期再會者也

四月十一日

睦子拜

十一日 禺中到佐野其間三里半也此地家給人足肥壤饒田關東之膏腴也頽家老三人井伊掃部頭土井大炊頭酒井讚岐守各領數縣自舊城至市町天名掃部頭之領也山上半嶺青松交綠森々山下半陵薺麥出穗離離故知厥賦上々

上山麥苗峯頂松 青々相映更髣髴

映田萬畝圃千畝 戴勝降桑猶勸農

十二日 出佐野憩橡木進畫餉店屋座上有西湖圖屏風卽是圭書記筆也如圭師雪舟將寒氷矣雪舟相州人也妙齡遊學京師天然得畫家妙周文奇之悉傳精神猶欲得其秘奧力遊大明明人見其畫感其精妙問其師名住數年傳諸家畫譜而歸朝然後知周文筆勢天口自然純熟彌臻其妙都鄙爭慕之一旦忽然生思歸之意將歸相陽五岳諸侯惜別作文賦詩以送之竹居惠風集多載其文宜哉圭書記畫本東關多在矣雪舟與圭畫閣精妙間不容髮故後人多混同之此晚著榆木村

塞外可栽榆木村 翠烟起處日黃昏

旅店不寐立開戶 月色蒼々入閨門

旅店主者鍛冶也自云旦夕鍛鍊作_レ利刀_一昔嵇唐柳下鍛冶智而害_二其身_一今汝也榆村精鍊愚而守_二其業_一雖不_二佃作_一而足矣然則智有時可_レ屈愚有時而可_レ施官遊者智愚用捨不可_レ不知_二其時_一矣聊見_二末技_一自以爲_レ戒

十三日 侵_レ曉出_二榆木_一日出至_二于香沼_一香沼領主井上河內守自_二前宵_一馳_二使价_一今朝欲_レ獻_二馱餉_一主人清道祇待甚謹余亦倍_二席末_一享宴過後促_レ駕至_二板橋_一過_二火狹_一未刻著_二大桑村_一今日辰刻將軍家江戶城進發未刻入_二岩築城_一其行程八里也城主阿陪對馬守獻_二盛膳_一大桑亦對馬守之領也縣吏里胥奔走匍伏此村戶二百餘皆茅屋也相君紀州亞相水戶黃門同居_レ之去_二今市_一一里距_二日光_一三里也及_二晡時_一出_二村四顧則自_一簷下_二至_二野外_一桑木數萬株青葉與_二榎子_一風吹搖々還_二家賦_一一詩

桑枝雖_レ曲利_二生民_一 養蠶成_レ絲衣被_レ人

世上尤多_二無益者_一 如何黠鼠與_二愚鼠_一

十四日 將軍家入_二土井大炊頭古河城_一其間八里也相君馳_二脚力_一問_二動止_一

十五日 將軍家發_二古河_一入_二奧平某宇都宮城_一其間八里也相君遣_二隼人正問_一台候如何_一此晚水戶黃門於_二

旅亭_二享_一於相君紀亞相_二水戶距_一此十八里海物日々來以_レ故不時獻_二珍肴_一晡後黃門病惱余往診_レ之

十六日 午後將軍家著_二御今市旅館_一百官扈從兵衛森森相君紀亞相往謁_レ之

十七日 祭祀當日卯上刻將軍家發軔辰刻著_二日光御座館_一朝餉相君紀亞相隔_レ刻而至將軍家構_二棧敷_一見_二祭禮_一當面構_二一棧敷_一公家門跡上官僧徒見物祭禮儀式先年遊_二此地_一記_二行列_一故略_レ之祭禮畢將軍家束帶兩大納言同_レ之兩傳奏天海大僧正梨門僧正同登_二御廟塔_一拜_二墳墓_一此間僧徒行_二法會_一伶人奏_二樂於_一塔中_二天海與_一梨門_二互換_一袈裟_二行道之儀式唱名之音律中節中度今日之壯觀也法會畢後將軍家就_二館受_一公家門跡之拜禮_二相君亦還_一寺館_二入_一夜板倉內膳正高力攝津守來云_レ警_二火巡視嚴密也_一

十八日 堂供養也是日曼陀羅供兩傳奏烏丸大納言等著座少焉大僧正入_レ堂伶人奏_二樂成_一列大童小童頂_二花衣_一錦左右列待至_二中門銅華表_一下_二瑤輿_一執_二潤執_一蓋僧徒挾而登漸而入_レ堂著_二導師座_一天台_二三門跡同竹內法親王南都喜多院大僧正等著座其後將軍家入_レ堂威儀嚴重也相君紀亞相水戶黃門同著座供養既畢而後大

渡利根川之末也館林主備渡船臣僕不濕足而著岸予暫憩此村乘肩輿經忍舊城過行田橋而著鵲巢入夜雨

二十三日曉天雨猶不晴暗夜涉泥濘擔夫蹶仆日出經大宮是武藏之一宮也辰刻著浦和前年相君獵遊之地也故縣吏奔走獻鯉魚相君贈之賜下臣自己刻出浦和二里而到藁火有渡土人拏野航渡之行二里而到板橋林木森々麋鹿成群誠如文王之圃也自是二里而著江戸舊館令嗣右武衛享子扈從臣從予亦備其員既醉而還寓所信筆而記焉

法眼杏菴正意誌

癸卯于役日錄

向陽子漫筆

寬文三年四月二十日、正當大獄院前大君十三回御忌辰也、自去歲、豫有鈞命曰、台駕可及期登日光山、詣廟堂、而使執政阿部豐後守忠秋、總裁法會事、井上河內守正利、加々爪甲斐守直澄、時爲寺社兩奉行副之、其餘山中警衛之武臣、皆被點定之、余亦隨先例、預聞其事、今春有命、此行扈從群士、皆賜黃金白鐐、有差、余亦在其列、三月七日、忠秋喚集其屬僚及東叡山役僧、議法會事、十四日再會焉、余亦預焉、十七日、余不幸罹久娘喪、出喪葬事、入泣服次、憂鬱無聊、晝夜困睡、忠秋使人告余曰、不虞之喪、可憐可痛、然東照宮有服穢之憚、而大猷廟無觸穢之嫌、官事無礙、過旬則強起催行、可下以來月朔日入山、乃賜驛馬與丁云々、聞、此月末勅使院使并台宗門跡、既入山、二十七日、忠秋出府赴山、其餘群僚、或先一二日、或後二三日、皆出府、余亦抑淚促旅裝、頃日七娘患痘疹、太輕而順易、於余爲悲中之歡、偶考令條、

則衆子服一月、暇十日、是本朝古制也、至二十六日、則暇限既滿、故不能固辭此役、噫

三月二十八日丙申、夙起、詣祠堂、拜考妣神主、上

香、以告出行、畢、事入室進食、男春信春常姪勝

澄侍焉、宜人繕旅衣、既而出過、忍岡別墅、拜考

妣墳墓、見久娘新塋、拭淚而出、歷千壽草賀二

驛、午時憩於越谷邸、余往年會故若狹羽林於此

驛、屢赴日光、不能懷舊、此時松平和泉守、

欲赴日光、頓點於此、從者滿驛、然余有人馬之

官符、故道路不滯、午炊畢、經糟壁驛、一宿於杉

戶驛、癸巳之秋、先考携讀耕及金節、宿於此、追

憶往事、潸懷舊淚、此行畢、事歸府日、可告節也

以爲話、耳、今日行程十里餘、隨見隨聞、皆添

哀情、唯有思家之心、無詠物之興、故輿中悲吟小

絕二三首而止、喫茶吸荳蔻之暇、電覽杜律詹言

三十葉、以散鬱懷、其中有愁有悶、多是係國事、

余幸生於昇平之世、無爲國家可愁悶者、唯

是一女子恩愛之私而已、自愧度量之狹、然服限未

畢、戀就官事、則不知傍觀者謂何噫

今夜此驛無顯者止宿、故余所假之宅、寬閑、庭有

茂樹、無客之來、無使之問、秉燭獨座、唯聞蛙聲、自檢此身、則生來未曾覺如此之靜也、若不_レ在服紀之中、則雖隱逸之樂、何以加焉、先是日光之行數回、皆與權貴同途、朝晚伴食、疲於行旅、倦於紛擾、今般獨行、起臥隨心、乃知從前勞煩之非也、睡魔未_レ來之際、讀杜律十餘葉、其中有_下示含弟觀三首_上、讀之則千歲之下、美彼怡怡孔懷之厚、而追憶讀耕宿於此、而悲其魂之難_レ招、讀老妻畫紙作棋局、稚子敲針作釣鉤一聯、則喜家族不飢不寒、而感得公恩之深、且想我兒輩、有箕裘之志、漸既成長、則非敲針作釣鉤之比、則此一件、雖少陵所不_レ美也、讀東山草堂詩、則我別墅雖幽栖佳境、然拘于微祿、而愧柴門空閉鎖松筠之句、自悟爲少陵被笑也、從僕困臥、余亦就_レ睡、自_三丁憂以來、今夜初安寢、夢_二考妣又夢_一無_下取聲名_上、動_中蠻貊_上、恐妨談笑臥江湖四字_上、至雞鳴而覺、余在府催裝時、吟此二句、論春信曰、余此行豈其本意哉、然麾下乏文才、故執政雖憐余遭憂、然強起之以備不時之用、如_レ余亦以下識文字、故上_レ此、況於達才博覽之人、

哉、信曰固然、今日與中亦思此事、乃知此一念感於夢中、東方未明、蛙聲爲伴、就思讀耕曾放蛙於其小池、好聞之、不_レ知_二其宿于此一時亦有蛙聲_一否_上二十九日丁酉蚤發杉戶、到幸手、暫憩於栗橋驛、吏棹舟待之、余駕舫齋、又設小航、受僕奴十餘輩、涉利根川、是武州野州之界也、既涉矣、過古河、今城主者故拾遺土井利勝孫、遠江守利隆之子也、余昔屢蒙拾遺眷遇、頻催懷舊之情、而過野毛、亭午到間々田、頓食於一僧房、到小山、此驛頃間罹火災、驛舍大半烏有、故人馬稍滯不能_レ出之、留待移刻、少焉敲出而進行、渡飯塚川、而宿壬生驛、是三浦志摩守所治也、自古河至壬生道路、掃塵鋪沙、或葺茅以版編戶、或造舟橋以便往還、以_三來月中旬_一台駕登山執役警衛之士先行者日々不絕也、今日與中覽了杜律詹言上卷逮夕入浴、時志摩守使价來、贈雙鯉魚、雖無尺素、足以充調味、逢使者謝之、風聞豐後守忠秋既發其所治忍城、明曉到三連木驛、由是今夜志摩守赴三連木待之、既而人定、余獨座思家、

出府時、官醫元德曰、七娘痘疹收靨、一兩日之間、可懸酒湯也、路程勿勞心云々、今日天氣和暖、定知可浴酒湯、不堪遐想、嗚呼二娘同月同病、姉亡妹存、則得失不同、吉凶相違、在同胞、亦各有命哉、拭淚而臥、其亡者不可忘焉、存者視其成長也

晦日戊戌黎明出壬生店、聞吉良少將義多宿隣舍、入而相見而出、到二連木時、問里人曰豐後守今曉過此否、曰未也、傍舍武夫成群、問曰此何人哉、曰志摩守迎待豐後守于此、既而下吏傳呼曰豐後守既至余亦欲入謁焉、然有所思慮而避之、召驛夫、進輿而去、到鹿沼驛、驛中一舍、貼書曰豐後守晝休所、乃入其內、逢其先至家臣可兒氏、有所告諭而過、至火夾店、午炊暫休而出、經今市驛、遇雨二里餘、而入日光山、過鉢石町、逢野三竹、相共自輿簾隙、通一言而去、越山菅橋、入西谷齋藤氏舍、是官吏所豫定、以爲余旅宿也、與豐後守旅邸相近、可便於往來、然甚矮小、而余所座、僅方二間、其次席亦然、僕奴無所措手足、想夫警衛執役武臣先至者、今既滿山、且及來月一

駕登山、則扈從如雲而不可餘尺地、故如余者、居狹而賤者、誠其分也、況官吏以余爲無用之者乎、余素不求安居、則容膝而足、如此之矮舍、比簷輿、則猶廣、何爲嫌之哉、及暮、豐後守入邸、余寄尺簡于其家長三澤周辰曰、余既入山、欲速往執謁、然豐牧兼命余曰、可下朔日登山、且今俗娘喪暇二七日、以今日爲限、則延及明朝乎云々、其報未至、永井伊賀守尙庸、使价來勞問之、余豫聞伊賀守亭與余舍近、然未知其所在、喜其使至、出逢之、謝其速問、而諭之、以下告周辰之趣、而請傳於豐後守、少焉伊賀守使者再來曰、所諭詳達豐後守了、豐牧自今市齋戒沐浴、明朝爲參拜東照宮也、然則服穢可有憚云々、余所兼慮果的當、今日二連木鹿沼避之不逢者、可合彼意、乃知愚者千慮之一得也、山中先至群僚、往謁豐牧者、暴雨不厭、泥路不嫌、及夜絡繹無絕、既而豐牧答書至、其趣與伊賀守所告相同、秉燭之比、伊賀守使者又來曰、早欲晤語、料知僕奴勞倦、故遣輿夫迎之、余卽赴焉、對話移刻、飲食而歸、其送亦如迎時、此人平生莫逆、雖紛擾

之間、懇意如此、余入山、用途不便、與此人接隣、亦是不平中之一幸也、今夜至曉雨不止、余臥蝸廬、或醒或睡、聽雨寂々

四月朔日已亥聞豐後守昧爽拜

東照宮、拜大猷廟、直

赴日光門跡、

俗曰本院

喫朝齋、群僚伴食、余雖閑暇、

然早起喫飯、將待豐牧之告往謁之、聞舍主貧窶

龜鼎不瞻、故余從者新構之、僕奴飢而晏食、且舍

無湯浴之處、而僕奴猶未能及洗足、可憐可憐

余不幸遭喪、抑淚祇役、而其不祥如此、是亦命

也、然不飢不寒、讀書遣興、無介於懷、唯掃之

難忘者亡女永訣之愁而已、願望山中景象、賦律詩

一章絕句一首、吟了、見杜律詹言下卷四十餘葉、多

所感懷、就中吟乘與還來看藥欄、而想像忍岡

別墅紅藥既開、而見小庭躑躅盛開、忽憶去年藤勿

齋園遊、而料知今亦爛熳、又見桃花梅花猶殘、以

悟山中春寒花遲、時雨止、然澗泉流響與點滴不

異、偶得澗泉流遠晴還雨、圍樹花殘夏似春二句、

吟未了、筆吏小島氏森氏來訪談曰、豐後守自門跡

携吉良少將、直赴梶井門跡、妙法院門跡寓居、演

台命勞之、勅使猶未登山二門跡去月未自東山道到來其後赴三佛堂法會

場、巡見之警衛執役群僚皆會焉、件々議定而赴

御旅館、巡檢移刻而歸其邸、群僚各退去、呼小島

氏森氏、馳驛書於江戶云々、其間屢及余事、有

憐憫之色云々、二筆吏曰、某等所舍、狹矮卑濕、

與僕奴雜居、此舍比某等舍、則甚廣云々、二人去

而后永井伊賀守來訊、見余舍之狹、頻慰勞而歸、既

而有豐後守告報、余更着袂衣、往謁焉、豐後守曰、

今朝雖拜神廟、以雨降故、不能登靈塔、欲待

晴詣之、故呼卿遲滯、日既及晚、拜塔延及他日、

故告報之云々、既而吊慰余喪、且賀季女快復、

余謹謝之、因及服假日限之事、余答曰、中華自古

有五服之制、本朝古制雖減日、亦有五服之等、而

暇亦其等五、見舊記者分明也、今制在朝廷、則多

是古制、其間有損益、在諸社、亦或有異同乎、當

時武家所被用者、多違古制者、若復古制、被用

之則可乎、豐後守曰、可歸江戶議之云々、少焉

豐後守自訪梶左兵衛定良、是大猷君近侍小臣、今

爲御廟監、其宅在豐牧邸隣、故豐牧步行、余亦從

之、梶氏他適、豐牧歸邸、余亦歸、遇阿部忠右衛門

正義來問、而立淡戶外、是二十餘年舊友也、有執

役登山、日既薄暮余訪吉良少將、有所議談、畢
事而歸、而永井伊賀守使來招之、往談及一更半、
歸舍、留守者曰、井上河內守、使人問登山否、又
曰、伯高庸來、暫雖待余歸、以稍遲故去、彼爲山中
伶人習禮、自去月上旬、既登山、今晚始聞余到此、
乃來云々、余亦自昨既待彼、不知其所舍、今晚不
會面、頗爲遺念、今般登山人多、余平生所交、在
顯者、則河內守伊賀守、其次則阿部正義、在朋友、
則野三竹而已、如高庸、則門生之殊睦者也、河內守
倚居道遠、故未相逢、今夜伊賀守示河內守三月盡
詠歌云々、二更後就眠

二日庚子先妣忌日也、想像春信代余奉祠、且詣墳
墓、出府僅五日、既如經歲月、昨憑筆史、遣書于
春信、告平安、料知家族憶余、猶余憶彼也、已刻
前、謁豐後守、執役群僚在座、其中與梶氏晤語、
既而豐後守率群僚赴法場、慮井河牧在彼地、而
憑鈴木修理、傳語而歸舍、少焉野三竹來尋、對話良
久、讀拙詩數首、見日錄、電覽本朝服暇考、余去月
而歸、午時見杜律詹言下卷了、是本我先考所滴
朱、其手澤猶新、葉々字々如對嚴容、篇々句句如

聞聲咳、此行携來一周覽、乃藏于行橐、
伊賀守寄書曰、今晚井上河內守喫飯于此、可來
會焉、既而河內守使者來曰、今在別舍、舍在近
所、可來談、余乃赴焉、對話移刻而徒步同行到伊
賀守舍同喫素食、伯高庸訪余舍、直來伊賀守舍
伴食、河內守與余談、易學啓蒙撰箋事、曰、出府之
前、有所會得云々、又及倭歌事、既而河內守先
歸別舍、其本舍與法場隔十五町、及法會始、則
一日三往還、故自今日假別舍移焉、

自明日、萬部讀經始、今晚有初夜法會、日門爲導師、
豐後守候于堂內、吉良少將、松平和泉守、水野
監物、板倉隱岐守、井上河內守、松平備前守、永井伊
賀守、加賀爪甲斐守、那須遠江守、高木伊勢守、梶佐
兵衛佐等列座、其餘執役輩、皆陪焉、法事畢、豐後守
拜靈牌、吉良少將以下、皆以次拜而退、余亦在其
列、事畢而退去、凡法會事、詳有別記、故不具于此
錄、

明曉寅刻、後夜勤行、自辰刻至未刻、萬部讀經、
及申刻、有初夜勤行、至十一日、每日如如此
今夕伊賀守寄惠一苞、

三日辛丑朝陰、巳刻大雨、午後雷、雹降大如豆、未申之間晴、寅刻後夜勤行、今旦赴河內守舍、喫飯、聊有所議而歸、謁豐後守、而從其後耐赴法會場、辰刻萬部讀經已半四卷畢、梶門爲導師、日門妙門毘門著座、讀經僧千二百口、伶人奏樂一卷畢、四門跡休息、午前群僧飲食、至午半、八卷畢、導師入堂、時奏樂、豐後守吉良少將河內守甲斐守迎之、衆僧飲食者、妻木彥右衛門奉行、群僧退出時、河內守甲斐守并土岐十左衛門指揮之、讀經之間、松平備前守永井伊賀守郎從巡檢山中戒火災、松平和泉守水野監物板倉隱岐守、其身候堂內、使家人分番所、三佛堂前門、河內守家人守之、高木伊勢守荒木十左衛門巡山中役所、關兵部藤掛監物佐藤勘右衛門掌法會諸器并土木修築之事、妻木彥右衛門掌法會雜務布施等之事、中山勘解由安藤傳右衛門、兩人率其所屬步卒、晝夜守堂緣、阿部忠右衛門率其屬、而法會之間衛堂內、其餘執役有等、皆受豐後守指揮、凡讀經聲初如群蟲鳴、後如萬雷響、如層瀾湧、如瀑泉迸流、靈牌前百味飲食饌金銀、堂內正面柱纏錦欄、蠟燭之光如篝火、香爐

之薰悉皆伽羅也、一僧各備一几、置法華經、中央設高座、以爲導師座、門跡休息則院家僧正代之、三佛堂之廣猶不足、而四方假設平張、其前爲衆僧出入之路、其左右讀經僧充滿、其後或爲辨事所、或爲飲食所、或爲休息所、其外有設茶湯所、或有置盥盤所、或有小便所、平張之下爲奴僕居所、其餘不可勝計也、官工長鈴木本原皆從先例爲之、

豐後守座堂後、呼筆吏小島森氏、以整書、告江戶、河內守甲斐守彥右衛門連判寺社奉行雜務奉行唯在法會席時、與執政加判、亦是先例也、此時自江戶驛書至、營中城下靜謐無事云々、讀經畢、日門梶門妙門毘門燒香拜禮而去、每日如此、群僚拜禮、如昨晚、梶門妙門馳走人亦讀經內拜禮、豐後守直赴御旅館、沙汰臺駕登山時諸事、河內守甲斐守高木伊勢守土岐十左衛門及二筆史從之、其餘群僚各退散、余亦歸舍、自日門賜一器、且有明晚齋食之招、今日春信書至、家內平安、七娘既浴酒湯、逐日快復、可以抵千金、家書亦附驛書之便、在山群士無不思家、幸聞家族安穩、亦是公

恩也、旣而假寐覺、而赴日光門跡、謝其賜、使謁見焉、前堂揭日光淨界彰孝道場八字、是往年朝鮮國王李愔自筆所獻大猷君一所寄附當山也、申刻、初夜法事如例、群僚拜禮、時河內守告豐後守曰、群僚品階有差、所拜同席則非禮也、豐後守吉良拜於堂園內、五位輩拜於外緣、布衣執役者拜於假張而可也、豐後守從之、往年三回忌時、讚岐守忠勝若狹少將爲法會總奉行、時如此式、而四品以上五位并布施三等也、豐後守謙退不自誇、故河內守堅請、而自今夕分等衆、皆以爲定論也、余拜禮准五位輩、然布衣輩不肯辭讓、唐突而進出、余不敢爭、使彼等先出、然後等拜於假張、余雖後出、拜于外緣而退、畢事而出、時河內守謂余曰、有髮無髮相雜、則不宜時宜、使彼等先出者、可也、然其拜席不下與布衣同、而與與五位同所者、亦可也、法印位准四品、是古制也、然江府恒例、與五位等、故余雖在何處、豈不守江府定式哉、伊賀守亦曰、不與人爭、不辱其位者、不誇不屈、固當、旣而歸舍、時豐後守使人呼之、乃直赴焉、閑談曰、法會事多有所闕如乎、有所誤乎、

有所思、則告之、且曰、吉良以高家之裔、掌廷臣之事、故雖不執政、其位階共高於余、然昨今拜禮、余先於彼、爲非禮乎、若然則自明日可改之、余曰、公執國政、今般總裁法會事、滿山執役、不論高卑、以公爲具瞻、則爲上首者亦宜也、公自謙而居彼下、則時宜不當、彼雖寡祿、然居和泉守等上、和泉守辱爲松平長庶流、其祿十倍於吉良、然列吉良下、是位階所不廢也、於吉良爲榮、如公則非群僚之比、何謙之過、無介于懷也、豐後守猶有未安之色、其餘猶有所談議、忽有他客來、而罷去、今夕兼與伊賀守約、依梶氏之招、同行入其浴室、出浴飲食、一更之後歸舍、梶氏廉直無欲、在當山十三年、一日無不參廟、朝設奠供、夕供茶湯、手自掃廟內之塵、諸侯參廟者、必以梶氏爲前導、然其所贈惠者、不受一物、先是叙從五品、再三辭之不許、故強叙位、自嘲曰、余志在掃廟內之塵、然蒙榮寵、則非素志、然無奈臺命、唯恨執政不知余素意也、會賜采邑六百石、有邑民與社民相訟者、乃返邑於官、唯受三年俸、而不憂貧窶、隨分澹如也、今般

法會之間、湧浴室不_レ論_二親疎、隨_レ來使_二入浴、不_レ以_二接待_一爲_レ心、豐後守平生好_二其爲人_一、此行再往訪_レ之、或入_二浴室、或飲食、梶氏不_レ自營_レ之、遣_二人於豐牧邸_一、取_二其行厨_一進_レ之、其不_レ拘_二世利_一者如_レ此、蓋其當時之奇人也、惜哉、使_二此人志_二於學_一、則其有_レ所_レ得乎、余十一年前、屢遇_二于此_一、其後互不_レ通_二書信_一、然頃日相會、其志守_二舊交_一、與_二平生屢見者_一、不_レ異、今夕臨_レ歸、自送_レ之曰、旅舍狹隘、無_二浴室_一、則每日可_二來浴_一焉、無_二必隔心_一、歸府之日、無_二通_二書信_一、彼是煩勞無益而已、其爲_レ人、謙而有_レ禮、然亦不_レ肯_二爲_レ人卑屈_一、故相逢者、皆奇_レ之、

四日壬寅後夜法事如_二昨日_一、早朝余謁_二豐後守_一、既而僚屬數輩來、相共伴食、

辰刻萬部讀經如_レ例、午刻畢、讀經之間、在山執役下士拜禮、此等頻望_二拜禮_一、故如_レ此、然不_レ與_二五位以上並布衣_一爲_二隊頭_一者不_レ許_二同列_一、勘定人與_二小十人隊士_一爭_二先後_一、不_レ決、豐牧命_レ之、而更日使_二拜焉_一、河牧諭_二雙方_一而無_レ爲也、讀經畢、豐後守以下拜禮、其例三等如_二昨日_一、事畢、日門毘門著座、武臣列

座、增上寺住持獻_二贈經_一、拜禮燒香、侍者二人從_レ之、揖_二日門及毘門_一而退、毘門起座揖送_レ之、次知恩院使僧獻_二贈經_一而拜、次傳通院大光院拜禮皆有_二贈經_一、次金地院次東海寺拜禮、皆有_二贈經_一、次東本願寺父子使者獻_二贈經及香資_一而拜去、此輩今夕出_レ山而歸、

豐後守巡_二檢山中_一、高木伊勢守荒木十左衛門梶左兵衛等從_レ之、

余與_二三竹_一同途、自_二法席_一直赴_二日門_一謁焉、堀丹波守遠藤備前守久鬼式部桑山修理加藤織部小出大隅守立花和泉守等來會、此等皆護_二勅使院使門跡_一而在山者也、各飲食而去、余直赴_二法席_一、有_二初夜勤行_一畢事、豐後守等以下拜禮、但限_二五位以下_一、而布行以下不_レ及_二拜禮_一、省_二繁多_一也、余與_二梶氏_一同途步歸、遇_二狛高庸于路中_一、而被_二伊賀守誘引_一、而赴_二河內守舍_一、甲斐守亦會焉、高庸亦來謁_二河甲二牧_一而去、既而吉良少將携_二其同僚吉良上野介品川內膳正畠山下總守_一謁_二豐後守_一而歸、過_二河內舍_一、三輩皆今日登山者、品川談_二江府之事_一、少焉伊賀守甲斐守去矣、吉良及三輩喫_レ餅而去、日既薄暮、余以_二兼約_一欲_レ赴_二

伊賀守舍、然爲河內守被挽留、對語、談法會事、河內守曰、群僧讀經雖不足取之、然滿山人多、法會事大、然無此障礙、亦是太平之驗也、當此升平、而不不起儒禮者、俗習之使然、惜哉、且感豐後守篤實執事無私、有君子之氣象、其後談易學及中庸、細論先天八卦順逆之數、於易逆數也、談有新得、及一更而余歸舍、自今晨至夜不歸舍、此身之不靜可愧可笑、然方寸之間、哀情屢生、不忘于懷、

今晚吉良少將談曰、今日拜禮、豐牧有讓先之意、余是執役之人、豈可先總裁執政之人哉云々、余歸舍之後、忽憶春秋所筆、則齊晉雖侯爵、爲盟主、則在宋公之上、楚子爲盟主、則侯伯之上、此事可爲證、乃啓行囊、考春秋經文、而記其趣于一紙、爲之諺解、爲明朝呈豐牧、以解彼疑慮也、

今晚井伊兵部少輔登山、掌防不虞之火災事、聞此人亦有服穢、避東照宮邊、

五日癸卯寅刻、後夜法事如例、豐後守參拜東照宮靈塔、早朝余到豐後守邸、待其歸、呈昨夜所考一

紙、豐牧聊有安心之色、談曰今朝詣靈塔、就想先君建之時、余與同僚、更月在山、今經三十餘年、石基堅固、不步損、可喜焉、然先君早棄世、同僚二人松平伊豆守阿部對馬守既歿、余獨存、監此法會、可悲焉、二十年前上下石級健步無勞、今朝攀躋甚苦、嗚呼衰矣、奉上之勤、難報厚恩云々、萬部讀經如例、將畢時大雨、今日井伊兵部少輔參拜禮、夕出府馳驛、今晝登山、豐後守相携赴本院、逢日門毘門述台命、而悉呼在山群僚、傳命以勞各勸事役也、事畢、豐牧同道拜大猷廟、而於豐牧邸飲食、乃赴歸程、

申刻初夜勤行如例、豐後守以伊賀守來故、有公務不能參堂、群僚等列座如常、今夕導師者、毘門也、登壇行法之際、僅數刻、怠倦顯於外、不覺開口而欠者屢矣、列座之人、試屈指算之、則及八度、或曰、猶有不算盡者、如此大會、何可欠哉、唯是十箇欠亦是行法之內乎、不十而曰八者、所算者漏之、遂爲滿座之戲笑、或人俳吟曰、毘門屢欠高、伊賀守出山之後、豐後守獨詣三佛堂、拜靈牌、而赴當山學頭修院、及夜而歸、梶左兵衛爲伴、此院

主曾自忍領世良田一移來、故不忘其舊好、今暮河內守甲斐守入梶氏浴室、那須遠江守來會焉、余赴永井伊賀守、喫晚齋而會、河牧于梶氏宅、共入浴、甲牧使人呼妻木彦右衛門、有所議、而及一更後、梶氏歸、自修學院、進蕎麥及酒茶、遠江守及余不嗜蕎麥、故別設湯漬飯、相共談話、及二更、亭主曰、山僧唯好華美、於廟差妄費、官給其所不欲也、故常以誠敬爲主、以戒山僧之貧、然我力不能以押彼也云々、其餘所談、皆正而無私、河牧甲牧共嘆賞之、滿山群輩、與梶氏相逢者、皆無不感其志者、此人無欲、謙退、不諂權貴、不侮卑賤、無妻無子、唯以廟奠爲勤、其志欲終身於此、非俗士之所及也、甲牧以有舊好、戲曰、席上茶菓多品、家常有之乎、亭主曰、是先日豐牧行厨之餘也、茶亦每年豐牧被惠之、辭之則曰他人之惠辭之者、可任其意、我之所惠者、不可辭之、於茶則我歿後亦可贈焉、既遣言辭磨守云々、故某不吝好茶、凡豐牧懇情、謝而有餘、是亦先君之餘恩也云々、其執守之堅、誠於中形於外、河牧爲之垂淚而去、

梶氏兼請久世大和守、得官庫伽羅香五百片、今般法會、別供一金爐、每日手自拈五十片、充二十日之數也、永井伊賀守曰、梶氏拈香、誠敬威儀、縱雖信佛者、不可換萬部讀經之聲云々、謂余曰、請爲彼作傳、余曰固然、但彼人質直不好名、則作傳則違其志、唯私記所見聞、以可使其名不朽也

六日甲辰朝午晚法會如例、今日快晴、庭上來聚聽經者數百人、

甲旦在山群僚二十餘人、悉赴豐後守邸、以明日豐牧歸府也、大澤右近昨晚登山、余今朝逢豐牧邸、打話、彼聞余失久娘、落淚曰、某亦有娘、甚愛之、生別猶苦、況於成長死別哉、且以官事來於此、想像中心不樂、余曰足下其察之、今日彼歿後及二句、出府時自憶官事之外不可出旅舍、然爲河州伊州憐余屢強起之、且旅舍甚矮、故屢出散憂而已、二三日來殆紛擾無閑暇、可以慙焉、右近者、法會被物執役十餘輩之內也、既而滿座喫朝齋、各赴法場、

勅使德大寺前右府及法皇使本院使新院使女院使皆

入_レ山、豐後守携_二吉良少將_一各赴_二其宿房_一、述_二台命_一勞_レ之、其後豐後守告_二群僚_一曰、台駕發_レ府在近、余明朝出_レ山、歸府而可_二扈從_一台駕以復登山、山中

法會事、附河內守甲斐守、其雜務、附妻木彦右衛門云々、而記_二件々條々_一、以授_二河內守_一、然九日灌頂被物奉行者、所_レ被兼命松平備前守永井伊賀守也、十六日例幣使登山、十七日御祭禮亦備前守伊賀守可_レ奉_二行之_一、且九日十六日十七日之警衛、亦備前守伊賀守家人可_レ勤_レ之云々松平和泉守水野監物板倉隱岐守勤番所可_レ如_レ元、如_二公家門跡事_一、則吉良少將掌_レ之如_レ常、其餘高木伊勢守荒木十左衛門土岐十左衛門等執役亦無_レ他、中山勘解由安藤傳右衛門阿部忠右衛門及_二萬部讀經畢_一、則不_レ待_二台駕_一、可_レ率_二其隊_一以歸_中江戶_上云々、其餘示諭猶多、其後豐後守詣_二大猷廟_一、河內守甲斐守及彦右衛門梶左兵衛並山中作事奉行關兵部藤掛監物佐藤勘右衛門等從_レ之、又命_二堀丹波守遠藤備前守久鬼式部桑山修理小出大隅守加藤織部立花和泉守_一曰公家門跡馳走可_レ如

例此等今日參堂拜禮、云々、松平彦太夫駄_二被物之服布施銀於驛馬_一登山、長櫃七十合、匹夫昇_レ之、殆及_二千人_一云、河內守寄_二

惠杉折三重、分_二與舍主及僕從等_一、今日與_二三竹_一逢_二于法席_一、不_レ嫌_二外間_一、頻談_二本朝故事_一、其所_レ好亦奇也、

豐後守携_二高木伊勢守荒木十左衛門及作事奉行三人并工長鈴木氏等_一、巡_二檢山中_一、直詣_二三佛堂_一、時初夜法事既畢、拜_二靈牌_一而歸、在山群僚皆往逢_二豐後守_一而去、吉良少將河內守甲斐守妻木氏高木荒木土岐梶等各以_二其所_一掌之事、有_レ所_一問焉、被物役送諸大夫十餘輩皆登山來謁焉、日光御門跡自_二來臨_一、圓覺院住心院此兩僧執_レ行諸事奉_レ從焉、門跡退去、群僚皆歸_レ舍、豐牧携_二梶氏_一詣_二大猷廟_一、告_レ暇赴_二本院_一、謝_二日門來臨_一、且告_レ暇而歸云々、今夕豐牧諭_二群輩_一曰、今度法會、各執役不_レ怠、無_二一言之可_一加、則人々重_二官事_一者、既知_レ之、我奉_二總裁_一、則欲_二在山畢_一其事、然台駕扈從、亦大事也、無_レ奈_二不分身_一、則我出山之後、各嬾可_二謹慎_一焉、誠有_二奉上之志_一、則縱然有_レ不

協_二於心_一、然勿_レ挾_二私心_一、唯是一心以_二法會畢_一事爲要、則私之遺恨不_レ可_レ生云々、衆皆聞_二旨而去_一、余亦有_レ所_一咨詢、而及_二暮辭去_一、既而有_二永伊州之招_一、乃往談飲食而去、夜既一更半也、

七日乙巳後夜法會如式、寅刻豐後守出山、遣使於法會之場、聞梶左兵衛既朝奠靈廟、而遣使寄語丁寧、辰刻萬部讀經如例、群僚出席如恒、以豐後不_レ在席、各彌謹慎焉、以爲中日之故、日門爲導師一刷行列、河內守甲斐守奉行之、及午刻而讀經畢、吉良父子品川畠山列座堂緣、和泉守監物隱岐守河內守備前守伊賀守甲斐守等、列居平張、攝家親王門跡清華及昵近公家、以使者獻贈經、五十餘輩、日門毘門著座堂內、使者一人充進出、吉良品川指揮之、清花以上贈經者院家受之、供牌前、昵近輩之贈經者、平僧受收之、河內守甲斐守、遣驛書于江戸以告之、又示諭豐後守所留候堂後之士、以達豐後守、今朝河內守甲斐守及高木伊勢守土岐十左衛門、赴本院造座席圖、以點定來十八日台駕渡御響應之事、是亦豐後守所告諭也、讀經之間、退于次座、開圖貼紙、以記某席者執政近習某席者番頭組頭物頭、某席者某役人、而遣豐後守云々、申刻初夜法事如式、

余夙起想像今日久娘三七日也、春信春常暇忌既滿也、既而赴讀經之席、與河內守甲斐守、在次座、

預聞驛書之事而移刻、及讀經畢、被甲牧誘引、而赴其宿坊、飲食而同途、赴初夜法席、畢事而歸、聞三竹在梶氏浴室、而往同浴、亭主歸自廟、少焉余出浴、訪永伊牧伊牧亦赴梶氏入浴、余亦携手再赴焉、伊牧入浴、余與亭主談及秉燭、而伊牧浴了而同話、良久而三竹出浴、自申刻前入浴、而至戌刻而出、亭主驚其長浴、既而進蕎麥餅餌等、及戌半而各歸去、

今夕梶氏談曰、昨夜豐牧詣廟時、既戌之半也、至外門留從者、而獨步登石壇、梶氏手挑張燈而從之、至門內隔籬而拜、座石上落淚行々、顧梶氏曰、再來拜禮在近、然漸衰朝不謀夕、躊躇不忍去焉、梶氏相共泣慕之、既而詣東照宮隔籬而拜、而赴日門、而赴梶井妙法二門跡、而歸亭、云々、又談曰今日法席焚香、一僧來乞一片、答之曰、容易之事也、然官庫所出之物、非可私畀、且與汝而後他僧求之、則不能不與之、然則不免無私、今般所充供料者五百片、雖一片不爲私有、若句滿法會畢而有所餘則可畀焉、勿以爲吝嗇云々、及暮又乞曰、今日法會了、請

如約賜之、答曰、非今日之終、可待萬部日盈之時、云々、僧之所貪如此、其餘可推而知之、又談曰、日門稟性穎悟、然左右者教導不宜、而不欲其學博、又不欲習熟于諸事、且曰、貴重如此、不可勞於學問、彼邪徒等、唯陽尊之、不欲其達事、而恣行山中事而已、又談曰、執政及舊同僚、憐我鄭重、可以謝焉、余捨身掃廟堂之草及墓樹之雪、以爲報恩之志、然今所食倍于昔、則非素意、唯慚拙弱而不夠、然皆台命則違先君也、是以不能固辭、嗚呼若先君再生、則吾亦陪侍以求榮而已、滿座皆垂淚、云々、余謂、使俗士求名利者在山數年、而聞梶氏之談、則有慚愧之心也、余在此數日、不覺胸中清淨、而如與隱逸高尚之士語、故屢往談、而生出塵之志、匪營高士而已、使彼逢於事變、則必見其忠赤也、

八日丙午初夜讀經後夜等法會如常、

已刻、吉良少將河內守伊賀守備前守携被物、執役十餘輩、會大猷廟堂、背議、明日灌頂次第而習其禮、住心院從之、梶左兵衛佐爲先導、高木伊勢守土岐十左衛門等同來云々、灌頂一會、與御年忌、

不相關、然先是天海每御年忌、屢行戒灌事、其後毘門公海受法於妙門、堯然、日門受法於毘門者、皆每御年忌行之、今據其例、望請使當妙門受法於日門、而以官物營私事、使月卿雲客列座執役而華飾之者也、梶井門跡、兼請豐後守、使其弟子爲副受者、是亦以官物營私事也、梶門者法皇弟也、日門者法皇皇子也、妙門及梶井弟子者、其日門弟而當今兄也、

今日春信書至、一家平安云々、

加藤美作守書至問安否、

今日河牧見廟堂拜殿四面掛簾、其上垂欄帳、呼住心院曰、如此則掛簾無益、隔簾自外窺之而可矣、住心不能答之、乃徹帳、梶氏私語河牧曰、山僧妄掠官物、就此一事、可以知之、且先是御年忌、所用簾帳、不再用之、事畢則不知其所在、余無才學、唯屢諷之、彼等不聞余言、然余不在山、則彼等所爲可大於此、余是廟堂洒掃之人也、不預他事、然君思不可忘、故往往況論而已、

今日勤番群僚、及甲斐守者、不赴廟堂、在讀經

席、及被物習禮畢、而河內守等、各赴讀經席、云云、余今日初拜三廟殿、且携慶安戊子記、示備前守伊賀守、此兩人爲被物奉行、復兼勤番、自導師幄屋外門、伊賀守家人守之、自外門內至第二門、備前守家人守之、是於江戶蒙鈞命、而豐後守所示諭也、明日河內守奉行灌頂會、甲斐守奉行讀經事、可在三佛堂、吉良父子品川島山者、可候灌頂會、和泉守監物隱岐守遠江守、取闔、二人宛分二居兩所、伊勢守與土岐十左衛門內藤新五郎、亦可分居、步卒長二人相分可守三廟庭與三佛堂、其餘妻木等布衣輩、皆可在三佛堂候廟者、皆可著衣冠、在讀經席者、其長袴如常云々、悉皆豐後守所示諭也、今般豐後守令曰、山中道狹石高、法席往來、縱雖城主萬石以上、不可過步卒與丁鞋取鍵持夾箱持等十四五人、云々故無喧嘩口論、豐後守出山之後、群僚皆謹、故諸事不滯、然每日起于寅、而三赴法席、故群僚有困睡者、故戲言以破睡者或有之、凡法會畢時、群僧各逐隊守次而出時、其首或擡或垂、其相對者亦然、或人戲曰、似鬬雞之勢、其衣或白或黑、貴僧赤衣襦衣相

對、猶赤雞白雞之相合、衆皆以爲工形容、云々、萬部初日或人黎明至堂、其屬宿直者曰、早出、曰後夜法事猶未始乎、群僚何遲至、其屬曰、後夜法事既過、於讀經則爲早、云々、其人愧而去、聞者爲之快笑、

今晚余與永井伊賀守談、亭主曰、邇日山中見巡禮者成群而過、彼等當時在山無益、且放火者混在其中、亦不可測也、今日話群僚、甲斐守應之曰、固然、明日召其長可放逐之、若其所言有理、則可加法令、云々、余曰巡禮者拜三十三所觀音、此山本名三荒、台徒假其訓改爲補陀落、以爲觀音所居、故巡禮者來於此乎、密家假三荒音、以爲日光、而爲大日之山、今台徒雖領此山、以日光之名宣東方、專稱日光、然未廢補陀落名、且中禪寺麓有廣野、傳稱是標茅原也、亦是觀音之所、座也、巡禮者亦知之乎、此山神本是與宇都宮父子而共爲當國之鎮、豈觀音之地乎、先考作二荒神傳、其事備矣、巡禮往來、亦是浮圖假託之所爲也、於今放逐之一者固當焉、況其台駕登山在近乎、不可令非常者濫入也、伊賀守亦談曰、今

日萬部讀經畢後、乘馬巡檢山下、歷覽群士假屋、又見廳下之士寄宿之札、多是狹矮、偶得其廣者、其人之幸也不論廣狹、唯欲事畢而歸府而已、其餘件々相談而歸、

九日丁未快晴、寅刻三佛堂後夜法事如例、

今朝於本院、頃日改曰招門跡公家有灌頂饗應、

吉良少將往見之、辰刻、讀經始、梶門爲導師、一卷

畢、歸宿房、

已刻前、吉良少將上野介品川內膳正二人四位侍從、

守永井伊賀守高木伊勢守梶左兵衛、各着衣冠一來

集、

警、固廟門內外、中山勘解由守瑞籬外、土岐十左衛

門巡檢之、松平彥太夫携長櫃數合、置、

澤左近三好能登守石川市正岡部阿波守小堀下總守

能勢山城守井上兵庫頭小笠原丹後守大久保安房守

戶田攝津守、以上十人各着衣冠、至、

莊嚴盡美、庭上左右積絹綿、籬外張舞臺、左右廻

廊張幕、伶人裝束群聚廻廊內有舞樂屏風、各

有畫圖、記其名、此內一及今度新調水野監物加々爪

甲斐守那須遠江守妻木彥右衛門內藤新五郎荒木十左衛門安藤傳右衛門阿部忠右衛門、各着長袴、候、三佛堂讀經席、

余入、

等、至、御供所、逢辻伯耆、是猶高唐父也、談及高

唐事、又逢別當龍光院、此僧本若狹少將所懇遇、

也、談及少將事、不堪懷舊、既而與小島氏森氏、

共入、

人、使考今日儀式、至、已刻、小川防城大納言阿

野大納言持明院大納言萬里小路中納言、衣冠下襲

入、

四卿入、拜殿、著左傍座、東面南上、次梶井門跡著

殿內右方座北面、次毘門著座同前、但與梶井門不

相並、而其中爲空座、此間日光御門跡、自本院乘

轅至、常行堂前下轅、入、

之、日門自、練步、竹內極騰、題壓袍 禁色袴執蓋、川

中將中國中將、衣冠執綱、僧正以下群僧先行入、籬

內、吉良等、河內守備前守伊賀守等迎之、日門至

階上、向花瓶灑水而立焉、妙門至、日門灑水于

妙門、妙門入、殿內着梶井次座、既而梶井新門、十三歲

至階上、日門爲之灑水、新門入著座、在妙門之下毘門之上、此間僧正院家二十人、列座殿內、群僧數十口、列座假張、既而聲明、日門登殿內高座、其前禮盤二有之、妙門梶新門、並座其上、既而大澤三好等、捧花宮至階上、川鯖中園極脇取之、置日門梶門毘門之前、而妙門梶新門、不供花宮、大澤三好等十人、五人一側取花宮入殿內、並置僧正院家二十人前、如假張群僧、則小僧取花宮自緣道往、置花宮於其前、梶門妙門及四卿馳走六人從來候假張、既而門跡及僧正以下持花宮立、而散花聲明、日門在高座、行法時、一僧持造花而背行而繞高座而出、徹造花、其後極脇入殿、徹諸門跡花宮、川鯖中園、在假張而不動、大澤三好等徹僧正院家花宮、既而日門在高座、自讀授戒文、妙門梶新門受之、戒文甚長、其間衆僧立三拜三度也、戒文畢、妙門梶新門、復初座、徹禮盤、日門猶在高座、僧取屏風一雙來、引繞高座而闕其背、妙門梶新門入屏風內、有傳授事云、毘門同入屏風內、其間良久、自日門登高座以來、至此庭上舞樂三番而罷、時及午中刻、而讀經既畢、故甲斐守來於此、以不著

衣冠故、不登拜殿、少焉傳授事畢、妙門梶新門及毘門、皆出自屏風而復初座、日門降高座復初座、於是有所被物事、備前守伊賀守奉行之、彥太夫開櫃出被物一重、授大澤、大澤取之登階上、極脇取之入殿、小川防城立座受之、置日門之前、凡三重、唐織一重、繻薄厚板各一重、次梶門被物三重、阿野役之、次妙門被物、持明院役之、次梶新門被物、毘門被物、萬里小路兼役之、其次第皆同前、其後大澤三好等五人一列、取被物入殿內、授僧正院家二十輩、其白服一重也、如假張群僧被物、依他日授之、而自下座通緣道而退出、次門跡坊官等入殿內、各取被物而出、次僧正以下自抱被物自下座退出、次毘門退出、次梶門退出、次日門退出執蓋執綱等役人行列如初、次妙門梶新門退出、次小川防城等四卿退出、而灌頂會畢、今晚亦於本院有灌頂會饗應、凡朝晚飲食七回、是先例也、云々今般德大寺前右大臣爲勅使在山、然以爲三三公、故不預灌頂被物事、今晚武家群僚、會於梶左兵衛佐定良宅、喫晚炊、而註進今日之事於江戶、吉良少將河內守備前守伊

賀守連判一通、告灌頂事、甲斐守彦右衛門一通、告讀經事、高木伊勢守梶左兵衛佐土岐十左衛門連判一通、各告其執役、云々、河內守命鈴木修理、作殿内庭上門外之指圖、註其事於其所々、又使余粗記灌頂會始末、又記今日廟堂及讀經席分居人名、其事繁多、小島森倦於運筆、余慮今日之中難成、而與河牧議、呼伯高庸助筆、既及申刻、群僚起座赴初夜勤行席、河內守獨留辨成之、薄暮而成也、時江府驛書至、其書先至忍城、豐後守披見之、而添狀以至于此、江府靜謐、大君安泰、由是甲斐守彦右衛門再來與河內守連判作答書、而與今日註進狀、共馳驛遣之、於是河內守等、各歸其舍、余與小島森共入浴而歸、既及秉燭、今晚驛書中有春信書、家族無恙、七娘彌快、云々、今日早朝晴、亭午陰、及法會畢、而未刻小雨及晚大雨、滿山群僚皆悅、法會之間不雨而不濕衣冠、僉曰豐後守今日可歸府、其退想勞心、故詳告焉、十日戌申雨降至夕而止

朝午晚法會如例、今午妻木彦右衛門舍招客、請余亦來會、其交雖淺、以老者偶招、故不能拒而

往焉、其接隣伯高庸所寓也、先過而問之、高庸自法會歸出迎之、其父辻伯耆、其兄二人、其弟一人、共同舍皆出逢余、暫談而聞衆客既集、而赴妻木舍、喫晚齋而歸、日暮小島氏森氏來、口授氏記法會次第、河內守聞之、寄贈糖餠餅羹若干品、且告曰、臺駕登山在近、若有執政問法會始末、平、日記速成則可也、明日雖不出堂、唯以筆記之成、可爲急務、其辭勿嫌卑俗、唯要無學之人易解、而爲他後之例、云々、先考自元和丙辰、初登此山以來、每有齋會、無不來焉、或有漢字記、或有倭字記、余亦登山逢法會、既三回、皆因命作其記、今般余所記、慶安戊子、承應癸巳倭字記、多取其例、豐後守河內守皆寫之、二筆史從豐牧來者、以日記爲其務、然頃日法席連筆無暇、故遲滯、今夕初起筆、嗚呼如此之淺俗者、亦不借餘力、則不能成焉、牛刀割雞、所謂與噲等伍、可愧可愧、

十一日己酉朝午晚法會如例、

早朝永伊牧使來有朝齋之招、乃往與山中檢使土岐十左衛門內藤新五郎小島氏森氏共飲食、而赴

讀經席、少時而與河牧議、携三二筆吏、赴河牧舍、作日記、小島草之、森淨書之、自去年夏、以豐後守爲惣奉行、爲卷首、至昨日之事、細字二十餘葉、及午而成矣、時讀經畢、河牧歸舍、自江戶驛書至曰豐後守九日之夕入府、十日登城、言上法會之事并群僚各務、其役勤勞無怠、臺顏快然、由是雅樂頭豐後守美濃守連判奉書、賜群僚、而久世大和守土屋但馬守副狀同至焉、吉良父子品川島山連名一通、松平和泉守井伊兵部少輔連名一通、河內守甲斐守彦右衛門連名一通、水野監物板倉隱岐守松平備前守永井伊賀守那須遠江守連名一通、公家門跡馳走者七人連名一通、梶左兵衛佐土岐十左衛門內藤新五郎連名一通、高木伊勢守荒木十左衛門連名一通、中山勘解由安藤傳右衛門阿部忠右衛門連名一通、關兵部少輔藤掛監物佐藤勘右衛門連名一通、云々、河牧點檢分遣之、群僚悉皆欣然、忘其勞也、或自來有謝河牧者、多祿者不然、甲斐守彦右衛門來會議事、同座群僚十餘輩、相並喫晚炊、既而各赴後夜法席、余甚勞倦、不能赴堂、直往梶氏入浴休息而歸焉、今日河牧以承應癸巳三

回御忌記一部、授梶氏曰卿家不可無此記、今般日記、歸府之後可寫贈之、云々、梶氏甚悅、今晚群僚多祿者各馳飛脚于江戶、謝執政奉書、微祿者皆曰可待明日驛書獻謝簡也、

今日驛書曰、酒井修理大夫、俄有麻疹之疾、不能先驅、故使松平甲斐守代之、勤今市驛番、云々、高木伊勢守荒木十左衛門、呼甲斐守家人在山中者與修理大夫家人在今市者、示諭之、群僚之內、蒙故若狹少將之眷遇者、有馳書問匠作疾者、余亦附小簡於加々爪甲州封內以遣之、日暮余訪阿部忠右衛門舍、以明日法會勤番畢而歸、江戶、故告暇、且傳語春信、使彼屢問酒匠作疾云、歸則伊牧使人招之、往談及三更而歸、

十二日庚戌今日萬部讀經結願、群僚馳驛書、而註進江戶、及午前而畢事、而布施銀三萬二千五百貫、河內守甲斐守彦右衛門、赴本房沙汰之、又有貧人乞食盲目等、施行米事、彦右衛門使其屬吏掌上之、云々、貴僧及僧正院家及當山東叡山僧侶等施物者非今日沙汰、可待二十日御忌辰也、御登山以前、爲使邊鄙衆僧各退散、先與萬部布施、

是豐後守所兼示三奉行一也、法會畢、阿部忠右衛門率三十人隊、出山歸府及靈牌納本殿、而中山勘解由安藤傳右衛門、率其步卒二隊歸府、但安藤者番人朝其餘勤番群僚者待台駕登山、皆留焉、聞下既發足群僚皆赴本房賀萬部法會畢、而赴河內牧甲斐守舍賀之、余直自三佛堂歸舍、

河內守去山中假舍歸山下本舍、招在山群牧進魚味、余亦雖在其中、以讀耕忌日禁魚味、且嫌衆客群會、故約以明日不赴焉、河牧曰、然則明日携二筆吏來可議日記事、云々

午後余獨赴憾簞淵、此行心憂不除、枉從官事、故無探景之興、然此處往年先考依日門之求作碑詞、聞其碑立骨堂上、且先日豐後守亦談此事、今日閑暇、故催此行、往見之、則高山相夾而急流在其間、磐石競秀、茂林岑蔚、誠是絕境也、山上有不動石像、故本名莫三淵、頃年嫌其倭訓與腥字訓似、改名憾簞也、曩莫憾簞共是不動梵語也云、其傍有石像七十軀、皆是天海徒屬也、獨步至深奧處、則先考所作碑高立碧石上、仰視墮淚而歸、其碑首趣備于文集、前日大澤右近談曰、憾簞淵有獨

木橋、童子戲渡之、橋動落淵、同行者欲援之急流不及、觸磐石碎頭傷身而死、其父母哭泣之聲、聞于其舍、不可忍焉、余今日見其獨木、則甚細小而非可渡者、彼童子癡而歿身乎、或其屢渡而慣其輕捷、不覺偶誤而落乎、嗚呼嬰病而沒者、哀慕不止、況於如此不幸乎、知命者不立於巖墻之下、可不慎哉、父子之情無貴賤一也、可憐可憐、誰不垂淚哉、

昨夕河牧謂余曰、豐牧歸府、山中無總裁、然大會無滯、誠是威風之廣覃、不隔遐邇、雖聖賢之代、所以爲太平者、無以加焉、余戲曰、固然、唯萬僧讀經、與聖賢之代異耳乎、河牧微笑、今日閑座思之、則頃日在山群僚、皆以河牧爲所倚賴、然其中有同列者、有同官祿者、且各守其職、有不信他者、然皆重台命、而雖不受其指揮、亦無爭抗者、故和睦無不平者、是以無一事之妨、河牧喜悅之餘、其言太過乎、然其過言亦癖也、余戲諷亦癖也、既是三十年學友、其職任雖隔霄壤、及晤語則相互無所隱也、河牧之喜猶如此、想像豐牧之歡喜殊甚、字想群僚所掌有大小、在山勤勞、

亦是其職分也、然前日上使來勞之、昨日賜奉書一勵之、群僚豈不愼哉、如余是無用之人、然今般強起、以充不時之用、故上使登山、不及問安否、奉書及群輩、無一語之傳、亦是其分也、所遇不厚、則勞心亦薄、唯務日用、則此心休焉、腹無一物、唯有文字、若有文字之公用、則滿山之盲聾、其奈余何、唯箇一寸鐵、雖彼意氣揚々之輩、不足畏也、少焉自改謂、執政平生不廢余、想夫台駕發軔之前、營內之紛擾、可推知焉、其不及傳語、亦宜矣、況身在山中、用途無闕、留守亦不乏、誠是公恩之大者也、浮圖讀經、雖非所欲、然是大君追遠之孝心也、然則大會之無碍了畢者、雖微臣可以喜焉、風聞在山群僚、或福祿兼備、或起臥隨意、或食膳盡美、或酒色無度者、亦有之、今般勤役一句之間、起于寅歸于卯、又出于辰歸於未、又出于申休於酉、其困倦可知焉、然無一人之臥病、是亦台命之重也、然其中或有歸私宿、則喫魚味者、或有飲酒圍碁而聞催時鐘、而後期至法席者、此等猶可容忍焉、或見讀經僧中、歲少而貌美者、而潛呼而進酒、而及夜招之

於其宿房、而同浴、且不自耻、而翌日語之誇同僚、聞者亦不掩耳而羨之、不愼其獨如此、然幸無事變者、皆是恐威風、而不發其惡也、太平之政刑既備、則有耻且格之道德、可以待焉、及晚、伊賀守使來曰、今晚猶可爲素食、寄胡麻鹽致一小壺云々、此昨夕余赴彼舍喫之、賞其味不甘不苦不辛不鹹、故知所嗜好而惠之乎、其志深牢珍於想像自河牧歸、慮余無聊而及此乎、欲往而謝之、然明日勤東照宮之番、故憚觸穢、不果而止、伊牧行囊有石丈山吟詠十餘首、求加訓點、乃使高安成點之遣焉、

十三日辛亥聞今朝在山公家門跡參拜東照宮、伊賀守備前守勤番、吉良等高家并水野監物加々爪甲斐守那須遠江守等伺候、公家着衣冠、武臣直垂大紋、云云余觸穢不預之、狛高庸來談移刻、彼每日候法席、今日初得閑暇云、

九鬼式部寄海苔數種、此人爲河內守妹婿、故面友年久、今爲梶門馳走人在山、

井伊兵部少輔、有明朝飲食之招、辭而不赴焉、午時過山菅橋赴井河牧僑居、居在鉢石町高處、

眺望則筑波山那須山及奥州亦在雲間、絕景無雙也、既而小島氏森氏來、乃讀日記、使河牧聽之、少焉土岐十左衛門關兵部佐藤勘右衛門來、相共喫晚炊、頃日素食、今晚初食魚而口吻鮮滑將徹膳時、加甲牧來、以下與永伊州有晚殮之約、故遲參云々、乃自讀日記、高庸與其徒二三輩來謁河牧、及晚而甲牧及衆客皆去、余獨留談、高庸侍焉、秉燭而歸、與高庸共徒步乘月、過山菅橋滿三樹影如晝、高庸曰、移此景於江府、在閑暇時而吟詠、則何以換焉、余曰、然、暫佇立眺望而進步、遇吉良少將品川侍從於途、少將曰、奚自而歸、余曰、自河牧而歸、君何處而歸、少將曰、應永伊州之招、而訪卿之舍、而赴梶氏而歸、余謝其來訊而相別、既而與高庸分袂而歸舍、留守者曰、吉良少將自來門外聞他適而去、云々、燈下再見日記、而有所改正、

今日江戶驛書至曰、台駕彌以十三日發軔云々、有示諭高木伊勢守荒木十左衛門之事、二人到河牧相議而去、豐後守寄書於山中群僚、以勞其勤役、二人告余曰、江書至、自妻木氏可達焉、

既而妻木氏達書三通、其一則豐牧狀也、懇勞余勤役、賀法會一畢、而其端自筆曰、留守無事、勿勞遐想、登山在近、不可及回答、云々、余再三讀之、深感多務之際深志鄭重、其一則久保吉右衛門狀也、其一則春信書也、家內平安豐牧使來、問留守安否、又曰、訪姬路拾遺談話、頻及餘事、云々、今日河牧亭自品川侍從寄一封、展視之則阿野亞相應、河牧之求而所示倭歌題十件也、河牧曰、阿野以倭歌聞於世、故憑品川求題、然在山多事、不遑吟詠云々、在此紛擾之間、則如余亦口生棘、則河牧所嗜可嘉焉、

今夜三更就睡、夢侍考妣、有官命曰、可移家于日光山、修本朝編年錄、使高木伊勢守點檢山中能筆僧云々、故與考妣共來住當山、云々、夢醒恍惚、猶對考妣、而嚴貌慈容不離眼、而少焉悟其爲夢、不覺垂淚也、未知思夢乎、困夢乎、夜未明、睫不交、燈影幽、曉鐘鳴、其間百端千慮、錯出於方寸之間、追憶去月今夜久娘熱鬧困叫譁語殊甚、而悲淚沾衾、

十四日壬子快晴、昨晚先驅水野出羽守登出、

今曉稻葉美濃守驛書至曰、十三日辰刻台駕出御江戶云々高木伊勢守荒木十左衛門傳諭在山群僚、悉皆欣然、

余今朝赴永伊牧、喫朝飯、梶左兵衛及工長鈴木修理來會伴食、既而余訪吉良少將、暫談而直訊松備牧、他適不逢、而至本房逢坊官而歸、過梶氏、則伊牧在此、與主人共座園中小店、其前有長場、伊牧携良馬七八疋來、使其家人馳駢、其後主人出馬四五疋、使人更乘焉、大澤右近來少馬去、主人謂余曰某離士林入山林、則苦馬無益、然朝夕廟算之間無他事、故試馬消日而已、既而伊牧入浴、余亦同浴、主人有可議事、而赴井河牧、既而伊牧歸舍、余亦歸、

今晚井河牧永伊牧等群僚、會於板倉隱岐守假屋云々、佐藤勘右衛門寄書曰、明朝招井河牧加甲牧、可來伴食云、余以與彼爲面友、辭而不往焉、

聞今畛本多下野守、至今市勤番、今夕閑座無事、招高庸、他適不至、因羨彼父兄同舍、以寄一絕、

入夜永伊牧使人問之曰、今夜寂寥否、料知燈下讀書、唯恐在山日久、行臺闕蠟燭、乃贈三十挺云云、二更之後侍座者皆睡、余燭座憶久娘、既而悟其無益、開窓見月、則天陰微雨、忽思昨夕山菅橋月快晴、賦絕句三首、以慰愁情、古人以酒爲掃愁帚、我不飲酒、唯把煙酒管、以爲釣時鈎、併爲掃愁帚、

十五日癸丑今晨雅樂頭豐後守註進曰

台駕十三日晚、着御岩築、十四日辰刻、岩築出御、亭午御休息于幸手、未刻着御古河云々、河內守甲斐守傳諭群僚、

余夙起想像江府、定知春信代、余勤望日祭、既而甲斐守贈蔬茸三種、其後赴伊牧、喫朝飯、有下遊寂光寺觀瀑之誘引、諾而未往、伊牧有官事而出、余歸舍、午時又被招而相共點心、時三竹來、診病者脈而去、於是遂與伊牧同行赴寂光、其路雖所曾遊、既忘之、如初見焉、青山峨々、磐石疊疊、乃知東北之地、險阻不利、中華本朝古今相同也、過石徑、時有老人乘馬、而肩與後從者、未知其爲誰、既而相近、開與視之、則妻木彦右衛

門也、相見相笑而過、及到寂光、與伊牧共下輿、杖、徒步、登崔嵬、觀瀑布、時傍有桃花爛熳、驚氣候不齊、四面皆松杉、所謂萬古長如、白練飛、一條界破青山色、可謂能形容焉、然東坡嘲爲惡詩、則至此吟詠、則可污瀑布、不如緘口而去、伊牧家臣小島氏下小坂、而直至瀑布落處、洗面漱口、余在高處見之、欲至其處、伊牧小童卸所擔茶爐而進一椀、伊牧亦喫茶、乃携手而降至飛流之下、乃悟飛流直下三千尺、疑是銀河落九天、誠是絕唱也、於是被伊牧勸、而賦絕句并四韻、而徘徊稍久、伊牧亦有吟案、然未成、時有小奴矮短似侏儒者、着襪樓而觀瀑者、伊牧戲曰、汝何者哉、曰、僕是奧夷也、爲傭奴來于此、今日無人情、僕者、故爲觀瀑而來、伊牧曰詠歌乎、奴赧然而去彼卑賤而有慚色、不亦奇乎、在山武夫之揚々、僧徒之囂々、未聞有雅趣、則不亦傷乎、漸向斜陽、又喫茶、小島氏出烟酒于懷中、添管勸之、少焉與伊牧共携杖徐步、至半途共乘輿而歸舍、一時之興、聊掃二句之旅愁、若無伊牧誘引、則余何爲催此行哉、余出府時、哀情

茅塞、且強聽續經、舌本間強、然今日之遊、悅目慰心、遂及吟詠、亦是平生之癖猶未止者乎、側聞在山群僚中有一人曰、爲人而不好園基象戲者、何樂有焉、彼亦癖也、余亦癖也、孰爽乎執詩乎、各其擇焉、入舍則留守者曰、水戶參議光圀卿先台駕到大桑鄉、使者來賜羽織、襲乾柿一器云々、又聞高唐携其弟來訊而去、

聞台駕今晚駐宇都宮、明日登山、可入御館、先駢松平甲斐守到今市驛、且扈從之輩、既入山者、亦有之云々、余觸機有憚于拜謁、故自今夕墊居不出舍、薄暮小島氏森氏淨書日記畢、寄草稿於余、請再覽、

一更之後、高庸來而伴食、誦余題詠數首、就中嘆賞寂光瀑布四韻、余曰、此詩自以爲頗形容彼境了、余登山既四度、再來亦不可測也、欲留題詠於此、使後來者、知余經歷、汝其代余、淨書而寄贈於彼寺、此行豫知無文字者、然行囊之中、收明牋及華押來、汝得些暇而連筆、則可押印而遣之、高庸曰、所論固宜、邇日可寫呈焉、乃授明牋併草稿附之、談未了、既過二更、庸也辭去、

十六日甲寅夙興獨座、久娘周月忌在近、追懷殊甚、就想去月今日七娘臥病、幸得快復、可以悅焉、悲歡計會、

聞今朝例幣使詣東照宮、吉良少將等高家、井上河內守等、迎送之、松平備前守永井伊賀守警衛云云、

已中刻地震、少時而止、

自朝至午、讀尤延之全唐詩話一卷四十四葉、以掃愁鬱、而閑寂、時門前喧囂、扈從先行絡繹不絕、滴朱於詩話之間、如與故人語、至其風體格律、則不遑細評、見長孫無忌嘲歐陽詢以爲似獼猴之段、乃知白猿傳詢母爲白猿、被掠取、而其所生之子是詢也者、無忌詩傳會以成小說也、且尤延之自序曰、往々觀世變者於此有感焉、徒詩云乎哉、今讀之則固然、其人之臧否、亦可自知焉、見者匪當悅詩句之話而已、考其所以作詩之由來、可以評其人品也、然則所取所捨不可不戒之、所謂思無邪可着眼也

午後雨降、深憂扈從濕衣、未刻末、電囑全唐詩話二卷五十紙了、今日所見

殆百葉、嗚呼分陰可惜、

申上刻台駕入山、定知館中之事、如先例、

官醫良以法眼扈從登山、傳達家書并一器、開綬則

有老姑山妻春信奉常七娘書并勝澄金節書及清隆

祐晴寄安成狀等、一器所包者、鷄卵也、家平安、

可以喜焉、唯悲缺久娘書、噫、先是入山以來、

附驛書報余無恙、雖隔三四日行程、然一晝夜

之間、驛書互達、是亦公恩之大惠也、

黃昏永伊牧使來告曰、大君震良安泰即今還自館

中、故報之勿勞心云々、余舍距御館不遠、然

咫尺千里、未有一人之告報、幸得聞伊牧之所

論、微心始平、以來詣館中、故豐後守邸雖在接

隣、然憚觸穢不往問焉、雅樂頭及久世大和守土

屋但馬守皆扈從焉、稻葉美濃守留守江戶云々、乘

燭裁家書回答、以寄小島氏、而附明日驛書、以

遣之、

燈下二更之後、一見全唐詩話三卷四十八葉、

十七日辛卯久娘一周月忌日也、寅刻者、其臨終之時、悲

淚行々、拭却而興、惘然、及辰刻、喫素食、想像館

中多務、而開戶仰見、則細雨空濛、默禱快晴、而祭

儀無滯、參宮禮畢、在微身亦如此、料知滿山群僚等、皆是同心也、

聞御祭禮如例、大樹登棧敷拜神輿、松平備前守永井伊賀守衣冠奉護神輿、祭儀畢、大樹御束帶御參宮、老臣供奉、諸大夫行列、紀伊亞相尾張黃門水戶參議豫參、日門毘門勤神前之役、武臣勤役如先例、後日詳可御參宮畢、大樹直拜大猷靈廟、事畢還御旅館、宜不知焉、他日詳聞、可記別錄、未刻、良以來訊、對話少焉去、

自巳至未、讀詩話三十葉、滴朱而困睡、夢久娘乍醒、如失手中物、欹枕未起、永伊牧使來招之、欲聞今日盛儀赴焉、語昨今館中件々、既而進晚齋、來客數輩、談江府及途中之事、及薄暮歸舍、自申刻雨降、及夜淋漓不止、

燈下讀全唐詩話二十葉、第四卷畢、所標示之句可以吟玩焉、然有語怪者、不足取焉、唐人以詩及第、不知道學、故其行跡可惜焉、尤延之何不擇之耶、其中滕邁柳詩云、陶令門前羅接籬、亞夫營裏拂旌旗、但不言楊柳二字、最爲妙也、今接着題體多企及者、如此等句、用故事爲

一聯、則今亦可窺得其藩籬乎、然不用僻字、善形容之、所以爲妙、其在茲耶、又曰、宋雍嬰瞽疾、其詩名始彰云々、近世唐詩解作者、喪明之人也、瞽而能解詩爲希異、然有宋雍在前代、不亦奇乎、瞽而能詩、使有雙眼者耻之、

十八日丙辰及曉雨猶滂沱、天明雨止、

早朝豐後守使來曰、即今有寸暇、可會面、余乃赴焉、門無來客、余獨入座、侍者引余入寢室、豐牧着肩衣袴、獨座、余賀台駕登山、昨日祭儀參廟無滯、豐牧欣然曰、台侯途中康寧、且昨日之雨、行禮之間、未及濕衣、事畢大雨誠是協神慮感靈德者乎、余謝前日被惠尺牘、訪問留守之事、豐牧曰自昨以來、不得寸暇、故勞問遲滯、參宮既畢、與卿相見無妨、故今朝招之、

前大君畏敬神威之餘、深忌服穢、卿之所知也、今般幕府再參宮不可測焉、然則可憚謁拜也、二三日來滿山與馬往還如市、卿不出戶寂寥推知之、何以消日、余曰、行囊有書、讀之慰寂寥、且與永伊牧談、豐牧曰、讀書者、良友也、然門前囂々有妨于晤伊、又告曰、小島氏森氏得卿之助言、既

記法會次第了、可以勞之、明日明後日、廟堂之儀式使卿見之、則有便於日記乎、廟堂不禁服穢、則避拜謁而窺見其儀乎、與雅樂頭相議可告諭焉、余曰、一筆更窺見其儀、則何必及使余見之哉、且公在江府、既定其次序、余粗知其趣、則二筆更草之、與余議、則倭字文路他日潤色之亦可也、館中多務、此等小事、何與雅樂殿可議之哉、豐牧曰、今般法會始末、據卿往年舊錄、以豫議之、聊損益而已、百聞不如一見、欲使卿見之、然如近臣森川下總守、亦依觸穢、在山下、則卿所遠慮、固宜云々、既而進朝齋、余獨伴食、時令嗣播摩守自其假屋來焉、

徹膳喫茶之間、有人報曰、雅樂頭既詣御館、豐牧乃出、余暫與播磨守談、且逢三澤氏、傍見一老人、是豐牧家老平田氏也、余所素知也、播牧曰、彼雖大老、甚壯健也、此行望請從焉、余謂、豐牧忠誠篤厚、故其風化及家臣者乎、播牧喫茶、以其餘、授平田氏、拜戴而飲之、其齡七旬、着輕袴、着行纏、其進退如壯夫、以一啜之餘、授三澤氏而去、既而余出、三澤氏送曰、令愛之喪未了、祇役

既二旬、料知中心不樂、某嘗亡小女、至今無忘之、君意亦可推焉、淚浮雙眼、余答曰、今般三子病而二人平復、一人物故、歡重於悲、然天性之愛、忘所歡而唯悲彼不幸、卿其察之、三澤氏曰、父子之情、不隔貴賤、某亦多子、存者猶多、然亡者不可忘焉、既而余歸舍、謂、既見豐牧、則諸執政副執事亦不可不訪焉、然非其招、則於相見則可憚焉、乃乘輿而出、先以便路訪久世大和守宿坊、逢伊場玄意、示諭而出、意者、門生春貞兄也、受和牧恩顧而從來者也、訪雅樂頭宿坊、示諭謁者而出、此坊號櫻本、故若狹少將所建而寄宿也、余先是從羽林登山三回、晝夜往來此坊、今坊舍依舊、羽林逝矣、就想羽林監造大猷靈廟之事、自運土石、其意欲使今大君一覽之、若加一年齡、至今日、則彼意足矣、懷舊殊甚、佇立寺門而出、訪土屋但馬守宿坊、示諭留守而出、時間水戶參議君未歸于大桑、而在山、尋其宿坊而赴焉、參議今日閑暇、喜余來而出逢焉、談中華三韓本朝之事、且及性理詩文倭歌之談、余謝前日惠問、既而參議曰、聞梶左兵衛爲人、誠是今世奇士

也、汝此行相逢否、余具述其行實、而所見所聞、詳吐露之、參議曰、

前君侍臣在府者、如秋扇之捐、設門前之網、彼執志篤固不忘舊恩、匪直也人、欲招而語之、然慮彼不必來、余曰、彼接人不奇異、言語柔和、頃日不拒、永伊牧加甲州之招、則與世人非絕交者、然謙退不求榮譽、如君之貴重、則必其辭之乎、余又曰、三竹稱彼爲卓行之士、余謂忠直之士也、參議曰、忠直者本也、卓行者、忠直之顯者也、未有不忠直而卓行者也、參議談曰、昨侍假閑、拜祭議、其行粧與江府山王祭之類、不可同年而語焉、然可稱神遊、不可謂祭禮、願使大君知古禮、而自行祭祠、則孝志可感、應英靈也、余曰、聖王之禮、今果不可行也、漢書所謂高廟遊衣冠者、今祭禮似之、參議曰、遊衣冠、非聖人之法、何必倣之哉、余曰、堯舜文武之事、中華猶不能倣焉、在今則漢之高文唐太宗猶可庶幾也、參議是爾曰、此度追遠萬部經、不及一篇祭文、吾願獻祭文、時宜奈何、余戲答曰、台徒不可喜焉、君笑曰、彼不喜者、吾所願也、唯憚公儀耳、又曰、昨陪台駕

參宮、所謂奉幣者、非吾奉幣、而僧徒以神前之幣、使吾戴之、可謂戴幣也、余曰、固如君言、此事余輩常所背語也、世俗之誤豈徒是而已哉、可捧腹者多矣、君又談曰、卿出府之後、招姬路拾遺、催詩歌會、金節伴食、以卿不在、爲一欠事、又及神道之談、參議曰、甚哉神道儒道之衰也、盛哉佛法之行也、余不然、佛法亦衰、唯是僧徒盛而已、參議微笑、次談最澄空海事、因及日門毘門之事、次論隱元事、次轉評井河牧學術、次憐藤勿齋沈淪、又轉感阿部豐牧人品、次議當世風俗、曰、在府嘗問井河牧曰、今世遊民爲何者、河牧曰、僧徒是也、吾答曰、以僧爲遊民者、古人之糟粕也、當時浪人甚多、似士不仕、似民不耕、不工不商、妄費五穀、非遊民而何、河牧曰、然、汝以爲如何、余曰、誠如君言、余亦頃日在山、見巡禮者、壯夫而健步、其力可以耕、其貌可以仕、且習熟其事、則足以爲工商、妄成群聚類、橫行山林、濫入寺社、寄食鄉民、以費飲食、是亦遊民也、參議笑曰、水戶領內爲巡禮者甚多、既知無益、欲禁制之、汝言與吾心合呵々、又談曰、昨奉從大君登廟塔、踰石

級、時遇雨、不携一僕、束帶挾裾、自執小傘、徒步而升降、未覺生來如此之苦、然群僧着繡、意氣揚々、余曰、是亦流例風俗所使然也、其餘件件既忘之、移刻告暇而出、參議曰、在山之間、與三竹携手再來云々、余直訪良以法眼小島氏森氏舍而歸、復出訪稻葉丹後守宿坊、是今執政美濃守嫡子也、此坊號妙道院、院園中有若干石塔婆、是皆四葉執政等收骨處也、余就看之、則有若狹羽林士并拾遺堀田拾遺阿部對馬守等塔婆、共是其存時面見其威勢、不能無感懷也、既出訪阿部播州假屋、傳語三澤氏而歸、

他適之間、官齋意安法印來問曰、出府時、與春信通使、家內無事云々、余寄簡謝之、且分其半、投高唐、聞今日在山公家門跡至旅館奉拜謁焉、事畢、台駕入本坊、獻饗應、其後台駕臨慈眼大師墓、被詣三佛堂云々、慈眼所謂南光坊大僧正天海也、毘門之師而、日門之法祖也、嘗蒙三葉之歸依、而辱被贈大師號者也、台徒盛于此山、自天海始、今日枉駕、誠是彼徒弟之榮也、

井上河內守傳語小島氏森氏曰、明日參靈廟、可觀法會云々、聞明日、台與參堂、在法會畢後、故余服穢無禁、是雅樂頭豐後守所議定、而示諭河牧也、後日聞、豐牧在御館多事之間、屢懷余幽寂、其懇篤不可忘焉、余舍行囊如洗、然唯有海苔粉餅、乃盛小宮贈意安、以謝報先時之惠也、意安者、累世通家之交際也、

先時水戶君之傳語、欲達三竹、裁小簡、聞三竹邇日移舍、欲尋其處、時侍者曰、三竹肩輿過門、使人喚之、稱有急用而不至、乃追之、附小簡子與中、三竹使奴報之曰、會得其旨了、春信書至、一家平安、附阿部忠右衛門書傳達、又曰、稻葉美濃守使來問留守、無它否、既南回、呈書謝之、

及晚豐後守自筆尺簡來、明日辰刻前可下御堂觀法會、著曰、鈐事不及云、余往謝之、直過伊牧、語明日參堂之趣、遇酒井日向守堀田備中守于席上、既而主客共赴梶氏浴室、余直訪意安法印久保金左衛門舍、皆他適不面而歸、遇良以法眼及同明珍阿彌、傳語於久世大和守土屋但馬守而歸舍、聞大森信濃守及供奉人觸服穢不候御館者多矣、

料知其喪可_レ有_二輕重_一、然官事無_レ鹽、強從來者、匪_二余而已_一、噫、

宵分獨座、俄聞_二隣舍騷動_一、僕奴訝_レ昧、既而定、蓋其所_レ繫之馬、嘶驚出_レ厩離散、而所_レ掛之輿墮落者乎、燈下見_二全唐詩話三十葉_一、點_二朱句_一、漸及_二三更_一、爲_二明朝夙興_一、投_レ筆而臥、

十九日丁巳快晴夙興參_二御堂_一、豐後守及河內守備前守伊賀守甲斐守并梶左兵衛佐、各衣冠參候、被物役送諸大夫十人束帶來集、豐後守及吉良少將同侍從品河侍從、畠山侍從_{各衣冠}、緣上、其餘河內守以下在_二庭上_一、辰刻德大寺前右大臣參堂、_東隨身六人先驅、一人掛_二裾於弓弦_一、右府至_二階下_一而揖、豐後守吉良等迎_レ之、右府入_二拜殿_一着座、一拜次小川防城、次阿野、次持明院、次萬里小路、各束帶着座、_{右府一}四卿_{疊一}人各一拜、馳走輩五人從來候_二假張_一、少焉衆僧自_二傍階集_一、假張、次日門參堂着座、次梶門妙門參堂着座、各有_二灑水_一、馳走輩二人從來候_二假張_一、既而導師毘門自_二幄屋行_一列參堂、河緒中園極薦執綱執蓋、_{如九日僧之儀}、正院家先行、伶人迎_レ之、毘門至_二階下_一一揖着座、_{家公}門跡至_二階時_一、每度豐牧及_二僧正院家入_一殿內、列座、雲客三吉良等、下_レ階而迎_レ之、

人入_二假張_一、各束帶也、既而導師登_二高座_一、雲客三人賦_二花筥於四門跡_一、諸大夫役送_レ之、雲客於_二階上受_一取之、_如九日_一次諸大夫賦_二花筥於僧正院家_一、_如假張衆僧_一、則凡僧賦_レ之、有_二曼陀羅供_一、散花各立_二聲明_一、但門跡不_レ立、次極薦一人、徹門跡花筥、導師唱諷誦_二願文_一、此間庭上舞樂各三番、積_二絹綿各三百匹_一、_如前日_一、稍久法事畢、有_二被物之事_一、日門被物三重者、諸大夫役送至_二階上_一、河緒中園更受_レ取之、至_二殿內中央_一、右府起座抱_レ之、置_二日門前_一、梶門被物三重者、極薦受_レ取之、小川防城於_二殿內闔際_一抱_レ之、置_二梶門前_一、次二重阿野自_二極薦_一受_レ取之、置_二妙門前_一、其一重持明院勤_レ之、置_二妙門前_一、次一重持明院置_レ之於毘門前、次二重萬里小路役_レ之、置_二毘門之前_一、極薦諸大夫役送_レ如_レ前、_{梶門等門跡三人、而月卿四人也、故被物次第如此}次諸大夫被物一重於_二僧正院家_一、_如假張衆僧_一、則後日授_レ之、既而衆僧退去、坊官徹_二門跡被物_一、僧正院家抱_レ被物退出、次妙門梶門退出、次毘門退出、執綱執蓋如_レ初、伶人送_レ之、次德大寺退出、次四卿退出、豐後守等每度送_レ之、事畢時已刻初也、余自_二傍徑_一歸舍、今日歸前守伊賀守花筥被物奉行如_二前日_一、

聞大君直垂烏帽子御參堂、松平讚岐守并伊玄蕃頭豫參、雅樂頭豐後守等供奉、諸大夫行列云々、御拜畢而還御、余歸舍暫休、而往謁水戶參議君、君欣迎談話、君曰、今日無事、今晚與紀伊尾張、共有日門之招、今午刻也、至未刻、與汝談而慰旅鬱、好箇善來、君自懷中出一紙示之、讀之則祭大猷院殿文也、應命改正數字、君曰、昨陪參宮參廟、執政等忿擾、群僧囂々、不能持誠敬之心、明日亦陪廟堂、想夫如十七日也、吾明日畢事歸宿坊、淨掃寢室、遙拜廟堂、焚香灌酒、自書此祭文、自誦之、如此而吾心聊足、不然則登山唯扈從而已、於廟堂則無益也、汝以爲如何、余心謂君非宗子、則雖似借、然其志不可不感焉、且大君參拜之後、私祭之、亦免非禮乎、乃答曰、君之盛志、誠可感刻焉、若假裁紙牌而祭之則可乎、君曰、願欲設奠供祭之、然有憚於時、裁紙牌固好也、時三竹來也、乃執謁、君示祭文、竹讀之稱珍重、余顧三竹曰、大猷院祭文、余唯見二篇、竹曰、除之之外、其一爲誰、余曰、卿不知之乎、明曆乙未之歲朝鮮國王祭文有之、竹曰、然則

於我邦、則唯此一篇乎、余試問竹曰、朝鮮來貢三使并學士備矣、今若本邦遣使於朝鮮、則三使及學士以誰人當之、君莞爾不覺前席、竹曰、學士者卿其任也、正使者雖貴重、然君其當其撰乎、君笑曰、乏人哉、副使從事如何、竹稍久曰、藤勿齋可爲從事乎、副使如何、竹遂不能斥其人、君曰、麾下歷々多々、或高談性理、或自負其才、然至文字則無人如此、方今太平四葉何不與文教哉、君歎息曰、惜哉、讀耕工、因及勝澄事、且曰、春信稟性不常、他日可期其遠大、竹曰、金節亦勤學、君曰、固然、其餘談話件々、侍者告曰、漸及未刻、君不答而又談曰、江府事多、願留此三四日、與汝等二人登山翫水、吟詠遊慰、則何樂加之哉、旣而紀伊亞相及參議使來曰、旣赴日門、侍者曰、尾張黃門亦出宿坊、君曰、今晚赴日門猶無妨、與三卿共赴慈眼臺、不乘輿之甚、汝等察之、又顧三竹曰、今般春齋有服穢而不參宮、又不能入御館、吾想穢有甚於春齋者、不禁之何哉、竹不悟其旨、君笑曰、群浮屠之臭、不憚參宮、誰有心者不掩鼻哉、君笑而出、余與三竹共歸舍、

良以扇面記自江戶至日光驛程、余借寫之、歸路在近、欲考其數也

薄暮訪豐牧、在御館、直赴永伊牧、他之不遇、聞高庸舍近、而徒步往尋焉、高庸出迎之、其父辻伯耆守近元、其兄因幡同座、與近元談舞樂事、今日法會伯耆爲左方上首、擊羯鼓、因幡舞太平樂、高庸太鼓、此父子當時舞樂音律之巧者也、打話移刻、余示一絕、秉燭而歸、今夕北條安房守寄葛粉一器、以問余安否、其狀至高庸舍、乃使高庸筆返狀以答之、伯耆因幡因法會之事、而自京師登山、高庸爲叔父養子、而住江府、家業之暇、志于文字、出入余門、既八九年也、

燈下讀全唐詩話三十餘葉、其第六卷僧詩、往々佳句有之、就想本朝僧詩、在古則空海其最也、其後禪林風月、猶有可見者、然不免蔬筍之味、方今禪林寥々、況於顯密之輩哉、當時滿山士林縉徒幾千人、無可語詩者、痛哉漸及三更而就枕、

二十日戊午快霽大猷院殿十三回忌日也、有事於御堂、余障于服穢、憚于拜謁、故不能詣焉、按本朝古制、庶子服三十日、暇十日也、女子准庶子則余服

既除、十八日以來參宮無妨、況暇退過了、既二旬餘也、然當時不論嫡庶男女、共服九十日暇十四日也、不華不倭、共爲新制也、然喪服之長勝於短喪乎、今般使余記法會并廟堂儀式、然不能拜謁則奈之何、

今朝電囑全唐詩話了、全部滴朱訖、及收于行臺也、按尤延之標若干人詩話、其中如權龍褒等、寥寥不聞於世者、亦不漏之、然不載李杜者何哉、彼其尊尙之餘、不漫話之者乎、近世君臣圖像一本有下不載先聖像者、今大君幕下往年使畫工狩野探幽描君臣圖像二卷、而特摺先聖像、別爲一幅、其盛志十倍延之不話李杜者歟、尊聖如此、唯冀儒風之勃起、然則追遠之孝志、亦復中華古制乎、

午前高庸淨書余寂光觀瀑四韻呈之、其筆雄健、在紛冗之間、不背所約、可嘉焉、乃押柳風梧月印於句首之傍、押六義堂印禮部尙書印於月日姓名之末、以附與高庸、使寄達于寂光寺云、余曾見朝鮮三使題詠于駿州清見寺、其餘海道旅宿、往々見朴螺山詩于屏風、謂彼等逆旅一過之匆忙、

猶貽其名于我邦也、余登此山、既四五回、所吟若干、未會貽一句于此、故此行及此然山僧誓於詩律、不可及一覽、以投塵埃乎、若後世如蘇子者過此、則徐凝惡詩被瀑布洗乎、先日遊憾谿淵、見一絕於石上、其拙不可下以詩看之、詩與其人名共忘之、彼欲傳名而遺臭、不堪胡盧、然自不知其拙、則余詠瀑詩、亦自不知其拙者乎、嗚呼、黃鶴之崔顥、岳陽之孟杜、非所企及焉、彼山僧若不捨我詩、則登覽之一事、其不朽乎、不知山靈以謂何、呵々、聞勅使法皇使本院、使新院使女院使束帶詣御堂、納御贈經而着座、諸門跡參着座、豐後守等武臣各束帶伺候、於是大君束帶御參堂、扈從輩各束帶行列、大君御拜畢、御着座、紀伊亞相、尾張黃門、紀伊參議、各束帶着座、松平讚岐守井伊玄蕃頭酒井雅樂頭豐後守及吉良等侍從以上伺候假張、其餘武臣諸大夫候庭上、日光御門跡爲導師、有贈經供養法事、大君於簾中御聽聞、花宮役送如昨日、法事畢、有被物之事、公卿勤役門跡被物、其餘大體如昨日、備前守伊賀守爲被物奉行、云々、法事畢公家門跡退休於別處、大君

拜寶塔而還御、次公家門跡獻自分贈經、云々、次女院御香奠獻之、次紀伊尾張水戶香奠獻之、其餘御一門女香奠獻之、次在山武臣獻香奠、有差云、定知豐後守爲上使、可賜御布施於日門毘門等、可如先例、其議不詳知之、大會無滯了畢珍重、午後在山群僚赴雅樂頭豐後守大和守但馬守宿坊、賀今日盛儀無滯了畢、余亦往賀之、遇井伊兵部少輔及官醫宗悅法印於途、扈從先驅發途者甚多、既而赴北條安房守舍、謝昨日惠問、而訪永伊牧、皆在御館不逢而歸、雅樂頭平生於余眷遇甚厚、大和守有相識之舊好、此行余不詣御館、二老多務、故未相面、聞但馬守今晚既發途、又聞紀伊尾張水戶四卿皆出山歸大桑、水戶參議臨發、使其侍者伊藤七內寄書寫昨日所談祭文被示之、且曰可使梶左兵衛佐一覽之、七內者、勝澄外舅也、余使人問梶氏在宅否、在御館未歸云、台駕發軔在明日、永伊牧明後朝出山、欲與余同途、然有所思慮辭之不肯、

三竹過門外、使人問余發途何日、余答其使曰、明晚待下台駕漸至壬生驛、輿馬不唐突、而經宇都

宮道路可赴焉、然未決、薄暮伊牧使來曰、一兩日晝夜候御館、故不相面云々、

夜坐默思、余此行素知備不時之用、故台駕入山五日、無一事之咨詢、則果是無用之人也、然則悲淚未乾、強起予者、誠是無益之事也、滿山紛擾我獨閑寂、所謂無罪見配所之月之類乎、呵々、既而又思扈從之士、各有武備、然無事變、則武備亦無益、是亦備不時之變者乎、彼意氣揚々、駿馬利刀弓矢長兵、亦是與我篋書筆硯、共歸于不用、謂之無爲而治者乎、幸哉、生于太平之世、而不勞而食祿、誰不戴公恩哉、執政可畏、然晝夜在館中不解衣帶、自予閑寂觀之、則得失果何哉、不可美也、曾聞寬永之初、先大君臨金地院長老崇傳房、傳望請催詩會、一昨日門之奉招台輿、不聞有風雅、可以痛恨焉、以王族之貴、屈請幕下、其饗應唯尋常而已、日門不馴事、則可以允容乎、侍陪之僧侶之所爲、以唯豪富爲事、則其不及風雅、不可怪焉、復聞癸未之秋、朝鮮信使登山參宮、各賦詩數篇、僧徒匿藏不能接待焉、館伴武臣亦然、今追想胡廬、

比及三更、梶左兵衛佐來叩告、余示水戶參議祭文、梶氏讀余讀之、余乃誦之、說其旨趣、梶氏落淚行々、感情形於面、曰、如此之深志、雖憚外聞、某何默之哉、必可協英靈、今夕參堂奉供焉、就之有所談、然使余誓言而後語之、故不錄焉、梶氏出、余送於門外、以謝頃聞之懇情、同步佇立、良久而相去、夜雨、

廿一日己未晴辰刻台駕出御御旅館、

永伊牧使人報之、

今朝高庸來、少焉去、其後辻伯耆近元來談樂器之事、且曰、政之和形於樂、聞其音、知其德、治亂之異、發於音、聞其調、知其政、雖天地之和、由音樂而知之、方今太平之世、仰望舞樂之興、余曰、頃日汝曹唯吹管擊鼓、未聞調絲、幕府若催管絃之御遊、則彈絃者誰、近元曰、某等管鼓者、我輩之家業也、某傳授箏并琵琶、若有所望則彈之、唯惜琴瑟於本朝書彈之、今則絕云々、余曰、頃日所吹者箏乎、曰、箏也、余曰、然則八音之匏乎、曰、然、余曰、井河牧掌伶人之事、甚好樂、且遇高庸厚深、則汝曹可有待乎、且諭曰、高庸其家業其勤

矣、然余不_レ知_二其可否_一、其稟性爲_レ人被_レ愛、且墨痕不_二尋常_一、雖_二達官_一知_レ之、其學問吟詠不_レ怠、則可_レ進也、卿其諭_二戒之_一、使_レ無_レ怠焉、近元謝而去

午前赴_二梶左兵衛宅_一、詣_二日光御門跡_一、述_二賀而出_一、含發途、踰_二山管橋_一、訪_二井上河內守_一、遇_二高木伊勢入_一、河牧曰、今日發途則被_レ遮_二於扈從人馬_一、蓋待_二明日_一、哉、余曰、台駕自_二壬生路_一進發、余直經_二宇都宮_一而往、河牧曰、吾亦今日向_二宇都宮路_一可_レ出途、從行者不_レ得_二驛馬百疋_一則載乘不_レ足、待_二馬之聚_一可_レ發途、卿其先往_二外俱自良_一而待_レ之、余諾而欲_レ出、河牧援止_レ之、暫談_レ之間毘門來訊、余避入_二河牧寢室_一、旣而毘門去、復談少時、吏來曰今日之間不_レ能_レ聚_二馬百疋_一、先出_二五十疋_一而漸々可_レ出_レ之、河牧顧_二余曰_一、今日之首途未_レ決、卿其先行、余乃辭而出、至_二今市驛_一、松平甲斐守本多下野守、猶未_レ解嚴、連_二惟幕_一警衛焉、出_二驛有_二二路_一、指_二板橋_一而行者壬生路也、指_二大澤_一而行者宇都宮路也、余經_二大澤驛_一過_二小池村_一入_二外俱自良驛_一、自_二日光_一至_レ此行程七里餘也、此驛矮小而有_二上中下三村_一、河內守家人先至以_二上

村_一爲_二其宿所_一、余僕從先至者以_二下村_一爲_二余宿處_一、二村相去一里也、余謂_二河牧縱今夜宿_二上村_一、不_レ能_レ往談_一、故傳_二語河牧從者_一、未_レ知_二相達否_一、此驛俗誤稱_二德次良_一、先考曾語曰、日光山緣起、有_二俱自良村_一、今寂光寺近邊有_二其村_一、然則在_二日光山下_一者、內俱自良也、在_二宇都宮路_一者、外俱自良也、余日光往還每度壬生路也、今日初過_二此路_一、且宿_二此村_一、而想_レ得先考舊談_一也、凡台駕往_レ路者宇都宮路、而還_レ路者壬生路、是例也、壬生路稍近、故常人往來多是壬生路也、余輿中顧望、則左右皆山、而夏木陰森、足_二以慰_一眼、吟詠任_レ口、且見_二王揚廬略詩_一、其行旅之句、暗合今日所_レ見者、亦有_レ之、所謂江山成_レ助者可以按_レ焉、唯愧余筆不_二縱橫_一而已、此村僻小而余舍甚矮、茅屋杉籬、僅以容_レ身、舍主曰、今般日光往路、台駕留_二宇都宮_一之夕、先驅稻葉丹後守一_一宿於此、彼人之富榮、在此過_二一夜_一、則在_レ余則逆旅之一宿寬廣者乎、灯下寂々、讀書行々、聊忘_二日光滯留之苦_一、廿二日庚申、夙出_二外俱自良_一行數步、見_二輿馬先行者_一、一人乘_二馬歸_一、至_二余前_一下_二馬曰_一、先行者井上河內守也、聞_二君後至_一、使_二某告曰_一、途中寂々進_レ輿可_レ速來、

余乃追及焉、河牧下與徒步、同行相語、河牧曰、昨夜所約齟齬、今朝不期而遇者、人間萬事皆如此、余曰、然、河牧指示曰、某方所見者、某山某邑、云云、余語曰、在山之間、不詣御館、故有閑暇、再謁水戶參議、件々相語、河牧曰、吾亦欲執謁、然不得寸暇、彼人聰明有大志、然未着心於道學、故疑孟子、議程朱、歸府之日與卿同謁詳諭之、其外所見所聞、携手相語、過野澤村而共踞夾箱、路傍相對飲茶、吸蓑苔、河牧把扇示之、有詠法會倭歌二首、其意不拘讀經、唯祝大君威風遍及、而大會無滯、既而河牧乘小駄馬、余乘輿並往而相語、河牧曰、吾采地眞壁距此不遠、卿其來過、則一夜相語、護送於江府、余不領焉、河牧戲曰、卿雖速欲歸家、然明夕台駕駐古河、則不利、涉利根川、所謂坎險在前之象乎、余答曰、余至小山、而留宿、所謂非艮止之象哉、相顧而笑、其餘與馬問答猶多、馬進則扣之、與後則馳、既而到宇都宮驛、河牧告別曰、不期之會、逸興不可忘焉、唯惟行程僅二里而毗離也、遂回馬赴眞壁、余使驛夫爲嚮導、而詣宇都宮、宮在驛外近處、宮前有大華

表、昇石階二段、凡六十級、其上有樓門、門額漆板有正一位勳一等日光大明神十一字、先考曾談曰、此神與日光古來之神同體、故扁額云爾、或曰宇都宮爲父、日光爲子、日光緣起所謂、有字中將其子猿王是也、然緣起之說不可信也、唯是下野國鎮護之神、未詳其爲誰也、事見荒神傳云々、余入樓門回顧、則四面回廊各數十間、半既傾側、乃登拜殿、殿奧有閤宮三間、殿與宮之間四處敷石、是本朝宮社之式也、既而降見林樹、樹下有雞四五疋、樹上有鳩、雙飛集樓門、而竊窺後廊、則有普賢觀音等像、想此社亦有僧徒、爲誘愚民、安此佛像乎、殿內有二人、蓋夫社家之奴乎、余問曰、有祭儀否、答曰、三月三日有花會、神領之童兒、舞踏殿上、九月九日有流鏑馬、於庭上行之、余曰、城主爲之乎、曰、不然、唯是社民爲之、曰是而已乎、答曰、十二月末神輿三座出宮遊神馬廐、云云、時見有男女二人亂髮繞殿庭數回不止、余曰、是何者哉、驛夫曰、詣奥州湯殿山者、先過此宮、修行者皆如此云、余初喜見古跡、賦四韻、既而謂、昔藤道長公之孫宗圓來爲此宮座主、其後裔

累世爲武夫仕鑲倉幕府、爲一州之豪、所謂紀清兩黨者、其所率之士卒也、又及豐臣秀吉時、而宇都宮士林零落、今其裔僅存、仕永戶參議云、因賦懷古一絕、余在山有服穢之稱、然考古制、則除服也、此宮宜用古制、故不憚參詣焉、既而出宮乘輿、過雀宮驛、問村民曰、來由如何、不_レ知之、九月十九日有祭進魚肉云、其祠甚小、在路傍、余謂如_レ此之淫祠幸存、而延喜式所載大社失_レ踪者多、可_レ痛恨焉、既而到石橋驛而休、故若狹羽林曾謂余曰、石橋邊有道鏡墓、今追思其談、欲_レ往見_レ之、問驛夫_レ不_レ知_レ之、唯曰、距此五里餘、有寺曰西光、其內有古墓、未_レ知_レ是否、問曰、藥師寺舊跡在否、曰、有_レ之、距此半里餘、云々、既而出過小金井驛芋乾新田、而到木澤邑、是發日光者自_レ今市二分二路_レ至此、皆相會處也、余願望_レ見之、則後駢之士馬、自壬生路絡繹者、如_レ雲如_レ霞、余進_レ輿至小山驛、一宿于此、聞阿部播磨守安藤對馬守加加爪甲斐守相繼來皆宿于此、其從者滿驛、偶有一舍之餘、余得_レ之而爲_レ宿處、然與三太夫不_レ通使、不_レ相會、隣舍馬嘶、與余鳴_レ硯互

響、去月過此時、驛舍罹_レ災、悉爲_レ烏有、古河城主俄修_レ覆之、爲_レ扈從群士晝休之處、其成功之速、非_レ巨富_レ則所_レ不_レ能_レ辨備_レ也、今日輿中見_レ杜審言陳子昂詩、今夕見_レ沈宋高適詩、二十三日辛酉今曉夢_レ考妣、今日先考每月忌日也、自_レ易簣_レ以來七年于此、每月無_レ不_レ參慕、今日初在_レ逆旅_レ闕_レ奠供、自_レ昨日_レ豫念_レ茲、故今曉所_レ夢、其所_レ感乎、辰刻、出_レ小山_レ經_レ間々田野毛_レ而到_レ古河、城下午炊、聞_レ今朝台駕進發、亭午駐_レ于幸手、而及_レ晚入_レ岩築城、余欲_レ避_レ其官路、而暫休_レ於古河、而過_レ中田、踰_レ利根川舟橋、至_レ栗橋驛、此川無_レ橋、常有_レ官船、又有_レ野航、以往還、今般任_レ舊例_レ聚_レ舟數十艘、以相並、以_レ繩繫_レ之、以_レ釘堅合_レ之、以_レ鎖連貫、而以_レ竹爲_レ簣、以_レ板蓋_レ之、奉_レ待_レ台駕、由_レ是人_レ不_レ病_レ涉、其騎步皆如_レ行_レ平陸、既而過_レ幸手、時午刻也、台駕既入_レ御岩築、而後驅阿部播磨守安藤對馬守、率_レ群卒_レ宿_レ于此、余乃出_レ幸手_レ而過_レ杉戶、到_レ糟壁驛、此驛大而多_レ家、欲_レ一_レ宿于此、則井伊玄蕃頭既在_レ此、而從者與馬滿_レ驛、偶有_レ一家之餘、乃入休

浴而喫_レ晚炊、時申刻也、舍主謁_レ余曰、君忘否、此舍空印叟所_レ芟也、往年君亦爲_二空印叟之伴侶_一來_二于此_一云々、余聞_レ之長吁、旣而見_二岑參王維孟浩然詩_一、時聞_二明曉加加爪甲牧那須遠州會_一于此舍、以喫飯、其從者旣先至、余慮_二其紛擾、而薄暮發_二糟壁_一、及_二秉燭_一而到_二越谷_一、則先驅酒井河內守稻葉丹後守并_二營相對、兵衛森々、一驛皆爲_二兩牧從者所_一舍也、余乃夜行二里而到_二草賀、驛吏曰、此處明旦井伊玄蕃來食_二于此_一、其行厨豫至云々、余又不_レ得_二一夜之舍_一、乃勞_二從僕等、倩_レ馬授_レ之、又出草賀赴_二千壽、時亥刻也、時馬上三十騎計、駄馬數十匹、先行者挑燈如_レ星、街路如_レ晝、問_二驛夫_一、則曰酒井日向守扈從到_二岩築_一、過_二越谷_一、訪_二河內守丹後守_一、而直歸_二江戶_一也云、未_レ知_二然否_一、少焉月出_二于東方_一、其下弦之影、漸々而升、如_レ送_二我輿_一、又電光屢現、其景象不_レ可_レ言也、旣至_二千壽_一、則鷄鳴數聲、驛或睡或驚、然其驛長等聚_二馬夫_一、以不_レ使_二往還_一者滯_二于此_一、余乃更替_二驛馬輿夫_一、而直歸_二江府_一、自_二小山_一至_レ府行程二十里、非_レ佩_二印章_一、則余力豈及_レ此哉、曉過_二別墅之前_一、而雖_レ欲_レ拜_二墳墓_一、然事倉卒、則有_二不敬之懼_一、且憐_二驛夫

之勞子待_レ久、故不_レ入_二別墅_一、而直入_二本宅_一、則清隆等迎_二于門_一、春信春常歡迎而入_二室_一、宜人祝_二歸來安穩_一、外姑携_二七娘_一而出、勝澄來_二座上_一、團欒和悅、唯欠_二久娘_一、噫、時旣天明、拜_二考妣神主_一、

二十四日壬戌自_二二十一日_一至_二今日_一、快霽、

午刻 台駕還御、滿城欣々、天下幸甚、及_レ晚余赴_二別墅_一、拜_二考妣墳墓_一、詣_二敬吉讀耕墓_一、見_二久娘新家_一、滴淚而歸、入_二勝澄宅_一、相見、逢_二二姪女_一而歸、金節來談、及_二三更_一而去、

二十五日癸亥門生數輩來訊、談_二山中之事_一、

聞_二台駕詣_二增上寺_一、

及_レ晚訪_二雅樂頭豐後守美濃及大和守但馬守_一、而賀_二台駕還御_一、且告_二已歸府之事_一、

二十六日卯子已刻登 營、遇_二雅樂頭于城門內_一、同步相話入_レ營、旣而見_二豐後守于殿中_一、返_二納印章_一、美濃守未至、見_レ余而勞焉、井上河內守永井伊賀守等登山之群僚皆在_レ營列座相話、余欲_レ見_二大和守但馬守_一、而待_レ之良久、然近_二侍御前_一、幸遇_二大久保出羽守_一、傳_二語於二執事_一而退出、

二十七日乙丑紀伊亞相尾張黃門紀伊參議水戶參議登

營奉_ニ賀還御_、登山執役群僚亦各拜謁、

二十八日丙寅在府列候以下登_ニ營奉_ニ賀還御_、余亦拜

謁公家門跡自_ニ二十二日_、出山至_ニ今日_、悉皆入府

馳走人護送而來各兼點_ニ定旅宿_、馳走人如_レ前又被

_レ添_ニ雜掌人_、甲府參議館林參議賜_ニ官暇_、各被_レ登_ニ

日光山_、

二十九日丁卯

五月朔日戊辰公家門跡各登城拜禮

三日庚午召_ニ公家門跡_、賜_ニ饗應_、有_ニ猿樂_、

七日甲戌甲戌召_ニ勅使院使_、賜_ニ歸洛暇_、遣_ニ使者於_ニ

勅使德大寺前右府_、而賜_ニ銀五百枚於營中_、賜_ニ銀

於_ニ四院使_、而使_ニ雅樂頭_、赴_ニ梶門妙門宿坊_{上、}而賜

_レ暇被_レ賜_ニ銀千枚充_ニ皆如_ニ先例_、云

癸未八月二十又七日看訖

衡

癸卯于役日錄終

江海風帆草序

おもふにそれ南針のさすに方あり北斗のむかふにと
ころありといへども其淺深をはからず其難易をかう
がへざれば巨海に船する事を得がたし今この海路紀
は前筑前州牧光之の御時船師の總司これかれの中吉
田重昌忠右衛門といふものあり又宮本重利新兵衛勝野
清中喜左衛門有てよりく相かたらふておもへらく筑
前州はいにしへより西國の大府にしてこと更海濱西
北にめぐりつらなり船を用るの要所なるのみにあら
ず國の守東行の來往はさらなり台命をかしこまり崎
陽の守禦異賊の藩鎮たるも海により船によりて相役
るところなり開化、仲哀、神功、欽明、敏達、推古、天
智、桓武、龜山、後宇多、後陽成、本院、光明の正保年中
にいたるまで異敵を伏し異賊をふせぐ等の事をのを
の當國に勝利あり武内宿禰を置いて異國をおさへ久日
王をして軍をまうけられしも當國に於てせり是亥か
しながら住吉の三はしらの神志賀の三柱の神香椎、
箱崎の神々おのく二の國に鎮座ましめて敵國降

伏の冥助まのあたりなればなり豈いやまひたふとび
ざるべけんや寛永年中先邦君忠之に台命を下したま
ふもかゝるいにしためしによれるかやといともかし
こし恐れみも我つら其船のつかさどりとして其事を
おろそかにすべからずとみそかに心をおこす事年あ
りこゝの湊かしこのとまり浦々島々にたづねもとめ
あめつちの神代のおごそかなるみこともはじめ佛陀
薩陀のみあとたれし往事あるは歌に詠じ詩に吟じた
る名どころものゝふのふるき戦ひの場あやしの海士
の子あびきのことわざまでたふときつたなきをえら
ばすあつめゑるすもの三冊西のかた崎陽より筑前怡
土のこほりにいたりひんがしの方同國をかのこほり
より竟に浪華に至り河流を沿て伏見に及ぶ其經歷を
かすまふるに肥前、壹岐、對馬、筑前、豊前、豊後、長門、
周防、安藝、伊豫、備後、備中、備前、讃岐、淡路、播磨、
攝津、河内、山城すべて十九州の船路ゆくとしてつま
びらかにせずといふ事なし嗚呼三士のいさおしすこ
しきなりとせんや吉田重昌は元祿二年二月二日勝野清
中は同四年八月十日世を辭しその子むまご子とみやづ
かへにゑきせらる宮本のみこだいのものにて今の總

司につらなり光之の御座船につかふまつる元祿十六
みづのとのひつじの春三月台命に依て稻垣對馬守重
富及び安藤筑後守、萩原近江守、石尾織部等をして
長崎に往還せしめたまふ事あり今の州牧肥前守綱
政、松平信濃守綱茂、兩家より大船をよそふてをく
りむかへらる稻垣、石尾の船は綱政より馳走すその
つかさどりを宮本うけたまはりて稻垣の船に候す公
や西國の海路はじめたるゆきゝなれば近侍これかれ
をしてところ／＼こまやかにたづね問給ふ宮本例の
一帙をかたへにひそめひらきてこたへ申けるにある
時近侍なにがしくれがしさぐり求て末卷一冊をうば
ひけみするのみならず公にけいし海路多日かへした
まはずそのほどにつるに寫しとりたまひぬとかかく
て宮本歸りまいりてゑか／＼のよしを光之に達す老
公聞しめしあやしみて何そは其書や船師らのあつむ
る所さぞなうるさくつたなからんかんばせの汗を拭
ふに堪ずそれはやくめし出て見そなへよとのたもふ
かの鹽玄みたる帙のひばとき侍しにつや／＼熟誦せ
しめたまひてかけすうなづかせたまひかくまでさか
しくあみとゝのたる心ばへのいみじさ凡當國にあ

らんもののみかはこの書なくてやはあるべき今まで
けいせざりつるのみ罪あるこゝちすとかへすゝ歎
美したまふ宮本はいたくめいばくかうぶりぬるにつ
きても吉田勝野らと同じくこのみけしきをうけたま
はりなばやとうらなくもむべなりかうやうにめでさ
せたまふうへは史官所のものになりて久田重賢をし
て書寫せしめらるこれよりをちつかたこれを以て證
書とし海客船師のみならずながくもろ／＼のために
國につたへん事をはかれと臣重根らに命じたまふ宮
本又希はく我ともがらの蓬窓の底に事をかんがみる
かざりはさもあれかくかゝげさせたまふに至ては識
者をしてあらためたゝし野語卑説のみだりなるをの
ぞき去り給へかしと重根ふたゝび老公にうかいひ聞
ゆ公のたまはく宮本がうたへそのことはりありとい
へども今この人の手にみがきこしらへたらん金玉よ
りは其あらがねあら玉のありのまゝ塊にまじれるこ
そめでたけれと仰ごとたまへり名づけて江海風帆草
といふたゞ行舟の時によろしきを稱するのみ寶永元
甲申のとし冬十一月望日書して以て序とす丹墀姓立

花氏重根記

長崎海上道程

長崎

二里

木鉢

一里

かぶと島、なかの島、松島、四郎島、かげのお島、かう
やき島、鼠島、高銚賀島、沖にいわふ島、たか島有

福田

四里

神樂島有

大村領

黒崎

六里

きやうし島、すまふ島、ひげ島、いけ島有、沖に松島、
瀬戸、びん島有

大村領

瀬戸

三里

みねが浦、さきとう島、沖に小島有

同

七つ釜

二里

同

おもだか

五里

沖におれ木島、くろ島有

平戸領

牛首

五里

下から崎、上から崎、向に九十九島有

かうち

三里

あなさ崎

平戸

一里

くろ瀬、くろく島有

たすけ

三里

かまた有、大島有、沖に二神島

みくりや

三里

あをふ

二里

沖に青島有

はまぐり瀬戸、ふゆぎりの瀬戸

唐津領

口ノほしか

三里

沖にむく嶋

ほかうつ

三里

唐津領

呼子

三里

くろせ有、かまぶた島、沖にこしき島

同

神集島

三里

沖にふぼし島あり、地に岐志浦

筑前

姫島

十一里

同

志賀

三里

福岡

合六十六里、志賀より四里

藍島

勝島

五里

地島

二里

蘆屋

五里

御崎

一里

四里

福岡迄干潮にて下る

若松

大坂海路道程

長門

田の首

二里

若松より三里

同

下の關

一里

豊前

田の浦

一里

同
道崎

五里

長府みゆる

長門
本山

三里

同
陶崎

四里

周防
岩屋

四里

同
むかふ

沖に姫島有

同
馬島

周防
巢雲

四里

同
笠戸

三里

同
室住

三里

同
ぞうし

二里

同
上の關

五里

同
上が庄

二里

同
家室

三里

同
ゆう

伊豫
津和

三里

安藝
かろうと

五里

同

龜が首

三里

同

蒲刈

三里

同

横島

三里

同

唐船

三里

同

高崎

一里

同

只の海

一里

同

能知

二里

同

和布刈

二里

同

因の島

二里

備後

田島

二里

同

矢筈島

一里

同

鞆

三里

同

白石

三里半

讃岐

手島

三里半

備前

下津井

三里

同

日比

一里

此上の口にさがり松有

讃岐

鹽田原

一里

備前

京の女郎

三里

出崎あり

同

犬島

二里

同

牛窓

四里

同

大田府

三里

播州

御崎

一里

同

坂越

二里

同

室

八里

同

高砂

五里

同

明石

二里

同

鳥崎

一里

攝州

一の谷

二里

同

兵庫

五里

同

西宮

五里

同

川口

満潮にて川入是より百石迄満潮にて下る

江海風帆草

長崎

一同所天文の比領主は長崎左馬大夫其子同甚左衛門と云て春徳寺山に城郭をかまへ櫻馬場の左右に士小路を立て住宅す大村利仙賀なり

一内町には高木高島の兩家繁榮して甚左衛門と度々合戦すされども勝負もなかりしに秀吉公の御代になり甚左衛門は御追放ありしとなり

一龍造寺山城守隆信の幕下に深堀茂宅といふ者深堀に居城して長城をえたがへむとて度々内町に押寄せ責戦といへども内町用心堅固にして茂宅不得_二勝利_一此戦に高木の先祖惣兵衛討死_{十善寺近邊石灰町船大工町其の戦場也}

又深堀より船にて押寄する時はふすだといふ軍船を長崎に作り置大筒を仕掛深堀方をうち散す茂宅力に不_レ及打暮す或夜忍びてふすだ船を深堀方に盜取茂宅よろこぶ事不_レ斜内町方にはふすだをとられ力を落し僉議區々なる時に高木勘右衛門申けるは定てふすだ船盜取たる次第佐賀へ注進すべ

し道筋に勢を伏せ使者を搦捕其後の批判可_レ然と申ければいづれも此議に同じ茂木峠田別當といふ大薄原に勢を伏て相待所に法師一人若黨三人つれて刀の先に文箱を掛急行所を四人ともに搦取長崎に歸りさらば深堀に使者を立よとて夜前其方より佐賀への使者四人共に此方へ召捕候ふすだ船可_レ被_レ返哉無_レ左候は_レ四人ともに成敗可_レ仕由申遣ければ此法師茂宅身ぢかきものゆへ不便に思ひ夜に入ふすだ船を江戸町の下に繫置ぬ其後生捕四人共に深堀に戻す世治りふすだ船は稻佐の浦に繫朽はてしとなり夫より此所をふすだと名附るよし

内町中より年寄一人年頭に江戸へ

罷上事附長崎請地に成事

一秀吉公名護屋御出陣の刻内町年寄爲_二惣代_一村山等安といふ浪人ものを雇爲_二窺_一御機嫌獻上之品々爲_レ持差上る是より今に至るまで白絲五十斤、白紗綾九十端、縮緬五端、まがい絲五十斤、毛氈二十五枚差上る然るに等安辯舌才覺のものゆへ關白公御意に應じ度々御目見等被_二仰附_一其上長崎村在々所々の御代官を奉_レ之長崎に歸り奢彌増し一家の榮花不

勝計其比末次平藏といふ者等安の奢を一々に書立長崎を請地に仕度旨言上す是より等安と公事になり上方にて對決す等安御法度を背し段々不得に申分子供まで十善寺にて御成敗を被_レ遂_レそれより長崎在々所々銀五十貫目にて請地に被_レ仰附_レ之

日本人渡唐御停止の事

一天文の比は大内義隆の勘合にて令_二渡唐_一文祿元年より秀吉公御朱印にて渡海致せし處に寛永十二乙亥年より渡唐并に投銀共に御停止也

南蠻船日本へ初て渡海の事

一天文十二癸卯年或曰八年薩州種子島に南蠻船一艘漂著此時種子島の主兵部丞時堯、子息織部丞時政鐵炮を傳受して今日本に傳る又津田屏太郎天文年中入唐して傳受屏太郎末流筑前に在津田氏也夫より日本に廣む此以前文龜元年辛酉秋南蠻國より日本に雖_レ渡_レ之唯鐵筒のみ有_レ之祕術妙法を不_レ傳是只無益のものなりと人更に不_レ用_二鐵筒_一徒に朽果しと也

一天文十八己酉年に黒船一艘豊後國臼杵に來時此時分は邪宗門すゝめたるよし其後肥前國口の津に乗

渡既に潮に卷沉られんとせしを漸乘戻し大村領の内横瀬浦に五七年來著平戸へも乗渡夫より福田に二三年入津元龜元庚午よりはじめて長崎に著津すがりうた船も此時分より來著したるよし

南蠻船がりうた船日本通用御停止并阿蘭陀船長崎入津の事

一寛永十二丙子年に長崎町人共出島を築南蠻人を入置家賃を取る一箇年に五十五貫目也同十六年より日本通用御停止重て於_下令_二渡海_一者_上可_レ被_レ遂_二御成敗_一之旨被_二仰渡_一

築島壁廻り二百八十六間五尺餘軒數二十五箇所家賃同前

一寛永十五年にがりうた船日本通用御停止右同前に被_二仰渡_一

一同十六年卯の六月南蠻船三艘來著すといへども御追返被_レ成

一同十八年に平戸來着の阿蘭陀船長崎著津被_二仰附_一黒般御追出の跡築島に御入被_レ成

一同十三年より十八年の間に日本所々へ著岸の唐船長崎一箇所に入津被_二仰附_一

慶長十四年長崎著岸の黒船

有馬修理大夫被_レ乗捕事

一慶長十四年來朝の黒船可_レ乗捕旨於_二駿府_一奉_レ上意
酉の十二月八日修理大夫長崎下著同九日晝前か
びたんに用事有_レ之間陸へ來候へと使者を立らる
る其時分は長崎の者ども大方邪宗門にて此事を即
刻かびたんに内通す依_レ之かびたんは不_レ及_二申岡
にありし船夫共不_レ殘船に取乗急黒船の上やね取
はらひ帆拵して其日の暮方地嵐にて乗出す打手の
者共驚動小船に取乗々々追懸附したふといへども
乗捕べき便なし然處に西風強吹おろし風向ければ
高鉾より十町程沖に繋るされども何の用意もなき
事なれば兎や角と打くらし十一日の夜四五端帆船
三艘に燒草を積火を附風上より流し懸るといへど
も益なし此上は城樓船をくみ十三日の晩は是非と
もに乗捕べしとて用意とりく_レなる所に十二日の
暮方又風なぎ地嵐に成黒船走出しけれども又風向
神田の沖に船留る神田島とは陰の尾の沖の
小島也ひらんこ島とも云依_レ之俄に
城樓船をこしらへ一番に谷川角兵衛、林田兵藏、油
野金左衛門城樓船に乗て黒船の艦の間に押附る二

番に井上藏人乗船右の口の間に押附る三番に結城
彌平次同方艦の間に押附る夫より我もく_レと乗掛
其儘乗込暫く船中にて相戰ふいまだ乗のこしの時
黒船より城樓船にほうのゝ火矢を投かけしに黒船
のはらんだの屋上に打かけ自火にて燃上り藥がめ
に火入黒船の艦の間ひきわれ水船と成十二日の
夜亥の刻に沈む

一此方の船に火矢石火矢打かけけれども、玉越て不
當燒手負は多し小船より乗懸たる者は大方城樓
船より傳ひて乗る城樓船は十三端帆の堺船を借り
二艘の間當り合ざる様に筒木を渡しからぐみ三方
押廻し内は大完口外は竹木を當てからけ附矢倉に
は厚板を敷何事も俄事故繩からげ也梯子打かき乗
せけるに梯子は用に不_レ立うちかきは役に立しと
なり

討死の侍

千五百石	五	百石	四	百石
結城	傳七	佐甲	宮内	林田
二百石		高岡	四郎兵衛	彌六
久野善左衛門	百石	蘆塚	茂助	
百石		小野市兵衛	馬場右衛門八	

右の外五人討死の者ありしより名不_レ知十三人の内七人は死骸_{みづ}不見_{みづ}此外鎗手負、焼手負多し右の黒船を乗捕られし意趣は慶長の初修理大夫家臣南蠻の海賊に殺されしとなり因_レ茲かびたん一人可_レ被_レ殺と願給ひ上意を奉て下られしなり然共右の次第故力に不_レ及何の方便もなくあやうき事にて被_二乗捕_一けると云々

右の黒船積來る糸卷物代銀二千六

百貫目餘神田の沖に沈しを取揚事

一寛永九申の年長崎の住人好運といふもの沈銀を取揚べき便_{てたて}をたくみ御奉行榊原飛驒守方へ訴訟申て赦免を蒙り取揚むとすれども少もあがらず同十三年の春京都の住人水學といふもの此事を傳聞て長崎に下り好運とかたらひ神田の沖に銘々の船に暮をはり數日はをあげけるに好運方には少も揚えず水學方には毎日二十貫目三十貫目取揚げるとなり後には雙方の船夫共及_二口論_一ければ銀揚は止めぬ水學都合六百貫目餘取あげ上方へ歸る承應三年巳の春御奉行黒川與兵衛在勤の時に長崎町年寄中拜領三百貫目餘取揚る都合千貫目程取揚殘る千六百貫

目程は今海中に沈み有よし神田島の前深さ三十三尋立

南蠻人唐船より七十四人乗渡りしを

西泊すいれのはなにて被_二焼沈_一事

寛永十七年辰の五月十七日南蠻人日本通用爲_レ斷唐船より乗渡此段即刻江戸へ言上ありし處に爲_レ使_二加賀爪民部少輔、野々山新兵衛_一同六月十四日長崎下著上意の旨去年南蠻人被_二追還_一の刻重て日本に於_二下_一令_二渡海者_一一々可有_二御成敗_一旨被_二仰出_一の處今度押て來朝の間不_レ殘御成敗可_レ被_レ成候得共此段致_二歸國_一申聞するためなれば十三人御助殘る六十一人は被_レ遂_二御成敗_一の旨被_二仰渡_一西坂にをゐて闊取し六十一人打首十三人は唐船により歸帆す乘來る船は積荷物共にすいれの沖に焼沈給ふ也

一右の船に積來る銀子六十貫目餘并金子の道具すいれのはなに沈あるを寛文三年十月に長崎町年寄共拜領銀子四十五貫目餘取_二揚之_一

長崎御番初の事

一寛永十八辛巳年の春二月筑前國へ御奉書を以松平

筑前守忠之に被_レ仰附_二開化、仲哀、神功の遠きむかしより異賊を押_レへ其功ある事みな筑前國吉例たる故とかや翌十九年に鍋島信濃守勝茂に相番被_二仰附_一也大坂御城にありし石火矢三十挺忠之依_レ願同年五月に御領長崎御番所に被_二召置_一

正保四年來朝の黒船若及_二異議_一歸

帆可_レ致との儀にて目神、から崎の

間仕切船并諸大名衆掛場の事

一正保四年丁亥六月二十四日南蠻船二艘いわふの沖に見え候由注進二十六日福岡に相聞え筑前守忠之當番たるに依て同日早速出船時津へ乗込同所より上陸し六月二十八日長崎到著なり南蠻船二艘共に二十六日長崎へ乗込なり

目神から崎の間百九十六間

一百二間半 仕切船大小二十二艘 細川越中守

一六十六間半 同 十六艘 鍋島信濃守

一二十一間 同 六艘 立花左近將監

一十五間 同 八艘 小笠原信濃守

内五艘松平筑前守より加勢

一十五間 同 十艘 寺澤志摩守

一材木五百本藤綱堂房長二百七十間廻り一尺五寸

仕切船の間二百二十間兩方にて小船爲_二通路三

十六間一方にて十八間宛明け

諸大名船繫場の事

一西泊 一番備當番也人數一萬千七百餘船數城樓船もや船買船共に大小四百五十艘餘

一戸町 金鑄谷の事 人數一千船數三十艘

一祝の浦 祝の浦 人數一千船數三十艘

一大田尾 人數六千三百船數九十三艘

一目神

右者仕切船より内に被_レ備

一子隠より 二番備非番也人數一萬五千餘船數大小三百六十艘餘

一深堀迄 餘船數八千餘船數三百九十艘

一瀨月より 六艘長崎にて借船三十艘

一高崎迄 人數三千船數九十艘

一神の島 人數三千八百船數九十三艘

一陰の尾 人數三千八百船數九十三艘

一香燒 豐後中津の城主

一小笠原信濃守船繫不分明人數附并船數共不分明

或曰人數千二百八十船數八十艘

一豐後府内より日根野織部正九州依_レ爲_二御目附_一被_二相越_一

松平筑前守

松平筑前守

肥前國島原城主

高力堀津守

豫州松山城主

松平隱岐守

鍋島信濃守

細川越中守

肥前國唐津城主

寺澤志摩守

筑後國柳川城主

立花左近將監

島津薩摩守

家臣少々船繫

一五島淡路船松浦肥前守大村丹後守即刻長崎渡海然ども何れも在所海邊の儀候條爲_二用心_一被_レ歸候様にとの儀にて歸國

或曰大村丹後守は長崎町の押_{おさへ}として馬込邊在陳ともいふ

一黒船長二十六間三尺高水際より二間五尺艦舳の高さ凡六七間もあるべし今一艘少は小也

一二艘に乗來る人數四百五十八人歳四十ほどの者三人其外は若し黒坊羅すか一人もなし使者はごわの國持船夫は奉公人也

一石火矢數一艘二十挺宛但是外へ見えたる分也

一目神から崎仕切船の上には角材木を敷渡し城樓を上げ下は馬をも乗渡様にこしらへ石火矢を仕掛江戶よりの御左右を相待處に長崎御奉行中へ御奉書來文曰

一筆令_二啓達_一候彼船之儀從_二南蠻國_一爲_二使者_一指渡其上無_二異議_一湊江入船旁以不_レ及_二死罪行_一候之條事穩便仕置歸帆可_レ被_二申付_一候恐々謹言

七月十二日

阿部對馬守

阿部豐後守

馬場三郎左衛門殿

高力攝津守殿

日根野織部殿

松平伊豆守

一爲_二上使_一井上筑後守山崎權八郎七月十二日江戸發足同二十日大坂出船同二十八日長崎著忠之江御奉書來文曰

一筆令_二啓達_一候去月二十八日之晚長崎御越之由從_二高力攝津守_一、日根野織部正、馬場三郎左衛門方_二注進之通及_一上聞候然者彼船爲_二使者渡海_一其上無_二異議_一湊江入船旁以不_レ及_二死罪行_一候其旨最前長崎奉行中江相達候彌被_レ得_二其意_一松平隱岐守右三人遂_二相談_一諸事靜なる様に仕置可_レ有_レ之旨被_二仰出_一候間可_レ被_二得_一其意候恐々謹言

七月十二日

阿部對馬守

阿部豐後守

松平伊豆守

松平筑前守殿

右の首尾故八月六日辰之刻黒船二艘共出船申の刻仕切之外に乗出歸帆依_レ之諸國の勢引取る

西泊戸町御番所立初の事

一御番所最初寛永十八年には稻佐に船繋して勤番其
後寛永二十年西泊に御番所并小屋出来正保二年忠
之當之年公儀江被_レ相伺_一戸町にも御番所出来
一慶安元年黒川與兵衛方に談じ西泊戸町定小屋に成
同二年西泊定小屋出来同四年冬より戸町普請取か
かり同五年成就

西泊小屋軒數

一御石火矢倉 二間半に九間
一御藥倉 二間三間
一御藥倉番所 一間四方
一御番頭小屋 三間に十三間かきや有
一番頭下小屋 二間半七間
一鐵炮大頭小屋 二間半に十一間かきや有
一足輕頭小屋 二間半八間にして四軒
一足輕小屋 二間に八間宛にして五軒
一表木戸番所 二間三間
一裏木戸番所 一間半四方
一遠見所 二間三間
一御石火矢臺三箇所の木屋掛道具入御倉二間八間

一水主小屋 一軒

合棟數二十軒

戸町小屋軒數

一御石火矢倉 二間半九間三尺
一御藥倉 二間に三間三尺六間底あり
一御藥倉番所 一間四方
一御番頭小屋 三間十三間かきあり
一番頭下小屋 二間半に七間半三間底あり
一馬廻頭小屋 二間半に九間
一足輕頭小屋 二間半八間にして四軒
一足輕小屋五軒 二間八間下の段四軒
一表木戸番所 一間に二間
一裏木戸番所 二間に三間
一遠見番所 二間三間
一水主小屋 一軒
長崎聞番役の士相詰事
筑前 肥前 肥後
不斷相詰
長門 小倉 薩摩 島原
唐津 平戸 大村 五島

對馬

右九箇所は六月より九月中相詰

一 江戸町の沖に詰る番船九月朔日より四月晦日まで

細川越中守早船二艘 但四十挺立
二十挺立

一 五月朔日より八月晦日迄松平主殿頭方より二十挺

立一艘相詰

馬込御船倉の事

附御船數并綱碇の事

一 五軒は 八軒に十三軒より
五間に七間の間

御船倉

一 九艘は 六十四丁六十六丁
五十四丁四十六丁
四十二丁二丁東京作二丁

御關船

一 壹軒は 四間に十間

御船道具入土藏

一 鐵碇

五百頭

一 加賀芋綱

五百房

一 ちやん綱

壹房

右綱碇は正保四年黒船來朝の節仕切綱不足附て

被調置よしちやん綱は阿蘭陀人正保六年に差上

る御關船は寺澤兵庫守上り船右の内四十六丁立は

榊原飛騨守寛永十三子年長崎下向の刻瀬戸内にて

彼船人一人も乗らず漂著す依之長崎へ引寄也公

儀の御船となる帆の紋片輪車なり伊駒壹岐守沒落

の後の事なれば壹岐守の船たるべし残る五艘は寺

澤氏の船也東京作は慶安元年馬場三郎左衛門方作

せらるゝなり

一 寛文九酉の年牛込忠左衛門在勤の節唐船作りの御

船一艘作らせらるゝ島屋市兵衛といふもの船頭し

て無人島へ乗渡島の竹木等剪採歸帆延寶九酉の年

解船になる御船材木は子今かこひあり

石火矢臺の事

一 承應二年より明暦元年春に至長崎七箇所の石火矢

臺松浦肥前守鎮信被仰附築之

西泊の方 同 戸町方

大とを 同 目神 同 白崎

高 同 長刀 同 陰の尾

以上七箇所

唐僧來朝の事

一 承應三年の七月四日 隱元來朝 福州臨濟派臨濟禪
師より三十二世

一 明暦元末の七月九日 木菴來朝 同三十三世

一 同三酉の二月十六日 卽兆來朝 同三十四世

一 慧林

一 高泉

一千凱

右三僧も宇治黃檗山住侶隱元より相續故記之此外にも唐僧來朝有之といへども略之

一心越

是は曹洞宗也洞山禪師より三十五世也洞宗の和尚日本に來る人不_レ多東陵、東明、此東阜心越和尚三人なり心越後年水戸光圀卿御招待にて水戸へ被_レ行崇福寺といへる御菩提寺に被_レ居如法有徳の人なり

長崎大火事の事

一寛文三壬卯三月八日下筑後町より出火火元は樋口惣右衛門といふもの狂氣して自家に火を附る八日巳の中刻より翌九日巳の刻に至て火鎮御奉行屋鋪兩所共に類焼す御奉行島田久太郎は松平丹後守光茂屋鋪移らるゝなり依之御作事松浦肥前守鎮信御手傳被_ニ仰附_一長崎町中に銀子二千貫目公儀より拜借被_ニ仰附_一之

一延寶六戊午年七月十七日外浦より火事出來西御奉行屋敷并江戸町過半焼失御奉行屋敷翌未の年御作事有_レ之長崎銀の内にて被_ニ仰附_一之

一元祿十一戊寅年四月十日の朝七時半時分御奉行諏訪下總守役屋敷より出火不_レ殘焼失す但長屋少殘る類火はなし

一同年四月二十二日の晩後興膳町末次本屋敷より火事出來同日申の刻かは島町にて火鎮町敷二十三町程焼失松平肥前守、細川越中守、松浦壹岐守、大村因幡守屋鋪も類焼す

阿蘭陀船自火にて燒事

一寛文五巳の五月二十四日阿蘭陀一番船荷改の刻自火を出す火烟の中より揚帆して稻佐に心ざしてはしる玉築込たる石火矢有_レ之に附て人なき方を心ざしたるよし燒殘の濡糸五萬五千三百八十斤あり是を洗度よしをねがひ一斤四分づゝにて洗

合洗賃銀二十二貫百六十二匁

右の外肝煎の者に樽代銀五貫目遣す但かびたん出す

朝鮮に渡_ニ武具_一者共御成敗の事

一寛文七年未の夏朝鮮に武具渡の徒黨あらはれて博多伊藤小左衛門等同冬御成敗長崎御奉行河野權右衛門在役の時なり

尾州の廻船漂流の事

一寛文十年尾州の廻船十一人乗異國へ漂流彼地より藤からげに小船を作り十一人ともに同年八月長崎へかへる即刻籠舎申分立御赦免ありて尾州に歸る

ゑげれす船來朝の事

一延寶元年癸巳五月二十五日ゑげれす船日本通用爲斷來朝江戸へ被_レ相伺御免不_レ被_レ成向後不_レ可_レ渡海_ノ旨被_レ仰渡七月二十日歸帆無_レ別條事之間諸事穩便可_レ然の由長崎奉行衆指圖附て筑前の人數雖_レ爲_レ支度不_レ被_レ差越兩御番所番人交代の時節故兩番人數暫在勤なり此時自然御用の爲密に大船十艘石火矢を仕かけ祝の浦すいれのはなに備る是又御奉行所へ被_レ談也此時當番右衛門佐光之、長崎御奉行岡野孫九郎なり

ゑげれす船乗組人數八十六人

南蠻より日本人送來事

一貞享二年乙丑六月二日南蠻船一艘長崎入津御奉行川口源左衛門在務なり右の船勢州神社村の者十二人阿媽港へ令_レ漂着候て送來るなり南蠻人四十七人船中被_レ相改_二兵具商買物等も無_レ之なり

一右衛門佐光之當番たるに依て右の到來福岡へ相聞え長崎爲_レ見舞被_レ罷越松平丹後守光茂も被_レ相越於長崎對談なり南蠻船歸路の爲糧米計被_レ下八月朔日出湊歸帆す

ばたに人船一艘來事

一日向國漂著伊東出雲守祐實より長崎へ送らる延寶七年六月十七日長崎著阿蘭陀通詞唐人通詞を以て雖_レ問之言語不_レ通ばタンと云のみ也一向の下賤なり十八人の内十二人追々病死六人殘其年九月十九日阿蘭陀歸帆の船に便して被_レ送戻木綿著物一つ宛并糧米被_レ下之

長崎町年寄高木彦右衛門下人喧嘩の事

一元祿十三年庚辰十二月十九日松平信濃守綱茂内鍋島官左衛門が家人深堀三右衛門柴原武右衛門といふもの長崎町にて高木彦右衛門下人と喧嘩に及彦右衛門下人の方大勢なりしゆへ右の兩人仕をくれ候よし其意趣に附て同夜半官左衛門が家來五十人程いひ合彦右衛門が宅へ未明に仕込彦右衛門を即時に殺害し其外家人等都合七人を殺す其後深堀三右衛門は彦右衛門が玄關にて早速切腹し柴原武右

衛門は彦右衛門が屋敷前橋の上にて彦右衛門を打果し只今致切腹候町人ども見物仕候へとよばはつて則切腹せしとなり依之彦右衛門家來喧嘩張本人七人御奉行^{近藤備中守林土佐一守}より被^レ仰付籠舍官左衛門が家來は西泊番頭千葉數馬へ御預けにて浦五島町官左衛門屋敷に被^レ籠置也

一右の趣江戸へ御奉行所より言上有^レ之翌巳の春御裁判在^レ之

彦右衛門倅彦八郎其場所出合不^レ申段不屈の由被^レ仰出長崎五里四方御追放家財闕所京江戸大坂居住御制禁也同人妻は高木作大夫へ被^レ遣彦右衛門後家は一家の者へ被^レ遣之

彦右衛門家來八人牢屋にて死罪

官左衛門家來十九人の内

九人五島へ流罪

十人打首

右の通江戸より御下知に依て御裁判相濟なり

長崎御奉行初の事

一寺澤志摩守

文祿の比より慶長七寅の年迄十一年慶長七年より同慶長十一年已歳迄四年

一小笠原一庵

一長谷川左兵衛

御代官慶長十年より同十九年迄十年より寛永二年迄十一年

一水野河内守

寛永二寅の歳より同五辰の歳迄

一竹中采女正

寛永五巳の歳より同九申の歳迄五年

一曾我又左衛門

寛永九より同十迄

一今村傳四郎

此年より御奉行二人に成る

一榊原飛驒守

寛永十一年より同十五年迄被勤之
内記は翌年役替

一神尾内記

寛永十一年より同十五年迄被勤之
内記は翌年役替

一榊原飛驒守

寛永十二年一箇年被勤之

一仙石大和守

寛永十三年より

一榊原飛驒守

寛永十六年一箇年被勤之

一馬場三郎左衛門

寛永十七年より三年被勤之

一大河内善兵衛

寛永二十年より慶安三年迄八年被勤之
寛永十三年より慶安四年迄十六年被勤之

一馬場三郎左衛門

寛永二十年より慶安三年迄八年被勤之
寛永十三年より慶安四年迄十六年被勤之

一山崎權八郎

寛永二十年より慶安三年迄八年被勤之
寛永十三年より慶安四年迄十六年被勤之

一馬場三郎左衛門

寛永二十年より慶安三年迄八年被勤之
寛永十三年より慶安四年迄十六年被勤之

一 黒川 與 兵 衛

一 黒川 與 兵 衛

一 甲斐庄 喜右衛門

承應元辰年より萬治二年迄八年勤役

一 黒川 與 兵 衛

一 妻木彦右衛門

萬治二年より

一 黒川 與 兵 衛

慶安四年より寛文四年迄十四年

一 島田 久太郎

寛文二寅の年より

一 島田 久太郎

寛文二寅の年より

一 稻野七郎右衛門

寛文五年秋下向翌六年二月十七日於長崎一死去

一 下曾根三十郎

七郎右衛門死去の砌より天草の戸田伊賀守被相越

其後筑後久留米の御目附三十郎四月より長崎へ罷

越松平甚三郎方に引渡三十郎は久留米に歸らる

一 松平 甚三郎

寛文六年下向午の歳より亥の年迄六年被勤之

一 河野權右衛門

同年九月下向

此兩人より五百石宛の御加増并與力五人増以上十

人に成る唐人阿蘭陀の禮銀も此時より初る

一 河野權右衛門

寛文六年より同十二年迄

一 牛込忠左衛門

寛文十一年より

一 牛込忠左衛門

寛文十一年より

一 岡野 孫九郎

寛文十二年より延寶七年迄

一 牛込忠左衛門

寛文十一年より延寶九酉の年迄

一 川口源左衛門

延寶八申年より元禄六年迄

後攝津守改之從之是以後受領號也

一 川口源左衛門

一 宮城 監物

延寶九酉の年より貞享三年迄被勤之同冬役儀御免

一 大澤左兵衛

貞享三年八月被勤附四年春下向五月二十八日於長崎一死去

此時より御奉行三人に成兩人宛在勤也

一 山岡 對馬守

貞享四年二月十八日被勤附元禄八年迄

一 宮城 越前守

被勤附元禄八年迄

一 近藤 備中守

元禄七年正月十一日被勤附川口攝津守跡役同十四年迄被勤之

一 丹羽 遠江守

元禄八乙亥二月五日被勤附山岡對馬守跡役同十五年迄被勤之

一 諏訪 下總守

元禄九丙子三月二十八日被勤附宮城越前守跡同年秋長崎下向

元禄十一年秋被勤歸役儀被勤召放

元禄十二年六月二十八日被勤附同十六年迄被勤之

一 大島雲八後伊勢守

此時より御奉行四人に成兩人宛隔年勤番春秋兩度に交代也同時座席

一 林 藤五郎

同年同月被勤附同十六年迄被勤之

一 江戸町御奉行の跡に被勤附

元禄十五壬午正月十一日被勤附近藤備中守跡役

一 永井采女後讀岐守

被勤附近藤備中守跡役

一別所孫右衛門後播磨守同年十月十五日被_レ仰附丹羽遠江守跡役

一石尾織部後阿波守元祿十六癸未七月二十八日被_レ仰附大嶋伊勢守跡役

一佐久間安藝守初名丹後守同年十一月十五日被_レ仰附林土佐守跡役

稻佐

一稻佐には往昔稻佐治部之丞、同新五、同九郎といふもの住す義満將軍九州退治の著到にも見えたり又太宰少貳嘉頼より稻佐九郎に遣したる狀去る家にあり文曰

其所永々滯留心入の段祝著に候長崎西島以下の事如_ニ申談候_一計可_レ被_レ申候尙巨勢左馬之助へ申候間不_レ能_レ詳候恐々謹言

九月三日

稻佐九郎殿

太宰少貳判

一いなさの脇にふすだといふ所有委細は別段に記

身投石

一正保四年來朝の黒船此沖に二艘ともに繋る

神樂島

一かぐら島の地方にまきみ、疇刈といふ所有間の白濱を舞濱といふ昔年まきみ、あせかり、多浦の男女

此濱に出て神舞をしたり夫より沖の島を神樂島と名附るよし又かぐら島に隼の巢くふ所あり

相撲石

一沖のすまふ地のすまふとて二つ有地のすまふ高さ凡二十間もあるべし廻りも同前地の相撲のいたゞきに大木のみかんあり熟して落けるにぞみかんとは知れる俗に唐のすまふ日本のすまふと云

池島

相撲石より西沖に有

一池島の廻り一里に不_レ足島の峯に池あり深さ七尋長百八十間横百二十二間水は少し鹽ばゆし白えびうなぎなど澤山也

瀬戸

沖に相嶋有春は鯨つき居る嶋也

一前の松山をば下島といふ本名は焼島といふ是を天下島と云傳る事は往昔は瀬戸浦に富人あり近浦近郷よりうやまふ事不_レ可_ニ勝計_一いかなる故か狂氣ものとなりやけ島に渡り我は近きうちに天下の主と成とていきおひまうにのゝしる元來おろかなる漁父さもあるべしとて酒肴を持はこびて是を賞する事不_ニ大方_一はたして狂人は此島にてむなしく成ければ天下島といひ傳へ侍るよし俗説なれど所の

言傳へを記すのみ

三年が浦

一三年が浦は岫曲自然にして五町程の入海也往昔此おくに唐船三年が間かくれるて知れる人もなかりしよし夫より三年が浦といふ同じならびに唐人が水とて有右のかくれ船此所より水を取たるよし俗にたうしが水といふよき水所なり少しの風には舟がゝりもよし

七つ釜

一此所も深き入海にて景地すぐれたり變る云傳も不聞

冬霧

一此所もかはる言傳へごとなし

面高

一面高人家の前に入て無雙の湊なり古城跡あり城主不_レ知

相神浦あいのち面高より二里餘北の入隅也常に船繋する所にあらす

一此所一里餘の入海也相浦の入口に大崎といふ所あり同じならびにえづの浦とて有信田小太郎を尋らるゝあね君の道の記に相の浦えづの里とあるは此

所也俗にえづ津といふ大崎といふに信田殿屋敷とて廣きやしきあと有

一右の大崎には文祿の比一部式部といふもの居城して九島の主たりしよし其後大崎に名字を改て筑前に出て吉田氏の家に仕ふ

一相神の上の高き松山を正觀岳といふ魔所のよし
九島内

一此所は九十九島有といふ九十を略して九島といふ凡島數三十八さも有べしかぞへ知る事不_レ能或曰、松島嚴島天の橋立は日本三景といへども九島内三里の風景おさゝおとるべからず誠に都近き程ならば和歌にも稱せらるべき所なるをや
河内

一此時往昔は阿蘭陀船著し所といふ此上の高山を安滿岳といふ是平戸島第一の高山也妙理權現おはします養老元年に越前の泰澄法師加賀の白山を踏分け同二年に此山をも踏分給ふと也泰澄法師の傳くはしくは元亨釋書に見えたり

田平

一田平とはうへの在郷をいふ海邊の人家は日の浦と

云

一此所は應安の比より天文の時代まで松浦の家臣田平豊後といふもの居城したるよし

一此所に彌勒寺といふ禪院有信田の小太郎のこしかけ給ふ石とて庭前にこけむしたる石あり彼あね君の道の記に田平彌勒寺と有は此所なり
一日の浦の渡とて平戸の十境の内也

日浦渡

古渡頭邊寂寞濱

艤舟日々待來賓

暫時客借篙師力

此岸人爲彼岸人

平戸

一平戸の城は正保元年に今の所に立直るよし古城跡を白濱町といふ

一同所松浦氏代々領

松浦肥前守鎮信

天正十七年刑部卿法印に任じ文祿元年より秀吉公朝鮮征伐の時先陣として壹岐國を出船朝鮮に渡海せしめて軍功を盡す其後七箇年彼國に住していよく勇名を顯す秀吉公薨御在て後歸朝慶長五年石田三成が謀叛の時御當家に通じ忠節を

勵す同十九年死去法名源長と號

松浦肥前守久信從五位下

刑部卿法印と相共に高麗に趣き粉骨を盡し戰功あり其後歸朝して父法印に先立て死去法名常安と號す

一高六萬三千石

松浦壹岐守隆信從五位下

慶長十九年祖父法印の家督を繼ぐ御當家御治世以後の差出し高也寛永十四年死去

一高六萬千石餘

松浦肥前守鎮信從五位下

寛永十四年家督相續本知の内千五百石松浦伊右衛門に配分元祿二年依願隱居

一高六萬千石餘

松浦壹岐守任從五位下

元祿二年家督相續外に新田一萬石弟松浦織部に配分

一同所に阿蘭陀船著岸の初不分明或曰天文十八年初

て著岸したるよし又慶長十六年ともいふ平戸に入右のはなの番所阿蘭陀住宅の跡なり寛永十八巳の年より長崎著津

一平戸島南のはな牛くび沖より西に見ゆる高山をしじき山といふ建治三年蒙古使者杜世忠を日本にて

殺す意趣にや蒙古の大將阿剌罕、范文虎、忻都、洪茶丘四人十萬人を卒て六萬艘の兵船に乗て同四年七月に肥前國平壺に著夫より五龍山にうつる阿剌罕は路次にて病にかゝれり同八月朔日大風吹て蒙古の兵船悉く破損す四人の大將はよき船に乗て行方不^レ知十萬の軍勢は五龍山の下に漂ひ兵糧なくて飲食せざる事三日然るに張百戸といふものを物頭に仕立船を造りおへんとすかゝる所に同月七日日本の兵共押寄せ相戦ふ蒙古打負て討るゝ者多し残れる三萬人を生捕て八角島^{はかた}にて切殺すはかたは筑前博多なり五龍山は一説筑前國し^いき山の事といへりされば世にもぐりこぐりとておそろしき事にいひならはすは蒙古國裏といふ事なるべしと王代記にも見えたり此度大風諸神の冥助なりとて伊勢の風の社を風の宮とあがめらる我國の神風蒙古の船を吹破るといふは此時の事なりと云々

蒲田

一 同所前の島を阿蘭陀島といふ文祿の比阿蘭陀船著たるよし夫より名附る本名は横島と云

美來屋^{みくりや} 美久里屋又は御來屋共書

一同所常に船繋する所を御來屋の星賀といふはなの山を竹崎山又は城山ともいふ古城山也永祿の末天文までは美來屋丹後と云者居城したるよし

高島

一 高島といふはみくりや内を口の星賀に出れば左の方の島の總名をいふ殿の浦といふ湊のはなの山は古城山なり城主不^レ知

今萬里^{いまり}

一 今萬里には御來屋より海陸七里あり
一同所皿山は神山といふが本山也今萬里の海邊より神山まで行程三里家數千五百軒程あり其外とし木、南川原、一の瀬、黒仁田、大保、廣瀬、などいふ皿山有上々手の焼物はとし木、南川原と云より焼出す

一 今萬里當初は松浦の領分なりしに永祿十一年の夏肥前國龍造寺隆信勢強大成に附て同國松浦民部大輔を旗下にせんとて人數を卒て平戸にむかふ松浦大きにおどろき大友宗麟に加勢を乞依て大友より畑尾張守、筑前の小田部、大鶴を加勢として平戸に

遣す龍造寺隆信は是を聞加勢の來らぬ先に責落すべしとて同年四月二十九日に松浦が領分に働入る松浦も今萬里まで打出て合戦す然處に畑尾張守俄に志を變じて龍造寺に一味す依之松浦忽に打負て小船に乗平戸に引取る龍造寺は平戸の迫戸渡船なくて續て追もせず其後大村新八、入道利仙を玄^{たが}へ又筑前怡土郡に責入原田と鹿家峠にて合戦高祖^{たかす}に迫込爰を捨て又平戸にむかふ此時松浦降參して今萬里千町を出し旗下となりしよし

杉の浦

一杉の浦は口のほしかより海陸三里御來屋より海上七里陸路十里餘難所なり松浦氏江戸參勤の時小倉より上陸の節は必此所より御來屋へ渡海也

口の星賀

一同所は無雙の湊なり變るいひ傳もなし

假屋又刈屋共書

一かり屋は一里餘の入海なり湊よし

斑島

一假屋、星賀の沖の島を云名所也馬渡島とも云今は牧あり依之馬渡島といふといへり名寄には斑と

書て壹岐の島の名所の部に入也

あまの刈みるめの浦に白雪の

またら島にも降かゝる哉

海松布の浦壹岐の名所なり

満汐のなかれひるまをあひかたみ

見るめの浦によるをこそまて

と清原深養父がよみし所也

名護屋

一名護屋の境地は自然の好景なり百町あまり海水めぐりて四方の風にも波靜にして深き事底なきに似たり秀吉公なごや御在陣の時唐人見物し嘉陵三百里の山水には不足なりといへども瀟湘十里の風景には事足りと通辭のものにいへりとぞ

重疊青山湖水長

無邊綠樹顯新粧

遠來日本傳朗詔

遙出大唐報聖光

水碧沙平迎日影

雨微煙暗送斜陽

回頭千態皆湘景

不覺斯身在異鄉

又

杏施轎車來日東

聖君恩重配天公

遍朝萬國播恩化

悉撫四夷助毛忠

名護風光驚ニ旅眼ニ

肥州絶境慰ニ衰躬ニ

洞庭何及ニ此清景ニ

空使ニ詩人ニ吟策窮ニ

又

一奉ニ皇恩ニ撫ニ八紘ニ

忽蒙ニ聖諭ニ九夷清

晴光湧ニ景靈蹤聚

山勢抱ニ口煙浪輕

處境奇踪難ニ闢靡ニ

揚州風物寧堪ニ爭

扶桑聞說有ニ仙島ニ

斯處定知蓬又瀛

一秀吉公の御陣所の後常に旅人見る事禁制也

一秀吉公の御召船は日本丸といひたるよし日本一の

大船といひ關白の御召船と云旁以日本丸と名附た

るよし或曰日本丸は四十六挺立なりといふ又曰あ

たけ作りの四十六挺立なれば今時の五百石積の荷

船ほどもありしよし其時代は二百石以上の大船は

一圓になし依之日本一の大船といひたるよし

呼子 名護屋呼子の間海上半里陸路二里餘

一日本一のみなとなり上下の船東西の風に出帆する

に何の湊よりもすぐれたり

一名寄に未勘國の部に呼子山と有若此所にや

野々宮千首 名に立る呼子の山のよふこ鳥

明教法師

はや啼出ぬ春來りとして

壁島 呼子名護屋の前の島を云

一同島の東のはなに田島大明神おはします是松浦小

夜姫の神社なり同島高く内百石御朱印にて小夜姫

の神社に御寄附同所に小夜姫とて女のきぬをかつ

ぎたる様なる石ありひれ振山同嶺此島のいたいき

の事といへり

松浦小夜姫とは

萬葉曰天平二年七月十一日筑前國司山上憶良謹

上大伴佐提比古郎子 特被ニ朝命ニ奉ニ使藩國ニ艤

ニ棹言歸稍赴ニ蒼波ニ妾也松浦佐用 嬪面嗟ニ此別

易ニ歎ニ彼會難ニ即登ニ高山之嶺ニ遙望ニ離去之船ニ

悵然斷ニ肝ニ黯然銷ニ魂ニ遂脫ニ領巾ニ麾ニ之ニ傍者莫

ニ不ニ流ニ涕ニ因號ニ此山ニ曰ニ領巾麾之嶺ニ也云々

或曰、小夜姫の神社は唐津の鏡の宮をいふ也灯庵

主袖下集に松浦佐夜姫といふ左手彦大臣を其時の

帝唐土に御使に遣し侍けるに都よりさよ姫をもろ

こしまでつれゆかんとて供しけるに如何おもひけ

んすて行ければさよ姫むなしく止り船の見ゆる程

は戀こがれけれどもかひなく高き山にのぼり袖に

てまねく船かくれし後は其まゝ石となりぬ佐夜姫

なく泪紅にながる此石のかたち女のきぬをかつぎて臥たる體也佐手彦三とせ過てかへり佐夜姫を神に祝ふ此所を鏡の里といへば鏡の神かゝみ山といふ也去かあれば佐夜姫の神社は鏡の宮に極るべしされども紹巴老人の匠材集宗祇法師の名所方角抄に鏡の宮は太宰大貳とあり又河海抄古老の傳に云藤原宇合一男廣繼叛_ニ於西府_ニ於是勅_ニ大野東人_ニ爲_ニ大將軍_ニ率_ニ官兵_ニ討_ニ之時廣繼不_レ利自拔_レ刀刺_レ頭飛升_レ空蹶_ニ殺官軍_ニ其靈化爲_ニ赤鏡_ニ見者多死今肥前國鏡明神是也

又神社考風土記曰

昔者氣長足姬尊。在_ニ松浦山_ニ遙覽_ニ國形_ニ而勅祈曰。天神地祇。爲_レ我助福。乃用_ニ御鏡_ニ安_ニ置此所_ニ其鏡化爲_レ石而在_レ山。故名曰_ニ鏡宮_ニ氣長足姬者。神功皇后也

又諸社一覽鏡宮事神社考同

とかく小夜姫の神社は壁島の田島大明神に極りひれ振山もかべしま也たしかならずば御朱印にて百石の地御寄附可_レ被成様なしと田島の社司の言傳か新後拾蟬の羽の衣に秋をまつらかた

定 家

續後拾

松浦川川音たかしさよ姫の

中務卿王

ひれふる山の五月雨のころ

千

木の間よりひれ振山_{イ袖}をよそに見て 藤原基俊

いかゝはすへき松浦さよ姫

神集島

一此島は神功皇后こゝにて軍衆をあつめ給ふゆへ神集島といふと云々皇后三韓御退治の時船がゝりの便にとて波戸を築給ふよし云傳ふさもあるべし此所の波戸人のわざにて築立たるとは見えす

唐津

一朝鮮御陣の節秀吉卿爲_ニ居城_ニ名護屋に新城を築く後名護屋の城を當地に移し築之

一高十二萬三千石 寺澤志摩守廣高從四位下

内四萬石慶長五年於_ニ肥州天草_ニ加増寛永十四年死去

一高十二萬三千石 寺澤兵庫頭忠高從五位下

寛永十四年家督相續して居之天草一揆以後天草領四萬石被_ニ召上_ニ依_レ之忠高領知八萬三千石

一高八萬三千石 大久保加賀守忠季從四位下

兵庫頭忠高沒落して後慶安二年忠季に給る寛文十年死去法名日禪

一高八萬三千石 大久保加賀守忠朝從五位下

寛文十年家督相續忠朝實父大久保右京亮教隆延寶五年忠朝老中に列同六年轉唐津本知にて下總國印幡郡佐倉の城主とす同年從四位下に叙す同八年侍從に任ず

一高七萬石 松平和泉守乘久從五位下

加賀守忠朝依取替延寶六年乘久に給る貞享三年死去

一高六萬八千石 松平和泉守乘春從五位下

貞享三年家督相續本知の内二千石外に新田二千石弟兩人に配分依之乘春領知六萬八千石元祿三年九月五日死去

一高六萬石 松平原次郎乘益

元祿三年家督相續翌年志摩國鳥羽に所替

一高七萬石 土井周防守利益從五位下

源次郎依之所替周防守利益に給り元祿四年より

居之

一唐津初は地切といふ水島とは同所の川向の市町を

いふ同所にて天正十四丙戌年三月六日松浦刑部大輔鎮信畑三河守と合戦する其濫觴を尋るに同年三月に唐津の同人平戸の田平にて網を引田平のものども見とがめて搦取平戸に渡し成敗す畑是を聞て安からぬ事におもひいかさま平戸領の者ども此方に來らぬ事はあらじ見逢次第に何ものによらず討捨にせよと内々下知して相待處に平戸の士二十四人地切に來て遊釣する畑が勢おしかけて一々に切殺し其首に札附て水島にさらす此事平戸に隱なく松浦大きに怒をなし時刻を移さず二千人を率て三月五日に田平に渡り翌朝美久里屋より杉の浦にわたり畑が居城に押寄する杉の浦より陸路唐津へ三里三河守は其比畑の城に居たりしが此事を聞き五日に畑を立て其夜は鏡に野陣を取て翌日水島にて合戦す松浦散々討負て又杉の浦に引取船に乗て平戸に歸帆するこそ無念なれ

松浦 唐津邊の濱邊をいふ松浦と檢ていふべき所もなし

一松浦といひ侍る事は日本紀曰

到火前松浦縣。而進食於玉島里小河之側。於是。皇后勾針爲釣。取粒爲餌。抽取裳糸爲

縹。登^ニ河中石上。而投^レ釣。祈^レ之曰。朕西方欲^レ求^ニ財國。若有^レ成^レ事者河魚飲^レ釣。因以舉^レ竿乃獲^ニ細鱗魚。時皇后曰。希見物也。故時人號^ニ其所^一曰^ニ梅豆羅國。今謂^ニ松浦^一訛焉。

新拾 松浦かたもろこしかけて見渡せば 御 製

新古 波路も八重の末のまら雲 藤原隆信

新勅 誰としもまらぬ別のかなしきは 慈 圓

新勅 霞しく松浦の沖にこき出て もろこしまての春をみる哉

新千 もろこしの山人今はをしむらん 後鳥羽院

松浦か沖の明かたの月

玉島川 浦里山 松浦郡

一草野の大村といふ所にながる、川唐津より二里東

濱崎川の上なり皇后の御腰をかけられし石などあ

風り 玉島やおちくる鮎の川柳 家 隆

下葉うちちり秋風そふく

續千 梅か香や先うつるらん影清き 定 家

花イ 玉島川の水のかゝみに

新千 鏡 唐津より一里東鏡の事委は前に壁島の所に記す

あひみむとおもふ心は松浦なる 紫式部

かゝみの神やかけてまららん 定 家

まづめけん鏡のかけや是ならん

松浦の川の秋のよの月

肥前國にて方角不^レ知名所 美彌良久島

一萬葉十六詞曰 肥前國松浦縣美彌良久の崎より發^レ船直射^ニ對

馬^ニ海を渡ると云々

五島深江の沖を俗にみいらくといふ此所なるべ

しと云々

みいらくの我日の本の島ならば 俊 頼

けふも見かけにあはましものを

筑前國

怡土郡

日本紀仲哀天皇神功皇后筑紫に幸して熊襲をうち給ふ時筑紫伊觀縣主の祖五十迺手御むかひに出し事ありこれ伊觀郡の國史に出る始なり和名には怡土郡と書り

怡土の濱

名所なり深江村の西子負の原の北の濱邊をいふ
懷中綱手繩引きるほとに風吹は

いとのはままで船も寄りける

吉井濱(公領)

此うへの高山を吉井嶽又は浮嶽又西行嶽ともいふ筑紫の富士是也と云々又筑紫の富士は志摩郡小金丸の可也山をいふともいへり可也山の下に記之

一吉井嶽には元龜の比吉井左京亮隆光居城す同二辛未正月十六日松浦の一族草野四郎家房は吉井が領地を取らんとて一千餘人引卒て怡土の濱に陣を取る左京亮は小勢なり深江豊前守、小金丸民部大輔、

波多江上總介に加勢を乞心得たりとて岩隈河内守、重留六郎を同道して吉井深江と一つになり兩日合戦す十六日に波多江上總介鎮種、重留六郎盛家討死す二の目の合戦に草野敗北して草野の城に引入ける

西行つくし紀行に

音にきくつくしのふしを來て見れば

霞にまかふ雲のうき嶽

加布里(公領)

一元龜の比原田了巢城代岩隈河内守居城す

深江

深江の海名所なりうへの山を深江嶽又は人壽嶽ともいふ

一深江嶽二重嶽といふ高山なり深江豊前守良治居城す永祿の末より原田了榮抱となる草野中務大輔、鎮永入道宗揚住す草野は其先祖筑後國の士にして御井郡草野郷に住せり平家一門九州に逃下りし時西國士おほくは平家に屬しけるに草野大夫永平始終源氏に心をよせ忠貞なりしゆゑ頼朝卿甚悦び給ふよし東鑑にも見えたり元弘建武の比宮方に屬し

忠功を抽ける事太平記に見えたり其後代々相續し
天正年中鎮永入道宗揚に至て太閤秀吉公に亡され
て斷絶す

萬葉長歌に

よろづ代にいひつゝかねとわたのそこ

こふのはら
子負原

沖つふか江のうなかみのみし

海邊にあらず深江の西にあり神功皇后御腰には
さみ給ひし石二つ昔此原にあり彼石今は爰にな
し近き比深江村に堀出し新八幡とて敬奉るなり
古石にや其實を不_レ知此石をくしみ玉ふと言ふ

一

日本紀に皇后新羅を征せんとして赴給ふ時まさに開
胎_{かき}に當れり皇后則石をとりて腰に挾て祈てのたま

はく事おはりてかへらん日此土に産れよと其石今
伊觀縣の道の邊にありと云々萬葉集第五に筑前國
怡土郡深江村子負原海にのぞめる丘の上に二石あ

りと云々

萬葉長歌上

いはひ給ひしまたまなすふたつの石を世の人に
玄めし給ひて萬代にいひつゝかねとわたのそこ
沖の島江のうなかみのこふの原にみてつからを
かし給ひて略下

あめつちのともに久しくいひつけと

此くしみ玉しかしけらしも

くしみ玉の石如_ニ鶏子_一其美好なる事勝て論ずべか
らず

大なるは長一尺二寸圍一尺八寸六步廻重目十八
斤五兩

小きは長一尺一寸圍一尺八寸重目十六斤十兩

志摩郡

續日本紀元明天皇記に筑前國島郡とあり萬葉抄
三代實錄等同前

岐志

一此内に船越といふ浦あり引つといふ名所なり

萬

梓弓引つのへなるなのりその

人

丸

花つむまてはあはさらめやも

なのりその花

萬

あつさ弓引つのへなる名のりその 讀人不知

花咲まてにあはぬ君かも

新勅撰

梓弓引つのつなるなのりその

讀人不知

誰うき物とゑらせそめけん

一 岐志の内に新町といふ浦あり文祿の比原田五郎種門同三郎繁種大友を背き毛利元就に一身して高祖をぬけ岐志より船に乗中國に渡らんとす大友方に隠なくいそぎ討手を指向ければ兄弟の者共遁がたく岐志の波打際にて散々に合戦して兄弟共にさし違て死す行年二十二歳二十歳にてぞありける惜哉強弓の達者稀代の勇士なりしとなり今新町の東の山際海邊より三町程うへに兩所權現と稱して弓矢神とす

一 岐志のうへの高山を親山をといふ小金丸村みとこ村のうへの山なり大友の西政所日野三九郎居城其後小金丸民部少輔良種居城す

一 此親山より日光山の華表石いつる

日光山御鳥居丈尺

鳥居高さ敷石より笠石迄二丈八尺九寸

貫石より下の敷石迄二丈一尺

笠石の横長 六間二尺九寸

兩柱の間下にて二丈二尺

柱の渡り 三尺五寸柱に繼目一所宛有

額の長 四尺七寸横二尺六寸七步

鳥居銘曰 南海を廻して東山に達すと有 前後略す

元和四年四月十七日 黒田長政の時寄進也

一 宗祇筑紫紀行に箱崎の濱より西のかたの眺望を記せるに夕日のはるくとかゝれるかたに富士に似たる山ありみとこといふ山なり云々凡七面ありいつかたよりむかひても同じ姿なり

一 此山は筑前可也山といふ名所なり可也の海は山の西なる入海なり

萬十五 草枕旅をくるしみ戀おれは 大判宮

かやの山へにさをしかなくも

小町が姉

六帖 かやか野邊はいともかなしな嶺の上の

松かえともに久しき物を

夫木 下をれのかやの山邊に鳴鹿の 知 家

さこそみたれて妻をこふらめ

夏ふかきかや野の小野の萱薙 爲 家

みししかき夜半のふしの間もなし

姫島

怡土の島とあり名所なり今は志摩郡に屬す

六帖 下紐のいふさりかけてときつれば 人 丸

君かみそぬふいとの島みゆ

立石崎

芥屋大門の坤の方に立石といふ所あり此所なり

夫木 さかおろす立石崎のゑら波は 西 行

あらき潮にもかゝりけるかな

芥屋

一芥屋崎岩穴十餘町ふかし奇異の所なり芥屋大門といふ

一芥屋村より乾の方五町許に大門崎とて海中にさし出たる岩山の出崎あり其出崎はすべて一箇の岩山にして小き尾つゞけり其形あたかも龜の首をのべたるに似て出崎につゞけり山の尾は細く出崎の岩山は小大にして高し此出崎の岩の形こまかに見れば悉く八九寸一尺三寸五寸或一尺八寸許なる方なる石の柱なり其柱はあたかも良工の手を盡し削なり數百萬をつかねて高く海中に立たるが如くなり形莊なり此岩山高き事海上三四十間許其そばたて事屏風を立たるがごとく城郭の石壁の如し山上

はかへつて前にさしかゝりて下をおほへり其山下に天門とて北にむかへる大なる岩窟あり其内海水甚深くして其色黒くよのつねの水色に異なり是山陰にして又水極て深き故なり見る人おそる窟中のよこ廣き所五間半許其中に舟にのりて入に窟中に入て見あぐれば天井の如くにして悉く角柱をつかねたる端を見るが如し其天井の石柱の上よりたる事長短ひとしからず其窟中へ舟の入事四十間許其半過より少東へ曲れり其奥の水なき所舟よりあがり行は白砂地なり其地に上りたる人或五七間十間許行といへども其奥甚くらくしてすさまじくふかく入事あたはず穴の中に蝙蝠多くして面をうつ然る故古より其極る所をみる人なし里人の云近來或人其奥を見んため燈を燃して窟の内にふかく入て沙土を步行けるに窟中俄に鳴動し海波起る人皆おそれていそぎ退き舟に乘て歸といふ又此大門の東の方に大門の岩山を離るゝ事三四町にして水中に岩石あり長さ五六間高さ水上より三間餘ばかり此岩も又四五寸の角柱を横にかさねたる如し是にも洞穴あり民俗海鰐穴といふ又冬月北風烈しく洋

の波此大門の窟を打時は其響數里に聞えて夥し抑此所岩壁の奇しき窟中の異なる事世間佳山水の類にあらずかの韓柳李杜がすといふとも此美を形容しがたかるべし誠に天下の奇觀なり

此所を一説に八十扞日、神直日、大直日、底筒男、中筒男、表筒男、底津海童、中津海童、表津海童九柱の神出觀し給ふ橋の小戸といふ所のよしいへり大門小戸其聲相通じかくのごとく奇異の境なれば九神のあれましけん事さもあるべきものか

新後拾遺

橋の小戸の鹽瀬にあらはれて

津守國量

むかしふりにし神を此神

新道百

橋の小戸の御祓を初にて

兼 邦

いさも清むるわか身なりけり

一此所に寛文の末久左衛門といふもの赤毛の女犬を持ち狸をとる事よのつねならず人の云ふくむるに去たがひて山に入て狸をつれ来るさきにたてゝ追来るにあらず犬山より出来れば狸あとにつきて來り家の内に去たがひ来る更に犬のけしきにそむく事あたはず其事國主光之も聞給ひて城下に取よせて見給ふ不思議の名犬なり

野北

一此所船がゝりなし永祿の初までは大友の家臣古庄能登守といふもの住宅す古城跡なし永祿八年に能登守は志摩郡馬場の城に入る其跡馬場越後と云者住せしと云々

一此所大なる蛤あり他所に無之といふ味も又美なり

櫻井

一此うへの高山を天下岳といふは古城跡あり城主不知櫻井神前を浦の城と云古城跡のよし城主は同所の神主浦權大夫先祖のよし時代不知

一櫻井神社は與主姫大明神と號す八十扞津日、神直日、大直日三神を祭る所なり先君忠之創立し給ふ神威靈驗不可勝計事多き故略す此

玄界島

福岡より海上六里なり

一此所に小鷹大明神御座百合若大臣の愛せられし鷹綠丸を祭ると云々ゆりわか大臣の事古書に見えざればいふかしき事なれども此島にゆり若の住れしと云傳る所殘れり綠丸ながれよりし所をよりきと

いふかれこれ舊跡あり又當國夜次郡にも縁丸がつ

ばさを休し松あり安藝國安南郡天野村に縁丸を祭

りて鷹の宮あり豊後國大分郡府内にゆり若の舊跡

多く墓もあり別府兄弟が墓も速見郡石垣村にあり

如此なればひたすら虚説とはいひがたし俗説には

嵯峨天皇御宇に四條左大臣公光の子百合若大臣九

州の藩鎮として豊後國に住す勅をうけて異賊の襲

來をうち平らげ此島にあり暫居給ひしを其家臣

別府貞澄弟貞貫心がはりし大臣つかれをやすめ岩

かどを枕にして安臥せられしをすて置歸けるかく

て大臣島のゑびすと成久しくこゝに住り縁丸とい

ふ大鷹其内室の文をして往來せしなど云傳へたり

一玄界の脇の小島二つを釋迦牟島せぎやうばうとい

ふ此和語心得がたき事なり南の方の岩のつらに釋

迦の像を彫てありしゆゑ釋迦牟島といふなり其所

くづれて今は其像なし

一釋迦牟島に龍穴とて海底幾尋ともなき穴あり箱崎

の私司雨の祈をするに此龍穴に來て三寸みすをそなへ

雨を祈るに隆らずといふ事なしかななる仔細にて

何の比より雨の祈仕來りしにか箱崎の仕入も不

レ知よし

韓泊かんぱく

今津より一里半西にあり萬葉、五に志摩郡韓

亭と書り

一唐泊より南の山を草場村の柑子岳かんしといふ古城山な

り大友の東政所曰杵新介鎮麿居城す元龜の比より

曰杵進士兵衛鎮氏居城す此鎮氏は元龜二辛未九月

前の東政所曰杵新介政所職を辭して豊後に歸る其

後役として進士兵衛柑子岳に來て好色おごりを旨

とする因、茲志摩郡の士甚うとみけるとなり翌年

の春正月十六日原田了榮今津の毘沙門に打出ける

進士兵衛是を聞てさあらば討取んとて大勢を卒て

押寄る原田方は小勢なり思ひよらざる事なれば周

章騒がりされども事になれたる士卒殊に了榮は老

功の大將にて程なく爰を切ぬけて高祖たかすに引取る進

士兵衛無念の事におもひ同じく廿八日泊又太郎馬

場越後を案内者として了榮が居城に押寄る高祖勢

落し合て池田川原今津の内より一里半程奥也にて合戦す曰杵方敗

北進士兵衛は土州の平等寺といふ禪院にて自害討

死の者進士兵衛を初泊又太郎馬場越後其外侍七十

人若黨弓之者足輕二百人手負百三十八人なり進士
兵衛が墓平等寺の庭前に椿をうゑてうすき塚とて
今にあり

一沖に大蛇島あり西浦より亥の方十三里海中にあり
島のめぐりわづかに二十五六丁南北十餘丁東西五
丁餘此島に宗像大神社あり此島も國主より異船の
來るを察せんため島守の士を置るいにしへ大蛇あ
りて蟠れる岩穴ともあり
萬
から泊のこの浦波にたぬ日は

あれともいへにこひぬ日はなし

鹽歸りこしかひこそなけれ唐泊

いつちなかれし人の行衛は

夫木 鹽風はあらくもそなりから泊 中務御子

のこのうら舟漕出なゆめ

宗 良

おほつかな船路はいつこからとまり

このあし原の名ともおほえす

志摩浦

其所不詳といへども名寄に當國と記せり志摩

郡の浦をすべていふか

素性法師

亥まの浦わに紅葉ちりしく

大和路によみ合せたれば大和にあるべきやとお
ぼゆれど凡和歌には千里の外の事をもおもひ合
てよめる例多し亥まの浦の紅葉のちるを見て大
和路のさほ山嵐を思ひやる心もあるべき事なり
難決

今津

小崎とは唐泊御崎までの總名を云

一此所往昔は三里程の入海にてありしよし依て今も
井樋の泊などいふ所あり

一今津神代に異賊襲來して神軍度々ありし所といふ
異魔津とも云北崎を鬼多崎とも書り小松重盛公病
氣の時此所に唐土より來り居たりし醫師に療治を
させんと清盛のたまひしかども重盛うけがはれざ
りし事盛衰記に見えたり文永八年蒙古の使者趙良
弼筑前今津に着牒狀を呈す公家武家不返事
空しく歸ると云々其比までは唐船入津して繁昌し
たる所なり

一同所の外浦北の濱邊には享安年中異賊ふせぎのため築たる石垣の跡形あり其石とものこれり

一今津に千光國師歸朝の時初て住し給ふ禪院あり是を勝福寺といふ

早良郡

和名抄に早良を以て郷の名とす

長垂山

一生の松原の西につきたる松山なり海邊景色よし

生松原

一神功皇后三韓を征し給ふ時此所にて松の枝を取て

さかさまにさして異敵を征して勝利を得べくば此松いきよとてさし給ふにつるに根出來て繁茂すと云々

一生の松原の内に壹岐社あり武内の宿禰筑紫の政道

のために下られしあとにて其弟甘美内宿禰帝に讒言し叛逆の志あるよしうつたへ申ければ武内を殺

し給ふべきに極りたるを壹岐直眞根子といふ人口比忠信誠實の人なりしが武内世になく成給はゞ天

下の政玄かるべからず君の爲國の爲とおもひ眞根子がかたち武内によく似たる故其志を武内にいひ

置て劔に伏して死す今生原に眞根子の社有

武内大にかなしみひそかに都にのぼりなげき申入

られしかば甘美内と武内とさま／＼推向し給ふ其實否決しがたきゆる磯城川のほとりにて帝の御前にて探湯をしけるに武内かち給ひて罪なき事明ら

かなりしかば甘美内は罪に處せられけるよし日本記にあり

拾遺

むかしみし生の松原こととはい 橘 併 平

忘れぬ人もありとこたへよ 相 模

後拾 忘れぬ人もありとこたへよ 相 模

たひ／＼の千代をはるかに君やみん

末の松より生の松まで

新古 涼しさは生の松原まさるとも 枇 杷 皇

そふる扇の風にわすれそ

姪濱

一神功皇后三韓を退治し御歸朝の時十二月四日此所に著給ふ柏の御衣を干給ふ故あこめの浦といふよし八幡記にゑるせり

一此所は鹽屋多し姪濱鹽とて名物なり

一愛宕山は鷲尾權現此所に古より鎮座なり愛宕山は

忠之の時山城の愛宕を勸請し給ふなり

一愛宕山を浦山といふ宗祇筑紫紀行にも此山の景色を甚感じて記せり北條の探題北條遠江守英時居城今權現の御座所本丸のよし

一浦山の西なるを中熊山其西なるを丸隈山といふ北條の探題斯波左京大夫氏經居城

一幽齋の道の記に姪の濱より安吉の脇指おこせて目利して銘などもよく侍らば主になるべきとて文あり其返事に

脇指の代をしとへばやすよしの

中にたゝしきめいのはま哉

六月三日姪濱興福寺住持

耳峰玄能

和漢興行に發句ありはしに

風かをる恵を松の戸ほそ哉

幽齋

社内六月梅

玄能

一幽齋紀行に浦山の事を可也山のやうに記されたり傳聞のあやまりなり

一姪濱に小戸といふ所ありこれ橘の小戸なるかと云説も有

一興徳寺禪寺なり大應國師南浦明和尚歸朝して三年

こゝに住せらる

一姪の濱は二十町程の遠干潟也天正七年九月戸次道雪原田親秀と生の松原合戦の時初は道雪の先手討負て敗北す此時家臣小野和泉、山布雪荷下知しけるは今うしろの川に高潮みちたれば心のまゝ引取事もならじ潮におぼれて死んより敵に向て死ねやとて大音あげて下知しければ此詞に力を得三千餘騎取て返し戦ふ原田が勢六千餘騎士大將原田休慶大剛の者なりしが小野和泉が手にて討死す其勢ひに高祖の城の二三のくるはまで攻入火をはなつ原田は詰の丸に引入てたてこもるなど云々

能古島のこのしま

萬 名所なり能解浦とも書り

萬 から泊のこの浦波たゝぬ日は

人 丸

萬 風吹は沖つゑら波かしこみと あれともいをも戀ぬ日はなし

風吹は沖つゑら波かしこみと 讀人不知

のこの泊にあまた夜をぬる

新古 いまもかものこの浦鹽高からし

光 俊

泊る舟人沖に出つなゆめ

夫木

浦風はあらくもそなるから泊 中 務

のこの浦船こき出なゆめ

屋良崎

殘島北の出崎なり俗にあら崎といふ屋良崎此所

なり

萬

沖津鳥かもといふ船はやらの崎

たえて漕くときかれこぬかも

萬

沖津鳥かもといふ船のかへりこは

やらの崎守はやくつけこせ

紅葉松原

一八幡愚童記には後宇多院文永十年蒙古の兵と日本

兵と紅葉原にて戦事を記す又太宰小貳系圖に蒙古

の大將を百道原^{もぢはら}にて射殺すと云々百道原、紅葉原

同じ昔は松原なし白砂なり長政の命にて元和四年

博多姪濱の者に每家小松一本宛うゑさせらる

一同所八幡宮は光之産神なり早良郡橋本より寛文六

年爰にうつしあつめ給ふ神領百石社僧の寺は妙雲

山松壽院西光寺眞言宗鳥井額は梶井宮慈胤御筆也

荒戸

あらつ崎と云名所也つと戸と通音なり

一三代實録には那河郡荒津と有て博多の邊をいへ

るやうに見ゆあらつの崎より博多の邊までの事を

すべて荒津といへるにや

一荒戸往昔は西南の風にのみ船を繋しに萬治二年に

國主右衛門佐光之百五十間餘の波戸を築出さる石

堤の東の端に燈籠堂を置給ふ客船風波のうれへな

し

一荒戸山 東照宮は承應元年忠之營作なり高照山松

源院福祥寺と號す叡山の末寺なり社領三百石寄附

せらる貞享三年光之鳥居を立給ふ額は曼珠院宮竹

内良尙御筆なり

一源光院承應二年忠之建立なり始は樂院町在に建歡

喜山安穩寺と號す寺領三百石附與せらる寛文八年

十月二十日回祿光之新に東照宮の西にうつし立ら

る

あらつ海^萬は干^萬はみつ時はあれと

いつれの時か我戀さらん

草枕旅行く君をあらつまで

をくりきたれとあきたらすこそ

萬

白妙の袖のわかれを難見爲而かたうして

荒津のはまにやとりするかも

あらつ海われぬさまつりいはひして

はやうつりませおもかはりせて

萬

神さふる荒津の崎によする波

土師稻足

まるたや妹に戀わたるなん

草香江くさか

一説深江にありと云々其所不詳福岡城の西鳥

飼の邊入海の事なりと云々此説可レ用

續新古

草香江の入江の田鶴のたつきなく前右大臣忠

友なきねをや獨なくらん

新後撰

草香江の入江のたつももろこゑに法皇御製

千代にやちよと空になくなり

續後撰

草香江の入江にあさる蘆田鶴の大納言旅主

あなたつゝし友なしにして

千賀浦

福岡の城外光之隱居館の南の堀端鳥飼までの間

をいふ

後拾遺
千賀の浦に波よせかくる心地して道信朝臣

新後撰

かひなしやみるめはかりを契にて左近中將師長

猶袖ぬるゝ千賀のうらなみ

夫木

都おもふ夢路はまはし友ちとり

寂 逆

聲は枕にちかのうら浪

名寄

唐土もちかの浦曲の夜の夢

家 隆

おもはぬかたも遠つ船人

新六

千賀の浦にやくまほけふり春は又 知 家

ひとつ霞と成にける哉

那珂郡

日本紀神功皇后記になかつた儼縣と書り日本後紀には那

珂と書り

福岡

福岡城下は那珂早良兩郡を兼たり

一小早川左衛門佐隆景金吾中納言秀秋領筑前名島に

在城

一高五十二萬三千百石 黒田筑前守長政從四位下

關が原依_二軍功_一慶長五年筑前國一圓賜_レ之名島之城に入其後長政福岡に城を改め築き居城とす元和

九年八月四日長政死去法名興雲院殿古心道下居士
一高四十三萬三千百石

松平筑前守忠之從四位下侍從

元和九年家督相續本知之内秋月五萬石弟黑田甲斐
守長興東蓮寺四萬石同市正隆政に分知す秋月東蓮
寺分除之而忠之領知高四十三萬三千百石忠之承
應三年二月十二日死去高樹院殿傑泰宗英居士
一高四十三萬三千百石

松平右衛門佐光之從四位下侍從

承應三年家督相續延寶五年家綱公之御時直方領四
萬石故有て被ニ差止ニ候處達ニ上聞ニ先祖以來之領知
たる故被ニ返下ニ之旨御直に上意也依之光之領知
四十七萬三千百石元祿元年依願隱居

一高四十七萬三千百石

松平肥前守綱政從四位下侍從

元祿元年家督相續外新田五萬石弟黑田伊勢守長清
に配分直方に居住也

一福岡の城は慶長五年長政入國以後同六年那珂郡福
崎に新に城郭を營作し給ふ國中の端城ともに同十
二年此間成就す

端城は

上座郡

左右良

小石原

夜須郡

彌長

嘉摩郡

益富

鞍手郡

鷹取

遠賀郡

黑崎

若松

一福岡を改て福岡と號する事黒田の先祖近江佐々木
の一族にてありしが長政の曾祖父黒田右近太夫高
政故有て備前國邑久郡福岡の里に移り住給ふ其子
下野守重隆も備前福岡の産なり其本を思ひ出で福
岡と稱し給ふとなり

水鏡天神

一福岡の東橋口にあり菅公左遷の御時四十川のなが
れにのぞみ水かゝみを見給ひ罪なくして左遷心中
悲歎のあまり御かたちのおとろへ給ふ事を觀じて
一夜白髮の歎をなし給ふとなり則其所に依て社を
建たり

住吉

一博多の南にあり伊弉諾尊小戸橋檉原にてみそぎば
らひし給ふ時出現し給ふ九神の内なり底筒男、中

筒男、表筒男三神すべて住吉大明神とす神功皇后三韓を征し給ふ時第一此御神の冥助ありし事日本紀をはじめ古書にゑるし香椎箱崎の縁起等にも詳なり世人のゑる事なれば委は不_レ記

一日向國小戸橘櫓原といふも當國なる事其仔細あり攝州住吉長門の住吉等は皇后御歸朝已後建給ふ御社なり筑前住吉は出現の本所にて遠きむかしよりの神社なり神領三十石宮司坊松花山圓福寺

續古今

西の海櫓か原の鹽路より

ト部兼直

あらはれ出しすみよしの神

新後撰

橋の小戸の鹽瀬にあらはれて

津守國重

むかしふりにし神を此神

一むかしは袖の湊より此住吉の北西東に及て入海つづきけり_三祇法師紀行にも住吉の松の海邊とかけり

一此神木は松にていにしへより三またにて有けるとかやこれ三柱の御神の神體をゑめし給ふと云々兵火などにて焼たりしにも又同じく三またに生かはれりといふ今の松も三またにして大木也又一夜松といふ松あり永享の比此松社にさはりてあしゝと

てきるべきにさだめけるに二三日の内に立なをりたるよし紀行にゑるして宗祇の歌に

神垣の松にそたのむことのほも

直なる道にたちやなをると

其松いづれといふ事もさだかならざりしに天和年中御社の東北の隅なる松神殿の軒にさはるゆゑ伐べきよし沙汰ありしに一雨夜のうちに半よりたちなをりぬ近き比の事なれば人皆見る事なり此外故實さまぐなればゑるしにいとまなし

一神社の北にとなりて東福寺の僧徹書記康正の比來

り住し松月庵の跡あり永祿年中立花氏重根再興此山和尚を開山とし東林寺に附して末庵と

す故實略之

箕島

類聚

降らはふれ三笠の山路ちかければ 檜垣姫

みのしまさてはさして行てん

同

村雨にぬるゝ衣のあやにくに 源重之

けふみのしまの名をやからまし

博多

一嵯峨天皇弘仁五年今至寶永元年八の記に新羅人筑前國博多津につく事を記せり遠き代よりの名なるべ

し唐土の書に霸家臺、八角島なども書り

一 大明第元儀が著す所の武備志の日本考に國に三津あり皆商船の聚る所海に通る江也西海道に坊津屬薩州花旭塔津屬筑前州洞津屬伊勢州三州た坊津を總路とす客船往通に必よる花旭塔津を中津とす地方廣濶して人煙湊集す中國の海商此地に聚らざるはなし洞津を末津とす地方又山城と相近けれども貨物或は備り或はかくたい中津にはあらざる物なしと書く

一 天文二十一年より博多の大明より商船の來る事やみぬ今寶永元年迄百八年なり

一 松ばやしは高倉院安元元年小松内府重盛公黃金三千兩大宋國へ渡し育王山に施入し給ふ其使先博多に下り宋に渡さる博多の者も重盛公の恩を蒙し故公歿後に及んで其恩を報せんとて正月に松ばやしをする事と云々故にはやしごとに松殿や／＼小松殿やとうたふ

一 陳員外郎といふ者唐土臺州の人なり後光嚴院應安二年亂をさせて日本に來り博多に住す上京して將軍義滿公に合藥等を獻ず就中透頂香甚稱美あり京

西の洞院に宅を給ふ其子孫世々透頂香を傳ふ今も西洞院四條上町に其子孫あり相州小田原に家僕をつかはしうらしむ其子孫今に傳はる

一 櫛田社は人王四十六代孝謙天皇の御宇天平寶字元河内國櫛田社を勸請すと云々天御中主尊十八世の孫彥久良伊命の御子大若子命なり垂仁天皇越の國凶賊阿彥といふ者を平らげよとて大若子命に標劍を賜ふ則幡を舉て輒く退治せしかば其功を賞して大幡主命と名を給ふ又祇蘭社の素盞鳴尊なり朱雀院御宇天慶四年藤原純友誅伐初度の追討使小野好古朝臣博多におゐて戰ふ神に祈て此所に山城の國祇蘭の社を勸請す祭禮に作り山六基あり菊池入道寂阿元弘三年探題北條英時と戰んとて百五十騎を卒して三月十三日此社の前を通る時馬一足も進まず寂阿怒て櫛田社に向て矢二筋まで射たり其後吳民部丞久吉といふ博多住人行て見るにかの二筋の矢は獅子狛犬口にくはへてぞ有ける太平記には二丈ばかりの大蛇菊池がかぶらにあたりて死すとも書り九州軍記には右のごとく書て其證あきらかな

り

一綱敷天神又綱輪天神 社僧の寺成就院といふ

菅神左遷の御時此浦に御船いたりつきて陸にあがり給ふに海人共船のともづなをたぐうて去かせ奉りし所なり即綱敷の御影あり元祿十六年二月朔日の曉此邊火災四邊のこらず焼亡すといへども此社ばかり烟の中に在ていさゝかやけず見るもの神威を驚きぬ

一聖福禪寺安國山千光國師榮西明菴の開基なり扶桑最初

禪窟の額は御鳥羽院の震翰なり頼朝卿助力の建立なり大檀越にして佛殿に牌を立事實多き故略之寺産二百石

一承天寺萬松山開山は聖一圓示國師四條院の御時宋國より謝國明といふ者博多に來り仁治三年此寺を立聖一を第一世とす經山の佛鑑禪師ガチン無準此新寺の事を聞て承天禪寺及諸堂の額諸牌等の大字を書て送らる事實多し略之寺産百石

一東長密寺眞言宗南岳山弘法大師南岳和尚と云大師延暦廿三年入唐し大同元年冬十月廿二日博多に歸著し翌四月下旬迄此地に在て此寺を建立す大唐より來る獨站

及佛舍利一粒を當寺に藏らる密教東漸して長く來際に傳らん事を欲して東長密寺と號せらる弘法自作の佛像自筆の畫像心經獨站舍利今に傳れり寺産二百石此外古神社古寺院不可勝計略之

一博多富商ども多き中に神屋宗湛島井宗室ことに風流の茶人にて京大坂にも往來し名あるものなり宗湛天正十四年上京し時の茶の宗匠利休并宗及等に會す秀吉公聞しめし御感ありて翌年正月三日大坂御城にて御茶被下名物共拜見す同年六月秀吉公薩摩征伐の爲下り給ひ御歸路宰府御參詣夫より箱崎御宿陣の間博多の町割を極給ふ奉行は瀧川三郎兵衛長東大藏山崎志摩小西攝津下奉行三十人此時宗湛宗室には十三間半宛屋宅の地を被下永代丁役を除かる今に至て免除す其後文祿元年朝鮮陣の時秀吉公又九州に下り給ふ十月晦日朝宗湛宅に被爲成御茶を獻す此家今にあり御相伴職田有樂一人御給仕小寺休夢一人なり御茶の時休夢如水叔父被召出となり宗湛宗室の家今は衰微しぬれども猶其家相續せり其後の富商の中に大賀宗九といふ者の家息秀で其子孫相續り兩家と成ていづれも家居つれしく國

主も度々來遊し給ひ巡國の上使長崎の御奉行或は松浦大村唐津等の領主參勤の往來此兩大賀が亭にて饗應參會し給ふ事あり一家は代々俗名善兵衛といふいま善兵衛祖父法體して宗恩といふ其嗣父善兵衛法體して如心といふ宗恩如心ともに點茶を好み國主にも茶を獻ず珍器どもあまた所持せる中に若草久琳といふ名ある茶入をも如心求て所持し國主も稱美し給ふ今一家は代々俗名總右衛門是又點茶をこのみ珍器共多く所持す兩大賀ともに光之時より五十人扶持宛賜ふ

一朝鮮歸陣の時石田治部少輔は博多に居す諸大名歸朝して淺野石田にはかたにて對面せしとなり

一博多南北の中程に古は東西に通れる入海有て袖の湊と號すこれ唐船の入し湊なり入海より北を澳の濱といふ今は入海はなくなり其跡のみわづかに残りて横一間ばかりなる溝東西に通せり今片原町に小橋あり湊橋とも冷泉橋とも云則此溝袖の湊の名殘なり澳の濱の北の海づらには石壘長くつらなり東は宮崎たゝらに至り西に今津に及べりこれ上古より異賊の防ぎのために築しと云々

つくしよりのぼらんとてはかたにまかりけるに館のきくのおもしろく侍りけるを見て

後拾遺

取わきて我身に露や置ぬらん

大貳高遠

夫木

花よりさきに先そうつろふ

夫木

船出せしはかたはいつこ對馬には國

基

堀後

えらぬ新羅の山そみえける

兼

堀後

うなはらや博多の沖にかゝりたる

呂

堀河百首

唐土ふねに時つくるなり

賴

堀河百首

唐人は志賀の小島に船出して

俊

拾玉

はかたの沖に時つくるなめ

鎮

拾玉

めつらしや是やはかたの唐の人

慈

拾玉

名にも詞もあらぬ事かな

隆

拾玉

我こひははかたを出る唐ふねの

源

拾玉

ゆたのたゆたひ追風そまつ

隆

拾玉

博多掛町筋より濱邊の方を沖の濱といひ濱口町

菅家御詠

の海邊を北濱といふ

隆

菅家御詠

北濱の西にあるさへおかしきに

菅家御詠

なきさにちかき沖の濱かな

隆

文明十二年九月廿八日博多龍宮寺にて

秋更ぬ松のはかたの沖つ風

宗 祇

袖の湊

續後撰

かけなれてやとる月かな人ゑれと

式子内親王

夜な〜さはく袖の湊に

續古今

千鳥なく袖のみなとをとひこかし 定

家

もろこしふねの夜のねさめに

石堂

一昔唐船博多入津の時石を多く持渡り今石堂橋の邊に石を以て堂を建佛像をも彫て安置す後年頽破して名のみ残れり堂に用たる唐石今寺院市中等にも
のこれり

濡衣

一聖武天皇の御時佐野の近世といふ人筑前の守にて下りしに京より具したる妻國にて死けりさて其國にある女を妻としけるに先の妻の生るむすめを繼母にくみていかにもして此むすめをうしなはんと思ひ海人をかたらひて云此曉來りていふべきやうは京の姫君の此ほど夜な〜我もとへましましつるがつり衣をぬすみておはしつるたべといへとて色々の寶をとらせける海人曉來りてかねてたのみ

しごとくこはたかに云ければ父是を聞て大にいかり行てみればむすめぬれたるきぬを引かつぎてねたり是はむすめのね入たる時に繼母のきせたるなりけり父其たばかれる事をゑらでたちまち娘をころしけるさて次の年むすめ父の夢に見えて二首の歌を詠じける父夢覺てむすめの罪なき事をさとりさては繼母のゑはざなりとて妻をおくりかへじ其身は出家して松浦山に住けり世に松浦上人とぞいひけるそれよりしてなき名おひたるをばぬれぎぬきると云傳へ歌にもよみ侍る其むすめの墓むかしは聖福寺の西川のかたはらに在しを近き世よりうつして今は箱崎松原の西の橋際博多の東石堂口の川の邊なる小池のうちにあり石をゑるしとせり父の夢にむすめのよみし歌二首

ぬきゝする其たはかりのぬれ衣は

なきなき名のためしなりけり

濡衣の袖よりつたふ涙こそ

なき名をなかつためしなりけれ

右の二首夢に見し歌なり

古今八離別

かきくらしことはふらなん青雨に 讀人不知

ぬれ衣きて君をとゝめん

花のもとにてほともなくちることなど中けるつゝに

後撰

春くれば咲てふ事をぬれ衣に 貫 之

きするはかりの花にそ有ける

なき名立ける頃

同十七

よとともに我濡衣となるものは 讀人不知

わふる涙のきするなりけり

崇福寺

一四條院仁治二年に僧湛慧太宰府横岳よこだけに建立す其翌

年聖一國師えんじ圓爾大宋より歸朝博多に著湛慧これを

請じて開堂說法せしむ聖一の師經山の佛禪師無準和尙

り勅使萬年崇福禪寺の扁額を書して聖一に與ふ聖

一持來て此寺にかく則寺號とす委元亭名之國師傳に在山號は横

岳山嵯峨院寛元元年承天寺と同時に官寺と成る西都

法窟の勅額を賜ふ其後圓爾東福寺に住持の時湛慧

より南浦明禪師大應國師を請じて開山とす南浦は經山

虛堂法嗣なり大應此寺に居住三十三年なり京萬壽

寺に移るに及で弟子即山和尚此寺の二世なり天文

十四年七月薩軍岩屋城を攻し時兵火にて此寺も焼

失什物皆烏有となる長政被入國大德寺春屋此寺

再興の事を願はる長政もとより春屋國師に歸依し

參得し給ふ故許容ありて博多東十里松間にうつし

菩提所とし給ふ雲英和尚、江月和尚、江雲和尚、質

林和尚、古外、靈峯、今天庵に至て相續て住持せ

らる寺産三百石宰附如水居士、道卜居士の塔所に

て國主の菩提寺なり

糟屋郡

日本紀繼體天皇記筑紫の君葛子恐座父誅獻

粕屋屯倉求贖死罪とあり

表粕屋

箱崎

舊記不勝計に不戒定惠の箱おさめら

れしより箱崎といふよし印の松神前にあり

一八幡宮創立の始は兩三説あり天平寶字三年といふ

此説相かなへるか其先當國穗波郡大分八幡宮にて

ましけるに太宰少貳眞村朝臣に神託ありてこ

こにあがめ奉る事舊記縁記等くわし異國より我國

をうかいふ事あらば我其敵を防去べし御社の柱の

礎に敵國降伏の字を書て敷べしと神託ありしかば
延喜帝宸筆を以てゑるしてゑかせ給ふ此文字紺紙金泥

に今傳れり度々炎上造營等事多故不レ記之

一 秀吉公天正十五年御社の境内に御宿陣は六月七日より二十餘日御逗留なり其内日々茶會有

六月八日 利休亭にて御茶を獻す

同十三日朝 宗及御茶を獻す

同十四日 箱崎燈籠堂にて利休御茶を獻す

同十八日 箱崎松原海邊の南夷堂の東北にて松

にくさりをかけ雲龍の小釜をつり松

葉をたきて御茶を獻す此處の松今に

六七本残れり釜かけし松もあり此所

にゑるしの石を建たり此所にて和歌

あり

秀吉公

あつき日にこの木のもとに立よれば

波の音する松風そふく

千とせをもたしみをく箱崎の

松にはなさく折にあはゝや

此短尺今に有人々の歌共略之之外短冊七枚あり

同十九日朝 秀吉公御陣所にて神屋宗湛嶋井宗

室に御茶被レ下

同廿五日 赤幡坊にて宗湛御茶を獻す

同廿六日 宗及又御茶を獻す

一 箱松の事社僧家の説には戒定惠の三學の箱を埋れ

し其ゑるしにうゑ給ふと云々一説に神功皇后宇瀨

にて應神帝をうみ給ふ時袍衣を箱に入て埋ませ給

ひゑるしに松をうゑ給ふと云々

一座主坊は大具山五智輪院彌勒寺といふ社領五百八

石餘

一 箱崎濱の鳥居に行道に一字の堂あり往昔龍燈上り

し所といふ依之燈爐堂といふ觀音堂なり

一 八幡宮南の側の密院を赤幡坊と云後醍醐天皇繪旨

などありしに寛文の初赤幡坊一字火災にて寶物と

もに焼失す

一 唐船にうたふ箱崎殿といふは留主といひて八幡宮

の神職の内にて今はかすかなる體なり素卿官人箱

崎住宅の事不分明素卿は鄭人なり來朝の初不

レ知永正六年源義隆將軍素卿をして大明國に遣す

素卿得飛魚眼歸朝す又大永三年義晴將軍の時管

領細川高國大明國人商船を遣す此時も使者素卿た

るよし王代一覽將軍の家譜に見えたり

拾遺六

幾世にかかたり傳ん箱崎の

源重之

後撰九

松のちとせのひとつならねは

そのかみの人はのこらし箱崎の中將尼

松はかりこそ我をゑるらめ

續古今

千早振神代にうへし箱崎の

法印行清

松はひさしきゑるしなりけり

右筑前國箱崎の宮のゑるしの松をよめるとなん

新千載

わすれすよ心つくしにたちかへり頼氏

ふたゝひみてし箱崎の松

前中納言匡房二度帥に成たるよろこび申つかは
すとして

康賢王母

風俗

かくしあらは千とせの數もそひぬらん

二たひみつる箱崎のまつ

新拾遺

跡たれて幾世へぬらん箱崎の

按察使顯朝

ゑるしのまつも神さひにけり

地蔵松原

一小松重盛公菩提のため育王山に砂金をわたし給ふ

其歸船に色々の物をつみ來りし時此地藏もから國

の製作にてわたしけるを此所に安置していまにい

たれり宗像郡田島は一切經等の類ひなり今の地藏

堂は忠之の時建立なり

たゝ良濱

箱崎名島の間の遠干潟を云名所にあらす

一尊氏菊池合戰此所なり又永祿の比大友宗隣毛利元

就多々良合戰此所なり

一大内義隆の先祖琳聖太子此たゝら濱より上り給ふ

と西國太平記に有はあやまりなり周防のたゝら濱

なり方角後に記べし

幽齋

いにしへはこゝにゐるしの跡とめて

今もふみみるたゝら濱かな

皆打濱

皆打濱

一松崎の東南なり松崎より濱男に越るみねを皆打の

嶺といふ皇后三韓よりかへらせ給ふ時姪濱伯の濱

よりあがり給ひ御船は名島につきぬ御留主にあり

し人々來りむかへて新羅の合戰の事を尋しに異賊をば皆打ぬとこたへられしより皆打濱といふ皆打の嶺も同じ

名島

往昔は黒津浦と云皇后三韓より御歸朝の時諸神

御名を改られ夫より名島と云傳るよし

二此所は小早川隆景居城其前立花但馬守鑑載が城なり慶長年中に此城を引崩す

一朝鮮凱旋の時淺野彈正は名島に居す

一此所に辨財天おはしますなり

一帆柱石は神功皇后三韓よりかへらせ給ひ御船此所につなぎ帆柱こゝに捨給ふと云々其帆柱石と成て今にあり年を経て段々おれたりといへども其形あざやかにして柱の本末金物のかたちなど猶のこれり

賀思布江

奈田濱の内濟慶崎の入江とも云不分明又香椎の内なりとも云

一奈田の濟度崎の戌亥三町ほど沖に瀬あり鹽屋といふ志賀の海士の和布刈鹽焼など讀たるは此所と云

往昔は材木も有たるよし今は波に崩れて跡形もなしされども古木の樹岩となり鹽屋瀬の中にあり潮干に見ゆる

一志賀大岳の前の小島を葉島といふ今は是を虎島といふ大竹山に附てとらといふ秀句のよいいへり

一志賀の島海の中道の間續て島にあらずされども風波により大竹山と志賀の間きれて大船も通ふ事あり此時はかならず諸國飢饉するなり

萬かしふえに田鶴なきわたるまかの浦に

おきつゑら波立しくらしも

志賀島

一志賀島延喜式神名帳に粕屋郡志加海神社三座とあり今は那珂郡に屬す那多濱よりつゞきて粕屋たるべき所なるにいつの比より那珂郡に屬せしにや此御神も住吉と同時檣原にて他生の神にして底津少童命、中津少童命、表津少童命の三神なり底津少童は今の志加本社也中殿底津少童命右殿神功皇后左殿勝馬明神なり中津少童は志賀島の西北勝馬といふ所の濱中津明神と云社あり是也表津少童命は中津明神社より北一町半許に勝馬明神の社有これな

り此三神は阿曇連等あつめむらじかいつきまつる神なりと日本紀神代卷に記り又舊事記にも阿曇連等齋き祠る筑紫斯香神也とかけり阿曇又安曇とかけり古綿津見神之子宇都志曰金拆命の子孫也と記せり姓氏錄には阿曇連は海神綿積豐玉彥神の子穗高見命の後也とあり今志加神官の者も皆阿曇氏といふ神后新羅をうち給ふ時此三神御船の花を祭り給ふさるに依て御凱旋の後阿曇連をして鎮め祭り給ふと云々

一社家船師の説に此島船掛する濱より先のはなを磯良崎といふ三韓御退治の時吹上の濱にて神樂を奏し志賀明神をまねがせ給ひしに龜に乗て此所より出現し給へば磯良崎と名附るよし其時の龜石と成たるとて今明神の前にあり龜石の形あざやかなり志賀明神は安曇磯良丸と申奉り海底に住給ふ御神のよし神徳不可勝計恐れあれば不能記日本の船に丸といふ字を附る事磯良丸の一字をかたどり夫より云傳るよし當社の縁起にあり又丸といふ事は人數をまるめて入置を丸と云城を本丸二の丸などいふがごとしされば船も人數をまるめて入置は一城に比して何丸か丸といふさもあるべし然共

我つらの船客はたゞ明神の縁起をたつとぶなりと云々

社家の説に志賀明神を阿曇磯良丸と號し海中に久しく住て紺螺花及諸藻蟲など顔にも身にもまとひて有しを神功神樂を奏して招ぎ給ふ覆面をたれて出給ふといふ事太平記にゐるし又箱崎八幡の縁起等にもあり右日本紀等の説を考ればいぶかしき事なりされども又此説もひたすらに捨てべからず神靈の化現凡慮のはかるべからざる事多し皇后の招ぎに依てみかたちを現し我はこれ阿曇磯良丸なりとのたまひ三韓征伐のために冥助ありけるなるべし

一釋日本紀に筑前風土記を引て皇后新羅に幸し給ふ時御船夜來て粕屋郡資珂島に泊り給ふ大濱小濱をつかはして火を求め給ふ小濱がことばに此島は打昇濱なげの濱と云ふ近く相連り殆同地といふべしこれに依て近島といへり

一むかしは末社三百七十五區あり亂世顛破し永享十一年大内持世再興百二十社建其後又兵亂にかゝりわづかに今五社殘れり長政の時本社改造らる

一社僧坊は金剛山吉祥寺禪宗にて承天寺末寺なり聖
一國師始天台宗の時此地に來り法を説れしに社人
等歸依し時の別當坂本知家が男子を國師の弟子と
し宮司坊宗岳と號す此由緒にて後聖一禪宗となら
れても禪宗と成て于_レ今至れり社領五十石

一文珠堂社の西の側にありいにしへ經山寺より文珠
の木像及び五臺山の繪圖を此島に渡し堂を作て安
置す又大藏經をも渡しけるが文祿二年十一月四日
火災文珠の像半燒しを重て造りつぎてあり藏經燒
殘りて二千餘卷あり此文珠の事東海瓊玉集に載た
り

一志賀大明神御座山を勝山といふ三韓に附勝給ひて
祝し給ふ名なり勝山より西の方の山を三笠山衣笠
山といふ神功皇后御歸朝の時志賀、春日、鹿島三社
と仰がるべきとの勅にまかせしかのまに二山を
うつされしとなり

三笠山さしてやかよふまかの島 幽 齋

神のちかひのやたてなければ

一志賀明神に參石橋を龍天の橋と云むかし此谷川よ
り龍天上したり依_レ之名附るよし

一樓門の前の小橋を育民の橋といふ往昔諸國皇魃に
て田畠不_レ殘やけかれんとす筑紫の諸民志賀明神
に雨を祈る俄大雨降て三日小止もなし此所山上な
りしかど山水出て小川流るゝ夫より橋をかけて民
をはぐくみ給ふまるとていくみの橋と云傳るよ
し

一明神の御座勝山の谷の竹は三韓御退治の時の御旗
竿なり御歸朝の時此谷にさし給へば翌年の夏筭生
じて竹林と成る夫より武士及舟人は拜受して印
竿とす長生竹と云

一磯良崎の白濱をかなの濱といふ諸神御歸朝の時此
濱に至て諸願叶へりとのたまふ夫より叶濱といひ
傳るよし

一叶濱の先のはなを首切といふ諸神三韓へ御發船の
刻塵倫鬼化生じて寇をなす明神則時に退治有て此
所にまゐるしを埋給ふより名附るよし

萬葉三

まかのあまはめかり鹽やきいとまなみ

つけのをくしをとりも見なくに

萬葉集に云石川朝臣君子號曰二小郎子

石川少郎子

同四

草枕旅行君をうつくしみ

太宰大監大伴宿禰百代

たくひてそこし志賀の濱邊を

作者不知

同七

志賀のあまの鹽やくけふり風をいたみ

たちはのほらて山にたなひく

同七

千早ふるかねのみさを過れとも

我はわすれす志賀のすめ神

山上憶良

同十六

玄かの山いたくなさりそあらをらか

よすかの山と見つゝ歌はん

仙覺抄云よすかとはかた見なり

同十五

玄かのうらにいさりする蜚あけくれは

うらま漕らしかちをとの聞ゆ

堀川後百首

から人の玄かのせしまに船出して 俊

頼

博多の沖にときつくるなり

一 志賀島の浦より南に當て早良郡背振山見ゆる國中

の高山なり金龍山と號すと傳通記に見えたり又白

宇津山ともいふよし書寫山御廟講私記に出たり山

上より四方をのぞむに秋の頃晴明なる時は朝鮮國

見ゆ春の比もくもらざる日は壹岐對馬まで能見ゆ
對馬は是より百里あり山より北は筑前まのあたり
にみゆ南は肥前筑後眼下にあり豊前の彦山當國竈
門山古所山など皆高しといへども此上より見れば
猶眼下にあり山上に辨財天堂一字ありいにしへは
背振山東門寺とて僧坊三百區在しとかや今は一坊
ものこらず其故は背振山の僧徒と西油山天福寺の
僧徒爭論の事ありて西油山におしよせて放火しけ
る其仇を報せんとして又東門寺におしよせて悉く燒
亡す其後九州亂世の時ゆる東門寺も天福寺も再興
の沙汰に不_レ及其に廢亡の地となれり性空上人日
向の霧島島より筑前背振山にうつり住居し其後播
州書寫山にうつり給ふ事朝野群載第二卷花山法皇
の書給ふ性空上人傳にあり又三代實錄元亨釋書に
も同じく出又花山法皇書寫山に登り給ひし時巨勢
廣貴_{ひろたか}に上人の影像を寫させ具平親王に其贊を作ら
せ行成大納言に書しめ給ひしにも霧島より筑前背
振にうつり其後書寫山に住せしよし見えたり其外
那珂郡早良郡等にある古き文書どもにも皆筑前早
良郡背振山と記せるもの不可_レ勝計に後代肥前國

神崎郡に此辨財天を勸請して中宮下宮と稱し其中宮を靈山寺といふこゝにも辨財天堂あり下宮には辨財天堂なし中宮下宮ある故に上宮と肥前國には稱するとなり古は本宮一所なる故上宮の名なし肥前に中宮を立し故其勸請の地をもえめて名づけて背振山と肥前國にてはとなへ來れりとかや背振山の筑前なる事は右に記す古書共三代實錄、朝野群載、元亨釋書にあるひは勅書國史博識尊貴の作にして聊うたがひなし只溪風拾葉集と檜垣の嫗集にのみ肥前とえるせり溪風拾葉は桑門の作檜垣嫗は遊女のかな書の書なりかの勅書國史等の正書にたぐらふべからず然共故有て元祿六年十月十二日より肥前國佐賀領に屬す

廣浦 かづきの海士住す

一神功皇后吹上の濱にして西の方を詠給ひて狹隘のうれへなしと宣ふ夫より志賀邊を廣浦ともいひたるよし此後此所に人家立しにより廣浦と名附るよしかつぎの蜚住ゆゑあま浦といへり此所に靈佛の不動あり此不動は弘法大師大唐にて一刀三禮の作なり歸朝の時此所醫王院といふ寺に安置し給ひ夫

より紀州高野山を開かれし時此不動の尊像を高野山に移し奉り今高野の南院の生不動とあがむとかや

御崎 みさき

一此所は志賀の御膝本とて甲瀬烏帽子瀬なといふ瀬多して海路第一の難所なり甲瀬えぼし瀬といふは三韓より御歸朝の時此瀬に甲烏帽子を納め給ひ龍神を祭らせ給ひければ名附るよし

一御膝本の白濱を下馬が濱といふ右御歸朝の時此所より御馬をおろさせ給へば名附るよし

一御崎より東の瀬の内を御手洗といふ諸神御祓し給ふ所といふ

一勝馬村とて御崎の地に人家あり下馬が濱よりおろさせ給ふ神馬此所にはなち給ふ夫より勝馬と名附るよし志賀明神の御垂跡勝山に同じ事なり

一大浦田沼といふ名所志賀邊に有と歌枕にもあり名所にあらず人の名なり

一志賀明神の北浦に十郎瀬虎こ瀬などいふ高瀬あり此磯を大磯といふに依ての秀句にや

一志賀の神殿に奉納の鹿の角積重し事其數をえらす

是を諸人神納する事は三韓御退治の時糧つきて軍士飢に及ぶ事ありしに山を狩して鹿をころし飢を助給ふにより此恩を報じ給はんとの御誓にて鹿の角までも憐愍し給ふとなり故に信心の輩是を神納す然るに鹿をころしても角を神納する者あり大きにあやまりなり依_レ之志賀の敷地の者鹿を食事ならず若不_レ知して食すれば忽に肌はれて身をなやむ事眼前なり知て食すれば一日を過さず死す誠に船人ことにつゝしむべし

海の中道

志賀神詠と云々

波あらし鹽干の松のかつらかた

島よりつゝく海の中道

夫木

船ならて右や左の波きけは

潮のみちひの海の中道

名にしあふたつの都の跡留て

幽 齋

波を分行うみの中道

筑紫記行

波風をおさめて海のなかはまて

宗 祇

みちある國や又も來てみん

一海の中道の事筑前名寄等にも宗像郡桂村と梅津の間の事なるべし一説に此志賀島と那太の白砂山を

いふといへども歌心になはす

秋の夜の玄ほひの月のかつらかた

山まてつゝく海の中道

と九條内大臣の詠を見れば山まてつゝくといひがたしとして宗像の方より所あるべきよし記せれど志賀にも勝浦といふ所あり只今干潟なしとて古の事を論じがたし古地の變易桑田海となるためし多し宗像の梅津とかつら村の間はやうやく十町ばかりの所なり那太の白砂は三里つゝきたる白洲世にたぐひなき景地にして唐土の書にも白砂土と稱して繪にもうつせる所也山につゝくとよめる景氣こそことに歌のさまもゆほひかなれ荒津の崎よりも又は志賀島の内外より見るも此白洲東のかた香椎立花のいたいきにつゝきて見わたされたる佳景繪にかくとも筆に及ぶべからず凡歌人の詠眺望のありさまを詠するもの皆かくのごとし何ぞ天地のつづきつゝいかぬを論するにたらむや

裏粕屋

香椎

海邊より五丁程山の方に宮居有

一此宮は神功皇后をまつり奉るなり敵國降伏の靈神代々の帝天照太神につゞきては此神を崇敬し給ふ事共古記不可勝計略之九州亂世の時衰微に及びり天和の年光之又新に神田を寄附し給ひ濱の鳥居を建らる

一神木の杉をあや杉といふよのつねの杉に異なり老樹雲をさゝふるがごとし兵亂の時度々やけしかども灰の中よりたちまち若木生出てほどなく大木となれりと云々

一香椎の前海邊の人家を濱男と云濱男大明神御座海神なり皇后此濱にて天神地祇を祈り給ふ時神樂を奏し給へば神樂男と現じ給ふ故に濱男と名附るよし

一濱男の海邊を香椎潟香椎の渡りなどいふ此所也

一濱男の東北一町餘大道の側に冑塚かぶらうかといふあり皇后新羅に軍立し給ふ時こゝにて始めて御かぶとをめされたる所のよし鎧坂は爰より新宮のみなとへ行道なり皇后のよろひを召されし所なり馘塚きりづかも濱男の東二町許にあり異敵の切耳を納給ひし所となり此塚のある田地を京田といへり粕屋の郡原田前田な

どみな舊記にまゐるせる所なり

一御島といふ岩海中にあり濱男の乾の方八九丁岩島なりむかしは其上に御島大明神社あり後代石をとりにし故崩れて今は社もなく石もすくなくして汐満たる時はわつかに見ゆるのみなり日本紀后皇記に皇后檀目浦たんめうに詣で髪をとき海にのぞみてのたまはく吾れ神祇の教をうけ皇祖の靈をかうぶりてみづから西を征せんと欲すこゝを以て今かうべを海水にそゝぐ若験あらば髪おのづからわかれて雨となれとて即海に入てすゝぎ給ふ御ぐし自わかれぬすなはち髻とし給ふと云々則此御島にての事なり新古

續古今

沖津風さむく吹らし香椎潟

爲家

同

船出するおきつ鹽さひ白妙の

家持

香椎のわたり波たかくみゆ

安部島

あえ島とも言ふ今藍の島となふ

一一説に安部島は大島をいふ安部宗任大島にながさ

れし仔細大島の下にゑるす依之大島を安部の島
ともいふと云々さもあるべき説なれども其先日本
紀第九卷に筑前國安部島の海人の事みえたりしか
れば安部島の宗任以前より名あり藍の島安部の島
をあやまりとなへ来るなるべし

一韓使來朝の時ことに國主より此所において饗接あ
り其備はなほだ盛美をきはむ

萬葉

玉勝間あへ島山のゆふつゆに

作者不詳

旅ねはゑすやななき此夜を

續古

あへしまの山の岩かねかたしきて

さぬる今夜の月のさやけさ

名歌

都おもふ袖もかた／＼ほしあへぬ通

具

夫木

香椎漏夕きりかくれこきくれば

小侍従

あへのしまわにちとりしはなく

一同所東のはなに泪島あり中うがち通て牛のはな
ぐりに似たり依之俗にはなぐり島と言しかれば
筑前名所角島追戸方角不_レ知もしくは此所なるべ
きにや

萬葉

津の島のせ戸のわかめは人のとも

あれたりしかと我ともは下略

一泪島のありさま奇異の所なり方なる程を重ねなら
べたる如き岩高く海の上十間餘めぐり六十間許洞
中高さ五間許横二間許小舟にのりて通行す阿南の
島の東の海濱にも岩窟あり其中に舟を入る船の入
所四五間許其先は窟の内うつくしき岩を敷る地な
り是又奇異の地なり右に記す芥屋の大門に相似た
る岩のありさまなり

一相島より己午に當て御笠郡竈門山表粕屋郡若杉山

裏粕屋郡立花山見ゆるいづれも古城山也

一竈門山は當國の中央に在て國土を鎮め守り給ふ神

社なり玉依姫をまつる所なり石川のかまどのごと

きあり益影の井とて名水あり依之山の名とすと

云々應神帝宇瀨の宮にて御誕生の時も此水を汲て

御うぶ湯とし給ふと云々天武天皇御宇心蓮上人始

而此山に佛堂を建寶中寺と號す法相宗なり佛頂山

東尾寺宰府の方_う知山寺も一山なり三百七十坊と

云々文武天皇御宇役行者登山して七の岩屋を開か

る皆神靈の窟宅する所也仁明、文德、清和、陽成代

々の帝勅使奉幣使を下し給ふ事國史に多く見えた

り傳教大師弘法大師いづれも此山にのぼり行ひ給ふ跡あり神領五十石

一此山古城なり元は原田の氏族高橋光種筑後國高橋に居城して高橋氏と稱す其後大友家に屬す三河守長種死して嗣なし家臣ども大友にこひ申ければ大友義鑑の計ひにて其一族一萬田左京大夫親敦の二男右馬助を以て高橋家をつがしめ三河守鑑種と名乗らせ高橋に居城す鑑種寶滿の要害を見立て竈門山の城を築てうつる岩屋を以て邑城とす義鑑の子義鎮（後）に宗に對し鑑種恨をふくむ事出來て永祿十年毛利家に心を通ず大友より臼杵鑑速（かたはち）、吉弘鑑理を大將としてさしむけらる即時に臼杵か一手にて岩屋を責落し寶滿を遠卷して月日を送る鑑種終に沒落し城を明わたす其後吉弘左近大夫鑑理の二男彌七郎鎮理を高橋主膳兵衛鎮種と改て寶滿岩屋兩城の主とし守らせらる是則法體して紹運なり其後大友家衰微に及びしかども紹運と立花の道雪兩人二心なく大友にしたがひ紹運は天正十四年七月薩摩勢と戰て小勢の籠城大軍に敵しがたく同七月二十七日岩屋の城に於て自害せらる此時兩城共放火

して再興なし一竈門山は名所なり

六 都より西に有てふかまと山

同 けふり絶せぬ戀もするかな

世の中をなけくにくゆるかまと山人 丸

晴ぬ思ひを何にそむらん

道信法師

現六 散たひにもえこかれてもおしきかな

かまと山なるひ櫻のはな

名寄 かまと山また夜をこめて降つもる 匡 房

萬長歌 峯の白雪明てこそみめ

降雪のとけんこもなくつもりつゝかまとの山の山守は行衛もみえぬみこもりのつま木こりたく朝夕のけふりのみこそ立にけれ

つくしへまかりにける時にかまと山のもとに宿りて侍けるに道つらの木にふるゝ書附て侍り

拾遺 春はもえ秋はこかるゝかまと山 元 輔

又書附ける かすみもきりも烟とそ見る

筑前のかみにて國に侍りけるに日のいたくてりければ雨の祈にかまと山の神に鏡を奉るとてそ

えたり

藤原經衡

新續古今

雨ふれといひるゑるしのみえたらは

水鏡ともおもふへきかな

一若杉山は山上木祖權現の社あり神功皇后三韓におもむき給ふ時此御神にも御祈あり御凱旋ののちその報賽に香椎の杉を分て此上にうゑさせ給ふ綾杉谷といふ所今にあり故に分杉と書り今訛て若杉と書なり香椎より分ちうゑたる若木なれば若の字も亦可_レ用此山の古城は高尊居といふ分杉山の半腹なり周防の大内氏の臣杉豊後守興行取立て居住し同重並連並等相續てかけ持にせり後秋月より攻る天正十四年岩屋沒落の後筑後住人星野中務少輔は父子を立花のおさへとして籠置けるに立花左近將監宗茂有時に攻落し星野を討取此時城郭も放火して焼亡す

一立花山 伊弉諾尊たちばなの小戸のあわきが原にてみそぎはらひし給ふとある立花則此山なるよし宗砌法師が抄に記せり海上よりの眺望も世のつねの山にあらず山のすがたのびらかに翠をたゝめり

麓に傳教大師入唐歸朝の時はじめに開基し給ふ獨鈷寺の古跡藥師堂あり傳教大唐より歸朝あらんとて此獨鈷と壇鏡とを日本へ向てなげわたし給ひ此山に飛落たり其地に伽藍を建立し給ふと云々獨鈷壇鏡今に傳て有

一此山も古城なり大友元祖左近將監能直より六代の後胤大友左近將監貞載始而此山城を築しより七代立花但馬守鑑載に至るまで在城す永祿八年鑑載故有て大友に叛しければ大友より戸次丹後守鑑進道_進を討手として被_ニ差越_一攻戰ふ鑑載打まけて落城し自殺す鑑連も其祖は同じく大友能直より出たれば鑑連を立花の城主として筑前の守護職たり道雪男子なきゆゑ高橋紹運の長男千熊丸をこひ養て嗣子とせらるこれ左近將監宗茂也_{初統虎後法名立齊なり}道雪は天正十三年九月十一日筑後高良山の麓小野村陣中に病死せらる此山の養孝院梅岳寺に葬る其院に今あり石塔もあり翌年七月廿七日岩屋落城紹運自殺の後薩摩秋月の勢直に立花におしよせ二十日に及び是をかこむといへども固く守て落城せず薩摩勢引退くに及で宗茂筑後川まで追討し其上高取居城

を即時に攻落し星野中務少輔を討取る秀吉公宗茂の事を甚賞し給ひて九州の一物なりと黒田如水への御書に被_レ仰越_一たるも此時の働なり此後宗茂は柳川にうつられ筑前國は小早川隆景に賜り名島の城を築て居住し立花には家臣浦兵部宗勝を入置る慶長五年長政の入國以後立花の城は破りくつさる

宗像郡

日本紀に胸肩と書古事記には宗形と書筑前風土記には宗像と書り其心相同なり事長き故略_レ之

蓑生浦みぢうら

福岡と新宮の間の浦を云宗祇が指南抄に新宮と云所より北と有順和名抄に宗像郡蓑生の門ありと云々今西郷村に蓑生と云枝村あり昔は此邊を

すべてみのふの浦といひけるにや

後拾遺

うかりける身のふの浦のうつせ貝 馬 内侍

むなしき名のみ立は聞きや

懷中

身のふ濱なにかは波のよるをまつ

ひるこそ貝の色も見えけれ

櫻貝身のうき濱に寄にこそ

筑紫組行

けふそゑる此うら波のうつせ貝 宗 祇

身のうしとてやかくもなるらん

津屋崎

一 入湊なり船掛する所を渡り村といふ湊口の高山を楯崎山といふ神功皇后三韓御退治の時楯の板此山より出たりと云又は御歸朝の時此所に治られしともいふ依_レ之名附るよし楯崎の薬師とて靈現あらたなる薬師おはします是により薬師岳ともいふ

一 渡村を打越て北の濱邊に戀の浦と云所あり五色の蔀石多き所なり

一 渡村より一里東南宮地岳とて古城山あり宗像の臣小樋對馬守秀盛居城

一 渡村北沖のはなの小島を鼓石といふ小島のいたゝきに五尺に八尺ほとの大石ありつゝみに似たるとて名附るよし寛文のはじめ堺のもの夢想に得て益取たるよし今は鼓石なしいぶかしき事なり

有千瀨あち

津屋崎の東宮地村の近所也俗に荒自村と云瀨はかつらかたに續く

萬

ありちかた有なくさめてゆかめとも

家なるいもやいふかしみせん

名兒山なこ

荒自より田島越る山なりいにしへの海道なり名

所なり

萬長歌

おほなむちすくなひこの神こそはなつけそめ

けめ名にのみを名兒山といひてわか戀のちへの

ひとへもなぐさまなくに

勝浦かつら

一 かつら岳と云は津屋崎より二里東の山なり宮地岳

對馬見山かつら岳と三つならぶ神功皇后此に上り

給ひ勝浦と宣ふより名附るよし潟は津屋崎内より

みゆる鹽濱なり

勝島

一 安部宗任が孫安倍義宗といふもの山鹿兵藤次秀遠

と合戦の時此島を便として義宗うち勝ければ勝島

と名附るよし大島にて云傳る

一 勝島には宗像氏貞の端城ありしよし

神湊かづのみなと

一 かうの湊の山を四つ塚といふ此はなを草崎と云古

城山也宗像十六代氏俊の家臣占部甲斐守家光掛持
なり甲斐守は鐘崎の上八村に居住したるよし同壹
岐守同右馬助同九郎右衛門代々掛持也

江口

一 江口川の十町程上を五月濱といふ宗像第一宮の記
録に第一宮は正一位也推古十三年六月朔日東洞院
但馬前司隆房太政大臣正一位奉_レ敕五月濱にて祭
_レ之と有_レ之

一 宗像記に曰五月五日宗像人家々の嫡子花やかに
出立て五月濱に出で馬をのる是を五月兒といふ家
をつぐ嫡子なければ庶子此日かけ馬をのりて越度
なくのり仕廻へば宗領の座に直るこれ古來の風俗
也と云々

宗像山

赤間驛の上羅が岳を云

一 赤間は赤馬正宗なり神武帝日向より東征し岡の湊
に來り給ふ時一神ありて赤馬に乘來り此里民に下
知せりこれにより赤馬といふと云々

一 羅が岳古城は入宮司六十五代氏俊住す氏貞は初當
國に下りし時孔大寺くたじの白山の城に十二年居住し永

祿五年白山を去て此城にうつる蔦が嶽の名を改て嶽山といふ田島祭禮の時は本社のうしろ御内といふ宅に留り神事をつとむ

一田島宮は宗像神社三座也田心姫たこり、湍津姫たかつ、市杵島姫いちきしまなり田島大島澳の島三所にまづまりおはします田島の宮司は田島の中殿の神を第一田心姫といひて日本紀の説により澳の島の宮司は舊事紀古事紀宗像氏俊が縁起に依て澳島の中殿を第一田心姫といふおのゝ證文故實ありて決しがたし三所ともに三神を祭る其主とする神を中座とし二神を客として左右とす此説々事長ければ不_レ記田島の宮を邊津宮といひ大島を中津宮といひ奥の島を澳津宮といふ

一宗像大宮司は醍醐帝延喜十四年甲戌清氏勅をうけて大宮司となり宗像に下りしより天正十三年乙酉氏貞卒するに至るまで大宮司七十九世年數凡六百七十三年にしし家亡ぬと云々名寄

つくしなるむなかた山の西にすむ 讀人不知
おきなと君と我をこそいへ

筑紫紀行

人のよの末まで守れ千早振

宗 祇

鐘崎

神のみおやのことのはの道

一鐘崎のうへの高山は湯河山といふ往昔此山の岸に温湯ありしよし是より名附るともいへり又同郡の内高倉の權現の影向ありし所とて影向山ともいふ一古しへ大唐より鐘を積日本に渡りしに此沖にて船をくつがへし鐘も沈みしとなり夫より名附て鐘の御崎といふ名所なり沈し時代不_レ知

一宗像七十三代氏佐明應七年春此鐘を取揚て第一宮の宮前に可_ニ奉掛_一とて三千端の布を赤白黒の三宮に染ませて綱にねり合大船を數艘うかべて引揚むとせし事五度龍神おしみ給ふにや終に取あぐる事を不得後の夏には鐘南にかたぶきしとなり不思議や此鐘の内より翁の面一つなつそりといふ面一つ紺紙金泥の法華經八卷大龜の甲に乗せて浮び出たり氏佐得_レ之翁しきはんの面を第一宮に奉納しなつそりの面と法華經は織幡しきはんの宮に納られしに其夜織幡山に大波うち上てなつそり法華經共に海中に入しと也鐘崎の前は風波常のごとし織幡山に浪の上たりし事は峯の木の枝に藻屑の掛りけるにぞ知れり翁

の面は今も第一宮の寶物となり雨乞などの時は此面を出すなり

一元和四年黒田甲斐守長政地の島の波戸築せられし序かつきの猿四人撰て水底に入れめ鐘の様子を見せ給ふに鐘の内甚廣く鐘は北面にありて南にかたぶくと申上る長政聞給ひさらば取あげらるべきとの儀にて大平駄船四艘に轆轤を仕掛鐘の龍頭に綱を附沖よりは百艘餘の小船より引せ陸よりは三千人にて引あげけれどもあがらず此時龍頭引かきけるともいふ然所に大風頻に吹て大船小船浪に漂事急なり漸波を凌ぎ地の島に漕附る是より鐘上は止ぬ夫より三日を経て鐘崎の獵船十九艘船夫五十七人乗鐘崎より五里北沖に釣に出る又神の湊波津の浦芳屋山^が鹿柏原などいふ浦々よりも鐘崎船同前に釣に出る風波常のごとくにして殘五ヶ浦の獵船は歸帆すれども鐘崎の獵船は一艘もかへらず船をくつがへし五十七人共に死す骸は不殘鐘崎の深濱といふ所に打寄けるに一人も面の皮のむげざるはなし誠に此鐘は名鐘にて龍神の惜み給ふと古より言傳へ侍れば其とがめにやと今の世に至まで不

思議の事にいひ侍る鐘の内を見たる海士四人の内二人は寛文の末まで鐘崎に存命ゐて語けるを聞て書付侍るものなり

一右の鐘は廻り一丈八尺指渡九尺といふ詳には知が

たし

萬 千早振かねの御崎を過れとも 讀人不知

新六 我はわすれす志賀のすめ神

白波の岩うつをとやひくらん 衣笠内大臣

家集 かねの御崎のあかつきの空

音にきくかねの御崎はつきもせず 俊 頼

大名寄 なるこゑたゝく渡りなりけり

聞明すかねの御崎のうきまくら 正三位義重

夢路も波にいく夜へたてぬ

暮渡るかねの御崎を行ふねに 幽 齋

我はわすれすふる郷の夢

つくしなる鐘の御崎に浪立は

人のつらさぞ思ひやらるゝ

佐屋形山

一佐屋形は則織蟠山なり延喜式神名帳に筑前國宗像

郡織幡神社一座とあり筑前十九神の一也武内大臣の神靈を祭るよし云傳たり文德實錄三代實錄等の國史に此神に位階を朝廷より贈給ひし事多し此山鐘崎の民家と去事五町ばかり長の方にあり山の形丸くして何方より向ても背面なし林木茂れり海上より見れば其形屋形に似たり故に佐屋形山といふ三方は海一方は瀉地につゞく山の形うるはしくあたかも玉の盤上にあるがごとし武内宿禰此山の佳境を愛し我死せば此山に神靈は必ずすんずべしとのたまふ武内臣は景行天皇御時より六代の帝につかへ政を行ひ其壽三百三十歳仁德天皇の御時薨せらる代々勳功莫大の良臣なり神功皇后に玄たがつて新羅を討給へり

一 佐屋形山には宗像家臣黒川刑部大輔隆尙居城す白山の城といふ山田村といふの内なり

後拾遺

あなしふく迫戸の潮あひに船出して

右大辨通俊

夫木

夜ふねこく迫戸の鹽干をよ所にみて 中務

月を越るさやかたの山

あなし吹きやかた山に雲はれて

月影たゝむ迫戸の玄ら波

地の島

鐘崎と此島の間潮干にはいと近し佐屋形山をよめる歌に迫戸の潮干といふは此間の事なり

一 此島は往昔船を繫に便なかりしに慶長年中如水波戸をきづかせたまふ其後破損せしを元和四年三月十一日長政又百餘間の波戸を築給ひ客船の助と成事不_レ可_二勝計_一誠に廣大の慈悲とは是なるべしと船人は言に不_レ及渡海の旅客までよろこばざるはなし此所すぐれて波荒き所故毎年波戸の修覆絶る事なし

大島

名所なり此島は安倍宗任配所なり依て安部島山といふとも云

一大島は右宗像山の下に記すごとく此島にも三神をまつる湍津姫を主神として田心姫、市杵島姫を客神とす是日本紀にいはゆる中津宮なり

一中津宮の下にながるゝ川を天の川といふ川をへだて、牽牛織女の社ありいにしへ二星を祭りける所

也と云々
古今

秋風の吹にし日より久方の

天の川原にたぬ日はなし

此歌の抄に飛鳥井榮雅曰筑紫國大島に星の宮として北は彥星をいはひ南はたなばたをあがむ二社の間に川あり天河となづく女を得んとおもへば織女の宮にこもり男を得んとおもへば彥星の宮にこもり七月朔日より七日の夜半にいたり河中に棚をゆひてたらぬ上中下三つを水を入れてならべてたらぬ上中下に男の名を書て祭をしてたらぬにうつりたるにゑたがひて其男女をさだむるなり此祭をせんとて天河原にたぬ日はなしといふなりと云々是石女髓腦ききいなりの説も又同じ

一大島に宗任流され來し時は島の西のはなに船著て上りけるとなり宗任守本尊の毘沙門天を此所に暫籠置しより今爰を毘沙門會といふ

一宗任は今の安昌院といふ禪院より十町程奥の山中に居城す此所は四方に峰有て浦風をさゆるにより廣崎の城といふ又宗任住所なれば安部殿御所とも云かくて宗任に三子あり嫡子は松浦に渡り二男は

薩州に至る三男は大島に有て近郷を領知して宗像にもゑたがはず三十代住ける安部伊豆守氏任といふもの宗像一家と成勢あり宗像恐れて亡さんとす其時島を去て他郷に移る其後宗像より氏任が甥を取立て大島へ渡し主とす其孫安部掃部といふもの又宗像に敵し戦死す其末葉は農となりて今に大島にあり或は福岡につかへ或精屋郡薦野こゝろのにもありかの松浦に渡りしは松浦黨の祖なり

一御所山の事は永祿二年宗像氏貞大友に追立られ同國赤間の蘆が岳より一族を引つれ大島に籠城す此時勝島草崎の城取立しと也毛利元就此事を聞て中國より大島に渡り氏貞に對面す氏貞一かたならぬうれしさに俄に假屋を立て元就をもてなす依之假屋の跡を御所と名附たるとなり宗像の記に有之此時の功なる事を忘れざるにや天正の比筑前立花の城に元就より捨ころしに入置たる桂左衛門尉元重、坂新五左衛門、浦兵部重宗勝三人の大將を宗像助て中國に歸せしとなり

一同島に往昔妙任といふ尼あり宗任七世の孫といふ信心深く客船の便にとて波戸を築成就せずして死

す大島に船掛する所の鹽干にあらはるゝ比丘尼波戸是なり

一同所の禪院東寧山安昌院といふは安部氏代々の寺なり妙任尼の庵室の跡を寺とす宗任常に東國をまいたひて此寺をも東寧山と名附本尊は藥師如來聖德太子の御作也

一海雲山久昌院は昔眞言宗今は曹洞の禪宗なり田島の育王院の末寺なり

一尺島の海士は九州かつきの蜚の初なり宗任流來りし時東國より附隨ふ家臣板屋、萬澤、豐福といふ三士初讃州に流されし時海士野の里の海士乙女を召遣けるを伴ひ來り其業を浦人におしへけるとなり故に海士の持つあわひかねといふものに大の字を銘に切事大島の大的字なり九州海士の元祖たる故なりと云々

一元徳二年九月征西將軍筑紫へ御下の時伊豫の河野、能島、來島をかたらひて伊豫を掛ぬけ安藝國內の海にて勢揃なり都合三千人兵船五百艘に乗て筑前に下り將軍の御身方申せし時此大島に船かゝり是より太宰府に通達致せしといふ

一津和背といふ所に寛永廿年五月十二日異國船一艘寄り來り船中の人々ばらく陸に揚り居けるを此島の社人一の甲斐四郎左衛門が弟仁兵衛見つけて近づき尋けるに異國人の内日本の詞をつかひ此邊の事どもを問山上にある番所をあやしみ尋ける故あれば切支丹船などの來るを改るため國主よりたて給ふ所といふ異船の者共おどろき銀二枚取出し仁兵衛にあたへ早く船を出し帆影見えぬ迄は爰に居て其後歸候へとたのみて出船す仁兵衛先うけあひ少立やすらひ早速家にかへり兄とあねむこに告其比島守村井仁右衛門といふ士一人つかはし置れしが折ふし山に入て居合はすいそぎ山へいひ遣しければ仁右衛門早き船にのり浦の者共引つれ追懸しに異船は遙に行のひぬ仁右衛門此島の神に祈念し水主をいさめて急ぐほどに風かはり異船遅々する所を追附即船を大島へ引よせ此由福岡へ申ければ城下にめしよせて夫より江戸へをくらの都合十人内一人は耶蘇宗の伴天連六十二歳一人はいるまんなり是は元長崎の者なり又もと京大坂に居たりし日本人むかし天主國にわたりて住しが此たび來る

長崎記には伴天連四人いるまん一人切支丹五人内日本人二人と云々其餘みな異國人なり此度の者共日本へ天主の法をすゝめんため来るよし白狀す江戸にて籠舎切支丹の目あかしと成ぬると云々異船にありし銀七貫目江戸よりみな大島の村民に下され村井は國主より賞を賜りける船に乘出し目原市郎左衛門が弟九郎次郎は跡にのこりて地島、鐘崎、初の浦、蘆屋、若松に觸狀を書て遣し船を出し追かけよといひつかはしける故右之浦々よりも船數艘出しける是又才覺を感じて賞を賜りける

夫木

さりとともと身のうき事は大島の具氏

神の心を頼むはかりそ

源氏國葛

船人も誰をこふとか大島の

浦かなしくも聲の聞ゆる

紀行

濱ちとり聲打そへて大島の宗祇

波の間もなく誰をこふらん

澳津島

此島俗には澳の御神といふ澳の島ともいふ

一是宗像三神の澳津宮なり此御神は第一宮ともいふ第三宮とも云其事宗像山の下に記す舊事記古事記

大宮司氏俊縁起の説を以て此所にては此島を第一

宮田心姫と稱す此御神の威靈言舌に不レ及種々の奇異あり記すにいとまなし物いみし給ふ御神なればものゝ名もあらはにいふ事ならず僧尼山伏女人牛馬鹿鼠など皆異名を附て云傳しなり

一此島岩そびえ木茂り大竹多しみな岩山なり金あり山上より對馬朝鮮見ゆる田圃は少もなし大島、鐘崎、西の浦の漁夫春夏秋の間來りて漁す其外の所より魚獵する事ならず

一大島より四十八里ありと云々風波なき春の日には朝船を出して夕につく四十八里よりは近きかと云

云夫木

立波に鼓の音を打そへて

顯仲

唐人よせぬおきの島守

遠賀郡

日本紀仲哀天皇の記岡縣主の祖熊鰐御迎のため周防國にいたる事有筑前風土記を引て萬葉仙覺抄には瑯舸縣とも書り

遠賀の湊

蘆屋

一神武帝東征の時も先此所に至らせ給ひ仲哀天皇神功皇后此所に來給ふ事日本記に見えたり安徳天皇平家に具せられて此所に至り給ふ事平家物語等に見えたり



一平家長門段の浦にて没落の時何者とは知らずあられなき男の誕生して一七夜にはこさじと思ふ男子をいだきて小金作の太刀をそへ蘆屋の何某といふものに此子を養育せよとて渡し置行方不_レ知に成ぬ蘆屋の何がし是はいかさまよし有人子ならんと思ひ撫育せしを太宰少貳傳聞て我一子なし天のあたへなるべしと蘆屋の某何がかたよりこひ取て家人數十人差添て育しに其器量平人に替てぞ見えし年長ければ三韓の押へとして對馬一島の主と成たるとなり今宗の家の先祖是也平知盛の子なりとかや

一蘆屋は岡の湊の南にあり向は山鹿の里也遠賀河其間をへだつ旅船多く出入して交易の利多く民家にぎはへり東鑑に文治元年三河守範賴豊後に渡りて北條小四郎下河邊庄司に先懸して二月朔日蘆屋浦

にて太宰少貳種丞子息嘉摩兵衛尉と合戰して嘉摩兵衛討死すと云々

一蘆屋の祇園と稱する宮高倉の社の下宮也後年祇園を合せ祭るにや日本紀仲哀天皇八年春正月筑紫に幸し給ふ時岡縣主熊鰐御むかひに出し事を記せる所に田山鹿の岬より廻て岡の浦にいたります水門に至て御船進む事を得ず天皇熊鰐に向て曰此熊鰐は明心有てまうけりとさく船のすゝまざる事は何ぞや熊鰐奏して申さく御船のすゝむ事を得ざるは臣が罪にあらず此浦の口に男女二神あり男神を大倉主といひ女神を菟_つ夫_{ぐら}羅媛といふ必此神の御心ならんと申す天皇挾抄者倭國菟_う田_の人伊賀彦を祝として祭らしめ給ひしかば則御船進む事を得たりとあり則此御神なり本社は高倉村にあり大友宗麟耶蘇宗を歸依して大友領神社佛閣不_レ殘燒失せられし時此高倉兩社も燒失す其後小早川隆景筑前領せられし時造營ありて本社祭田寄附せられしに其子秀秋の時沒收せらる其後及_二大破_一しを天和二年太守光之に至り祭田三十石を寄附し給ひ祭禮等執行興起せり

一蘆屋釜屋の元祖は山鹿太郎、同又太郎、同左近掾氏
は大田氏也山鹿にありし故山鹿の左近といふなり
此左近名人にて東山殿より左近掾と稱せられ東山
殿の御時能阿彌始て中板のかざりを始し時かな風
爐とも此左近に鑄させらるゝこと利休の錄に見え
たり今此末は同國博多にあり大田次兵衛といふ者
にて國主の用を調いにしへにも及ぶほどの鑄物師
ゆゑ江戸京長崎隣國よりもかれが製を求む寛永の
比までは蘆屋にも此鑄物師の末残りしが今は絶た
り

一蘆屋川に入左の方に小島二つ有中のうがちたる小
島をうけ山といふ又いくつき島ともいふ神功皇后
三韓御退治の時筑紫岩屋の津に御船著海邊に岩山
あり住吉の明神矢をつがひ三韓にうち勝べくんば
此矢通るべしとて放ち給へば岩山の真中射通し給
ふこれよりして此岩をためしの岩と云たるよし箱
崎八幡の縁起にあり何の比よりかうげ山と俗語に
いひならはしたり
萬七
天きりあひひかた吹らし水くきの

岡のみなとに波たちわたる

範兼が抄にひかたとはこち風の吹やまぬなりと
云々今案に日方東風とて久しくこちふく事あり
範兼が説可_レ用

新拾遺

水くきの遠賀のみなとの波のうへに

素選法師

夫木

水莖の岡の湊にたつ波の 光置院入道御子

同

月影のやとれはこほる水莖の 公 朝

類聚

ひかたふく音をさひしき水莖の 行 尊

草庵

五月雨の日數にまさる水くきの 頓 阿

拾玉

津の國のあしやを出し心こそ 慈 鎮

同

唐國の空もひとつにみゆるまで 同

同

行とまる心つくしのあはれさは 同

あしやの里の松の夕くれ

家集

つくしふね浦鹽つみてもとるにも 俊 頼

紀行

あしやのねてもゑらぬとぞする

鹽やかぬあしやの秋そあはれなる 宗 祇

同

月や煙をいとひそめけん

いつきかんあしやの月の夕玄くれ 同

垂間野橋たるまののぼし

一蘆屋と山鹿の間南北にわたして往來したる橋なり

大船も橋下を通りしといふ橋をわたしたる跡川の

廣百二三十間あり今はたくまのといふたるまを詠

となふるなり

藻鹽草懷中

島つたひとわたるふねの梶間より

落る雫やたりまのゝ橋

浪掛岸

蘆屋の北山鹿の戌亥なり大波掛、小波掛あり

懷中

我袖のぬるゝを何にたとへまし

浪かけのきし世になかりせば

夫木

浪かけの浦のねさめにいとゝしく 高 遠

物おもひそふ鴈かねのこゑ

松の根にあらはれにけり年をへて 祐 舉

いかてくつれぬ波掛のきし

波津浦はつのうら

一神功皇后御旗を立給ひし所ゆゑ旗の浦といひしを

詠て初の浦といふと云々大旗小旗と云所村中にあ

りむかし此山に温泉あり此山をゆわう丸山とも言

筑前名所木綿間山其所不_レ知此山ゆふ間山にてゆ

わう丸山となへ詠れるにや

一此所はかつきの海士住す是より十町程東の濱邊を

内浦濱といふうつら村といふは山中にあり

内浦うつら

名寄等には鶉濱と書

一内浦濱は垂水越たるみこえの東の麓にあり此所にうつら貝と

いふ貝あり嘉摩郡野北の蛤よりも大なり味はおと

れり三四月比波閑なる時潟海より取あぐるなり

一此邊に名切の宿とてむかし宿驛ありし跡あり其さ

きに京橋といふ小橋あり都への往來の道なりし故

名附る也

一内浦は往昔牧有たるよし佐々木宇治川を渡せし生いけ

食は此所より出たりといひ傳る

一内浦より東の高山は孔大寺山といふ權現おはしま

す古は九州より内浦郷三十町寄附中絶し處に度々

神託有て文祿年中に宗像氏貞より内浦三十町寄附せらるゝよし證文あり

一孔大寺權現はいにしへ犧をそなへたるよし

一岡の松原は原村より黒山村迄長一里ある松原なり横四五町或は二三町あり此松原は神功皇后御手つから一木をうゑ給ふより生そひて松原と成といへ

萬り

かりそとは思はぬ旅をいかなれば

うつら濱をは行暮すらん

山鹿

此所は蘆屋と川向なり山鹿より若松迄長五里横

一里村數二十是島郷と言

一同所渡し場の葉山は古城山なり麻生上總介元重居城

一同所より淺川内に入左の高山を日の峰といふ古城山也山鹿兵藤次秀遠より筑前守に至て居城

一山鹿の北柏原浦の西に海をへだて小島あり堂山といふ上に蛭子の神社あり又地藏堂あり又此西の島内に洞山あり洞内高さ三間半横三間半長十一間南北に通れり奇境也

一板敷^{いたしき}并石橋^{しやくきう}といふあり堂山の西の島の内にあり柏

原に屬す板敷は海中に長く出たる岩なり其平なる

事恰も板を敷たるがごとし横十二間半長三十二間

半あり入江八間あり其上に天成の石橋幅二尺長一

丈餘高三尺四五寸此洞山板敷石橋奇異の境地なり

一同所より淺川内といふを小舟は通りて若松に出る

海路五里左右無双の境地なり

一安徳天皇太宰府に下らせ給へ共豐後國小形三郎に

追立られさせ給ひ兵藤次秀遠を頼て山鹿の城にお

はしましけるに又小形三郎追掛奉ると聞召て高瀬

舟に召て豐前國柳が浦に著給ふとなり高瀬舟今の

丸木船なるべし淺川内御通船のよし

岩屋

一岩屋のはなを山鹿の御崎といふ此沖にて潮替る沖

に白島^{くきのうみ}として二つあり

洞海

一蘆屋若松の間入海通れり若松より海士住さては海

の南北廣き事半里ばかり夫より淺川迄は狭し大船

は不^ふ通これを洞の海といふくきとは狭き所に水

の通るをいふなり水くきの岡の湊などいふも此心

なり日本紀に仲哀天皇八年春正月天皇筑紫に幸し給ふ時神功皇后は別船にて洞の海より入給ふ若松のかたより大渡川通り給ひしなるべし潮かれて御船進まず時に岡の縣主熊鷹更に歸て洞海より皇后をむかへ奉り則御船のすゝまざるを見て惶懼て忽に魚沼鳥池を作りことく魚鳥をあつむ皇后この魚鳥の遊ぶを見給ひて御心やゝとけ給ひぬ潮の満るに及て御船すゝみて岡津に泊り給ふといへり其上の山に御輿掛の松とて古松三株あり皇后右の時まばらく御輿をかけし所といふ

一洞海の南側小敷村境内に太閤水あり秀吉公筑紫に下り給ひし時朝鮮陣の門出なる故皇后の吉例とて洞の海より入給ふ此時此所にて人をして地をほらしめ水を得て暫くこゝに御休有て御茶をきこしめしけるなり早速石をたゝみ井とし給ふ其水いさぎよし依之太閤水と稱す

脇浦

一此所に永祿十二年の春唐船一艘漂著す其比遠賀郡手野といふ所に吉田越後といふ地侍あり富家に満て近江のものを撫看する事父たるものゝ子をあは

れむが如し依之近江の百姓窮愛いつきあひつきながら一郡の領主のごとし然に唐船漂著するよしを聞て一門百姓引つれ見物の體にもてなし唐船に取乗唐人共一々に切殺し積來る荷物船道具等迄うばひとりいよく富貴ならぶ者なかりしとなり麻生が家臣瓜生左近といふ者は吉田越後が妹婿なり越後是をすゝめて麻生が幼君を左近にころさせ兩人共に宗像に一身して家臣と成るよし越後も瓜生も不義不仁のもの成しが其末終に絶と云々

黒崎

一此所は肥後肥前薩摩長崎方々への海道也渡海船多し

一黒崎の上の山を帆柱山といふ昔宇都宮上野介重業居城

一帆柱山の麓の小篠山を花の尾の城といふ宇都宮上野介帆柱山より此所に居城を替て住す其後原田左近を將監定義正慶年中に籠城といへども大友にはろばさる夫より麻生重里同民部隆守まで居住す麻生は遠賀千町の旗頭たりしよし

一黒崎の古城は黒田長政の入國の後豊前境の守禦の

ため藤田村今黒崎なりに城を築て家臣井上周防之房を
置る二萬石の采地を給ふ此時までは藤田村なり城
を黒崎の城と稱す城山の南に黒崎といふ所ありし
故なり其後城の名に依て町をも黒崎ととなふ妙見
社ある故此山を妙見山ともいふ此城も元和元一國
一城と成て破る

若松

大渡川附鳥旗とばた

一若松渡場の島を中の島といふ長政此城を築て家臣
三宅若狹といふものを置る中島の城と號す元和元
年公命にて諸國端城を破られし時此城も破す

一若松より半里ほど西小田といふ所あり此上の山は
古城山也大場隱岐守といふもの居城す時代不_レ知
一文明十二年宗祇紀行に筑前國若松の浦といふにつ
きぬ則此所もしま人麻生何がし兄弟ある寺に正法寺
云寺也今はむかへとりぬかた山かけてうえ木こたか
廢してなしむかへとりぬかた山かけてうえ木こたか
きかげあり内外の海を見るに鹽やの烟暮わたる入
日影にうつろふほど又いふかたなし此二人は將軍
家に奉公の人に侍れば郡の物語こまやかにして色
色の肴もとめ出たるほとこよろぎのいそがはしさ

もおもひやらる盃かさなりさし出る月の光もたい
ならず今宵は十三夜なれば

名やおもふこよひ玄くれぬ秋の月

一大渡川は若松の入海の口若松ととばたとの間なり
これ一向海なりと見ゆれども遠賀川のなか出る所
なり鹹淡相交るゆゑ寒氣甚時は氷る事あり慶長年
中一度寛永年中一度氷たるといふ近くは天和三年
十一月晦日より雪ふり師走の四日五日まで寒氣甚
しかりしに此川水も氷りて船の往來絶たり大渡川
といふ事むべなりこれ神功皇后の御船通りし所な
り

古今六帖

つくしなる大渡川おはかたは 貫 之
我ひとりのみわたるうき世か

一鳥旗は若松のむかひ海をへたつ戸畑と書されども
萬集仙覺が抄に筑前風土紀を引て鳥旗と書り正字
なるべし名護屋崎は鳥旗の出崎なり日本紀岡縣主
熊鶉申けることばにも名護屋大渡を以て西門とす
とあるも此所なり仲哀帝皇后の御船をむかへ案内
し奉らんが爲に百枝の賢木さかきを抜取て九尋の船の舳
に立上枝には白銅鏡をかけ中枝には十握の劔をか

け下枝には八尺瓊をかけて周防國沙屋浦に參迎て
さげ浦今 魚鹽の地を獻る因て奏して曰穴門長門國也より
むかんつのをほたり 向津野大濟に至るまでを東門とし名護屋大濟を以
て西門とし沒利島阿閉島めへ長門にあり詠て今はもつれ鳴を
限て御宮みみやとし柴島を割て御嶺みねとし逆見海を鹽地と
すと云々柴嶋、逆見遠此ことは只廣く天下をしろし
めすべきとの祝言に熊鰐が申けることばなりと釋
日本紀に記せりされば此なこや大濟より皇后御船
を入給ひすでにして三韓を討平らげ應神帝を御誕
生ましつゝつゝるに香椎の宮に神とゞまり宮崎宇美
の宮居にあとをたれ行ひて長く異國降伏の威靈を
あらはし給ひ日本を守護し給ふ事ありがたき御ち
かひ其ためしある當國也國主長政の時よりこのか
た此若松の湊より船出して江府に參勤し又歸國の
時も此所より上陸し給ひて福岡に著城し給ふ事め
でたき恒例にして海路千里の波もなごやの崎のな
こやかに船をうかべ大渡川の絶る時なく若松の葉
色も萬歳のみどりをそふらめる

白水郎子記行序

曰若有儒先岡西其姓惟中其名一時其軒號也甫少
安居乎因備之間以近徒居於難波江曲進學諸
生讀耕衣食餘五年維時天和壬戌之夏四月薄言出
門發足汗漫游伊豫讀岐備前備中安藝終至臘月
爰來歸其間或廻眸于山上花微騷人韵士靜思隨
時展詩或揆首海湄月鏡野店荒村邊垠乘便詠
歌兼之居常好滑稽詠諧善爲笑言宛如優旃
亦往々發句解人願諦觀儒先之筆記也其體慕紀
氏士佐記焉其文似長明海道記焉散人一覽謂英詞
傑句洵美且都亦孰出其右乎詩南源和尙雌黃焉歌烏
丸光雄卿有點焉句梅翁已可矣何居文章柔情綽態穆
々盡麗只寧遂盥手焚香運短才題其初以資笑
柄時天和三昭陽大淵年六月念八釣虛散人清水春流
敬書乎浪華吸月堂下

あまの子のすさび巻の一

岡西惟中著

獨春夜のあけやすきころ青燈をかゝけ閑几によりか
かり願を雨の滴にさゝへてつらくと此身の憂樂を
考るに憂はおほく樂はすくなく心懨々としてやるか
たなし阿爺は浪倒のをちぶれを因幡の峯の松にはぢ
七十に向として北邙のけふりにまじはり慈母は漂泊
のたゞよひを兒島いその浪に習ひ八十に及て東岱の
骨にさらされふたりながら徒に武士名をうしなひ其
中に我を育し我を鞠し茅屋のうちに長り蓬茨の間に
生したち漸三十の年になりてなにがしのむすめをむ
かへ室家の箕箒をとらしめ比目の枕をならべ鴛鴦の
ふすまをかさねし間に四子を儲長子を敬吉といひ次
は女子にして琴と名づくつぎゝみなおのこにして
被をひとつにし貧家の菜根を咀ながらかれを愛しこ
れをかなしみ老生涯の杖はしらとも思ひしに霜露の

病にふし河魚のつかれにかゝり五七年のうちに白玉
樓中の夢をむすびながく長夜の室に入妻とおなじく
泪を袂の上に拭てなをつきすけふもなげきあすもか
なしみしかども去者は日々にうとく目前の境界に玄
ばしうちわすれ口を開てわらふ事一月のうち三五日
なりしに昨年の秋八月中旬ひとりのむすめ生れとか
くよろこびあへりつるを百餘日のうちに妻はかなく
も床につきくろき髪は荊棘の上の芥となりうつくし
き手は草の中の土とくちせん事のくちおしかりける
まことに葛藟によちのぼる猿の千丈のふもとに落蒼
海をこぎわたる舟の千里のぬかりにくだけたらむも
なをわが憂の便なきには十分のひとつなり至哀に文
なしと古人の申ためれどもとより文筆のすきものな
れば妻をいためること葉を書して一抔の土松柏の玄
るしになぞらへぬ名づけて泪河の一軸とす

涙河

世を夢に身をまぼろしにものするとはたれもゝか
しこげに玄りがほなれども人も玄らず我も玄らずさ
ればわがとし月衾のやぶれをひとつにしすびつの香
をおなじくもてあそぶいもせの山とし年も十あまり

五とせばかりそひなれ中の隔の大河のへの藤なみな
み／＼に思ふ事もなくもろこしのよしの／＼おくにも
をくれじとなづさひし妻は容見にくからず心ばへも
さしはへてにくからざりしはあまのすさびにもあら
ず女といふものゝひとつの癖の妬といふ事さへ思は
ずさすがにうちゆるへ見はなちたる志もみえず萬た
のもしく織ぬふわざ／＼いとあざやかに染なす色は
やは立田姫もはづかしからず七夕の手もたゆげにし
て鶉の衣の百結する勞をつみ家の助をのみとさまか
うさまにゑつらひなし琴の調の和きあへるごとくな
にのいふべくもあらずしがわが名をあらはす文筆の
よすがにもよるなる所と思ひとりて吉備の國の遙な
るきしよりなにはえや大江のきし近く舟をはなちき
て伊駒の山の月にもならひ照され田みのゝしまのあ
さ衣かたみに著なしほり江の花をも共にながめ五と
せ六とせの春秋を送むかへいにし年のあき葉月十日
あまり三日の日ふくらかなりしはらも安く平に産の
事をなしおほせてまみのけしきのたゆくもみえずむ
まれしむすめの忌の日もあきて御靈の宮詣をこ／＼
とゑつらひいとうれしげにみえしにいかなるものゝ

といこほりにや霜月いくかばかりさやく霜夜のくれ
竹ふしわづらふ事になむなりぬ生薬もとめにと蓬が
島のくま／＼まで足を空にしてとなりかくなり生の
うらなしのありともみえずむすば／＼れてたび／＼の
勞とかくいふべくもなし去からさぞとも心をつくし
の海病の重荷つみけん舟やう／＼してたゆたひつゝ
ものくふ事もすゝみかはける膚も肥あぶらつきたる
やうになむみえてあやしの下女下部もよろこびあへ
るにおなじ月の廿日あまり七日のくれおなじさまに
ものくふ事をうるさがりかしら重くたゆげなれど誰
誰もはじめの病のさしいでゝこのたびはいとからら
かなりなどゑばしこゝろみしにいさゝかうめき出し
をいかに／＼とものせしがたいあしたゆふべのほど
のいたつき身にあるもゑらずてあくる日のむまのか
ひふくほどすきひつじのあゆみ迄つきて二十八日の
くれまどへるころ頻に痰といふ恐しきものせまりき
てなにのするわざもなく目つとふさがり息たへぬあ
はや神もほとけもあらずや我にさきだちてはなにと
てゆきしぞ死出の山ちのみちゑらぬとてかへりこよ
かしとこゑをあげ足すりをしてなげゝどもむなしき

芙蓉のからばかり残りてうらめしゆすれどもことの
 葉かはすけしきもなく鳥のつらをはなれ連りし朶の
 折たるたぐひ此身ひとりの悲しさあめにこがれつち
 にさけびぬかゝれどもこのかみといふもの家に久し
 くともむべくもなくして一向専念の宗なりければ例の
 さほうに取したゝめ薪つき雪ふかしける道頓堀のほ
 とりに葬りかのつるの林のこゝちもなにせんと胸を
 うちなき入ぬせめてその遺骨とてひとつゝあゝ火
 の火ばしゝて拾ひあつめ西陵の雨のゆふべにくださ
 す東岱の嵐にもあてがたくおなじ所淨土法善寺の傍
 にうづめ名を松丘の下にとゞめなむとちいさき塚を
 築石をたてみづからが筆して釋尼智貞と法諱をきざ
 みうらのかたには有し世の名とて柴田氏順とおもか
 げをのこし水手向て後沈檀一捻に合掌の花をそへま
 いらせ愁涙をとゞめて歸りぬのこしおきし調度なに
 くれとみればそゝろに泪またながれ書すてし反古な
 どやりすてゝうつゝにも感じ夢にもむせびさらに袂
 かはかすおなじゑはすのその日にかの塚のもとに
 ゆきつらゝと思ふに朝のかほばせを夜によそほへ
 るもゆふべにはむなしき香だにとゞめず榮にふけり

貪しきにせまるもひとつ烟のするにたちのぼり是等
 ゆきかふ馬車もいづゝ大路にたをれくだけまゝうき
 ゑづむ舟筏の水をわたりて竿とるもつゐに跡のゑら
 浪となり行ならひすべて有としある海山のたゞすま
 る草木のなとやかなるもみし世にかはりたまゝ久
 しくかはらぬものはあれどもみる人はむなしくなり
 ぬなにのためにも執をとゞめ著をなして是をたのし
 みかれをにくまむたゞ此身をすてゝん道べ故法師が
 人におくれておくれじと思ふにしなぬ命かなとよみ
 しもあはれに衣をまとひ筆をなげ硯をもちわりなんも
 のをと觀じつゝけて塚の下にゑばし尻すへ七言の詩
 一首やまと歌ふたつみつつらねてなみだのそへもの
 になす

涙雨霑_レ苔四尺墳 生悲_二同室_一死離_レ群

只今獨座蒲團上 難_レ泯恩情念_二細君_一

さるものそうとからぬ日にめくりきて

泪そ袖にゑたしかりける

こけの下にひとりきくらんいきのころ

われはかくても嵐ふく夜を

あけくれにとありかゝりと思ふより

われをはなれぬ人のおもかけ

などかすくつゝいて住持の上人にさへげこの事かの事かたりかりの容のいやはかなるをふかくいとひがほにみえしを上人もさすがに哀をもよほし衣の袖をぬらし給ふこのつゝゐでに智貞靈位ひとつ上人の持佛堂にすへて朝ゆふの廻向にあづからば死せる妹いける背おなじくよろこびに思はんなどしきりになげくを上人やすげに事うけし給ひて智貞靈位を手づから佛の御もとにさしすへたびぬこれしか残おほかる事もなしとあまたゝびぬかづき念じ彌陀佛と機を同じて智貞一蓮の半坐をまつ事けふもしらずあすもしらずわが一息截斷の時やすらかにして西のむかへの雲にのり五々の菩薩たちと肩をならべ膝をまじへ智貞同體のたのしみ不退轉の位を極なんものをとつぶやきければ上人聲をあげ假相もと實相也萬法は一心の開發一心は萬法の含藏也無常無常ならず常又常ならず世をいとふも實ならずいとはぬもあだごと也ただ迷妄の雲を拂て法性の月をみるにしかず智貞一心則なんぢが一心さらに別體のわかつべくもあらず南無阿彌陀佛と高くとなへさせ給ふこの一言身にとを

り肝に銘じいと殊勝の事になむとたのもしくもたうとくも有けるこのうちの所作にはなにをせんたゝ一向一念の稱名一相一行の三昧也一相一行の三昧は念彌陀佛也念彌陀佛これなにならん無念の作用南無阿彌陀佛この地にいたりて極樂の淨刹菩薩の眞身なむあみだ佛の光を見る知貞惟中一體同心かれもなむあみだ佛これもなむあみだ佛

かく書一軸にして寺に納ぬこれより一念發起して既に衣をかけ鉢をこひ疎々たる土床にひとつふたつの鍋をすへて藜羹を咀粟飯をくらひ萬事をなげうち磨山の下の一狂夫たらむと頻に思ひたちはじめて天徳山南源和尚のもとに詣し侍者靈峰を通事とし一篇の文をさへげおなじく詩を奉るこの日南岳山悅山和尚にも侍者祖春をして二首の絶句を獅子窟の下にさし置ぬ兩和尚時をかへず芳韻をつがしめことに翰を取てあそばし給ふ

一時軒帷中恭稽首啓

天徳山南源大和尚竹倚下拙爲巴西假儒寓止于當邦坂上寒暑五遷旦業讀耕暮事翰墨爲重蒙之師不傳道不解惑記誦詞章之學也以是聲信於

郷里一名著_二於摺紳_一自_二弱年_一有意_二于_レ祿雖_レ然時世
不_レ過未_レ登_二官途_一草廬一閑人也去年冬大呂廿八日不
意山妻入_二寥天之一_一多々執著不_レ已況昔年二親之
喪四子之柩悉在_二土中_一不_レ能_レ無_二罔極之痛_一於_レ此發_二
大無常心_一欲_レ入_二摩訶菩提_一今也和尙語默天下之屬望
販夫乳兒之所_レ知也拙今日來欲_レ問_二一大事因緣_一然
謁_二和尙道氣_一忽忘_二言請蒙_一其餘光_一仰_二其餘風_一元來
雖_レ歸_二宗門_一未_レ入_二法林_一只恃_二和尙廣大之恩光_一必
憐_二其誠_一充_二其所請_一故不_レ願_二驚駭_一綴_二拙詩一章_一呈_二
上和尙左右_一低_レ首仰_二改正_一

不_レ因_二舊歲無常逼_一安得_二菩提花下春_一

莫_レ怪寺門來往數即今合掌捻_レ香人

答_二岡西一時軒惟中儒士_一一章

天德山南源和尙

無常念起試回觀

百歲榮如_二一指彈_一

力抗_二項劉_一終屬_レ妄

才高_二斑馬_一竟何干

忘名易似_二能忘_一世

選佛從來勝_二選官_一

平步欲_レ退_二麗老轍_一

西江一吸直須_レ乾

恭奉_二

南岳山悅山大和尙竹倚下_二伏請_一改正_二

禪板蒲團本沒蹤
相逢端的仰_二微容_一
更無_二底物當_一高宇_二
南岳從來一箇松

又

摩_二雲道氣緣盤龍_一況又文章巨浪春

懸想多年南岳寺葛藤攀盡探_二綱宗_一

岡西一時軒惟中携_レ詩過訪答次_二原韵二首_一

南岳山悅山和尙

乾坤踏遍了無_レ蹤何幸春來見_二德容_一

儒釋到_レ家同一致吟風那有_二兩般松_一

又

長安聞說馬如_レ龍何似_二曹溪碓夜春_一

直下頓空文字相慧燈剔起關_二南宗_一

このときに當てなをいまだ凡塵をさりえず發心_二玄_一ば
玄ばす_二み_一玄ば_二ゝ_一ゑりぞくかくして三元序をはじ
め萬宇春を回し屠蘇の盃かたはらにあれども是をの
むこ_二へ_一ろなく却鬼の藥眼にみつれどもさらに服する
氣_二ざ_一しもなく閨中にひとりふして古きまぐらをなで
几案にたま_二く_一そひてあつまれる塵をはらふ一向寥
寥たる春にむかひ筆を試みて七言の一章を賦しなら
びにやまと歌一首よみ侍りぬ

辜負人間風物新

誰憐寂寥一家身

夢摧_ニ炊白_一東窓白

半入_ニ愁情_一半入_ニ春

獨ねてむかふる春はさゝの葉の

みやまもおなしやとのあけほの

かゝる愁情をあらはし二月已去三月來れども遊興の
ちまたにも遠ざかりつく／＼と白屋の破窓にむかひ
書をくりひろげ莊老の無爲をくちなめずりしふかく
扉をとちてこの身のかりそめなる事を觀すればたれ
か獨ゆきさらざるあしたに颯灑としなやかなる長袖
を珠簾のうちに翻せどもゆふべには落々たる松のか
げにむなしくふしきのふは婉孌としたしめる蘭葉の
友もけふは草露のもとにくちぬいつか此身のしゝむ
らを鳥のくちばしにせられいつか此骨をいぬの牙に
くわれ貯置し書籍はいづれの家のふすまのやぶれに
つゝられむ書すてし禿たる筆はたれがかきねのあく
たのけがれにまじはらんさてもはかなくなしき事
頻にそゝろさむく五體しいまりてかの心戒ひじりの
尻さしすへぬ生死の觀念有がたく侍りせめていま身
のわづらひすくなく爵祿につながれぬ事をなんひと
つの取得としてちかきあたりの名所をたづねとをき

わたりの舊跡をとほむとおもひたちなき人のうみす
てし二歳の嬰兒を去る人のもとにあづけ家に儼石の
貯なければかけたる櫃やうのものひとつふたつそこ
ねしかはごに千卷ばかりのすてがたき書物をひろひ
いれひとりふたりの門弟のすみかにさし置一巾一衣
一杖一鞋のかろき姿になりとしごろなれつかへし僕
ひとりたのもしく隨身して飄々たる孤雲に身をまか
せなんと思ひ先西行がこえし四國の方の見まくほし
く俄に一葉の扁舟にのりうつり寂寥たる蓬窓にろの
滴をかぞへ兩三日衢壤の河邊につなぎしが四月二日
夕陽西山にかたぶけるころ京洛頂妙寺の隱僧日相上
人同宿兩三人を伴ひ四國弘通のために下給ふとてわ
が船中に来り給ふ僧貌閑雅言語敏達みるとひとしく
黠れたがひに膝を促眉をまじへ一時の情をかたり浮
雲のこゝろざしをのべ瓮の煮豆をくひ竹筒の酒をく
みかはし忽に十年の知己となりぬあくる三日雨氣漸
漸にはれ海波滔々としづまり水主楫取布帆をあげゆ
く／＼遠山の黛をのぞみ細浪の皺をしのぎ高く詩を
うたへば船頭笑をなししづかに歌を詠すればこしき
の童なになるらむと頭をかたぶく沖に鷗の三たびぬ

るも妻をはなれずして游泳あはれなり鯨の息をふき
尻をふるふ皆逍遙の體たらくしばし心をなぐさむも
なかだち也行々て五日といふに備後の國鞆の浦につ
き風みだりなればしばし船かけ百貫島安禪房の道場
に息ひ窮窟の瘦をのぶ佛前のうしろのかたに五七疊
の亭ありあるじの沙門心有て欄のもとに青琅玕のむ
しろをまきわれをといひ幸に棋一局あり夏を忘るゝ
のもてあそび也方圓動靜機をめぐらしてうちはねつ
をさへつかこみ終りてやがて黒白の石を筥に牧む時
に樓船一艘かちをうごかしまぢかくみえぬ青娥皓齒
五七人三絃をならしなげふしのばち音なみのひき
にまじはりえならぬけしきいふもさら也心なき魚も
ひれをのべとびかふ鳥も翅をのべ人も又氣をとろか
すこの時僧ひとりたむぎくに硯をそへ予が俳諧の句
をのぞむたれかいひけんとおかしくそのまゝ筆をう
るほして書つけぬ

傾城やいそのむろの木ともしけり

是は新勅撰大納言旅人の歌にともの浦のいそのむろ
の木みるからにあひみしいものゑられんやはとよみ
しおもかげをふくみて申ぬこの寺をさりて萬年山小

松寺といへる蘭若に詣しぬ小松の重盛卿取立られし
一字にて庭上に名木の松有亭々たる一寸の鬚あだか
も龍蛇のうねくりたるごとく蒼々たる百尺の陰さな
がら風雨のきらめくにひとし名は小松にして鶴すこ
るしる原本ノマ詩を吟じ歌を詠すべき風境也住持の名は古
岩和尚となんきゝし一談して麈尾を揮らむと欲して
四五の僧をして謁を告しかども座禪時あり蒲團上を
さらすと聞えしかばむなく一絶をとめて出ぬ

翠聳小松寺

枝分陰萬年

平家雖_レ没_レ跡

名落傳_二世間_一

この所より數町をわたりて安國寺といへる梵刹あり
甕やぶれ軒くち禪居花木深し僧ひとりもみえず衆寮
のすみかものさびしく老鼠灯をねぶり睡猫蝶をつか
むのみの有さますがにあはれ也むかし南源和尚來
朝のころまばし烏藤をよけ月下の門を音づれ給ひし
所也と聞しそのほか神社佛閣みえ侍れども舟人のゝ
しりて船いだす音しければ衣のちりをはらひ笠をぬ
ぎてとびのりぬそれよりはなくりの瀬門といふ所有
盤盞とうづまき浪をあげ泡をとばしもろこし蜀道の
瞿稜澁瀨堆もかくやと肝をひやし氣をふさぐわたり

有水主はあせをながし楫取はかちをおさへやう／＼してこえぬあやうき事限なししばし有て風浪あらく山なり谷答て雨朦々たり晴をまちて兩三日逗留し蓬底にふしながら菓をつみ茶をすゝり嚴子陵が釣に伴はず陶朱公が遊びにゑたがはず妻をおもひてたゞに黄泉をかなしみ子をあはれみていたづらに白雲をのぞむ泪を浪にうかべてもさらにことづてやるべきかたもなしこのうき日相上人法華を談じ執著をさらむ事をとき給ふそれよりたがひに三諦卽一の觀念を沙汰し權實二教の法體を論じ長日の寂寥をまぎれぬ四月八日のあけぼの漸々たる雲衢に白日ほのかにみえ山は宿酒の頓に醒る時のごとしと潘紫岩がつくりしおもかげもうかび碇をあげ船をやるされば風波の名ごりなをしづかならず爰の汀によせかしこの島にただよひ十日の晝ほどに伊豫の國三津のはまにつき上人は駕にのりすぐに城下にわたり給ふ予はとし月しりたる天野氏月弓子のもとにやどりとりぬいまだ眉毛をまじへざれども書通たいになくしたしみあまりあれは芳話心よく先一椀の茶を點じて肌骨さながらうるほひ清風たもとにみち三盃の酒をなめて百憂う

たゝほどけ枕上うまく眠り日落て樹影まれなるころ浴に入垢をけづり旅泊のくるしみをまぬかれしばしまた枕をとれば所のすきもの村山氏一葉子とひきぬこの興にもよほされ五七輩をまねぎ一會たりぬ發句はものゝかずならず

とてかろし一帆の船なつころも

となんしける兩日滞留して十二日のあけがた松山にさがらんとす馬にまたがり所々を見もてゆくに路傍にたてるなみ木の松碧はけぶりの色をこめて左右にたれ其中往來の人絡繹たり三津の浦より一里をすぎて城府に到り野田氏一牛子のもとに入ぬ一牛子は閑踈幽栖の俳士事々風流のもてなし有近隣の好士むれきたり夜半の鐘聲頻にきこふるまで燈をもとさでにして歡娛なをつきすあけなば一會せんとをのゝ座をさりぬ

十三日興行

かしこまりもをかすあたさめところなつまくら

十四日一牛子の隣舍わづかに墻を隔て烏谷唱見雅士の別業にうつる此居前は市中の繁華あれども後は浣花溪水水西のほとり白茅の一室竹林の幽なるに望む

かりのやどりとはいへども最興あるすまゐなりこの
あたりに淨蓮寺のなにがしとて眞宗の隠僧有虚白庵
と名づく年のほどは六十餘なり讃嘆の高名國に聞え
門徒おほく隨順せる俊逸博辨の人有その草堂暉麗に
して人常に遊歩す予もむつまじくなりぬそれのもと
にて

春秋に三つのゆうへもなかりけり

十八日後藤故心といへる酒家にまねかる糟池香みち
て酒家のごとく青帘色はへて高く檐になびき猗頓が
牛をかはずして富身にあまりしかもこゝろざし貪戾
をはなれ天をたのしみ命をしろの人也外面草もえて
其中に斑なる石ふしたるさなから桃林にことならず
かの羅一峯か詩に怪石嵯峨として伏似牛形容不_レ倦
幾春秋とつぶやきしけしき目のあたり也

牛かと思ふ夢草ましりはなれ石

十九日寒河朝利雅翁從來斷金のしたしみ有會談にな
をはらひたがひに手を拍て一笑す

玉まく葛いてや貴様にはひよりてん

高友座にみちこゝろよく百韻たりぬ國に砥柱の臣あ
り久松氏一知軒の君といふ海路百里を隔て青雲のま

じはりにはちず廿一日朝利雅士につれられてはじめ
て屋梁のものと顔色をあはせ百年の心頭をかたり屢
高門に出入しも清風に手を携へ落月に顔をあつめわ
が身にあまれる御心ざしいつか忘れん忝も予が歌門
にいらせ給ひて間々翁と名つき給ひわれをめぐみな
つけしめ給ふ詠歌大概伊勢ものがたりなどを講じ同
志數輩をまねかせ仁惠溫柔の質まことに他にことな
り

廿二日御興行

御木たちのまけり給ふ中に松久し

一時軒

ことに時めくせみの初吟

一知軒

おなじき大臣長沼氏扁舟君は一知軒の君と叔姪のし
たしみ有一日招かせ給ひて予をも席のすゑにすゝめ
給ひぬ刺史大君の御供あそばし五七日のうちに江府
に趣かせぬ時の挨拶をつぶやきそれに小序を書いてさ
さげ奉るべきよし宣ひければすこしばかりむしろを
しりぞきて一句をひねりいだして書付ぬ

國の長のなにがしの君遙なるむさしの府に官の
事もろからずけふあすのうちに趣かせ給御馬轡
をならし御かごまはし肩をいからかし鎗よ尾尖

刀玉ぼこのみちゆゝしげに事のしつらひみえさ
せ給ふころは五月になん行々て山のべのあかの
ぬけし歌人がうちいでゝみればと讀し山部の良
香が不老不死の峯とつぶやきし容を御覽せられ
むと祝し奉りて

雪はふりつゝかなく御覽夏の旅

廿八日の夜佐藤氏一源子興行

蚊の關路さりとてはゆるせはなし人

廿九日子が假宅にひとり居し庭際にむかひつらゝ
と竹葉のさらゝと風にひゞき萱のまがき露にしめ
りてしづかなるころ蝸牛涎をながし蠻觸國をあらそ
ひつかれてこゝにふすおかしきけしきさる事なんめ
り

出々むしはものほしさほの下寐かな

此日俳士のなにがし數輩いきたり時鳥の十歌仙を
催し日を逐てみちぬ

第一 生た達磨ならはこたへん子規

有に無にはなるあけほのや夏

淺き星桂大判宿てりて

第二 巫山の事なん晝ねしてみむ蜀

一時軒
虛白菴
一泉
虛白

蠅のせゝらぬ老樂か森

籠口の酒のやとりのはるかにて

初音もかな夢くふ鳥のゆめの夏

とはおもへともやよ竹婦人

麻姑の手の桑の葉のさまぢり過て

耳に眼ありや啼つるほとゝきす

一重つきんのなつさめの山

襟すゝしく涕紙の涙のみたゝらん

麥わらの軒はあやめすたれそ郭公

御はしたちはなそれもそれかけ

二首なから右の司とみゝえしに

生酒いつれこかののむらたち子規

寝さめて白し卵の花の壁

袖鋸をとの夏垣月もれて

夜のまの山灰ふきに出にけり子規

紫革のあやめてるかけ

我宿の浪うつしへ音たけて

時鳥の名殘軒の出々むしみえし哉

はたる竹夜に生て窓にのみ臥

飲すつる玉環の水跡もなし

一泉
唱見
一泉
唱夕
一牛
唱見
一牛
故心
一牛
故心
一牛
故心
和心
故心
和心
魚也
和心
魚也
一枝盲人
魚也
一枝坊
探月

第九

覆盆子みゆめり血に泣垣ね子規

一枝

みとりの石龍なといつるころ

探月

この子等か石なとりする礫わら

一時軒

第十

聞説いづれも様のほとゝきす

探月

若葉にやすらふなる

一時軒

松は山よい茶は里にふりぬへく

虚白

なを追加の所望ありければ興をうながしぬかし

追加 子規といひけらし時もさぞな思ふ

一時軒

よねむもなつのその夏の夏

北窓

小夜西瓜小夜の枕の小夜月に

及風

八重の八盃さめてけるかな

鶯舌

沖津波すて脇さしのかいさして

一孤軒

などいひくゝて十歌仙追加ともにみちぬ

五月二日入庵といへる人のかくれ家を問侍りし松樹

嵐をつらね木葉暉をふくむしかもこのあるじ宅地と

共に耳を瀬川のながれにあらひ餓を首陽の巖に療す

こゝろばへあけくれ観念堂のもとにて念佛のみ申さ

せ手をふところにして人の忙しきを見る真に市中の

大隠なり新治つくばのみちをすぎてまたやさし連歌

の發句所望ありければ

奥ありてかくれ家遠し夏木立

脇などあり一會みちぬあくる日松生氏逸風士のもと

にまねがれぬ俄示として發句も用意なかりし座につ

きてみれば書院松蘇利^{すざり}一箇をかざられし寒雲のいろ

を洗つくし夜雨のこゑを磨し出す小池の水冷々たり

即興に申ぬいまみればはぢかはし

浪すゝしすゝりのいそのゆふざしき

この席終りて墨竹に菊一枝を書こへたる畫圖一幅も

ていでゝこれが上に賛せよと責らる一言やまざるに

忽翰を揮て書つけぬ連衆興に入ぬ

酒はなむ命をのふる芳菊愁をはらふさゝ箒いづれ

も陶潜先生熊谷法師が寵らかしけるもてあそびも

の也これもこのすみかにかへんなんいさ

菊竹葉酒のすむへき所也

こゝに又坂ノ上の何がしとて風流の秀才あり江府に

馬蹄をうながし給ふ前夜さすがの好士とて予をまね

ぎて五更の三點にみちぬ

たひちよけむ鳶楓は玄けりたれとも又

五月五日家々の軒のつまゝによもぎあやめ栲の木

など思ひ／＼にさしまじへぬこの日蘭にゆめみし草
を闘め葛のかたひら風をふくみて煮なひ羅の扇雪を
たゝみてかろかなる節みやこも鄙もおなじ有さま
也

五月飛脚蓬菖蒲にさはらさり

と申ければ又あるすきものきたりていまひとつ發句
をつゝくり小序のおかしきを書へよとせちにいへ
ば玉蒲の香はしき一盃をすゝりあとさきもしらぬ酔
のまぎれに書てあたへぬ人わらはれになむ

五月五日のあけぼのやゝひましろきにむすこの
大將わこの中將などさらしのかたびらあきやう
のものに帶のしりたゝくさにむすびなしこゝら
わめきありき給ふおほちの竹馬いとさう／＼し
くかぶとのまがきなと所せげなるにたびねのや
せ坊主こゝかしこさまよひさゝの葉のにはいに
舌うちならしてよみける

のほりのたゝすまゐ粽のすめる軒はかな

このとし早魃殃をなして百姓おほく悲哀しやまべに
つゝみうちて龍の車をむかへ里べにかねをならして
雷公をせむされどもけふまで雨ふらず國中の代官職

郡の長ひとへに民の上をなげき三島大明神の社司田
内治部少輔光近をして雨の祈をなさしめ給ふあくる
六日子にも歌よみてなるいかづちをむかへよなどせ
め給ふ人有けり再三辭すれどもゆるさずみづからも
農をあわれむこゝろます／＼にして一首をよみて奉
りぬ時に雨氣急にもよほし四方あまねく寛望の民を
よみがへらしむ治部少輔もふかくよろこび給ひて文
をして褒美し給ふその時に當て一篇の文章にはしめ
終りの意趣をのべ三島の實前に納めぬ天公はやく滂
沱のうるほひをくだし給ふ事誠に精誠の一念に通
しならむと有がたくもたうとくもありける

伊豫州温泉郡三島大明神の實前に雨をこふ事なり
てのちさゝげ奉る文

天和の二のとしう月のはじめよりさ月の初さなへう
ふるころまで國のうちおほいに照とをり小田かへす
おのこは鋤をすてゝなげきはたものうへし女はかさ
をかたぶけてかなしみ岩根樹のたち草のかき葉まで
色をうしなひ青山をからやまになすわざはひとなん
みえけるさるにより國中在々所々たなつものゝ收を
させる郡の奉行代官の職當社神官從五位下行攝津守

藤原朝臣田内盛次その家をつぐ従五位下治部少輔
藤原朝臣光近のなにがしに雨こふ事の祈をなし仰給
ふこれによりて五月五日のあけぼのひましろきころ
よりみつがきをはらひしめなわをひき清淨潔齋にし
先はじめにみこ神樂を奏し次に九番の御神樂をすゝ
め

舞口 兒神樂 詫散 神向 四天 歸衣 山ノ王

長刀 王子

國中のあらぶる神職をつかさあつめにあつめ給ひ鼓
笛はたほこをもて舞かなで行ひなし給ふに治部の少
輔光近ことに三首の和歌を詠じかんふりをかたづけ
笏を直くし氣息整々動靜堂々の誠をつくし給ふ三首
の和歌は

忘れすやいのるゑるしをいにしへは

みしまの神と人そあふきし

雨風を時にはとこすめくみあらは

民の草葉のうるほふもみん

神をあふく心のたねもまきそへん

雨の祈のゑるしあらせよ

まことに殊勝の事になむかくして予にもちからをそ

へて一首をさゝげよと國の大臣人をもてつゝしみの
たまひ聞えければ身をあらひ衣のちりをくらひあけ
る六日のあけがた

敬恭勸三請

高麗神於三島大明神寶前奉請雨幣帛詠一首

和歌一

海若の雲の車のみゆきあれ

民をうるほすみちしたらすは

となんみづからが筆してゑたゝめ新しき衣裳をかひ
つくるひ直に大明神の御舍ちかくさしあげ壇のもと
にゑばし默生し奉り仰願くばこの詠により安國とた
いらげくゑろしめせけふより三日をすごさす雨のく
だらん事をこふもし雨くだらずは神徳うたがひあり
和歌一道はながくよみたてまつらじ神感應ましまさ
ばなをこのみちをたふとみ神前に奉幣をなすべしと
右の歌七たびおしかへし吟じあなたうとくゝと拜し
手をたゝき神慮をうごかし壇のもとをいでぬ 抑此
三島大明神は延喜式神名帳に載る所温泉郡四座之内
阿沼美神社名神大是也日本總鎮守大山積の神也むか
し伊弉諾の尊劔をぬきて軻遇突智をきりて三段にな

す其一段は雷の神となり一段は大山積の神となり一段は高龍たかりゅうの神となる高龍の神は龍神なり是則和州廣瀬龍田貴布禰同一體にして雨をくだすべきの神靈也かの能因法師がなはしろ水にせきくだせとよみ奉りしも此社の事となん聞えしなどか納受なからむと渴仰の思をなし社中をさりぬかゝる所に雨の八重雲を起し空あまねく溟滓めいしとくもりおなし夜の子の時より雨そぼふりかのあけぼの頻になむみえける農夫さはいでみぞをさらへ樋を拂ひしきさきの用意をなしかる國中の益人らちまたに諷ひ野に手うつ計おほかり治部少輔もよろこびにたへず神威有かたきよし文してそのおくに

かよひけり人の誠はわたつうみの

そこ井ゑられぬ神こゝろにも

四方津國いまそうるほふあまねくも

雲の車の行幸待えて

となむ兩首の和歌に不思議神妙の褒美のこと葉をそへ給りぬ誠に御神樂の徳和歌の感動おほかたの事ならすすゑの代とても神明の誠を感じしろしめす事いつわりなくおぼえみづからのよろこび骨にとをりむ

ねにしみぬこれによりてかゝる有がたき徳用をこまやかにしるし三島大明神の社中に納め後の人にもしらしめむと神慮應諾のからからぬこゝろを治部少輔と共におほくよろこびかくのごとく擁したて奉りき五月十日高場氏井海翁にまねがれて

君しよければ早苗國土人のひつ

そのうち西行法師柳かげにたちやすらふ風景を書たる畫圖一幅携へて賛せよとのたまふ畫圖は井海の息なにかしといへる寧馨兒の筆也さるいとないまだ髫齡の人にしてかゝるすみいろ筆づかひ古今の精妙也これにむかいてわつかに書す

このひとりの法しみちのべの水にあしをあらひて又共にものいはす

涼しきこゝろ筆にとまりつれ柳

十五日和心亭興行

玉の臺もなにせむ汗のむくら生飯の麥

むかし後漢の光武薊州より東南にはせ南宮にいたり風雨にあひ給ふころ光武帝車をいれてあるやとりにいらせぬ馮異とりあへず麥の飯を奉りぬ帝即位の後詔して曰漳沱河たがの麥飴いまに忘れずまことにこの飯

らひをまつのみ也かつまたのちのかたみともなりて
むかし

に冷汁そへて調しいでたる風味大牢の滋味にかへが
たし六月はじめのころ俳士あまたつれ／＼草を講せ
む事をこふのぞみにまかせて淨蓮寺法泉寺の兩亭に
して日々辰の刻より講筵をひらく老君の徒貴賤の族
尤士僧の歴々凡二百有餘人群をなして列につく堂中
に袂をかへげ門外に塵をあぐみなこれこの身の眉目
なに事か是にしかむやあるときは不才をはぢて兩腋
汗ながる放浪たる閑人のたのしみ也そのうち文雅の
士十人あまり源氏きりつぼは／＼木々の巻よりよみて
聞せよとさらに宣ふめれば折々講じて一榻の談に千
古の口授のこらすよみて全く三諦四門の旨をたゞく
兩卷終りてのちなにがしの中村氏不審の一條をのべ
五言の詩をもてみせ給ふ姪風のものがり無道の草
紙いたづらに上中下まで其文章のはなをすゝり形管
のうるはしきをねふるさらに行跡の益なく人倫のみ
ちに背き實學のみるべきにあらずなに／＼よりてかも
てあそびけむいぶかしき事よなんと難破おほかり予
席にすゝみ勸善懲惡の理りをのべ邪正是非のわかれ
をたゞす一座まことに服し給ひてこの談の事終りぬ
中村氏に答し小序一絶ともにこゝに書して滿堂のわ

壬戌之夏二三月余寓_ニ止于豫州松山_一之次繼素五七人
揖_レ予而言曰欲_レ談_ニ源氏桐壺等本之兩卷_一予不_レ能_レ辭
遂余述_ニ受_レ師解_レ惑_レ之大概_一焉世儒謂談_ニ源氏_一詠_ニ和
歌_一果何益矣唯欲_レ使_ニ人_一憫_ニ好色之淫行_一乎人情易_レ流
淫泥於_レ嫺_レ之乎是招_レ禍之媒而不_レ察_レ之甚_ニ於授_レ賊
以_レ及是言也_レ不_レ知_ニ學不_レ深_ニ於斯_一者之論也_レ源氏
之流_一含_ニ和歌之英_一者間竊可_ニ讀而見_一者乎詩經列女
傳亦齊_ニ源氏_一豈其淫行之論乎時習_レ之不_ニ亦說_ニ乎于
時有_ニ竹村氏老儒_一効_ニ蘇武之體_一賦_ニ五言之詩_一嘉_ニ尙
余之風姿_一詩中纔二十字言_レ道言_レ德言_ニ野馬_一言_ニ塵
埃_一皆深矣乎於_レ是漫汚_ニ韻礎_一以備_ニ大人之軒渠_一云_レ爾

德高一老身

品潔自無塵

風骨詩中露

養_レ閑遺世人

望月の亭興行

酒のみをうこかす花ゆの青葉になりゆくまで

ある人山下に庵をむすびあしたには風の瑟瑟たるを
きゝゆふべには雨の凄々たるをあはれみ所々に花を
うへさせてたのしめる其やどりの檐前に十字の句を

こふ吟哦すればはづかしされどもかいすてむもくち
おし

松高風入座花謝雪生窓

六月十八日岡本氏なにがしのもとにまかりぬ池邊石
をたゝみ清泉巖をふく東道の主人千古の風流いふに
たらずひとつの古松貞固として翠をかゝげ陰翳とし
て下にたゝすむ紫石潭のすゝりにむかひ黒蟠龍のす
みをすり白兎穎の筆をならし忽に文なりぬ

爰の池べに松ひとつあり定家の卿のしづかなる
おとこのみやこにもにぬとよみし又陶淵明のし
やれたる翁の冬嶺秀と吟せしもふもとなる哉え
だぶりうねくり葉のさまは龍のひげに鑷あてた
るやうになん見るからぞつとしたるはかのこと
葉をかはす賓客もおしだまるべき景象也さはお
もへども此言中の言も又しかなりと思ひ取てを
さへて

松青し風羅月はない時もあり

つゐにこの發句にて百韻もみちぬ又あるじの人頭巾
をいたゝきし石を盆にしすべてその有さまをかゝし
むこの石初平が筆にあらず宋人の燕にならひまこと

に奇怪の石なり

もろこしの望夫石は古しわか國の幞石は新し虎
石はぬれもの也定石は閑也この人に似たる石に
向つてとふいかなるかこれ石といへども不_レ答
不_レ笑しかも其精礫々たる一箇のもの也これを
盆にすへて座右におくあるじのたのしみとする
は彼君子の山を好のたぐひならんかしこの樂々
の後命は石とゝもに長生なり長生の長生たるは
無心體の第一葉してさらにまたもとの人也さる
によりて字して石居士と名づくえぼしおやはた
ぞ一時軒のぬし飯袋子也阿々

一朝軒一孤は師弟束修の禮あつく函丈のまじはりを
重くなし給ふまことに不才のわれたゝに章句の師た
る事をはづこの人酒家の朱箔をかゝげこゝろばへ洒
落にして行客をとゝめ清歌を諷ひて羽觴をとばす風
雅のたのしみ無邊の興いかばかりぞや

不二涌出それもしらめや酒一夜

この百韻園中俳諧會座の終りなればあしたより威儀
をつくらひ連衆扇を願にさへ執事時々吟をなす名
殘になりて櫻を正花にもらひて終りぬ人々めづらに

聞え給ふ

習日ちかきわたりのさと譽國山寶嚴寺に詣じ一遍上人自作の形像を拜し住持の上人に對し縁起一卷をよみぬ殊勝はかりなくこそ六月二十日石手寺といふにまねがる後に翠微の山を負前に清川のながれをいだく折ふし小雨そゝぎて草木の濃かなるをながめ鳥のむらがりとはぶは下堂の鐘のひびきになんこゝろおのづからすみのぼるけしきいふもさら也この日浴室けぶりをなびかし曲々たる檻外涼風生じて歷々の數輩とおなじくゆあみす阿闍梨の質柔和にして竟日機を忘れてかたる院中の什物來由の畫圖かすをしらす其中に足利尊氏將軍自筆の文數通を歷覽しひとつふたつすきうつしにして歸りぬ筆のいきほひ佐理をあざむき行成をすが目にす名譽の草聖也爰に車返ししの櫻といふ名木ありこれはかの崇徳院さぬきの國にながされさせ給ふときふたゝびかへりみ給ふ木なりとぞ其とき崇徳院の御製に

名にしおはゝまたもきてみん花の春

ゆふかけのこる雪の古寺

とあそばしけるとぞ阿闍梨のかたり給ひぬ三重の塔

雲にそびえ十二社權現の社松杉風外にかゝやきすべ
てもものふりし有さま筆もなを力たらず

ある日いとまあるころ道後の鹽湯に浴し所の風景を
たばね事の來歴を考るにむかし大穴持命少彥名命こ
の國をめぐり給ふ少彥名命は慈悲深重にして普く世
の人をあはれみ病あれば藥草を取て民に教へていや
し給ふ大穴持の命はもうゝあらくましゝ猛威を
もて民を治給ふしかれども國家を平治する事あたは
ずみづから慚愧して絶入し給へり少彥名命おどろき
ましゝ大分造見湯をもちほこびきて大穴持の命を
湯にひたしたまへばそのまゝよみかへらせ給ふ湯中
の玉石をふみまろはして起あがりきその玉の石四尺
まはりのたゞうつくしく圓なるかたちにしててりか
がやきぬいまに湯の前にみえ侍り古き歌に
伊よのゆの汀にたてる玉の石

これそ神代のゑるしなりける

舊記を尋るに人皇十二代景行天皇太后八坂入姫命を
伴ひ行幸し給ひ仲哀天皇神功皇后を伴ひ行幸し給ふ
そのゝち推古天皇の四年に聖德太子の葛城の臣高麗
の僧惠總等供奉していらせ給ひ舒明天皇齊明天皇天

智天皇天武天皇の四君忝も海路の風波をしのぎいた
らせ給ふほどの温泉まことにわが日の本第一の名湯
也萬葉の三の卷にも

射さ庭の岡にたゝしてうたふ思ひ

いふ思ひせしみゆのく

など赤人のよみしおぼろげならぬ事也天徳雲巖和尚
の湯の記に詳に書給ひし皆風土記の趣なりこの湯の
つゞきに湯月の八幡宮とて國の大守定長公岩清水の
社をうつしていさゝかたがふ事なき宮井有公輪巧を
ほどこし匠石材をえらぶしろき壁は隔曜として月の
ごとくに照りありきはしらは爛漫としていなづまの
ごとくにひらめき雲のうつばり藻のつかばしらかず
をつくして鏤たり樓門より遙にのぞめば南風に襟を
ひらき平原のかた遠く目を極れば夕陽に眉をしいむ
邊鄙と思へども都にしらぬ絶景なり菊地氏東匀筆を
揮て上梁の文をなすこの東匀は名儒のほまれありて
江府にすみ講耕し給ふ予志學のとしかれにも隨ひて
ものまなびせしその書たる文章まことにむかしな
つかしこの所の東にあたりてあまの香久山のかたわ
れあま山といふあり其山方五十町高さ十町にたらず

つゞける峯もなく野中に見えたり風土記曰

天上有山分面墮地一片爲伊豫國之天山一片爲三
大和國之香山一かゝる名山なりおなじつゞきに星が
岳といひて元弘建武の頃宮方に屬したる土居の次郎
得能の三郎長門の探題上野介時直とたゝかひし所あ
りたちよりて一見しぬこのほか大森彦七が猿樂を催
せし金蓮寺といふ舊跡蒲の御曹子葬し稱名寺佐々木
の四郎合戦のころ西嶺の日影をまねきしに其ねがひ
みちてのち扇をこめて正體としたる日招の八幡あま
たの境地をくわしく見まほしかりしかどもいとまな
くてやみぬ中にもことにすぐれて名高き營生山ゆる
ぎのはし十里ばかりあなたときこえし魍魎のみちを
ゆき無人の境なり山はるかにして松栢のをぐらきを
ひらき巉岩のさがしきにのぼり不思議の峰なりとぞ
冷泉爲頼卿の歌に

朝なきにこき出てみれば伊豫路なる

すけのおやまにくもかゝるみゆ

とよみし所也そこに海岸山岩屋寺とて空海の開き給
ふ所もあり則大師の歌に

山高み谷の朝霧海にゝて

松ふく風やなみにたとへん

この山を久方山と名づく嵩の上に卒都婆二本又金佛
一體あり人倫の行所にあらず壁立萬仞のみどりをと
り長松樛木の苔をよちたれかやはぬみちなりともわ
けのぼるべき事なりしにいのちをたのみてやみぬい
まおもへば臍くふ事になむかれこれ松山の城下に百
餘日滞留して六月のすゑの九日までにたちなむとせ
しに久松氏の君より

又のあしいよすのあきをわすれすに

と書こさせ給ひて脇をつかふまつるべきよし有けれ
ばとりあへず

さぬきわらふたかしこまり月

となむ申てまりでぬ

白水郎子記行卷の一終

あまの子のすさび巻の二

七月一日のあけぼの野田氏一牛子のもとにまねかれ
けふ首途の一盞をかたぶけ後會の情をかはしなにく
れの用意かすくゝなるうちに俳士一泉一孤一源なに
がしの清悦柳を折て名残をおしみ樽を携てわかれを
かなしむ馬に荷つけて例の僕ひとり迢々たる客路に
趣く一山行つくして一山青くこゝに憩ひかしこに休
らふ赤橋駿河守が息駿太郎重時といふものゝ元弘
の頃取籠りし立烏帽子が峰を眺めやり名にしおふ風
早の浦につき所のけしきを見めぐりぬ堀川の百首に
風早の沖つしほさるたかくとも

いたてにはしれむこの浦まで

と公實のよみ給ひし又萬葉集に

わかゆゑにいもなけくらし風早の

浦の沖邊に霧たなひけり

などいひし所也この咏吟妻もたぬ身にことに哀にお
ばえし漸して斜陽影さびしくなれば伴ふ俳士のゑり

たる日蓮宗法善寺にやどり取て牢枕まづかなる比す
き人そゝのかして初秋の發句をこふ辭しがたくて

有とやいはん法華七軸ゆふへの秋

是は法華一部七卷の軸六萬三千三百八十四文字のう
ちに秋といふ字のなきこゝろを申ぬ二日の曉俳士と
たもとをわかち東西にさりて菊間といふ所につきた
だちにそれがもとより扁舟の便有藝州嚴島にわたり
折ふし會式のうちなれば頻に思ひを記し二十餘里の
海路を常のまゝにこゝろかろくとびの順風に浪を
ならしあくる三日のあけぼの白日の昇るころいつく
しまの汀につく市店すがりけれ共悉むしろをおほい
近國の商賈袖をつらね康衢の旅客群をなせり傍に芝
居をかまへつゝみをうち笛をふく其中をおしわけお
しわけゆく人の沓のしりへをふみ名だゝる回廊にい
たりて先神廟に賽し頭をあげて見るに形々たる靈宮
たかくおほいにして赫々たる金楹ひとしく連り社人
あまた烏帽子直垂を著し其體おごそか也巍々たる華
表柱四拱ばかりの楠にして潮の漫々たるになかばひ
たりて渺たる蒼海のおもしろきけしき誠に畫師も筆
をなげ文士も口をつぐみ歌人もこと葉をとづうち仰

向て額のたゞしきを見れば表は後ならの院裏は道風が筆なりと見えて筆法うすろかず巧に彫る事人皆おどろきわれもまた手をうつ神代巻に天照大神以三素盞鳴尊八坂瓊之曲玉化生神號市杵島姫命是居三遠瀛者也神名帳安藝國佐伯郡伊都岐島神これ世にいひつたふ寺は沙渴羅龍王の第三のむすめなりと聞しなを來由をしらまほしく老たる社司にといけれ共いつの年にかありけん縁起のかすく回録に及びしそのうちしる人なしといひぬその夜は荒涼とものさびしき旅店にふし壁によこたふ殘雨のあかつきほいゆがみし籃輿にうちのり彌山にのぼる二十町あまりのみち左右皆十丈二十丈のいはほにして峨々と聳えて雲外の山中々巨靈に手を以てもをしがたく毛女が毛もふるふつき所々の石のほら殘暑のあせそのまゝきえうせ膚忽にさむくなりぬ彌山の本尊は虚空藏菩薩千手觀音勢至の像兩脇に儼然たり前に希代の石有三光石と名づく高さ六寸圓なる廻りは八寸餘也もと土佐國月の灘より漁する白水郎の網にかゝりて此山にもて來しと寺僧の口談也この石くろくうつくしくして表に月星の容曄々として明か也裏の方に日輪の影う

すくれなゐに顯はる人間世の作にあらず宋人の實にあらず自然の奇石也京洛の和光院此山に求聞くもん持くりて籠給ふそこに對談し和歌の事に及ぶ則この石の徳用をつらねよとせつにのたまへば取あへず筆をとめてみだりに書附ぬ

明らけき三の光の石になを

たへぬみのりのかけをみるかな

あまたゝび褒稱し給ふ山をめぐりて大師のつくり給ふ岩谷不動の像かくれなき沙干石かれこれ見つくして山のなかばにさがれば一字の樓に古き鐘あり扇三たけにあまれる口幅冷々として響をふくむ一たびつかば聲人間に徹して煩惱のゆめさめつべき有さま也銘に治承元年右大將平宗盛寄進之となるほど鮮明にみえぬ麓におりて大願寺といふ梵刹あり庭上に大きな釜有いまの世にまれ也永祿七年大江元就鑄之としかたはらにきざみたり西陸に日かたぶきて一葉秋聲を報ずなをあかず回廊にまゐりすへ反橋により瀾漫とひたゝけし島回しまわを見れば梟むらがりて洲にねぶり鹿樓にあつまりてこゑをあぐ時に百八の燈ひかりみち浪に映じてめづらか也五日の明がた一輩のす

るにのりうつり菊間のさにかへるとて

みつからたひやあまのつり舟ふしりの秋

八十島かけてと思ふなるべし落照かげわづかなるこ
ろ舟汀につき六日のゆふべ遍照院にまねかる此寺に
大師のみづからきざみ給ふ自像有阿闍梨鎗をもて開
かせたゝちにみちびき給ふまばし拜してまじぞく一
會興行と有ければ

とこそ見えし大師のあそはすけさの露

これは大師の筆法垂露の點を申ぬやがてあざりの脇
に大師の雲水了々とつくらせし語をとり給ひて

ころなむ秋の雲水の僧

亮意僧都

と附給ひ歌仙みちぬ七日もおなじ所にとゝまりて

女房はなしなかも居りけり中のほし

かの常はゆゝしきたなばたもうらやまれぬるものに
ぞ有けるとよめるはしをふくみてたゞ心の上をのみ
申ぬ誠にこよひは二星明河をわたり一年一度の情を
のぶる夜ひとへにあはれなりし

七月八日大井のさといいでその日のくれに今治の浦
黒部加墨のやどり尋て馬よりをりぬ九日一會興行の
もよほしにて所のすき人山水雅士のもとにあなひし

かれこれ五七人集りぬ古老の如淡卜也このころきこ
えし西智山月などいへる若人也

馬を下て糠や草くき宿のあき

一時軒

行水をやれくれ□□□露

加墨

風情浪うちくたく月おしまれて

山水

翌日山水丈より文してそのおくにかくなむ見えける
徳はなには風や加ふる時は萩すゝき

一輩の行所身のかるき秋

と脇などしてむつまじくなりぬこゝに又なにがしの
士あり鐘旭の畫圖をもてわたりて賛せよとのぞまれ
ければ筆をとりて申ぬ

魔病をはらふ三尺の劔は清水に鈍ぎ

熱氣をはちく一階の冠は青天をさす

世のあつさ鐘旭かさますけさや秋

十一日のあけぼのいま張の浦より船よそひし加墨の
父のなにがし俳士ト也かれこれ二三人鳳團の茶窓ひ
とつ竹根の酒樽のみ事のたらぬをたのしみとして大
三島の明神に参りぬ船路七里の所生涯一葉の浪こゝ
の孤村に吟じかしこの櫓聲に伴ひ思ふ汀に到りつき
神官豊前寺なにがしのわたりに入これにみちびかれ

て宮詣しぬ碧の瓦鴛鴦をれ珠のとばり鳥雀巢くひ里
 の子は牛引すてゝ拜殿にふし人氣たえたる有さま也
 むかし大貳太宰佐理卿つくしの任はてゝ歸り給ふと
 きこの沖にとゞまり二三日風浪あらくして船いです
 其夜の夢に明神つげてのたまはく社の額をかけさら
 ずば船は出じとなむみえける翌日佐理船のはた板を
 打わりて書し給ふ風をのまゝゑづかになりて行給ふ
 となん今に宮中にこめ置華表にはそれをうつしてほ
 かにかけぬまことの額の見まくほしくつゝしみて所
 望しければ豊前みづから社檀の扉をひらき三尺計の
 船板を抱て出ぬ予もとより翰墨の好ものなればつら
 つらと口して透うつしになして歸りし龍蛇の勢鸞鳳
 の翼古今の奇筆也又かの能因法師伊豫守實綱に具せ
 られてこの所に來り一首の歌を詠じ鬼神をなかしむ
 不思議の靈廟也

壯哉三島大山積

廟宇儼然瞰緑波

佐理躍龍千古筆

能因泣鬼神一篇歌

と卽興につくり書附て豊前の許にさし置ぬ俳諧の句
 をも望れければそのすゑにものしぬ

額板霜をへぬかれきりくすさりとては

こゝかしこ徘徊して宮めぐりをなしぬ社のうしろの
 松のゑげみに高くおほいなる石の塔有來歴を委しく
 とへばむかし一遍上人の發心のころすへおかれしと
 ぞ此塔の内に歌一首みえぬ
 にしに行山の岩かとふみ見れば

これこそみちのさはりなりけれ

まことに殊勝ばかりなし定家卿の三百首のうちにも
 こゝをよませ給ふ

いやり行おほ山すみはみしま江の

あしきもなとか鳥を取らん

此しまの木凡數十圍に及ぶ橡樟百鎗株えだをたれ日
 かげを掩ひおほいさ牛をかくす木の下白晝なをくら
 しそのほかは松柏生かさなりて所々に耕作の民すみ
 てもなさびしくあらしの音鳥のこゑの仙家ともいひ
 つべし

日本

總

鎮

守

大 山 積 大 明 神

咸^{カチ}地に日浴して纜を解船をはなつ夜半に及びて今張の浦に歸ぬ其翌圓光寺凸嶺和尚を尋ねしばしもの語りて詩談に及ぶかたのごとくの詩僧にして禪心明月の腸をあらひ句を磨く鐵叟名をよせ説心すぎてのちこの人ならん平生の口號三十首よみて見れば恰玉をまろばすこゝにむかひて頓に一絶を奉りぬ

口號長吟三十首 毫端俊逸句清新

何當^下登^三凸嶺^一休去^上 堪^レ羨禪林脫^三俗塵^一
かくいひて歸を告げれば和尚とりあへず

邂逅相逢親相語 早催^三歸計^一我何爲

此翁行李人應^レ賞 能賦^レ歌兮能賦^レ詩

この吟終りてそこをさりぬ

七月十六日壬生川にまかるとて俳士如談の好士とおなじく笠を携へ節を曳所々の景致を見二三里ばかり

行々て脇屋刑部義助の居を構られし國分にわたりかの舊跡を尋ねしに里人出ておしへぬ山のはそみちを分て石角衣をやぶり藤枝眼をさすわたりをこへひとつの岡邊有其前の丘の上に石塔見えぬ首藤氏亦右衛門の尉發願してちかきころ築きぬといひていまだ苔も生ず

脇屋刑部義助の神廟と真中に大字に書して左の方に曆應三年五月二十一日に卒すとみえぬ墨うすろぎ明らかに見えずされば僕をよびて矢立の墨をいれ結縁してさりぬむかしおぼえて哀也それより鐵牛和尚のひらき給ふ觀念寺を見やりて石決山の麓をとをりしこの山口國第一の高山にして白雲とこしなへにめぐり翠黛遠くみゆ半岫に寺有前神寺と名づく本尊は釋迦如來也とぞ絶頂を彌阿陀來迎の峰といふ歌にいよのかねと讀し所也萬葉集第三に赤人の詠有よろしき國とこゝしかもいよのたかねの射狹庭^{イサハ}の

名寄に洞院左大臣

みちとをきいよの高ねを尋ねても

人のゆく衛をわれにまらせよ

(長歌下略)

爲世卿の歌ときしなにに有らんをらずかし

忘れては人のふしと思ふらん

霞にまかふいよの大たけ

この山常に栖鶻の危巢をさぐり玉爪金眸の鷹をすましむ霜をふみて千里に捷雲に翫て一天の秋をゑるなどうそぶき行々て生壬川寛水子のもとにいるその夜數輩をまねぐ

難波にもめつら墨畫の浦回なりけり秋

此所に繩しき天神勸請の社有神官は矢野一源とて予が俳門に入し人也月次のはじめに發句所望ありければ

影つたへけり是善卿の庭の月

この翌日國地のはじめ浮膏のごとく漂蕩るころ葦牙のかたち抽出しけしきを書たる畫圖に思ふ事かけと有ければ一念未分のとき寂然たるこゝろを十七字につらね書附ぬ

寂しさは一念未分ゆふへよ秋

かゝるついでに天神の縁起一卷書て寄進すべきよしあまたゝび強られければみづから文章をなし一軸に書して社内に納めぬ

壬生川綱敷天神の縁起

夫敬考るに神道は至誠自然の物より生出て古今にわたり宇宙にみち人道は明德虚靈の理より顯れて始終をつらぬき三才を兼ぬ神人一致にして分れいふべきにあらず爰に豫州桑村郡壬生川^{にが}の浦に一字の社有人普く尊崇の思ひをなすとぞ竊に傳へ聞にいつの年いつの日にか有けん菅ノ道真^のにの故にか事有てゑらぬ火のつくしの國に貶謫の囚れとなり下り給ふころ一葉漂泊して逆風浪をいからしめ島嶼縈回して甚雨樹をうごかす菅氏黙々として一首の詠をあそばしぬ

風こそは浪のはらをば立させれ

とかなき舟のかゝるへきとは

吟聲終らせ給ふとひとしく依舊青山緑樹多く忽に風浪の難を遁させ大津の邊にゐたる大船の舳づなときはなち艫づな解はなち御船平砂のほとりにやすくつきぬそれより其所を御船の町と號し船中の疲を休し給ふに綱を曲しめ坐とし給ふこれが後の舟人遠津海に漕はなれ朝のみ霧夕のみ霧に行さきおぼつかなく風波の煩まぬかれがたく既命を鯁ふく息にいれられ寶を沙のそこにゑづめむと卿も恭くこの神祿を吃

するに其愁を休する事神靈不測の妙也此時の御容貌を移して繩敷の天神と號し八百年來の尊號今に儼然たり昔時宮社の前に屈蟠とわだかまる老松有つるに是くちてあともなく成ぬ世の轉變はかりがたし漸其ゑるしを天神の木となんいひつたへぬ境もけがれ御舎を安置すべき所にあらす社官矢野氏越後守義重ひとり力を起し茂木がもとを燒鎌のとかまをもてうち拂ひ新河の流のほとりに一の小社を造立しぬ頃は萬治元年九月の事なりなを此地も牛馬のちにけがれよからずとて時の代官淺村氏與左衛門尉壬生川のなにがし稻井氏又左衛門如風共に信仰の心ふかく恭敬の思ひ淺からずかのほこらを神宮と崇舞殿拜殿を経營して寛文三年正月の末に宮遷なりぬこのごろ如風子が誠を神も感じ思し召してにやある夜老翁一人忽爾と現じて告て曰

露の玉もとの雫と落やせん

と明らかにこの句を顯し人もしるやみ瘡をなやまんに速に與ふべし忽におちなんぞと告終りてゆめはさめぬ果して偏にわらはやみのものに與ふ靈驗あらずといふ事なし不思議の神祕也是を思ふに利生若人を

へだて効驗うたゝ身にむなくばたれか徒に參下向の歩をつくしたれか閑に一時禮拜の頭のうなだれんなを神宮の形ばかりなるを愁て稻井如風が子一音軒寛水社司矢野義重の子義房活水軒と山をひとつにし延寶四丙辰のとし所々造立の不足を置たらはしめ近里遠郷の老若男女をすゝめもとより一人の心は千萬人のこゝろなれば木をきり板をはこぶもの手をさしおかず石を疊み土をならして勞をいとはずさながら其功徒ならず其社頭の遠近の絶境は東に小深里遠く見え近くは鷺のもり蒼々として白鷺夜宿して南に篠が峰青くそびへ中にいひの高根峨々として白雲鎮にとゞまる西は觀世音の西山歷功不思議の徳用を顯し象かもり觀念寺の世尊は常住不滅の體相をなし北は枝山の靈佛は瑠璃の光を照し大崎山の龍神は雲雨のうるほひをみたしめ皆是綱敷をめぐりて山海の大觀をなすもの也予たま／＼この地を修行し歌道興起をすゝめぬ旅寓のいとまをうかひ社官義房のこふにまかせ七月廿五日のあけぼの筆を霧の香にまめしつなしきの來由をえるし和歌の枝葉をはびこらしめ息災の支流を蒙しめなんと共に願望をなしこの社中に

納めぬ詩歌連俳に心ざしある輩は朝に詣でゆふべに
信じ管家の大徳を仰ぐべき事彌つゝしみ宗源の一途
明らかなるこゝろを依し奉りき

それより船原といふ里にまねがれてまばし逗留す
荇の名國にかくれず白樂天が秋風吹落荇蕩花とつ
りけむも思ひ出られぬ可水軒一竹のもとにて

たはこ紅葉してみよしのゝさくらもよしやなに
別宮一風子興行酒家なれば

酒よひしけり門むくらはふ秋もなし

小松の縣は一柳親衛校尉の領地也家臣喜多川一言雅
士のもとに行て一日饗應の有さまことに丁寧なりき

一棟梁の姿ならむ小松の秋よ

青々一寸松中有棟梁姿と東坡が作りし泛をすゝり
たるなるべし十町ばかり行て氷見の里に至り高橋氏
岸竹のもとにやどり翌日興行

白砂の壁たふものに薦まはゆし

隣家同氏素岸子興行

世帯さはらし米の茂山葉山の秋

この所より竹輿にのり二里ばかり小田のほそみちを
分々て西條といふ所にいそぎて矢野重次文士のもと

に入ぬ其ひとゝなり氣稟豪傑にしてまかも風雅萬丈
のすきもの也予と從來書を通じ手をとらずしてむつ
まし

歌の鹵路^{ろじ}入いな負とりにさそはれつ

さゝれ竹下^グ踏草の色ふく 重次

同氏夢休翁の庵室にして興行

茶に口そゝき石にまくらすいほりの秋

牆にむくら生竹窓の月 夢休

同氏一慰永安村の農にして犢牛羊となき犬吠と吼衣

食事たりてたのしむ老父われをむかへ僮僕門にまち

皆丁寧のもてなし也

鵬の羽うつ事よりゆたかやいなすゝめ

喜多川一峯軒

其人にみせむ文のから松歌のもみち

姫田一松雅士

八月九月歌の思はむころなりけり

森一舟翁舟の預りにて寒潭の月にうかび水國の秋を

よろこぶ人也

おもしろかりけり萩のうはかち鴈小舟

八月朔日寶蓮寺といふ密宗にまねかる藤のうら葉の

にはついたちころの月の事を書たるとおぼえてそれをとてあはせ心月獨朗の阿字を觀念すべく思ひて
みるや御僧ついたちころの月といひしを

と申ければ數輩あまた手を拍て輿に入いかにしてかくはのたまふといひければこの所の名を朔日むらといふとぞけふの朔ふちのうら葉の詞所の名三ながらかなひけるとなんこのむらの名さらにわれはしらす不思議の挨拶をつゝしめぬとわれもまたおどろくこの所は松平京兆尹の領し給ふ也その家臣丹羽氏未白文雅の翁文質彬々の武士也

松のそゝろなるに野菊のまはりたるもおかし

よき人にはつらく山さとの秋 未白翁

八月三日宇摩の郡に趣く萬葉の七に

たちはなのまにしをれば何とをみ

さらさてぬひしわか下ころも

仙覺抄にこの郡に有と書しこのわたりの田夫野翁にとへ共さらにゑらす年ころしたしき石田氏畫水丈人のもとにゆく折ふし江府に下り給ふとて左右事しづかならずしはし尻かけて語る

東西にわかる風月のすけかさよしやよし

陽關の曲を歌ひ隴山の歌を詠じ各天涯に袂を分つ日影かたぶきて三島に行前途二里餘田中の道をつたひ山陰の石をふむ所々に烟嵐さびしくかた／＼に泉聲むすふみち漸くれてひとりとはつく郷に子あり秋風の涙僕にくるかといへばゑりへに見えず馬奴にゆくかととへばさきにこゑなしゑらぬかげ路をやみにたどりてなにがしの正房なにがしの義堯を尋ねぬいまこそ芒鞋のこゝろよくぬきて千古の思ひをかたる

立よりけむあしの葉に雁馬に豆

二日三日滯留して歸路をつぐ

忘るなよ俳諧行脚さらは月

八月六日讃州一夜庵にいたる所のけしき聞しはものかずならず老の方にしほ山杏に高く右に有明のはま遠くさらかなり白雲幽石を抱く庭際の有さま獨木竹林にわたり小溪の風流蒼滑にして雨にうるほひ松鳴て風をきくまことに塵世の外を見る宗鑑法師心を茅檐にといめ眼を烟霞にあかしめ給ふもげにことなり也天下の多景こゝに集れり更にいふべきことの葉もなし

月白しこの一夜庵をいかむせむ

後の山路を四五反ばかりわたりて宗鑑の石塔あり
草茫々と生じけり徒に土中になかばしづめり夕陽の
僧折々落葉をはらふわれも此所にきたりて終り此塚
のもとにふせらむ事を思ひ一炷の香をひねりて感慨
やまずそれより琴彈山の八幡に詣す住持の阿闍梨に
會談し縁起をよみぬ神武のころ宇佐の地より舟わた
りし琴音を奏し給ふそれより琴彈の八幡と號するよ
し委曲の來歴也手跡は清水谷實秋卿の筆にして應永
二十三年仲春のころ也征夷將軍源義持公は加筆の判
形あざやがにみえぬ寺の名を神惠院といふこの後予
をして神惠院三字の額をかゝしむ縁をむすぶよろこ
びいくばくぞや

林昌亭興行新宅あるを風に篩ちりを月に掃ふ

瓦新し都府樓の月よりもなを

都府樓纔見ニ瓦色一觀音寺只聽ニ鐘聲ニとあるを翻案し
たる也觀音寺むらの名はいさゝかかなふべからむも
おかし

同氏宗卿興行

宿香し紫蘭の亭主かつらの影

松枝軒一味亭

人間萬事夢にはふむし竹窓に月
樂屋安次興行

藥ふかし蓬萊のある棚の洞

酒家一軌亭

酒の秋や滄浪の水もつく共に

八月十四夜雨そぼふる瀟湘洞庭目前に相ならぶ花は
さかりに月はくまなきをのみるものかはとなにがし
が書しもさる事也無妄庵のぬし宗實坊おなじ栖にす
める易藏主共に蟾影埋没し兎光浮泳すこの風致にむ
かひて一絶の詩をこふ

漠々天邊秋雨遍 座看白露綠雲橫

摧レ憶萬里無何月 蓋レ待ニ寒堂明夜晴

雨はれて里の男女皆年少にして躍をもよほすかの寒
山禪師の群女戲ニ夕陽ニ風來滿ニ路香とつくり給ふも
よそよそならず

十五夜清光愛しつべく萬里の青は千秋の爽氣この人
のたのしみさらにしりやすからず枕を高うして石頭
にうそぶく

父もなく母もなしこよひおのこの影かつら

翌日宇喜多一裏の亭に行庭上に松有弘景がおもひよ

りふかし

松の露鶴の餌のこせまたもこむ

所の秀人たれかれ集りて百韻たりぬこのついでに松の記をかけよとせめらる國辭すれ共ゆるさすつゐに筆を揮て一軸をのこしぬをあかすこの所にといまりなむと思ひしに盜賊の難所に起り人皆このさわぎにいとまなく予も心閑ならずしてむなしくさり八月二十日仁保に趣く吉田氏一樂子そのまゝ興行有此所は茶の商賈おほく家々に百斤をたくはへもろこしの建溪にことならずこれをのみて香を帶人間第二の泉塵忽一時につきぬ

爰なむ山茶袋白し月一團

ゆふ霧たゝむ石窓の峰

一 樂

賀茂田伊貞亭

茶かたりは齒牙香はしく冷か也

よし田未及興行

茶の秀たるにきくの香はしきも又なし

同一仁亭にて即興

幾許秋茶舟よるてふ國からか

是は萬葉に人丸のよめる玉もよき御ねきの國はくに

からかみれともあらぬ神からかとあること葉をもちひて申ぬ

よし田勝峯

友としよし月はあらなくとも草人木

辻氏一得翁醫家の青囊を探り道術の金匱を開くそれのもとにて

茶の霧吸て七碗清しあしたの郷

眞鍋氏茂之

酒菓子月それもそれなん煮茶こよなう

こゝに鹽田一松軒の閑亭有讒に五七里の所にして山色草門につらなり葉を折て松室をおほひ前には池をほりてはちすをうゑうしろに佛を安置して朝暮のつとめをなす濁濫の世の一閑人也予をして愛蓮の詞をかゝしむのちのかたみともなれと一軸を書てそれがもとにさしをく

愛蓮記

されはなんに尾にすめるなにかしの一松軒とこしなへに業をつとめ家をとゝのへあさむのいとまあるごとにくつをならし節を引て折々歩し給ふ別野有山を前にし池をかまへはちすをはなちてたのしむむか

し／＼起龍和尚のさとりのお話ぬけにぬけし人さへ池面に風來荷氣すゝし亭々として想見る美人の裳と興せられ又かの楊大年といひしぬれ人の嫦娥玉簪を墜すにつくられいと興有ておかしき花也まことにちいさき池なれども鑑湖三百里のよそほひさらに遠からずたれも／＼この池のめぐりはうかれさまよひぬべきことざまになんみえける此花の徳有事を濂溪のおやぢもほめて君子に比すこのはちす色香ともに用有てつちもさけぬべきなつの空はをのつからいたましからずして開いで、殊に水に生れてもしづます泥にあれ共けがれず花あれば實そなはり其花いつれは實はかくれ花の事終りぬればなにとなくあらはれいづるはかの實になん有ける内は虚にして通りほかはやすくすなほにして枝さしおほふ事もなく香はとをく聞えてことになれもてあそぼるべきにもあらずやまとの歌には濁りにしまぬとよみ釋迦佛もこの花を賞しうつくしみておほくの極樂にも功德の池をいとなみわざとならずも生いつるはこのはちすになんこれやこのうきよのほかの春ならんはなの扉のあけぼのはひとり燈をかゝげて佛につかうまつり心の濁も清

め給ふすみかにして後の持佛堂幽深也よし田の樂法師がさうしにも池にははちすところ書しかの謝靈運か廬山に入東林の池をほりわざと好てはちすをうへぬそこにて念佛して蓮社の友としたしみぬ清少納言とまたせしかの女もはすのうき葉のらうたけにてなんとなく池のほとりにおほきなるとちいさきとひろがりありくいとおかしと書しかれこれこの花の徳を書てむかし筆もかふろになりてんいま一松軒の風流はちすと共に愛せられ予も是をうなづきたびねのこのさむしろに眼をさましすゝりのちりをうちらはらひ思ふ事をかたはしばかり書ゑるしから歌一首なりぬ人のみるべきものにはあらずかし

雨晴菌苔放紅時

矯首高吟李白詩

緬憶鑑湖三百里

清香素質類西施

またかたはらに松有まばしながめて即興

琥珀うむらん霧にかくれのこもり松

百韻こゝろよくみちぬ此所は風流の人物おほく數日をへてかたるなにがしの二三子かす／＼の著述をみて

日にそへて光をそ見ることの葉の

玉もよるてふ國のうらん

このわたりに觀公阿闍梨とて密宗の宏才有_またしく
阿字の一刀を磨し悉曇の事に及び三教指歸の辨論_ま
ばく談じのちこの阿闍梨に隨ひ密印のかずくを
さづかりぬ不思議の縁也九月朔日_{ごさんやこく}五山彌谷に詣し
ぬ二里餘り行く巖さかしく藤蘿のはひまとはれる深
谷に入ぬ月は水の澄々たるを照し風は松の寥々たる
をふく左右大小の石悉佛像を彫たて萬仞の嵩人間の
攀のぼりがたき所までみな二輪の形をほりいれ蓮華
をささむ石勢參差として烏鵲はしをわたすべき所也
什物は大師持來の五鉢一箇有言語にたへず北の麓に
さがりて白瀉屏風が浦にゆく西行の詠に

屏風にはこゝろをたてゝ思ふらん

行者はかへりちこはとまらず

それより出釋迦の瀧曼陀羅寺のほとりをながめ五岳
山善通寺に行大師出生の御寺御誕生院といふうしる
の峰を火上山香色山中山筆山我拜師山と名づく

我拜師の山常にすむなるよはの月

きたりて照す峯にそ有ける

高野道範の詠也又松葉集に西行が歌とて

筆の山かきのほりてもみつる哉

苔の下なる岩のけしきを

新續古今宋縁のこの寺にきてよみ給ふ歌に

高野山その曉を契置て

こゝにもおなし月やすむらん

西行紀に善通寺にて屏風が浦をながめやりて

はるかなる山より海をみわたせは

まそ氷のたへまなりける

かゝるいにしへの事など思ひつくし_まばし見めぐり
て大僧都宥鎌に會しゆるやかにものがたりす智行高
邁の人にて文談詩話に及ぶ寶庫にのぞみて入大師自
筆の法華序品一卷有如是よりするにいたり一字く
に大師の母阿刀氏自筆の佛をそへぬふたつながら筆
法神有紙上の珠毫端の錦目にはなたれずまた道風が
筆理趣經一卷大師の恵果和尚より傳來の袈裟かゝる
事もありぬべきかと心に徹し_まばく熟覽すそのほ
か定家の筆土御門院伏見院後深草院後宇多院數十通
の勅筆みな善通寺の繪旨院宣也あくまで拜しかの西
行法師が撰集抄九卷書ける茅庵の跡さすがにあはれ
也

西行その庵の松を見て

ひさに經てわかのちのよをとへよ松

跡玄のふへき人もなき身そ

又土佐の國にまからむとて

いまこゝをわれすみうくてうかれなは

松はひとりにならむとすらん

とながめられし古松碧をたれ朶をたはむ三四間にあ
まれる竹垣そことなくゆひまはして誰とふべくもみ
えず疲節によりかへり歌一首つくり俳諧も又つぶや
く

とへよ松とはるゝ松もとふ人も

なき世にかへる筆の山風

西行の世跡玄のふへし大松茸

宥謙大僧都よろこびて一言の下に一首の絶句に歌さ
へぞやさしく

今日一時追軒慕西行之舊跡寄大松菌之

一句和歌一首奇也絶也於是賦詩歌以

送公之征鞍云爾併正

雲興高嶺五岳峯

騷人至處色濃々

俳諧宗匠一時軒

追遠朗吟西行松

君ならてたれ問よらむ舊跡の

あらぬ草木の日をかくす島

和韻二首こゝに書す小序をさしをく

筆海波瀾落玉峯 況探三言葉詞林濃

客情只有日難過 携杖先尋一箇松

其二

踏遍譚陽第一峯 世情淡處道情濃

詠歌不覺歸來晚 五岳山前獨見松

かくいひて巖松山綾川寺にたちこしぬ萬葉に安
益の郡和名に阿野郡と書しいつのころか綾の字を
書し事になん今この川筋を北條河と名づく水上は萬
仞の瀧也瀧の中に龍燈石有龍燈院の法印怪雄に會し
所の舊記世尊寺行俊卿の筆を拜すそこをいで智證
大師の開基し給ふ鷄足山金藏寺に詣し寶幢院のなに
がしにあひその事かの事などをちく尋しかどもみ
なまらぬよしにてむなしくさりぬ草鞋やぶれて丸龜
につきもとより玄たしき一釣軒一笠子の下にやどり
そのまゝ興行有ぬべきを事急々としてやみぬ發句の
みあるじのこふにまかせて

當風のたまやつららむうけの月

予が俳門の人一退軒自休子所望

をとなしき作意かれめや菊の二郎

郭門の見つけに高島氏のなにがしとて商の大家有それのもとにまねかる庭前に蘇鐵千餘株そのほか美つくし善つくして至樂のすみか也一會興行

蘇鐵の宮古廬のなにはの秋もなに

かれこれよりきて百韻終りぬ翌日瀬川鶴庵といへる儒醫の老翁有一箠子をなかだちして唱句ひとつを給ひ連歌兩句付てよと聞えければとりあへずつかうまつりて遣し門中にたもとをまじへてかたる事になりぬ

德輝千里月

めつらかにきく初雁の聲

霧の海玄らぬうらはに船よせて

はなはだ入興し給ひて漢和興行有べき沙汰有しかどもかれこれさゝはりてやみぬ九月二十日白峰をみよとすゝめられてきよらなる駕にうちのりて青野山まじまなどにわたりをすたれをかゝげてみるく行爲家卿の家の集に

さみしさやましまにかよふあま小船

片帆にいろゝ青野山かせ

このうちさみしまといふは聖寶の出られし所なれば沙彌島と世俗の人あまねくいふとぞきし予が思ふは萬葉集第二柿本の人麿の長歌に玉もよるさぬきの國は國からかとよみ給しするにをちこちの島はおほかれと狹峯の玄まの荒いそとつゝけ給ひし所とこそつぶやきしいかゝ有けん玄らずかしましまは西行の歌にも見えぬ

鹽飽より眞島にかよふ商人は

鐸をかひにてわたる也けり

鐸といふは糸を懸てつむぐもの也いまの代までこの所はこの器のいづる計なりとぞ野夫の語しもおかしかりける三里餘行て綾松山のふもとにわたり山のなかばは駕をのこし頤を腹につけ僕に腰をたすけられて十四五町のぼりてふもとをみやれば溟海蒼々として鼈けんだの窟さながら日影に隠見す名にしおふ網のうら泊のいそ松がうら眼にみちておもしろく五歩に一吟十歩に朗詠してむかしを思ふ

後拾遺定頼卿

松山の松かうら風ふきよせは

萬葉集人麿

ひろひてまのへ戀わすれ貝

あみのうらに舟のりすらん乙女らか

玉ものすそにまほみつらんか

玉葉集西行法師

松か浦の泊のいそと聞ものを

名にもさはらすかへる浪かな

丹梯攀のほりて洞林院に至り圭典けいてん法印にあないして汗をし拭ひ欄前によりまばし尻するるとき法印出給ひこゝろよくあへしらひ茗を啜飯を喫すかれこれ談了て山の縁起を所望しぬ法印同宿ひとりふたりをして櫃やうのもの二三つかきいでぬ先歌人の短冊四十枚法華經の裏をかへして廿八品の歌廿八人の自筆權律師堯孝梵燈庵宗祇牡丹花宵柏下野守益之徹書記和歌其外は忘れし別に宗雅頓證寺法樂の百首の和歌崇徳院六字の名號扁傍をのゝ二筆の一幅不斷御所持の笙一管さまゝの物こゝろまづかにかずゝを拜してのち縁起一卷世尊寺行俊卿の筆くり返してよみぬそこより法印寺僧に錦の預り主ひとりそへさせ給ひて崇徳院の廟所に詣す積翠の中に高く聳え虹梁彩

麗懸魚あざらけく前殿に明朗たり庭上に一樹の橘有是は西行法師修行の頃頭陀の小袋をうちかけてよしや君昔の玉の床とても

かゝらむ後はなにゝかはせむ

と詠吟せし跡なりとぞ崇徳院の御製

松山やなみになかれてこし舟の

やかてむなしくなりになるかな

はまちとり跡は都にかよへとも

身は松山に音をのみそなく

など聞えし感情一時にもよほし予もうちまはたれぬ

曉上白峯萬仞山

九天風日暢開顔

山僧問我歌成否

笑指西行盧橘間

こゝも又よしや都よ人の世を

はなれてとほき嶺の白雲

かく心ざしをのべてそこを退き大天狗相模坊の社に跪く錦取の僧うやゝしくぼろんの咒三遍つまはじきしかむ三遍となへて閑に息もなく扇を開き錦の戸帳をかゝぐ凜然として頓に容を見る事なくまばし有て眼をひらく則天狗の彫刻したるとて二尺七寸の座像黒く兩眼爛々として巖下の電のごとく頭巾をかぶ

り修治袈裟をかけ左にいくたかの珠數右に劔を握り
脚絆草鞋をまめはき言語道斷の體也側に鎮西八郎が
所持の矢一手五尺あまりなるを立添たり倩と見終り
て肩をとちて去折ふし松のもとに菌おほし發句書ひ
とつぶやきぬ

ゆかりにも峰の松茸相模坊

曲徑の幽なる所をゆけば老猿古樹に叫び群鹿篠原に
躍る白雲忽石根に涌青苔をのづから玉露をうるほす
まことに人間の風日不來峯也二町ばかり行て兒が
嶽の上に望む千萬丈の谷の底危石大いにそびえ首を
たれて直下を見をろせば足わなくと振て松柏の枝
にとりつき膽を冷潭にひそむかゝるに猛風樹をなら
し盤石の響山をさきたいいま谷をつぶすかとうたが
はる僧にとへば天狗の所爲也常の事也まづまれの
と申ぬ一風吹過て麓にさがれば右大將頼朝の立置れ
し古墳草芊々たりいかなる一天下のあるじもみなか
かる有様になりはつる世の轉變さすがに哀をそへま
ばし回向の心ざしをなしかの駕にたすけのせられ野
澤井のもとにつく石を甃みたる寒泉山の容をまづむ
いつの事にか有けんむかし此沖つちの門といふ所に

大魚すみて往來の旅人を害す時に猿靈親王周處が心
をまたひて大魚を退治せむとして親王もつゐにのま
れ給ふやうくして兵船數艘力を起しこの魚を殺し
腹をたちわりて親王その外八十人の死せるものにこ
の井の水をそゝぎぬみ 蘇しゆゑ八十蘇波井とも書
とぞ所の記に詳也魚を葬りて魚の御堂と名づけてい
まにむれたる木の間に見ゆこのついでに爲家卿のよ
まれし十市の池も見まくほしけれども夜に成てみち
たどくしくして急ぎ歸りぬ翌日九月二十五日金比羅
に上る華表に竹内法親王の筆にて象頭山の三字を顯
すまことにこの山長鼻高形畫に書る象頭よりもなを
よく似たり山のなかばに少焉亭と名づけし茶屋あり
從來まじりたる屢空庵一三子が筆也

少焉茶の錢さらくたり秋のころ

山遠く水ながれなみ木の櫻脩竹の林院々の暉麗ひと
り見めぐり仁王門の樓門をわたり石階高く登り金比
羅大權現の前に到宮社を見るに檐の藻珠瑠とゑりみ
がき柱の花押獵とまじへかざり照高院門跡の額金を
ちりばめ青蓮院尊純親王の歌仙彩をこまやかにす所
所ながめつくしてふもとの松尾町一柳軒寸木子のも

とにやどる老若の好士よりきて一會興行

たけからん象頭の麓角の鹿

尾花すほむる谷のさうさき

寸木子

翌日法印金光院のもとに案内しければやがてこよなと宣ふ寸木汀龜など誘ひて参りぬ榮榮僧都深海法師出給ひて心よくもの語し山の縁起を拜す一卷は古來の談筆者は玄らず一卷は讃州の刺史右京大夫賴重君の筆也金比羅は天竺の神釋迦説法の守護神なり飛來してこの山に住給ふ形像は巾を戴き左に念珠右に檜扇にして巾は五智の寶冠を象り珠數は縛の繩扇は利劔本地不動明王也二脇士は伎樂伎藝すなはち金迦羅勢訖迦權現シキリゲンの自作也とぞ委曲によみ終りて箱に納ぬその外東海純一休の畫と詩共に筆し給ふ一行もの一幅小野の道風と書たる唐詩一首尊圓法親王の宸翰大卷もの一軸かれ是の什物目をうつして拜す所の景致は弘文院林學と春齋等が十二境の詩に有これをみよとて玄めざる所謂象頭山の十二院は左右の櫻陣、後前の竹園、前池、躍魚、裏谷、遊鹿、群嶺、松雪、幽軒、梅月、雲林、洪鐘、石淵、新浴、箸洗、清蓮、橋廊、複道、五百、長市、萬農、曲流、各五言四句の絶句也予にも俳句

つぶやけなどせめらる即時に

塵も白し秋陽もつてはしあらひ

いとよろこび給ふて興あり檻外によれば飯山とて目前の富士有まことや西行が郷談の歌とてきゝしさぬきにはこれをやふしといふの山

朝けの煙たゝぬ日もなし

こゝに對してみだりに一絶を賦してものに書つく

朗吟郷土西行詠 南海波中小士峰

雖隔東關千里雪 台雲處々入秋客

一日かたりつくしてさりぬあくる日觀音堂にて法樂の百韻興行有數輩堂上に座し金の一字の幕を引榮榮法印深海法師文臺の右につけ給ひ予に發句をこひ給へばつゝしみて申ぬ

肥澤けり米のふる嵩朝牡鹿

澗になかるゝ酒つほのもみち

深海法師

と吟し百句みちぬ鹿の音まぢかくかねのひゞき暮をつけ梵貝たうとく鈴の音松にまじり皮膚脱落し盡てたい眞實のみおもはる苗田なうたといへる所わづかに半里そこに行一思軒友幸雅士所望

たゝなをやは有へき月やとる池の里

泉氏爲睡所望

ゆふへ哉うすの音おろす稻穂やま

又松尾の町にかへりて興行乙丸亭

定家あらは松尾の秋のゆふ山を

木村汀龜興行

俳諧冷か也泥まの龜のをのれなり

一曲軒四山子文學のすきものにて聞えければさてな
む

文に醉歌すゝりけり四の山

けふもく俳のあそび文のなぐさめにて數日滯留し
高松にゆく

白水郎子記行卷の二終

あまの子のすさび巻の三

新酒郡あるよしてけりやまと人
又須賀氏柳松軒興行

俳諧上戸なに眠らん月ゆふへ

象頭山の麓より高松の城下まで凡八里のみち例の有様にて見もてゆく道のほとりに松樹翠をなす孤山あり名をとへば弦打山といふ作者はおぼえず古き歌につるうちのやまよりいつる月かけは

弓はりとこそいふへかりけれ

とよみし所也松山奉納一日千首小野道歡の歌にも
梓弓はるてふけさは立歸り

つるうち山に霞たなひく

馬蹄の塵をふみ立て高松に到かくれなき俳諧の好士大和屋何がしの志適を尋てそのもとにやどる宅地新しく秋興なをつきず玉露楓葉をそめ清暉菊麁を照す頻に兩吟の歌仙をなす

ふすまくもらす戸板さやけし壁に月

蛛かすたれをおほしめす秋

なれ雀よふたふこゑに露ちりて

志 適
同

又興行有ければ

一日志適の息器量の骨有これをみちあるべの友として志度寺に詣す門に補陀落山といふ榜あり照高院門跡の筆也大悲堂高く大いに飛梁攢羅反宇環句てかゝる僻地にかゝる結構も有ものかとつらくと見めぐり先々の寺の縁起を見まほしく清淨光院の阿闍梨にあなひす折ふし住持の僧病にかゝり床にふしぬとて院中の一老こと葉をかざり禮をつくして三幅の繪縁起をかけらるいづれも長七尺幅五尺づゝ金襴の表具玉の軸目をかゝやかす筆をとへば古土佐將監のなにがし也もとこの観音薩埵は智法尼の白蓮華谷にすみ給ふか常に信ふかく江州三尾の杣木にてつくられしほとけなりとぞ委曲にゆびさしてかたられしかども皆忘れぬそれより十二本の松のもとにやすらひかのあまのさとをとをく見やり新珠しまにわたり渤海をはるかながめあまの塚の下にゆくつかの高さ一丈五尺このごろきりたてし石也すたれたるを發し絶たるをつく志の人とみえたり折から房崎の浦に

いわしあみを引興あるはたらき也

引あけゝり人々千尋のいわしあみ

もとよりこの所のあまの來由允恭天皇の事を取たがへし仔細予が隨筆に書て誤をも正し侍れどもこれも又すてがたく俗説をのこし侍りぬ

志度來由或有無 到門又見昔年圖

月明清夜渾如畫 湧出寒汀一顆珠

かく書つけてさりぬそれより五劍山は栗寺に趣くみちもなき山に分入樵路の幽なる所にいで牛かひの童にとひもて漸して八栗山の麓にいづ木の根を踏石の上をわたり二十町ばかり行て山の岫に一字の寺有法印快昌もとよりゑる人なれば疲れたる袂を引て奔走あまりあり山のたゝすまゐもみえず日くれはてければ其夜は寺中にまぐらしてよもすがら法印と談じ夜半に眠る猿の聲われに伴ひ一室まことに寂寥たり夜深雨絶て松堂靜也とはかゝる所にや有けむと思はる月落烏啼目一たびさむ其まゝ起いでゝ一人の老法師ものになれたるを伴ひて峯にのぼる雲翠微をめぐり徑雪霜ふかゝ其高さ七百丈攝衣巉岩をふみ杖をすてゝ葛藟をひく目くるめき足度をうしなふわれ妻に

はなれずばいかにしてかかゝる所までを尋んや修行ふしぎの縁也と心をひそめ思ひを凝し絶頂にいたる地藏權現の鎮守ちいさき叢祠有弘法大師入唐求法のゑるしをこゝろみ焼栗八枚をこの山にうゆ歸朝の後枝葉ますゝゑげれり八栗の名の來山也また此嵩にのぼりて四面を眺望するに八國を手にとる故に八國寺ともいふべしとぞ山の四面に四佛を安じ中央には丈六の廬舍那佛也岩の洞に不動明王十二天悉うつしぬ於ては大護摩修しぬ前に蓬萊岩有其形珠のごとし後に二穴あり明星穴と名づく予つくゝとのぞきみるに北に溟海瀟漫とひろくおほいに見え螭龍のひれ鯨鯢の腮その中にかくる西南は域中はるかにひらけ林川まげくさかむ也五の峰をこゆれば熊熊穴にうづくまり鷗鷺木するになく七所の仙窟迂廻としてこの世のほかにあそぶ予むまれて四十餘年いまだ見ざる名山也境に依て心澄なみだほろゝとこぼれぬし息をつきてもとの道にかへり以空上人のこの山に奉り給ふ聖天宮の社中に入三間四面の岩洞に有殊勝いふばかりなしこゝにして一絶を書つけぬ

高萍三秋霜二五劍巔 韜光雲外一碧羅天

無情仙窟古松下 喚三起真人一向ニ老爲ニ

塵の世の身をおもはす久堅の

からゐる嶺の分のほりては

俳諧の發句つれの若人所望しければとりあへず

心の株なくなりけり八栗山

月もみかゝすひとりすると也五劔山

などいひくして千手院にかへりぬ大師のもち給ふ石

の銚ふたつ拜すみな自然のもの也とかくせしうちに

右京大夫頼重公の三男松平頼章の君の詠とてみし

なをたのむめくみはゑるし武士の

やくりの山のたかきみかけを

まことに其人はゑらねども殊勝の一首忘れがたくて

書付ぬとかくして日高くのぼりかへるさの用意して

法印快昌をも伴ひ山をいでぬ杖にすがりて射落の綿

ばたけ惣門の渚の前を通り次信が塚をとひ馬塚を見

洲崎の堂をながめやりむかしの事をかたりて行ぬ八

鳥寺は十年ばかりの前見し事のあればこのたびはむ

なしくこへて其日の晩景に高松の城府に歸りぬ其翌

日舟のたより有て備中の宮内にわたるこの社は人皇

第七代孝靈天皇第三の皇子吉備津彦の命崇神天皇の

御宇四道將軍の内西道將軍是也十七也の帝仁徳の草

創にして五社の神殿を建給ふ本宮は孝靈天皇内宮は

開化天皇新宮は崇神天皇吉備津姫の岩山の神社本殿

は吉備津彦命是を伊佐世利彦の命と名づく名にしお

ふきびの中山松の木すゑ縁をたれ外清淨のあらし高

く森々たる宮居心も言葉も及ばれぬ風致西國第一の

社頭也石の華表本宮二字の額は竹門の御筆也秋蚓春

蛇の勢たいいけるものゝごとし社司は賀陽信親の祝

部上番中番下番高安の何がし藤井末吉かれもこれも

從來知たる人なればみちびかれて見めぐりぬ百合若

大臣のもち給ふ七尺五寸の鐵の弓射場氏藤大夫引折

しなどおほくのむかし語りを聞て細谷川のほとりに

吟行すそれよりかの鳴動する釜の殿に詣て俳句つぶ

やきて退く人々おかしかりし

退之ゑらすや御釜の冬になるを以て

其夜藤井氏のもとにやどりて

帯にせるほそ谷河もうちとけて

一夜やとるゝ吉備の山かけ

とまぐらの上につらねぬ長嘯子の詠に

とゝこほるほそたに川もうちとけて

けふは春ゑるきひの山人
賀陽中番のもとにて連歌師玄昶の歌に

まかねふくほそ谷川の音にのみ

きゝわたりにしきひの中山

宮ばしらにみえし發句とて牡丹花の筆なりしにいま
はきへてうせしとぞありきやまをたち入て

こゝになけ山あり木ありほとゝきす

宗祇法師修行のころ

朝霞これしもあけの井かきかな

紹巴法眼この社にこし給ひて

玄けりそふ木のまにほそし谷の水

高安かたに玄旨法印の短冊有作者は旅人と書て

神はきねかならはしなれはまつつきて

團子にゑたききひつ宮哉

これは先年予をたのみてこの筆の來歴をかゝせられ
しはやむかしめきておかしかくかすゝをうけ給て
のち十月七日二萬の里のかたはらを通りいま行すゑ
を思ふべきとよみし長尾むらのほとりをこえ西阿智
丸河氏信祐が亭に宿す

言の葉捨てゆふ霜わらちきえにけり

玄ばしやすらひて玉玄まといふ所に行角南氏貞因二
十年來の知己なればよろこびむかへてわれをまつか
の所をもたるの泊と名づく古き歌に

みつきものこふ千舟もこき出よ

もたるの泊しほもかなひぬ

いまも往來の旅客舟をつなぐみなど也

竹葉を酌てもたるのとまり冬もなし

一別心院兩地の冬とたはぶれて駕をかり名にしおふ
いやたか山の麓をゆくゝ雪花の翻るをうち拂ひ鳴
方高戸氏一埃亭に入多情をつくしかくなん

こそからむ水とりのさとすかまくら

隣舍のすき人三宅國久にまねかる南畝西疇遊覽あま
ねく時稔年豊にして高廩に米みち場庭に俵おほくと
をしにふるふこゑ雨にことならず

千石とをし粉ぬかゝ嵩のゑくれかな

これより崎嶇たる丘山をこえて屈曲たる石逕をわた
りて冬がれのけしきながめ引すてし牛の草をはむあ
ら田の原のもののさびしく

さひしさはいな葉の秋もかくやみし

冬田の牛のひとりゆくかけ

となむよみてゆく／＼紅葉の錦はたはりひろく夕陽の光うすづきておもしろく心にうかびしまゝによみ侍りし

山ふかきたひちの衣日もさむみ

それも忘るゝむらもみち哉

かく行に斧をかたげて樵夫のかへる有薪を負て老婦のたどるさまいづかたにかかくれすむらん狐兔のみちほそくして人倫はなれし山のかたきしに柴の烟かすかにあらはれほし菜の残る風にそよめくさてもすまれける事よと感慨やみがたし

なに事をおもひ出して隣なき

みたにかくれにいほむすふらん

たひころもころもさひしきものとたに

忘れんとおもふ山路すくなき

兩首をつらぬ新加の信元がもとを尋ね折ふし他行のやうをきゝて残おほく木の葉をとりて一句をとゝめさほしく思へどもまさ木ちる谷の嵐のはげしきにそのまゝちりけむものをとたいにとをりて笠岡の里連俳の好士木山氏壽有意の息半二軒一斧のものに行五七日滯留す人おほく集りて興行有ければ

比寒したはこふくけふり風をいたみ
涵水軒一養興行

一通り酒は玄くれて雪もなし

一海士のもとにまねかれて

酒舟のゆたかなるに貨狄はつらんうらの冬

この所のうらべに宗祇のやどり給ひて

高松のかけやうきみる夏の海

と筆をとゝめさせけると所の人のかたり給へばとりあへず

冬されおかし宗祇か夏海きゝしかと

淨心寺といふかすかなる所にて曳尾軒一龜興行くれに及び殷々たる鐘聲はのかにきこえければ

霜のゆふへ撞木のみこそかれすもあれ

任風庵一塵法師とて淨土宗の碩徳有その境界のかろき事破衣ひとつの身になり選擇集往生要集の書籍かりのひさしにたくはへ給ふのみうらやましきすみか也

茶つけのけふりくきの寒きにあらはれぬ

壽有意のかくれ家は所をさりて半里餘かまびすしき事わづかもなし園に灌水うつりて朝夕の腹を養ひ長

楊池を照し芳樹まがきにうゑたり逍遙自得の閑人にして
玄かも風雅のもてあそび都をこゝろのたのしみいふも
さらなり

かくれ家の常はつきむの軒葉かな

夕陽せなかに負葉をはらふ道 壽有意

十月廿日井原の里にゆく山路の玄くれにぬれて

山もとを玄くれ／＼てゆく空の

うつれはうつるゆふ日かけ哉

妻の父柴田氏のもとに宿しながむかしをかたり出
泪はじめてあらたま息をふいてなげきをまし一間
なる所に枕をとれどもさらにねられず

ひとりねてはたへのさむき冬の夜は

氷かさなるわかなみた哉

などよみて玄ばしまどろむ松風軒一藤さすがにやさ
しく發句所望

落葉の後山や野の最中かな

あたりちかき山里のたれかれもとひきぬそれより禪
福寺の住持に會し寺の舊記ども聞取り二日三日のう
ちにさりぬ高くら山をながめいなぶさ山のけしき
を見つゝ矢田部の里むかひ大森氏もとしげ亭に入て宿

す茶どもすゝりて

そよ口切忘れぬゆめをさましつる

むかしすぎしみち忘れもやらすとひこしよなどある
じの聞へければ

忘れめやむかしふみこしかよひちの

草葉は霜によしかれぬとも

とよみてまりでぬ和歌によみし庇山はいづこぞと所
の人にとへばこれなむその山なりと語る毛利輝元の
家臣小早川左衛門尉たてこもりし峯さすがに城廓の
礎残りて哀也ながら川の末岩さき山のふもとをこゑ
名もとゝろきのはしこれぞ板くらのわたりなりと所
所のけしきを見もてゆくに落葉笠をうごかしなにと
なく紅涙袂をそむ

なかめこし青葉のころの旅まくら

かりそめなから木からしのふく

かくつらねて萬松の嵐を聞ながら備前の府にいでぬ
舊知の朋友學侶の門弟そのまゝむれ來り幽懷の緒を
わかし語路の珠をきくある人に對して俳の有さまな
ど我も批判して

梅翁かれてなんちは寒くわれは疲つ

木畑氏定直興行

冬人さら也海老はい貝やうのものなつかしく

一が亭

時雨に和してことの葉みなになりにつけり

將基の名國にかくれなきなにがしの梅章俳もすき人にして

一會興行

桂馬あし疾飛車といろきぬはしの霜

竹下茂門別業かすかにして泉石もとみしまゝ也折々閑疎をやしなふの所なつかしく侍りて

碁石音つれ銘なとひゝかむ霜の宿

櫻井氏西松亭に招かれて即興所望有けれども何をいふべき用意もなし床に水仙一瓶見ゆ仙風道骨今誰在淡掃_ニ蛾眉_一簪一枝と黃山谷が作りし事を思ひいでゝ

水仙すみけり藐姑射の瓶のほとりになん

有松支枕子亭に行莊子逍遙遊齊物論の兩篇を隔夜に講すべきよし五七輩の學士ゑゐてのぞみければ辭するに及ばず書をとつてよむ汗漫自適の至樂委曲にとき數輩肝膽をひそむそれがもとにて

夜はなししてむをのか自恣ふくをこし炭

草加氏ながしの士多年厚情のゑたしみ侍り盲人玄與連歌の先輩かれこれまねがせ給ひて一會興行

松風もうつるはかりの木葉かな

おなじく賢息の書齋に入小窓の雪に對し閑爐の灰をならしたがひに手を炙膝をいだき古人の談に及し事など思ひいでゝ俳諧の句を申ぬ

思ひそいつる忘れ火燵の座しき比

止敬興行

冬もゆかし貫之か故郷ならすして

定風亭に行て

河豚汁や無用の用たりと世かいへらく

まことに河豚の一種はかたの如く甘美にして世人一度くらへば忘れず蘇東坡在_ニ資善堂_一嘗與_レ人談_ニ河豚之美_一云也直_ニ那_一一死_ニ其美_一可_レ知されども毒又甚しつづしみぬべき魚也かくして國中徘徊いとま更になしこれより美作の國津山のすき人出雲の國大社のなにがし文もて必こよなど度々せめられけれども故園の春にあはまほしく臘月十日あまりの比まかりたちなん事をつけゑらす一日國の老臣土倉氏のなにかしの君に招かれ鮮鰯銀絲の鱠香芹碧澗の羹小鼎長泉の茶

大宛葡萄の酒身に餘りし御もてなしかずなりしに離別一獻の盃を給はりてかくなむよませ給ふ

小車の草葉にむすふつゆの世に

なをなからへてめくる盃

予つゝしみて御かへしを奉りぬ

なれくして袖にめくらす盃に

ちとせのかけをうつしてそみる

かくして御暇の事を申てさりぬ十三日草々として百里一帆の舟にのれば友人かれこれ南浦の詩を吟じ白雲の歌をうたひわれを河口阿江のほとりに送らる各天の一涯にわかれてたゞひとり兒島のなみをわけあかしの瀨門を朝の雪にわたりすまの浦のゆふなぎをながめ十六日のくれに一の洲に入ぬむかし忘れぬ愁涙をおしのごひ竿とる舟も遅しと心いそぎして道修谷かりのやどりにうつり忘れがたみの嬰兒を膝の上にいだけ共さらに父とも思はずたゞなきになきかたゐざりのはかなき有さまして乳母のもとにゆく來しかたの哀とりあつめて心さながらくらみはて古き枕古きふすまの人香にまめるを引かぶりてその夜はあけぬ扉を閉て寂々たる寒間に獨ふしとかくするに年

のくれはてゝ大路のさまを見るに商賈の聲風外に遠く曲巷の日塵中に通りぬ予はたゞなすべき事もなくつくくとしてよみぬ

一とせのわかたひころもたちかへり

ときあらふまもまたぬ暮哉

爆竹眼を驚せども門に桃符の用意もなく一年旅客の憂數莖白髮の絲なでゝもらふべき人もあらず心なき春風の雨を吹ことをまつ五更明果て一首の詠に筆を試み東君の和氣をよろこぶのみ

雪とけてけさはのとけし人ならぬ

岩木も春の心をやゑる

かく様々の吟詠に凡上をさらすわれもやがて無常のあらしをまちて草葉の露一片の霞ときえなむことをあまの子のすさび三の終三月廿八日書之 一時軒右白水郎子記全部以長鹽信行藏書 摹焉寛政十二庚申年十二月廿四日

白水郎子記行卷の三終

續々群書類從第九終

黒川眞道
堀田璋左
渡邊魁校

明治三十九年九月二十日印刷

明治三十九年九月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯者兼
發行者

市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者

本間季男

印刷所

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

内外印刷株式會社分工場

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 4609